静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第28集

雲岩寺C古墳群・高根山A古墳群

第二東名No.131・132地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市－5

雲岩寺C古墳群（第二東名131地点）
高根山A古墳群（第二東名132地点）

2013

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

1．調査前の雲岩寺古墳群（南から）

←→が調査地点

2．完掘後の雲岩寺C古墳群（南から）

巻頭図版 2

1．C1・C2・C13・C3号墳（西から）

2．C6・C14・C5・C16号墳（東から）

1 . C1号墳出土土器

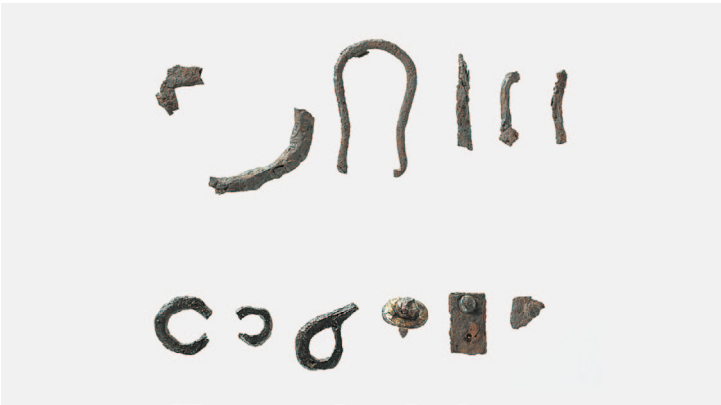
2 . C4号墳出土土器

巻頭図版 4

1．C9号墳出土玉類

2．C1号墳出土玉類

3．C1号墳出土轡



4．C1号墳出土馬具

1．高根山A古墳群全景（東から）

2．完掘後の高根山A古墳群（南から）

巻頭図版 6

1．A17・A28・A29・A32号墳（西から）

2．完掘後のA東小支群（東から）

1．A15号墳出土土器

2．A16号墳出土土器

巻頭図版 8

1 . A17号墳出土土器

2 . A14号墳出土玉類

3 . A16号墳出土玉類・耳環

4 . A17号墳出土玉類・耳環

5 . A34号墳出土玉類・耳環

序

今回、第二東名高速道路の建設に伴って調査された雲岩寺Ｃ古墳群と高根山Ａ古墳群は、浜松市浜北区の北部丘陵に分布する古墳群のひとつです。この北部丘陵の先端には、これら雲岩寺Ｃ古墳群と高根山Ａ古墳群のほかに大屋敷古墳群など、全体で推定数百基の古墳が認められます。

このように多くの古墳が一定の場所に集中して造られる点では、浜松市域だけではなく、静岡県を代表する古墳群といえます。

雲岩寺Ｃ古墳群と高根山Ａ古墳群の調査された結果をみますと、６世紀後葉にはじまり、その多くが７世紀の中頃から後半にかけて造られ、一部は８世紀にまで造られていました。この時代の地方は文字による記録はなく、古墳や村のあとを発掘調査し、その結果に基づいて当時の様子を知るしかありません。

ちょうどこの頃は日本が、中国を手本にして法典や戸籍を造り、中央が地方の人々を掌握し律令国家という国造りを開始しようとした時代でした。このような時期に雲岩寺Ｃ古墳群と高根山Ａ古墳群のような大型群集墳が浜北区北部に存在したことは、大きな力をもつ氏族集団がこの周辺に存在したと推定されます。当時の時代背景を考えますと、この古墳群とその背景の人々の存在は、今後の課題として小さくないと思われます。

本書が研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

2013年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝　田　順　也

例　　言

1　本書は、静岡県浜松市浜北区根堅に所在する雲岩寺Ｃ古墳群と同区尾野に所在する高根山Ａ古墳群の発掘調査報告書である。なお、第二東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、市町単位にて実施している。浜松市では本報告書が５冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浜松市－５」とした。

2　調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中まで日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化財保護課（平成21年度まで文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　雲岩寺Ｃ古墳群（第二東名No.131地点）と高根山Ａ古墳群（第二東名No.132地点）の確認調査・本調査及び資料整理・保存処理の期間は次のとおりである。

雲岩寺Ｃ古墳群確認調査	平成11年８月～12月	調査対象面積18,953㎡
雲岩寺Ｃ古墳群本調査	平成12年２月～平成13年３月	
	平成13年６月～７月	調査対象面積7,281㎡
高根山Ａ古墳群確認調査	平成12年６月～10月	調査対象面積25,057㎡
高根山Ａ古墳群本調査	平成13年10月～平成15年３月	調査対象面積11,080㎡
資　料　整　理	平成23年４月～平成25年３月	
保　存　処　理	平成19年４月～平成21年３月、平成22年４月～平成25年３月	

4　調査体制については、第１章に別記した。

5　本書の執筆は、足立順司と片山一道・大藪由美子が行った。執筆分担は以下のとおりである。

第２章第６節：片山一道・大藪由美子、それ以外は足立順司

6　本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　次の業務については、委託により実施した。

写真測量等業務　株式会社フジヤマ（平成12・13・14年度）
人骨鑑定及び保存処理業務　片山一道（平成14年度）
整理作業・保存処理業務　株式会社パソナ（平成23・24年度）

8　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一をはかった。

1　座標は平面直角座標Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2　調査区の包含設定は、上記の国土座標を基準に設定した。

　雲岩寺Ｃ古墳群（X=−128860, Y=−65370)=(0, A）　高根山Ａ古墳群（X=−128940, Y=−65840)=(0, A）

3　１による方位（座標北）を基準として表示している。

4　発掘遺構は、遺構の種別を示す次の記号と、一連の番号の組合わせにより標記した。

　SD 溝　　SF 土坑　　SP 柱穴・小穴　　SX その他

5　遺構番号は、遺構の種別ごとの通し番号としている。番号は、現地で付されたものをそのまま使用したが、遺構の種類が変更されたものについては、新たに番号を付している。また現地調査では調査区ごとに通し番号が付されていたので、本書ではそれに従った。

6　遺物番号は、調査区・古墳・遺構の別で分けているが、その中は土器・石製品・鉄製品の種別にかかわらず、通し番号を付している。

7　図中に用いたスクリーントーン等の使い分けは、必要なものについては各図中に表記している。

8　遺物実測図の縮尺は、須恵器・土師器等土器類が１／３または１／４、石製品が１／２、銭貨を除く鉄製品が１／２または１／４を基本とし、各図にスケールを付した。

9　銭貨の拓本は、すべて原寸大で掲載している。

10　色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』(農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。

11　「周辺の地形図については、国土地理院「二万五千分の一地形図」(平成19年発行）と浜北市「二千五百分の一地形図」(平成３年発行）を複写・加筆し使用した。

12　本書で使用した須恵器編年と横穴式石室の部位名称は、主に以下の文献に依拠した。

　鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 補遺・論考編』

　本書での「遠江須恵器編年」は、上記書による。

　田辺昭三 1981『須恵器大成』

　本書での田辺昭三氏「須恵器編年」(陶邑窯須恵器編年）は、上記書による。

　近つ飛鳥資料館 2006『年代のものさし』

　静岡県考古学会 2003『静岡県の横穴式石室』

13　本報告書では、基本的に平成24年４月現在の市区町名で記し、必要に応じて旧市町村名を併記している。なお所属については、当時の所属機関名を記している。

14　横穴式石室の平面形は、下図１の名称を使用している。

15　玄室の平面形は、下図２の名称を使用している。

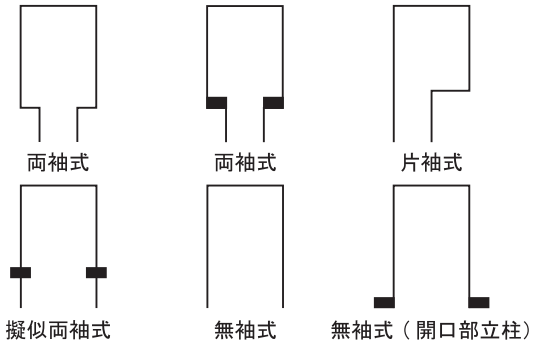


図１

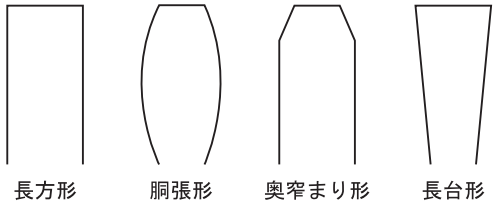


図２

目　　次

巻頭図版
序
例言
第１章　総論 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と調査の方法 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 5
　第３節　位置と環境 …… 6
第２章　雲岩寺Ｃ古墳群 …… 11
　第１節　調査の方法 …… 11
　第２節　資料整理 …… 14
　第３節　１区から３区の調査 …… 15
　第４節　古墳群の調査 …… 30
　第５節　雲岩寺Ｃ古墳群の評価 …… 106
　第６節　人骨調査 …… 122
第３章　高根山Ａ古墳群 …… 125
　第１節　高根山Ａ古墳群の調査 …… 125
　第２節　古墳群以前の調査 …… 128
　第３節　古墳群の調査 …… 129
　第４節　古代墓群の調査 …… 242
　第５節　高根山Ａ古墳群の評価 …… 270
抄録
写真図版

挿 図 目 次

第１章
第１図 浜北区の位置 …… 6
第２図 周辺の古墳と遺跡 …… 8
第２章
第３図 雲岩寺Ｃ古墳群調査区配置図 …… 12
第４図 雲岩寺Ｃ古墳群と１区～３区全体図 …… 16
第５図 １区全体図 …… 17
第６図 １区SD01・02平・断面図 …… 18
第７図 SD01出土遺物 …… 19
第８図 ２区全体図 …… 21
第９図 １区SD03・SF01～06平・断面図 …… 22
第10図 １・２区SF07～14平・断面図 …… 23
第11図 １・２区SF15・SF16ほか
平・断面図 …… 24
第12図 １区出土遺物 …… 25
第13図 ３区全体図 …… 26
第14図 ３区SX01・02・05平・断面図 …… 28
第15図 ３区SX03・04ほか平・断面図 …… 29
第16図 雲岩寺古墳群位置図 …… 31
第17図 雲岩寺Ｃ１～Ｃ17号墳全体図 …… 32
第18図 Ｃ１号墳実測図 …… 34
第19図 Ｃ１号墳横穴式石室実測図 …… 35
第20図 Ｃ１号墳遺物出土状況図（上面床面） …… 36
第21図 Ｃ１号墳遺物出土状況図（下面床面） …… 37

第22図　Ｃ１号墳出土遺物実測図１ …… 39
第23図　Ｃ１号墳出土遺物実測図２ …… 40
第24図　Ｃ１号墳出土遺物実測図３ …… 41
第25図　Ｃ１号墳出土遺物実測図４ …… 42
第26図　Ｃ１号墳出土遺物実測図５ …… 43
第27図　Ｃ１号墳出土遺物実測図６ …… 44
第28図　Ｃ１号墳出土遺物実測図７ …… 45
第29図　Ｃ１号墳出土遺物実測図８ …… 46
第30図　Ｃ２号墳実測図 …… 49
第31図　Ｃ２号墳横穴式石室実測図 …… 50
第32図　Ｃ２号墳出土遺物実測図 …… 51
第33図　Ｃ３号墳実測図 …… 52
第34図　Ｃ３号墳横穴式石室実測図 …… 53
第35図　Ｃ３号墳出土遺物実測図 …… 54
第36図　Ｃ４号墳実測図 …… 56
第37図　Ｃ４号墳横穴式石室実測図 …… 57
第38図　Ｃ４号墳出土遺物実測図１ …… 58
第39図　Ｃ４号墳出土遺物実測図２ …… 59
第40図　Ｃ５号墳実測図 …… 60
第41図　Ｃ５号墳横穴式石室実測図 …… 61
第42図　Ｃ５号墳出土遺物実測図 …… 62
第43図　Ｃ６号墳実測図 …… 64
第44図　Ｃ６号墳横穴式石室実測図１ …… 65
第45図　Ｃ６号墳横穴式石室実測図２ …… 66
第46図　Ｃ６号墳出土遺物実測図 …… 67
第47図　Ｃ７号墳実測図 …… 68
第48図　Ｃ７号墳横穴式石室実測図 …… 69
第49図　Ｃ７号墳出土遺物実測図 …… 70
第50図　Ｃ８号墳実測図 …… 72
第51図　Ｃ８号墳横穴式石室実測図 …… 73
第52図　Ｃ８号墳出土遺物実測図 …… 74
第53図　Ｃ９号墳実測図 …… 76
第54図　Ｃ９号墳横穴式石室実測図１ …… 77
第55図　Ｃ９号墳横穴式石室実測図２ …… 78
第56図　Ｃ９号墳出土遺物実測図１ …… 79
第57図　Ｃ９号墳出土遺物実測図２ …… 80
第58図　Ｃ10号墳墳丘図・出土遺物実測図 …… 81
第59図　Ｃ11号墳実測図 …… 83
第60図　Ｃ11号墳横穴式石室実測図 …… 84
第61図　Ｃ11号墳横穴式石室・出土遺物
　　実測図 …… 85
第62図　Ｃ12号墳実測図 …… 87
第63図　Ｃ12号墳横穴式石室実測図 …… 88
第64図　Ｃ12号墳出土遺物実測図 …… 89
第65図　Ｃ13号墳実測図 …… 90
第66図　Ｃ13号墳横穴式石室・出土遺物
　　実測図 …… 91
第67図　Ｃ14号墳実測図 …… 93
第68図　Ｃ14号墳横穴式石室実測図 …… 94
第69図　Ｃ14号墳遺物出土状況・遺物実測図 …… 95
第70図　Ｃ15号墳実測図 …… 96
第71図　Ｃ15号墳横穴式石室実測図 …… 97
第72図　Ｃ16号墳実測図 …… 98
第73図　Ｃ16号墳横穴式石室実測図 …… 99
第74図　Ｃ16号墳出土遺物実測図 …… 100
第75図　Ｃ17号墳実測図 …… 101
第76図　Ｃ17号墳横穴式石室実測図 …… 102
第77図　Ｃ17号墳出土遺物実測図 …… 103
第78図　Ｃ古墳群出土遺物実測図 …… 105
第79図　興覚寺後古墳石室実測図 …… 107
第80図　Ｃ１～Ｃ17号墳の群構成 …… 108
第81図　古墳群の変遷(1) …… 112
第82図　古墳群の変遷(2) …… 113

第３章

第83図　高根山Ａ古墳群位置図 …… 127
第84図　石鏃実測図 …… 128
第85図　高根山Ａ古墳群全体図 …… 130
第86図　Ａ１号墳墳丘図 …… 132
第87図　Ａ１号墳実測図 …… 133
第88図　Ａ１号墳出土遺物実測図 …… 134
第89図　Ａ２号墳墳丘図 …… 137
第90図　Ａ２号墳墓壙実測図 …… 138
第91図　Ａ２号墳出土状況・遺物実測図 …… 139
第92図　Ａ３号墳墳丘図 …… 141
第93図　Ａ３号墳横穴式石室検出状況図 …… 142
第94図　Ａ３号墳横穴式石室実測図 …… 143
第95図　Ａ３号墳基底石・墓壙実測図 …… 144
第96図　Ａ４号墳墳丘図 …… 145
第97図　Ａ４号墳墓壙実測図 …… 146
第98図　Ａ５号墳墳丘図 …… 147

第 99 図　Ａ５号墳墓壙実測図 …… 148
第100図　Ａ６号墳墳丘図 …… 149
第101図　Ａ６号墳墓壙実測図 …… 150
第102図　Ａ７号墳墳丘図 …… 152
第103図　Ａ７号墳墓壙実測図 …… 153
第104図　Ａ８号墳墳丘図 …… 154
第105図　Ａ８号墳墓壙実測図 …… 155
第106図　Ａ９号墳墳丘図 …… 156
第107図　Ａ９号墳墓壙実測図 …… 157
第108図　Ａ10号墳墳丘図 …… 158
第109図　Ａ10号墳墓壙実測図 …… 159
第110図　Ａ11号墳墳丘図 …… 160
第111図　Ａ11号墳墓壙実測図 …… 161
第112図　Ａ12・Ａ26号墳墳丘図 …… 162
第113図　Ａ12号墳基底石・墓壙実測図 …… 163
第114図　Ａ12号墳横穴式石室実測図 …… 164
第115図　Ａ12号墳出土遺物実測図 …… 165
第116図　Ａ13号墳墳丘図 …… 166
第117図　Ａ13号墳墓壙実測図 …… 167
第118図　Ａ13号墳出土遺物実測図 …… 168
第119図　Ａ14号墳墳丘図 …… 169
第120図　Ａ14号墳墓壙実測図 …… 170
第121図　Ａ14号墳遺物出土状況図 …… 171
第122図　Ａ14号墳出土遺物実測図 …… 172
第123図　Ａ15号墳墳丘図 …… 173
第124図　Ａ15号墳墓壙実測図 …… 174
第125図　Ａ15号墳出土遺物実測図 …… 175
第126図　Ａ16号墳墳丘図 …… 177
第127図　Ａ16号墳墓壙実測図 …… 178
第128図　Ａ16号墳遺物出土状況図 …… 179
第129図　Ａ16号墳出土遺物実測図１ …… 181
第130図　Ａ16号墳出土遺物実測図２ …… 182
第131図　Ａ17号墳墳丘図 …… 184
第132図　Ａ17号墳墓壙実測図 …… 185
第133図　Ａ17号墳出土遺物実測図１ …… 186
第134図　Ａ17号墳出土遺物実測図２ …… 187
第135図　Ａ17号墳出土遺物実測図３ …… 188
第136図　Ａ17号墳出土遺物実測図４ …… 189
第137図　Ａ18号墳墳丘図 …… 190
第138図　Ａ18号墳横穴式石室実測図 …… 191
第139図　Ａ18号墳実測図・出土遺物実測図 …… 193
第140図　Ａ19号墳墳丘図 …… 194
第141図　Ａ19号墳横穴式石室実測図 …… 195
第142図　Ａ20号墳墳丘図 …… 196
第143図　Ａ20号墳墓壙実測図 …… 197
第144図　Ａ21号墳墳丘図 …… 198
第145図　Ａ21号墳墓壙・出土遺物実測図 …… 199
第146図　Ａ22号墳墳丘図・墓壙実測図 …… 201
第147図　Ａ23号墳墳丘図 …… 202
第148図　Ａ23号墳墓壙・出土遺物実測図 …… 203
第149図　Ａ24号墳墳丘図・墓壙実測図 …… 205
第150図　Ａ25号墳墳丘図・墓壙実測図 …… 206
第151図　Ａ26号墳横穴式石室実測図 …… 208
第152図　Ａ27号墳墳丘図 …… 209
第153図　Ａ27号墳墓壙実測図 …… 210
第154図　Ａ27号墳出土遺物実測図 …… 211
第155図　Ａ28号墳墳丘図 …… 212
第156図　Ａ28号墳墓壙実測図 …… 213
第157図　Ａ28号墳出土遺物実測図 …… 214
第158図　Ａ29号墳墳丘図 …… 215
第159図　Ａ29号墳横穴式石室実測図１ …… 216
第160図　Ａ29号墳横穴式石室実測図２ …… 217
第161図　Ａ29号墳遺物出土状況・遺物
　　実測図 …… 218
第162図　Ａ30号墳墳丘図・Ａ35号墳位置図 …… 220
第163図　Ａ30号墳横穴式石室実測図１ …… 221
第164図　Ａ30号墳横穴式石室実測図２ …… 222
第165図　Ａ30号墳出土遺物実測図 …… 223
第166図　Ａ31号墳墳丘図 …… 224
第167図　Ａ31号墳墓壙実測図 …… 225
第168図　Ａ31号墳出土遺物実測図 …… 226
第169図　Ａ32号墳墳丘図・墓壙実測図 …… 228
第170図　Ａ32号墳横穴式石室実測図 …… 229
第171図　Ａ32号墳出土遺物実測図 …… 230
第172図　Ａ33号墳墳丘図・墓壙実測図１ …… 232
第173図　Ａ33号墳天井石・墓壙実測図２ …… 233
第174図　Ａ33号墳横穴式石室実測図 …… 234
第175図　Ａ33号墳出土遺物実測図 …… 235
第176図　Ａ34号墳墳丘図 …… 236
第177図　Ａ34号墳横穴式石室実測図 …… 237
第178図　Ａ34号墳出土遺物実測図 …… 239
第179図　Ａ35号墳横穴式石室実測図 …… 241

第４章

第180図 古代墓全体図 …… 243
第181図 土坑・土坑墓平・断面図１ …… 247
第182図 土坑墓平・断面図２ …… 248
第183図 土坑墓平・断面図３ …… 249
第184図 土坑墓平・断面図４ …… 250
第185図 土坑墓平・断面図５ …… 251
第186図 土坑墓平・断面図６ …… 252
第187図 土坑墓平・断面図７ …… 253
第188図 土坑墓平・断面図８ …… 254
第189図 土坑墓平・断面図９ …… 255
第190図 土坑墓平・断面図10 …… 256
第191図 土坑墓平・断面図11 …… 257
第192図 土坑墓平・断面図12 …… 258
第193図 土坑墓平・断面図13 …… 259
第194図 土坑墓平・断面図14 …… 260
第195図 土坑墓平・断面図15 …… 261
第196図 土坑墓平・断面図16 …… 262
第197図 土坑墓平・断面図17 …… 263
第198図 土坑墓平・断面図18 …… 264
第199図 土坑墓平・断面図19 …… 265
第200図 土坑墓平・断面図20 …… 266
第201図 土坑墓平・断面図21 …… 267
第202図 土坑墓、火葬墓平・断面図 …… 268
第203図 古墳群出土遺物実測・拓影図 …… 269

第５章

第204図 Ａ１～Ａ35号墳の群構成 …… 275
第205図 古墳群の変遷(1) …… 277
第206図 古墳群の変遷(2) …… 278
第207図 Ａ１～Ａ35号墳墓道復元図 …… 280

挿 表 目 次

第１章

表１ 調査体制 …… 3

第２章

表２ 石室規模一覧 …… 107
表３ Ｃ１～Ｃ17号墳総括表 …… 109
表４ 出土土器観察表 …… 115
表５ 出土装身具観察表 …… 118
表６ 出土石製品観察表 …… 118
表７ 出土鉄製品観察表 …… 119
表８ 出土銭貨観察表 …… 121
表９ 人骨分析一覧 …… 124

第３章

表10 石鏃観察表 …… 128
表11 浜北市調査古墳一覧 …… 129
表12 土坑墓一覧 …… 269
表13 Ａ１～Ａ35号墳総括表 …… 273
表14 出土土器観察表 …… 283
表15 出土装身具観察表 …… 286
表16 出土鉄製品観察表 …… 290
表17 出土銭貨観察表 …… 291

写 真 目 次

写真１ 高根山Ａ群確認調査 …… 4
写真２ 雲岩寺Ｃ群本調査 …… 4
写真３ 雲岩寺Ｃ９号墳人骨実測 …… 5
写真４ 鉄製品保存処理 …… 5
写真５ １区表土除去 …… 13
写真６ １区本調査 …… 13
写真７ 石室調査 …… 13
写真８ 古墳群測量 …… 13
写真９ 出土品分類・仕分け …… 14
写真10 遺物実測 …… 14
写真11 土器復原 …… 14
写真12 保存処理 …… 14
写真13 確認調査 …… 126
写真14 遺構検出作業 …… 126

写真15　周溝調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
写真16　土坑墓精査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
写真17　石室実測 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
写真18　空中測量 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
写真19　土器復原 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
写真20　遺構図トレース ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
写真21　抜根作業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
写真22　古墳の検出 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
写真23　Ａ１号墳遺物出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・135
写真24　Ａ３号墳調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・135

図 版 目 次

［巻頭図版］
巻頭図版１　１．調査前の雲岩寺古墳群（南から）
　　２．完掘後の雲岩寺Ｃ古墳群（南から）
巻頭図版２　１．Ｃ１・Ｃ２・C13・Ｃ３号墳（西から）
　　２．Ｃ６・C14・C16号墳ほか（東から）
巻頭図版３　１．Ｃ１号墳出土土器
　　２．Ｃ４号墳出土土器
巻頭図版４　１．Ｃ９号墳出土玉類
　　２．Ｃ１号墳出土玉類
　　３．Ｃ１号墳出土轡
　　４．Ｃ１号墳出土馬具
巻頭図版５　１．高根山Ａ古墳群全景（東から）
　　２．完掘後の高根山Ａ古墳群（南から）
巻頭図版６　１．A17・A28・A29・A32号墳（西から）
　　２．完掘後のＡ東小支群（東から）
巻頭図版７　１．A15号墳出土土器
　　２．A16号墳出土土器
巻頭図版８　１．A17号墳出土土器
　　２．A14号墳出土玉類
　　３．A16号墳出土玉類・耳環
　　４．A17号墳出土玉類・耳環
　　５．A34号墳出土玉類・耳環

［雲岩寺Ｃ古墳群］
図版１　１．３区調査前（北から）
　　２．１区全景（北から）
　　３．２区全景（東から）
図版２　１．１区SF02（南から）
　　２．１区SF03（南から）
　　３．１区SF04（南から）
　　４．１区SF05（南から）
　　５．１区SF06（南から）
　　６．１区SF07（北から）
　　７．１区SF08（北から）
　　８．１区SF09（南から）
図版３　１．２区SF10（南から）
　　２．１区SF14（西から）
　　３．１区SD01（南から）
　　４．１区SD01遺物出土状況１（東から）
　　５．１区SD01遺物出土状況２（東から）
　　６．１区SD02（南から）
　　７．１区SD03（北から）
図版４　１．１区SP01（北から）
　　２．１区SX01焼土（南から）
　　３．３区全景（北から）
　　４．３区全景（東から）
　　５．３区SX06（東から）
　　６．３区SX07（南から）
図版５　１．３区SX01（西から）
　　２．３区SX02（西から）
　　３．３区SX05（北から）
図版６　１．Ｃ１号墳全景（南から）
　　２．Ｃ１号墳石室（南から）
　　３．Ｃ１号墳東側壁（西から）
　　４．Ｃ１号墳遺物出土状況１（東から）
　　５．Ｃ１号墳遺物出土状況２（西から）
図版７　１．Ｃ１号墳下面床面（北から）
　　２．Ｃ１号墳下面遺物出土状況（北から）
　　３．Ｃ１号墳石室基底石（北から）
　　４．Ｃ１号墳墓壙（南から）
図版８　１．Ｃ２号墳石室全景１（南から）
　　２．Ｃ２号墳石室奥壁（南から）
　　３．Ｃ２号墳石室全景２（南から）
　　４．Ｃ２号墳石室基底石（南から）

5．Ｃ２号墳墓壙（南から）
図版９　１．Ｃ３号墳全景（南から）
２．Ｃ３号墳奥壁と天井石（南から）
３．Ｃ３号墳石室全景（南から）
図版10　１．Ｃ３号墳遺物出土状況（東から）
２．Ｃ３号墳石室基底石（北から）
３．Ｃ３号墳墓壙（南から）
図版11　１．Ｃ４号墳全景（南から）
２．Ｃ４号墳石室全景（南から）
図版12　１．Ｃ４号墳遺物出土状況（東から）
２．Ｃ４号墳石室基底石（南から）
３．Ｃ４号墳墓壙（南から）
図版13　１．Ｃ５号墳全景（南から）
２．Ｃ５号墳石室全景（南から）
図版14　１．Ｃ５号墳遺物出土状況（北から）
２．Ｃ５号墳石室基底石（南から）
３．Ｃ５号墳墓壙（南から）
図版15　１．Ｃ６号墳全景（南から）
２．Ｃ６号墳石室全景（北から）
図版16　１．Ｃ６号墳遺物出土状況（北から）
２．Ｃ６号墳遺物出土状況（西から）
３．Ｃ６号墳石室基底石（南から）
４．Ｃ６号墳墓壙（南から）
図版17　１．Ｃ７号墳全景（南から）
２．Ｃ７号墳直刀出土状況（西から）
図版18　１．Ｃ７号墳石室床面（南から）
２．Ｃ７号墳石室基底石（南から）
３．Ｃ７号墳墓壙（南から）
図版19　１．Ｃ８号墳全景（南から）
２．Ｃ８号墳石室全景１（北から）
３．Ｃ８号墳遺物出土状況（西から）
４．Ｃ８号墳遺物出土状況（北から）
図版20　１．Ｃ８号墳石室全景２（北から）
２．Ｃ８号墳羨道部（北から）
３．Ｃ８号墳石室基底石（南から）
４．Ｃ８号墳墓壙（南から）
図版21　１．Ｃ９号墳全景（南から）
２．Ｃ９号墳石室全景（南から）
図版22　１．Ｃ９号墳玉類出土状況（南から）
２．Ｃ９号墳下面床面全景（南から）
３．Ｃ９号墳石室基底石（南から）
４．Ｃ９号墳墓壙（南から）
図版23　１．Ｃ10号墳周溝（西から）
２．Ｃ11号墳全景（南から）
図版24　１．Ｃ11号墳石室（南から）
２．Ｃ11号墳遺物出土状況（北から）
３．Ｃ11号墳石室基底石（南から）
４．Ｃ11号墳墓壙（南から）
図版25　１．Ｃ12号墳全景（南から）
２．Ｃ12号墳石室全景（南から）
図版26　１．Ｃ12号墳遺物出土状況（南から）
２．Ｃ12号墳石室基底石（南から）
３．Ｃ12号墳墓壙（南から）
図版27　１．Ｃ13号墳石室全景（南から）
２．Ｃ13号墳石室基底石（南から）
３．Ｃ13号墳墓壙（南から）
図版28　１．Ｃ14号墳全景（南から）
２．Ｃ14号墳石室全景（南から）
図版29　１．Ｃ14号墳天井石架設状況（北から）
２．Ｃ14号墳人骨出土状況（西から）
３．Ｃ14号墳石室基底石（南から）
４．Ｃ14号墳墓壙（南から）
図版30　１．Ｃ15号墳石室全景１（南から）
２．Ｃ15号墳石室全景２（南から）
３．Ｃ15号墳石室基底石（南から）
４．Ｃ15号墳墓壙（南から）
図版31　１．Ｃ16号墳全景（南から）
２．Ｃ16号墳天井石落下状況（北から）
図版32　１．Ｃ16号墳石室全景（南から）
２．Ｃ16号墳遺物出土状況（南から）
図版33　１．Ｃ17号墳全景（南から）
２．Ｃ17号墳遺物出土状況（南から）
３．Ｃ17号墳刀子出土状況（北から）
４．Ｃ17号墳奥壁下の栗石（南から）
５．Ｃ17号墳墓壙（南から）
図版34　Ｃ１号墳出土遺物
図版35　Ｃ１号墳出土遺物
図版36　Ｃ１号墳出土遺物
図版37　Ｃ１号墳出土遺物
図版38　Ｃ２号墳他出土遺物
図版39　Ｃ４号墳・Ｃ５号墳出土遺物
図版40　Ｃ６号墳出土遺物

図版41　Ｃ９号墳他出土遺物
図版42　Ｃ９号墳他出土遺物
［高根山Ａ古墳群］
図版44　１．Ａ２号墳調査前（南から）
　　２．A16号墳調査前（南から）
　　３．A16・17号墳調査前（南から）
図版45　１．Ａ１号墳全景（南から）
　　２．Ａ１号墳墓壙（南から）
　　３．Ａ１号墳遺物出土状況（北から）
　　４．Ａ１号墳遺物出土状況（西から）
図版46　１．Ａ２号墳調査前（南から）
　　２．Ａ２号墳墳丘内列石（南から）
図版47　１．Ａ２号墳全景（南から）
　　２．Ａ２号墳墓壙（南から）
　　３．Ａ２号墳遺物出土状況（南から）
　　４．Ａ２号墳遺物出土状況（南から）
図版48　１．Ａ３号墳全景（南から）
　　２．Ａ３号墳検出状況（南から）
　　３．Ａ３号墳東側壁（南から）
　　４．Ａ３号墳閉塞石（南から）
図版49　１．Ａ３号墳石室全景（南から）
　　２．Ａ３号墳石室基底石（南から）
　　３．Ａ３号墳灰釉碗出土状況（南から）
　　４．Ａ３号墳立柱石の根石（南から）
図版50　１．Ａ４号墳全景（南から）
　　２．Ａ５号墳全景（南から）
図版51　１．Ａ５号墳墓壙（南から）
　　２．Ａ６号墳墓壙（南から）
　　３．Ａ６号墳全景（南から）
図版52　１．Ａ７号墳全景（南から）
　　２．Ａ７号墳全景（南から）
図版53　１．Ａ８号墳全景（南から）
　　２．Ａ９号墳全景（南から）
図版54　１．A10号墳全景（南から）
　　２．A11号墳全景（南から）
図版55　１．A12号墳全景（南から）
　　２．A12号墳検出状況（南から）
　　３．A12号墳石室全景（南から）
図版56　１．A12号墳玄門、閉塞石（北から）
　　２．A12号墳石室基底石（南から）
　　３．A12号墳墓壙（南から）
図版43　Ｃ11号墳他出土遺物
図版57　１．A13号墳全景（南から）
　　２．A13号墳墓道礫出土状況（南から）
図版58　１．A14号墳全景（南から）
　　２．A14号墳土器出土状況（北から）
　　３．A14号墳土器出土状況（南から）
図版59　１．A15号墳全景（南から）
　　２．A15号墳土器出土状況（南から）
　　３．A15号墳土器出土状況（東から）
　　４．A15号墳土器出土状況（南から）
図版60　１．A16号墳全景（南から）
　　２．A16号墳石室全景（南から）
　　３．A16号墳墓壙（南から）
図版61　１．A16号墳遺物出土状況（南から）
　　２．A16号墳遺物出土状況（南から）
　　３．A16号墳遺物出土状況（東から）
図版62　１．A16号墳遺物出土状況（西から）
　　２．A16号墳遺物出土状況（南から）
　　３．A16号墳遺物出土状況（南から）
　　４．A16号墳耳環出土状況（西から）
　　５．A17号墳遺物出土状況（南から）
図版63　１．A17号墳全景（東から）
　　２．A17号墳墳丘断面（南から）
　　３．A17号墳墳丘断面詳細（南から）
図版64　１．A17号墳全景（南から）
　　２．A17号墳墓壙（南から）
　　３．A17号墳基底石根石（東から）
図版65　１．A17号墳遺物出土状況（北から）
　　２．A17号墳刀子出土状況（東から）
　　３．A17号墳勾玉出土状況（北から）
　　４．A17号墳切子玉出土状況（北から）
　　５．A17号墳周溝遺物出土状況（北から）
　　６．A17号墳周溝遺物出土状況（南から）
図版66　１．A18号墳検出状況（南から）
　　２．A18号墳天井石落下状況（南から）
図版67　１．A18号墳全景（南から）
　　２．A18号墳石室全景（南から）
　　３．A18号墳閉塞石（北から）
図版68　１．A18号墳西側壁（東から）

２．A18号墳奥壁と床面（南から）
３．A18号墳東側壁（西から）
図版69　１．A18号墳遺物出土状況（北から）
２．A18号墳遺物出土状況（東から）
３．A18号墳遺物出土状況（南から）
図版70　１．A18号墳石室全景（南から）
２．A18号墳石室基底石（南から）
３．A18号墳墓壙（南から）
図版71　１．A19号墳全景（南から）
２．A19号墳検出状況（南から）
図版72　１．A19号墳石室全景（北から）
２．A19号墳石室基底石（南から）
３．A19号墳墓壙（南から）
図版73　１．A20号墳石室全景（南から）
２．A21号墳全景（南から）
図版74　１．A22号墳全景（南から）
２．A23号墳全景（南から）
図版75　１．A24号墳全景（南から）
２．A24号石室残存状況（南から）
図版76　１．A25号墳全景（南から）
２．A26号墳とA12号墳の位置（南から）
図版77　１．A26号墳石室全景（南から）
２．A26号墳石室全景（北から）
３．A26号墳石室全景（西から）
４．A26号墳石室基底石（南から）
図版78　１．A27号墳全景（南から）
２．A28号墳全景（南から）
図版79　１．A29号墳石室全景（南から）
２．A29号墳石室基底石（南から）
３．A29号墳墓壙（南から）
図版80　１．A29号墳天井石落下状況（北から）
２．A29号墳石室全景（南から）
３．A29号墳閉塞石（南から）
４．A29号墳西側壁（東から）
５．A29号墳閉塞石（東から）
６．A29号墳東側壁（西から）
図版81　１．A30号墳全景（南から）
２．A30号墳検出状況（南から）
３．A30号墳閉塞石（南から）
図版82　１．A30号墳西側壁（東から）
２．A30号墳東側壁（西から）
３．A30号墳土器出土状況（西から）
４．A30号墳墓道土器出土状況（南から）
図版83　１．A30号墳石室（南から）
２．A30号墳石室基底石（南から）
３．A30号墳墓壙（南から）
図版84　１．A31号墳全景（南から）
２．A31号墳石室基底石（南から）
３．A31号墳墓壙（南から）
図版85　１．A32号墳全景（南から）
２．A32号墳検出状況（南から）
３．A32号墳石室全景（南から）
図版86　１．A32号墳奥壁（南から）
２．A32号墳西側壁（東から）
３．A32号墳東側壁（西から）
図版87　１．A32号墳閉塞石（南から）
２．A32号墳石室基底石（南から）
３．A32号墳墓壙（南から）
図版88　１．A33号墳全景（南から）
２．A33号墳検出状況（南から）
３．A33号墳天井石落下状況（南から）
図版89　１．A33号墳石室全景（南から）
２．A33号墳石室内（南から）
３．A33号墳西側壁（東から）
図版90　１．A33号墳遺物出土状況（北から）
２．A33号墳遺物出土状況（東から）
３．A33号墳石室基底石（南から）
４．A33号墳墓壙（南から）
図版91　１．A34号墳全景（北から）
２．A34号墳検出状況（北から）
図版92　１．A34号墳鍔・耳環出土状況（西から）
２．A34号墳土器出土状況（西から）
３．A34号墳切子玉出土状況（東から）
図版93　１．A34号墳石室全景（北から）
２．A34号墳石室基底石（北から）
３．A34号墳墓壙（北から）
図版94　１．A35号墳石室全景（東から）
２．A35号墳石室基底石（南から）
３．A35号墳墓壙（北から）
図版95　１．土坑墓上部礫（西から）
２．土坑墓全景（西から）
３．土坑墓全景（西から）

図版96　１．１号墓
２．２号墓
３．３号墓
４．４号墓
５．５号墓
６．６号墓
７．７号墓
８．８号墓
図版97　１．９・８・７号墓
２．９号墓
３．10号墓
４．11号墓
５．12号墓
６．13号墓
７．14号墓
８．15号墓
図版98　１．14・15・16号墓
２．16号墓
３．17・18号墓
４．17号墓
５．18号墓
６．19号墓
７．20号墓
８．21号墓
図版99　１．22号墓
２．23号墓
３．24号墓
４．25号墓
５．26号墓
６．27号墓
７．28号墓
８．29号墓
図版100　１．30号墓
２．31号墓
３．32号墓
４．33号墓
５．34号墓
６．35号墓
７．36号墓
８．38号墓
図版101　１．39号墓
２．40号墓
３．41号墓
４．42号墓
５．43号墓
６．44号墓
７．45号墓
８．46号墓
図版102　１．47号墓
２．47・48号墓
３．48号墓周辺
４．48号墓遺物
５．49号墓
６．50号墓
７．51号墓
８．85号墓
図版103　１．SX128全景
２．SX128縁石
３．SX128土器出土状況
図版104　１．SX128長頸壺出土状況
２．SF01
３．SF02
図版105　Ａ１号墳出土遺物
図版106　Ａ２号墳出土遺物
図版107　Ａ12号墳他出土遺物
図版108　Ａ14号墳他出土遺物
図版109　Ａ15号墳他出土遺物
図版110　Ａ16号墳出土遺物
図版111　Ａ17号墳他出土遺物
図版112　Ａ17号墳出土遺物
図版113　Ａ30号墳他出土遺物
図版114　Ａ33号墳・古代墓他出土遺物

第１章　総　論

第１節　調査に至る経緯と調査の方法

１　調査に至る経緯

昭和44（1969）年の開通以来、東名高速道路は日本の大動脈として人と物を運び、その後の経済発展に大いに貢献してきた。東名高速道路の効果によって地方にも工場が誘致され、ここで生産された製品が都市の大消費地に運ばれ、また地方間での物流の移動がスムーズにおこなわれるようになった。

さらに自動車が高嶺の花から庶民の足となって、日本が車社会へと変化したことと重なり、この結果、東名高速道路の交通量も増加した。この混雑化する東名高速道路の根本的解決として、昭和62年の道路審議会において、第二東名道路と第二名神道路の建設が建議された。その後、様々な審議を経て、第二東名高速道路は、横浜、東海市間延長約270km、うち静岡県内分約170kmの基本計画が策定された。

静岡県はこの基本計画の策定を受け、平成元年に第二東名建設推進庁内連絡会議を設置し、埋蔵文化財を所轄する静岡県教育委員会文化課もそのメンバーとして、協議に参加した。第二東名建設にあたっては、事前に文化財を含む環境影響調査やその他公共事業・地域開発との調整を図り、協議が進められた。

平成３年９月には静岡県内長泉町から引佐町間の都市計画決定公示がなされた。

その後、環境影響調査と併行する形で、路線内の埋蔵文化財の遺跡分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受け静岡県教育委員会は、関係する市町村教育委員会を招集し、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、埋蔵文化財の照会を行った。市町村の行った踏査結果の回答を受け、静岡県教育委員会がとりまとめ、平成５年３月18日付で日本道路公団東京第一建設局長あてに回答した。この時点で、調査対象遺跡は136箇所、調査対象総面積1,453,518㎡であった。

その後、日本道路公団に対して平成５年11月19日付で、長泉町から引佐町間の施行命令が出された。

これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議がおこなわれた。その内容は以下の通りである。

調査範囲の確定

個々の遺跡の取扱い

発掘調査の実施について

この中で発掘調査の実施については、日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託することが確認された。しかしながら、第二東名建設に伴う発掘調査は、短期間に膨大な調査量が想定され、そのためにどのようにして調査体制を確保していくかが、大きな課題となった。

平成６年度には、県教育委員会文化課職員が調査対象個所について、具体的な調査進行のための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地の踏査を該当する市町村に依頼、年度末にはその報告ととりまとめがなされた。この結果に基づき見直しが図られ、この段階での調査対象地点133箇所、調査対象総面積1,286,759㎡となっている。

平成７年度後半には路線の一部では幅杭の打設が開始され、埋蔵文化財の調査についても見通しがで

きた。

平成８年度には日本道路公団静岡建設所は７月１日付をもって、日本道路公団静岡建設局に改組している。さらに日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会の間に９月24日付で、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに調査機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、９月25日付で第二東名事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、一部の遺跡については確認調査に入った。なお平成17年度の日本道路公団民営化にともなって、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査の委託は、中日本高速道路株式会社東京支社（浜松工事事務所）に引き継がれている。平成９年度には埋蔵文化財の調査が、本格的に確認調査から順次開始された。

一方、長泉町から御殿場市間についても日本道路公団に対し、道路建設に係わる調査指示が出され、続いて12月25日付で施行命令が出された。日本道路公団は、この区間についても静岡県教育委員会に対し平成10年９月２日付で「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされた。この照会に対し、県教育委員会文化課は該当する市町村の踏査結果を取りまとめ、静岡県教育委員会教育長名で平成10年12月17日付の回答を日本道路公団静岡建設局長あてに提出した。この区間で新たに調査対象となった遺跡は21地点、調査対象総面積108,734㎡が加わった。

第二東名に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、浜松市（旧浜北市地内分）はNo.129～138地点とCR33地点であるが、本書で報告する雲岩寺Ｃ古墳群（以下、Ｃ群に略）はNo.131地点であり、高根山Ａ群（以下、Ａ群に略）・高根山古代墓群はNo.132地点に該当する。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の受託した埋蔵文化財発掘調査の委託業務は、平成22年度末の財団法人の解散にともなって、平成23年度には静岡県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が継承し実施している。なお現在は第二東名高速道路から新東名高速道路と名称変更されているが、本書では契約事業名に基づき第二東名高速道路のままとする。

２　調査の体制

雲岩寺Ｃ群・高根山Ａ群に関する調査体制は表１のとおりである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）は、日本道路公団静岡建設局における各工事事務所の工事分担範囲に合わせて「工区」を設定し、各工単位で調査体制が組織されている。そのため表１は浜松工区として組織された体制の一部を表している。

雲岩寺Ｃ群・高根山Ａ群の確認調査と本調査（以下、現地調査）は、浜松市浜北区尾野の浜北現地事務所を拠点にして、平成11年から平成15年に実施した。

本事業については、現地調査を優先するという方針から、浜松工区における全遺跡の現地調査が終了した後に、整理作業を実施している。本事業の資料整理および報告書作成作業は、袋井市小山の埋文センター袋井整理事務所において、平成23～24年度に実施した。ただし、出土遺物の洗浄、注記、現地調査の写真整理・収納、各種台帳の作成などの基礎的整理作業については、現地作業と併行して浜北現地事務所で実施している。出土遺物の保存処理作業については、静岡市駿河区谷田の財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所本部（現、埋文センター）において実施した。

３　調査の方法

⑴　確認調査

雲岩寺Ｃ群・高根山Ａ群の確認調査は、つぎのように行われた。

平成11年度　雲岩寺Ｃ群　１区から３区、Ｃ群の確認調査

		H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H19年度	H20年度	H22年度	H23年度	H24年度
所長		斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	清水　哲	石田　彰	勝田順也	勝田順也
副所長		山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田英夫					
常務理事		伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	清水　哲	清水　哲	石田　彰		
総務	事務局長					清水　哲				
	次長					大場正夫	大場正夫	松村　亨	八木利眞	八木利眞
						稲葉保幸	稲葉保幸			
	総務課長	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一	本杉昭一	大場正夫	大場正夫	松村　亨		
	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸					
	総務係長					芦川美奈子	山内小百合	瀧みやこ	瀧みやこ	瀧みやこ
	事業係長								村松弘文	前田雅人
	事業担当	鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秋博	中鉢京子	中鉢京子			
調査	部長	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平					
	次長	佐野五十三	及川　司	栗野克巳	栗野克巳	佐野五十三	及川　司			
				及川　司	中嶋郁夫	及川　司				
	課長		及川　司	及川　司	足立順司		及川　司	中鉢賢治	中鉢賢治	中鉢賢治
	工区主任		西田光男							
	係長								富樫孝志	富樫孝志
	調査担当	西田光男	小川和彦	水野功太郎	水野功太郎				足立順司	足立順司
		梶葉良久	水野功太郎	佐野和道	桶田光俊					
		佐藤　淳	梶葉良久	武田寛生	佐野和道					
			武田寛生		田村隆太郎					
					武田寛生					
保存処理						西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	大森信宏	大森信宏
						大森信宏	大森信宏	大森信宏		
調査内容		確認調査	確認・本調査	本調査	本調査	保存	保存	保存	整理・保存	整理・保存
備考		財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							静岡県埋蔵文化財センター	

表1　調査体制

平成12年度　高根山Ａ群の確認調査

いずれもあらかじめ古墳の存在が考えられたため、丘陵の緩斜面に小規模な古墳でも見落としのないように、トレンチを密に入れ、古墳の基数や別の遺構の有無などの情報を得るようにした。

調査区のトレンチ掘削に際し、土層の変化によって遺構の有無とその性格を把握しようとした。その結果、石室を構築したであろう石積みや古墳の周溝と推定される落ち込みには特に注意した。確認調査で遺構の存在が確認された箇所については、本調査を前提とし、出土遺物は小破片で現地には留めておけないもののみ取り上げた。

現地での記録は調査区全体図兼トレンチ配置図を雲岩寺Ｃ群が200分の１、高根山Ａ群を100分の１で作成した。記録用写真は35mm判カラーネガフィルムとした。

⑵　本調査

雲岩寺Ｃ群・高根山Ａ群の本調査は、つぎのように行われた。

平成12年度　雲岩寺Ｃ群　１区から３区の本調査

平成13年度　雲岩寺Ｃ群の本調査、高根山Ａ群の本調査

平成14年度　高根山Ａ群の本調査

本調査は確認調査の結果を受け、古墳以外の遺構の調査も行った。古墳については、その範囲と周辺の表土除去を実施し、墳丘、周溝、埋葬施設の検出につとめた。雲岩寺Ｃ群については丘陵斜面に存在し、土留め処理と調査のための進入路や排土処理のための養生に神経を費やした。

両群ともに表土除去作業は人力と重機によっておこなった。高根山Ａ群の一部には墳丘の明瞭な古墳が存在し、この古墳については四分割し、墳丘の構築状況や埋葬施設との関係を把握し、発掘調査を進めた。

それ以外の古墳は、もともと石室を覆うだけの薄い盛り土がなされていたのか、後世の耕作や土砂流失のため墳丘は明瞭な形で残っていなかった。したがって表土除去後は墓壙検出まで掘り下げた。

つぎの段階では墳丘の明瞭な古墳、不明瞭な古墳も共通して周溝を掘り下げ古墳の範囲を確定し、併行して墓壙、横穴式石室の検出作業をおこなった。高根山Ａ群では、後世、古墳の石材を再利用するために石室を壊し、石室の積み石を外へ運び出している。そのため古墳の主体部は墓壙のみが残されてい

るケースも多い。石室の残りの良いケースは、天井石の架設状態や落下状態を写真撮影や図面に残す作業をおこなっているが、墓壙のみの場合は完掘時に写真撮影と実測図作成をおこなった。

その間、遺物の出土した場合はその出土状態の写真撮影・図面作成などの記録作業をおこない、遺物を取り上げている。なお主体部である横穴式石室の土砂については、玉類など微細な副葬品が想定されたため、土砂をふるいにかけ、検出に努めた。

測量・遺構実測作業のうち、3・4級基準点、国土座標に準拠した座標杭の設置は委託作業とした。なお石室、土坑など遺構図作成についても一部を委託した。古墳群の全体図は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を測量業者に委託し、作成した。

遺構の写真撮影には中型6×7判白黒フィルムを主体とし、35mmポジ・ネガフィルムを使用した。全体写真等については一部4×5判ポジ・白黒フィルムを使用した。空中写真撮影については委託により実施した。

⑶　整理作業・報告書刊行作業

基礎整理から報告書刊行までの作業は、静岡県教育委員会による『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき実施した。

基礎整理は出土品と記録類に分れる。出土品は現地調査による遺物取上げ後、土器・石製品・鉄製品と材質ごとに遺物番号を付け、台帳に登録した。さらに遺物の損傷を避け洗浄と注記を行い、保存処理の必要なものについては、その作業にまわした。

記録類のうち図面については現地で実測したものを点検し、台帳に登録した。現地で撮影した写真はベタ焼きを作成したのち、ネガと分け台帳に登録した。

整理作業から報告書刊行までの作業のうち、出土品については、分類・仕分け後、接合・復原、遺物実測を順次行った。実測の終了した出土品のうち、写真撮影の必要なものは撮影を行い、報告内容に沿って、版組・版下作成・実測図のトレースと写真図版作成を行った。記録類についても同様に版組・版下作成・トレースと写真図版作成を行った。

これらとともに報告書の執筆、編集を行い、本報告書を刊行した。

⑷　保存処理と出土人骨分析

雲岩寺Ｃ・高根山Ａ群から出土した金属製品については、応急的処理を行った後、Ｘ線写真撮影、クリーニング、脱塩処理などの保存処理を、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所と財団法人の解散に伴って事業を継承した埋文センターで実施した。

雲岩寺Ｃ群から出土した人骨については、出土状況図と小型カメラによって取上げ時の状況を撮影しながら行った。この人骨の取上げ後、保存処理と鑑定の委託調査を行い、その方法と成果は第2章第6節に掲載した。

写真1　高根山Ａ群確認調査

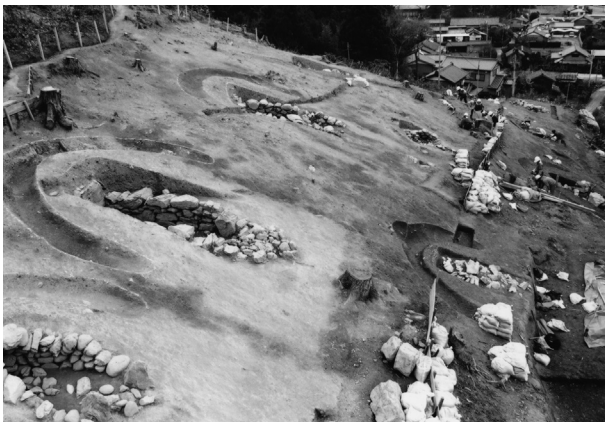


写真2　雲岩寺Ｃ群本調査

第２節　調査の経過

１　確認調査および本調査の経過

確認調査および本調査の経過については、高根山Ａ群と雲岩寺Ｃ群の調査成果の記載（第２章と第３章）の中でふれることとしたい。

２　資料整理および報告書作成、保存処理の経過

基礎整理である出土品の洗浄、注記作業や遺物台帳、記録類である図面や現地写真の整理と台帳作成については、現地の本調査と並行して実施した。

平成23年度から24年度にかけて資料整理と報告書作成作業を実施した。なお23年度は高根山Ａ群を24年度は雲岩寺Ｃ群の作業を中心に行った。両年度ともに出土品のうち土器については、接合、復原可能の個体については復原作業を実施した。鉄製品は保存処理と並行して、さび落としの終了したものから実測し、石製品についても実測図を作成した。これら出土品は23年度と24年度に写真撮影を実施した。

古墳の墳丘図や石室などの遺構の実測図や写真など記録類は、版組の前提となる図面の整合や焼き付けを行い、図面編集、版組、トレースを行った。

両年度の後半には遺物の観察表作成や原稿執筆、さらに24年度後半期には報告書の編集作業に入った。

保存処理作業は処理前の記録作成、Ｘ線撮影から土砂やさびを取り除き、24年度には脱塩処理作業を実施した。

３　出土人骨分析の経過

雲岩寺Ｃ群から出土した人骨については、平成14年度に「雲岩寺Ｃ群人骨及び鑑定業務委託」として京都大学・霊長類研究所教授（当時）片山一道氏に依頼した。当該年度である３月にその結果を受領し、完了検査を実施、業務委託は完了した。

写真3　雲岩寺C9号墳人骨実測

写真4　鉄製品保存処理

第３節　位置と環境

１　古墳群の位置

静岡県西部地方最大の政令指定都市浜松は、東は天竜川をはさんで磐田市・森町・川根本町と、西は浜名湖西岸の湖西市と、西北は愛知県東三河の市町村と、北は長野県飯田市と接している。そして南は太平洋の遠州灘が広がっている（第１図）。

高根山Ａ群と雲岩寺Ｃ群の所在地は、現地調査の実施時には浜北市として行政区分されていたが、平成17年の大合併以後、浜松市浜北区として区分されるようになった。浜北区は浜松市の中では旧浜松市域についで商工業が発達し、人口密度が多く住宅地が広がっているが、反面、郊外には水田や畑作地帯をもった地域でもある。

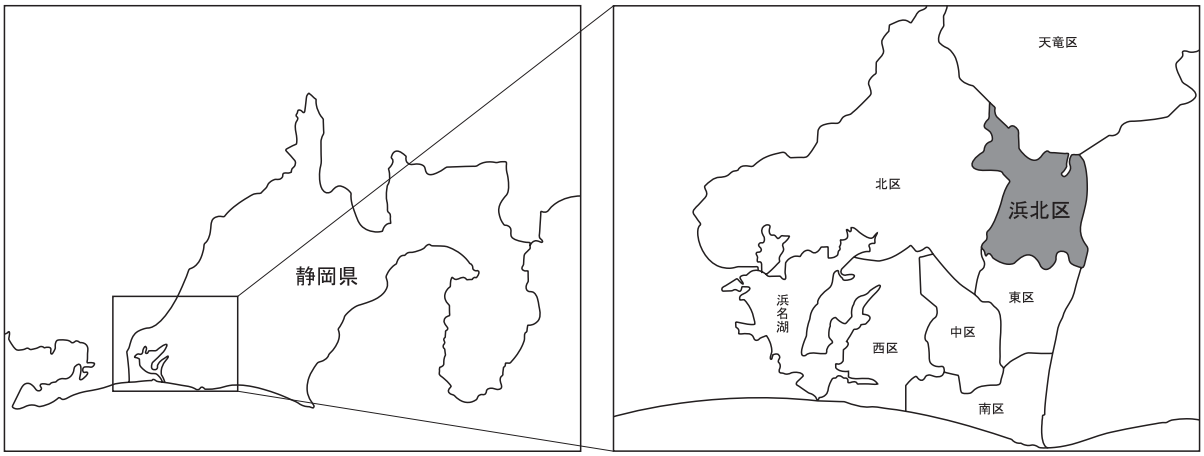
古墳群のある浜北区尾野の中でも、さらに細かい字（あざな）では高根山Ａ群が浜北区尾野高根下ほかであり、雲岩寺Ｃ群が浜北区尾野人形山である。

２ヶ所の古墳群の位置を示す場合、最寄りの公共交通機関としては、掛川、新所原間を走行する天竜浜名湖鉄道の岩水寺駅か宮口駅が近い。両古墳群はこれらの駅から北方向の丘陵上に位置する。

２　地理的環境

浜松市浜北区の地形を概観すると、南北に流れる天竜川によって形成された扇状地と氾濫平野からなる天竜川低地、低位段丘、三方原台地、北部丘陵地帯に分けられることが一般的である（浜北市 1989）。この地形区分に従うと、高根山Ａ群と雲岩寺Ｃ群は、眼下に扇状地と氾濫平野を見下ろす北部丘陵地帯に築造された古墳群といえる。この北部丘陵地帯の古墳群は、天竜区西鹿島付近から浜北区宮口まで広がった主に横穴式石室を主体部とする群集墳で、数百基の存在が推定される。かつてはこれらを浜北市北麓古墳群と呼称していたが、広域合併で浜北市から浜松市浜北区となった今日、古墳群も浜北区北麓古墳群と読み替えておきたい。

天竜川低地、低位段丘には弥生時代以後、規模の大小はあるものの、いくつかの集落遺跡が認められる。古墳群の立地する北部丘陵地帯では、第二東名高速道路建設に伴う発掘調査や国道362号整備に伴う発掘調査が実施された。その結果、縄文時代の落とし穴、古墳や土坑墓、灰釉陶器の窯跡が発見されているものの、その数はわずかで、集落遺跡や耕地遺構の痕跡はなかった。また中世や近世の遺構もほとんど認められなかった。このことから古墳群の周辺は長いこと小灌木が広がる山林地帯であり続け、



第1図　浜北区の位置

開発されることなく居住領域に組み込まなかったと考えられる。このような北部丘陵地帯のうち、低位段丘や天竜川低地に面した丘陵斜面を墓所として選び、累々と群集墳を築いていたことが判明する。

３　歴史的環境

⑴　国造制と荒玉評

静岡県西部地方は、律令国家成立とともに遠江と呼ばれる行政単位となった。それ以前の国造制下にあっては素賀、久努、遠淡海の３国造の存在が『国造本紀』に記されている。国造制は６世紀末から７世紀前葉には成立していたと考えられている。素賀と久努国造の支配領域については、その名称から現在の掛川市逆川・原野谷川中流域に素賀国造が、磐田市東部から袋井市域の太田川・原野谷川中・下流域に久努国造の領域が存在したと推定され、大方の一致をみている。

ところが遠淡海国造の支配領域については古くよりつぎの２説があり、決着をみていない。

1 磐田南部にあった潟湖の磐田海（いわたうみ）（大ノ浦・今ノ浦）を遠淡海とし、のちの国府や国津神（くにつかみ）である国魂社の存在から、磐田南西部から浜松東部の天竜川下流域を遠淡海国造の領域と推定する。

2 琵琶湖を近淡海と呼び、現在の浜名湖を遠淡海と対比させたことから、浜名湖沿岸を中心とする天竜川西岸（西遠江）を遠淡海国造の領域と推定する。

国造に関してさらに文字資料をみると、律令期に入って国造の職掌として国津神の祭祀を行っていたが、そのために律令国家から国造田を与えられていた。その一部が現在の磐田市向笠にあった。

また遠江国玉神社は、「向坂郷磐田明神なり、後ち見附に移りて惣社と号す」（遠江國風土記伝）とある。向坂とは匂坂のことで、匂坂は磐田の西、天竜川東岸の集落である。このことから遠淡海国造の中心領域は、１の磐田南東部から浜松市東部の天竜川下流域両岸と考えておきたい。すると高根山Ａ・雲岩寺Ｃ群は遠淡海国造の支配領域に含まれ、その北端であった可能性が高い。

藤原宮から「荒玉評赤□里　丈マ（部）右末呂」（静岡県 1994）と記された荷札が出土した。荒玉評赤□とは荒玉評赤佐と考えられ、古墳群周辺の地域に関する初見である。大宝令の施行以前、荒玉郡は荒玉評として成立したことが、これによって解かった。同じく藤原宮から「□□□長田評鴨里鴨マ（部）弟伊×」（静岡県 1994）と記された木簡が出土した。長田評はのちに分割され「長上郡」と「長下郡」となっている。長田評鴨里とはのちの長下郡鴨郷で、現在の磐田市豊田加茂付近と考えられる。この加茂はのちに豊田郡に属した。豊田、長上・長下の郡界は「古今洪水横流して、郷村流失」（遠江國風土記伝）し、天竜川の流路変更によって郷村の帰属がなされたと考えられる。

高根山Ａ・雲岩寺Ｃ群のある浜北区北麓古墳群は、古墳の築造されていた頃には荒玉評に属し、その総数からすれば、被葬者は荒玉評の人々のみならず、一部に長田評（のちの長上郡の範囲）の人々の墓所となっていた可能性が高い。

⑵　古墳と古墳群

浜北区域には、浜北区北麓古墳群のほかに西側に広がる内野古墳群が知られている。内野古墳群には昭和36（1961）年に発掘調査された赤門上古墳、積石塚古墳群、権現平山古墳群、神明社上古墳群、観音ツブラ古墳、辺田平古墳群、太田坊古墳群、富岡古墳群などがある（浜北市 2004）。

赤門上古墳は全長56.3mを測る前方後円墳で、割竹形木棺と推定される主体部やその周囲から三角縁神獣鏡や銅鏃・鉄鏃、太刀、剣、鉄斧、鎌が出土している（下津谷他 1966）。西遠江では最古級の築造とされ、古墳時代前期後半とされている。内野古墳群ではつづいて権現平山７号墳が築造されるが（浜北市 2004）、直径25mの円墳で、銅鏃・鉄鏃、農工具が副葬されているものの、威信財としての副葬品が赤門上古墳より低位である。

古墳時代中期に入ると、神明社上１号墳が築造されるが、直径25mの円墳で、鳥文鏡、鉄鏃などが副

1	中通遺跡	13	二俣城	25	北谷遺跡	37	大屋敷Ａ古墳群	49	野口前遺跡	61	富岡大谷遺跡
2	寺海土遺跡	14	鳥羽山城	26	泉Ａ古墳群	38	大屋敷Ｂ古墳群	50	土取Ⅱ遺跡	62	沢上Ａ古墳群
3	中屋遺跡	15	百々原遺跡	27	根堅遺跡	39	大屋敷Ｃ古墳群	51	土取Ⅰ遺跡	63	沢上Ｂ古墳群
4	大門西遺跡	16	向野遺跡	28	泉Ｂ古墳群	40	大屋敷古窯跡群	52	土取遺跡	64	沢上Ⅲ遺跡
5	上海土遺跡	17	向山Ａ古墳群	29	雲岩寺Ａ古墳群	41	北屋敷Ａ古墳群	53	大屋敷遺跡	65	沢上Ⅰ遺跡
6	篠場瓦窯	18	向山Ⅰ遺跡	30	雲岩寺Ｂ古墳群	42	北屋敷Ｂ古墳群	54	大屋敷墳墓群	66	沢上Ⅱ遺跡
7	赤佐中学校内遺跡	19	向山Ⅱ遺跡	31	芝本遺跡	43	新屋遺跡	55	梔池遺跡	67	白昭Ⅰ遺跡
8	雲岩寺Ｃ古墳群	20	向山Ｂ古墳群	32	東原遺跡	44	新屋古墳群	56	男池遺跡	68	姥ヶ谷古墳群
9	高根山Ａ古墳群	21	御馬ヶ池古墳群	33	勝栗山墳墓群	45	吉名古窯跡群	57	新原古墳群	69	山林遺跡
10	大平遺跡	22	勝栗山Ａ古墳群	34	泉墳墓群	46	譲栄Ⅰ遺跡	58	梔池古墳群	70	二本ヶ谷古墳群
11	蜷原砦	23	勝栗山Ⅰ遺跡	35	高根山Ｂ古墳群	47	譲栄古窯跡群	59	志野古墳群	71	二本ヶ谷積石塚
12	毘沙門堂砦	24	勝栗山Ｂ古墳群	36	高根山Ｃ古墳群	48	譲栄Ⅱ遺跡	60	志野遺跡	72	内野上古墳群（赤門上古墳含む）

第2図　周辺の古墳と遺跡

葬されている（浜北市 2004）。中期中葉から後葉には積石塚古墳群や埴輪を持つ辺田平古墳群が成立している。開析谷の奥を中心に立地する積石塚古墳群とそれを見下ろす台地端部に立地する辺田平古墳群の間には古墳の構造、副葬品に際立った違いがあり、被葬者集団の出自の差と考えられる。それとともに辺田平古墳群にみられた淡輪系埴輪を有する、積石塚古墳を築造するなど、それ以前の段階と異なる様相を呈する新技術を取り入れることは、伝習したものかそれを持った人々の移住が考えられる。それにしてもこの地域が大和王権からの移住や伝習を受け入れたことは、より深い従属関係に入ったものと理解できる。

浜北区北麓古墳群ではこの時期の古墳として根堅に所在する人形山１号墳が築造された。この古墳は直径23m前後の円墳で、4.5m以上の木棺をそのまま直葬した２基の主体部からは、剣、刀、鉾、鉄鏃が認められた。木棺直葬の主体部と副葬品のセットから、５世紀後半に築造されたと判断された（浜北市教委 1988　浜北市 2004）。見晴らしの良い丘陵頂部に立地することから、この地域では最も早い時期にこの立地を選択できた被葬者の優位性を知ることができる。

それより新しい時期に於呂神社境内古墳が築造された。この古墳は下位段丘に築かれた古墳で、古墳は直径23.8mを測り、墳丘はすべて盛土で築造され、墳丘裾部に葺石が巡らされていた。主体部は発見できなかったが、直刀、玉類が同一面から出土し、木棺直葬と推定される。副葬品の下部から破砕された遠江須恵器編年Ⅲ期前葉の須恵器坏身が出土した。６世紀前半の古墳と推定される。この時期の浜北区北麓古墳群はわずかな円墳が点在し、内野古墳群に比べ築造された数量も少ない（浜北市教委 1988）。

さらに内野古墳群や周辺の三方原古墳群に比べ成立が遅く、規模、副葬品を比べても劣勢の感をもたざるを得ない。天竜川の対岸である磐田原古墳群のうち北端に位置するグループについては血松塚古墳のように埴輪をめぐらした前方後円墳も認められ、天竜区の南端では全長80mの埴輪をめぐらした前方後円墳の光明山古墳が築造され、首長墓が成立したことと対照的である。

６世紀前半から中葉にかけて、この地域の様相は一変する。全長35mを測る興覚寺後古墳の登場である。この古墳は片袖の横穴式石室を内部主体とし、石室の形状には畿内系石室の影響を強く受けている。副葬品には象嵌の鍔、直刀、鉄地金銅張の馬具、玉類、須恵器が認められ（浜北市教委 1988）、それまでのこの地域の古墳と墳丘の形や主体部、副葬品の様相が一変した。これらのことによって、興覚寺後古墳は遠江においても導入期の横穴式石室を持つ首長墓として位置づけられている。これ以後、遠江において前方後円墳の築造は停止したと考えられている。

高根山B5号墳は両袖形石室で、奥壁が大型の鏡石を積まない複数の礫を組み合わせている古いタイプである。石室の形状には畿内系石室の影響を強く受けている古墳で、全体に横穴式石室としては古い形態である。この２基の古墳以後、浜北区北麓古墳群では横穴式石室を主体部とする古墳が拡大し、７世紀には大型群集墳が成立するようになった。

それとは対照的に内野古墳群では横穴式石室を持つ首長墓はみとめられず、際立った威信財の副葬も認められない。興覚寺後古墳の登場によって、造墓集団の力は浜北区北麓古墳群に大きく差をつけられた感がある。

６世紀後半から７世紀代に入ると、浜北区北麓古墳群では大屋敷Ａ・Ｃ古墳群のように数基から数十基が支群を１単位として古墳が築造され（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004，2008）、それが全体として数百基としてまとまりをみせる。こうした大型群集墳は遠江でも卓越している。ほとんどの古墳が、直刀、鉄鏃、須恵器を副葬したきわめて等質な古墳が多いが、なかには金工細工の粋を集めた冠帽を副葬するなど、際立った威信財をもつ古墳も存在する。

のちの荒玉郡は４郷からなる小郡であり、面積も狭い。前身の荒玉評も長田評の存在から同様の小区域に立評されたと推定される。この範囲には古墳時代後期後半にあれだけの大型群集墳を築造させた浜

北区北麓古墳群が存在し、その在り方からすれば、大きな紐帯をもつ氏族の存在が推定され、領域の狭さと際立った違いがある。同時にそれはなぜか、という課題が生まれよう。

引用・参考文献

浜北市教委　1988『浜北市北麓古墳群』
浜北市　2004『浜北市史　資料編　原始・古代・中世』
静岡県　1994『静岡県史　資料編　古代』
下津谷達男他　1966『遠江赤門上古墳』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004『大屋敷C古墳群　大屋敷1号窯』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『大屋敷A古墳群』

第２章　雲岩寺C古墳群

第１節　調査の方法

１　確認調査と本調査

⑴　確認調査

雲岩寺C群の確認調査は、平成11年に行われた。この地点はあらかじめ古墳の存在が考えられたため、丘陵の緩斜面に小規模な古墳についても見落としのないように、トレンチを密に入れ、古墳の基数や別の遺構の有無などの情報を得るようにした。

調査区のトレンチ掘削に際し、土層の変化によって遺構の有無とその性格を把握しようとした。その結果、雲岩寺C群を構成する横穴式石室とほかに溝状遺構や土坑、炭窯などとともに遺物包蔵地が発見された。その際には石室を構築したであろう石積みや古墳の周溝と推定される落ち込みには特に注意した。確認調査で遺構の存在が確認された箇所については、本調査を前提とし、出土遺物は小破片で現地には留めておけないもののみ取り上げた。

現地での記録は調査区全体図兼トレンチ配置図を200分の１で作成し、記録用写真は35mm判カラーネガフィルムとした。

⑵　本調査

包蔵地の範囲では当初、溝状遺構の存在により推定された古墳の周溝は存在しなかった。検出された遺構は溝状遺構や土坑であり、これらが散在的に分布していた。出土した遺物は古墳時代後期の須恵器と、平安から鎌倉時代の灰釉陶器・山茶碗がわずかに発見された。

続いて調査対象とした古墳は急峻な斜面に築造され、明瞭な墳丘も認められなかったために、雲岩寺C群では多くが新発見であった。そのため確認漏れを防ぐために重機によって周辺の表土除去を実施するとともに、斜面地にあるため重機が使用できないところを中心に人力による表土除去も併用して、墳丘、周溝、埋葬施設の検出につとめた。調査された古墳は、もともと石室を覆うだけの薄い盛り土がなされていたのか、後世の耕作や土砂流失のため墳丘は明瞭な形で残っていなかった。したがって表土除去後は墓壙検出まで掘り下げた。

つぎの段階では周溝を掘り下げ古墳の範囲を確定し、併行して墓壙と主体部である横穴式石室の検出作業をおこなった。のちに述べる高根山A群では後世、古墳の石材を再利用するために石室を壊し、石室の積み石を外へ運び出している例が多いが、雲岩寺C古墳群は比較的、石室の残りの良いケースが多く、その状態を写真撮影や図面に残す作業をおこなっている。

その間、遺物の出土した場合はその出土状態の写真撮影・図面作成などの記録作業をおこない、遺物を取り上げている。なお主体部である横穴式石室の土砂については、玉類など微細な副葬品が想定されたため、土砂をふるいにかけ、検出に努めた。人骨が遺存している場合は、外部の専門家による保存処理とその後の調査を委託した。

測量・遺構実測作業のうち、3・4級基準点、国土座標に準拠した座標杭の設置は委託作業とした。なお石室など遺構図作成についても一部を委託した。古墳群の全体図は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を測量業者に委託し、作成した。遺構の写真撮影には中型6×7判白黒フィルムを主体とし、35mmポジ・ネガフィルムを使用した。全体写真等については一部4×5判ポジ・白黒フィルムを使用した。空中写真撮影については委託により実施した。

２　調査の経過

⑴　現地調査

雲岩寺Ｃ群の存在は周知の遺跡として認定され、さらに高速道路工事予定地内ついても古墳の広がりが推定された。このため雲岩寺Ｃ群の確認調査は、道路工事予定地のどの地点に、どのような形で何基の古墳や別の遺構が分布しているかを調査することを目的とした。そのため等高線にそって工事対象区域全域にトレンチを入れた。以下、本調査を含め現地調査の経過についてふれることとする。

確認調査

その１（期間：平成11年８月30日～平成11年10月８日　調査名：No.131地点確認調査その１）

平成11年８月30日から雲岩寺Ｃ群の確認調査その１は実施された。現地は丘陵尾根を中心に重機と人力を併用して調査対象面積17,780㎡の確認調査を実地した。古墳の周溝と考えられる溝状遺構や土坑が認められ、須恵器や山茶碗が発見された。

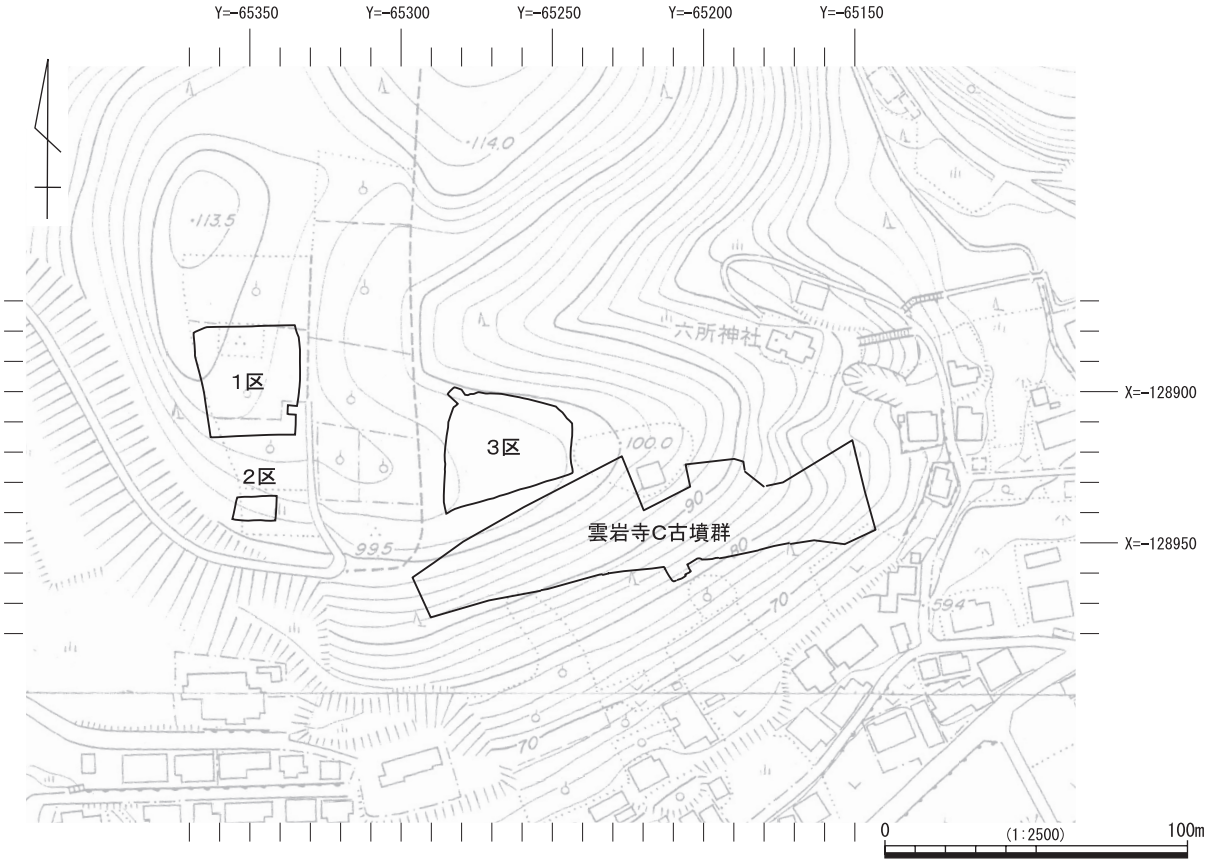
その２（期間：平成11年10月25日～平成11年12月10日　調査名：No.131地点確認調査その２）

平成11年10月25日から雲岩寺Ｃ群の確認調査その２は実施された。現地は横穴式石室の古墳の存在が指摘されていた丘陵尾根および斜面を中心に、人力により調査対象面積11,348㎡の確認調査を実地した。その結果、古墳の横穴式石室や周溝と考えられる溝状遺構や焼土、土坑、炭窯が認められ、須恵器や灰釉陶器、山茶碗が発見された。

本調査

第１次本調査（期間：平成12年２月11日～平成12年４月30日　調査名：No.131地点本調査Ⅰ期）

雲岩寺Ｃ群の本調査は確認調査の結果を受け、平成12年２月より西側に広がる遺物包蔵地の調査を先行して実施した。包蔵地の範囲は山頂部を１区、南斜面部を２区、北斜面部を３区として実施した。遺構



第3図　雲岩寺Ｃ古墳群調査区配置図

は溝状遺構や土坑が散在的に分布していた。出土した遺物は古墳時代後期の須恵器と、平安から鎌倉時代の灰釉陶器・山茶碗がわずかに発見された。調査範囲は遺構と遺物が少ないことから、居住し生活した痕跡がとぼしいと判断された。

第２次調査（期間：平成12年４月12日～平成13年３月31日　調査名：No.131地点本調査Ⅱ期）

第２次調査は調査対象地の北斜面分に炭窯、土坑、小穴が発見され、調査された。調査された古墳については、一部の古墳は後世、石室を用材として採取したため撹乱を受けていた。出土品については撹乱のため失っているものの、１号墳から須恵器、管玉、馬具の轡、鉄鏃など200数十点の副葬品が出土し、極めて良好な残り方であった。この例は副葬品の組み合わせを知る上で貴重であるが、そのほかの古墳は概して副葬品は少ない。

第３次調査（期間：平成13年６月１日～平成13年７月31日　調査名：No.131地点本調査Ⅲ期）

第３次調査は第２次調査において水道管が石室内に埋設されていたため、調査の対象とされなかった２基の発掘調査を行った。この結果、１基については奥壁部分が残っていなかったが、その構造が右片袖式横穴式石室であり、遠江では数少ない事例として注目された。片袖式の石室からは鉄鏃、刀子、砥石数点などが発見されたものの、副葬品の残りは良好ではなかった。他の１基からは石室と周溝から須恵器が出土した。

写真5　1区表土除去

写真6　1区本調査

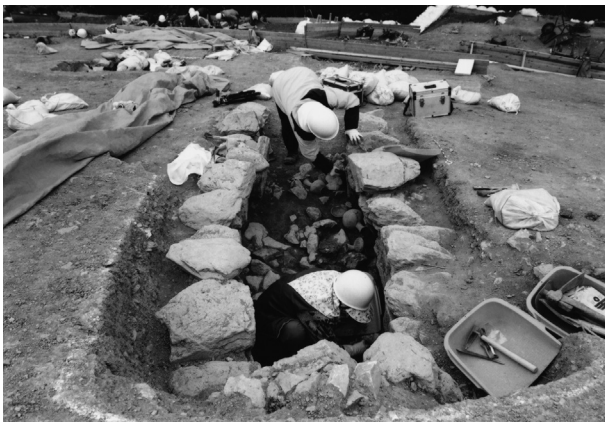


写真7　石室調査

写真8　古墳群測量

第２節　資料整理

１　資料整理および報告書作成、保存処理の経過

基礎整理　基礎整理作業は本調査に並行し、浜北現地事務所において出土遺物の水洗、注記を行った上で、遺物台帳に登録した。また図面や写真の記録類についても基礎整理を実施し、あわせて記録類台帳を作成した。

資料整理　資料整理は平成23年度と24年度に実施した。作業内容は、出土品の分類・仕分け、接合・復原、出土品の実測、写真撮影、図と写真図版の版組、トレース、観察表の作成、原稿執筆、編集・校正を行ったのちに報告書を刊行した。

保存処理は平成19～20年度と平成22～24年度に実施した。

写真9　出土品分類・仕分け

写真10　遺物実測

写真11　土器復原

写真12　保存処理

第３節　１区から３区の調査

１　１区と２区の遺構と遺物

調査以前には、雲岩寺Ｃ群と包蔵地の所在する丘陵は山林、畑地、雑種地であり、尾根部と斜面地であったため腐食土の堆積が少ない。遺物の在り方は散在的でその量もきわめて少なく、土の流失があったのか、一定の遺物を含む包含層と呼ぶべき土層の堆積は認められなかった。土層は表土直下から山地の基盤層までは、撹乱土と礫混じりの赤褐色土と黄褐色系の色調を呈する土が堆積している。これは山地の基盤層が浸食され二次堆積した土壌である。一部に基盤層に含まれる石灰岩が露頭している。

1区では溝状遺構、土坑、ピットなどの遺構と須恵器から灰釉陶器の碗などの遺物が認められた。2区では土坑2基（SF10とSF16）と灰釉陶器片などの遺物が少量認められたのみであったので、あわせて報告したい。両調査区とも居住の痕跡は認められず、古い時期に畑地等の耕作地であった可能性も低い。

SD01

1区南中央で北西から南東方向に延び発見された。SD01は長さ約8.5m、幅1.8m、検出上面より底面までの深いところで0.4mを測る。覆土は赤褐色粘質土、暗灰色粘質土である。遺構内から6世紀代の須恵器坏身や割れた甕片1個体分、土師器短頸坩などが遺構の埋土上層から出土した。この遺物は近くから2次的に流入したとすれば遺構年代の材料とはなりえないが、坏身と土師器はほぼ完形の個体であることから別の場所からの流入は考えにくく、遺構が埋まり切らない段階で置かれたと考えられる。したがって遺構の年代を示すと判断される。甕については坏身より古い時期を示し、胴部を構成する一部の破片であることから別の場所から流入した可能性もある。

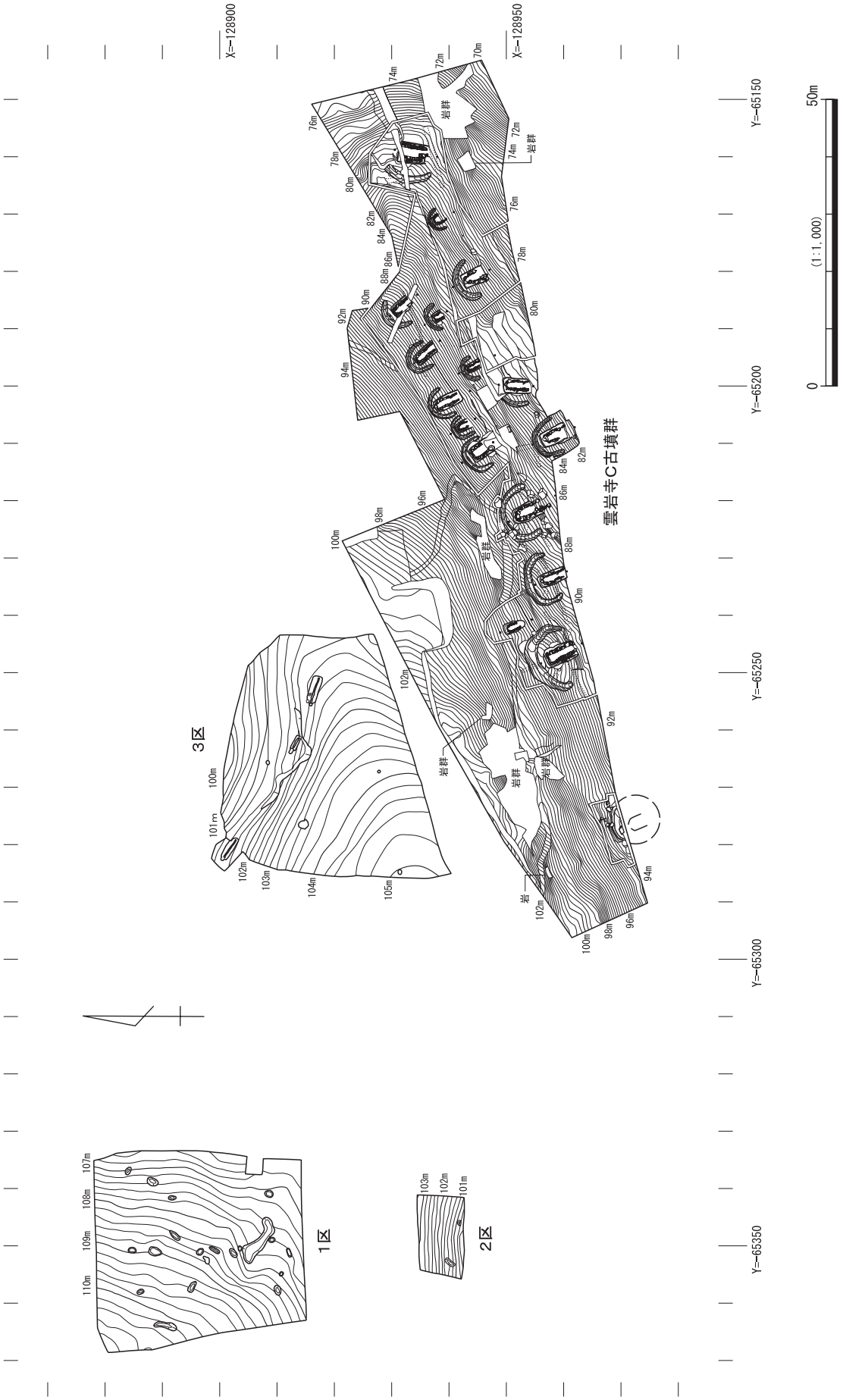
SD01の性格についてはつぎの2案が考えられる。1案は古墳の周溝である。完形の須恵器や土師器が出土することは溝に埋納されたと考えられる。周辺には古墳はなく古墳の周溝とは考えにくいが、果樹園造成に伴って大きく削平され、古墳が消滅したとすれば、その周溝の一部である可能性も否定できない。完形の須恵器や土師器が周溝埋土上層に置かれたという解釈である。

2案は自然流路である。遺構は海抜107.9～107.3m前後に地形の高低にそって存在していることから、自然の力で浸食された窪地の可能性もある。遺構底面の土壌は粘性が強く、周辺の微地形が浅い谷地形を呈していることから、堆積土の下部は流水によって堆積したとも考えられる。何らかの意味で浅い自然流路に土器を置いたと考えられる。なお甕は口頸部を欠き、接合作業によって1個体には復原できなかったため、付近からの流入であると理解した。現状では1案、2案とも結論は出せないでいる。

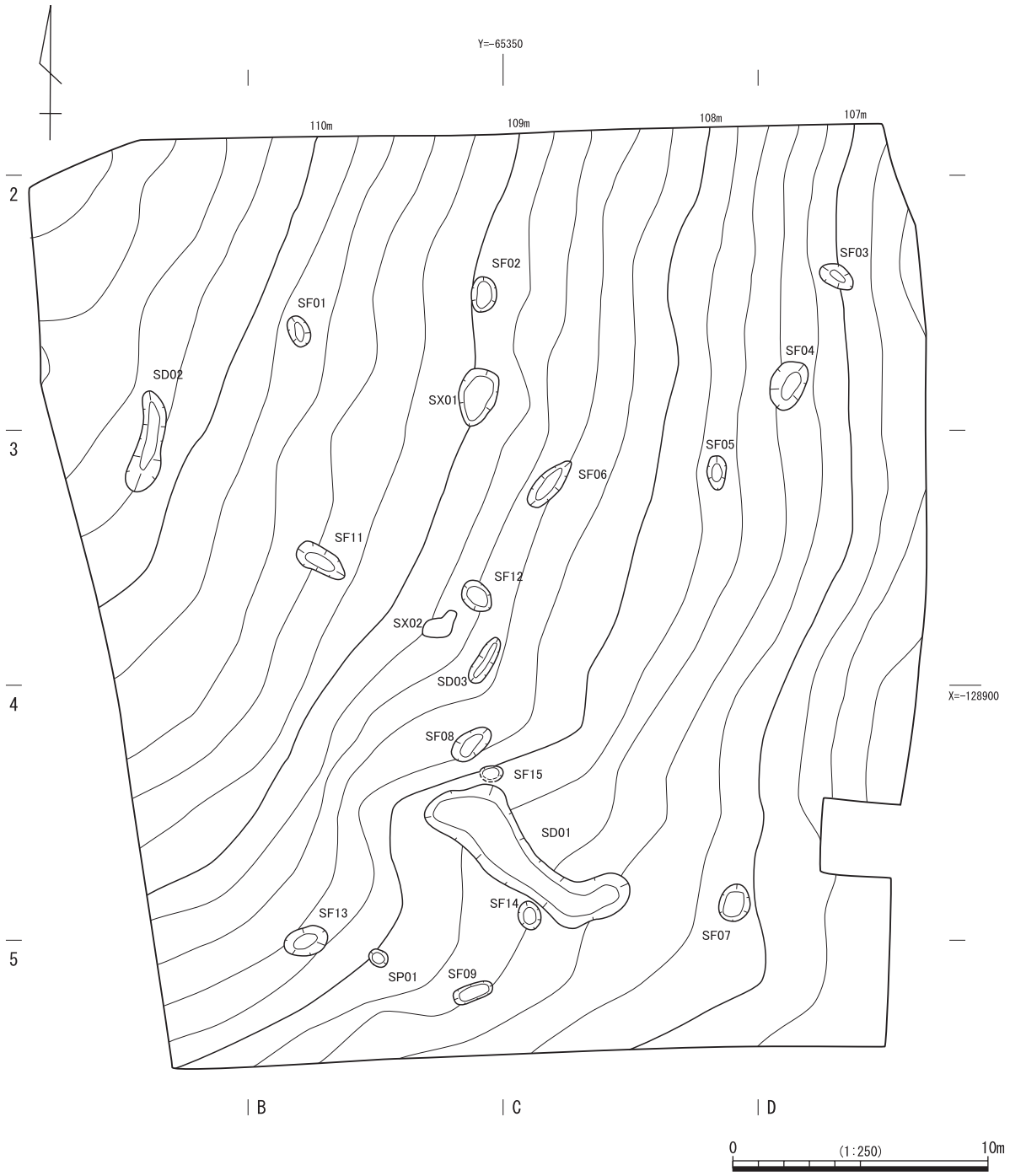
出土遺物　1・2の坏身、3の坏蓋、4の短頸坩、5の甕はSD01上層出土である。この甕の外面には平行叩きを施し、内面には叩目痕をナデ消し、その一部がわずかに残っている。いずれも遠江須恵器編年Ⅲ期前葉（TK10型式併行）と考えられる。7の短頸坩は出土状態から1・2の坏身と同じ時期であると判断される。6の甕は外面に平行叩きを施したのち横ナデ調整を施している。内面は叩目痕をナデ消し、その一部がわずかに残っている。これらの特徴は田辺昭三氏編年のTK208号窯期前後にみられるので、この甕をTK208号窯期前後としておく。この遺構の年代はTK208号窯期から遠江須恵器編年Ⅲ期前葉（TK10型式併行）と考えられる。

SD02

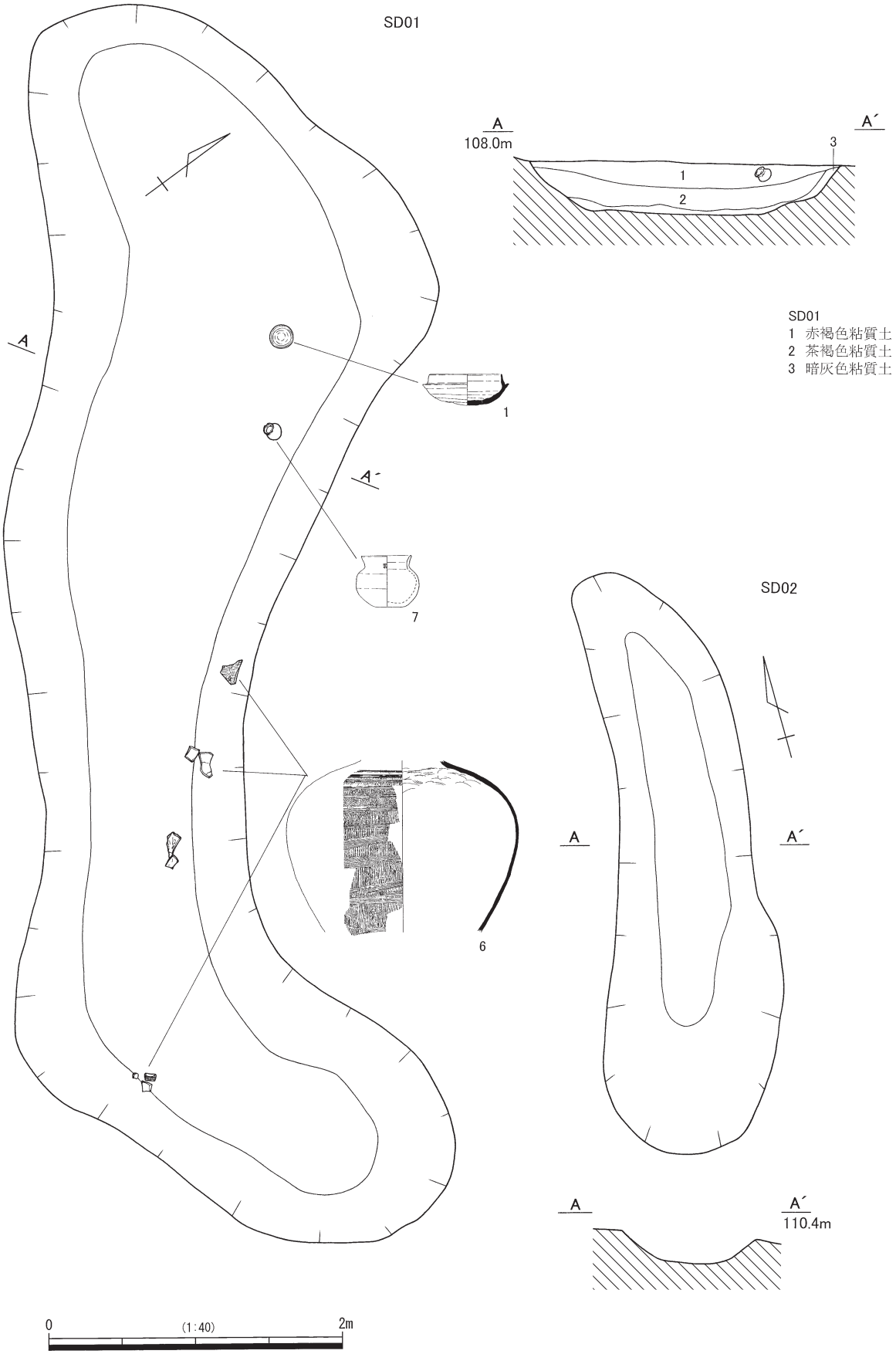
1区で検出されたSD02は、長さ3.96m、幅0.93m、検出上面より底面までの深さ0.35mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構内からは須恵器甕小片が出土したが、遺構の年代は明確ではない。覆土中に遺物の認められた遺構は、上記SD01とSD02であり、同一時期に掘削されたと判断される。遺構は海抜110.2m前後に地形の高低にそって存在していることから、自然の窪地の可能性もあり性格不明の遺構



第4図　雲岩寺Ｃ古墳群と1区～3区全体図


Y=-65350
110m
109m
108m
107m
2
3
4
5
X=-128900
SF01
SF02
SF03
SF04
SF05
SF06
SF07
SF08
SF09
SF11
SF12
SF13
SF14
SF15
SD01
SD02
SD03
SX01
SX02
SP01
B
C
D
0
(1:250)
10m

第5図　1区全体図



第6図　1区SD01・02平・断面図

第7図　SD01出土遺物

である。

SD03

１区で検出されたSD03は、長さ2.06m、幅0.65m、検出上面より底面までの深さ0.31mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜108.5m前後に地形の等高線に並行して存在していることから、自然の窪地の可能性はないが、性格不明の遺構である。

SF01

１区で検出されたSF01は、長さ1.2m、幅0.75m、検出上面より底面までの深さ0.31mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜109.7m前後に存在している。性格不明の遺構である。

SF02

１区で検出されたSF02は、長さ1.4m、幅0.98m、検出上面より底面までの深さ0.28mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜109.0m前後に存在しているが、地形の等高線に並行して存在している。性格不明の遺構である。

SF03

１区で検出されたSF03は、長さ1.4m、幅0.84m、検出上面より底面までの深さ0.26mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜107.0m前後に存在している。性格不明の遺構である。

SF04

１区で検出されたSF04は、長さ1.95m、幅1.35m、検出上面より底面までの深さ0.68mを測る。覆土は黒褐色粘質土と赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜107.4m前後に存在しているが、地形の等高線に並行して存在している。性格不明の遺構である。

SF05

１区で検出されたSF05は、長さ1.30m、幅0.7m、検出上面より底面までの深さ0.26mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜107.7m前後の等高線に並行して存在している。性格不明の遺構である。

SF06

１区で検出されたSF06は、長さ2.26m、幅0.87m、検出上面より底面までの深さ0.18mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜108.5m前後に存在しているが、地形の等高線に並行して存在している。性格不明の遺構である。

SF07

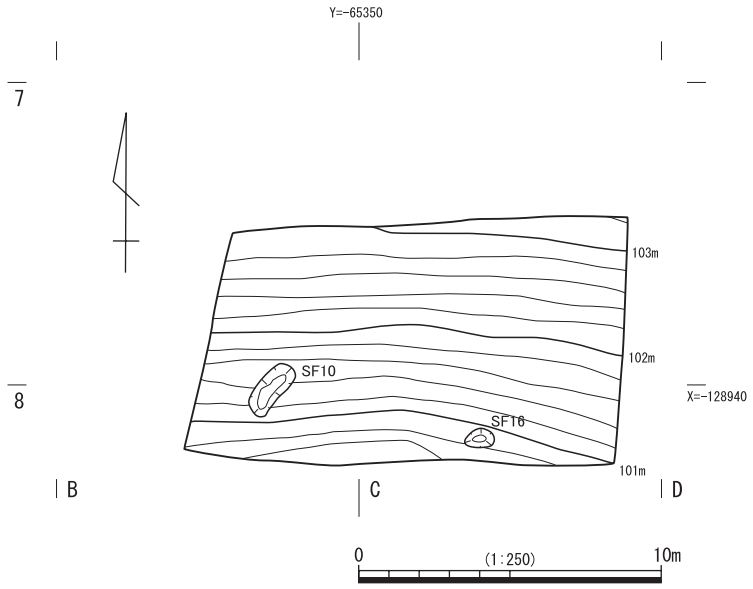
１区で検出されたSF07は、長さ1.4m、幅1.20m、検出上面より底面までの深さ0.15mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜107.1m前後の等高線に並行して存在している。性格不明の遺構である。

SF08

１区で検出されたSF08は、長さ1.70m、幅1.0m、検出上面より底面までの深さ0.39mを測る。覆土は暗赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜108.1m前後の等高線に並行して存在している。性格不明の遺構である。

SF09

１区で検出されたSF09は、長さ1.58m、幅0.67m、検出上面より底面までの深さ0.28mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜107.6m



第8図　2区全体図

前後に存在しているが、地形の等高線に並行して存在している。性格不明の遺構である。

SF10

2区で検出されたSF10は長さ1.95m、幅0.85m、検出上面より底面までの深さ0.53mを測る。覆土は暗黄褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜101.6～101.1mの傾斜に沿って存在している。性格不明の遺構である。

SF11

1区で検出されたSF11は、長さ2.15m、幅0.96m、検出上面より底面までの深さ0.25mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜109.5m～109.2m前後の等高線に直交して存在している。性格不明の遺構である。

SF12

1区で検出されたSF12は、長さ2.12m、幅1.05m、検出上面より底面までの深さ0.31mを測る。覆土は暗赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜108.6m前後に地形の傾斜に沿って存在している。性格不明の遺構である。この遺構の周辺には焼土遺構SX02、SD03がある。

SF13

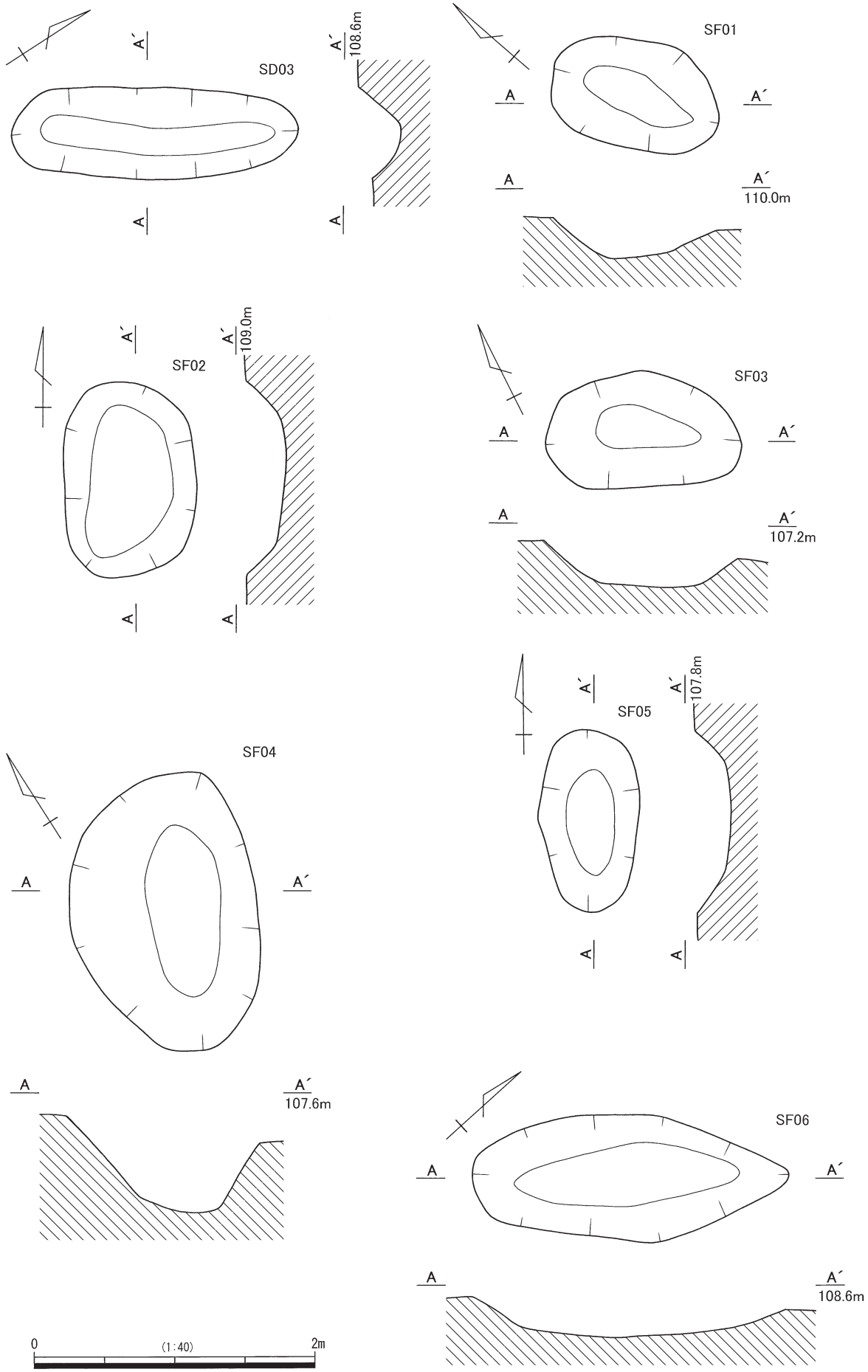
1区で検出されたSF13は長さ1.75m、幅1.06m、検出上面より底面までの深さ0.4mを測る。覆土は暗赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜108.3～108.2mに存在している。性格不明の遺構である。

SF14

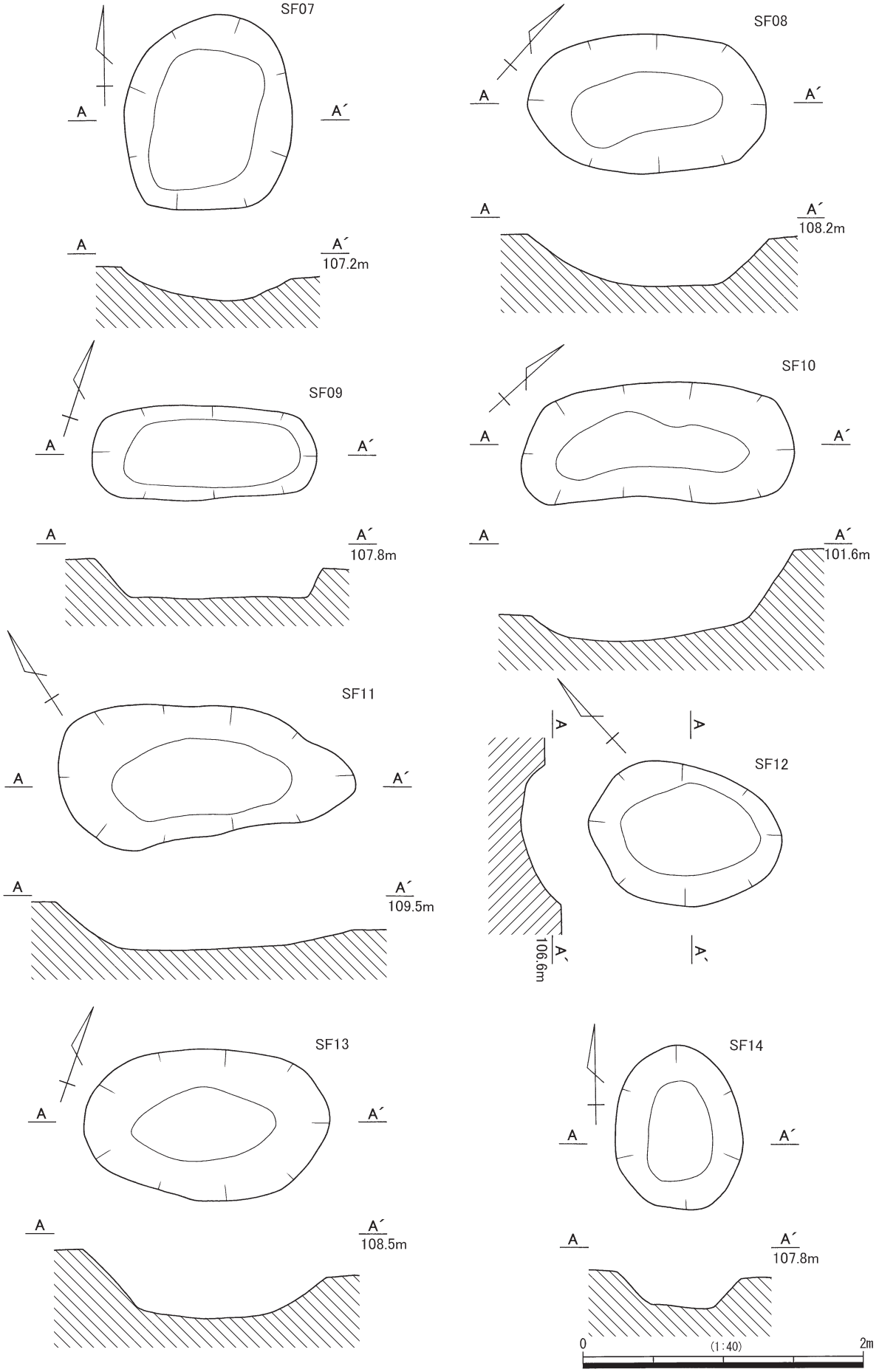
1区で検出されたSF14は、長さ1.16m、幅0.88m、検出上面より底面までの深さ0.2mを測る。覆土は暗赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜107.6m前後に存在している。この遺構に近接してSD01があるが、関連は不明で性格不明の遺構である。

SF15

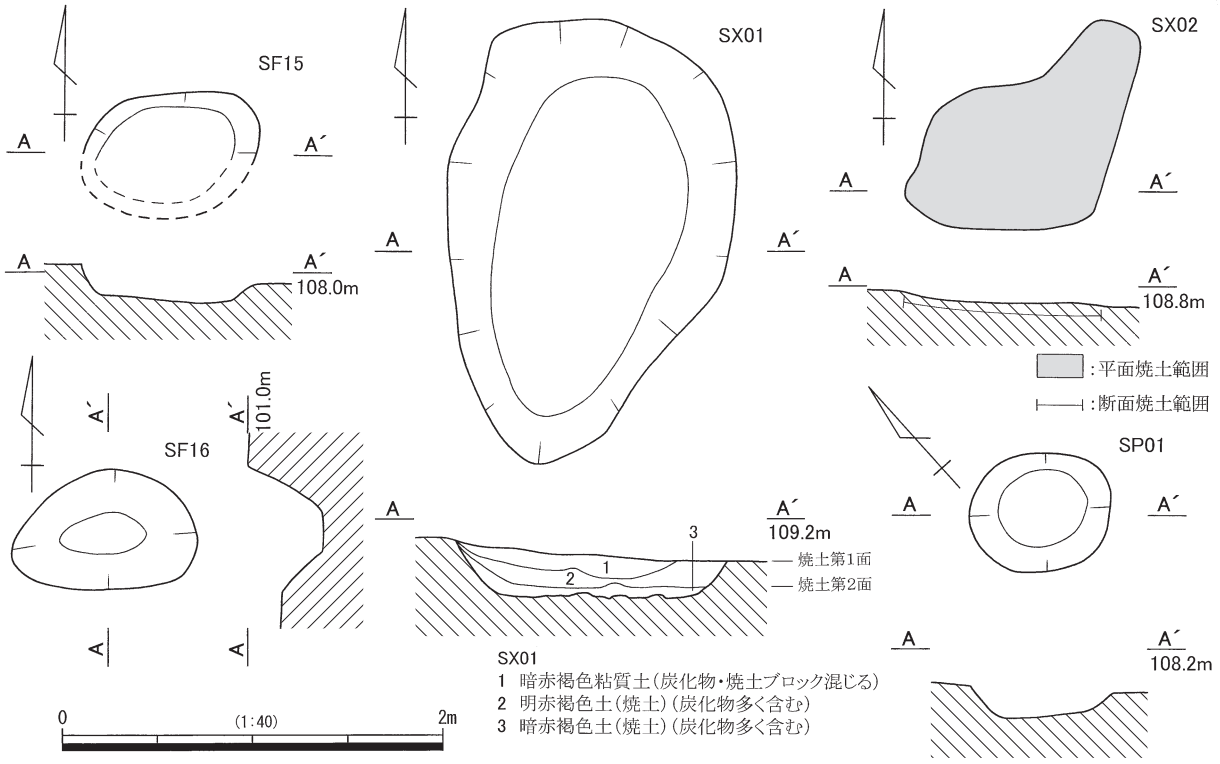
1区で検出されたSF15は長さ0.9m、幅0.68m、検出上面より底面までの深さ0.18mを測る。覆土は暗赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜108.0m前後に存在している。この遺構に近接してSD01があるが、関連は不明で性格不明の遺構である。



第9図　1区SD03・SF01～06平・断面図



第10図　1・2区SF07～14平・断面図



第11図　1・2区SF15・SF16ほか平・断面図

SF16

2区で検出されたSF16は、長さ0.96m、残存幅0.62m、検出上面より底面までの深さ0.35mを測る。覆土は暗赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。海抜100.9m前後に存在している。この遺構に近接してSF10があるが、関連は不明で性格不明の遺構である。

SX01

1区で検出されたSX01は長さ2.33m、幅1.48m、検出上面より底面までの深さ0.29mを測る。覆土は焼土ブロックを含む暗赤褐色粘質土、炭化物を多量に含む焼土が2面である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜109.1～108.9mに存在している。

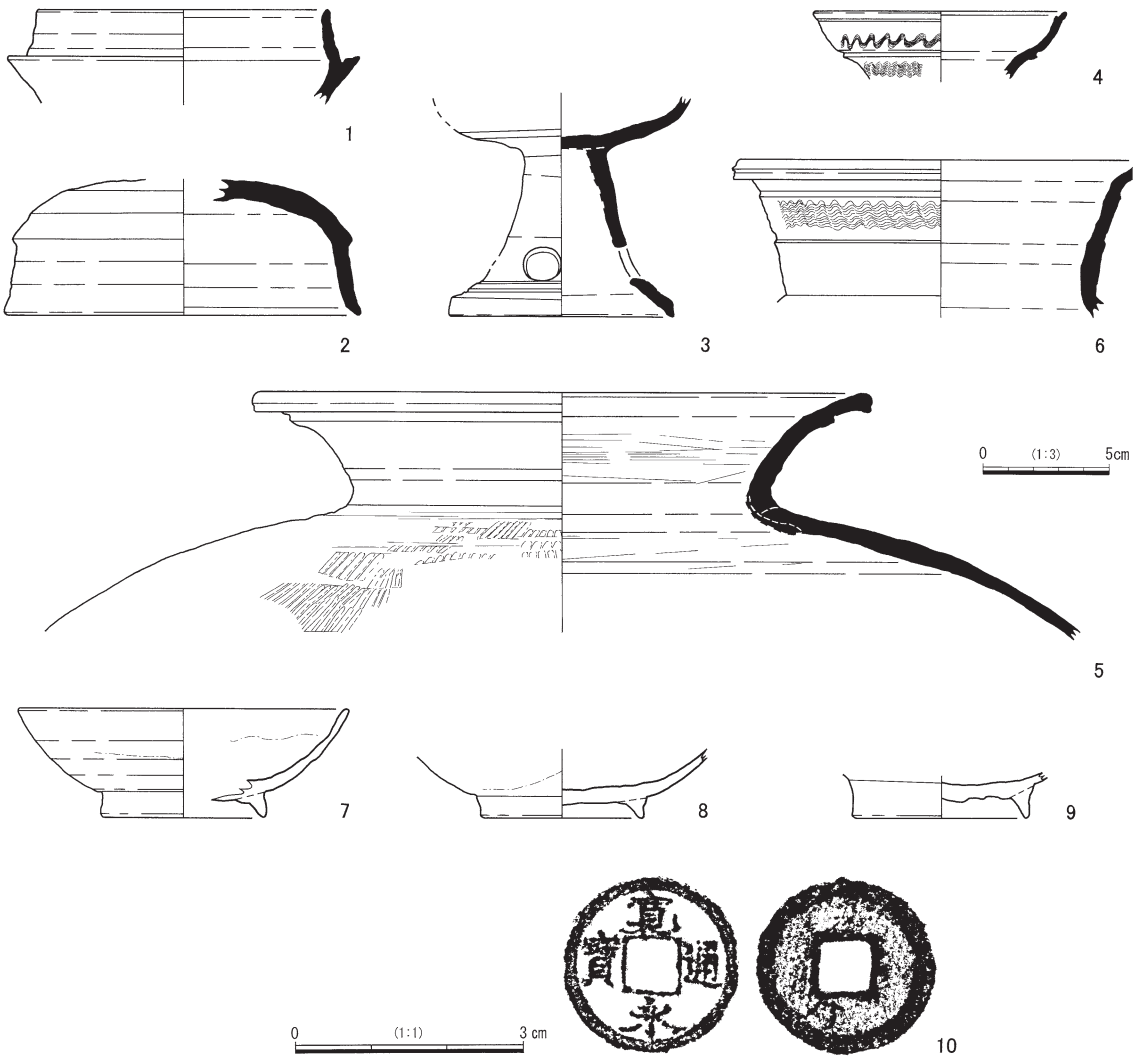
SX02

1区で検出されたSX02は長さ1.48m、幅0.8mを測る。炭化物を含むブロックである。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜108.7mに存在している。この遺構に近接してSF12とSD03があるが、関連は不明で性格不明の遺構である。

SP01

1区で検出されたSP01は長径0.76m、短径0.63m、検出上面より底面までの深さ0.16mを測る。覆土は赤褐色粘質土である。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜108.0mに存在している。性格不明の遺構である。

出土遺物　確認調査や遺構を伴わないで1区から出土した遺物を取上げる。1・2は坏もしくは有蓋高坏である。たちあがりや口径からTK208号窯期からTK47号窯期併行と考えられる。3は脚部に丸窓透かしの高坏で、遠江須恵器編年Ⅲ期前葉（TK10号窯期併行）と考えられる。袋井市大門大塚古墳の出土品や衛門坂古窯跡の製品に見られる。4はTK208号窯期からTK47号窯期併行と考えられる小形甕である。5と6の甕は大小の違いはあるものの口頸部に突帯を巡らす古式のタイプで、TK208号窯期からTK47号窯期併行と考えられる。7・8・9は浜北窯産の灰釉碗で、施釉部分をみると漬け掛けを施す。10世紀後半から11世紀と考えられる。3と5はSD01を検出したトレンチからの出土で、先に推定した遺構の年代



第12図　1区出土遺物

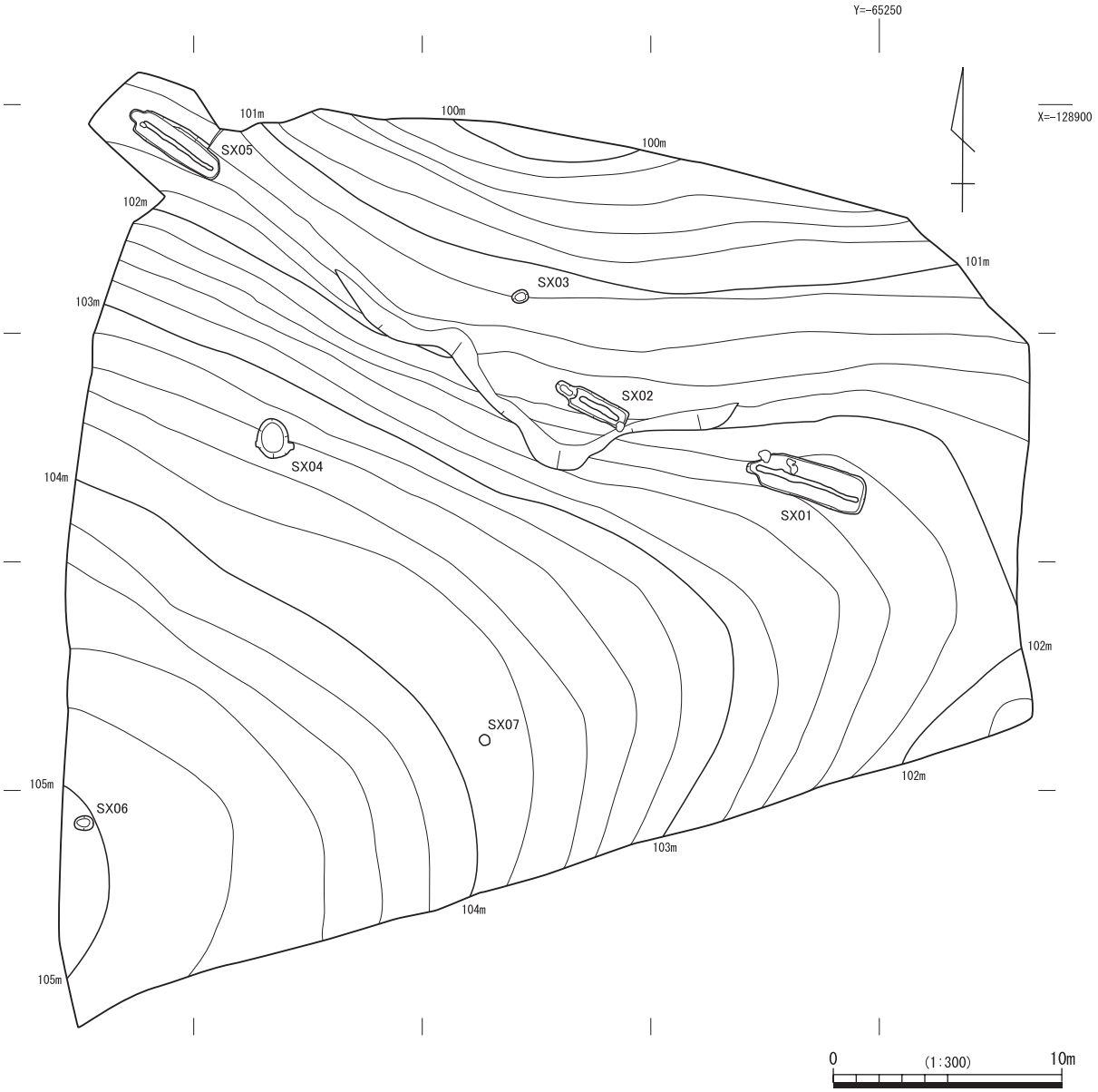
に収まることからもSD01に関係する遺物であろう。7・8・9の碗はSD01の西側および上層から出土した。2は1区南側から出土した。それ以外の1・4・6は1区北側尾根部から出土した。TK208号窯期からTK47号窯期併行の須恵器であるが、周辺には遺構は認められなかった。

1区から出土した遺物からTK208号窯期からTK47号窯期併行の5世紀後半と6世紀前半、10世紀後半から11世紀の遺物が認められたものの、残念ながらその量もわずかであって、その性格を論ずるに足る資料ではなかった。

10は1区北側東斜面から出土した18世紀代の新寛永通宝である。単独出土でこの地を訪れた先人の遺失物であろうか。

2　3区の遺構と遺物

3区は雲岩寺C群の北東に位置し、ほぼ東西に延びる小規模な谷に面した丘陵尾根と斜面に立地する。調査前の地目は山林であり、六所神社の西側奥部にあたる。調査区の地形は尾根部と斜面地であったため腐食土の堆積が少ない。遺物の在り方は散在的でその量もきわめて少なく、土の流失があったのか、一定の遺物を含む包含層と呼ぶべき土層の堆積は認められなかった。土層は表土直下から山地の基盤層までは、撹乱土と礫混じりの赤褐色土と黄褐色系の色調を呈する土が堆積している。これは山地の基盤層が浸食され二次堆積した土壌である。


Y=-65250
X=-128900
101m
100m
100m
SX05
102m
101m
SX03
103m
SX02
SX04
104m
SX01
102m
SX07
105m
SX06
102m
103m
104m
105m
0
(1:300)
10m

第13図　3区全体図

３区では炭窯、土坑、ピットなどの遺構と須恵器から灰釉陶器・山茶碗の碗などの遺物がごく少量認められた。居住の痕跡は認められず、古い時期には炭窯以外の用途である畑地等の耕作地である可能性も低い。

炭窯（SX）1

３区南東で発見された。全長5.36m、焼成室幅1.6m、焼成室深さ0.2m、焚口幅0.43mを測る。覆土は上位から幅1cm大の炭化物を含む褐色粘質土、幅３～5cm大の炭化物を含む黒色土である。焼成室には中央に細い溝が掘られている。焼成室の前面がよく焼けている。焚口は短く、その方向はN74°Wである。覆土の状態から焼成室で造られた木炭を取り出した際、細かく砕けた木炭についてはそのままとしたのであろうと考えられる。

炭窯（SX）2

３区中央北で発見された。全長3.48m、焼成室幅0.99m、焼成室深さ0.06m、焚口幅0.52mを測る。焼成室には中央に細い溝が掘られている。この溝の周囲が奥まで焼けている。焚口は短く、その方向はN61°30′Wである。炭窯１と同様に覆土は上位から幅3cm大の炭化物を含む褐色粘質土、幅３～5cm大の炭化物を含む黒色土である。焼成室で造られた木炭を取り出した際、細かく砕けた木炭についてはそのまま残したのであろう。窯の周囲は尾根側を垂直に切って作業スペースを造成している。

炭窯（SX）5

３区北西隅で発見された。全長4.63m、焼成室幅1.45m、焼成室深さ0.2m、焚口幅0.52mを測る。覆土は上位から幅3cm大の炭化物を含む褐色粘質土、幅３～5cm大の炭化物を含む黒色土である。焼成室には中央に細い溝が掘られている。この溝の周囲がよく焼けている。焚口は短く、その方向はN55°Wである。覆土の状態から焼成室で造られた木炭を取り出した際、細かく砕けた木炭についてはそのまま残し廃棄したのであろうと考えられる。これは3基の炭窯に共通している。

SX03

３区で検出された土坑、ピットは、調査区内に炭窯が発見されたのみであり、居住や耕作地の可能性は考えられないことから、これらの遺構は木炭製造に関係する何らかの遺構と考え、SXの略称を付した。SX03は長径0.66m、短径0.57m、検出上面より底面までの深さ0.06mを測る。覆土は褐色土で1層のみであることから埋められた可能性が高い。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。底面の一部が強く焼け焼土と化している。海抜101.2m前後に存在し、炭窯より低い位置にある。性格不明の遺構である。

SX04

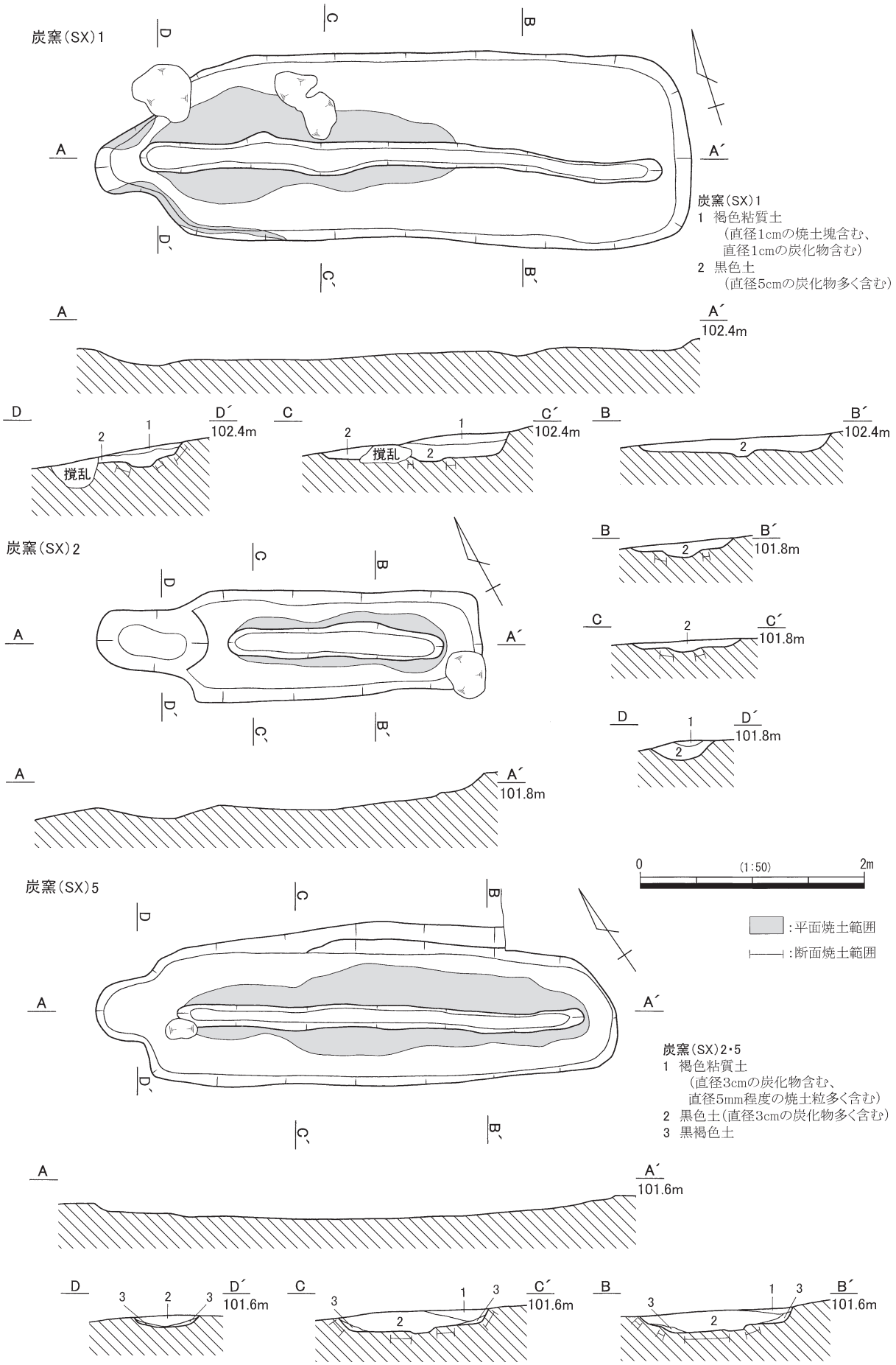
SX04は長径1.72m、短径1.65m、検出上面より底面までの深さ0.3mを測る。覆土は上層より暗褐色土、暗灰褐色土、わずかに炭化物を含む暗褐色土、赤褐色土がレンズ状に堆積することから自然に埋まったと判断される。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜103.4mに存在し、炭窯より上位に位置する。

SX06

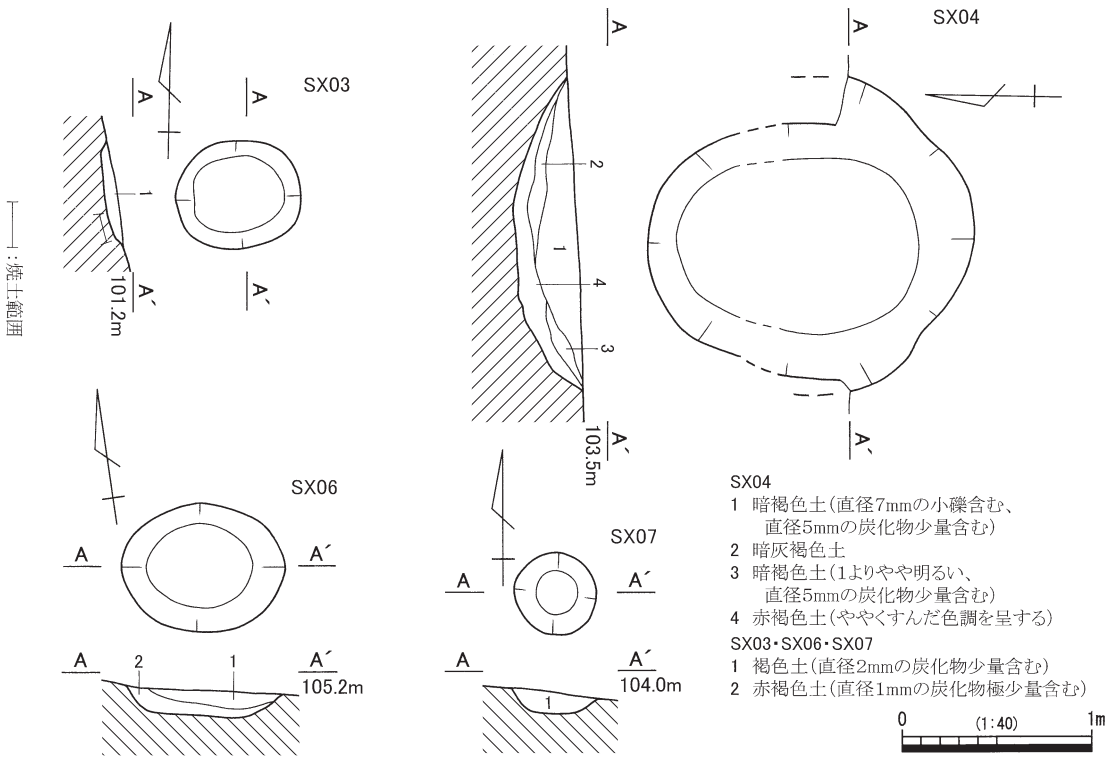
SX06は長径0.86m、短径0.68m、検出上面より底面までの深さ0.13mを測る。覆土は上層より暗褐色土、赤褐色土がレンズ状に堆積することから自然に埋まったと判断される。いずれの層にも炭化物を少量含む。遺構から遺物は出土しなかったので、遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜105.1mに存在し、炭窯より上位に位置し、丘陵尾根部に近い。

SX07

SX07は長径0.45m、短径0.43m、検出上面より底面までの深さ0.12mを測る。覆土は暗褐色土で1層のみであることから埋められた可能性が高い。炭化物を少量含む。遺構から遺物は出土しなかったので、



第14図　3区SX01・02・05平・断面図



第15図　3区SX03・04ほか平・断面図

遺構の年代は明確ではない。遺構は海抜103.9mに存在し、炭窯より上位に位置する。

以上、3区の炭窯と性格不明の土坑・ピットの概観を述べたが、遺構に伴う遺物は皆無であったため、いつ頃の遺構かは不明である。なお炭窯操業の時期には、3区とその周辺は木炭生産のためほとんどの立木が伐採されていたと推定される。すると炭窯に近い位置に存在する性格不明の土坑・ピットは、立木伐採から炭窯操業の過程に営まれた可能性が高い。

ところで調査区からは、確認調査において広く古墳時代後期の須恵器と10～13世紀代の灰釉陶器・山茶碗片が少量、出土した。このことから、雲岩寺Ｃ群と関連深い須恵器片を除くと、炭窯と性格不明の遺構は、残された灰釉陶器・山茶碗片を手掛かりとすれば、その年代である10～13世紀に帰属する可能性が高い。三方原台地周辺では同じ形態の多くの炭窯が発見されているし（佐野一夫他 1997）、近くは旧浜北市教育委員会調査分の高根山Ａ群の範囲にも3基の炭窯が発見されている（浜北市教育委員会 1995）。この3基の窯は遺物を伴っておらず、築造時期は不明である。

これら三方原台地周辺の炭窯は、12～13世紀代に操業された「伏焼式炭焼き窯」とされ（太田好治他 1989）、長期間操業される構造の窯ではない。3基の窯は併存しながら操業したのではなく、1基が廃棄されるとつぎに窯が築造され、最後には木材の枯渇とともに別の地点に移動したものと推定される。3区の炭窯は三方原台地周辺の他の炭窯よりわずかに先行する可能性があるものの、平安後期から鎌倉初期の１例に加えることができよう。古墳群築造以後、3区とその周辺は炭窯による木炭生産以外、里山と化し、居住や生産活動など生活の痕跡は認められなかった。

引用・参考文献

太田好治他　1989・1990『都田地区発掘調査報告書』
浜北市教育委員会　1995『浜北市高根山古墳群』
佐野一夫他　1997『下滝遺跡群』

第４節　古墳群の調査

１　古墳群の概要

⑴　立　地

雲岩寺Ｃ群は天竜奥三河国定公園・森林公園を中心に、ほぼ東西の根堅・尾野、宮口の丘陵先端部に分布する浜北区北麓古墳群の一角に位置する。もともとこれら古墳群の分布する丘陵は、北部丘陵と呼ばれていたが、その下位には東側を流れる天竜川によって河岸段丘が形成され、この段丘にも一部に浜北区北麓古墳群は分布する。浜北区北麓古墳群はその多くが海抜200m以下の丘陵に分布するが、この丘陵は南北に走る開析谷によって分断され、それぞれ独立した先端部を造り出している。雲岩寺Ｂ・Ｃ群はその一部である通称「人形山」と称される丘陵に立地する。

遠江の後期群集墳は、天竜川右岸では、数十基単位の支群が三方ヶ原台地縁辺を中心に形成されているが、総数数百基と推定される浜北区北麓古墳群の存在はきわめて大きい。天竜川右岸には、この古墳群を北限として、それより北には天竜区日明の数基以外、みられない。

つまり浜北区北麓古墳群の存在は、遠江を代表する大型群集墳であるとともに、大型群集墳の北限でもある、といえよう。

⑵　雲岩寺Ｃ群の概観

人形山とそれに隣接する丘陵には、Ａ、Ｂ、Ｃの３群の支群が形成され、雲岩寺古墳群と称している。Ａ群は曹洞宗竜泉寺北側丘陵の緩斜面に４基が確認されていた。Ｂ、Ｃ群は浅い谷地形を挟んで人形山山頂部とその緩斜面にそれぞれ切り離される位置にあたる。Ｂ群は県立浜名高校史学クラブ発掘調査分２基を含む14基が確認されている。1962年に行われた浜名高校の発掘調査では、山頂部に位置する人形山１号墳では木棺直葬の主体部から剣・鉾・刀子・鉄鏃が発見され、５世紀後半の築造と推定された。同時に調査された３号墳は横穴式石室であった（浜北市教育委員会 1988　浜北市 2004）。

1960年代の分布調査によって、Ｃ群は今回調査分の西側に12基が確認されていたが、土取りによって９基が消滅し、３基が残っているとされていた（浜北市教育委員会 1988）。今回の調査分17基と以前に残されていた３基の関係は不明確であるものの、仮に今回調査分に含まれるとすれば、Ｃ群の総数はおおよそ26基前後と推定される。消滅した９基と今回調査分17基の位置関係は、広い意味では同一丘陵に位置する古墳群であるが、それぞれの古墳群との間に空白域があり、別の小支群に分離できると判断される。したがって本書の雲岩寺Ｃ群１号墳から17号墳とは、雲岩寺Ｃ群のうち東小支群に属すとし、古墳の名称は本発掘調査分の名称として完結させたため、西側に存在し消滅した９基とは異なる呼称であることをお断りしておく。

引用・参考文献

浜北市教育委員会　1988『浜北市北麓古墳群』
浜北市　2004『浜北市史　資料編　原始・古代・中世』

第16図　雲岩寺古墳群位置図

第17図　雲岩寺C1～C17号墳全体図

２　調査された古墳の成果

⑴　雲岩寺C1号墳

調査前の状況

C1号墳は調査区西端から45mほど東に位置し、標高91.6～94.0mの等高線付近に築造されている。

C1号墳は調査前には雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかったが、撹乱穴によって古墳の存在が推定された。

墳丘・周溝

C1号墳はC2号墳やC3号墳とともに、調査範囲の古墳の中では、西側下段域に築造されたグループに属する。これら3基の古墳はその位置からすると、何らかの親縁関係を想定できる。C1号墳は墳丘の盛土はほとんど確認できなかったが、斜面の等高線が南側に屈曲するところに立地しているため、周囲よりわずかに高く、これを利用して古墳を築造したと考えられる。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅2.0m、深さ0.3mを測る。墳丘は東西9.1m、南北7.5m以上と考えられる。墳丘南側で標高91.6m、墳丘北側で標高94.4mを測り、現状での古墳の高さは2.8mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。石室の平面形は無袖式石室と判断される。石室は玄室下半分が地滑りによって南へ滑っているため、側壁の一部には強い力が加わって亀裂が入っていた。さらに側壁の基礎石は比較的当初の旧状をとどめていたものの、それ以外の上部の半分ほどが南へ移動していた。床面は奥壁側が撹乱を受け失われていたものの、玄室入り口付近が残り、比較的旧状をとどめていた。

天井石　検出の際、天井石は残っていなかった。

玄室　墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘り2枚の板石を設置し、さらに上部に板石を積み奥壁としたと推定される。ただし上部の石は残っていなかった。両側壁の基底石は、他の側壁の石材よりも大きい腰石を使用している。玄室奥壁側には基底石と墓壙の間に長方形の礫を控え積としていた。基底石埋置については玄室下半に穴を墓壙底面に掘り、据え付けている。おそらく石室が斜面に立地していたため、玄室下半の安定をはかるために施工されたと推定される。玄室の平面形は、玄室入り口でわずかに幅を狭めた長台形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は2面が確認されたが、いずれも撹乱を受け部分的に残っていた。

前庭・閉塞部　閉塞石は3、4段が残っていた。

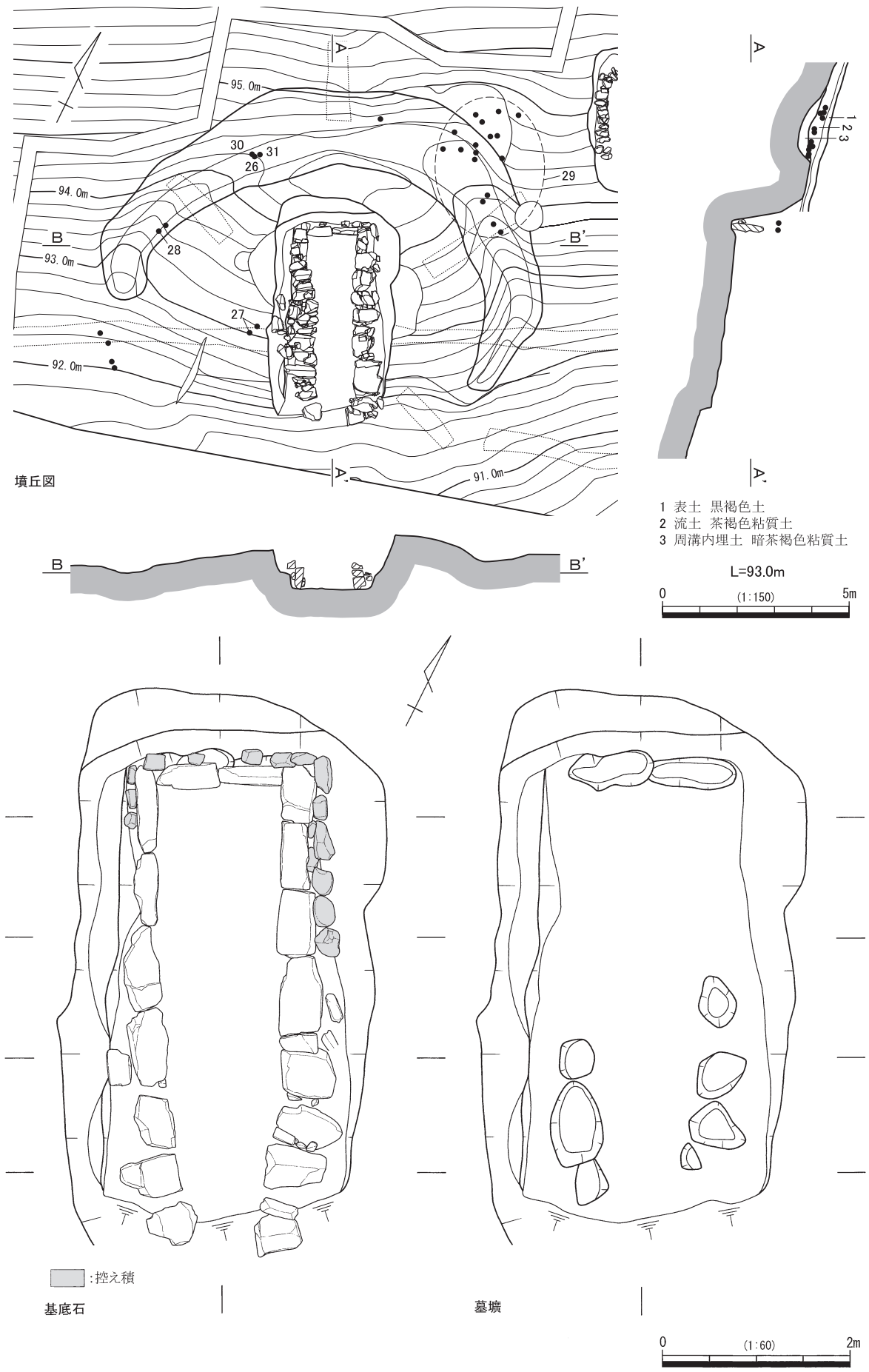
墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高94.45m、下端で92.55mを測ることから、1.9mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。玄室の奥壁と玄室下半にあたる部分については墓壙底面に基底石を据える穴を掘っていた。墓道は残っていなかった。

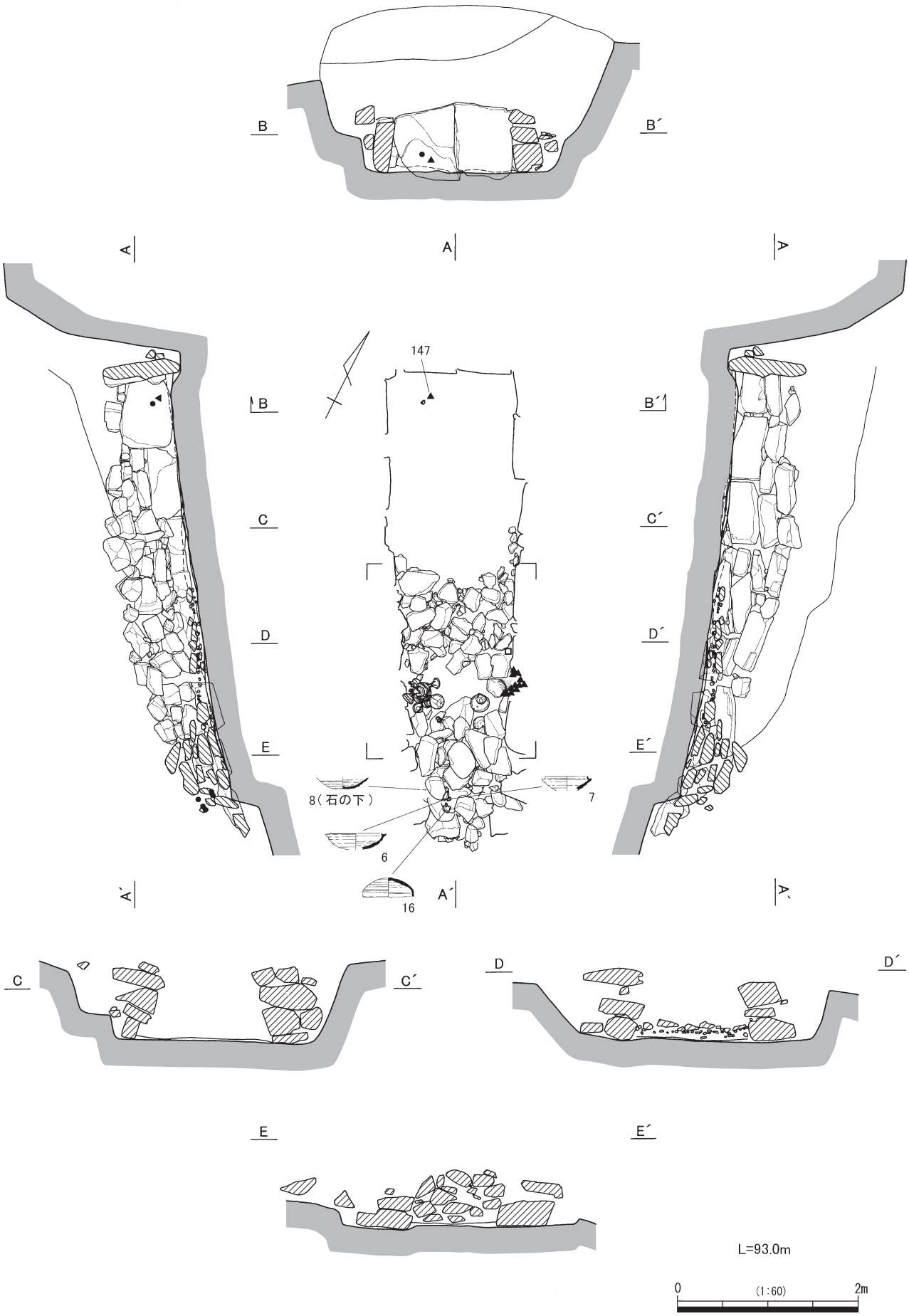
遺物の出土状態

玄室の上面床面から須恵器の坏、長頸壺、高坏、短頸坩、提瓶、瓿、平瓶、玉類、鉄製品の轡、直刀の刀装具、鉄鏃、砥石が出土した。下面床面から須恵器の坏、提瓶、鉄製品の刀子、鉄鏃、直刀の刀装具が出土した。直刀の切羽と他の刀装具は一口分であり、本来は下面に伴う副葬品と考えられる。刀装具から2口の小直刀の存在が推定されるが、撹乱からの出土で床面による分離はできなかった。

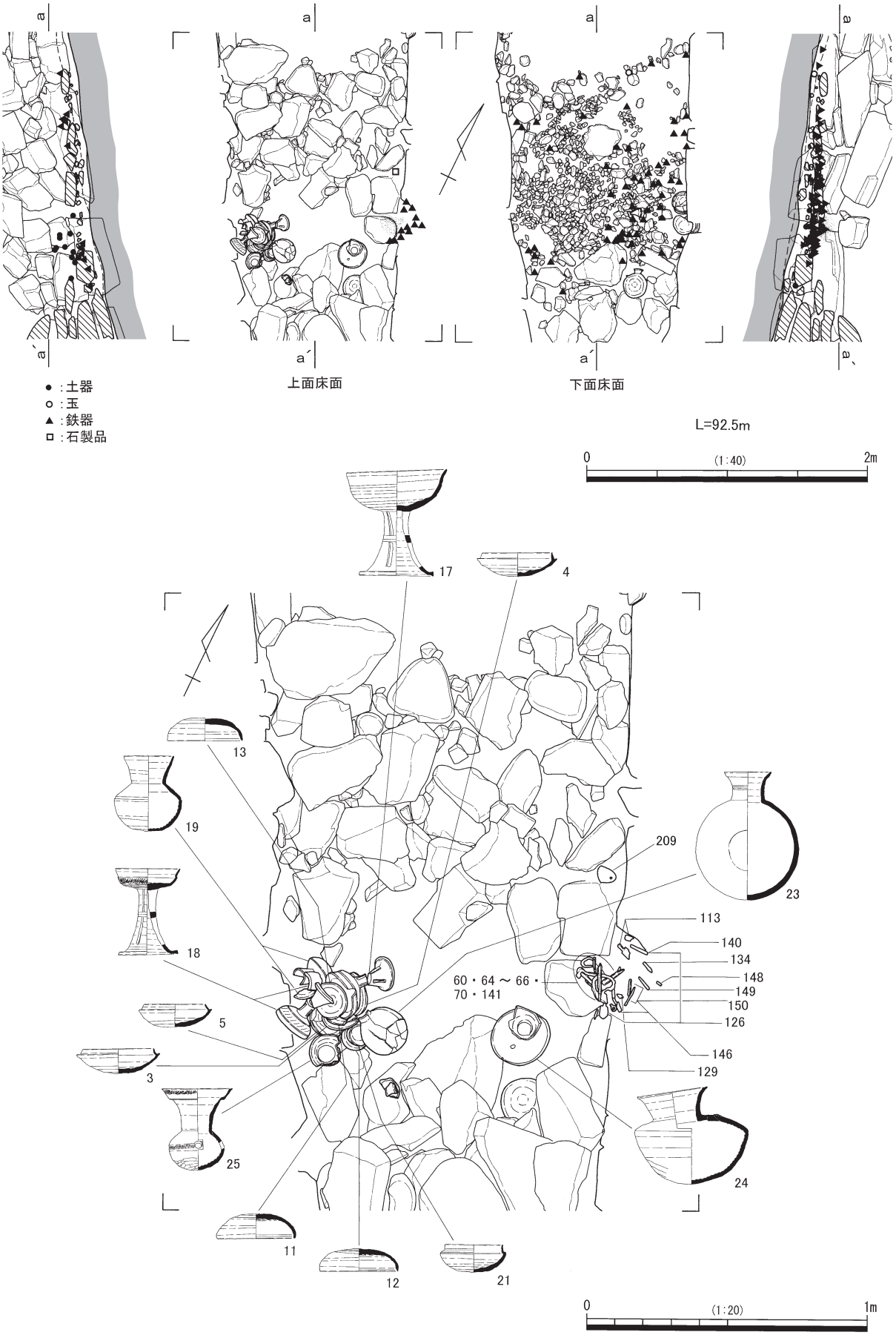
玄室内下面から管玉が、埋土からは小玉・丸玉の玉類が採集された。閉塞石付近から須恵器と鉄製品が散乱していた。この須恵器の時期は玄室床面出土須恵器より新しく、最後の追葬時期を示していると判断される。玄室内の破片とも接合でき、撹乱によって一部がかき出されたものと推定される。鉄製品



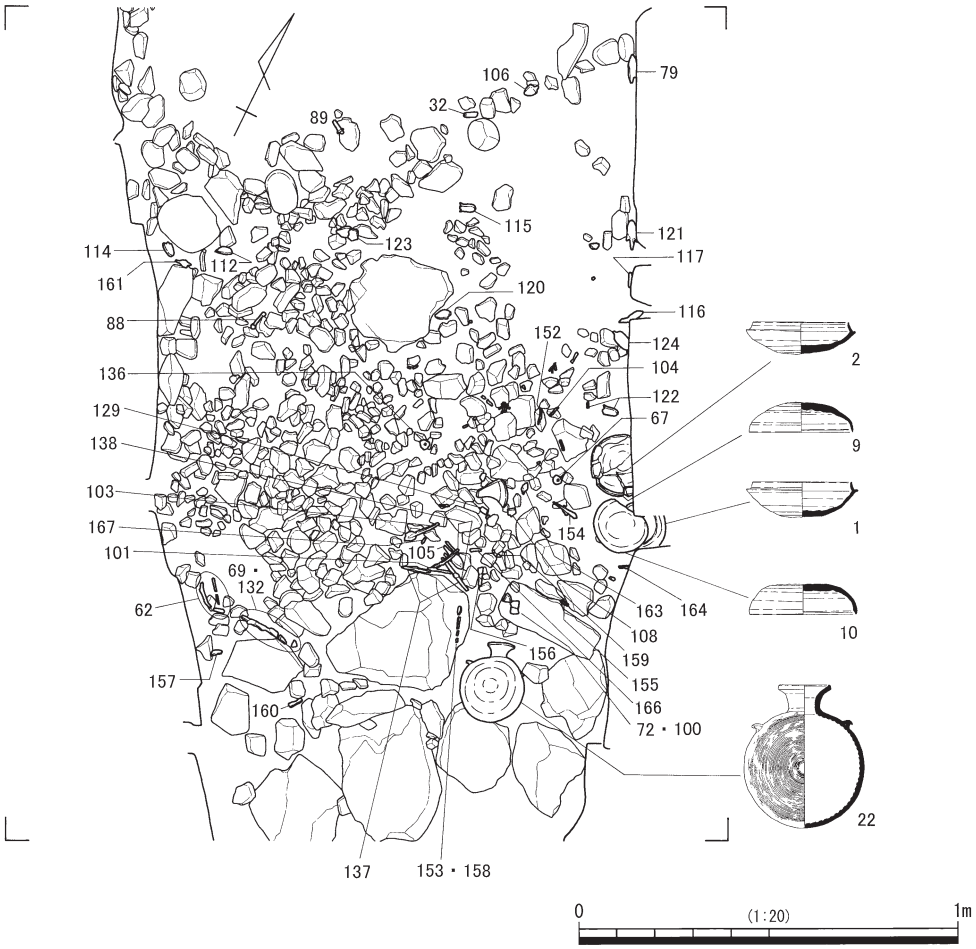
第18図　C1号墳実測図



第19図　C1号墳横穴式石室実測図



第20図　C1号墳遺物出土状況図（上面床面）



第21図　C1号墳遺物出土状況図（下面床面）

の中に釘が認められ、石室内に木棺の存在も推定される。周溝からも須恵器や灰釉陶器の碗類が出土したが、灰釉陶器は後世なんらかの理由で入り込んだ遺物であろう。

出土遺物

土器と装身具、鉄製品、石製品の砥石が出土した。

土器　須恵器が出土した。1から16は蓋受けのたちあがりをもつ坏身と蓋のセットで、奈良国立文化財研究所の分類（西弘海 1986）では、坏Ｈ類とされるグループである。古墳時代の坏Ｈ類の坏身と坏蓋は、7世紀のある時期に6世紀代の蓋と身が逆転し、新たに蓋の頂部につまみをもち、かえりをもつ坏身とのセットが生まれ、つぎの段階では、つまみをもつ蓋とかえりを失い高台を付す坏身とのセットが生まれる。

先の分類では7世紀の坏類のうち蓋頂部につまみをもち平底の身のセットは坏Ｇ類とされ、さらにつまみをもち身受けのかえりが消失した坏蓋と、高台を持つ坏身のセットは坏Ｂ類とされるので、本書の中でもそれに従うこととしたい。ただしC1号墳からは坏Ｈ類のみが認められた。出土した坏類はその特徴からつぎのいくつかに分類できる。

第１群は1・2・3・4の坏身、9・10・12の坏蓋である。1・3・4の坏身は底部のヘラ記号が共通し、胎土、色調、自然釉の特徴から、同じ窯の製品と考えられる。底部の切り離し後のヘラケズリ調整も外周部まで及んでいる。9・10・12の坏蓋は口端部内面に沈線をめぐらすか、斜めに収めている。これらの特徴から第１群は遠江須恵器編年Ⅲ期中葉直前、もしくはⅢ期前葉の新しい段階で、田辺昭三氏による陶邑編年のMT85窯期段階に併行する時期と判断される。床面上・下面から出土した。25の瑳も床面上・

下面から出土した破片が接合したものであるが、太い頸部を持つ古いタイプで、この時期に伴うと判断される。

第２群は５の坏身、11・13の坏蓋である。床面上面から出土した。その特徴から第２群は遠江須恵器編年Ⅲ期後葉と考えられる。高坏17・18、壺19、坩21、堤瓶23とともに西側壁にそって置かれていた。これら坏以外の器類も遠江須恵器編年Ⅲ期中から後葉と考えられる。なおこれらの土器副葬の下位には前埋葬に伴う副葬土器もあったらしく、3・4・12の坏身・坏蓋も調査時には床面上面として取り上げられている。あるいは追葬の際、片づけ行為によって前埋葬に伴う副葬土器も同じ場所に置かれたとも考えられる。22の提瓶も閉塞石下から出土した。追葬の際、閉塞石を積みなおしていることから、どの床面に伴うかは不明であるが、TK43型式を写す特徴から遠江須恵器編年Ⅲ期中葉と考えられる。27は墳丘上から出土した。

第３群は６・７・８の坏身、14・15・16の坏蓋である。閉塞石とその周辺、石室内から出土した。その特徴から第３群は遠江須恵器編年Ⅳ期前半と考えられる。24の平瓶は広口で胴部上位に屈曲部を持つ形態で、湖西市殿田４地点３号窯前庭部埋土に類例がある（湖西市教育委員会 1992）。３号窯の遺物は遠江須恵器編年Ⅴ期前葉であり、この特徴のある平瓶は最後の追葬時期を示していると判断される。玄室内の破片とも接合でき、撹乱された際に一部がかき出されたものと推定される。周溝から出土した須恵器26の坏身は遠江須恵器編年Ⅲ期前葉（TK10号窯併行期）と考えられる。確認調査においても雲岩寺丘陵から古い須恵器がわずかながら出土している。なぜこうした須恵器が出土したのかは、不明である。石室内からはこの時期の須恵器は認められないので、直接、古墳の築造時期を示す資料とは判断できない。周溝から出土した29は森山窯産の甕である。遠江須恵器編年Ⅳ期前半に併行すると判断される。

周溝から出土した30・31の灰釉陶器は浜北窯産で10世紀後半から11世紀前半の時期である。後世なんらかの理由で入り込んだ遺物であろう。

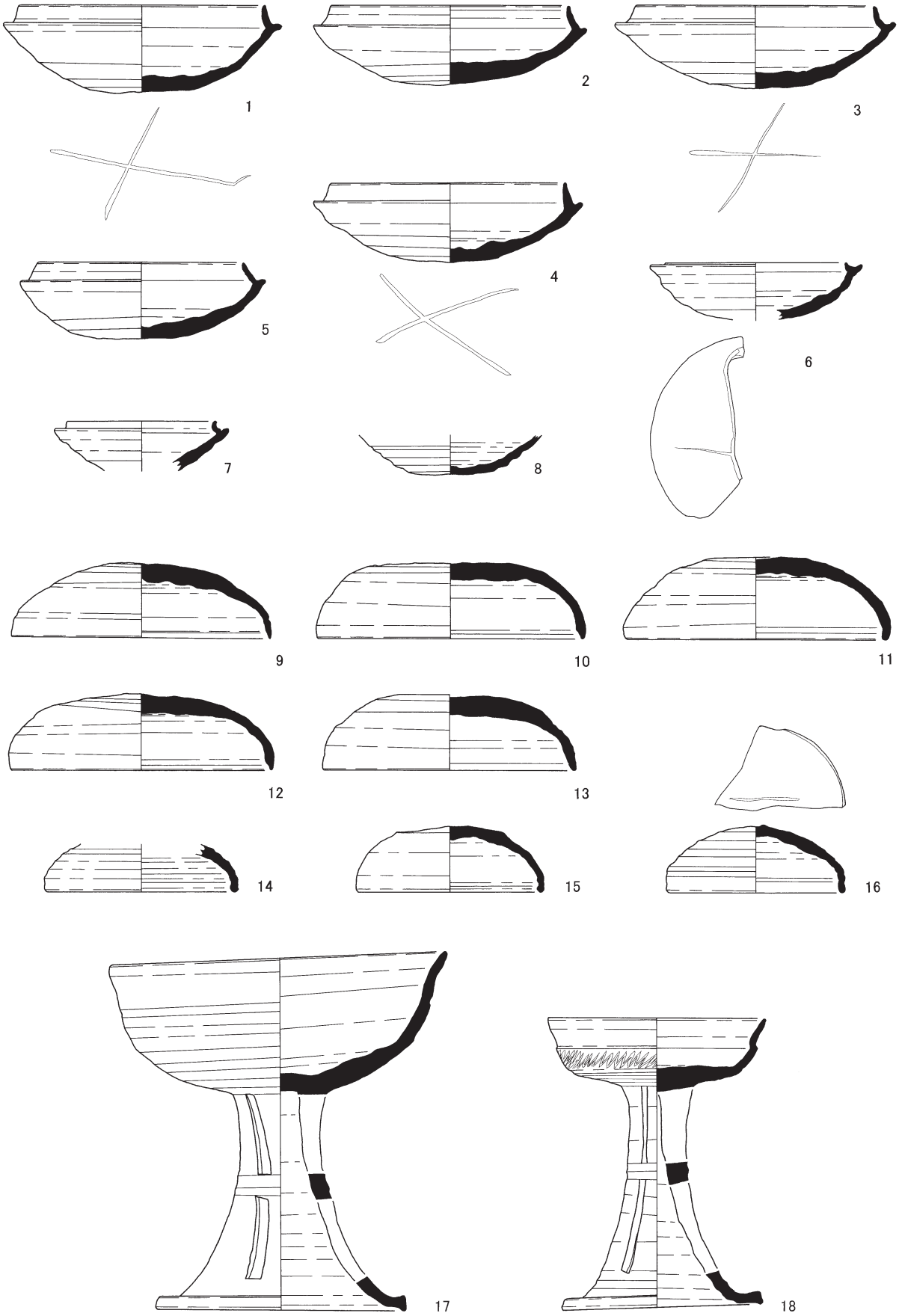
このようにみるとC1号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅲ期前葉から中葉、Ⅲ期後葉、Ⅳ期前半、Ⅴ期前葉の４ないし５時期にわたっていると判断され、須恵器編年からC1号墳の築造時期をⅢ期前葉から中葉のMT85窯期段階に併行する時期に、さらにⅢ期中～後葉とⅣ期前半、Ⅴ期前葉に追葬が行われ、その最後をⅤ期前葉と考えておきたい。

装身具　32～34は碧玉製の管玉である。35～59は大きさから35～43が丸玉、44～59が小玉とするが、いずれもガラス製である。

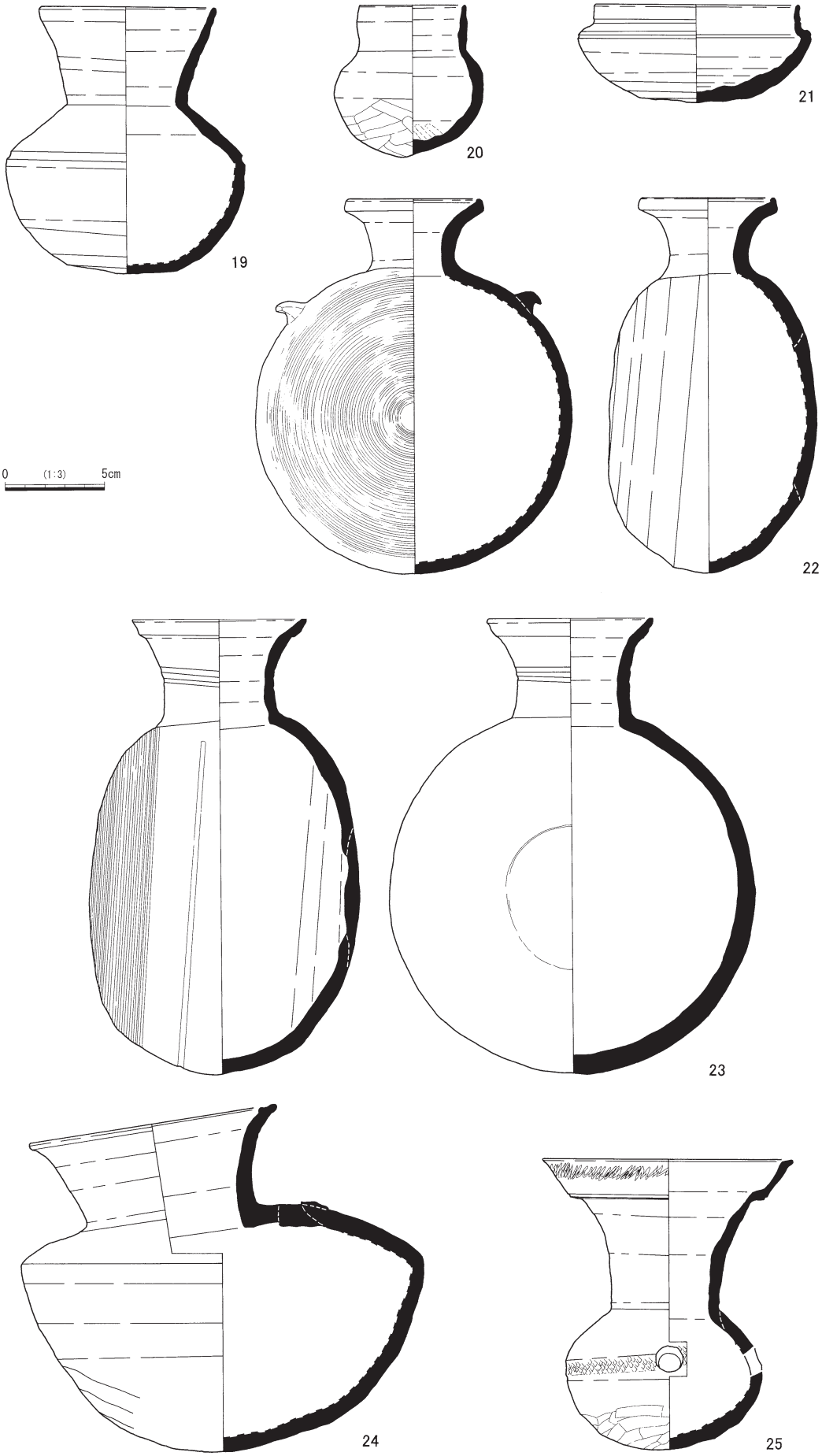
鉄製品１（馬具）　60から69は馬具および馬具の一部と考えた金属製品である。60は鉄製轡でﾊﾐ・鏡板・引手からなる２連式である。この鏡板は素環の長方形の立聞をもつ大型矩形立聞式に分類されている。このタイプの轡は古墳時代後期前半に現れ、古墳時代終末期まで続く普遍的なタイプで、鉄製轡の主流となる（大谷宏治 2006）。61は別の鏡板で同じく大型矩形立聞式に分類される。すると２組の轡であり、C1号墳には２組の轡が副葬されていたこととなろう。62・63はｶｺ、64・65・66は円環状金具で引手壺のように別の金具を受ける機能が考えられる。67は薄い丸板に金銅装の鋲で止めた金具で、何らかの馬具の飾り金具の一部と考えた。68・69は長方形とわずかに角を丸くした板に鋲が打たれている。立聞に通す鈎金具の一部かもしれない。これも２種類あり、轡が２組という推定を補強する。

鉄製品２（武器ほか）　70からは74は刀装具である。70は大きさから直刀の切羽、71は鞘の責金具、72～74は鎺ﾊﾊﾞｷで３口分あるが、大きさから直刀72と小直刀73・74のものであろう。

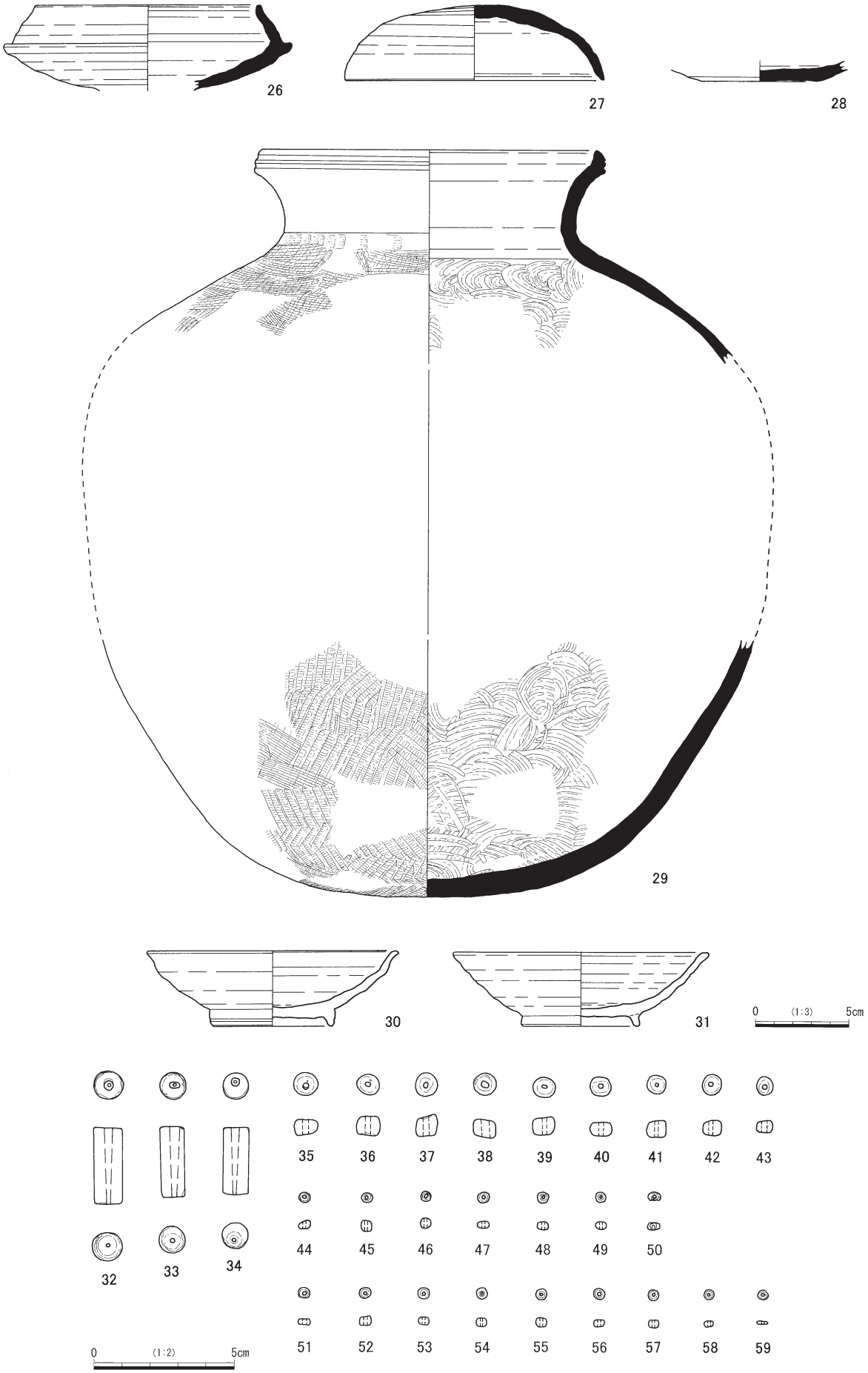
75～87は刀子である。75・76は柄に鹿角による装を施している。77・82・83・84・85・86は木質部が残っていたので、木装の柄であったと推定される。78は糸（針金も含む）巻、または樹皮巻の上に針金を巻いた柄と推定される。いずれも鞘装は不明である。88～93は飾り弓の金具で、両頭の弓金具である。94～203は鉄鏃もしくはその一部と判断された鉄製品である。94は平根式と尖根式の中間形態で、



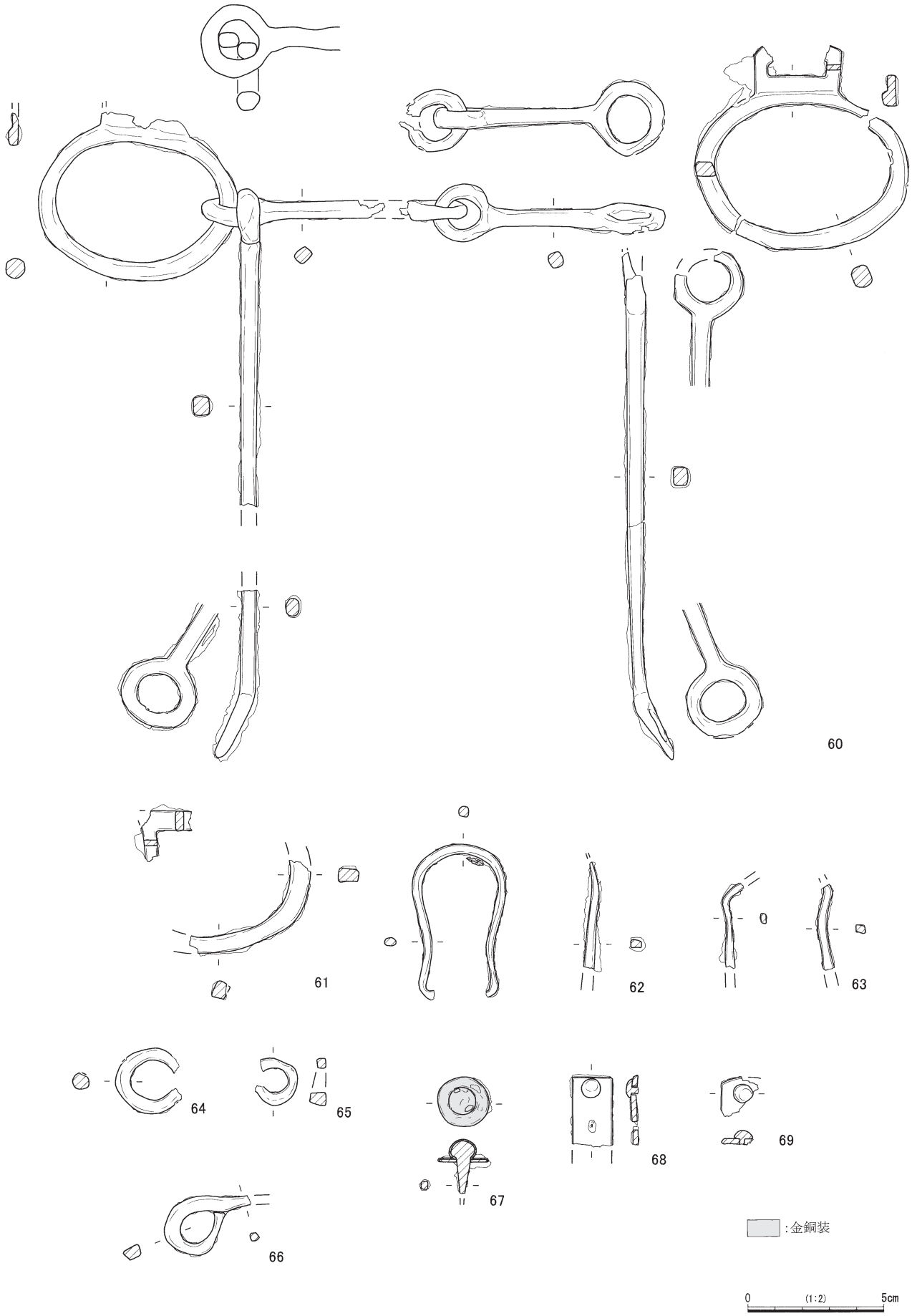
第22図　C1号墳出土遺物実測図1



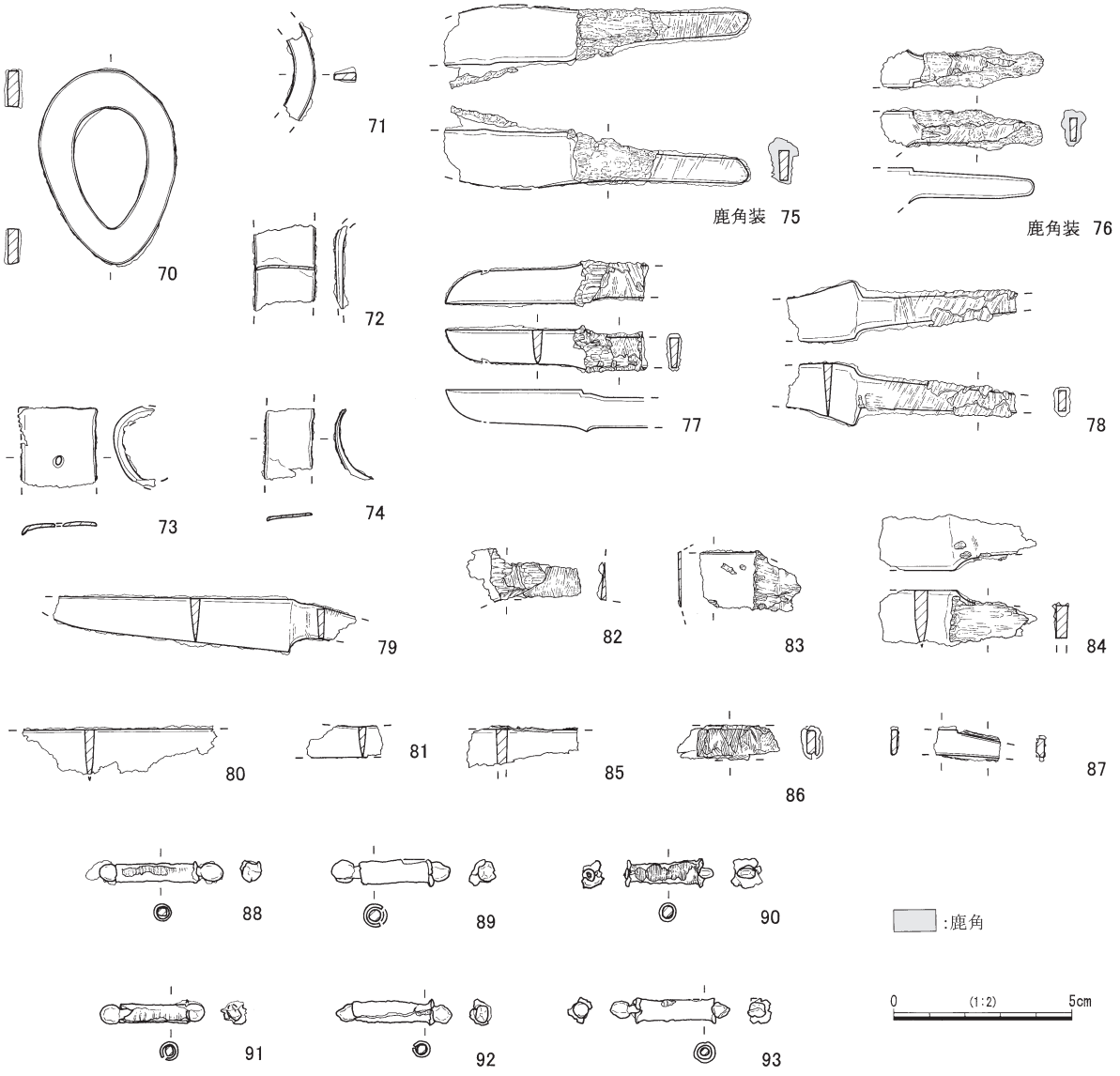
第23図　C1号墳出土遺物実測図2



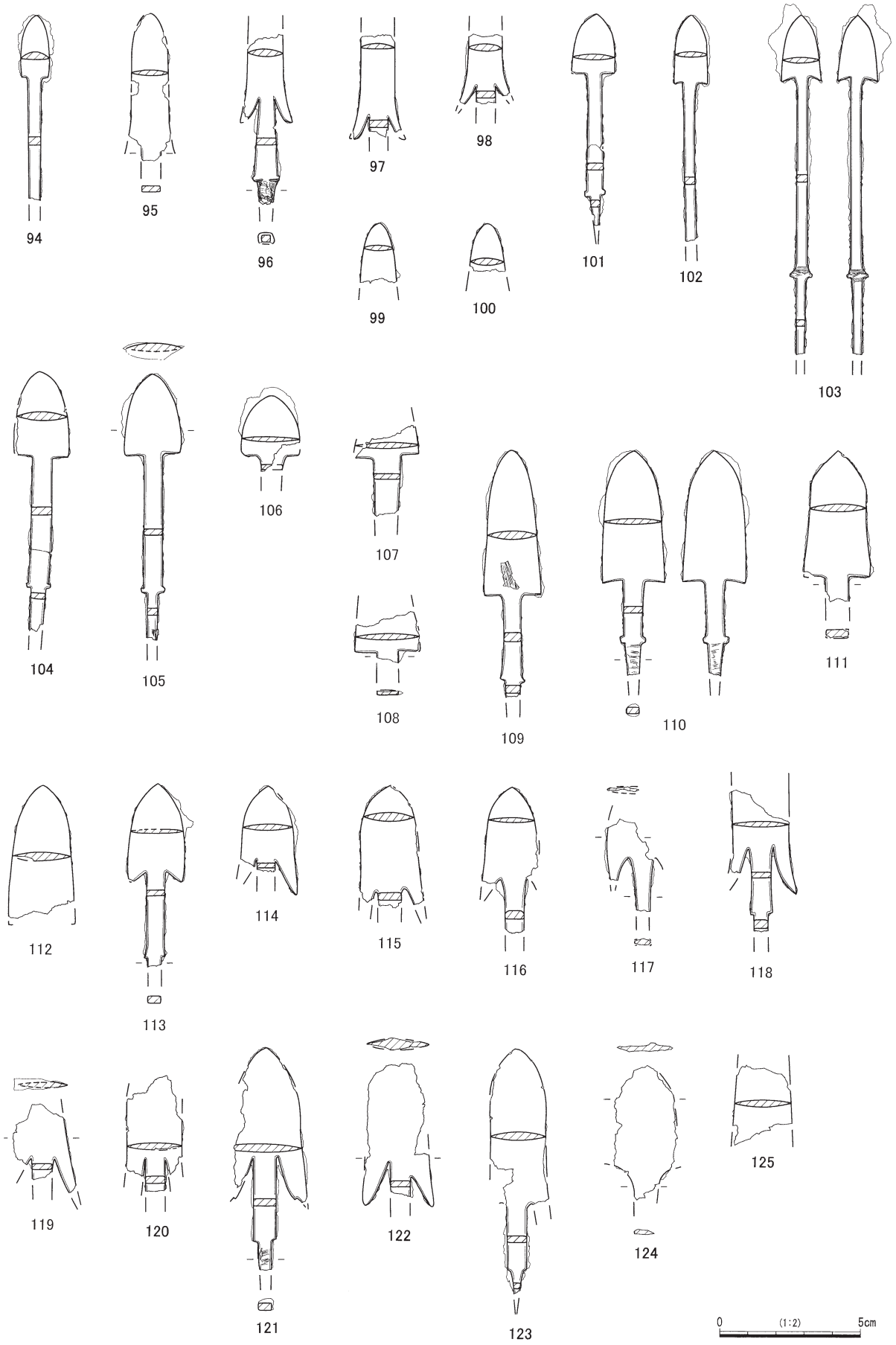
第24図　C1号墳出土遺物実測図3



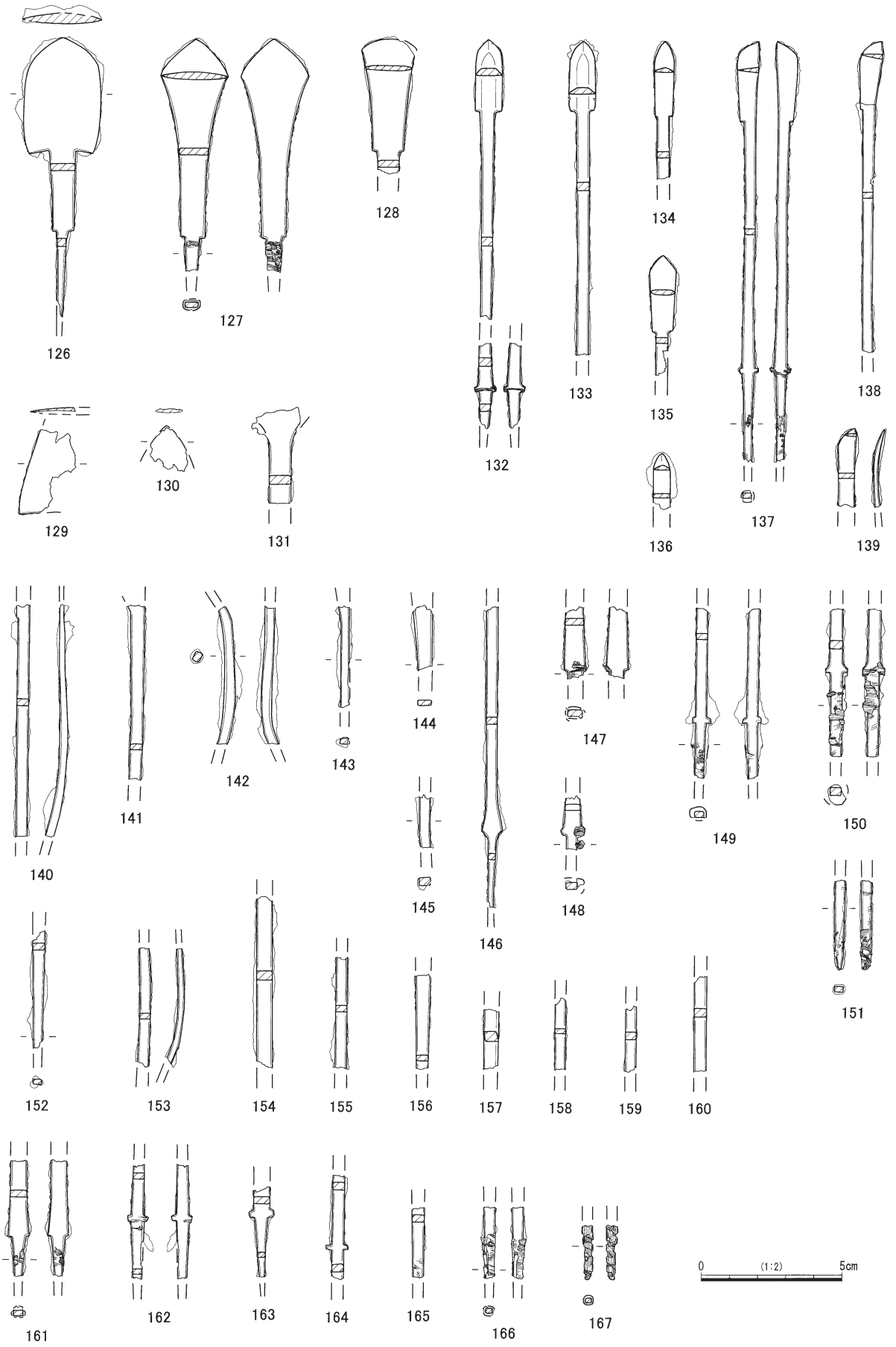
第25図　C1号墳出土遺物実測図4



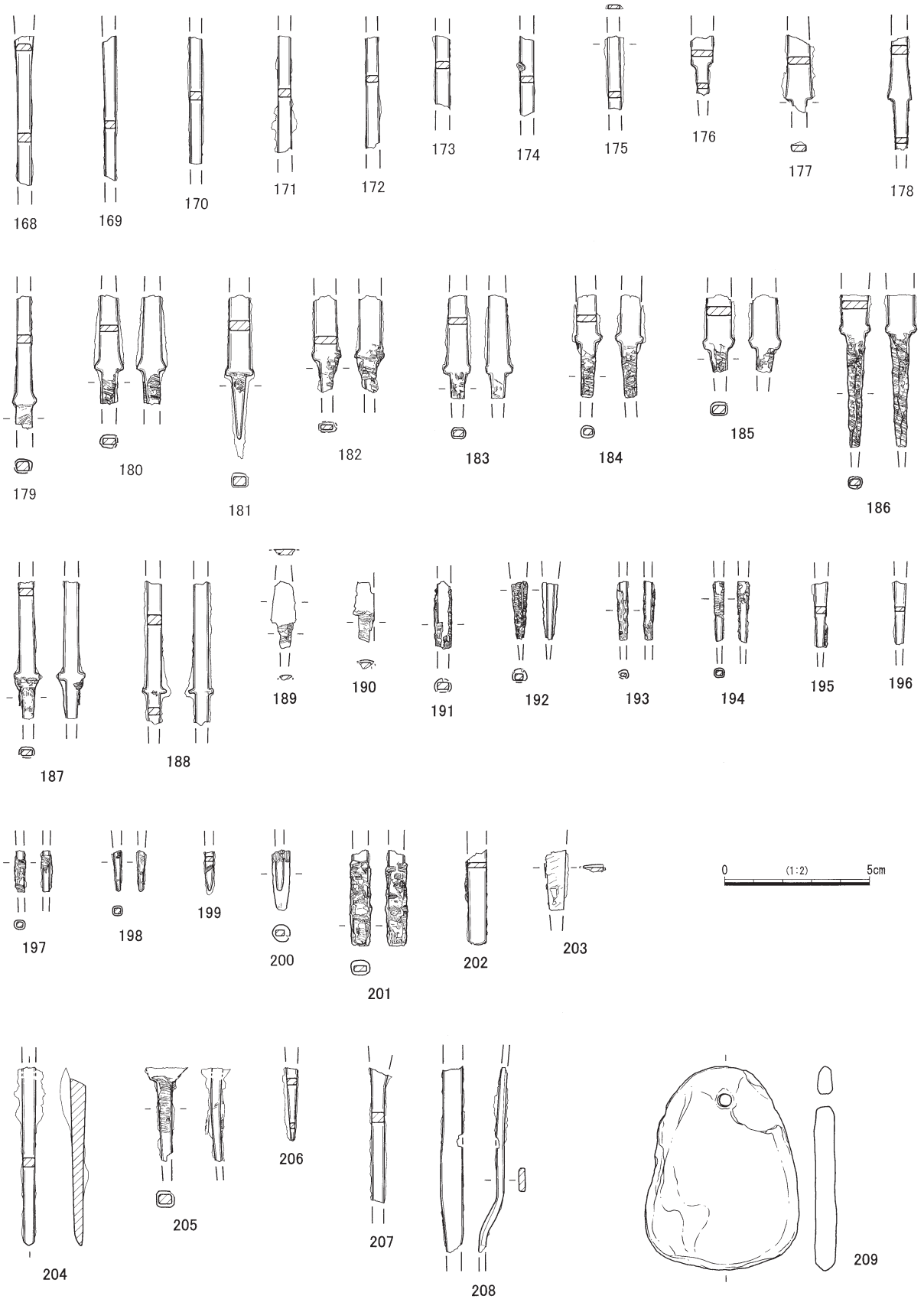
第26図　C1号墳出土遺物実測図5



第27図　C1号墳出土遺物実測図6



第28図　C1号墳出土遺物実測図7



第29図　C1号墳出土遺物実測図8

片丸造の柳葉式鉄鏃である。95～98は腸抉をもつ柳葉式鉄鏃である。99・100は柳葉式であるほか不明である。

101～103は鏃身が2.5cm以下の三角形式の鉄鏃である。腸抉がないか、あっても抉りが浅い。104～108はふくらのある三角形式鉄鏃である。109～111は大型の長三角形式鉄鏃である。112～123は腸抉をもつ大型の長三角形式鉄鏃である。124・125は大型の長三角形式であるほか不明である。126は五角形もしくはふくらの大きい三角形式鉄鏃である。121は腸抉の先端が二段に抉れている。127・128は斧箭式（細分すれば圭頭式、方頭式）鉄鏃である。129～131は鏃身の大きい平根式鉄族の一部である。C1号墳の平根鏃のうち、鏃身の大きい鉄鏃は実用品ではなく、儀仗用もしくは葬送祭祀用に用意されたと推定される。

132～139は尖根式鏃である。132・133は片切刃造柳葉式鉄鏃である。134は片丸造柳葉式鉄鏃である。135は両丸造柳葉式鉄鏃である。136は鑿箭式、137・138は片刃式、139は反刃式鉄鏃である。なお139は先端を曲げられている。

140～151は床面上面から出土した頸部で、尖根式が多い。152～167は床面下面から出土した茎部である。168～203は石室内の攪乱や排土から出土した茎部である。

204～207は釘であり、箱形木棺の使用が推定される。208は用途不明鉄製品である。

鉄鏃は平根式と尖根式に大別し、さらにその中を形態別に細分し、床面ごとに在り方を検討したが、いずれの形式も総体として下面からの出土が多い。したがって多くの鉄鏃が築造時、もしくは古い時期の追葬に伴う副葬品であるといえよう。しかしながら同じ鉄鏃形式であっても石室内の別の場所から出土したものもあり、追葬の際の移動や攪乱の影響のため、ある時期の埋葬にある形式が副葬されていたとは言い難く、その把握も困難であった。

石製品　209は、結晶片岩製の一孔の穿った携帯用砥石である。砥ぎ痕は顕著で、孔も摩耗しているところから実用品と考えられる。

引用・参考文献

西弘海　1986『土器様式の成立とその背景』
湖西市教育委員会　1992『湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書』
大谷宏治　2006「馬具の分布から見た東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾太刀』

⑵　雲岩寺C2号墳

調査前の状況

C2号墳は調査区中央からやや西に位置し、標高91.6～89.0mの等高線付近に築造されている。

C2号墳は調査前には雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C2号墳はC1号墳やC3号墳とともに、調査範囲の古墳の中では、西側下段域に築造されたグループに属する。C2号墳は斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅1.5m、深さ0.8mを測る。墳丘は東西7.5m、南北6.0m以上と考えられる。墳丘南側で標高89.0m、墳丘北側で標高91.6mを測り、現状での古墳の高さは2.6mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。石室の平面形は立柱石によって区別された擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は床面を除いて良好で、側壁と羨道部が比較的旧状をとどめていた。

天井石　検出の際、天井石は奥壁に架設されていたが、それ以外は残っていなかった。

玄室　墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘り１枚の板石を設置し、その上に１枚の石を積んで奥壁としている。両側壁の基底石埋置については穴を墓壙底面に掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに玄門の立柱石を据えて長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は撹乱を受け、部分的に残っていた。

羨道・閉塞部　羨道の側壁は玄室より低く積んでいた。閉塞石は3、4段が残っていた。

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高91.15m、下端で89.4mを測ることから、1.75mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。玄室の奥壁と側壁基底石にあたる部分については墓壙底面に据える穴を掘っていた。羨道には据え付けの穴は認められなかった。墓道は残っていなかった。

遺物の出土状態

玄室床面から土師器坏、瓹、平瓶など須恵器（盗難にあい紛失）が出土した。閉塞石上と羨道から一部の須恵器と鉄製品が散乱していた。玄室内の破片とも接合でき、一部がかき出されたものと推定される。

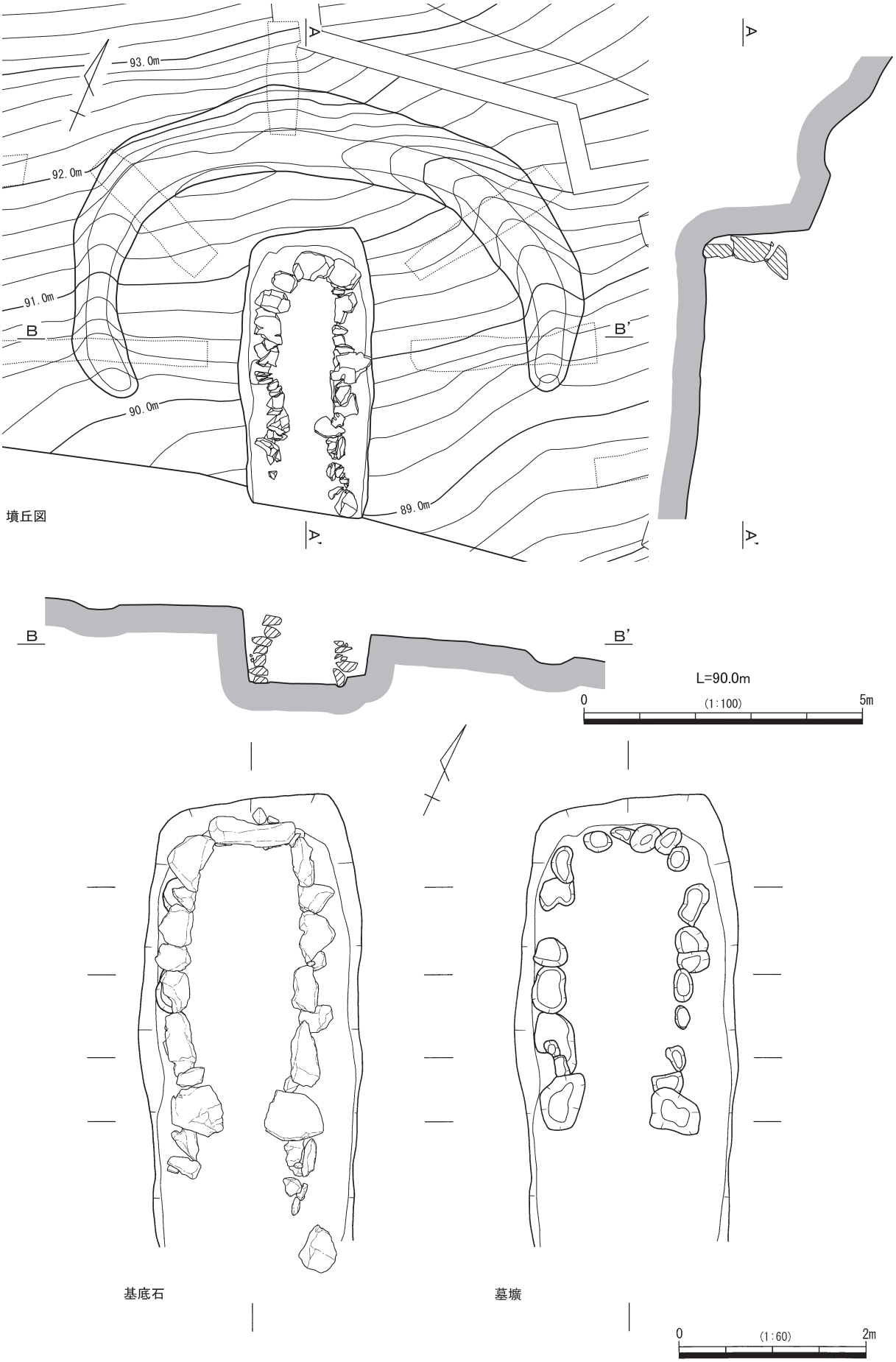
出土遺物

土器と装身具、鉄製品が出土した。

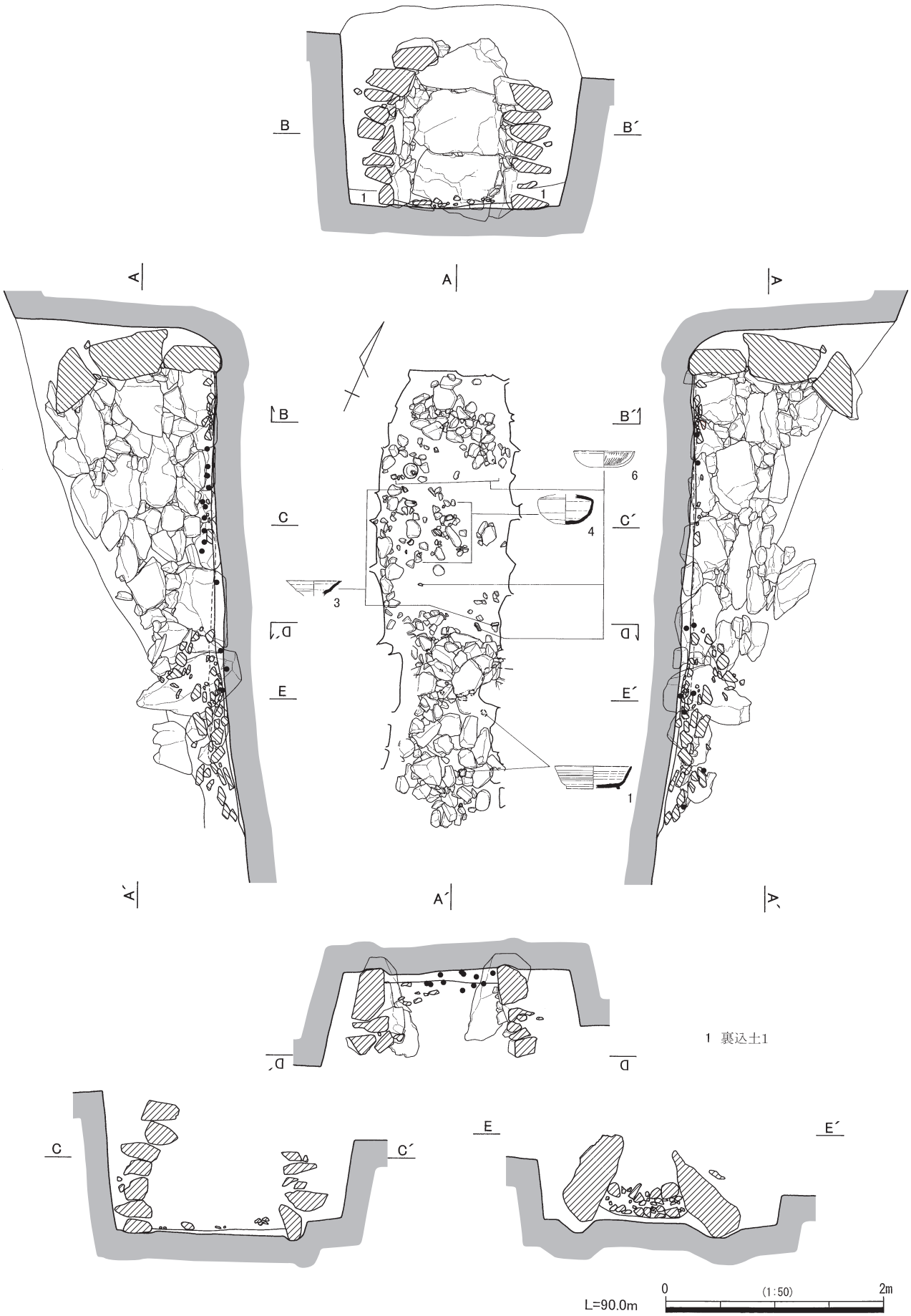
土器　1・2は高台を持つ蓋付坏身で、遠江須恵器編年Ⅴ期前葉と考えられる。3の瓹はⅣ期後半と考えられる。5の平瓶は破片のため明確にしえないが、遠江須恵器編年Ⅳ期前半から後半に位置づけたい。これら須恵器からC2号墳の築造時期は遠江須恵器編年Ⅳ期後半に、さらに遠江須恵器編年Ⅴ期前葉に追葬が行われたと考えてよいだろう。

装身具　7はコハク製のなつめ玉である。

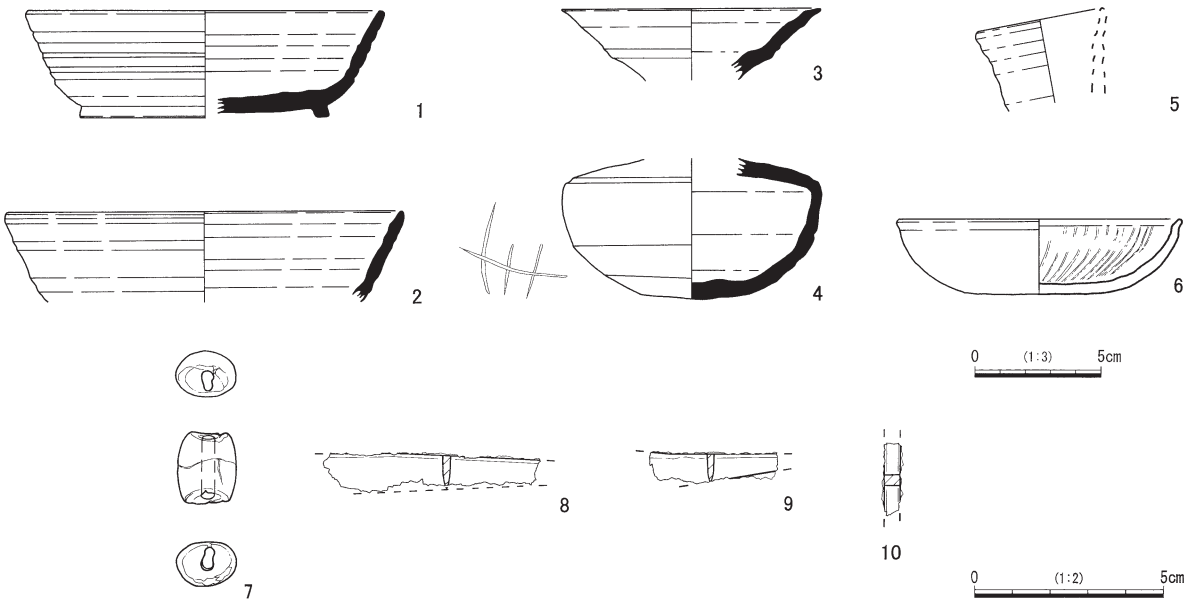
鉄製品　8・9は刀子片、10は鉄鏃茎部で、鏃身と茎部先端を欠いている。



第30図　C2号墳実測図



第31図　C2号墳横穴式石室実測図



第32図　C2号墳出土遺物実測図

⑶　雲岩寺C3号墳

調査前の状況

C3号墳は調査区中央からやや西に位置し、標高89.8～87.0mの等高線付近に築造されている。調査前には雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C3号墳はC1号墳やC2号墳とともに、調査範囲の古墳の中では、西側下段域に築造されたグループに属する。C3号墳は斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。古墳周辺には石灰岩の露頭がみられ、墳丘の範囲にも及んでいた。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.8m、深さ0.3mを測る。墳丘は東西7.4m、南北8.0m以上と考えられる。墳丘南側で標高87.0m、墳丘北側で標高89.8mを測り、現状での古墳の高さは2.8mである。ただし南側は地滑りによって下がっているため、元の墳丘をとどめていないので、高さは現在の数値より低いと推定される。

埋葬施設

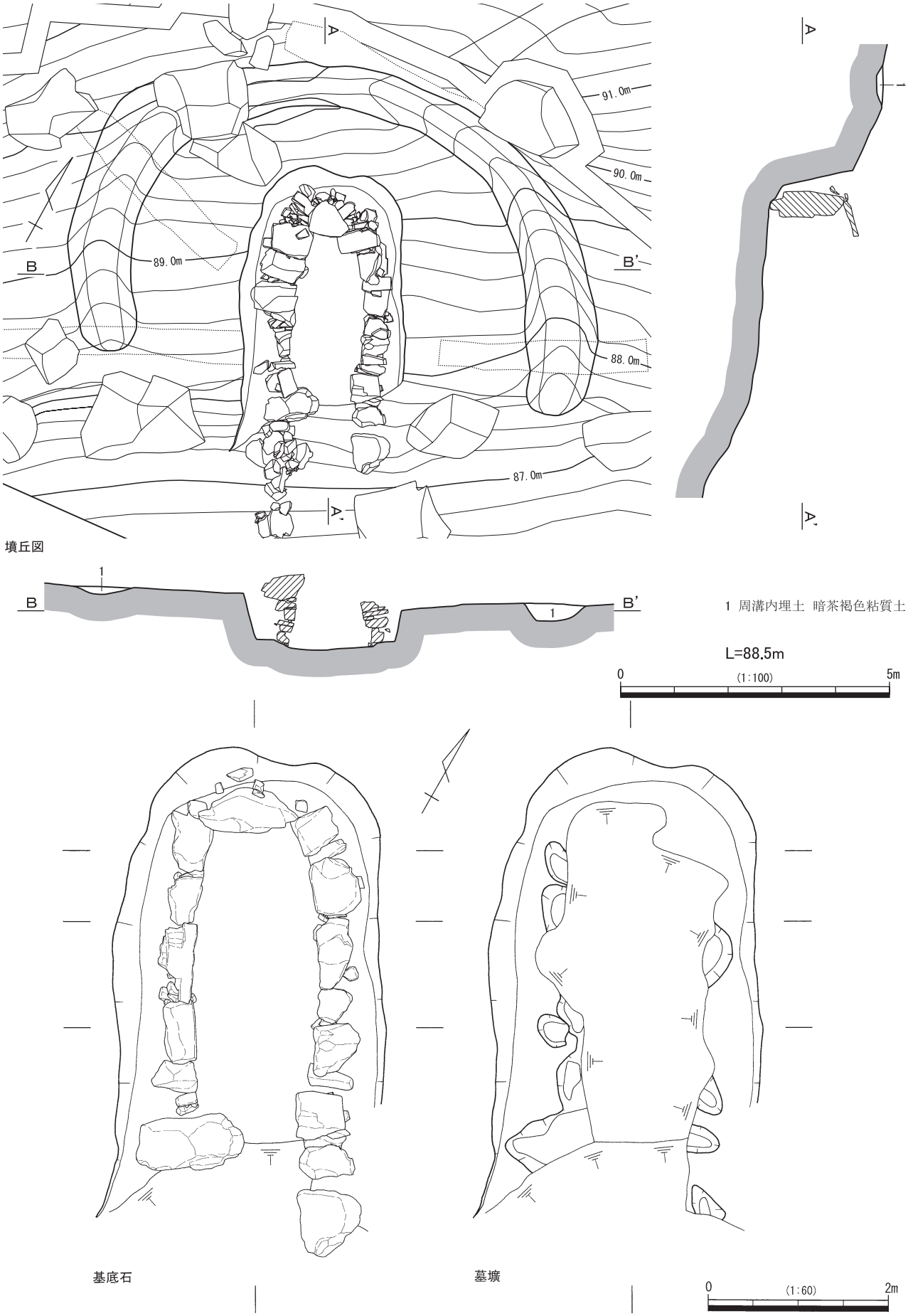
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。石室の平面形は立柱石によって区別された擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は不良で、床面、側壁上部と羨道部が、旧状をとどめていなかった。とくに地滑りの影響で、玄門石や羨道の側壁がずれて移動していた。

天井石　検出の際、天井石は奥壁に架設されていたが、それ以外は残っていなかった。

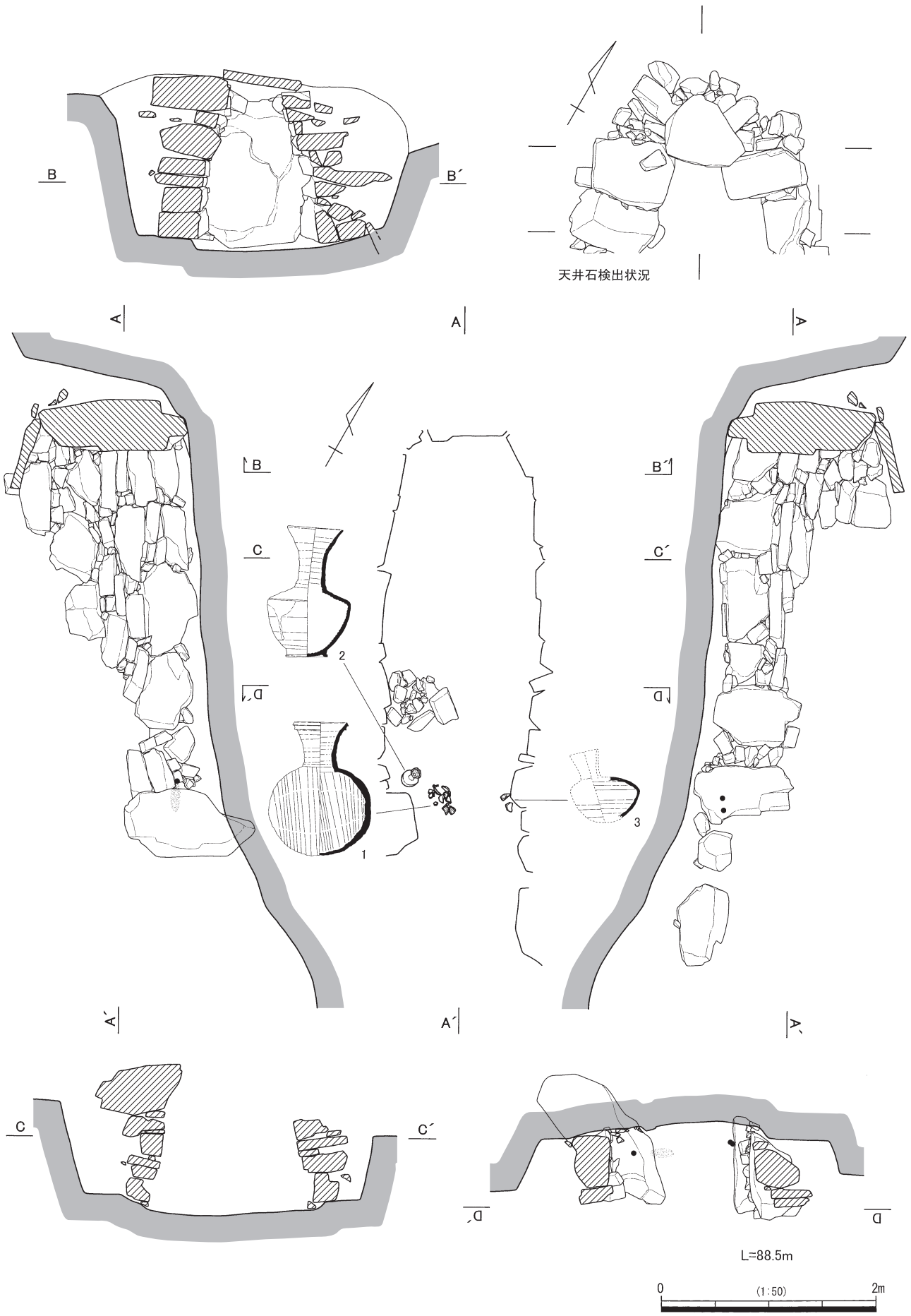
玄室　墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘り１枚の鏡石を設置し奥壁としている。撹乱が著しく明確ではないが、墓壙底面に残っていた痕跡から、両側壁の基底石については穴を墓壙底面に掘り、石を埋置して据え付けていると推定される。

玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに玄門石を据えて長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は撹乱を受け、ほとんど残っていなかった。

羨道・閉塞部　羨道の側壁は地滑りの影響で移動していた。閉塞石は残っていなかった。地滑りで落下したと考えられる。



第33図　C3号墳実測図



第34図　C3号墳横穴式石室実測図

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高89.5m、下端で88.0mを測ることから、1.5mを掘り下げていた。平面形はやや崩れた長方形を呈している。墓壙底面には奥壁と側壁基底石を据える穴を掘っていたと推定される。墓道は残っていなかった。

遺物の出土状態

玄門付近からフラスコ形瓶、長頸壺、平瓶など須恵器が出土した。一部の須恵器は撹乱を受けた際、破損し移動したと推定され、散乱していた。

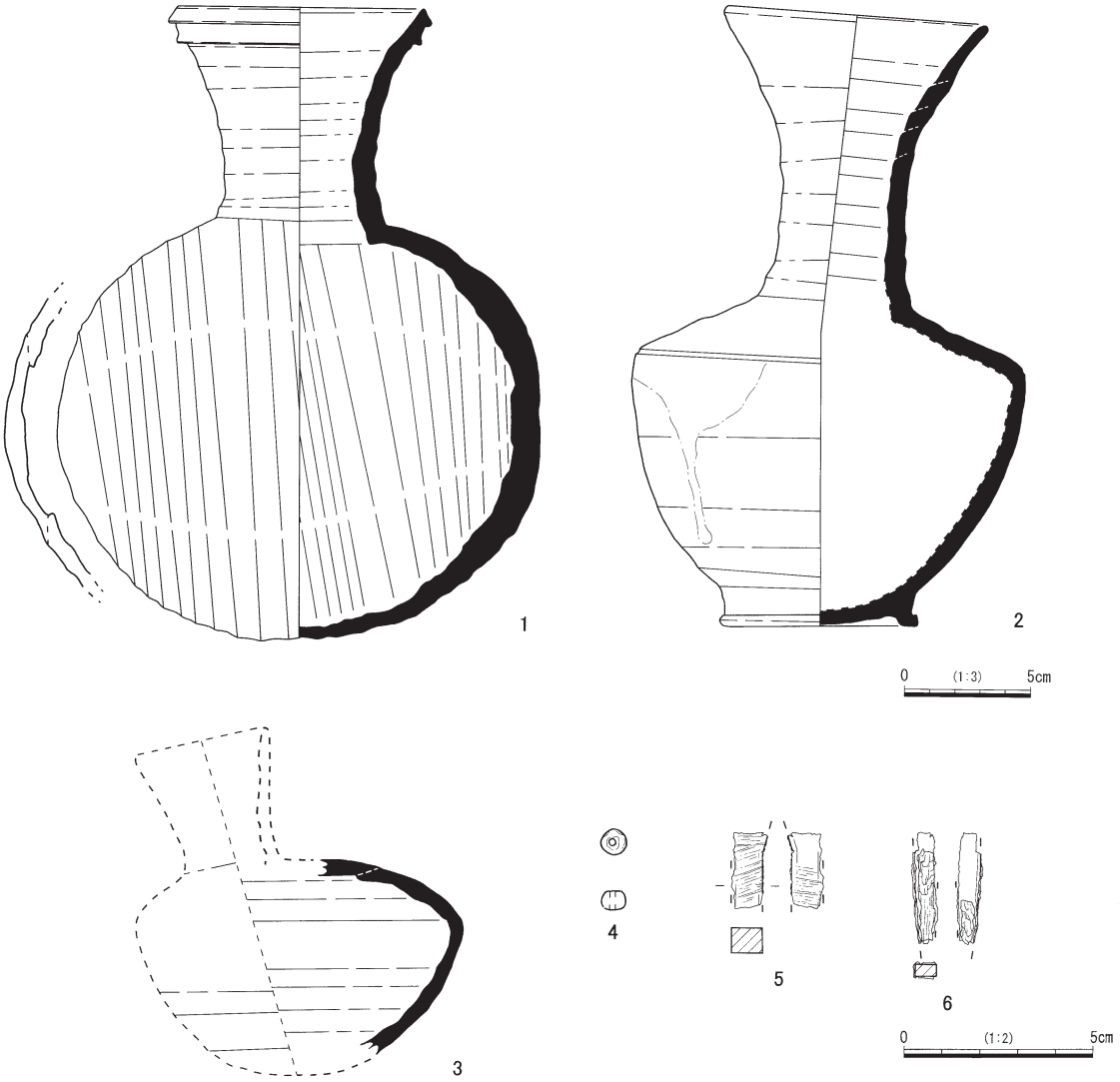
出土遺物

土器と装身具、鉄製品が出土した。

土器　長頸壺２は低い高台を持ち、遠江須恵器編年Ⅳ期後半と考えられる。フラスコ形瓶１についても遠江須恵器編年Ⅳ期後半と考えられる。これら須恵器からC3号墳の築造時期は、遠江須恵器編年Ⅳ期後半と考えてよいだろう。平瓶３は破片で明確にしえないが、遠江須恵器編年Ⅳ期前半から後半に位置づけたい。追葬の有無は土器からは不明である。

装身具　４は珪質岩製の小玉である。

鉄製品　５は断面方形を呈す、釘かとも考えられるが、断定はできず、不明鉄製品としておく。６は鉄鏃茎部で、鏃身と茎部先端を欠いている。



第35図　C3号墳出土遺物実測図

⑷　雲岩寺C4号墳

調査前の状況

C4号墳は調査区のほぼ中央に位置し、標高90.0～87.8mの等高線付近に築造されている。

C4号墳は調査前には雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C4号墳はC5号墳やC16号墳とともに、調査範囲の古墳の中では、中央上段域に築造されたグループに属する。これら3基の古墳はその位置からすると、何らかの親縁関係を想定できる。C4号墳は斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.9m、深さ0.4mを測る。墳丘は東西4.6m、南北5.0m以上と考えられる。墳丘南側で標高87.8m、墳丘北側で標高90.0mを測り、現状での古墳の高さは2.2mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。玄室の前側が失われ、石室の平面形は明確にしえなかった。石室の保存状態は側壁の下部が残っていた。

天井石　検出の際、天井石は残っていなかった。

玄室　墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘り1枚の鏡石を設置し、奥壁としている。両側壁の基底石埋置については穴を墓壙底面に掘り据え付けているが、奥壁に近い部分では据え付け穴はみられない。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は撹乱を受け、部分的にしか残っていなかった。礫床の礫は長辺0.1～0.2mの大きさであった。

前庭・閉塞部　前庭と閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高90.05m、下端で87.93mを測ることから、2.12mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁と側壁基底石を据える穴を掘っていた。墓道は残っていなかった。

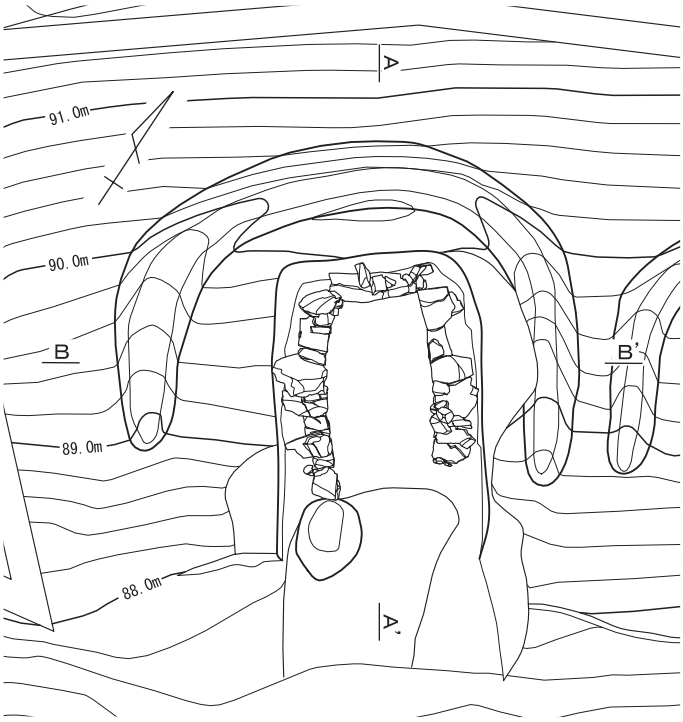
遺物の出土状態

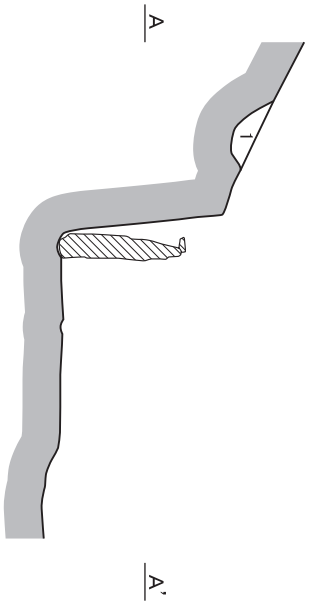
石室西側壁の前側から坏、短脚坏、大形平瓶など須恵器が出土した。大形平瓶は破片となっていたが、石室外の破片とも接合し、撹乱の際、玄室に置かれていたものが破壊され、排土とともにかき出されたものと推定された。石室が破壊された撹乱穴からは、須恵器片が散乱していた。周溝からは、遠江須恵器編年Ⅴ期前葉の坏蓋片が出土した。この須恵器は石室出土土器とは時期が異なり後出する。

出土遺物

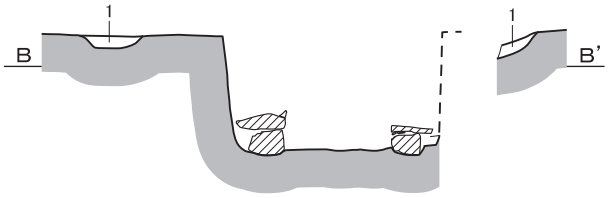
土器と鉄製品の刀子が出土した。

土器　坏身1と2～4の坏蓋は坏Ｈ類で、遠江須恵器編年Ⅳ期前半に比定できる。5・6は坏Ｂ類の坏蓋で、いずれも遠江須恵器編年Ⅴ期前葉に比定できる。これらの土器は石室外の周溝から出土したものであり、古墳への追葬時期を示すかは判断できなかった。7は高坏、8から10は低い脚部をもつと推定され、あえていえば低脚坏とでも呼称できよう。出土状態から遠江須恵器編年Ⅳ期前半の坏ともに副葬されたと考えられ、同じ時期と考えておきたい。広口壺11は遠江須恵器編年Ⅳ期前半と考えられる。平瓶12・大形平瓶13と瓶14は遠江須恵器編年Ⅳ期前半から後半に位置づけたい。15・16の丹塗りの土師器は、石室前面の撹乱から出土した。これらの土師器は、丹塗りの坏類が一定程度出現する遠江須恵器編年Ⅳ期後半からⅤ期前葉に併行する時期に位置づけたい。出土した土器からすれば、C4号墳は遠江須恵





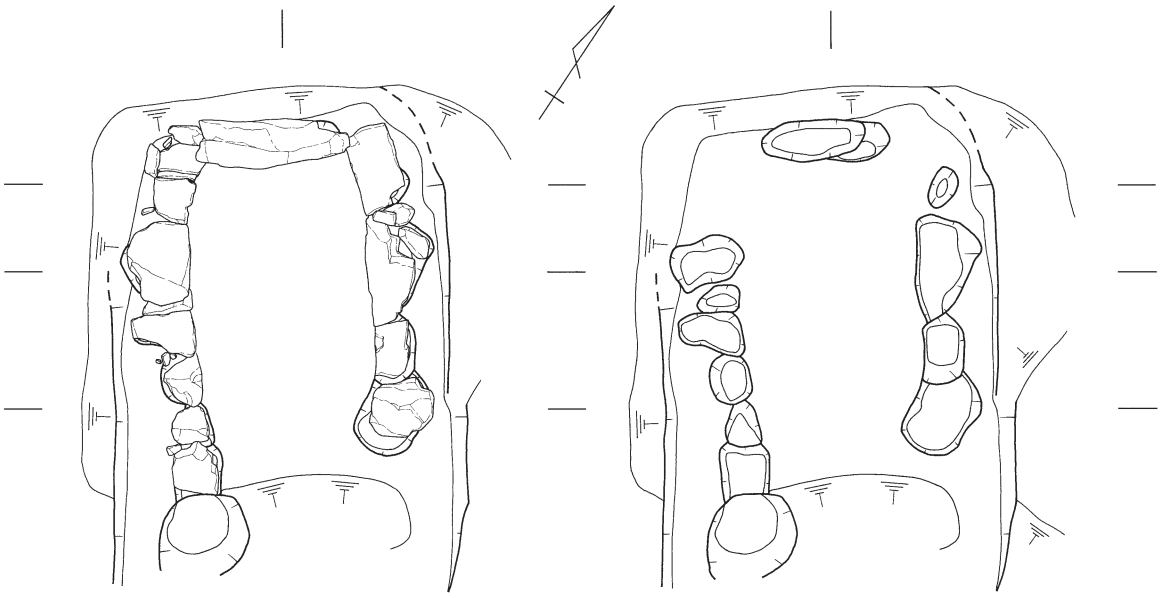
墳丘図



1 周溝内埋土 明赤褐色粘質土

L=89.0m

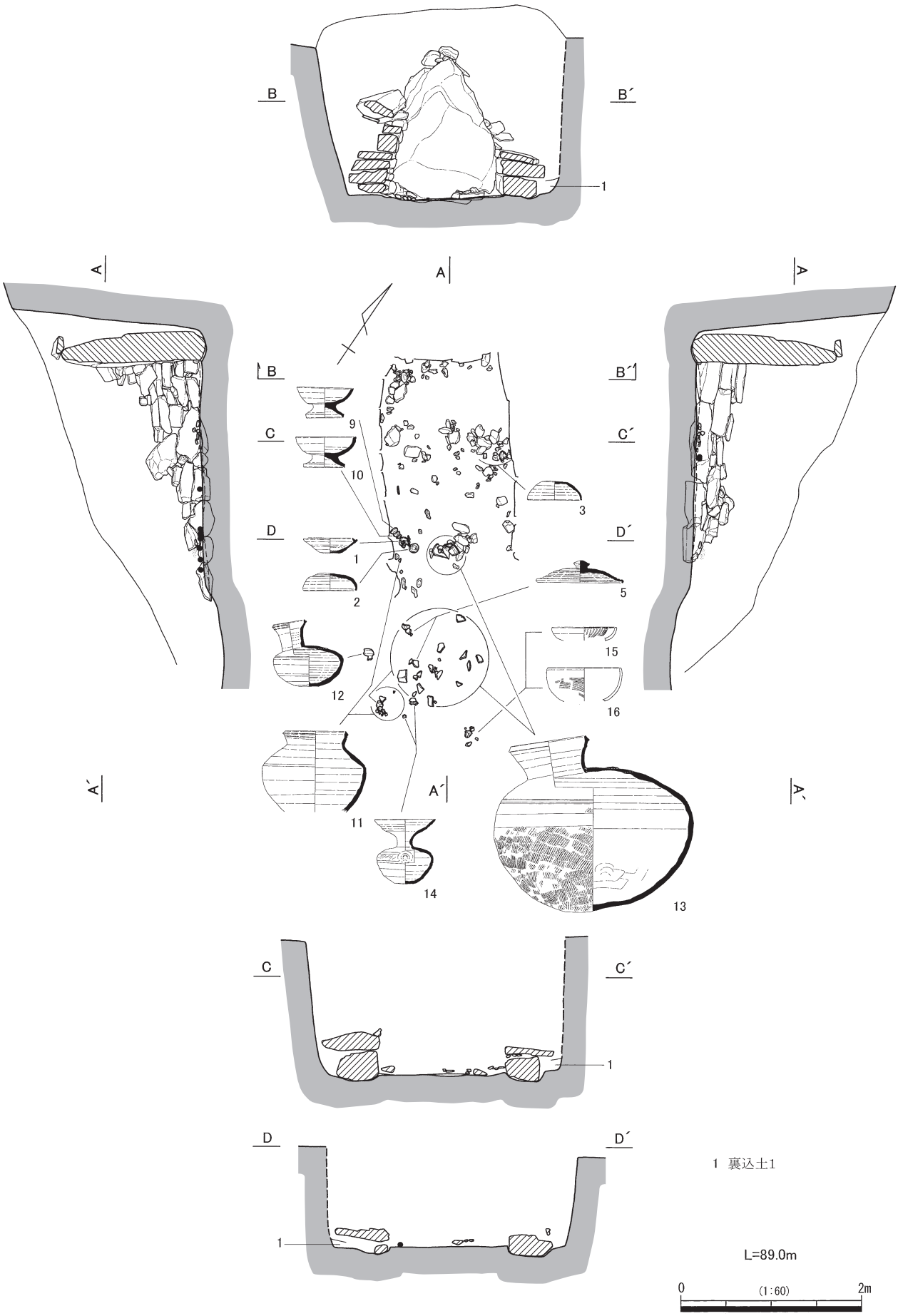
0 (1:100) 5m



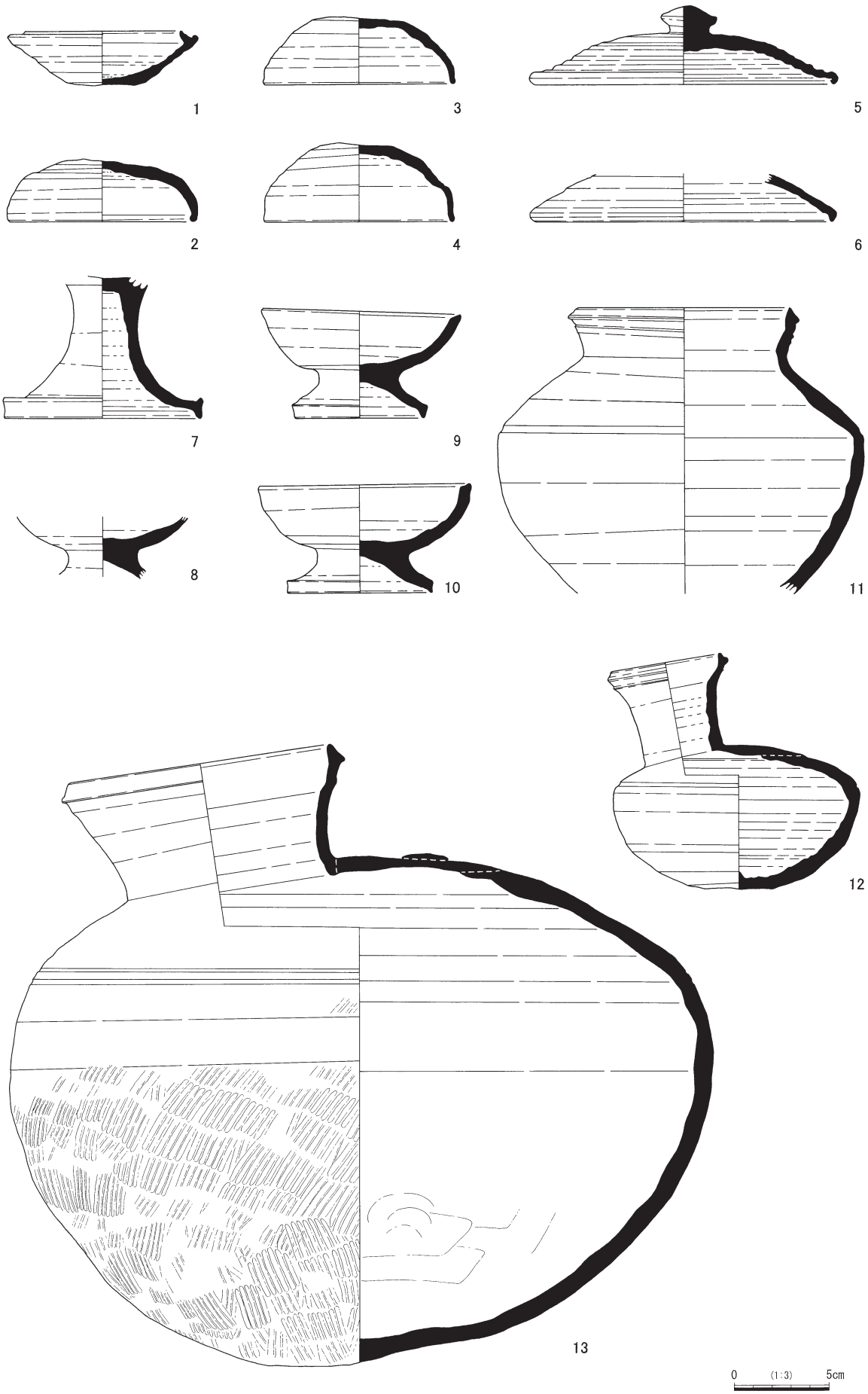
基底石　　墓壙

0 (1:60) 2m

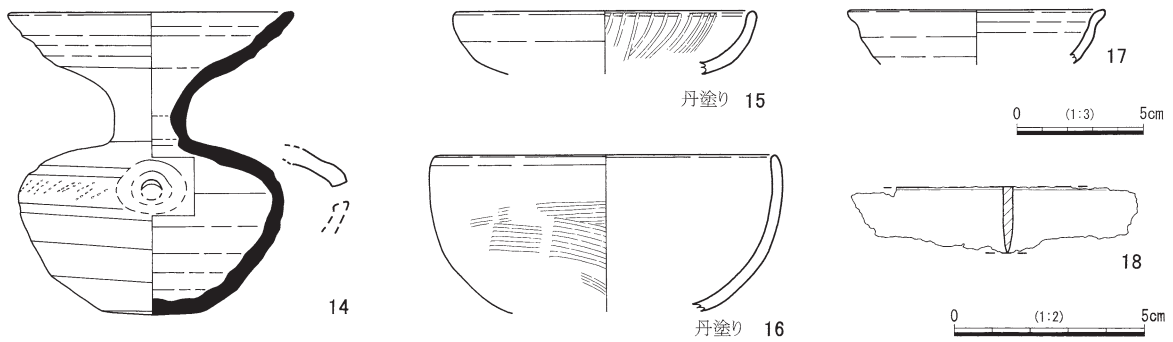
第36図　C4号墳実測図



第37図　C4号墳横穴式石室実測図



第38図　C4号墳出土遺物実測図1



第39図　C4号墳出土遺物実測図2

器編年Ⅳ期前半に築造され、さらにそれより後出する土器の存在から、遠江須恵器編年Ⅳ期後半からⅤ期前葉に追葬されていたと推定される。17は灰釉陶器の小碗片である。

鉄製品　18は刀子で、切先と茎部先端を欠いている。

⑸　雲岩寺C5号墳

調査前の状況

C5号墳は調査区中央からやや東に位置し、標高90.2～88.0mの等高線付近に築造されている。

C5号墳は調査前には雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C5号墳はC4号墳やC16号墳とともに、調査範囲の古墳の中では、中央上段域に築造されたグループに属する。C5号墳は斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.6m、深さ0.35mを測る。墳丘は東西4.6m、南北5.5m以上と考えられる。墳丘南側で標高88.0m、墳丘北側で標高90.2mを測り、現状での古墳の高さは2.2mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。石室の平面形は立柱石によって区別された擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は側壁の上部を除いて比較的良好であった。

天井石　検出の際、天井石は残っていなかった。

玄室　墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘り１枚の板石を設置し、その上に１枚の石を積んで奥壁としている。両側壁の基底石埋置については穴を墓壙底面に掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに玄門石を据えて長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は奥壁から玄門部まで全面にみられた。礫床の小礫は他の古墳より細かく、密に敷かれていた。

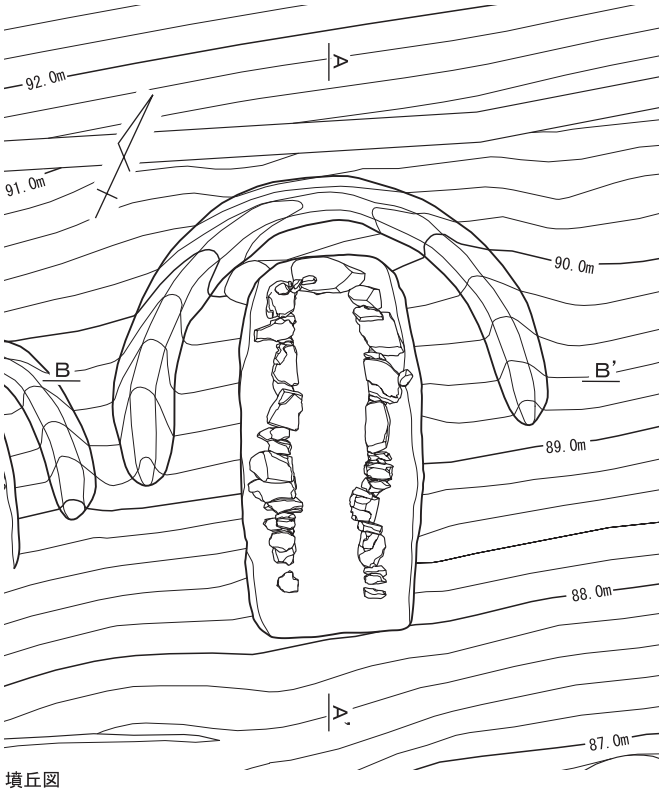
羨道・閉塞部　羨道の側壁は玄室より低く積まれていた。閉塞石は2、3段が残っていた。

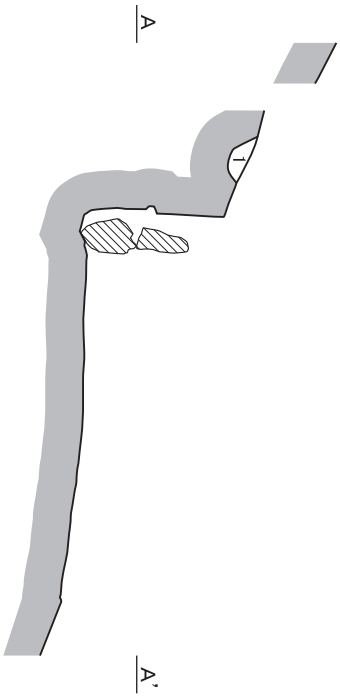
墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高90.15m、下端で88.4mを測ることから、1.75mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁と側壁基底石を据える穴を掘っていた。墓道は残っていなかった。

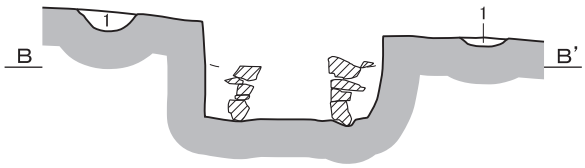
遺物の出土状態

石室礫床上から坏、長頸壺、平瓶など須恵器が出土した。須恵器は西側玄門部から玄室入口付近に置かれていた。追葬の際、片づけられたと推定され、散乱していた。閉塞石は追葬の際に外されたらしく、石の隙間から石室内と同じ時期の坏身片が出土した。閉塞石の上からは、遠江須恵器編年Ⅴ期前葉の坏





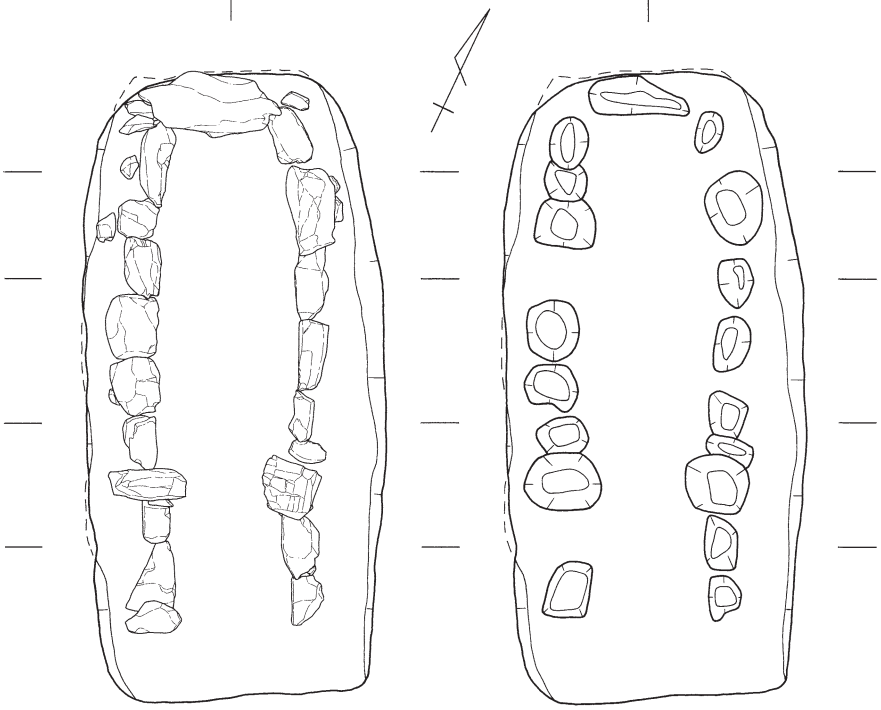
墳丘図



1 周溝内埋土 明赤褐色粘質土

L=89.0m

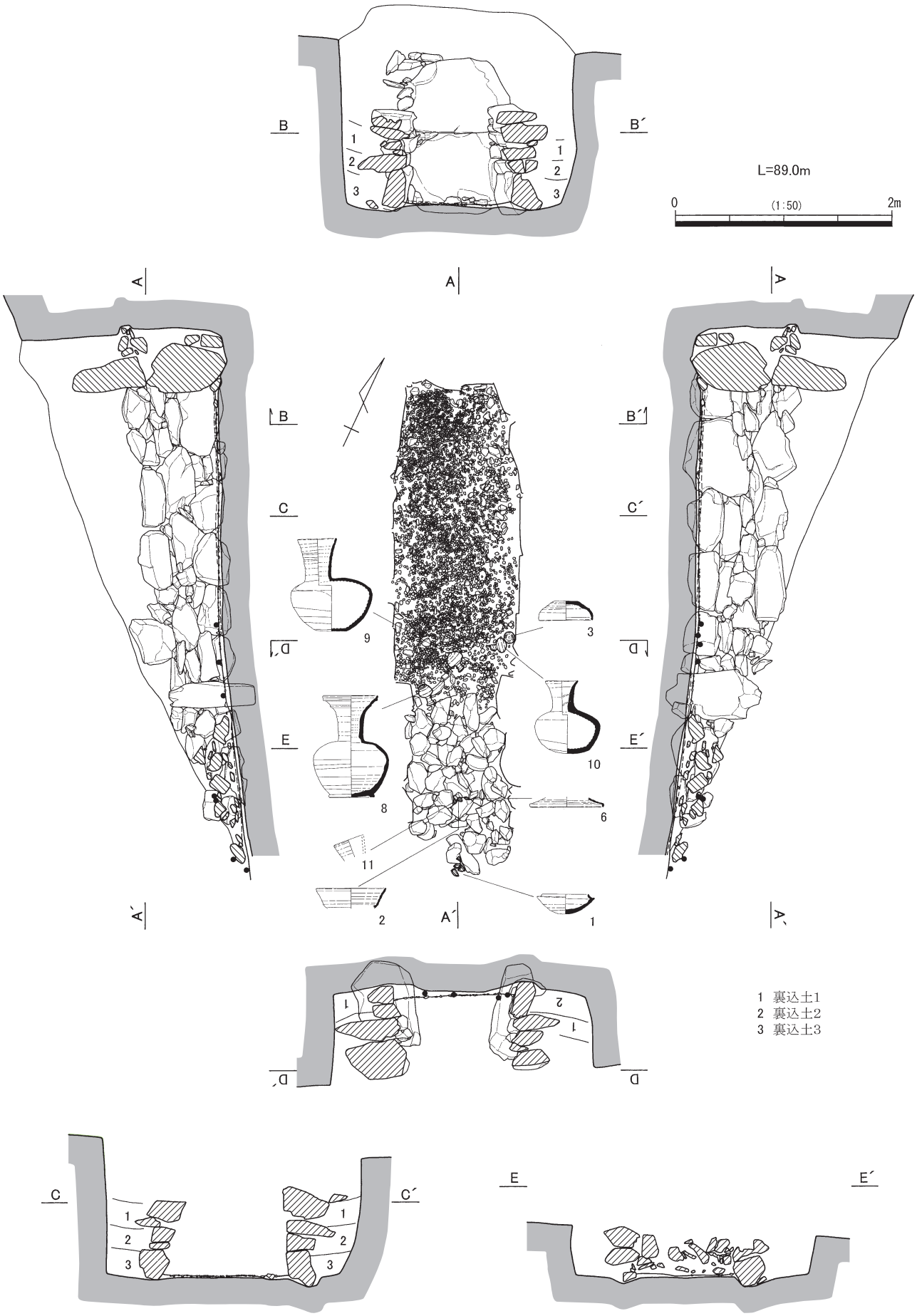
0 (1:100) 5m



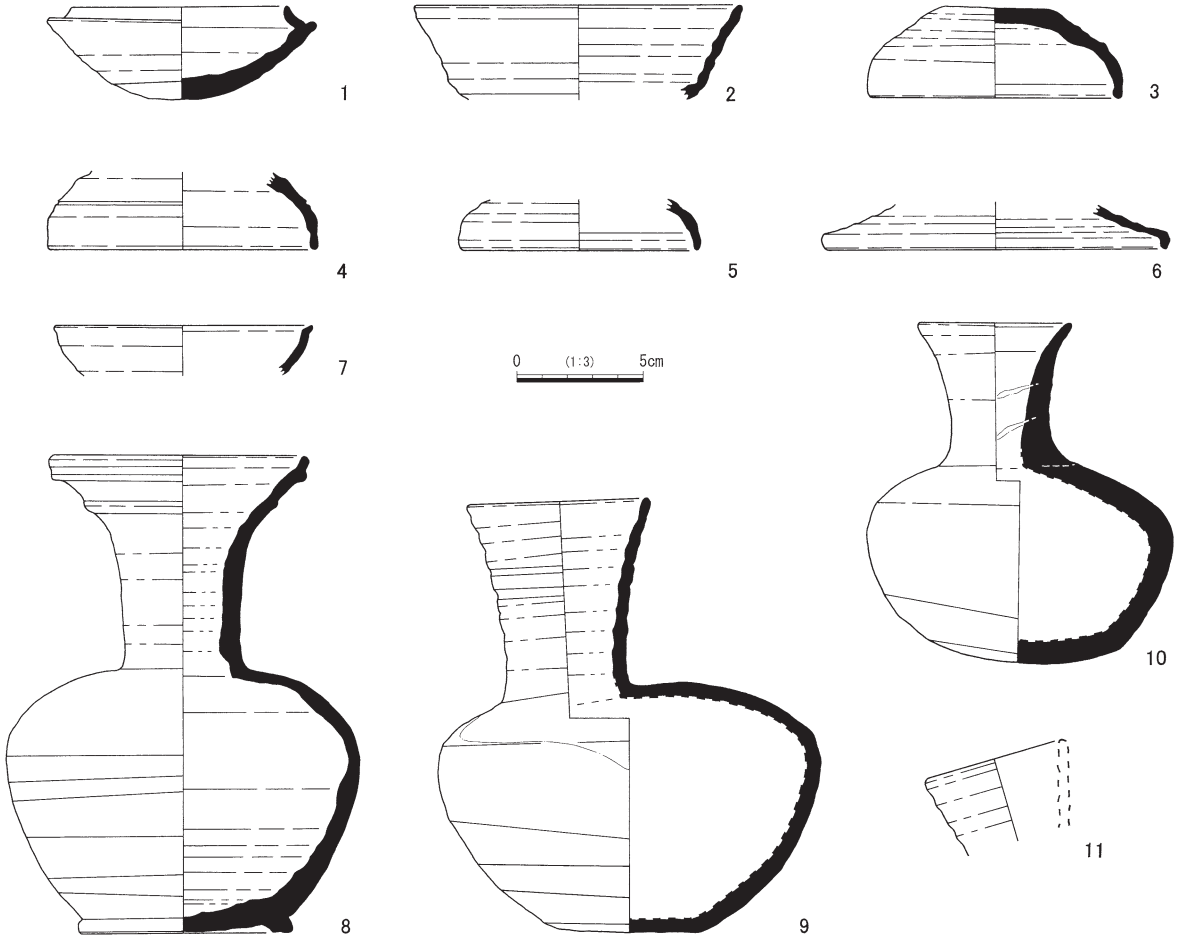
基底石　　墓壙

0 (1:60) 2m

第40図　C5号墳実測図



第41図　C5号墳横穴式石室実測図



第42図　C5号墳出土遺物実測図

身が出土した。この須恵器は石室とは時期が異なり後出することから、C5号墳への最後の追葬時期を示していると判断される。

出土遺物

土器が出土した。

土器　坏身1と3～5の坏蓋は坏Ｈ類で遠江須恵器編年Ⅳ期前半に比定できる。2は坏Ｂ類の坏身、6の坏蓋はいずれも遠江須恵器編年Ⅴ期前葉に比定できる。7は低い脚部をもつと推定され、あえていえば低脚坏とでも呼称できよう。長頸壺8は低い高台を持ち、遠江須恵器編年Ⅳ期末葉と考えられる。平瓶9～11は遠江須恵器編年Ⅳ期前半から末葉の間に位置づけたい。出土した土器からすれば、C5号墳は遠江須恵器編年Ⅳ期前半に築造され、さらに土器と副葬品の出土状態から遠江須恵器編年Ⅳ期末葉からⅤ期前葉に追葬されていたと推定される。

⑹　雲岩寺C6号墳

調査前の状況

C6号墳は調査区東端から47mほど西に位置し、標高90.0～87.6mの等高線付近に築造されている。

C6号墳は調査前には雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C6号墳はC12号墳とともに、調査範囲の古墳の中では、東端の上段域に築造されたグループに属する。両者の位置からすると、何らかの親縁関係が想定される。C6号墳は斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.8m、深さ0.3mを測る。墳丘は東西4.0m、南北5.0m以上と考えられる。墳丘南側で標高87.6m、墳丘北側で標高90.0mを測り、現状での古墳の高さは2.4mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。石室の平面形は立柱石によって区別された擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は西側壁の上部を除いて比較的良好であった。

天井石　検出の際、天井石は一部が奥壁に架設され、さらに玄室に落下していた。床面から架設された天井石までの高さは、0.75mを測る。

玄室　墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘り、さらにその中に栗石を置き、その上に1枚の石を鏡石として設置している。奥壁上には天井石を重ねている。東側壁の基底石埋置については穴を墓壙底面に掘り、据え付けている。西側壁は埋置穴を掘らず基底石を据えている。玄室の平面形は、奥壁の直近で幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると奥壁を埋置し、さらに玄門石を据えて長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は玄門近くまで残っていた。

羨道・閉塞部　羨道の側壁は玄室より低く積まれていた。閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高89.65m、下端で88.0mを測ることから、1.65mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、墓壙底面には奥壁と一部の側壁基底石を据える穴を掘っていた。墓道は残っていなかった。

遺物の出土状態

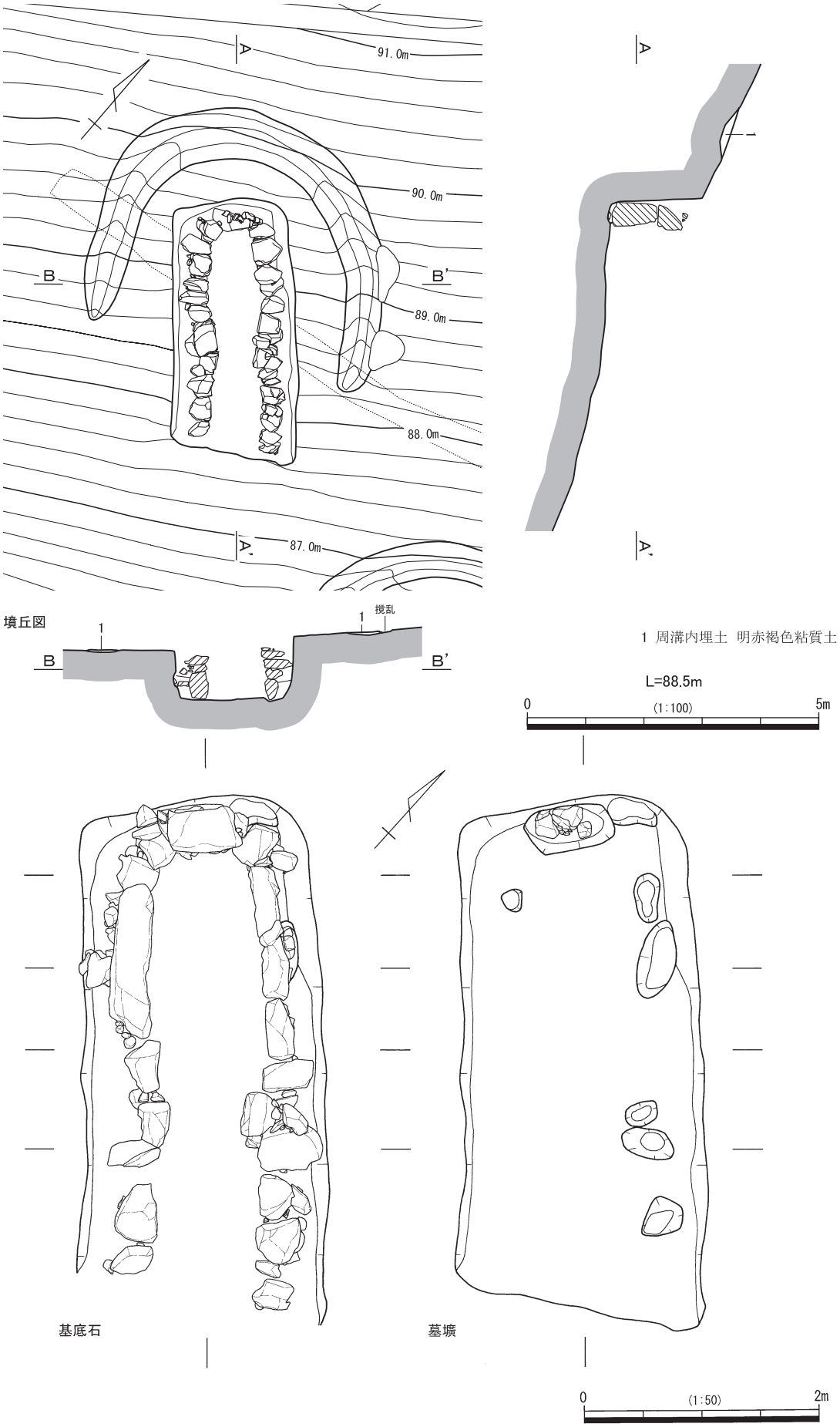
石室礫床から須恵器、刀子、鉄鏃が出土した。須恵器は西側玄門部から玄室入口付近に置かれていた。追葬の際、片づけられ、置かれたものと推定される。石室奥壁付近からは刀子が、玄門部周辺からは鉄鏃が束ねられていたように、まとまって出土した。

出土遺物

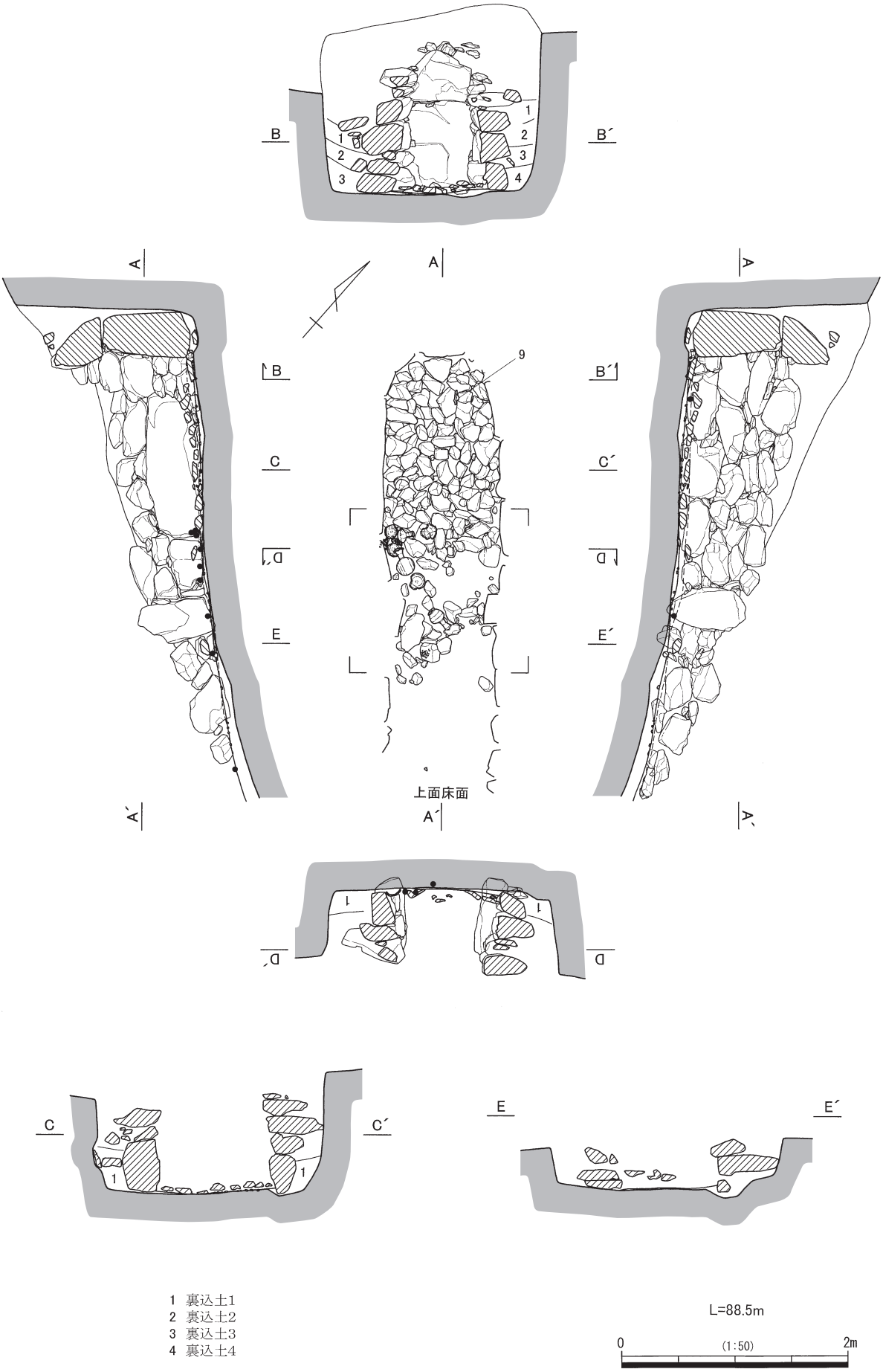
土器と刀子、鉄鏃が出土した。

土器　坏身1は坏Ｈ類で遠江須恵器編年Ⅳ期前半に比定できる。2は坏Ｂ類、3～5の坏身は無蓋で無高台のタイプである。いずれも遠江須恵器編年に比定すると、Ⅴ期前葉であろう。7はフラスコ形瓶で、遠江須恵器編年に比定すると、Ⅳ期前半であろう。長頸壺6は低い高台を持ち、遠江須恵器編年Ⅴ期前葉と考えられる。平瓶8はⅣ期からⅤ期前葉であろう。出土した土器からすれば、C6号墳は遠江須恵器編年Ⅳ期前半に築造され、さらに土器と副葬品の出土状態からⅤ期前葉に追葬されていたと推定される。

鉄製品　9は刀子で、切先と茎部先端を欠いている。10から15はすべて尖根式の鉄鏃である。鏃身先端を欠くため、鏃身による細別は不明である。残りの良い例からすれば、いずれも関を持つタイプではないだろうか。それ以外の茎部からは単に鉄鏃の茎部としか判断できなかった。

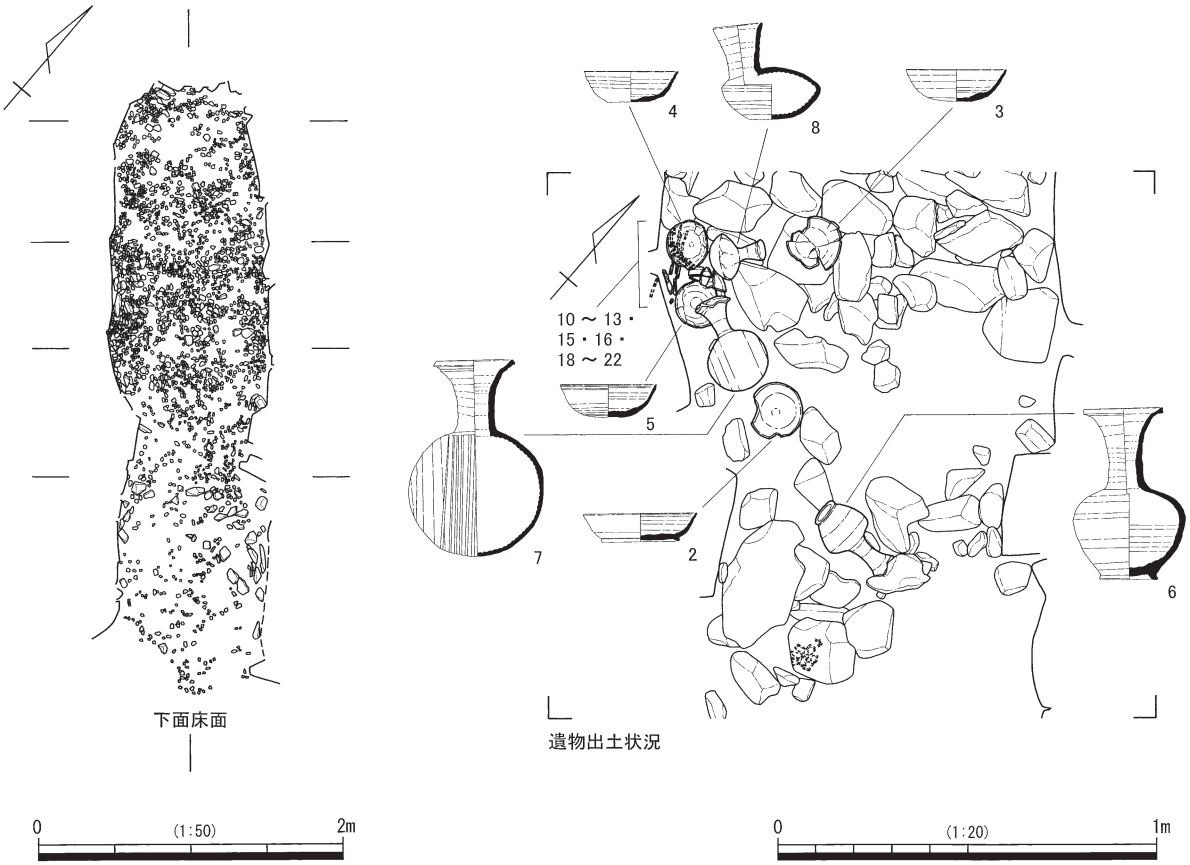


第43図　C6号墳実測図



1 裏込土1
2 裏込土2
3 裏込土3
4 裏込土4

第44図　C6号墳横穴式石室実測図1



第45図　C6号墳横穴式石室実測図2

⑺　雲岩寺C7号墳

調査前の状況

C7号墳は調査区東端から37mほど西に位置し、標高83.0～80.6mの等高線付近に築造されている。

さらにC7号墳はC17号墳、C8号墳とともに、調査範囲の古墳の中では、東端の下段域に築造されたグループに属する。調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

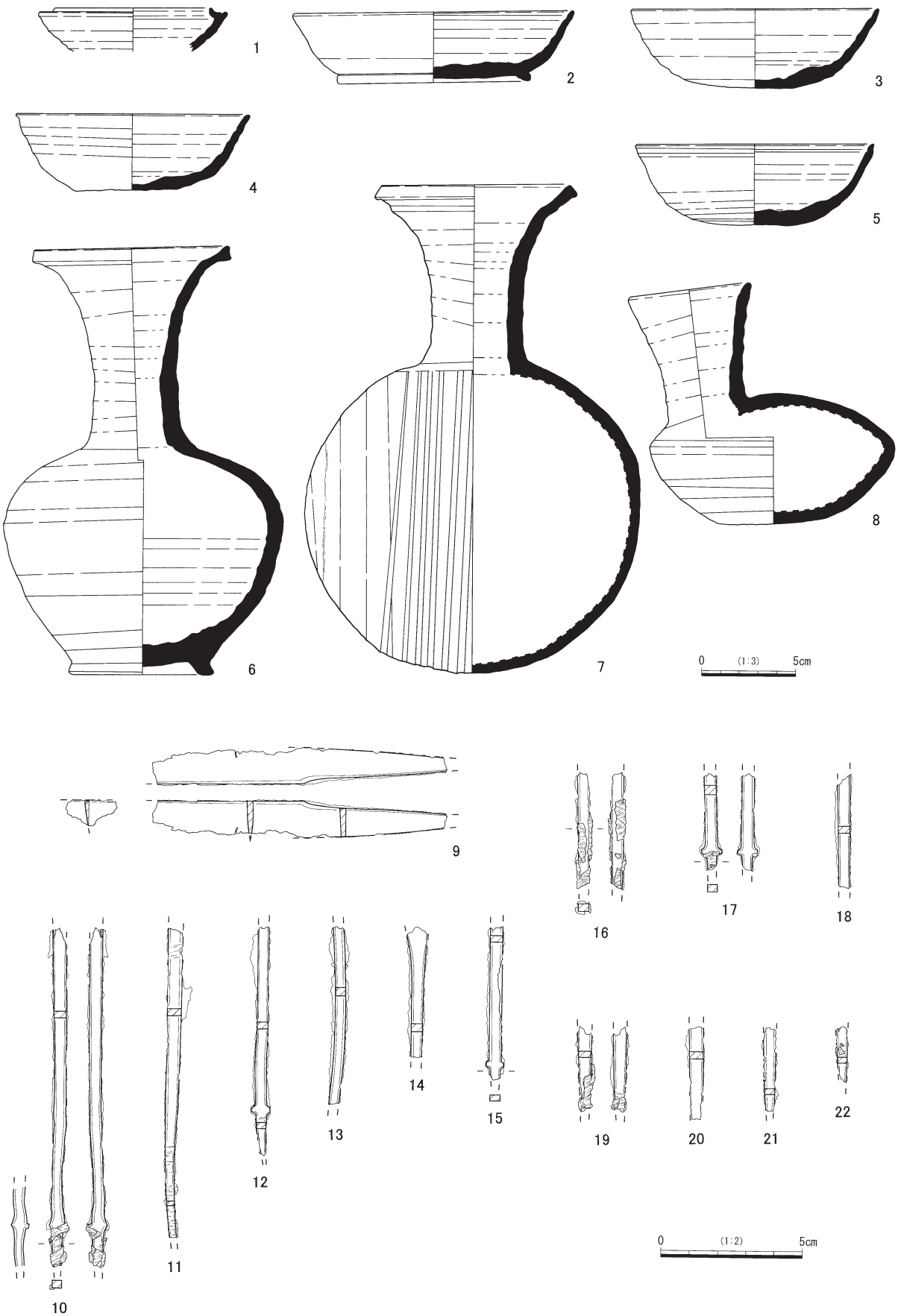
C7号墳は等高線が東西に並行する斜面に築かれている。その点では近接するC17号墳に近い立地で、立地や位置からすると、C17号墳との間になんらかの親縁関係にあると推定される。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅1.0m、深さ0.4mを測る。墳丘は東西5.8m、南北5.5m以上と考えられる。墳丘南側で標高80.6m、墳丘北側で標高83.0mを測り、現状での古墳の高さは2.4mである。

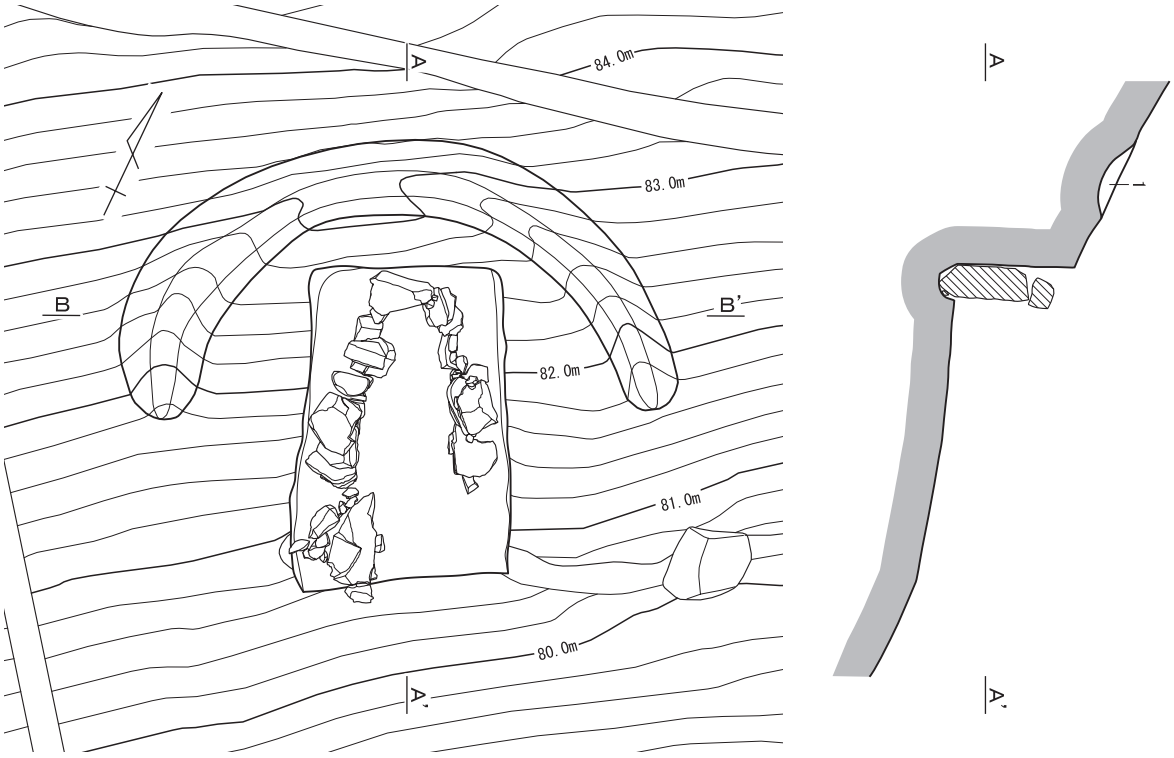
埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。一部、側壁から前庭にかけて側壁が認められないので明確ではないが、石室の平面形態は無袖式と考えておきたい。検出時作成の図面では、西側前庭には天井石、側壁の一部が移動しているため、それを図化や写真撮影されているので、側壁の続きと誤解されやすい。

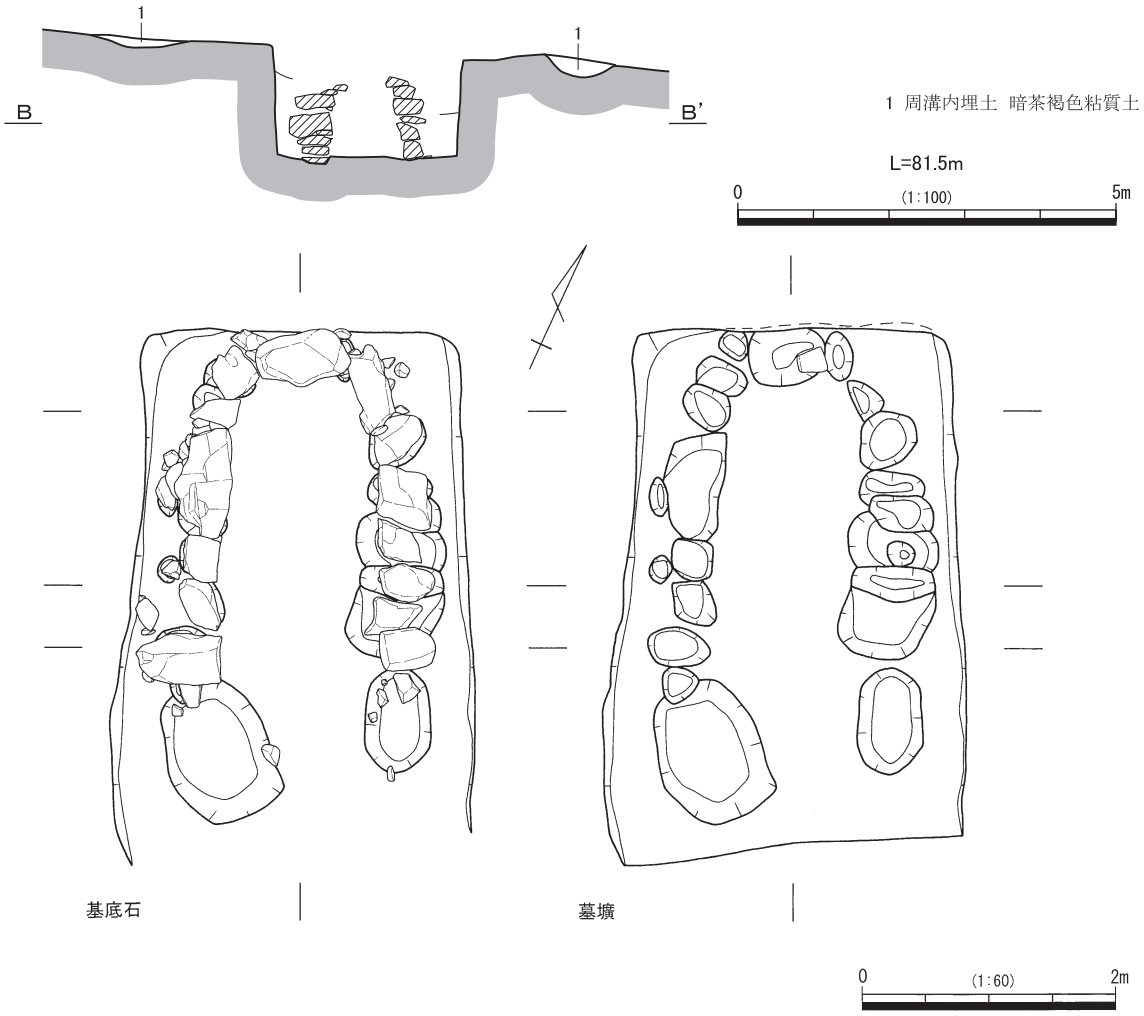
天井石　検出の際、天井石は一部が奥壁に架設され、さらに玄室に落下していた。床面から架設された天井石までの高さは、0.95mを測る。



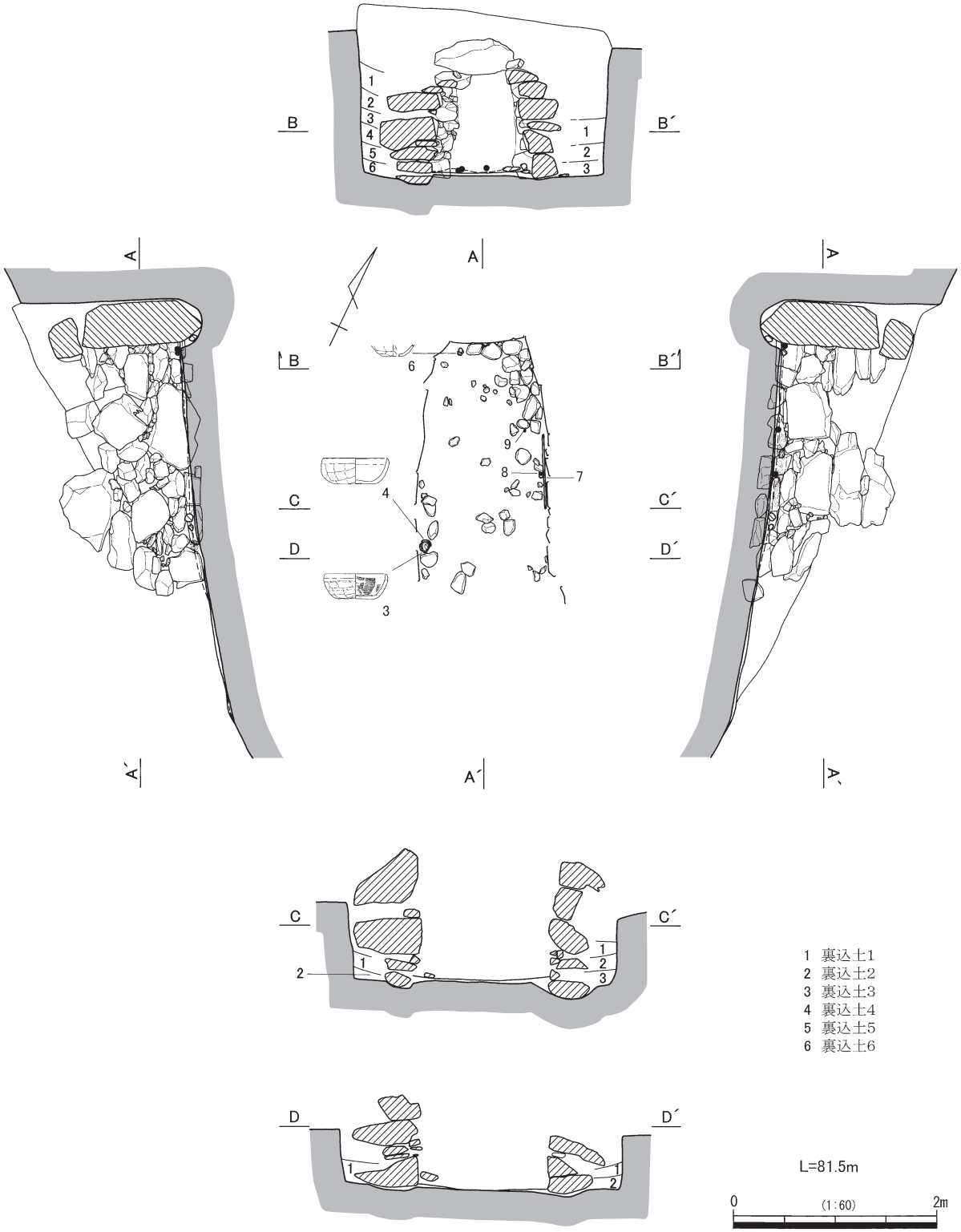
第46図　C6号墳出土遺物実測図



墳丘図



第47図　C7号墳実測図



第48図　C7号墳横穴式石室実測図

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、１枚の石を鏡石として設置し奥壁としている。側壁の基底石埋置については穴を墓壙底面に掘り、据え付けている。側壁はすべての基底石を埋置し据えている。玄室の平面形は、奥壁の直近で幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに奥壁側の側壁を据え長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は撹乱を受け、奥壁に近い東側の一部が残っていた。

前庭・閉塞部　前庭と閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高82.65m、下端で81.1mを測ることから、1.65mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁、側壁基底石を据える穴を掘っていた。墓道は残っていなかった。

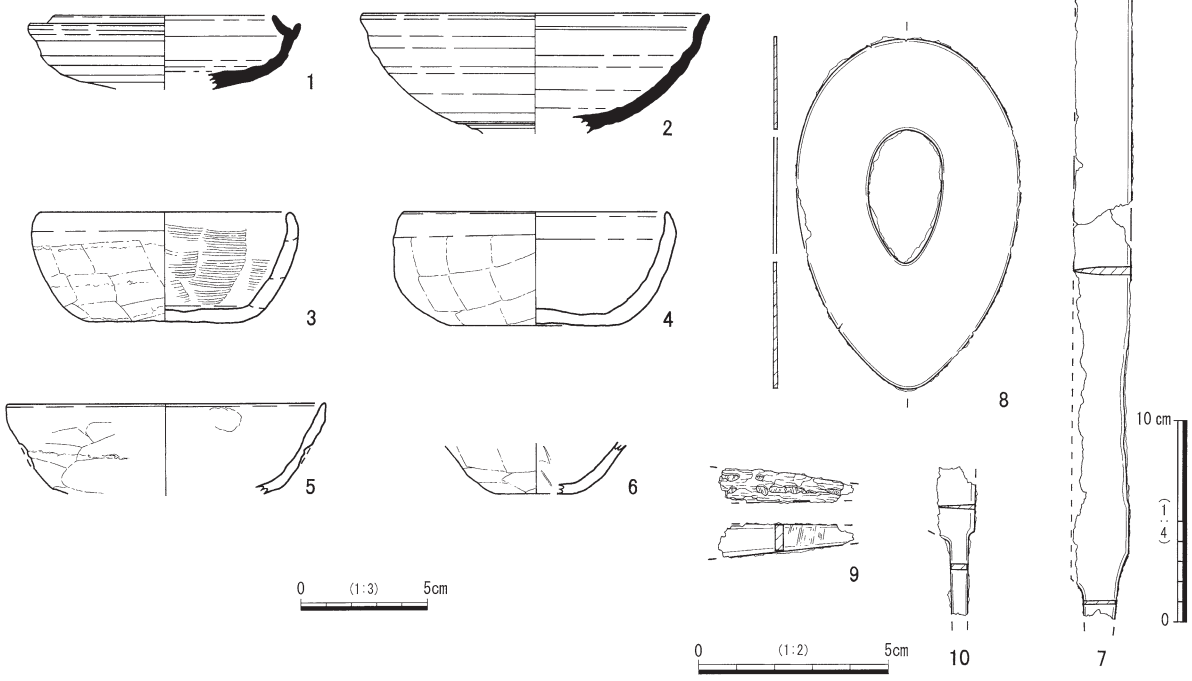
遺物の出土状態

石室礫床からは直刀と鍔が出土した。直刀は茎部と切先を欠き、鍔も外れて、横に置かれていた。追葬の際、片づけられ、置かれたものと推定される。石室奥壁からは土師器小形甕が、玄室下半から重ねられた土師器坏が出土した。ほか前庭付近から須恵器坏身、高坏片が出土した。撹乱された際、かき出されたのであろう。いずれにせよ副葬時の位置を留めていなかった。ほかに十代後半から壮年前半の永久歯が発見されている。

出土遺物

土器と鉄製品が出土した。

土器　坏身１は坏Ｈ類である。坏身をみると底部外周をヘラケズリ調整するタイプである。２は無蓋高坏で、脚部を失っている。いずれも遠江須恵器編年に比定すると、Ⅳ期前半であろう。土師器坏３から５は外面をヘラで押圧もしくはかき取って成形している。遠江須恵器編年Ⅳ期前半に併行すると考えられる。小形甕６は底部のみで、あるいは鉢であるかもしれない。遠江須恵器編年Ⅳ期かⅤ期に併行すると推定される。出土した土器からすれば、C7号墳の築造時期は遠江須恵器編年Ⅳ期前半に一点を置く。さらに副葬



第49図　C7号墳出土遺物実測図

品の出土状態から追葬されていたと推定されるが、その時期は遠江須恵器編年Ⅳ期かⅤ期であろう。

鉄製品　7は直刀で切先と茎部先端を失っている。8は鉄製で倒卵形を呈する鍔である。大きさから直刀の刀装具であろう。9は刀子で、木質部が残り、鞘に入れられていたと判断される。10は刀子あるいは片刃箭の鉄鏃である。

⑻　雲岩寺C8号墳

調査前の状況

C8号墳は調査区東端で、尾根先端に築かれている。調査を行った他の古墳が丘陵斜面に築造されていたので、大いに異なる立地といえる。C8号墳の西側は土砂流失によって墳丘を失っていたため、調査前は墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。北側は水道管埋設のため破壊を受け、石室の石材は抜かれていた。

墳丘・周溝

C8号墳は西側から北側の稜線を三日月状の周溝によって切断している。北側から東側をめぐる等高線の79.6mから79.0mの範囲は、石室の外側を半円にめぐっていることから、周溝によって確認できないものの、円墳を意識し地山を掘削し加工していると考えられる。西側の墳丘は流失していたため墳丘の旧状を知ることはできない。C8号墳は丘陵稜線先端に立地し、稜線の特性を生かし、円墳を意識した加工を行っていることは他の古墳にない特徴である。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削していたと推定されるが、西側のみが残っていた。周溝の規模は、幅1.5m、深さ0.35mを測る。墳丘は破壊されているため推定値ではあるが、東西9m以上、南北8m以上と考えられる。墳丘南側で標高79.0m、墳丘北側で標高80.8mを測り、現状での古墳の高さは1.8mである。ただし東側から墳頂部までは古墳の高さは0.8mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部をわずかに南西に向けている。石室の平面形は片袖式石室で、西（右）側壁に玄室と羨道を区別する袖部を持つ。石室の保存状態は奥壁と西側壁奥壁側が残っていないほか、上部の側壁は外に持ち出されていた。

天井石　検出の際には認められなかった。

玄室　奥壁は残っていなかった。左右両側壁は据えるための穴を掘らずに据え付けている。玄室の平面形は、奥壁部分が残っていないため明瞭ではないが、残りの側壁から長方形を呈していると推定される。側壁と墓壙の間に控え積の礫を入れているところもある。基底石の配列をみると袖部を設置し、東側では広口積のところで長さと幅を決めた後、左右の側壁を据える手順をとっている。最後の調整はやや小ぶりの礫を小口積みにして玄門石との間で調整をしている。床面の礫床は大型の礫をまばらに敷いていた。大規模な撹乱はなく、礫床の移動は追葬時のかたづけによると推定される。

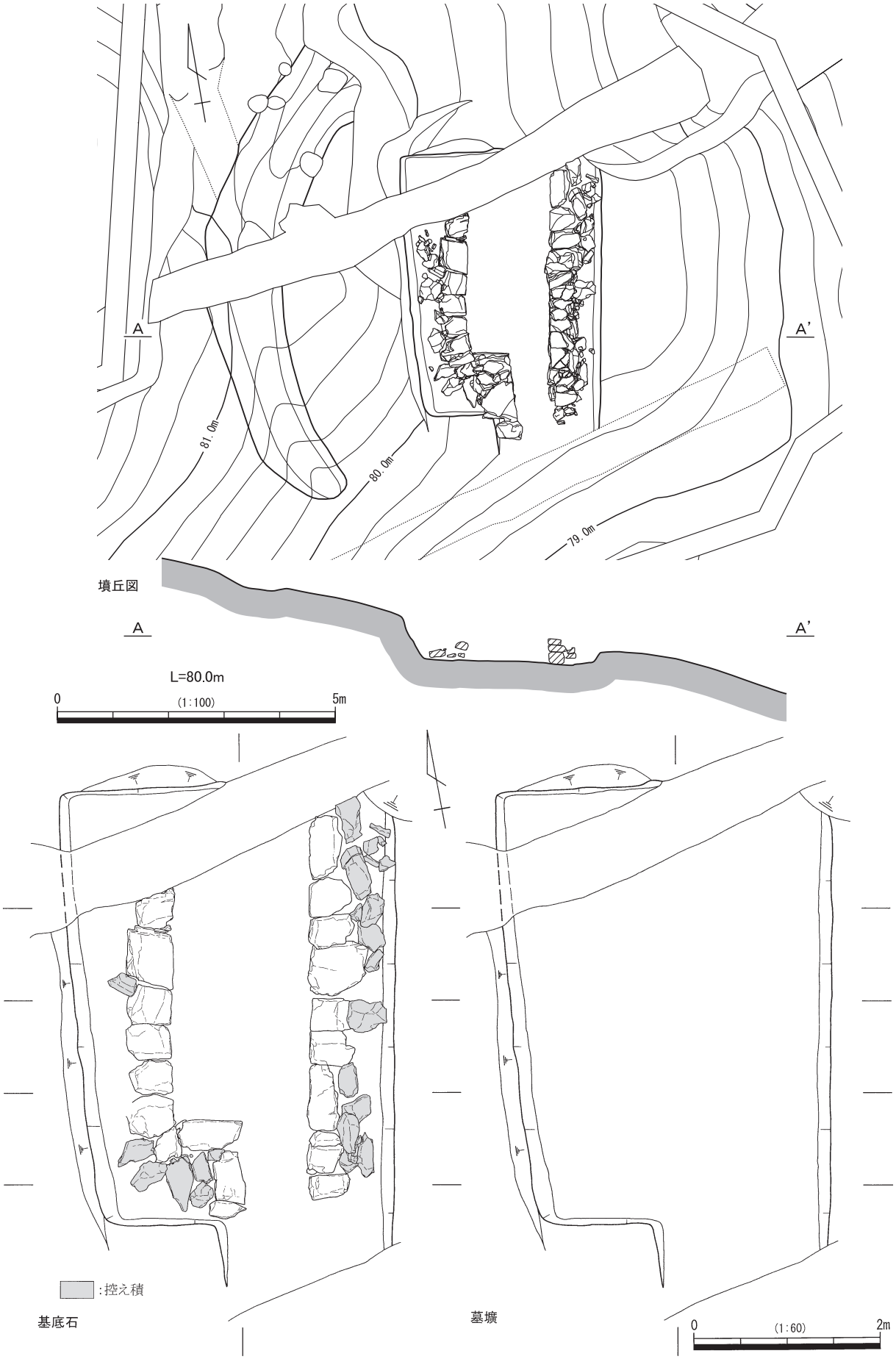
羨道・閉塞部　羨道の入り口に近い部分の側壁は残っていなかった。閉塞石は袖部から羨道間の１箇所が残っていた。

墓壙・墓道

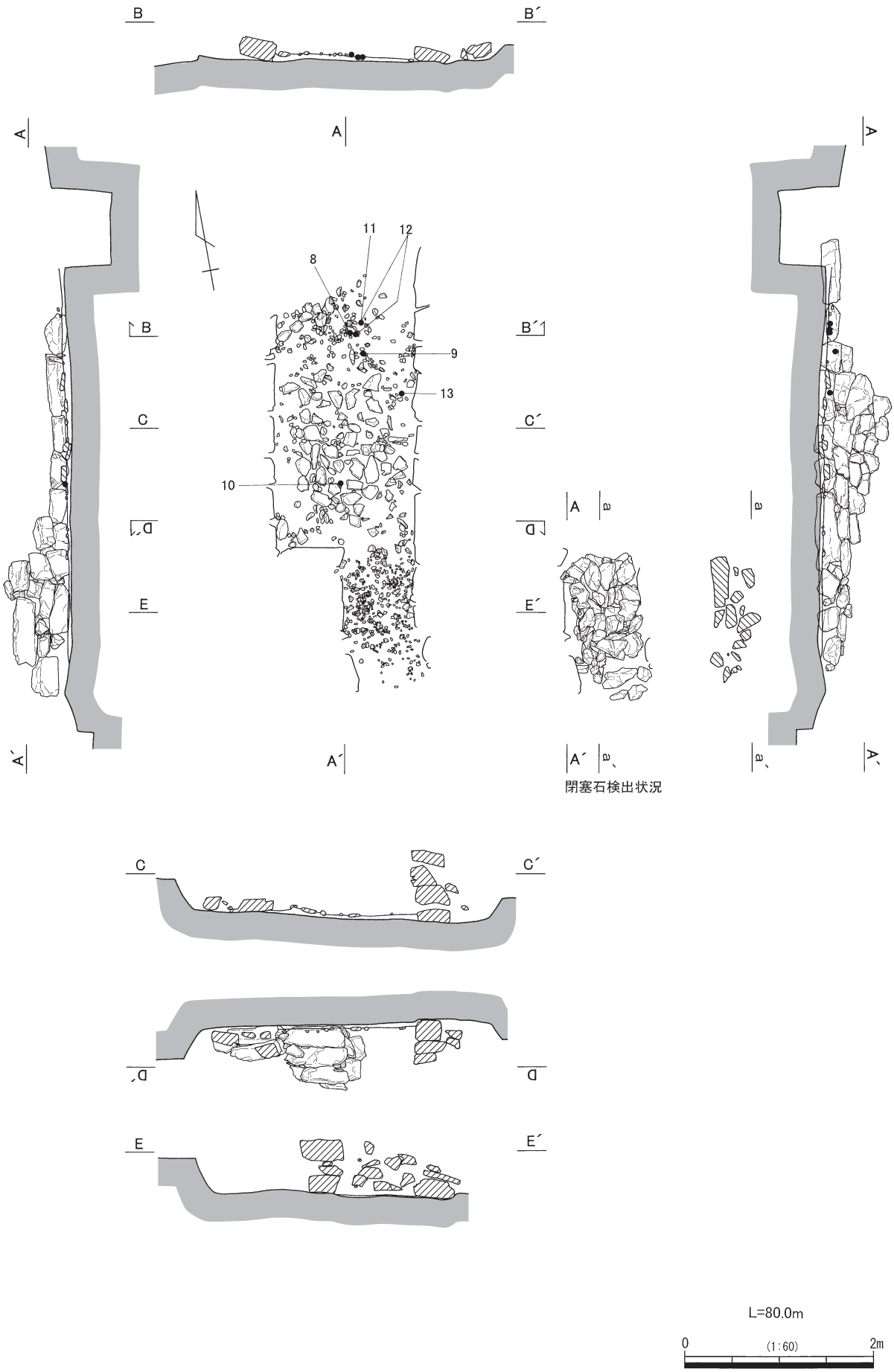
墓壙は奥壁上端で標高79.8m、下端で79.6mを測るが、水道管の埋設によって周辺が削平されていることから、どれほどを掘り下げていたかは不明である。平面形は長方形を呈している。墓道は残っていなかった。

遺物の出土状態

玄室礫床上から鉄製品の刀子と鉄鏃が出土したが、すべて破片となっている。ほかに砥石１が出土した。周溝埋土、撹乱の排土から須恵器片が出土した。古墳の位置からすれば、他の古墳の遺物が混入する可能性は少ない。よってこれらの須恵器はC8号墳の副葬品と判断して差し支えない。



第50図　C8号墳実測図



第51図　C8号墳横穴式石室実測図

出土遺物

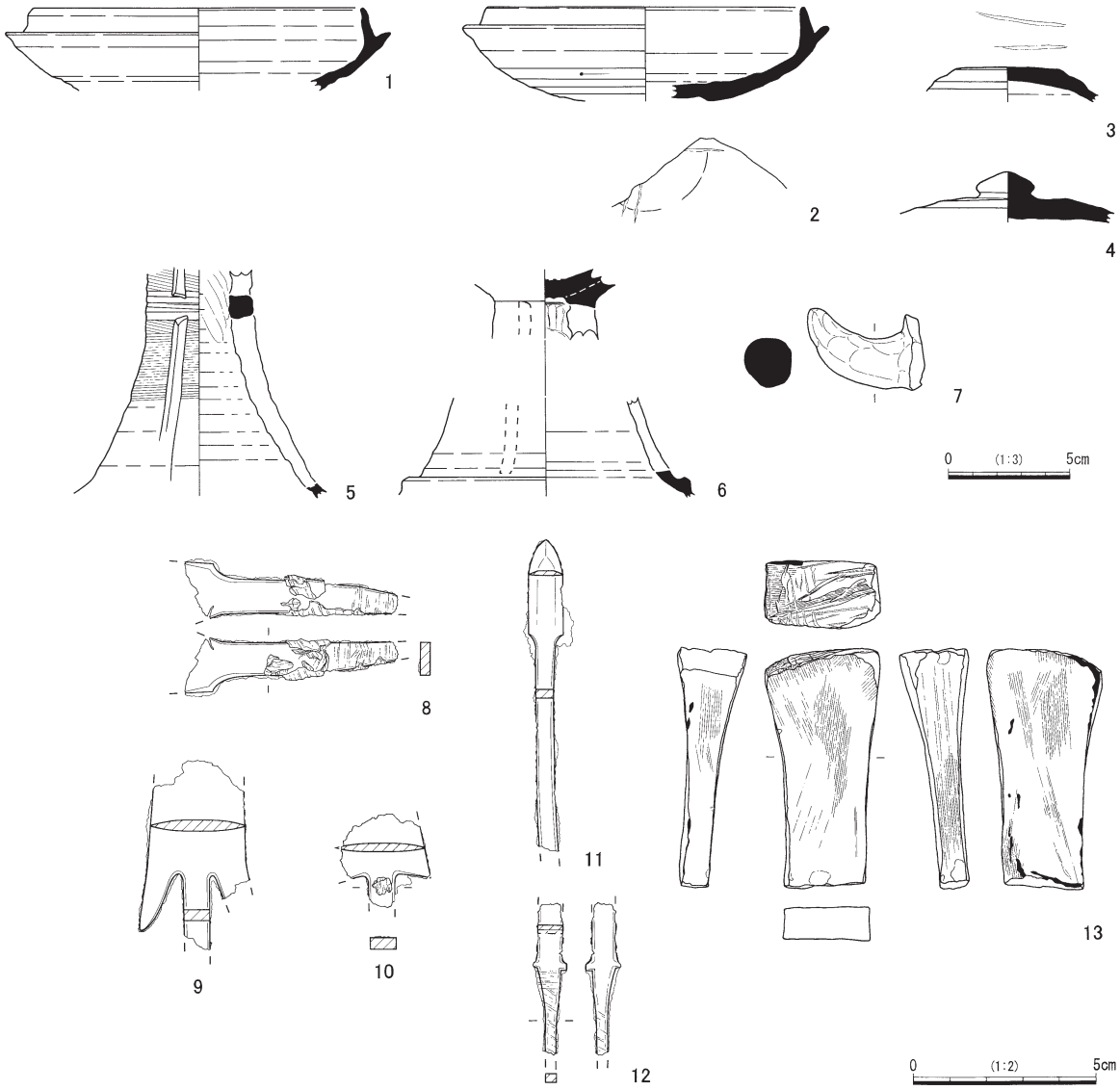
須恵器、鉄製品の刀子と鉄鏃、石製品の砥石が出土した。

土器　1、2の坏身は、口径や底部に残る長窓の痕跡から有蓋高坏の坏部と判断される。3はＨ類の坏蓋で遠江須恵器編年Ⅳ期前半、4は遠江須恵器編年Ⅴ期前葉の蓋である。5・6は長窓2段透かしの脚部である。5はカキ目調整を施し、形態から有蓋高坏と判断される。6は器壁が薄く造られ無蓋高坏か脚付短頸坩と判断される。いずれも遠江須恵器編年Ⅲ期中葉と考えられる。7は甑に似た形態で把手を持つ鉢と判断される。須恵器では珍しい。

鉄製品　8の刀子は関部を持つ形態で、柄に木の皮を巻いている。9と10は平根式鉄鏃で、9は腸抉をもつ柳葉式、10は三角形式の鏃身である。11と12は尖根式鉄鏃で、11は片切刃造の柳葉式、12は関のあるタイプである。先端は不明であるが、三角形式の可能性がある鏃身である。

石製品　砥石13は凝灰岩製で、仕上げ用と考えられる。大きさから携帯用であろうが、両側面がかなり砥ぎ減りしている。

C8号墳の築造時期は、出土した須恵器から遠江須恵器編年Ⅲ期中葉、さらにⅣ期前半とⅤ期前葉に追葬が行われたと考えておきたい。



第52図　C8号墳出土遺物実測図

⑼　雲岩寺Ｃ９号墳

調査前の状況

C9号墳は調査区中央に位置し、標高84.8mの等高線付近に築造されていたが、古墳中央から東側が土砂流失によって周溝と墳丘を失っていた。調査前は墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C9号墳は調査区上段の斜面に属し、等高線が東西に走行する箇所にC11号墳とC14号墳の中間に築かれている。その点ではこれら近接するC11号墳とはきわめて近い関係にあると推定される。斜面に築造されたためか、墳丘は流失していたため西側を除きほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削していたと推定されるが、西側のみが残っていた。周溝の規模は、幅0.9m、深さ0.3mを測る。墳丘は破壊されているため推定値ではあるが、東西5m以上、南北5m以上と考えられる。墳丘南側で標高82.8m、墳丘北側で標高84.6mを測り、現状での古墳の高さは1.8mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部をわずかに南西に向けている。石室の平面形は立柱石によって区別された擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は東側壁の上部を除いて比較的良好であった。

天井石　検出の際、玄室に落下した状態の天井石が認められた。落下状況から玄門部までは架設されていたと判断される。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、1枚の鏡石を設置し奥壁としている。左右両側壁の基底石と玄門の立柱石は据えるための穴を掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を据え奥壁に近い側壁と玄門部を設置し長さと幅を決めた後、左右の側壁とも基底石は奥壁側から据える手順をとっている。最後の調整はやや小ぶりの礫を小口積みにして玄門石との間で調整をしている。床面は2面が認められ、上面の礫床は大振りの礫をまばらに敷いていた。下面は玄室の南から羨道部に小礫で造られていた。

羨道・閉塞部　前庭の側壁は残っていなかった。閉塞石は玄門から羨道間の1箇所が残っていた。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高83.75m、下端で82.8mを測ることから、0.95mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。墓道は残っていなかった。

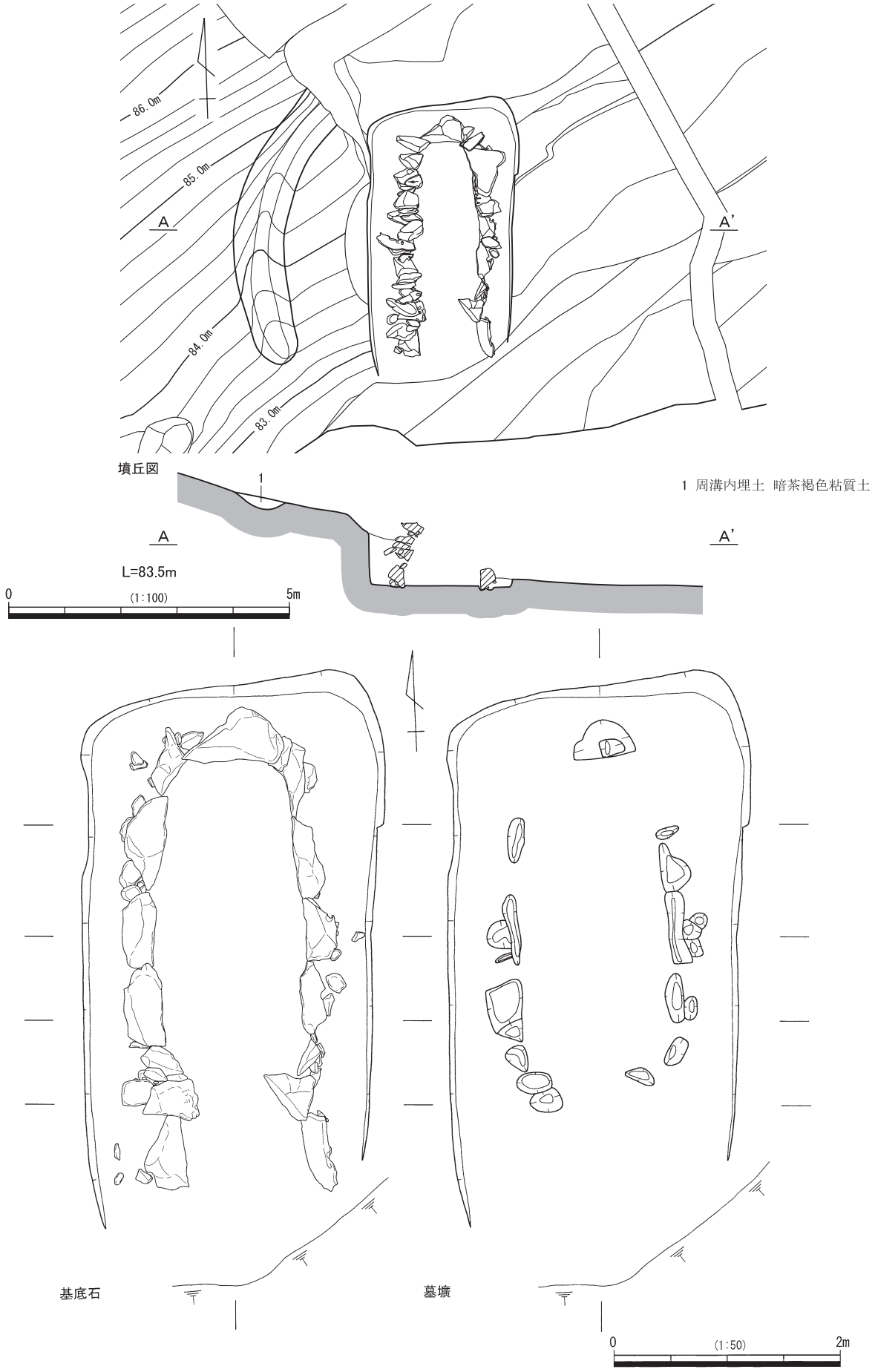
遺物の出土状態

上面の床から3体の子供の人骨（3歳から6歳1体、6歳前後2体）と男女各1体の成人骨の計5体が検出された。人骨の分析を行った京都大学名誉教授片山一道氏の分析（第6節）に詳しいが、各個体がばらばらに混在しているという。前の埋葬は追葬の際、移動されたと考えられるが、最終埋葬の遺体はなぜばらばらであったのであろうか。上面の埋葬に伴う副葬品のうち土器類は、奥壁からフラスコ形瓶1、西側玄門部から平瓶1、いくつか重ねられた坏類8、東側玄門部から平瓶1が出土した。装身具は勾玉2、丸玉1、小玉1が出土した。

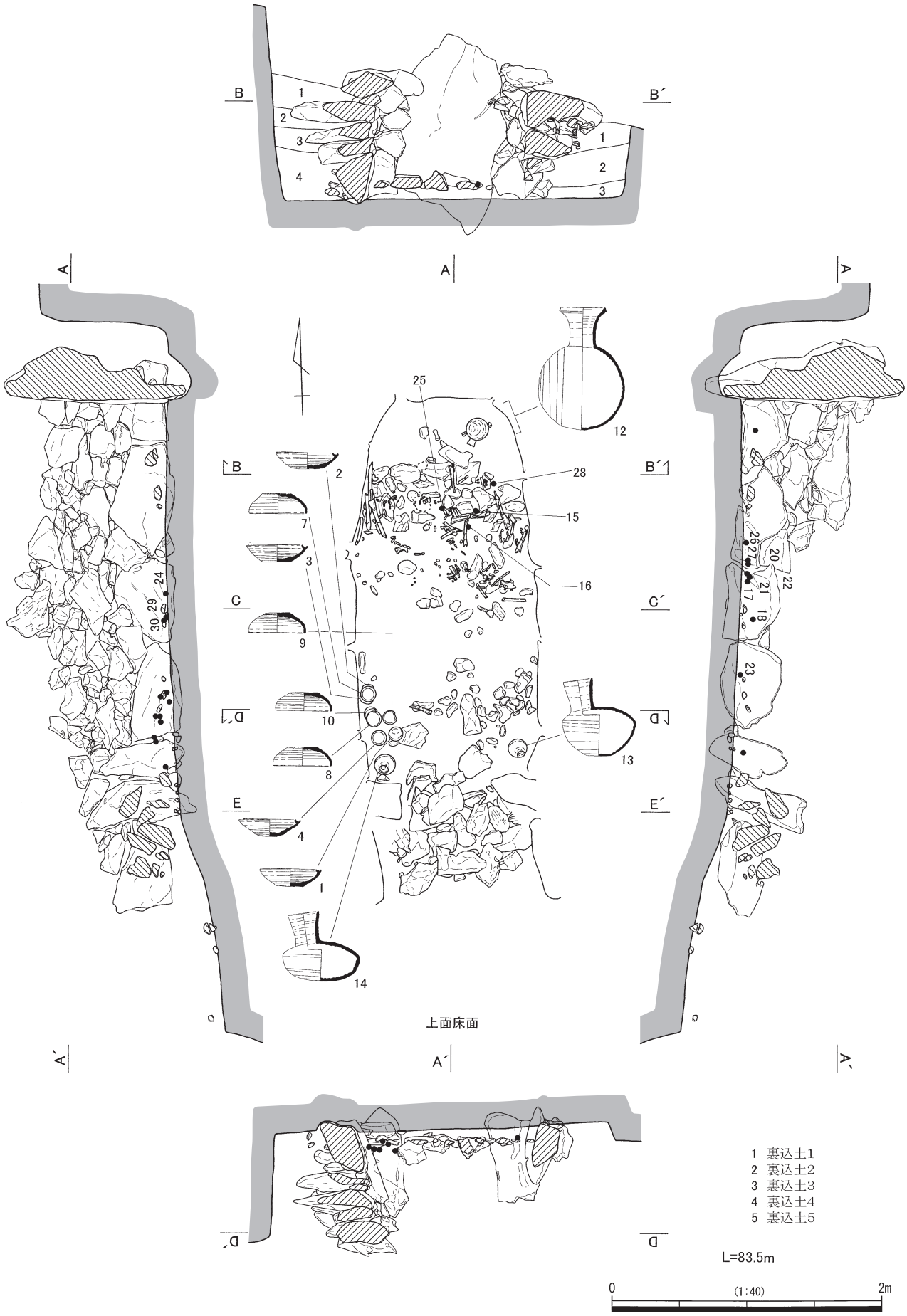
下面の玄室中央からやや奥まった所からは勾玉2、丸玉7、小玉1が、さらに刀子2が出土した。玉類の傾向は色や種類、大きさでセット関係をみたが、上面と下面では一定の傾向は認められず、二次的に移動しているようである。

出土遺物

土器と装身具、鉄製品が出土した。



第53図　C9号墳実測図



第54図　C9号墳横穴式石室実測図1

第55図　C9号墳横穴式石室実測図2

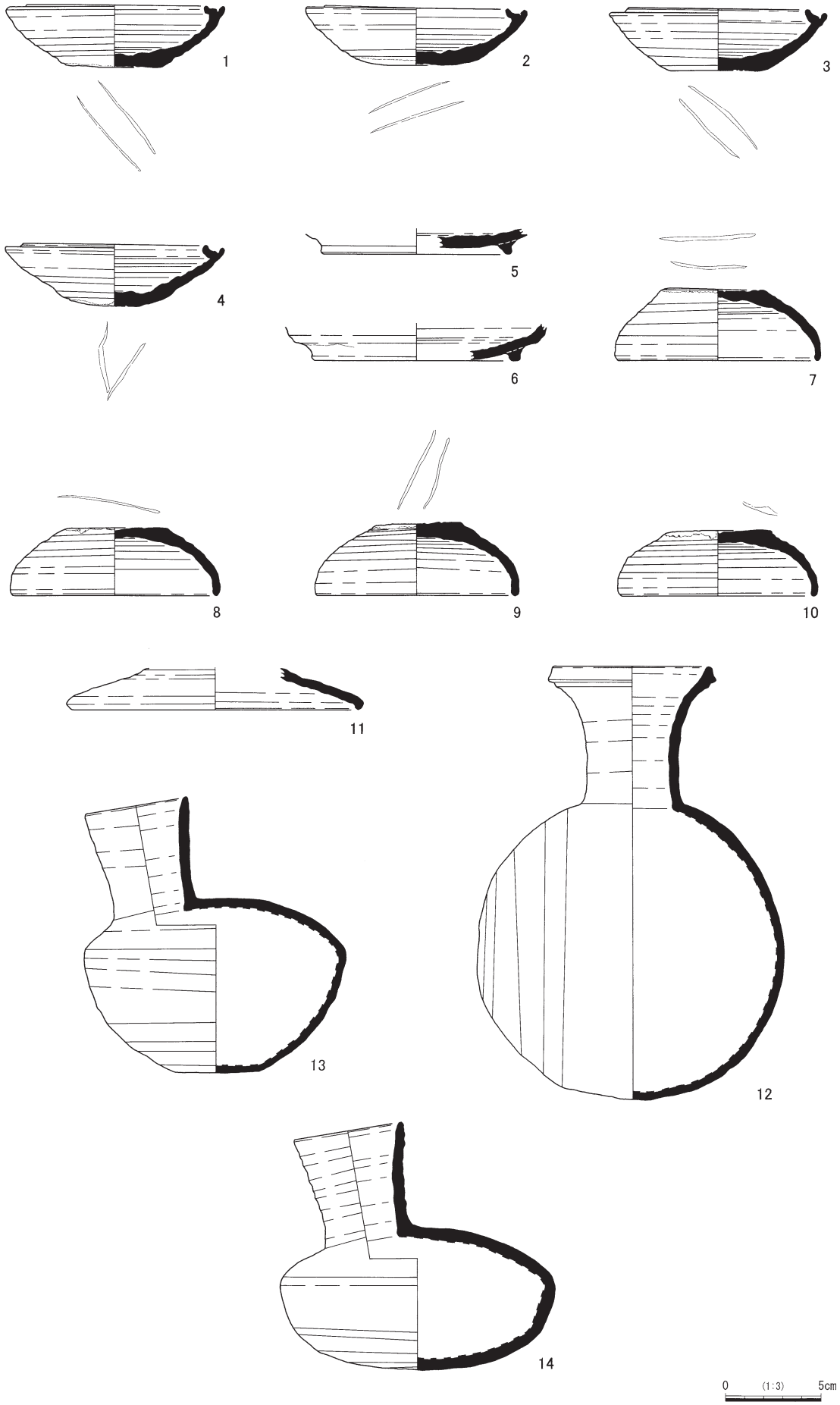
土器　いずれも須恵器で、1から6は坏身、7から11は坏蓋、12はフラスコ形瓶、13・14は平瓶である。坏1～4、7～10は坏Ｈ類である。坏身をみると底部とその外周をヘラケズリ調整するタイプがある。7から10の坏蓋は天井部をヘラケズリ調整するタイプがある。遠江須恵器編年に比定すると、Ⅳ期前半であろう。

5・6は坏Ｂ類の高台のつく坏身である。11は坏Ｂ類の蓋である。いずれも坏Ｂ類でⅤ期前葉に比定される。周溝と石室埋土から小破片として出土したので、古墳に伴うかは不明瞭である。

12のフラスコ形瓶は球形の胴部をもつ遠江須恵器編年Ⅳ期前半の時期であろう。13・14平瓶は湖西窯製品で、遠江須恵器編年Ⅳ期前半・後半に併行する時期であろう。

このようにみるとC9号墳出土の須恵器はⅣ期前半からⅣ期後半の複数の時期にわたっていると判断され、出土した須恵器の時期と埋葬人数から、C9号墳にⅣ期前半に築造され、Ⅳ期前半から後半まで5体の埋葬が行われたと考えておきたい。

装身具　上下2面の床面から15～18の勾玉4個が出土した。石材は薄茶色（クリーム色）と白色を呈するメノウで、片側から穴を穿孔している。勾玉の大きさや色が上下で一致することはなく、上面では白色1個、薄茶色1個、下面では白色1個、薄茶色1個とばらつきがあった。ほかに出土した丸玉と小玉19～28のうち蛇紋岩製で黒褐色を呈する玉が1個、コハク製でにぶい橙色を呈する玉が1個、それ以外の

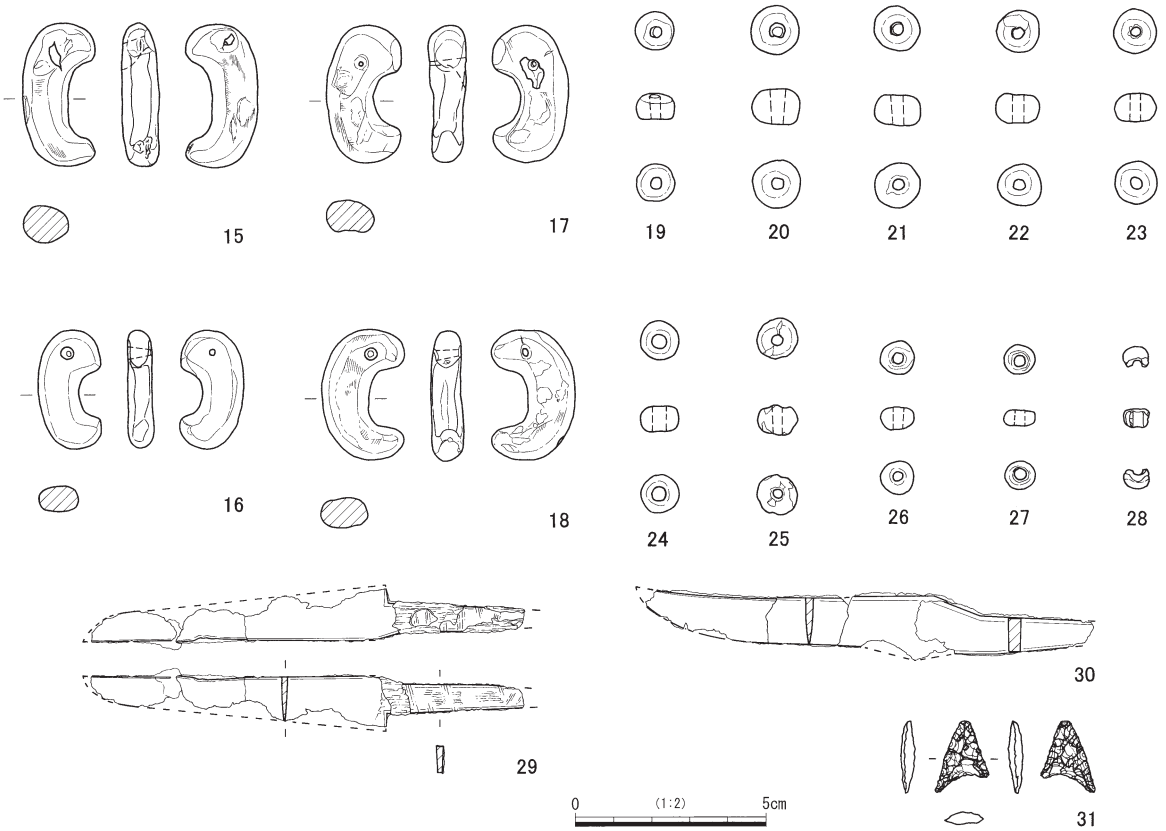


第56図　C9号墳出土遺物実測図1

玉は凝灰岩製で漂白色８個が出土した。25と28は上の床面、それ以外は下の床面からの出土である。

鉄製品　29と30は刀子で、茎部の一部と刃部先端が失われている。いずれも刃の断面は平造を呈する。残っている茎部は茎元幅から真っ直ぐに伸びる形状で、関の形状は刃部との境界が深く斜めに切れ込む。柄には木質が残り木製の柄と考えられる。30は柄から切先がわずかに屈曲する。柄には木質は認められず鉄の部分が厚い。何を柄の装具としたのか不明である。

その他の遺物　石室埋土から31の凹基式打製石鏃が出土した。シルト岩製で縄文時代の後・晩期に属すると推定され、古墳築造以前の遺物である。



第57図　C9号墳出土遺物実測図2

⑽　雲岩寺C10号墳

調査前の状況

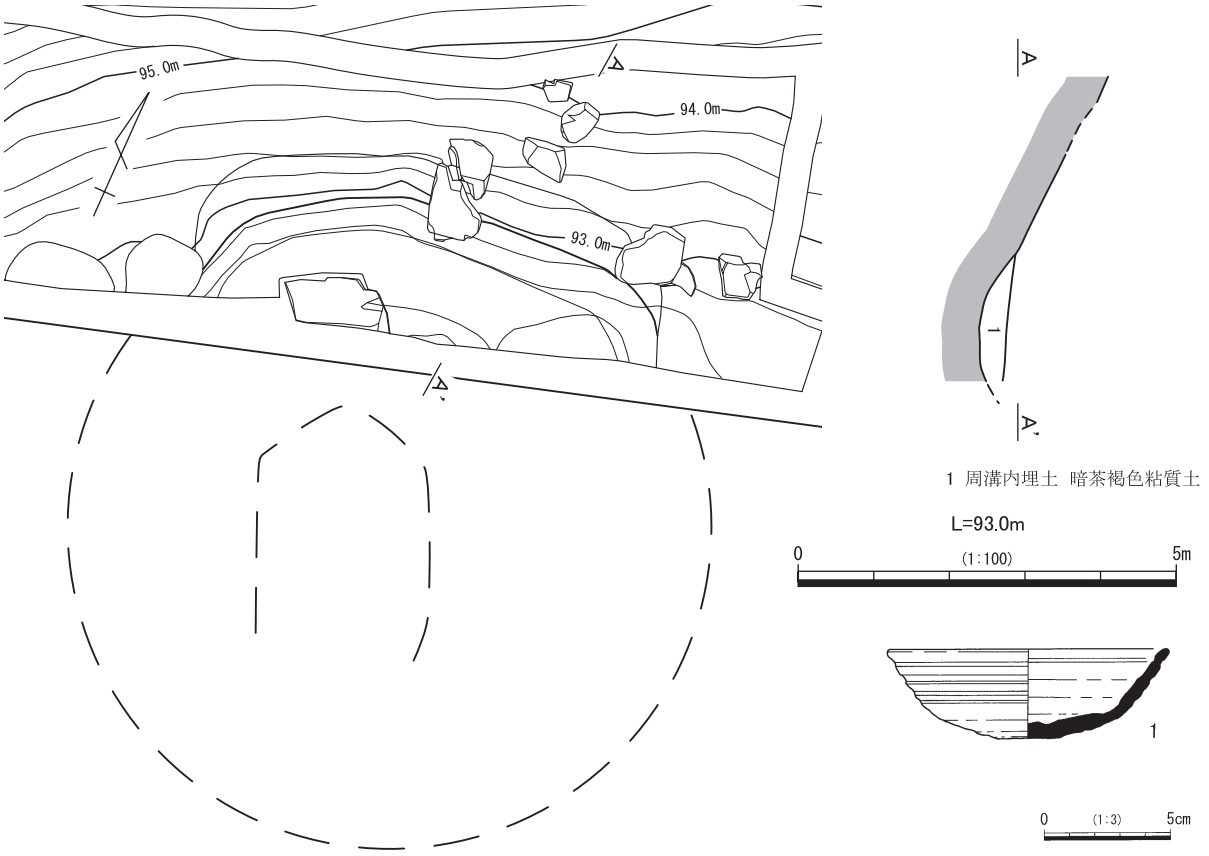
C10号墳は調査区西端より11m東に位置する。標高92.6mの等高線付近に築造されているため、調査範囲のC1号墳からC17号墳の中では、上段のグループに属する。さらにその位置は調査区南端にあたり、他の調査した古墳とはやや離れて存在し、別の単位群を形成していたと考えられる。その位置からすると調査外に存在し、昭和30年代にC群とされていた古墳群の一部ではないかと推定される。調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。さらに周溝以外、調査対象範囲からはずれていたため、周溝と墳丘の一部を調査したのみで、埋葬施設の調査は行っていない。

墳丘・周溝

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅1.1m、深さ0.35mを測る。周溝の調査であったので、墳丘の規模は不明である。

出土遺物

周溝から１の遠江須恵器編年Ⅴ期前葉の須恵器無蓋坏身と丹塗りで坏または小形盤と考えられる土師器片が出土した。周溝からの出土であり、はたしてこの古墳に伴い築造時期を決定できるかの判断はできないが、追葬や何らかの祭祀行為に伴うものとすれば、須恵器の時期がその時期を示している。



第58図　C10号墳墳丘図・出土遺物実測図

⑾　雲岩寺C11号墳

調査前の状況

C11号墳は調査区ほぼ中央に位置する。標高84.6mの等高線付近に築造されているため、調査範囲のC1号墳からC17号墳の中では、下段のグループに属する。さらにその位置は調査区南端にあたり、外に古墳の存在が認められれば、別の単位群を形成していた可能性も否定できない。調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C11号墳は斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.7m、深さ0.4mを測る。墳丘は東西5.5m、南北6.5m以上と考えられる。墳丘南側で標高81.6m、墳丘北側で標高84.6mを測り、現状での古墳の高さは3mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。一部、側壁から前庭にかけて側壁が認められないので明確ではないものの、東側側壁にはやや移動した縦積の礫があり、この礫は基底石の配列から玄門石と考えられる。よって石室の平面形態は擬似両袖式と考えておきたい。

天井石　検出の際、天井石は一部が架設された状態で残っていた。これからすれば床面から天井石までの高さは1.25mを測り、調査された古墳では広い空間といえよう。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、1枚の石を鏡石として設置し奥壁としている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに玄門石を据え長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は撹乱を受けている。

羨道・閉塞部　前庭は残っていなかったが、閉塞石は一部が残っていた。落下した側壁の石材も使用していることから、追葬時に積みなおしたものと推定される。

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高84.35m、下端で82.4mを測ることから、1.95mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。側壁基底石の据え付け穴は、石室下部に認められたが少ない。墓道は認められなかった。

遺物の出土状態

閉塞石と玄門に近いところから管玉1と複数の個体の須恵器が出土したが、甕は破砕されたのか破片となっていた。いずれにせよ追葬時に整理したと考えられる。永久歯の断片1個が発見されている。

出土遺物

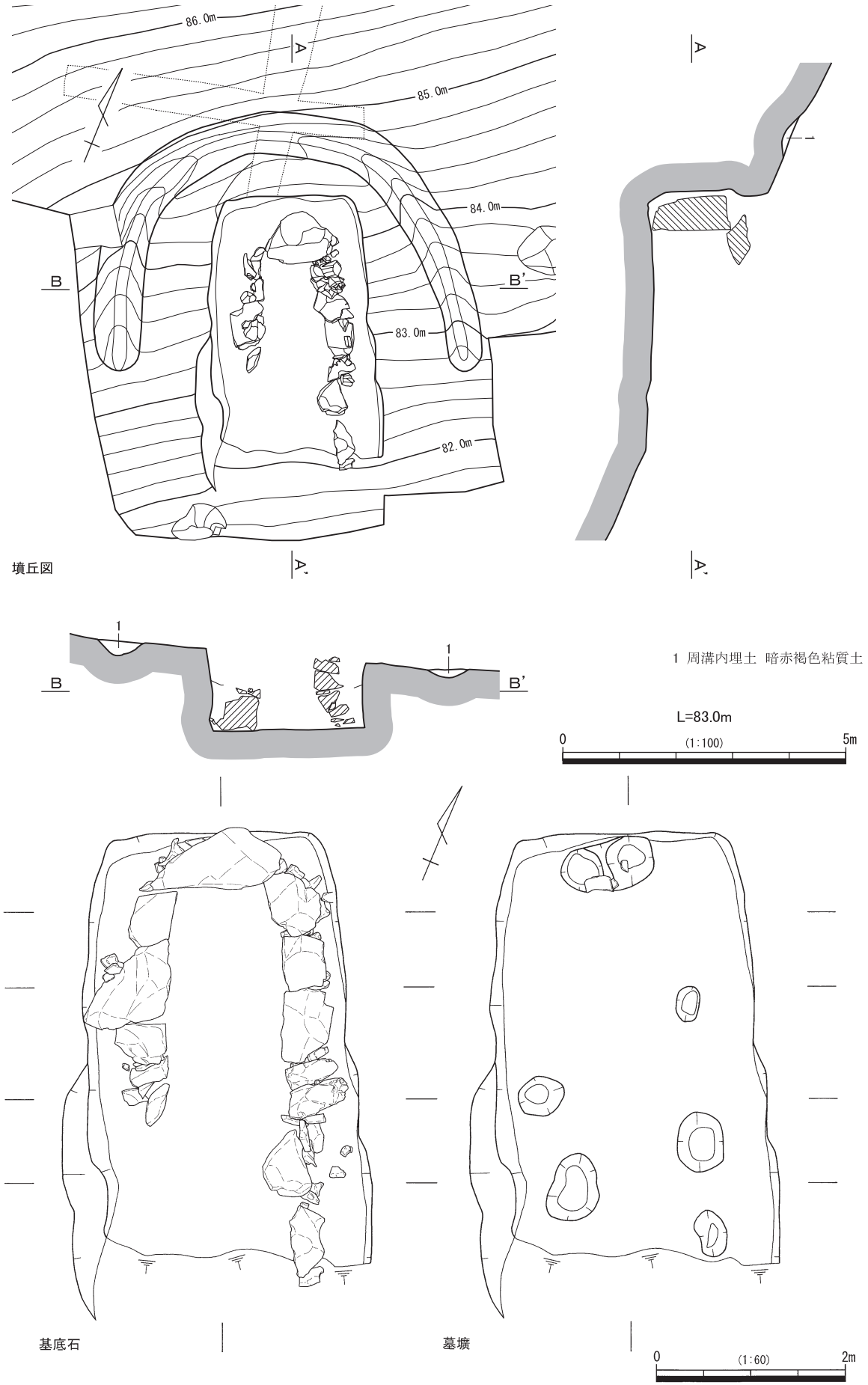
土器・装身具・鉄製品が出土した。

土器　坏1・2はB類で遠江須恵器編年Ⅴ期前葉に、その他の瓶類3、短頸壺の蓋4、瓹5については遠江須恵器編年Ⅳ期前半に併行する。甕6については底部尖り底で、自立して立てない。支えを持つか掘り据えたのであろうか。遠江須恵器編年Ⅳ期前半からⅣ期後半に併行すると推定される。

このようにみるとC11号墳出土の須恵器はⅣ期前半からⅤ期前葉の複数の時期にわたっていると判断される。C11号墳は出土した須恵器の時期からⅣ期前半に築造され、Ⅴ期前葉まで追葬が行われたと考えておきたい。

装身具　7は碧玉製の管玉である。

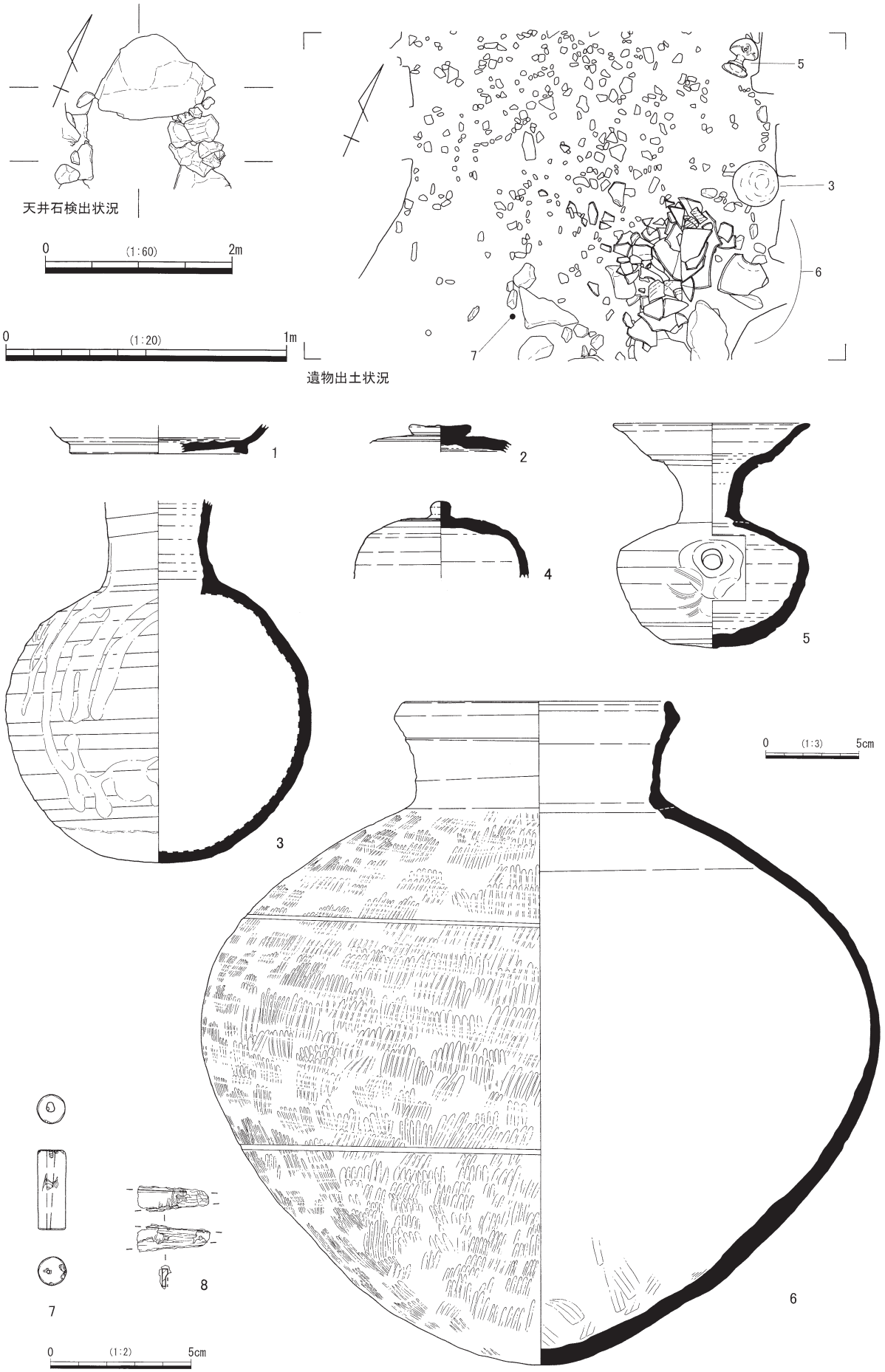
鉄製品　刀子8は柄と刀身外側に木質が残り、鞘に入れてあったと判断される。



第59図　C11号墳実測図

1　裏込土1
2　裏込土2
3　裏込土3
4　裏込土4
5　裏込土5

第60図　C11号墳横穴式石室実測図



第61図　C11号墳横穴式石室・出土遺物実測図

⑿　雲岩寺C12号墳

調査前の状況

C12号墳は調査区東端から38mほど西に位置し、標高88.8mの等高線付近に築造されているため、調査範囲のC1号墳からC17号墳の中では、上段のグループに属する。さらにその位置はC6号墳に近い位置で並列して築造されている。古墳の西側は一部を破壊し、南北に水道管を埋設していた。その際、古墳の石材は抜き取られていた。調査前は墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C12号墳は斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅1.2m、深さ0.4mを測る。墳丘は東西5m、南北4.5m以上と考えられる。墳丘南側で標高87.2m、墳丘北側で標高89.2mを測り、現状での古墳の高さは2mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。水道管埋設のため、奥壁から前庭にかけて一部の側壁が認められないので明確ではないが、両側壁の積み方に変化は認められないことから、石室の平面形態は無袖式石室と考えておきたい。

天井石　検出の際、天井石は一部が玄室に落下していた。奥壁の高さを参考にすると、床面から天井石までの高さは1.2mと推定され、調査された古墳では広い空間といえよう。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、1枚の石を鏡石として設置し奥壁としている。両側壁の基底石には一部に露頭している大型の石灰岩を使用している。埋置については穴を墓壙底面に掘り据え付けているが、水道管埋設のため基底石の一部を抜き取っていたため、据え付けの穴ではなく、水道管の下は抜き取り痕である。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに玄門石を据え長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は撹乱を受けている。

前庭・閉塞部　前庭と閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高88.7m、下端で87.4mを測ることから、1.3mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。

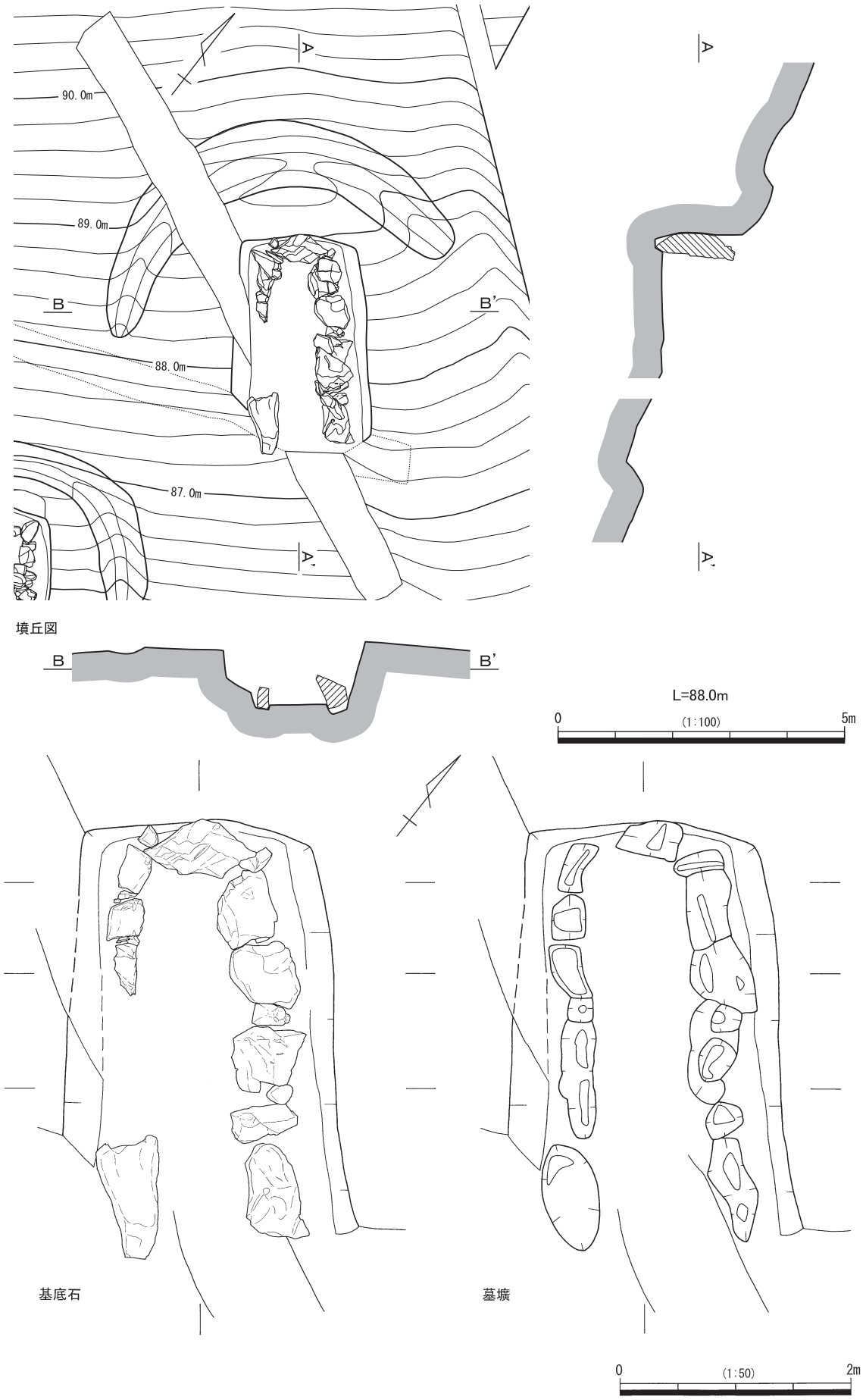
遺物の出土状態

石室奥壁に近いところから複数の個体の須恵器が破片となって出土した。いずれにせよ撹乱を受け副葬時の位置を留めていなかった。

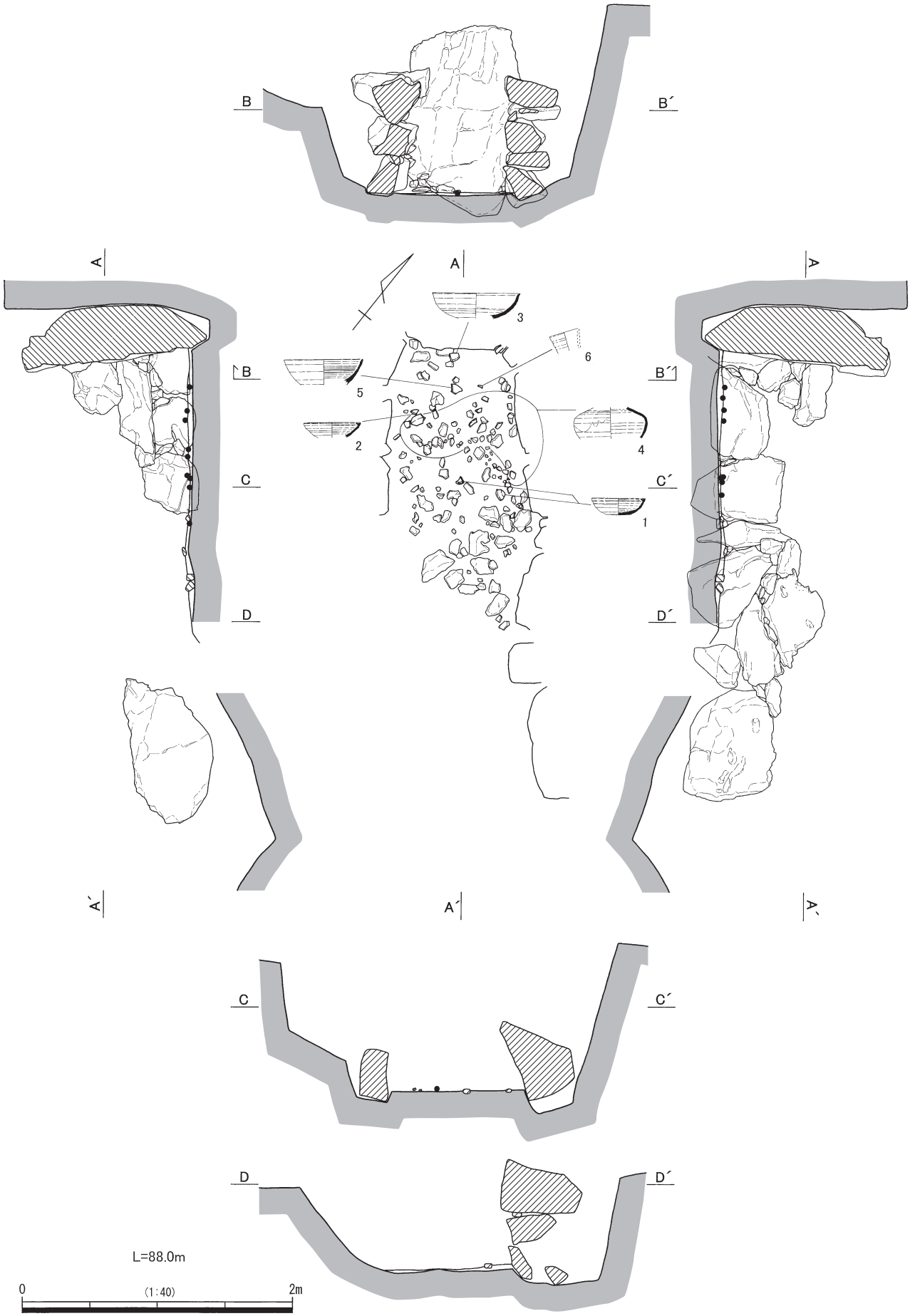
出土遺物

土器が出土した。

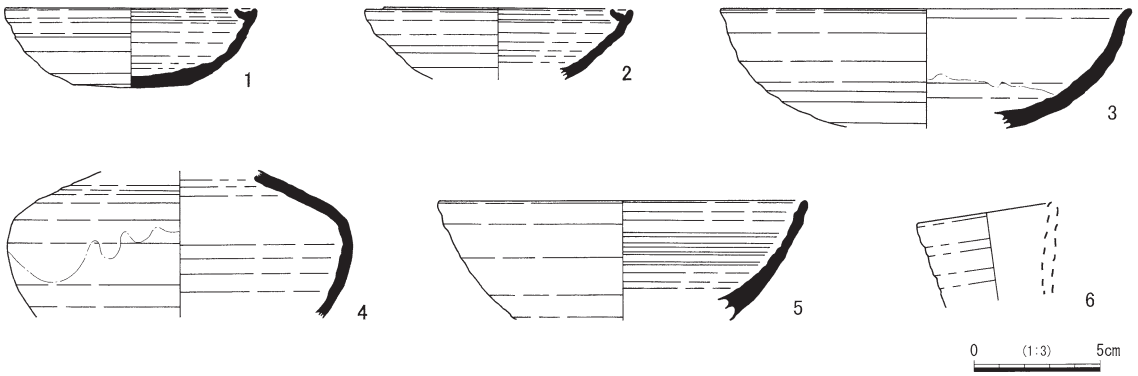
土器　坏身1・2はＨ類で、遠江須恵器編年Ⅳ期後半に、その他の高坏3、壺4、鉢5、平瓶6についても遠江須恵器編年Ⅳ期に併行すると推定される。C12号墳は出土した須恵器の時期からⅣ期前半から後半に築造されたと考えておきたい。



第62図　C12号墳実測図



第63図　C12号墳横穴式石室実測図



第64図　C12号墳出土遺物実測図

⑬　雲岩寺C13号墳

調査前の状況

C13号墳は調査区西端から53mほど西に位置し、標高95.6mの等高線付近に築造されているため、調査範囲のC1号墳からC17号墳の中では、最高位にあたる。調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C13号墳は同じ等高線上に石灰岩の露頭がみられるので、それを避け築かれている。その位置はC1号墳とC2号墳の周溝の隙間から上段にあたる。その点では近接するC1号墳とC2号墳に近い位置を選択していることから、両者との間になんらかの親縁関係があると推定される。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は認められなかったため、墳丘の規模は不明である。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。一部、奥壁から前庭にかけての側壁が認められないので明確ではないが、両側壁の積み方に変化は認められないことから、石室の平面形態は無袖式石室と考えておきたい。

天井石　検出の際、天井石は一部が奥壁に残り、他は玄室に落下していた。奥壁床面から天井石までの高さは、0.85mと推定される。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、1枚の石を鏡石として設置し奥壁としている。ただし幅が狭く不足したためか、両側壁側は礫を詰め奥壁として補っている。両側壁の基底石埋置については穴を墓壙底面に掘り、据え付けている。玄室の平面形は、長方形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに玄門石を据え長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は玄室前側が一部撹乱を受け、残っていない。

前庭・閉塞部　前庭と閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

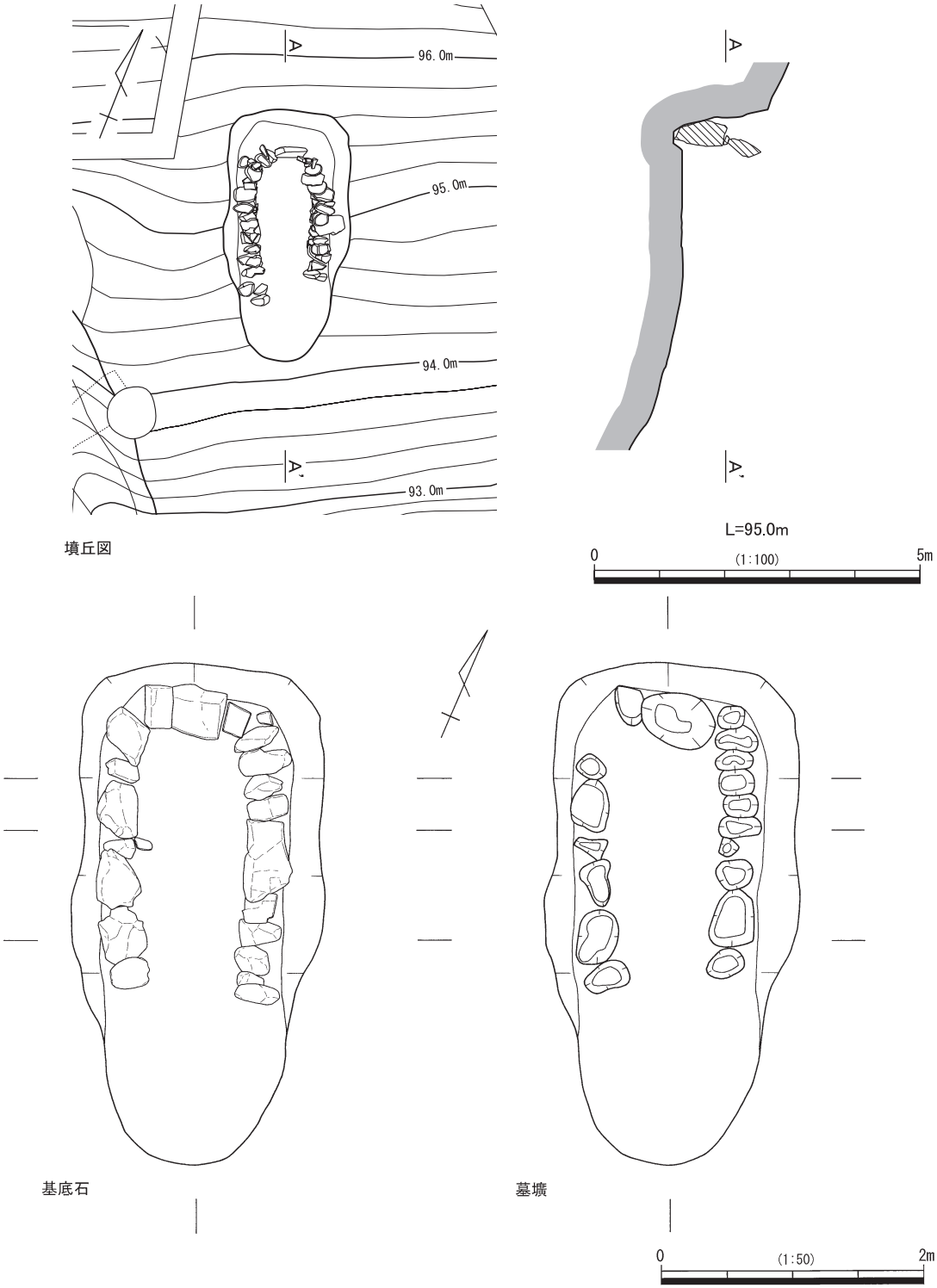
墓壙の奥壁上端で標高95.6m、下端で94.3mを測ることから、1.3mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。

遺物の出土状態

石室奥壁に近いところから須恵器甕1片が、礫床下から破損した鉄鏃1が出土した。追葬の際、前埋葬の副葬品である鉄鏃が床面の下に入ったと推定され、副葬時の位置を留めていなかった。

出土遺物

土器と鉄鏃が出土した。

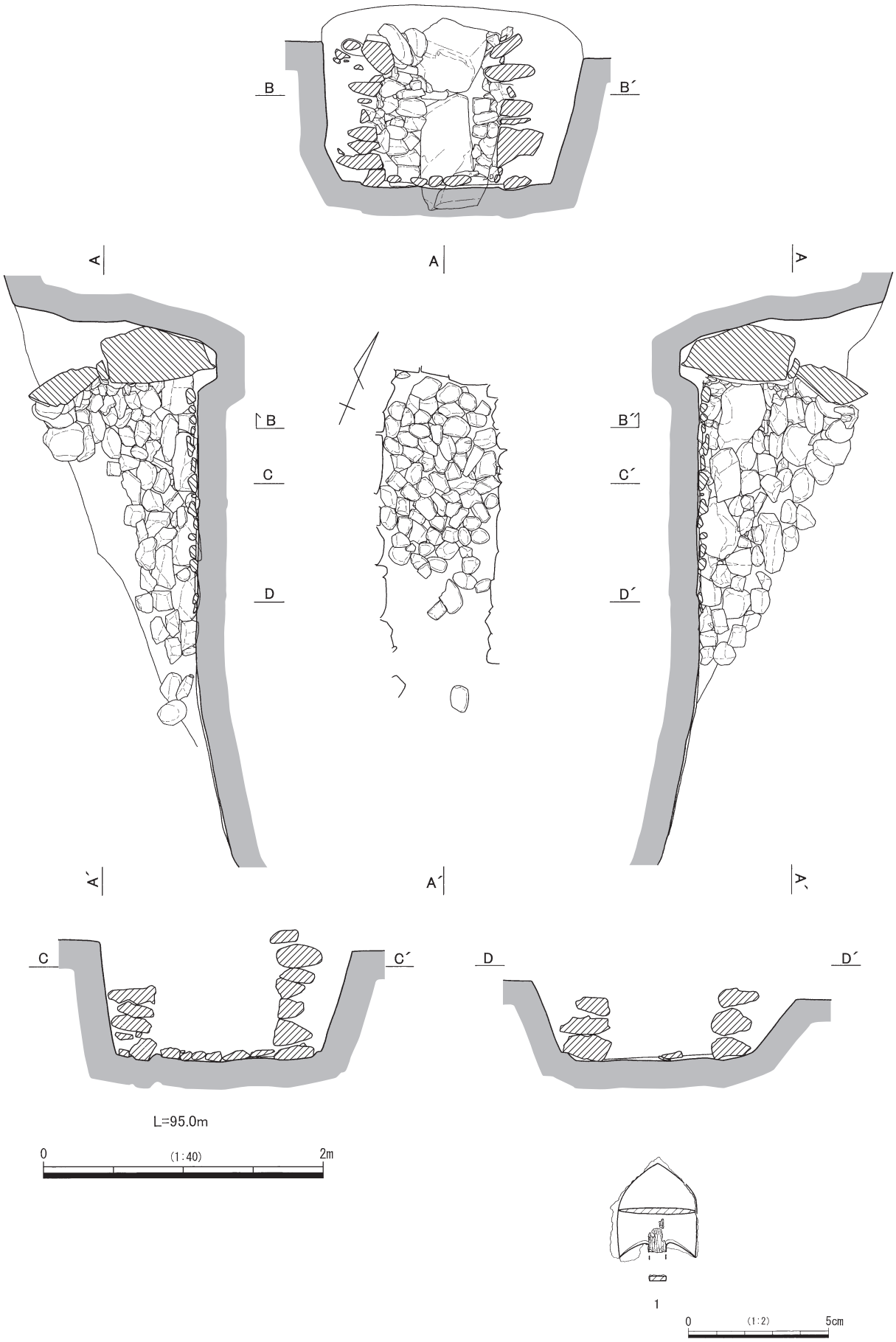


第65図　C13号墳実測図

土器　甕片は小破片のため図化していない。森山窯の製品であることから遠江須恵器編年Ⅳ期前半に併行する甕と推定される。C13号墳は出土した須恵器の時期から遠江須恵器編年Ⅳ期前半に築造されたと考えておきたい。

鉄製品　鉄鏃１は五角形の鏃身である。礫床下の墓壙から出土した。形態から遠江須恵器編年Ⅳ期前半に併行すると考えられる。追葬の際、前埋葬の副葬品が片づけられたと判断される。

C13号墳はⅣ期前半に築造され、同じ時期に追葬があったと推定される。



第66図　C13号墳横穴式石室・出土遺物実測図

⑭　雲岩寺C14号墳

調査前の状況

C14号墳はC15号墳とともに調査区東端から42～47mほど西に位置し、標高86.2～85mの等高線付近に築造されている。調査範囲のC1号墳からC17号墳は、いずれも東西に等高線にそって分布するが、C15号墳とC14号墳のみが斜面の中段域に築造されている。調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C14号墳は等高線が東西に並行する箇所の中段に築かれている。その点では近接するC15号墳に近い立地で、両者はなんらかの親縁関係にあると推定される。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.6m、深さ0.4mを測る。墳丘は東西3.3m、南北3.5m以上と考えられる。墳丘南側で標高84.8m、墳丘北側で標高86.2mを測り、現状での古墳の高さは1.4mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。一部、側壁から前庭にかけて側壁が認められないので明確ではないが、東側側壁に縦積の礫が移動しているが、玄門石と考えられるので、石室の平面形態は擬似両袖式と考えておきたい。

天井石　検出の際、天井石は一部が奥壁に架設され、さらに玄室に落下していた。床面から天井石までの高さは、0.7mと低い。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、1枚の石を鏡石として設置し奥壁としている。側壁の基底石埋置については穴を墓壙底面に掘り、据え付けている。東側側壁はすべての基底石を埋置しているが、西側については2ヶ所を掘り据えている。玄室の平面形は、長方形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を埋置し、さらに玄門石を据え長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は一部撹乱を受け、残っていない。

羨道・閉塞部　羨道部は残っていなかった。閉塞石は1列3段ほど残っていた。

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端で標高86.2m、下端で85.1mを測ることから、1.1mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。

遺物の出土状態

石室礫床からは成人と小児の歯と人骨が出土した。石室埋土からは土師器甕と坏片が出土した。撹乱された際、かき出されたのであろう。いずれにせよ副葬時の位置を留めていなかった。

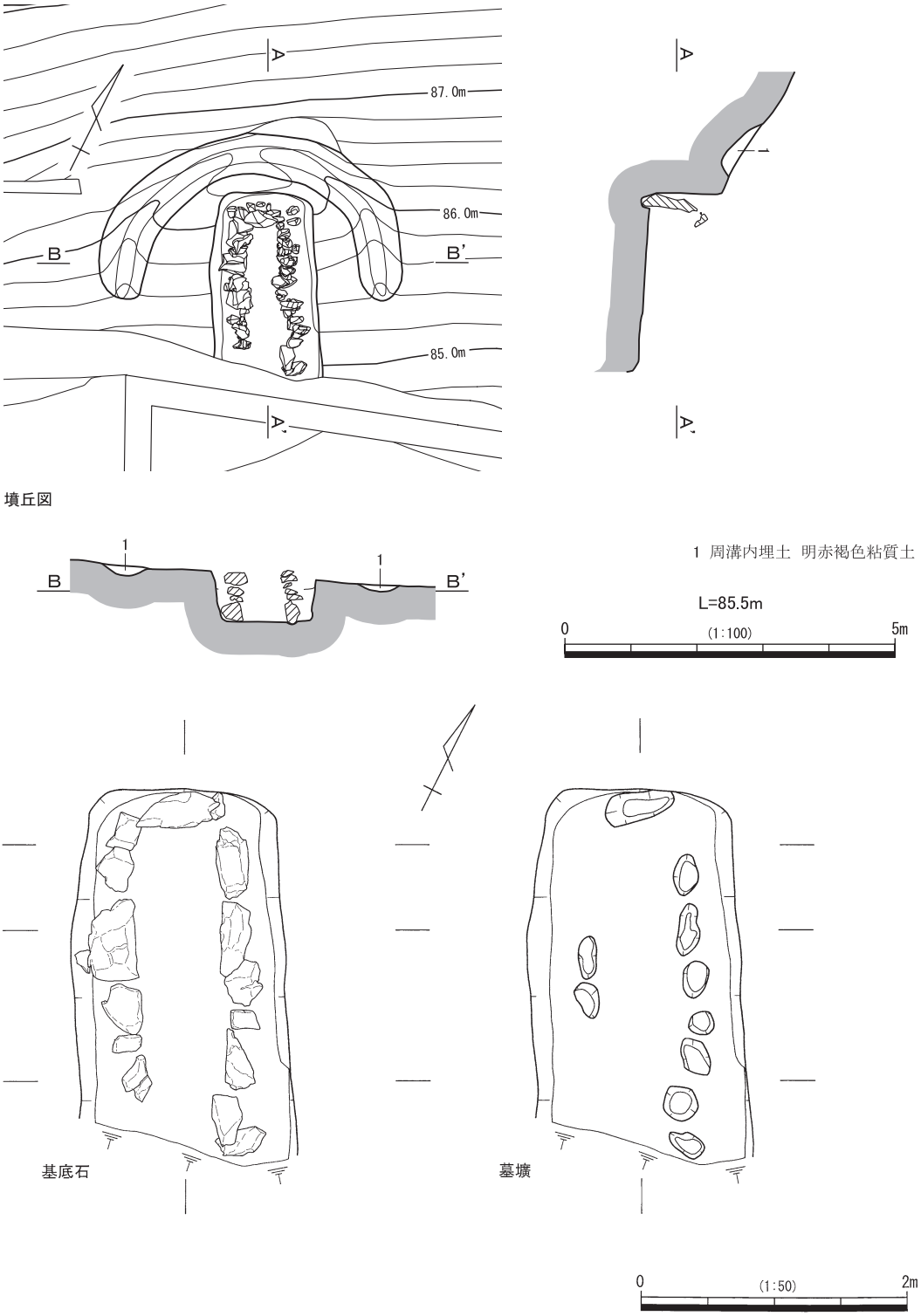
出土遺物

土器と鉄鏃が出土した。

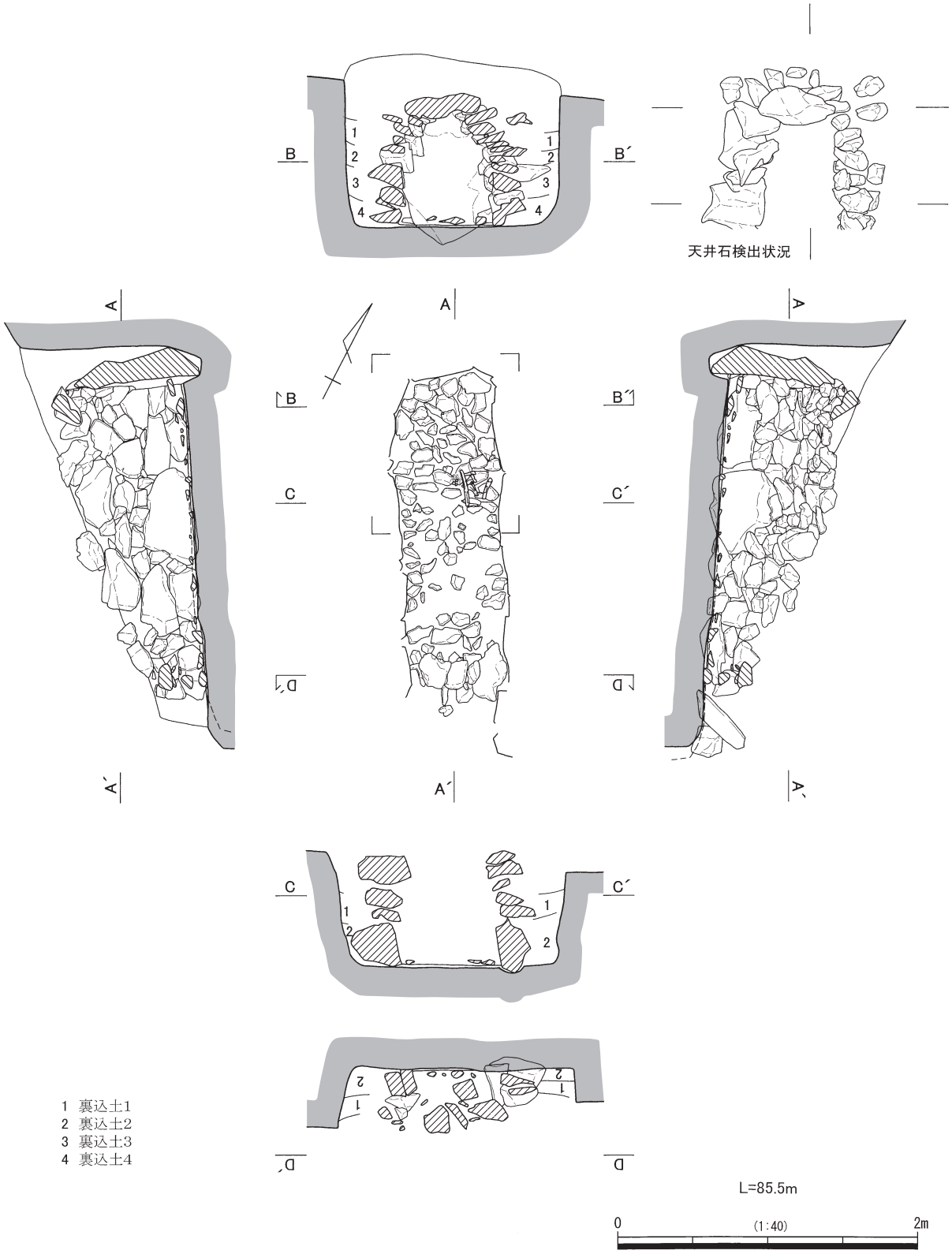
土器　坏1は外面をヘラで押圧もしくはかき取って成形している。小形甕2は口縁部が外反し、端部のみ内湾する。坏と小形甕は遠江須恵器編年Ⅳ期に併行すると推定される。図化しなかった小破片に丹塗りの土師器盤がある。遠江須恵器編年Ⅴ期に併行すると考えられる。C13号墳は出土した土師器の時期から遠江須恵器編年Ⅳ期に築造されたと考えておきたい。

出土した人骨から追葬の行われていたことは判明するが、限られた資料からはその時期は明確ではなく、遠江須恵器編年Ⅳ期からⅤ期の間であろうとしておきたい。

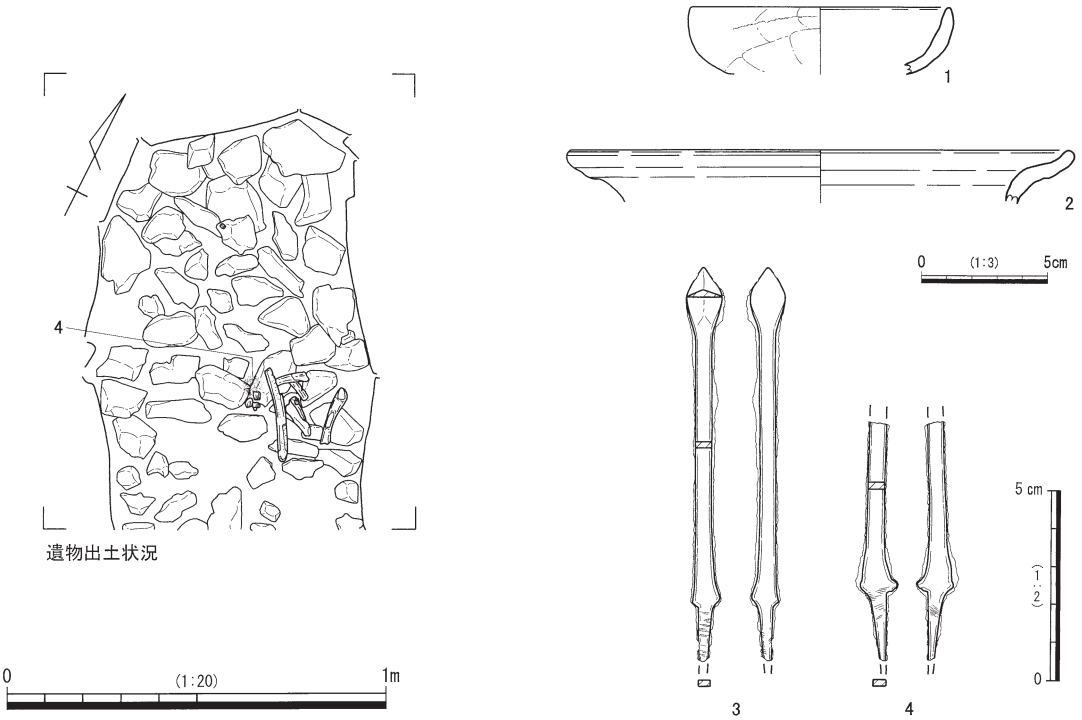
鉄製品　鉄鏃3は撫角三角形の鏃身である。鉄鏃4は茎関のある茎部である。いずれも石室埋土から出土した。



第67図　C14号墳実測図



第68図　C14号墳横穴式石室実測図



第69図　C14号墳遺物出土状況・遺物実測図

⒂　雲岩寺C15号墳

調査前の状況

C15号墳はC14号墳とともに調査区東端から30～36mほど西に位置し、標高87.0～85.6mの等高線付近に築造されている。調査範囲のC1号墳からC17号墳は、いずれも東西に等高線にそって分布するが、C15号墳とC14号墳のみが斜面の中段域に築造されている。調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

C15号墳はＣ群の分布域の中段に築かれている。その点では近接するC14号墳に近い立地で、両者はなんらかの親縁関係にあると推定される。墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

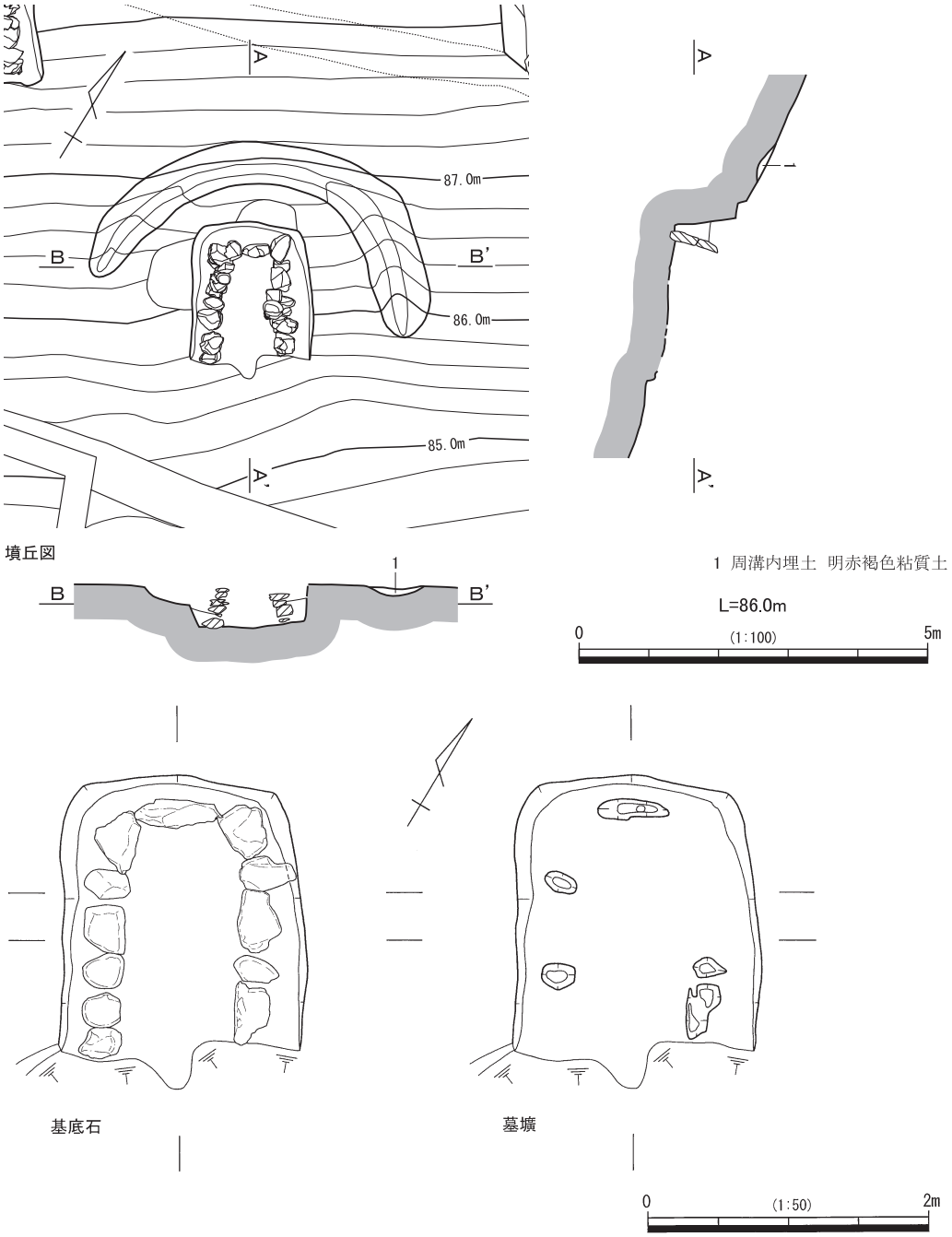
古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.6m、深さ0.25mを測る。墳丘は東西3.8m、南北3m以上と考えられる。墳丘南側で標高85.6m、墳丘北側で標高87mを測り、現状での古墳の高さは1.4mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。一部、側壁から前庭にかけて側壁が認められないので明確ではないが、平面形態は擬似両袖式、あるいは無袖式石室と考えられる。

天井石　検出の際、天井石が認められず、一部、玄室の側壁が抜き取られていたので、ともに外部に持ち出されたと推定される。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、2枚の石を上下に設置し奥壁としている。側壁の基底石埋置については穴を墓壙底面に数か所掘り、据え付けている。石室の規模が小さいため、すべての基底石を埋置し安定する必要がなかったと推定される。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を据え長さと幅を決めた後、左右の側壁の基底石を据える手順をとっている。床面の礫床は一部撹乱を受け、残っていない。



第70図　C15号墳実測図

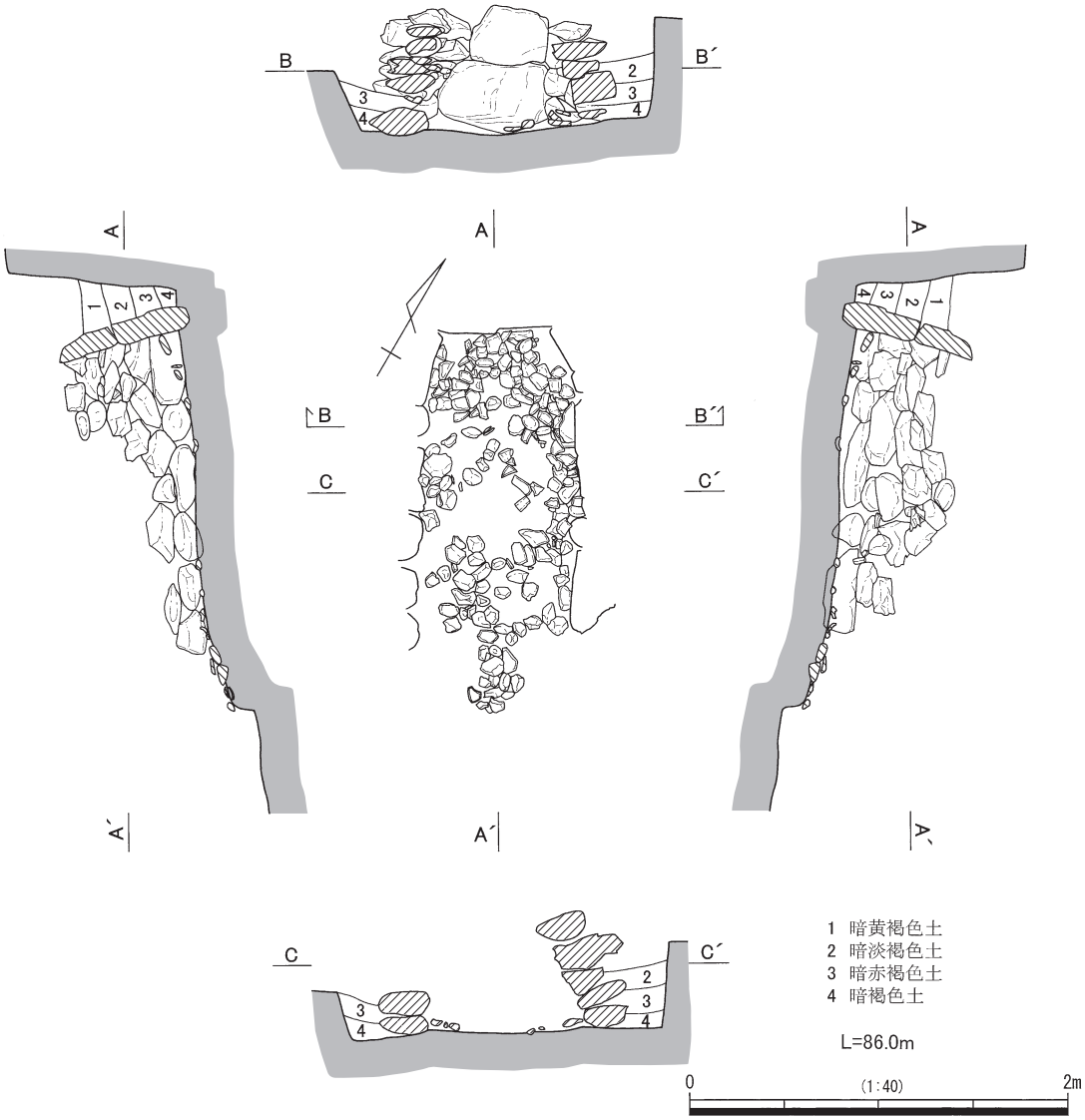
羨道・閉塞部　羨道もしくは前庭と閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

墓壙の奥壁上端は撹乱を受けているが、上端残部で標高86.6m、下端で85.75mを測ることから、0.85m以上を掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。

遺物の出土状態

石室前側からは器種不明の須恵器片1片が出土した。石室は撹乱された際、かき出されたのであろう。いずれにせよ副葬時の位置を留めていなかった。確認調査のおり、この古墳の前面から長頸壺が出土し、この古墳に伴うと推定された。



第71図　C15号墳横穴式石室実測図

出土遺物

土器片が出土したが、破片のため図化できない。帰属時期は不明である。C15号墳の築造時期は明確ではない。

⑯　雲岩寺C16号墳

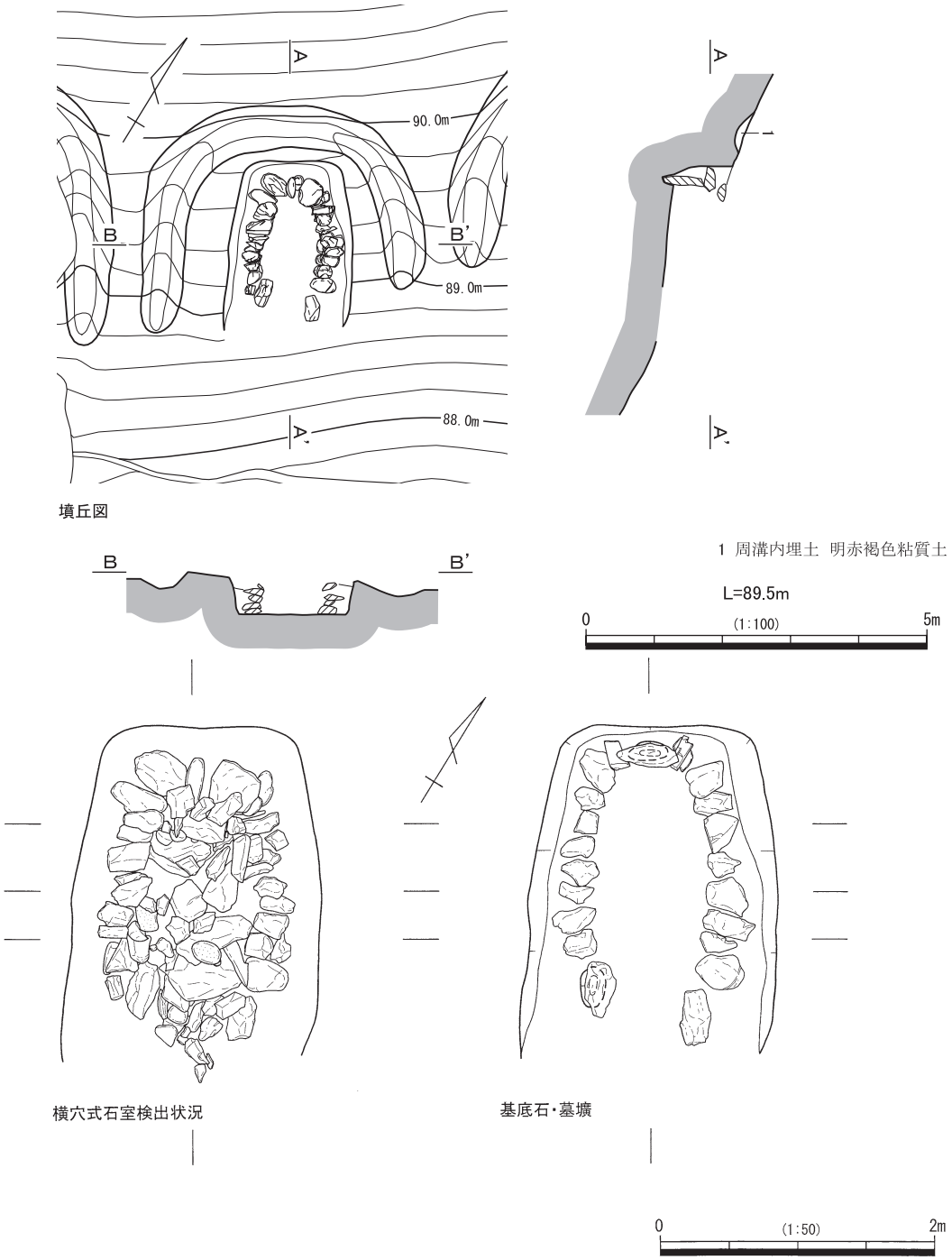
調査前の状況

C16号墳は調査区ほぼ中央に位置し、標高89.8mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

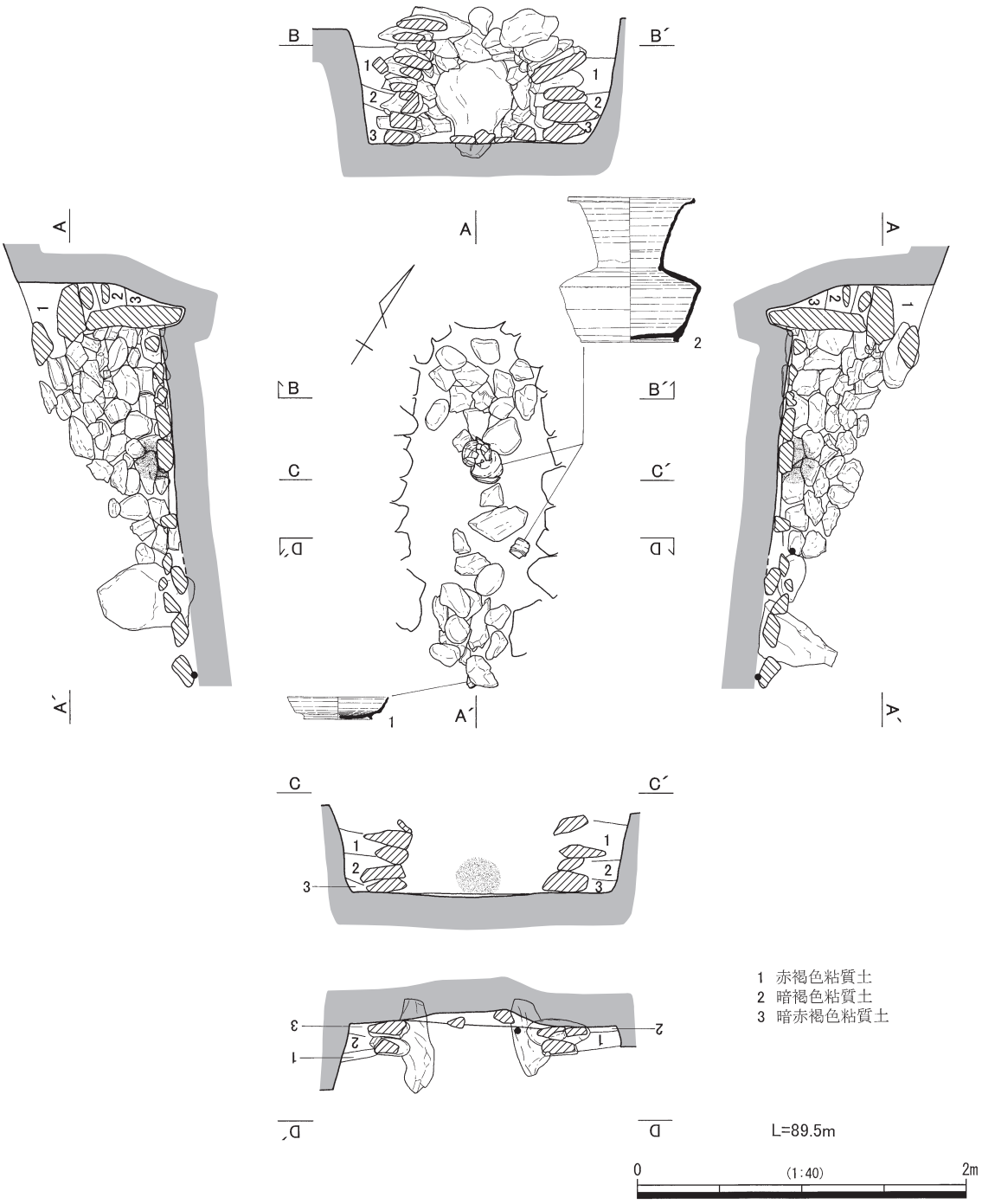
墳丘・周溝

C16号墳は調査区上段の斜面に属し、等高線が東西に走行する箇所にC4号墳とC5号墳の中間に築かれている。その点ではこれら近接する3基はきわめて近い関係にあると推定される。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.55m、深さ0.3mを測



第72図　C16号墳実測図



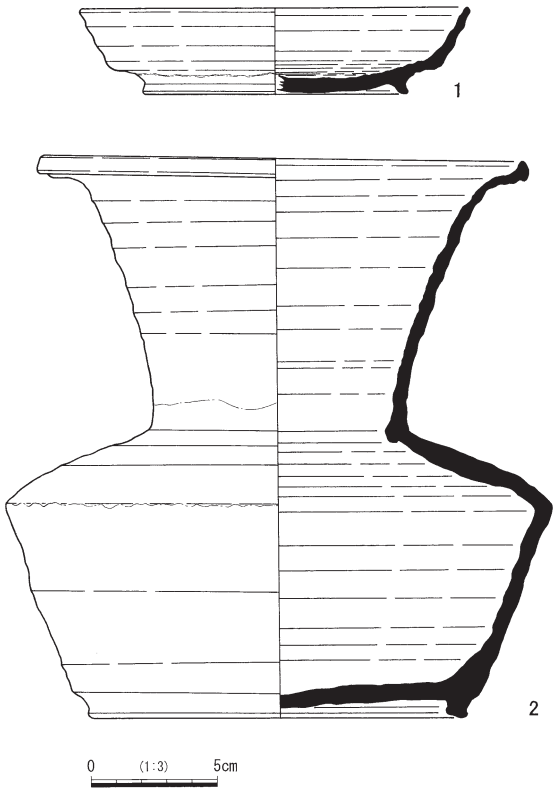
第73図　C16号墳横穴式石室実測図

る。墳丘は破壊されているため推定値ではあるが、東西3m、南北3m以上と考えられる。墳丘南側で標高88.6m、墳丘北側で標高89.8mを測り、現状での古墳の高さは1.2mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。石室の平面形は立柱石によって区別された擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は南側を除いて比較的良好であった。

天井石　検出の際、奥壁部に一部架設され、多くが玄室に落下した状態の天井石が認められた。落下状況から玄門部までは架設されていたと判断される。



第74図　C16号墳出土遺物実測図

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、１枚の鏡石を設置し奥壁としている。左右両側壁の基底石と玄門の立柱石は据えるための穴を掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を据え玄門部を設置し長さと幅を決めた後、左右の側壁とも基底石は玄門側から据える手順をとっている。最後の調整はやや小ぶりの礫を小口積みにして奥壁との間で調整をしている。床面の礫床は大型の礫をまばらに敷いていた。

羨道・閉塞部　羨道の側壁は残っていなかった。閉塞石は前庭の１箇所で、下段のみ残っていた。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高89.8m、下端で88.95mを測ることから、0.85mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈している。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。墓道は残っていなかった。

遺物の出土状態

石室と前庭部からは須恵器広口長頸壺、坏身など土器類が出土した。石室の規模と遺物の出土状態から単次葬の副葬品と判断される。

出土遺物

土器が出土した。

土器　坏１の坏身は坏Ｂ類で遠江須恵器編年Ｖ期前葉に比定できる。２の壺は胴部中位で鋭く屈曲するタイプで、Ｖ期前葉に比定できる。石室内で比較的副葬状態をとどめていたこの壺は、C16号墳の埋葬時期を表わすと判断される。

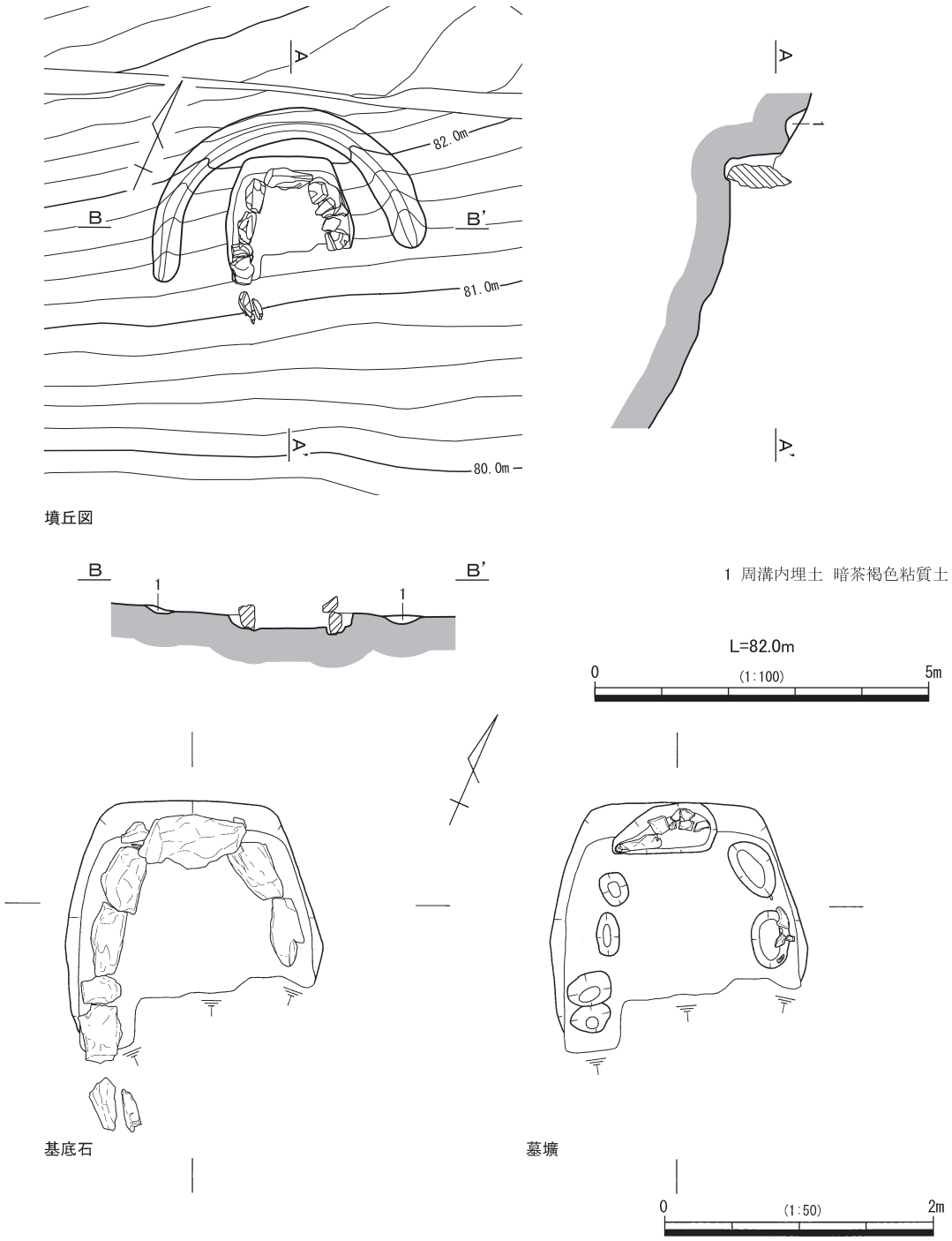
⑰　雲岩寺C17号墳

調査前の状況

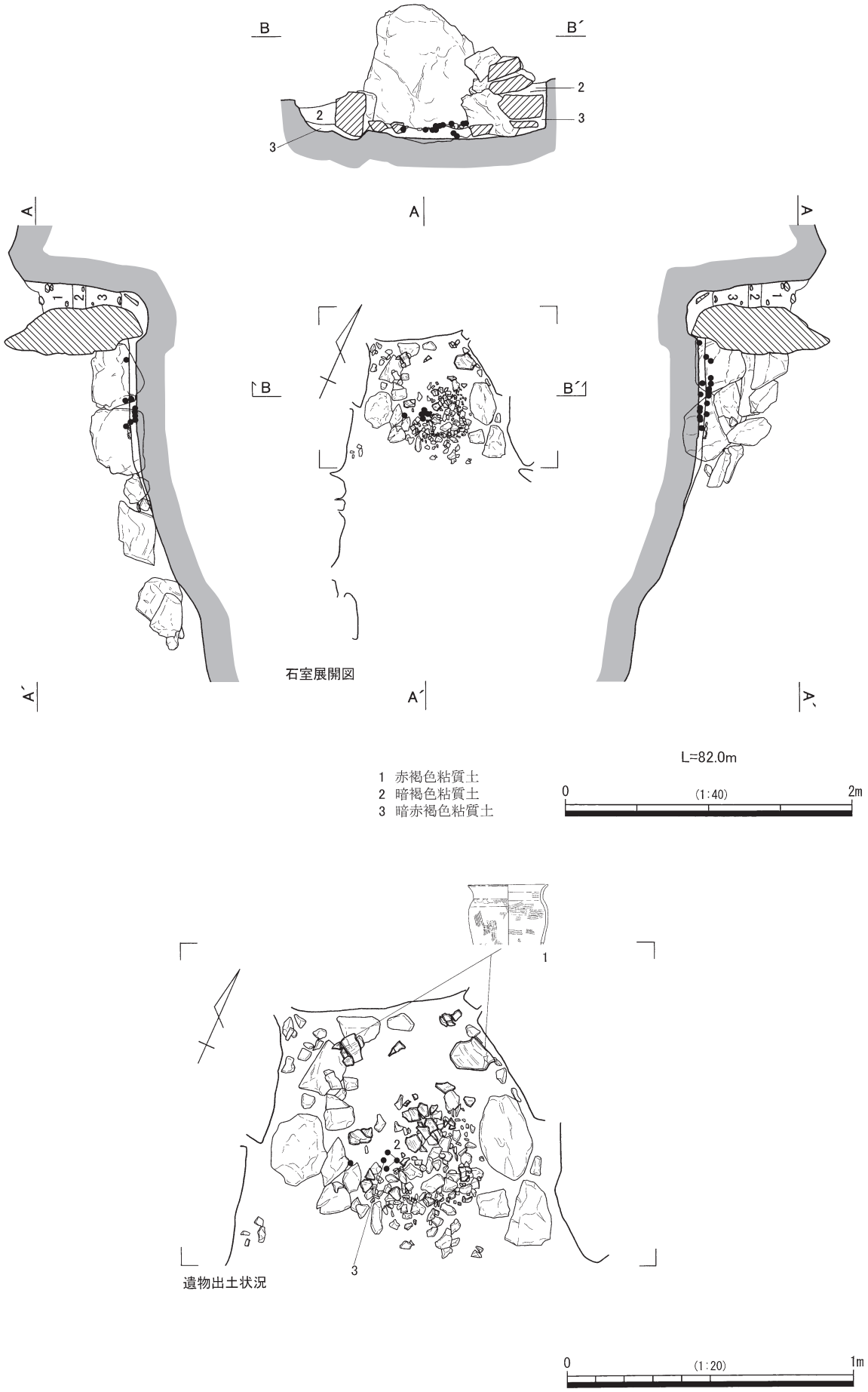
C17号墳は調査区東端に位置し、標高82mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていた。

墳丘・周溝

C17号墳は東側のC7号墳とC8号墳の中間に属し、丘陵上部斜面に築かれている。C7号墳、C8号墳、C9号墳とC11号墳とともに下段域に築造されている。墳丘の盛土はほとんど確認できなかったが、もとは石室を覆う程度の盛土があったと考えられる。



第75図　C17号墳実測図



第76図　C17号墳横穴式石室実測図

古墳を区画する周溝は斜面の上部を半月状に掘削している。周溝の規模は、幅0.45m、深さ0.35mを測る。墳丘は破壊されているため推定値ではあるが、東西3.2m、南北2.5mと考えられる。墳丘南側で標高80.8m、墳丘北側で標高82.0mを測り、現状での古墳の高さは1.2mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。石室は左側壁の大半と前庭の側壁が消失しているため残存部からの推定ではあるが、その平面形態は無袖式石室の可能性が高い。

天井石　検出の際、天井石が認められなかった。落下した様子もなく、転用のため石室を破壊し外部に運び出されたと判断される。

玄室　石材の抜き取りが行われ、検出時には側壁の一部と奥壁側の礫床が残っていたのみであった。奥壁は一枚石の鏡石が置かれていた。さらにこの奥壁を埋置して据えるための穴が掘られ、この穴内には奥壁基底を安定するための栗石を下に設置していた。床面の礫床は一部が残っていた。この礫床上には長径20～30cmの礫を数点置いている点で、この大型礫は棺台石の可能性がある。

前庭・閉塞部　前庭と閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

墓壙は玄室の奥壁側が残っていた。平面形は残っている墓壙下端から奥壁側の狭まった長方形を呈していたと推定される。石室開口部は南東を向いている。墓道は不明である。

遺物の出土状態

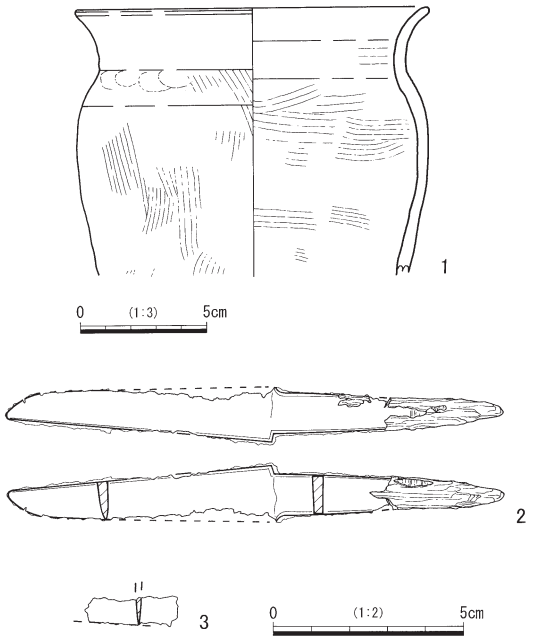
石室奥壁に近い礫床から土師器小形甕と刀子２が出土した。

出土遺物

土器と鉄製品が出土した。

土器　小形甕１は内外面ともにハケ目調整を施す。遠江須恵器編年Ⅳないし Ⅴ期に併行する遠江の甕と推定される。C17号墳の築造時期は限られた資料からは明確ではなく、甕の時期である遠江須恵器編年Ⅳ期からⅤ期の間であろうとしておきたい。

鉄製品　２と３は刀子である。２はほぼ全形を知りうるが、茎部の長いタイプの刀子である。３は茎部片であろう。小型製品である。



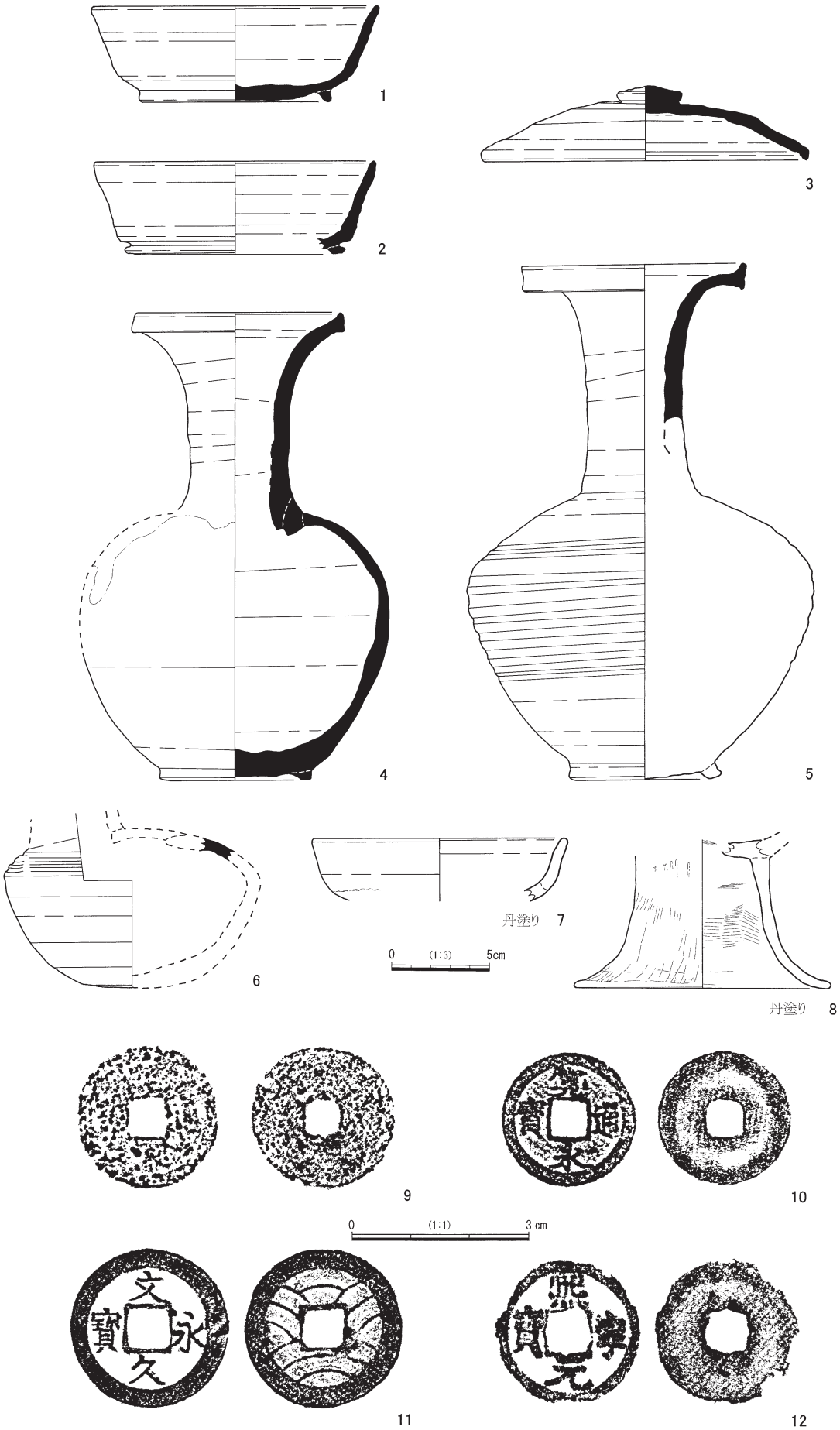
第77図　C17号墳出土遺物実測図

３　確認調査の出土遺物

先行して実施された確認調査において、雲岩寺Ｃ群の範囲からは古墳群の副葬品と考えられる須恵器や土師器が出土しているので、以下に報告したい。

1・2・3は遠江須恵器編年Ｖ期前葉の坏身と坏蓋である。1はC2号墳付近からの出土である。4・5の長頸壺は遠江須恵器編年Ｖ期前葉に位置づけられる。C7号墳とC15号墳の間からの出土であり、出土したトレンチの位置からすればC15号墳から落下したのではないかと推定される。するとこれらの長頸壺はC15号墳の年代の一点を示している可能性が高い。6の平瓶は遠江須恵器編年Ⅳ期に、7の土師器盤は遠江須恵器編年Ⅳ期に併行する丹塗り製品で、暗文は認められない。8の土師器脚付盤は遠江須恵器編年Ｖ期前葉に併行する丹塗り製品で、坏部を欠く。2・3・6・7・8の土器については取上げ記録から古墳との関連は把握できなかった。

9は寛永通宝の鉄銭、10は新寛永通宝でいずれも三岩稲荷の祠付近から採集された。おそらく賽銭であろうと推定される。三岩稲荷が少なくとも江戸時代中期から後期には建立されていたと、この銭貨から推定される。11は幕末の文久永宝でC3号墳周辺のトレンチから出土した。「文」が楷書となった「真文」と呼ばれるものである。12は熙寧元宝で、長年の使用で縁も欠け薄くなっている。包蔵地の3区に該当する付近から出土した。



第78図　C古墳群出土遺物実測図

第５節　雲岩寺Ｃ古墳群の評価

雲岩寺古墳群は人形山とそれに隣接する丘陵にＡ群、Ｂ群、Ｃ群と３群の支群に分れて分布する。

そもそも古墳群の名称となった雲岩寺とは、丘陵のふもとにある曹洞宗竜泉寺の前身、雲岩寺の寺名に由来する字（あざな）である。1960年代の分布調査によって、Ａ群は竜泉寺裏山に４基が存在したとされ、Ｂ群は人形山１号墳のある頂部高132.5mの丘陵とその斜面に分布し、Ｃ群は海抜100～80mの丘陵斜面に分布するとされた。

さらに雲岩寺Ｃ群とは、今回調査された東側に存在した古墳群がＣ群とされていた。この従来のＣ群は1960年代に土取りによって若干例を除いて破壊消滅したとされていたが、今回の確認調査によって新たに古墳が発見され、その結果、Ｃ群の古墳の分布範囲は大きく東側に広がった。ところで両者の関係は、古墳群の分布位置からするとC10号墳とC1号墳が従前からの古墳の可能性があり、それ以外が新発見の古墳といえよう。

C10号墳とC1～C9号墳、C11～C17号墳との間に空白域が認められた。つまり従前のＣ群とC1号墳を除く新発見のＣ群との間に分布の空白域があって、C10号墳とそれより西側の古墳群が、1960年代に消滅した古墳とともに、別の小支群（西小支群と称する）として分離できる。それを受けC1号墳と新発見の古墳のまとまりは別に東小支群として分離し、Ｃ群の古墳群を西小支群と東小支群として二分しておきたい。

Ｃ群はＡ群、Ｂ群の立地に比べ地形的に急斜面に位置し、古墳の立地としては良好な場所とはいいがたく、今回、調査した１区と３区の丘陵尾根がより古墳の立地としては一般的といえよう。このへんもなにゆえＣ群が急斜面に築造したのか疑問が残る点である。

すでに述べたように今回、発掘調査を実施した17基の古墳は、周溝のみ調査したC10号墳以外、すべて東小支群であった。その中でも古墳築造地は石灰岩の露頭地を避け、基盤層が土からなる場所を選択していた。そのため岩層に沿った場所を避け、東西に並列する分布を示していた。以上、２点で制約を受けた立地といえよう。

つぎに調査した雲岩寺Ｃ群・東小支群の特徴をいくつかの点からみることとしたい。

１　墳丘と埋葬施設

今回、発掘調査を実施した17基の古墳については、別表に築造時期と追葬時期を掲げた。そのうち後世の撹乱と周溝部のみの調査であったため、２基が年代の指標となる副葬品に欠き築造年代が不明であった。その中で確認調査によって、C15号墳周辺から遠江須恵器編年Ⅴ期前葉の壺が発見されていることから、この壺がC15号墳の副葬品の可能性を指摘した。このことからC15号墳の築造年代はⅤ期前葉と推定したい。以下、年代の判明した古墳について数項目にわたって検討したい。

⑴　墳丘の規模

調査された古墳は斜面に造られたため、墳丘を巡る周溝は全周することなく半月状に掘削され、墓域の区画と斜面から流れ落ちる雨水を左右に振り分け流す役割を担っていた。墳丘の規模を比較すると、C1・C8号墳は長径9m前後で、同時に築造時期が遠江須恵器編年Ⅲ期中葉までと古い。これが最大クラスである。C14・C15・C16・C17号墳は長径3.8～3.0mで、同時に築造時期が遠江須恵器編年Ⅳ期、Ⅴ期前葉と相対的に新しい古墳である。これが最小クラスである。それ以外が中間のグループであるが、このグループもC2・C3号墳のように長径8.0～7.5mが第２位、C4・C5・C6・C7・C9・C11・C12号墳のように長径6.5～4.5mが第３位となる。この墳丘規模第３位の古墳が、７基を数え、同時に築造時期が

古墳	小支群	単位群	石室残存長m	玄室長	玄室幅	奥壁幅	羨道長	羨道幅	築造時期
C1	東	A単位群	5.2	5.2	1.34	1.32	／	／	Ⅲ期前葉
C2	東	A単位群	4.02	2.55	1.2	0.85	0.9	0.92	Ⅳ期後半
C3	東	A単位群	4.95	3.32	1.47	0.8	／	／	Ⅳ期後半
C4	東	B単位群	2.65	2.65	1.47	1.2	／	／	Ⅳ期前半
C5	東	B単位群	3.94	2.65	1.15	0.8	1.1	0.94	Ⅳ期前半
C6	東	C単位群	3.8	2.1	1.03	0.5	1.45	0.94	Ⅳ期前半
C7	東	F単位群	4.03	4.03	1.25	0.75	／	／	Ⅳ期前半
C8	東	F単位群	4.95	3.4	1.4	欠	1.55	0.65	Ⅲ期中葉
C9	東	E単位群	3.7	2.75	1.32	0.65	0.9	1.15	Ⅳ期前半
C10	西	／	／	／	／	／	／	／	?
C11	東	E単位群	3.72	3.72	1.25	0.95	／	／	Ⅳ期前半
C12	東	C単位群	3.72	3.32	1.03	0.65	／	／	Ⅳ期前半
C13	東	A単位群	2.3	2.3	0.85	0.65	／	／	Ⅳ期前半
C14	東	D単位群	2.54	2.54	0.65	0.55	／	／	Ⅳ期
C15	東	D単位群	1.96	1.96	0.83	0.55	／	／	Ⅴ期前葉?
C16	東	B単位群	1.98	1.98	0.8	0.5	／	／	Ⅴ期前葉
C17	東	F単位群	2.1	2.1	1.2	0.65	／	／	Ⅳ期

表2　石室規模一覧

遠江須恵器編年Ⅳ期前葉であり、これがＣ群の最大公約数である。

したがって古い古墳は大きく、新しい古墳は小形の傾向はあるものの、すべて小形ということではないらしい。序列第２位のC2・C3号墳の築造時期が遠江須恵器編年Ⅳ期後半であり、序列第３位の古墳より新しく、隣接したこの古墳２基には別の理由があると思われる。

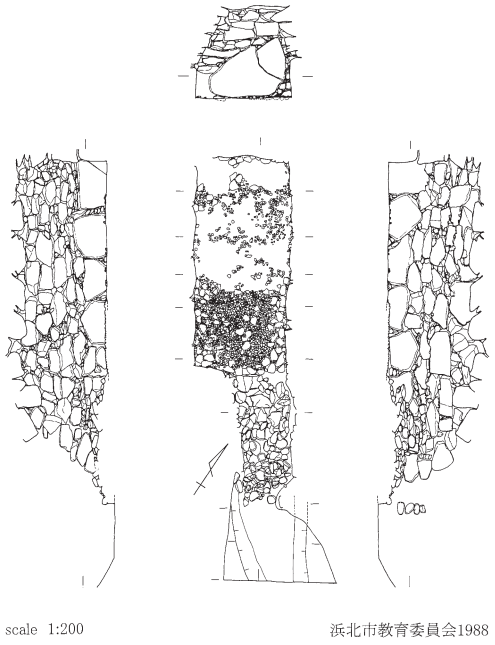
⑵　横穴式石室

雲岩寺Ｃ古墳群17基の古墳のうち、周溝部のみ調査したC10号墳を除く16基は、主体部を横穴式石室とする古墳であった。

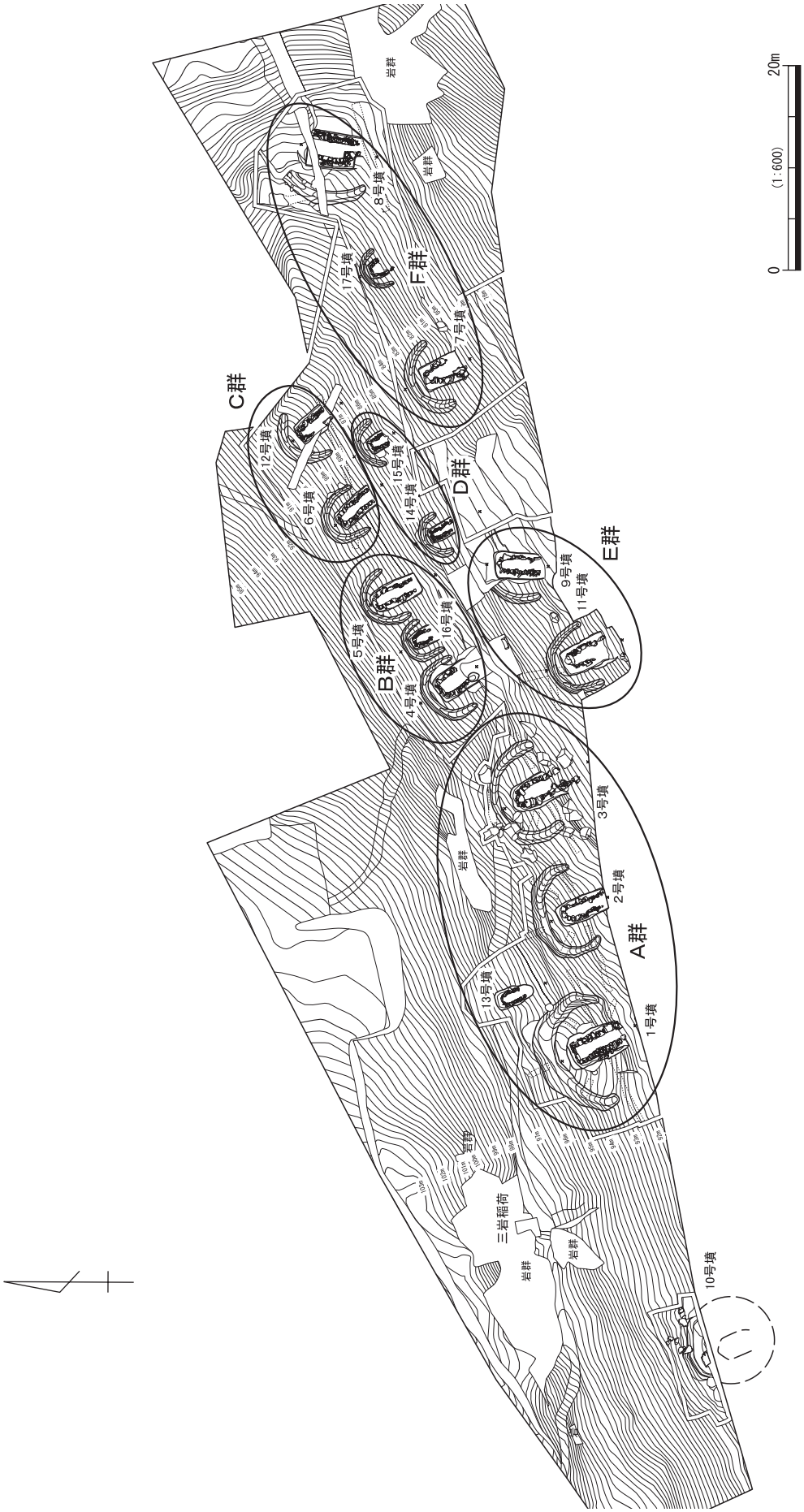
さらに構造上、石室形態は無袖式、片袖式、擬似両袖式に分れた。C1号墳は無袖式長台形の平面形態で、奥壁も２個組み合わせの割石積みである。この形態は県内の類例からも古い横穴式石室にみられる特徴で（静岡県考古学会 2003）、本例の築造時期も遠江須恵器編年Ⅲ期前葉と古い。

またC8号墳は片袖式石室で、類例として近隣の宮口に所在する興覚寺後古墳がある。興覚寺後古墳は全長35mの前方後円墳で、古墳の主軸に直交する石室は長さ8m、玄室幅2.5m、玄室長5.6m遠江では屈指の規模である。築造時期は遠江須恵器編年Ⅲ期前葉と古い（浜北市 2004）。C8号墳の築造時期は遠江須恵器編年Ⅲ期中葉と興覚寺後古墳に次いで古い。副葬品についても土器と複数型式の鉄鏃と撹乱を受け断片的ながら充実しており、この地域では興覚寺後古墳に次ぐ位置にあったと推定される。

そのほかの石室の形態は擬似両袖式、無袖式で、玄室は奥窄り、長方形が多い。墳丘規模第２位のC2・C3号墳についても擬似両袖式で奥窄りの玄室平面形であり、同様に最小クラスのC16号墳についても、擬似両袖式で奥窄りの玄室平面形である。C7・C12号墳のように墳丘規模第３位クラスの古墳に無袖式がみられる。玄室の平面形はC1・C8号墳を除けば、墳丘の認められないC13号墳と規模最小クラスに長方形がみられる。Ｃ群東小支群



第79図　興覚寺後古墳石室実測図



第80図　C1～C17号墳の群構成

の主流は擬似両袖式で奥窄りの玄室平面形といえよう。墳丘の規模と石室の規模を比較すると、墳丘が大きい古墳は石室を大きく、墳丘が小さい古墳は石室も小さいという傾向はみられた。

⑶　古墳の主軸方位

東小支群の各古墳の主軸方位は、C8・C9号墳を除き大略には南東向きである。集落から古墳に至る墓道は不明であるが、石室開口部の方向は麓に展開した集落の方向を向いていると推定される。古墳の主軸方位の取り方は、ほぼ奥壁を略北とし開口部を略南とするほか、古墳築造の選地に係わって、それぞれの古墳がいかに墓道（枝道・幹道など）とつながるかによって決定され、そのために主軸を東にふる、または西にふることが選択されたと推定したい。したがって主軸方位の取り方を各古墳の築造年代に、直接結びつけることはできなかった。

2　副葬品の検討

調査された17基の古墳は一部が撹乱を受けていたため、各古墳の副葬品は埋葬当時の状態をとどめているものは少ない。さらに追葬の際、前埋葬の礫床や副葬品を整理する行為が認められ、発掘調査で表われた埋葬の様子は、最終埋葬段階によって移動した姿であった。ここでは後期古墳に多く副葬される土器、鉄鏃・刀など鉄製品、玉類など装身具類が、各古墳からどのような在り方をしていたかを述べ、その傾向から何が読み取れるかを検討してみたい。

⑴　土器類

ほとんどが須恵器で、ごく少数の土師器が認められた。須恵器は盛る器・液体を入れる容器が中心で、坏類・高坏・平瓶など瓶類が多い。少数派の土師器も脚付盤・坏・鉢・甕などの盛る器主体である。

C1号墳は築造時期が須恵器編年Ⅲ期前葉と古いが、この段階では坏と瑳が、追葬段階の須恵器編年Ⅲ期中葉からⅣ期前半に入ると坏とそれ以外の器である高坏・提瓶・壺類を副葬していたが、最終段階では須恵器編年Ⅴ期前葉の平瓶１のみを副葬していた。それ以外の古墳では、坏・高坏・提瓶・壺類・瑳・平瓶が東小支群共通の副葬品の基本セットとみてよく、これが須恵器編年Ⅲ期中葉から出現し、Ⅳ期前・後半には普遍化している。

C14～C17号墳のような最小クラスの古墳やⅤ期前葉の追葬には副葬品は少なく、したがって土器も少ない。C14・C17号墳に須恵器がなく、土師器坏や甕が副葬されていることはあまり例を聞かない。

⑵　装身具

Ｃ群では装身具類には勾玉、管玉、小玉などの玉類がみられたが、耳環は認められなかった。玉類の副葬がみられた古墳はC1・C2・C3号墳とC11・C9号墳のともに隣接するグループであった。これはの

古墳	単位群	墳丘(東西×南北)m	主軸方位	石室	玄室	副葬品・土器	副葬品・装身具	副葬品・鉄製品	築造時期	追葬時期
C1	A単位群	9.1×7.5	N25°W	無袖	長台形	坏・高坏・提瓶・坩・平瓶	管玉・丸玉・小玉	馬具・刀装具・弓金具・刀子・砥石	Ⅲ期前葉	Ⅲ中・Ⅲ後・Ⅳ前・Ⅴ前
C2	A単位群	7.5×6.0	N23°30′W	擬似両袖	奥窄り	坏・平瓶・瑳	なつめ玉	刀子・鏃	Ⅳ期後半	Ⅴ期前葉
C3	A単位群	7.4×8.0	N28°W	擬似両袖	奥窄り	壺・フラスコ瓶・平瓶	小玉	鏃・不明品	Ⅳ期後半	
C4	B単位群	4.6×5.0	N33°W	不明	奥窄り	坏・高坏・壺・平瓶・瑳		刀子	Ⅳ期前半	Ⅳ期後半・Ⅴ期前葉
C5	B単位群	4.6×5.5	N24°W	擬似両袖	奥窄り	坏・低脚坏・壺・平瓶			Ⅳ期前半	Ⅳ期末葉
C6	C単位群	4.0×5.0	N41°W	擬似両袖	奥窄り	坏・フラスコ瓶・平瓶		刀子・鏃	Ⅳ期前半	Ⅴ期前葉
C7	F単位群	5.8×5.5	N25°30′W	無袖	奥窄り	坏・高坏・甕		直刀・刀子・鏃	Ⅳ期前半	Ⅳ期後半～末葉?
C8	F単位群	9.0×8.0	N9°E	片袖	長方形			刀子・鏃・砥石	Ⅲ期中葉	Ⅳ期前半・Ⅴ期前葉
C9	E単位群	5.0×5.0	N3°E	擬似両袖	奥窄り	坏・フラスコ瓶・平瓶	勾玉・丸玉・小玉	刀子	Ⅳ期前半	Ⅳ期後半・末葉
C10	／	／	／	／	／	坏			?	
C11	E単位群	5.5×6.5	N21°W	擬似両袖	奥窄り	坏・壺・瓶・瑳	管玉	刀子	Ⅳ期前半	Ⅳ期後半?・Ⅴ期前葉
C12	C単位群	5.0×4.5	N38°W	無袖	奥窄り	坏・高坏・壺・鉢・平瓶			Ⅳ期前半	Ⅳ期後半
C13	A単位群	／	N22°W	無袖	長方形	甕		鏃	Ⅳ期前半	
C14	D単位群	3.3×3.5	N26°W	擬似両袖	長方形	坏・甕		鏃	Ⅳ期	
C15	D単位群	3.8×3.0	N31°W	擬似か無袖	奥窄り				Ⅴ期前葉?	
C16	B単位群	3.0×3.0	N30°W	擬似両袖	奥窄り	坏・壺			Ⅴ期前葉	
C17	F単位群	3.2×2.5	N24°W	不明	奥窄り	甕		刀子	Ⅳ期	

表3　C1～C17号墳総括表

ちに述べる東小支群・Ａ単位群とＥ単位群にあたる。墳丘・石室規模では第１位と第２位、第３位の一部である。第１位で片袖式のC8号墳は大きな撹乱を受けていたため、玉類は副葬されなかったとは言い難いが、調査は同じ条件であり、さらには排土についてもふるいをかけ精査しているので副葬されなかったか、ごくわずかであったため散逸したといえよう。

Ｃ群では玉類を副葬する古墳は須恵器編年Ⅳ期後半までであり、墳丘・石室規模の上位にある古墳やある単位群の特徴の一つという傾向がみられた。すると雲岩寺Ｃ群のうち、装身具の副葬は限定された人々になされた行為、と考えることができる。

⑶　鉄製品

主に鉄製品のうち直刀・鉄鏃・飾り弓の金具など武器類の副葬について、ふれることとする。

刀身とそれ以外の刀装具の存在により直刀・小直刀の副葬が推定される古墳は、C1号墳、C7号墳がある。このうちC1号墳は須恵器編年Ⅲ期前葉に築造され、Ｃ群では最初に築造された古墳である。その後、Ⅴ期前葉まで追葬が繰り返されたが、副葬品のうち須恵器の点数からⅣ期前半までが副葬品のピークと考えられる。C7号墳はⅣ期前半に築造され、Ⅳ期後半、末葉？にまでおよぶ追葬が繰り返された。

鉄鏃や弓金具の存在から弓矢の副葬が認められた古墳は、C1号墳、C2号墳、C3号墳、C6号墳、C7号墳、C13号墳、C14号墳がある。ただしC7号墳の例は刀子の可能性もあり、明確ではない。

C2号墳、C3号墳、C8号墳、C13号墳、C14号墳の鉄鏃は１本から数本の副葬である。

C1号墳については弓金具の存在から飾り弓の副葬が推定され、さらに鉄鏃が柳葉式、三角形式、五角形式、片刃式、鑿箭式、斧箭式など複数の型式が含まれ、量も他の古墳より多く違いをみせている。さらに大振りの鉄鏃については実用品ではなく、儀仗用もしくは葬送祭祀用製品と考えられる。

刀子については柄装には鹿角を使用しているものをいくつか含んでいる。この点でも他の古墳出土の刀子と異なっている。

ついでC8号墳の鉄鏃には複数の形式の副葬がみられるが、量は少ない。C6号墳は尖根式の１セットを含むと考えられる。すると鉄鏃副葬については、Ｃ群ではC1号墳は際立った存在といえよう。さらにC1号墳のように、鉄鏃・飾り弓が直刀の副葬と重複する点もＣ群では唯一である。同様にC1号墳出土の鉄製轡の存在もＣ群では唯一であり、小支群の中では卓越した存在といえよう。ついで直刀の副葬や鉄鏃の副葬のうち複数形式の存在や量に違いが認められる。これら鉄製品にみられる副葬の差は、Ｃ群の中ではより選択された人々になされた副葬行為を反映していると考えられる。

⑷　副葬品の組み合わせ

土器―特に須恵器―は、副葬品が残されていた古墳に主流としてみられた。この点は先に指摘したように、坏類、高坏、平瓶など瓶類をセットとするものであるが、複数回の追葬が行われているので、一回の土器副葬はそれほど多量ではない。

C1号墳は東小支群では墳丘・石室規模が最大クラスであり、坏類、高坏、平瓶など瓶類をセットとする須恵器、装身具のガラス小玉や管玉を含み、さらに馬具や直刀、多種の鉄鏃・飾り弓を組み合わせて副葬している。

この古墳は複数回の追葬がなされているので、これら副葬品が一回の埋葬に副葬されたかは、不明であるものの、土器以外の装身具類と馬具・直刀・鉄鏃の鉄製品をセットとして副葬している。この古墳の副葬品については、東小支群の中で１番目の質・量に位置づけできる。そして東小支群成立の端緒となったC1号墳が、ある時期の追葬までその勢いを持続していた可能性が高い。

同様に墳丘・石室規模の大きいC8号墳は大きく撹乱を受け、わずかに残った鉄製品と土器以外の副葬は認められなかった。したがって組み合わせの検討からは除外しておく。

装身具類と鉄鏃の副葬があったC2・C3号墳は、撹乱によって土器類の散逸がみられたが、もともと

多くの副葬があったとは思われない。その点ではＣ群の中で墳丘・石室規模が序列第２であったとしても、築造時期がⅣ期後半と新しいことから、多くの土器を副葬する時期をすでに過ぎていたのであろうか。

Ｃ群では比較的装身具を多く副葬していたC9号墳は５体の埋葬が行われていたが、内訳は壮年男女の各１体と子供３体であった。すると壮年男には鉄鏃など武器類の副葬はなく、工具も兼ねる刀子２以外、鉄製品は認められなかったこととなろう。

３　東小支群の群構成と推移

⑴　東小支群の群構成

東小支群は等高線にそって上位、中位、下位の３列に分かれる。したがって３列のグループをつぎのように呼称し、本文をすすめたい。なおC10号墳は西支群に分類したが、周溝のみの調査であったので、この分析から割愛した。単位群の区分は本文で記述したように墓道はなく、それぞれの位置関係と空白域から区分した。

上位グループはつぎの３単位群に分類した。１はC1・C2・C3・C13号墳で構成され東小支群Ａ単位群（以下、東小支群を略しＡ～Ｆ単位群とする）と呼称する。２はC4・C5・C16号墳で構成され、Ｂ単位群と呼称する。３はC6・C12号墳で構成され、Ｃ単位群と呼称する。

中位グループはつぎのC14・C15号墳からなるＤ単位群に分類した。下位グループはつぎの２単位群とした。１はC11・C9号墳のＥ単位群、２はC7・C17・C8号墳で構成されるＦ単位群と呼称する。

⑵　東小支群の推移

東小支群は須恵器編年Ⅲ期前葉からＶ期前葉に築造されている。そのため築造年代や追葬時期を検討することによって、ある特定時期における古墳の併存や追葬の同時性を知ることができる。以下、須恵器編年を指標としながら、小支群の推移を探ってみたい。

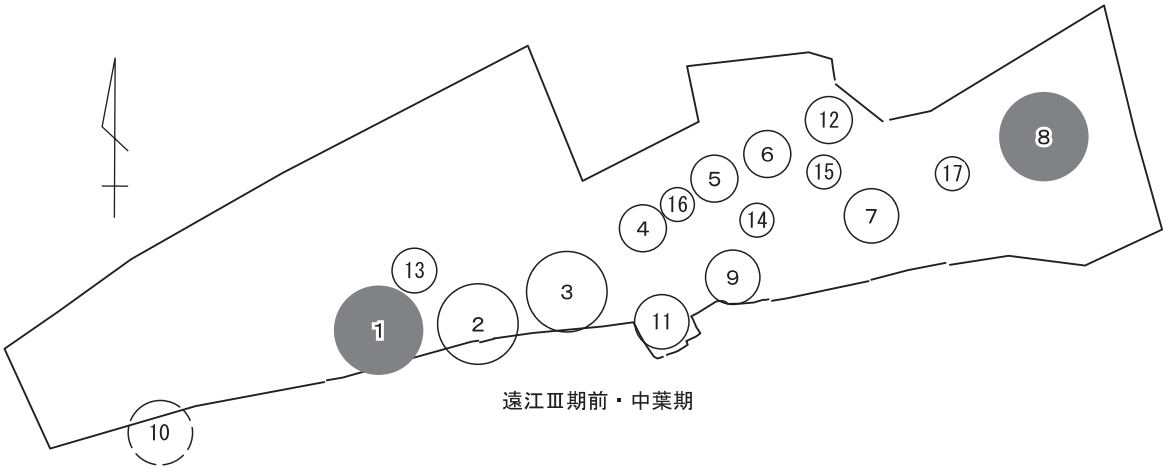
Ⅲ期前葉（MT85窯式併行期）　C1号墳は古墳群成立の端緒となる中心の古墳で、墳丘や石室の規模はＣ群中最上位である。さらにC1号墳は古墳群では最初に築造されていることから、雲岩寺Ａ・Ｂ古墳群と異なるこの南向きの緩斜面を最初に選んだことになる。その後、しばらく古墳の築造はなく、いわば独立した単独で存在したことから、きわめて限定された被葬者が埋葬された古墳といえよう。C1号墳の築造時期である須恵器編年Ⅲ期前葉（MT85窯式併行期）は、暦年代では６世紀中頃から後半に比定できる。

Ⅲ期中葉（TK43窯式併行期）　時期区分の指標とした須恵器編年Ⅲ期中葉は、暦年代では６世紀後葉から６世紀末に比定できる。この時期に入るとC8号墳が築造され、C1号墳に追葬が行われている。C8号墳とC1号墳の距離は92mほど離れ、この段階では両者の間には広い空間があって、それぞれが独立した存在といえよう。Ｃ群での位置をみるとC8号墳がＣ群の東端に、C1号墳は西端にあたり、両者の間にC10号墳を除く14基の古墳が築造されたこととなり、両古墳の築造は、古墳群の占地に大きく影響を与えたこととなろう。

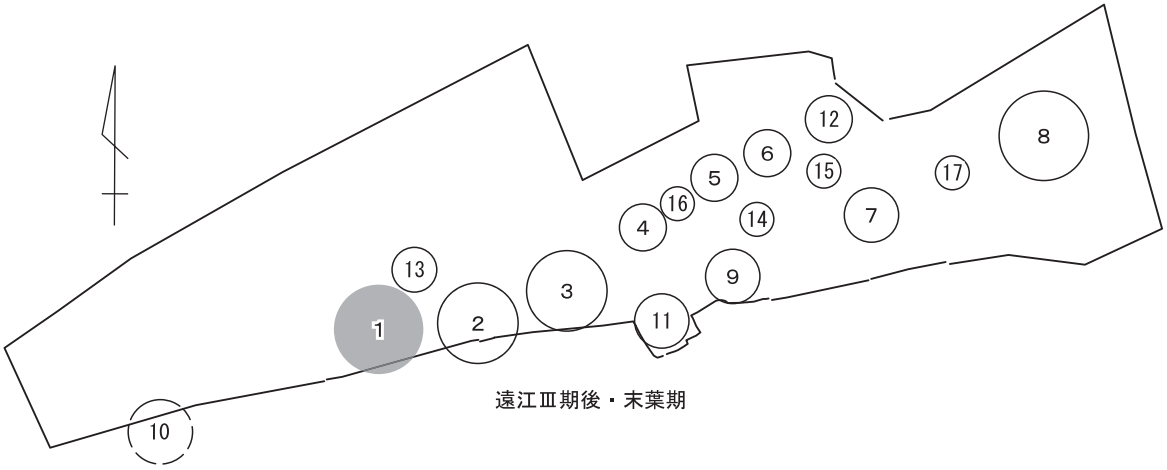
Ⅲ期後葉（TK209窯式併行期）～Ⅲ期末葉（TK217窯式併行期　飛鳥Ⅰ期）　時期区分の指標とした須恵器編年Ⅲ期後葉は、暦年代では７世紀初頭から前葉に比定できる。須恵器編年Ⅲ期末葉は、暦年代では７世紀前葉から中頃に比定できる。この時期にはC1号墳に追葬がみられるのみである。

Ⅳ期前半（TK217窯式併行期　飛鳥Ⅱ期）　時期区分の指標とした須恵器編年Ⅳ期前半は、暦年代では７世紀中頃から後半の早い頃に比定できる。

この時期に入るとＡ単位群ではC13号墳が築造されるが、この古墳はＣ群では最小クラスである。Ｂ単位群ではC4・C5号墳が、Ｃ単位群ではC6・C12号墳が、Ｅ単位群ではC11・C9号墳が、Ｆ単位群で



遠江Ⅲ期前・中葉期

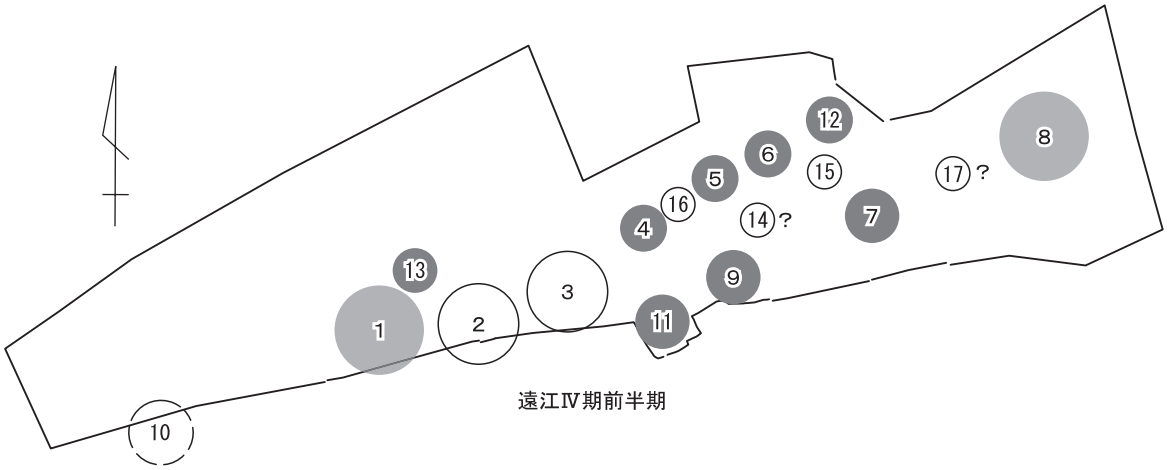


遠江Ⅲ期後・末葉期

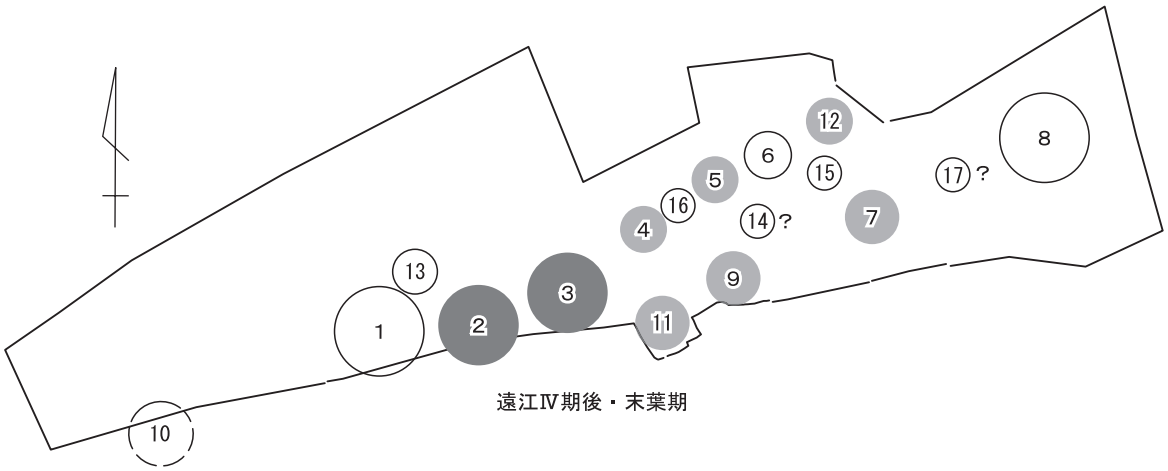
●：築造された古墳
●：追葬された古墳
※ 数字は古墳名を表す

0　(1:1,000)　50m

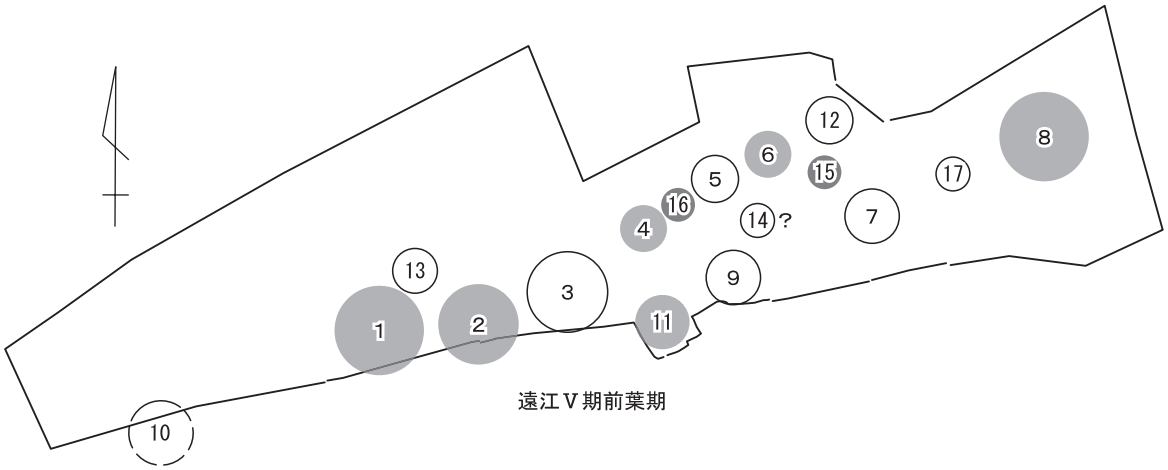
第81図　古墳群の変遷(1)



遠江Ⅳ期前半期



遠江Ⅳ期後・末葉期



遠江Ⅴ期前葉期

●：築造された古墳
●：追葬された古墳
※ 数字は古墳名を表す

0　(1:1,000)　50m

第82図　古墳群の変遷(2)

はC7号墳が築造された。Ｄ単位群を除く各単位群が一斉に成立し、Ｃ群に最も古墳が築造された時期である。

Ⅳ期後半（TK46窯式併行期 飛鳥Ⅲ期）～Ⅳ期末葉（TK48窯式併行期 飛鳥Ⅳ期） 時期区分の指標とした須恵器編年Ⅳ期後半は、暦年代では７世紀後半から末葉に比定でき、須恵器編年Ⅳ期末葉は、暦年代では７世紀後半から末葉に比定できる。この時期に入ると新たな古墳の築造は、Ａ単位群のC2・C3号墳にみられる。Ｂ単位群ではC4・C5号墳に追葬が、Ｃ単位群ではC12号墳に追葬が、Ｅ単位群ではC11・C9号墳に追葬が、Ｆ単位群ではC7号墳に追葬が確認された。

なおC14・C17号墳は細別できず単にⅣ期としたため、この分析では当該期に含めた。それにしても前時期に比較し、新規に造られた古墳は少ない傾向にある。

Ａ単位群のC2・C3号墳はC1号墳の東に広く空いていた空間を埋めるように築造されていることから、それ以前には古墳を造らず空き地としていたこととなろう。そのことからこれらC2・C3号墳はあらかじめその場所に占地することが予定されたと考えられる。群集墳は、つぎつぎと同じエリアに密集して築造されただけではなく、小規模に区画された墓域の集合という側面も読み取ることができよう。

須恵器編年Ⅴ期前葉（MT21窯式併行期） 時期区分の指標としたⅤ期前葉は、暦年代では７世紀末葉から８世紀初頭に比定できる。C16・C15号墳がこの時期に築造されたと判断される。これら古墳はそのすでに築造されていた単位群の隙間である狭い範囲に立地している。新たな古墳の築造はさらに少ない。

Ａ単位群のC1・C2号墳に追葬が、Ｂ単位群ではC4号墳に追葬が、Ｃ単位群ではC6号墳に追葬が、Ｅ単位群ではC11号墳に追葬が、Ｆ単位群ではC8号墳に追葬が確認された。C1・C8号墳のような古く築造された古墳にも追葬が認められた。

４　古墳群の推移と終焉

雲岩寺Ｃ群の端緒となったC1号墳は、墳丘規模や副葬品からも最も有力な古墳であった。この古墳を契機として東小支群Ａ単位群が成立したが、この単位群の古墳はC13号墳をのぞくと、その後に造られた古墳は墳丘・石室規模序列第２位と、その後に築造された他の単位群の古墳よりも大きく、副葬品とその組み合わせからも有力な単位群といえよう。

須恵器編年Ⅳ期前半期に入ると、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ単位群が成立するが、この時期の古墳は墳丘・石室規模序列第３位が多く、さらに副葬品についても装身具の副葬はC9・C11号墳以外なく、わずかな鉄鏃と土器の副葬がほとんどである。C7号墳では直刀１振を副葬しているが、これはわずか１例である。つまりこの時期の古墳は規模・副葬品においても同じような質となっている。いいかえれば古墳の被葬者と造営者たちは等質的な階層の人々であり、この人々が古墳築造の拡大を推進したといえよう。

ところが古墳の築造は須恵器編年Ⅳ期後半から末葉に入ると、新たな古墳の築造は少なく、Ⅴ期前葉である７世紀末葉から８世紀初頭には、墳丘・石室規模が最小クラスの古墳が築造されるが、その数はわずかに２基であり、ほかはすでにあった古墳への追葬である。これが雲岩寺Ｃ群東小支群は終焉の状況である。

引用・参考文献

浜北市教育委員会　1988『浜北市北麓古墳群』
静岡県考古学会　2003『静岡県の横穴式石室』
浜北市　2004『浜北市史　資料編　原始・古代・中世』

表4　出土土器観察表

出土地点		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	器種	残存部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備考
SD01上層		—	7	1	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	5.4	14.7	12.2	—	灰	
SD01周辺・B3Tr.西半		—		2	須恵器	坏身	口縁～体部	25	—	(15.0)	(12.7)	—	黄灰	
		—		3	須恵器	坏蓋	体部	60	—	—	—	—	灰	
SD01・B3Tr.西半		—		4	須恵器	短頸坩	口縁～体部	80	—	10.0	8.0	—	灰白	
SD01上層・B3Tr.西半		—		5	須恵器	甕	頸部～肩部	25	—	—	—	—	灰オリーブ	
		—		5	須恵器	甕	体部～底部	60	—	—	—	—	灰	
		—		6	須恵器	甕	肩部～体部	15	—	—	—	—	オリーブ灰	
SD01上層		—		7	土師器	短頸坩	ほぼ完形	95	8.8	10.7	8.3	5.1	浅黄橙	
1区尾根上部表土		—	12	1	須恵器	坏または有蓋高坏	口縁	10	—	(14.0)	(11.4)	—	灰	
B10Tr.		—		2	須恵器	坏または有蓋高坏	口縁～体部	20	—	(14.0)	(14.0)	—	灰	
B3Tr.西半		—		3	須恵器	高坏	底部～脚部	70	—	—	—	8.7	灰	丸窓透かし
1区調査区　北		—		4	須恵器	瓏	口縁	15	—	—	(9.9)	—	黄灰	
B3Tr.西半		—		5	須恵器	甕	口縁～肩部	15	—	—	(23.9)	—	褐灰	
1区調査区　北		—		6	須恵器	甕	口縁	20	—	—	(15.7)	—	黄灰	
SD01西側・B3Tr.西半		—		7	灰釉陶器	碗	口縁～底部	20	4.3	(12.9)	(12.9)	(6.4)	黄橙	浜北窯
B3Tr.西半		—		8	灰釉陶器	碗	底部	20	—	—	—	(6.2)	黄	浜北窯
		—		9	灰釉陶器	碗	底部	98	—	—	—	6.7	黄褐	浜北窯
C1号墳	石室下面床面	34	22	1	須恵器	坏身	完形	100	4.7	14.7	12.9	—	灰	自然釉、ヘラ記号「×」
				2	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	4.2	14.4	12.5	—	灰	
	石室上面床面			3	須恵器	坏身	完形	100	4.4	14.8	12.5	—	灰	自然釉、ヘラ記号「×」
				4	須恵器	坏身	完形	100	4.2	14.1	12.5	—	黄灰	自然釉、ヘラ記号「×」
		—		5	須恵器	坏身	ほぼ完形	90	4.0	13.0	10.8	—	灰白	
	石室閉塞	—		6	須恵器	坏身	口縁～体部	40	—	(11.2)	(9.5)	—	灰白	ヘラ記号
		—		7	須恵器	坏身	口縁～体部	10	—	(9.2)	(7.8)	—	灰	
		—		8	須恵器	坏身	体部～底部	20	—	—	—	—	灰	
	石室下面床面	34		9	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	100	4.0	13.7	13.7	—	オリーブ灰	
				10	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	95	4.0	14.1	14.0	—	灰	
	石室上面床面			11	須恵器	坏蓋	完形	100	4.4	14.0	13.7	—	灰	自然釉
				12	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	95	4.0	13.9	13.7	—	灰	自然釉、火だすき痕あり
		—		13	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	95	4.0	13.3	13.3	—	灰	
	石室床面	—		14	須恵器	坏蓋	口縁～体部	10	—	(10.0)	(10.0)	—	灰	
	石室覆土・表土	—		15	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	60	3.5	(9.7)	(9.7)	—	灰	
	石室閉塞	—		16	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	30	3.6	(9.3)	(9.2)	—	灰	ヘラ記号「一」
	石室上面床面	34		17	須恵器	高坏	ほぼ完形	100	19.0	17.6	17.6	13.1	灰黄	透かし二段三方向
	石室上・下面床面			18	須恵器	高坏	ほぼ完形	95	15.4	11.4	11.4	10.4	灰	透かし二段三方向
	石室上面床面	35	23	19	須恵器	長頸壺	ほぼ完形	95	13.5	12.0	8.7	—	灰白	
	石室			20	須恵器	坩	口縁～底部	70	7.6	7.5	5.2	—	灰白	
	石室上面床面			21	須恵器	坩	ほぼ完形	95	4.9	11.6	10.1	—	灰	
	石室下面床面			22	須恵器	提瓶	完形	100	18.8	15.8	6.5	—	灰黄	
	石室上面床面			23	須恵器	提瓶	ほぼ完形	95	22.9	18.4	8.2	—	灰黄	
				24	須恵器	平瓶	ほぼ完形	95	17.4	20.1	12.4	—	灰	
				25	須恵器	瓏	ほぼ完形	95	14.6	9.8	12.5	—	灰白	
	周溝内	—	24	26	須恵器	坏身	口縁～体部	25	—	(15.4)	(12.0)	—	浅黄	
	墳丘上	—		27	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	95	4.0	13.7	13.7	—	オリーブ灰	
	周溝内	—		28	須恵器	坏身か	体部～底部	15	—	—	—	6.0	灰白	
		—		29	須恵器	甕	口縁～肩部・底部	25	—	—	(17.8)	—	灰	森山窯
	北西周溝内	—		30	灰釉陶器	碗	口縁～底部	30	4.0	(13.3)	(13.3)	(6.2)	灰黄	浜北窯
		—		31	灰釉陶器	碗	口縁～底部	50	4.9	(13.5)	(13.5)	(6.1)	灰黄	浜北窯
C2号墳	石室閉塞	—	32	1	須恵器	坏身	口縁～底部	50	4.2	(14.2)	(14.2)	(9.8)	灰	
	石室床面直上	—		2	須恵器	坏身	口縁～体部	10	—	(15.7)	(15.7)	—	灰	
		—		3	須恵器	瓏	口縁	45	—	—	(10.2)	—	灰白	自然釉
		—		4	須恵器	瓏	肩部～底部	60	—	10.2	—	—	灰白	自然釉、ヘラ記号「卅」
	—	—		5	須恵器	平瓶	口縁	10	—	—	(5.0)	—	灰黄	
	石室床面直上	—		6	土師器	坏	口縁～底部	45	3.0	(11.1)	(11.1)	—	赤褐色	内面暗文調整
C3号墳	石室	38	35	1	須恵器	フラスコ形瓶	ほぼ完形	90	25.0	19.0	9.7	—	浅黄	
				2	須恵器	長頸壺	ほぼ完形	95	24.5	15.5	10.2	7.5	黄灰	外面に自然釉
		—		3	須恵器	平瓶	体部	30	—	(12.9)	—	—	灰白	自然釉
C4号墳	石室床面	38	38	1	須恵器	坏身	完形	100	2.8	10.0	8.2	3.0	灰白	

出土地点		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	器種	残存部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備考
C4号墳	石室床面	38	38	2	須恵器	坏蓋	完形	100	3.3	9.9	9.6	—	灰	
				3	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	70	3.6	9.7	9.7	—	明オリーブ灰	
	石室埋土			4	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	95	4.2	9.7	9.7	—	灰	
	周溝・表土	—		5	須恵器	坏蓋	つまみ部～口縁	60	4.1	(16.2)	(15.7)	—	黄灰	
	周溝	—		6	須恵器	坏蓋	口縁	10	—	(16.0)	(15.5)	—	灰白	
	攪乱	—		7	須恵器	高坏	体部～底部	40	—	—	—	10.3	浅黄	
	石室羨道部付近埋土	—		8	須恵器	低脚坏	体部～接合部	70	—	—	—	—	灰白	
	石室床面	39		9	須恵器	低脚坏	完形	100	5.8	10.4	10.4	6.8	灰白	
				10	須恵器	低脚坏	完形	100	5.8	11.0	11.0	7.5	灰黄	
		38		11	須恵器	広口壺	口縁～体部	60	—	19.2	11.1	—	灰白	自然釉
	石室羨道付近攪乱	—		12	須恵器	平瓶	ほぼ完形	95	12.4	12.9	5.7	3.6	灰黄	
	石室床面	39		13	須恵器	平瓶	口縁～底部	80	32.6	36.9	13.7	—	黄灰	自然釉
			39	14	須恵器	瓶	口縁～底部	70	11.9	10.5	11.1	4.0	灰黄	自然釉
	攪乱	—		15	土師器	碗	口縁～体部	20	—	(12.0)	(11.7)	—	黄橙	丹塗り
		—		16	土師器	碗	口縁～体部	20	—	(13.9)	(13.4)	—	にぶい橙	丹塗り
	石室床面	—		17	灰釉陶器	小碗	口縁～体部	20	—	(10.0)	(10.0)	—	灰白	
C5号墳	石室閉塞南	39	42	1	須恵器	坏身	口縁～底部	80	3.6	10.6	8.3	—	灰オリーブ	
	石室閉塞上部	—		2	須恵器	坏身	口縁～体部	30	—	(12.6)	(12.6)	—	褐灰	
	石室床面	39		3	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	100	3.7	10.0	9.8	—	灰	
	石室羨道部(閉塞石内)	—		4	須恵器	坏蓋	口縁～体部	10	—	(10.6)	(10.6)	—	青灰	
	石室埋土	—		5	須恵器	坏蓋	口縁	15	—	(9.3)	(9.3)	—	灰白	
	石室閉塞上部	—		6	須恵器	坏蓋	口縁	10	—	(13.7)	(13.4)	—	褐灰	自然釉
	石室埋土	—		7	須恵器	低脚坏	口縁	10	—	(10.1)	(10.1)	—	黄灰	
	石室床面	39		8	須恵器	長頸壺	ほぼ完形	100	18.9	14.0	9.9	8.4	灰黄	
				9	須恵器	平瓶	完形	100	17.2	15.1	7.0	5.5	灰黄	自然釉
				10	須恵器	平瓶	ほぼ完形	100	13.5	12.1	6.1	—	灰白	
	石室閉塞上部	—		11	須恵器	平瓶	口縁	25	—	—	(5.6)	—	灰黄	内外に自然釉
C6号墳	石室羨道部上面床面	—	46	1	須恵器	坏身	口縁	15	—	(10.0)	(8.0)	—	黄灰	
	石室上面床面	40		2	須恵器	坏身	完形	100	3.7	15.0	15.0	10.2	灰白	
				3	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	4.2	13.2	13.2	—	灰白	火だすき痕あり
				4	須恵器	坏身	ほぼ完形	90	4.1	12.3	12.2	—	灰黄	自然釉
	石室下面床面			5	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	4.3	12.6	12.6	—	灰白	
	石室上面床面			6	須恵器	長頸壺	ほぼ完形	95	22.7	14.8	10.4	7.7	浅黄	
				7	須恵器	フラスコ形瓶	ほぼ完形	95	25.8	17.7	9.9	—	灰	
				8	須恵器	平瓶	完形	100	12.9	13.0	6.2	5.6	灰白	外面自然釉
C7号墳	石室前埋土	—	49	1	須恵器	坏身	口縁～底部	35	—	(10.8)	(8.8)	—	灰	
	石室前埋土・表土	—		2	須恵器	無蓋高坏	口縁～体部	25	—	(13.8)	(13.8)	—	灰白	
	石室床面	41		3	土師器	坏	口縁～底部	60	4.1	10.5	9.9	—	淡橙	
				4	土師器	坏	口縁～底部	75	4.3	11.1	10.3	—	にぶい橙	
	石室根石除去時	—		5	土師器	坏	口縁～体部	10	—	(12.5)	(12.5)	—	にぶい橙	
	石室床面	—		6	土師器	小型甕か鉢	底部	25	—	—	—	(3.0)	にぶい橙	
C8号墳	周溝埋土	—	52	1	須恵器	有蓋高坏	口縁～体部	20	—	(15.8)	(13.6)	—	灰	外面自然釉
		—		2	須恵器	有蓋高坏	口縁～底部	20	—	(15.0)	(12.8)	—	灰	透かし三方向
		—		3	須恵器	坏蓋	天井部	50	—	—	—	—	浅黄	ヘラ記号「二」
		—		4	須恵器	坏蓋	つまみ部	55	—	—	—	—	にぶい黄橙	
		—		5	須恵器	有蓋高坏	脚部	50	—	—	—	—	灰オリーブ	透かし二段三方向
		—		6	須恵器	無蓋高坏か脚付短頸壺か	底部～脚部	10	—	—	—	—	灰	透かし三方向
		—		7	須恵器	鉢	把手	100	—	—	—	—	褐灰	
C9号墳	石室上面床面	41	56	1	須恵器	坏身	完形	100	3.2	11.3	9.4	5.0	灰白	ヘラ記号「二」
				2	須恵器	坏身	完形	100	3.1	11.5	9.6	4.4	灰白	ヘラ記号「二」
				3	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	3.3	11.3	9.4	4.5	灰白	ヘラ記号「二」
				4	須恵器	坏身	完形	100	3.3	11.4	9.5	—	灰白	ヘラ記号「く」
	石室埋土	—		5	須恵器	坏身	底部	10	—	—	—	(9.8)	にぶい黄橙	
	周溝	—		6	須恵器	坏身	底部	20	—	—	—	(10.8)	灰白	
	石室上面床面	41		7	須恵器	坏蓋	完形	100	3.8	10.7	10.4	—	灰白	ヘラ記号「二」
				8	須恵器	坏蓋	完形	100	3.5	10.9	10.6	—	灰白	ヘラ記号「一」
				9	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	95	3.8	10.6	10.3	—	灰白	ヘラ記号「二」
		42		10	須恵器	坏蓋	完形	100	3.4	10.4	10.0	—	灰白	ヘラ記号「一」
	周溝	—		11	須恵器	坏蓋	体部～口縁	15	—	(15.4)	(14.8)	—	灰白	
	石室上・下面床面	42		12	須恵器	フラスコ形瓶	ほぼ完形	95	22.6	15.9	7.9	—	黄灰	
	石室上面床面			13	須恵器	平瓶	完形	100	14.4	13.6	5.5	4.6	灰白	湖西窯
				14	須恵器	平瓶	完形	100	12.9	14.2	5.7	—	にぶい黄橙	湖西窯
C10号墳	周溝	42	58	1	須恵器	無蓋坏身	口縁～底部	60	3.5	(11.1)	(11.1)	—	灰	

出土地点		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	器種	残存部位	残存率（%）	器高（cm）	器径（cm）	口径（cm）	底径（cm）	色調	備考
C11号墳	周溝北西部	—	61	1	須恵器	坏身	底部	50	—	—	—	(9.5)	灰黄	
		—		2	須恵器	坏蓋	摘部～天井部	10	—	—	—	—	灰白	
	石室床面	42		3	須恵器	フラスコ形瓶	頸部～底部	85	—	16.4	—	—	灰黄	
	石室撹乱	—		4	須恵器	短頸壺蓋	摘部～体部	30	—	—	—	—	黄灰	
	石室床面	43		5	須恵器	瓏	ほぼ完形	95	12.1	10.3	10.6	—	灰黄	
		42		6	須恵器	甕	ほぼ完形	75	44.7	36.3	14.1	—	緑灰	
C12号墳	石室床面	43	64	1	須恵器	坏身	口縁～底部	55	3.2	(10.0)	(8.3)	—	黄灰	
		—		2	須恵器	坏身	口縁～体部	25	—	(10.6)	(9.1)	—	灰白	
		—		3	須恵器	高坏	口縁～底部	45	—	(16.2)	(16.2)	—	灰白	内面に自然釉
		—		4	須恵器	壺	肩部～体部	50	—	(13.6)	—	—	灰白	外面肩部に自然釉
		—		5	須恵器	鉢	口縁～体部	40	—	(14.6)	(14.6)	—	灰白	
		—		6	須恵器	平瓶	口縁	20	—	—	(5.2)	—	黄灰	内面口唇部に自然釉
C14号墳	石室埋土	—	69	1	土師器	坏	口縁～体部	20	—	(10.4)	(10.2)	—	にぶい黄橙	
		—		2	土師器	甕	口縁	10	—	—	(20.0)	—	にぶい黄橙	
C16号墳	石室前庭部	—	74	1	須恵器	坏身	口縁～底部	35	3.4	(15.3)	(15.3)	(10.5)	灰黄	
	石室床面	43		2	須恵器	広口長頸壺	ほぼ完形	95	22.3	21.5	19.1	14.8	淡黄	外面肩部に自然釉
C17号墳	石室床面		77	1	土師器	甕	口縁～体部	45	—	(13.9)	(13.9)	—	淡黄	
C5－2Tr.		—	78	1	須恵器	坏身	口縁～底部	45	4.9	(14.6)	(14.4)	(9.4)	灰	Ｃ２号墳付近
表土		—		2	須恵器	坏身	口縁～底部	20	4.8	(14.4)	(14.2)	(9.9)	黄灰	湖西
		—		3	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	97	3.9	16.7	16.5	—	灰白	
Ｃ古墳群表土・C15Tr.西端		43		4	須恵器	長頸壺	口縁～底部	70	23.8	(15.7)	10.3	7.2	灰黄褐	C15号墳からの落下か
				5	須恵器	長頸壺	口縁～底部	85	26.3	17.7	11.2	7.1	灰白	C15号墳からの落下か
表土		—		6	須恵器	平瓶	体部～底部	70	—	13.0	—	—	灰白	
		—		7	土師器	盤	口縁～体部	15	—	(12.9)	(12.7)	—	浅黄	丹塗り
		—		8	土師器	脚付盤	脚部	40	—	—	—	(12.6)	黄橙	丹塗り

（　）は復原値

表5　出土装身具観察表

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	材質	直径(mm)	全長・高さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	穿孔	備考
C1号墳	下面床面	巻頭4	24	32	管玉	碧玉	10.06	27.2	3.0	5.11	緑	片面	大きい斑文あり
	石室内			33	管玉	碧玉	9.0	25.0	3.5	3.56	緑	片面	斑文あり
	石室内埋土			34	管玉	碧玉	9.0	24.0	3.0	3.44	緑	片面	
				35	丸玉	ガラス	8.5	5.5	2.0	0.57	青		
				36	丸玉	ガラス	8.5	7.0	2.0	0.62	青		
				37	丸玉	ガラス	8.0	7.5	2.0	0.62	青		
				38	丸玉	ガラス	8.0	7.5	4.0	0.47	青		
				39	丸玉	ガラス	8.0	6.0	1.8	0.53	青		
				40	丸玉	ガラス	8.0	5.0	2.0	0.36	青		
				41	丸玉	ガラス	7.0	6.0	1.4	0.41	青		
				42	丸玉	ガラス	7.0	5.5	1.4	0.36	青		
				43	丸玉	ガラス	6.0	4.0	2.0	0.23	青		
	石室覆土			44	小玉	ガラス	4.0	3.0	1.0	0.06	水色		
				45	小玉	ガラス	4.0	4.0	1.0	0.06	水色		
				46	小玉	ガラス	3.5	3.5	0.8	0.06	水色		
				47	小玉	ガラス	4.0	2.4	1.0	0.05	水色		
				48	小玉	ガラス	4.0	3.0	0.8	0.05	水色		
				49	小玉	ガラス	4.0	2.5	1.0	0.05	水色		
		—		50	小玉	ガラス	4.5	2.5	1.0	(0.06)	水色		欠損
		巻頭4		51	小玉	ガラス	4.0	2.0	1.2	0.04	紺		
				52	小玉	ガラス	4.0	3.0	1.2	0.05	紺		
				53	小玉	ガラス	4.0	2.5	1.0	0.04	紺		
				54	小玉	ガラス	4.0	3.0	0.8	0.05	紺		
				55	小玉	ガラス	4.0	3.2	1.0	0.06	紺		
				56	小玉	ガラス	3.8	2.2	1.0	0.05	紺		
				57	小玉	ガラス	3.8	3.0	1.0	0.05	紺		
				58	小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.03	紺		
				59	小玉	ガラス	3.5	1.2	1.0	0.02	紺		
C2号墳	石室	38	32	7	なつめ玉	コハク	15.6	18.8	3.0	2.10	赤黒	両面	
C3号墳	石室内埋土		35	4	小玉	珪質岩	7.0	5.0	1.5	0.22	灰黄褐		
C9号墳	上面床面	巻頭4	57	15	勾玉	メノウ	—	38.0	不明	8.3	白	片面	
				16	勾玉	メノウ	—	31.2	3.5	5.03	薄茶	片面	
	下面床面			17	勾玉	メノウ	—	36.2	3.5	9.24	白	片面	
				18	勾玉	メノウ	—	34.5	3.0	7.79	薄茶	片面	
				19	丸玉	蛇紋岩	10.0	6.8	3.0	1.02	黒褐		
				20	丸玉	凝灰岩	12.5	9.0	4.0	3.64	漂白色		
				21	丸玉	凝灰岩	12.0	8.0	3.5	2.29	漂白色		
				22	丸玉	凝灰岩	11.5	8.0	3.0	2.39	漂白色		
				23	丸玉	凝灰岩	11.2	7.4	3.0	2.13	漂白色		
				24	丸玉	凝灰岩	10.0	7.0	4.0	1.5	漂白色		
	上面床面			25	丸玉	コハク	10.1	8.0	3.0	0.71	にぶい橙		
	下面床面			26	丸玉	凝灰岩	8.5	6.0	3.0	1.02	漂白色		
				27	小玉	凝灰岩	8.0	4.0	3.5	0.47	漂白色		
	上面床面	—		28	小玉	凝灰岩	6.5	4.5	2.0	(0.28)	漂白色		破損
C11号墳	床面直上	42	61	7	管玉	碧玉	10.0	28.4	3.0	5.47	緑	片面	

（　）は残存値

表6　出土石製品観察表

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
C1号墳	床面直上	37	29	209	砥石	結晶片岩	7.0	5.3	0.8	42.42	携帯用、穿孔部摩耗
C8号墳	石室	41	52	13	砥石	凝灰岩	6.6	3.1	1.9	37.01	仕上げ砥石、携帯用か
C9号墳	埋土	42	57	31	石鏃	シルト岩	1.9	1.4	0.4	0.59	凹基式打製石鏃

表7　出土鉄製品観察表

出土位置		図版番号	挿図番号	遺物番号	種類	部位・状態	全長(cm)	鏃身・刃部・釘身 長(cm)	鏃身・刃部・釘身 幅(cm)	頸部・馬具・筒部 長(cm)	頸部・馬具・筒部 幅(cm)	茎部・頭部・刀装具 長(cm)	茎部・頭部・刀装具 幅(cm)	重量(g)	備考
C1号墳	石室内上面床面	巻頭4	25	60-1	馬具	轡(ハミ・鏡板・引手)	—	—	—	(14.5)	(12.7)	—	—	72.84	
				60-2	馬具	轡(ハミ)	—	—	—	2.2	(9.8)	—	—	25.56	
	石室内上面床面・撹乱			60-3	馬具	轡(立聞片・鏡板)	—	—	—	(7.4)	(7.8)	—	—	27.87	
	石室内上面床面			60-4	馬具	轡(引手)	—	—	—	(18.7)	2.7	—	—	33.57	
	石室内撹乱土			60-5	馬具	轡(引手)	—	—	—	(6.2)	2.8	—	—	12.64	
				61-1	馬具	立聞片？	—	—	—	(1.9)	(1.9)	—	—	1.85	
				61-2	馬具	鏡板片？	—	—	—	3.5	(4.5)	—	—	5.56	
	石室内下面床面・撹乱			62	馬具	カコ	—	—	—	(5.8)	(3.5)	—	—	5.82	
	石室内埋土・撹乱土			63	馬具	カコ片	—	—	—	(3.2)	—	—	—	—	
	石室内上面床面			64	馬具	円環状金具	—	—	—	2.5	(2.4)	—	—	3.15	
				65	馬具片	円環状金具	—	—	—	1.8	(1.6)	—	—	1.33	
				66	馬具片	円環状金具	—	—	—	2.2	(3.2)	—	—	3.18	
	石室内下面床面			67	馬具	飾り金具	—	—	—	(2.0)	1.9	—	—	—	金銅装、雲珠の頭か
	石室内撹乱土			68	馬具	鈎金具か	—	—	—	(2.6)	1.5	—	—	2.88	
	石室内下面床面			69	馬具	鈎金具か	—	—	—	(1.5)	(1.4)	—	—	0.94	
	石室内上面床面	36	26	70	刀装具	切羽	5.5	—	—	—	—	—	3.9	10.12	
	石室内撹乱土			71	刀装具	鞘　責金具	(2.8)	—	—	—	—	—	(0.9)	1.40	
	石室内下面床面			72	刀装具	鎦片？	(2.4)	—	—	—	—	—	1.7	2.48	
	石室内撹乱土			73	刀装具	鎦	(2.3)	—	—	—	—	—	2.2	3.75	
				74	刀装具	鎦	(2.0)	—	—	—	—	—	(1.3)	1.28	
				75	刀子	刃部～茎部	(8.6)	(2.5)	1.6	—	—	5.8	1.1	14.66	鹿角装
				76	刀子	刃部～茎部	(4.5)	(0.8)	(0.9)	—	—	(3.6)	0.8	4.34	鹿角装
				77	刀子	刃部～茎部	(5.7)	4.0	1.1	—	—	(1.7)	(0.9)	5.26	
				78	刀子	刃部～茎部	(6.5)	(1.9)	1.7	—	—	(4.6)	0.9	8.12	
	石室内下面床面			79	刀子	刃部～茎部	(8.5)	(6.6)	1.5	—	—	(1.9)	(1.0)	6.78	
	石室内撹乱土			80	刀子	刃部	(5.5)	(5.5)	(1.4)	—	—	—	—	4.77	
				81	刀子	刃部	(2.1)	(2.1)	0.9	—	—	—	—	0.76	
	石室内埋土			82	刀子	刃部～茎部	(3.2)	—	—	—	—	(2.5)	(1.0)	1.46	
	石室内撹乱土			83	刀子	刃部～茎部	(2.8)	(1.6)	(1.6)	—	—	(1.3)	(1.3)	2.40	
				84	刀子	刃部～茎部	(4.5)	(2.1)	(1.6)	—	—	(2.4)	(1.1)	7.47	
				85	刀子	茎部	(3.2)	—	—	—	—	(3.2)	(1.0)	2.79	
				86	刀子	茎部	2.9	—	—	—	—	(2.9)	1.0	2.21	
				87	刀子	茎部？	(1.9)	—	—	—	—	—	—	1.13	
	石室内下面床面			88	両頭金具		3.5	—	—	(2.4)	0.5	0.6	0.5	2.24	
				89	両頭金具		3.3	—	—	(2.1)	0.7	0.7	0.6	2.11	
	石室内撹乱土			90	両頭金具		(2.5)	—	—	2.15	0.5	0.4	0.3	1.55	
				91	両頭金具		2.9	—	—	(1.9)	0.5	0.6	0.5	1.39	
	石室内覆土			92	両頭金具		3.3	—	—	(2.3)	(0.7)	0.5	0.5	1.99	
				93	両頭金具		3.4	—	—	2.3	0.7	0.5	0.5	1.99	
	石室内下面床面直上		27	94	鉄鏃	鏃身部～頸部	(6.6)	2.2	1.0	(4.4)	0.5	—	—	3.59	片丸造・柳葉
	石室内撹乱土			95	鉄鏃	鏃身部	(5.2)	(5.2)	1.4	(0.4)	0.7	—	—	4.42	柳葉・腸抉
				96	鉄鏃	鏃身部～茎部部	(6.0)	(3.1)	1.3	2.9	0.8	(0.8)	0.6	6.05	柳葉・腸抉
				97	鉄鏃	鏃身部～頸部	(3.7)	(3.7)	1.3	(0.5)	0.7	—	—	4.01	柳葉・腸抉
				98	鉄鏃	鏃身部～頸部	(2.5)	(25)	1.3	(07)	0.7	—	—	2.91	柳葉・腸抉
				99	鉄鏃	鏃身部	(2.1)	(2.1)	1.3	—	—	—	—	1.26	柳葉
	石室内下面床面			100	鉄鏃	鏃身部	(1.7)	(1.7)	(1.2)	—	—	—	—	1.24	柳葉
				101	鉄鏃	鏃身部～茎部	7.5	2.1	1.5	4.4	0.6	(1.1)	0.3	3.42	三角
	石室内撹乱土			102	鉄鏃	鏃身部～頸部	(8.0)	2.5	1.2	(5.6)	0.4	—	—	3.75	三角
	石室内下面床面・撹乱			103	鉄鏃	鏃身部～茎部	(12.0)	2.4	1.4	7.2	0.4	(2.7)	0.3	5.56	三角
				104	鉄鏃	鏃身部～茎部	(9.2)	3.0	(1.9)	4.6	0.7	(1.6)	0.5	8.52	三角
	石室内下面床面			105	鉄鏃	鏃身部～茎部	(9.4)	2.9	2.0	5.0	0.7	(1.7)	0.4	6.16	三角
				106	鉄鏃	鏃身部～頸部	(2.7)	2.1	2.1	(0.6)	(0.4)	—	—	2.37	三角
	石室内撹乱土			107	鉄鏃	鏃身部～頸部	(3.2)	(1.2)	(2.1)	(2.0)	0.9	—	—	3.18	三角
	石室内下面床面			108	鉄鏃	鏃身部～頸部	(1.8)	(1.4)	2.3	(0.4)	(0.8)	—	—	1.73	三角
	石室内撹乱土			109	鉄鏃	鏃身部～茎部	(8.7)	5.2	2.0	3.2	0.8	(0.5)	0.5	7.69	長三角
				110	鉄鏃	鏃身部～茎部	(7.8)	4.7	2.2	2.2	0.7	(1.2)	0.5	8.36	長三角
		37		111	鉄鏃	鏃身部～茎部	(5.3)	4.4	2.4	(0.9)	0.8	—	—	8.95	長三角
	石室内下面床面			112	鉄鏃	鏃身部	4.7	4.7	2.3	—	—	—	—	5.92	長三角・腸抉？
	石室内上面床面			113	鉄鏃	鏃身部～茎部	(6.5)	3.5	2.0	3.0	0.7	(0.4)	0.5	5.87	長三角・腸抉
	石室内下面床面			114	鉄鏃	鏃身部～頸部	(3.9)	3.9	(1.9)	(0.4)	0.6	—	—	3.07	長三角・腸抉
				115	鉄鏃	鏃身部～茎部	(4.3)	(4.2)	(2.2)	(0.7)	0.8	—	—	6.72	長三角・腸抉
				116	鉄鏃	鏃身部～頸部	(5.2)	(3.4)	(1.8)	(1.9)	0.7	—	—	5.80	長三角・腸抉
				117	鉄鏃	鏃身部～頸部	(3.2)	(2.2)	(1.5)	(1.9)	0.5	—	—	1.92	長三角・腸抉
	石室内撹乱土			118	鉄鏃	鏃身茎部	(5.0)	(3.7)	2.0	2.4	0.7	(0.6)	0.5	3.92	長三角・腸抉
				119	鉄鏃	鏃身部～頸部	(3.2)	(32)	(2.0)	(0.8)	0.7	—	—	2.42	長三角・腸抉
	石室内下面床面			120	鉄鏃	鏃身部～頸部	(4.1)	(3.6)	2.0	(1.2)	0.7	—	—	4.74	長三角・腸抉
				121	鉄鏃	鏃身部～茎部	(7.9)	(5.5)	(2.4)	3.0	0.8	(1.0)	(0.5)	14.10	長三角・腸抉
				122	鉄鏃	鏃身部～頸部	(5.0)	(5.0)	(2.3)	(1.1)	0.7	—	—	5.80	長三角・腸抉

出土位置		図版番号	挿図番号	遺物番号	種類	部位・状態	全長(cm)	鏃身・刃部・釘身 長(cm)	鏃身・刃部・釘身 幅(cm)	頸部・馬具・筒部 長(cm)	頸部・馬具・筒部 幅(cm)	茎部・頭部・刀装具 長(cm)	茎部・頭部・刀装具 幅(cm)	重量(g)	備考
C1号墳	石室内下面床面・攪乱	37	27	123	鉄鏃	鏃身部～茎部	(8.7)	(5.5)	(2.0)	2.3	0.7	(0.9)	0.3	10.77	長三角・腸抉
	石室内下面床面			124	鉄鏃	鏃身部～頸部	(4.8)	(4.0)	(2.2)	(0.8)	0.9	—	—	3.88	長三角
	石室内埋土			125	鉄鏃	鏃身部	(2.85)	(2.85)	(2.1)	—	—	—	—	4.02	長三角
	石室内上面床面		28	126	鉄鏃	鏃身部～茎部	(9.9)	4.1	2.8	2.8	0.8	(3.0)	(0.35)	12.35	五角か三角
	石室内攪乱土			127	鉄鏃	鏃身部～茎部	(8.3)	7.1	2.4	—	—	(1.2)	0.5	8.17	斧箭式(圭頭)
				128	鉄鏃	鏃身部～頸部	(4.8)	4.0	(1.9)	(0.8)	0.8	—	—	5.55	斧箭式(方頭)
	石室内上・下面床面			129	鉄鏃	鏃身部	(3.0)	(3.0)	(2.0)	—	—	—	—	1.28	平根
	石室内上面床面	—		130	鉄鏃	鏃身部	(1.5)	(1.5)	(1.35)	—	—	—	—	0.44	平根
	石室内攪乱土	37		131	鉄鏃	鏃身部～頸部	(3.4)	—	—	(2.3)	0.7	—	—	3.15	平根
	石室内下面床面			132	鉄鏃	鏃身～頸部	(13.0)	2.5	1.0	(9.1)	0.4	(1.3)	0.4	5.16	尖根・片切刃造
	石室内下面床面・攪乱			133	鉄鏃	鏃身部～頸部	(11.2)	2.5	1.0	8.7	0.5	—	—	5.80	尖根・片切刃造
	石室内上面床面			134	鉄鏃	鏃身部～頸部	(4.9)	2.6	0.7	(2.2)	0.4	—	—	2.14	尖根・片丸造
	石室内下面床面			135	鉄鏃	鏃身部～頸部	(4.3)	2.8	0.9	(1.5)	0.5	—	—	1.60	尖根・両丸造
		—		136	鉄鏃	鏃身部	(2.0)	(2.0)	(0.6)	—	—	—	—	1.42	尖根・鑿箭式
		37		137	鉄鏃	鏃身部～茎部	(14.9)	2.8	0.8	8.9	0.4	(3.2)	0.4	4.33	尖根・片刃式
				138	鉄鏃	鏃身部～頸部	(11.0)	2.4	0.8	(8.6)	0.4	—	—	3.44	尖根・片刃式
	石室内攪乱土			139	鉄鏃	鏃身部～頸部	(2.8)	0.5	0.6	(2.3)	0.6	—	—	1.10	尖根・反刃式
	石室内上面床面	—		140	鉄鏃	頸部	(8.2)	—	—	(8.2)	0.4	—	—	3.69	
		—		141	鉄鏃	頸部	(6.2)	—	—	(6.2)	0.5	—	—	2.40	
		—		142	鉄鏃	頸部	(4.9)	—	—	—	0.4	—	—	3.46	
		—		143	鉄鏃	頸部	(3.6)	—	—	—	0.3	—	—	1.48	
		—		144	鉄鏃	頸部	(2.3)	—	—	—	0.5	—	—	0.75	
		—		145	鉄鏃	頸部	(1.9)	—	—	—	0.4	—	—	0.89	
		—		146	鉄鏃	頸部～茎部	(10.6)	—	—	(7.9)	0.4	(2.7)	0.3	4.25	
		—		147	鉄鏃	頸部～茎部	(2.5)	—	—	(2.2)	0.7	(0.3)	0.5	1.98	
		—		148	鉄鏃	頸部～茎部	(1.9)	—	—	(1.4)	0.5	(0.5)	0.4	0.91	
		—		149	鉄鏃	頸部～茎部	(6.0)	—	—	(4.1)	0.4	(1.9)	0.3	3.01	
		—		150	鉄鏃	頸部～茎部	(5.2)	—	—	(2.3)	0.5	(2.9)	0.4	2.89	
		—		151	鉄鏃	茎部	(3.2)	—	—	—	—	(3.2)	0.4	1.12	
	石室内下面床面	—		152	鉄鏃	茎部？	(4.1)	—	0.4	—	—	—	—	2.02	
		—		153	鉄鏃	頸部	(4.2)	—	—	(4.2)	0.4	—	—	1.20	
		—		154	鉄鏃	頸部	(6.1)	—	—	(6.1)	0.6	—	—	5.28	
		—		155	鉄鏃	頸部	(3.9)	—	—	(3.9)	0.4	—	—	1.51	
		—		156	鉄鏃	頸部	(3.3)	—	—	(3.3)	0.5	—	—	1.02	
		—		157	鉄鏃	頸部	(2.1)	—	—	(2.1)	0.5	—	—	0.86	
		—		158	鉄鏃	頸部	(2.6)	—	—	(2.6)	0.4	—	—	0.47	
		—		159	鉄鏃	頸部	(2.4)	—	—	(2.4)	(0.4)	—	—	0.66	
		—		160	鉄鏃	頸部	(3.3)	—	—	(3.3)	0.5	—	—	1.30	
		—		161	鉄鏃	頸部～茎部	(4.1)	—	—	(2.7)	0.6	(1.4)	0.4	1.89	
		—		162	鉄鏃	鏃身部～茎部	(4.1)	—	—	(2.1)	0.5	(2.0)	0.3	1.17	
		—		163	鉄鏃	頸部～茎部	3.2	—	—	(1.1)	0.6	(2.1)	0.3	1.16	
		—		164	鉄鏃	頸部～茎部	(3.7)	—	—	(2.6)	0.5	(1.1)	0.4	1.58	
		—		165	鉄鏃	茎部	(2.5)	—	—	—	—	(2.5)	0.4	0.94	
		—		166	鉄鏃	茎部	(2.5)	—	—	—	—	(2.5)	0.4	1.11	
		—		167	鉄鏃	茎部	(1.9)	—	—	—	—	(1.9)	0.35	0.40	
	石室内攪乱土	—	29	168	鉄鏃	頸部	(5.2)	—	—	(5.2)	0.5	—	—	2.21	
		—		169	鉄鏃	頸部	(5.0)	—	—	(5.0)	0.5	—	—	1.62	
	石室内下面床面直上	—		170	鉄鏃	頸部	(4.4)	—	—	(4.4)	0.4	—	—	1.96	
	石室内覆土	—		171	鉄鏃	頸部	(4.1)	—	—	(4.1)	(0.5)	—	—	1.89	
	石室内攪乱土	—		172	鉄鏃	頸部	(3.9)	—	—	(3.9)	0.5	—	—	1.37	
		—		173	鉄鏃	頸部	(2.6)	—	—	—	—	(2.6)	0.5	1.05	
		—		174	鉄鏃	頸部	(2.8)	—	—	(2.8)	0.5	—	—	0.72	
		—		175	鉄鏃	頸部	(2.1)	—	—	(2.1)	0.4	—	—	1.08	
		—		176	鉄鏃	頸部～茎部	(2.1)	—	—	(1.1)	0.7	(1.0)	0.4	0.63	
		—		177	鉄鏃	頸部～茎部	(2.7)	—	—	(2.3)	0.8	(0.5)	0.5	1.86	平根
		—		178	鉄鏃	頸部～茎部	(4.0)	—	—	(2.3)	0.6	(1.8)	0.4	2.12	
	石室内覆土	—		179	鉄鏃	頸部～茎部	(4.6)	—	—	(3.8)	0.5	(0.9)	0.5	2.16	
	石室内攪乱土	—		180	鉄鏃	頸部～茎部	(3.8)	—	—	(2.6)	0.7	(1.2)	0.5	3.08	
		—		181	鉄鏃	頸部～茎部	(5.6)	—	—	(2.8)	0.7	2.2	0.4	4.15	
		—		182	鉄鏃	頸部～茎部	(3.4)	—	—	(2.3)	0.8	(1.1)	0.5	2.41	
		—		183	鉄鏃	頸部～茎部	(3.6)	—	—	(2.7)	0.8	(0.9)	0.5	3.28	
		—		184	鉄鏃	頸部～茎部	(3.5)	—	—	(1.7)	0.7	(1.9)	0.4	2.49	
		—		185	鉄鏃	頸部～茎部	2.7	—	—	(1.9)	0.9	(0.8)	0.6	3.07	
		—		186	鉄鏃	頸部～茎部	(5.3)	—	—	(1.3)	0.9	(4.0)	0.6	4.71	
		—		187	鉄鏃	頸部～茎部	(4.7)	—	—	(3.4)	0.5	(1.3)	0.4	2.80	
	石室内下面床面直上	—		188	鉄鏃	頸部～茎部	(5.0)	—	—	(3.9)	0.5	(1.1)	0.5	3.47	
	石室内攪乱土	—		189	鉄鏃	頸部～茎部	(2.3)	—	—	(1.4)	—	(0.9)	—	0.78	剥離片
		—		190	鉄鏃	茎部	(2.1)	—	—	(1.0)	(0.7)	(1.1)	(0.4)	0.70	
		—		191	鉄鏃	茎部	(2.4)	—	—	—	—	(2.4)	0.6	1.10	
		—		192	鉄鏃	茎部	(2.0)	—	—	—	—	(2.0)	0.3	0.53	

出土位置		図版番号	挿図番号	遺物番号	種類	部位・状態	全長(cm)	鏃身・刃部・釘身 長(cm)	鏃身・刃部・釘身 幅(cm)	頸部・馬具・筒部 長(cm)	頸部・馬具・筒部 幅(cm)	茎部・頭部・刀装具 長(cm)	茎部・頭部・刀装具 幅(cm)	重量(g)	備考
C1号墳	石室内撹乱土	—	29	193	鉄鏃	茎部	(2.1)	—	—	—	—	(2.1)	0.4	0.38	
	石室内覆土	—		194	鉄鏃	茎部	(2.1)	—	—	—	—	(2.1)	0.3	0.48	
	石室内撹乱土	—		195	鉄鏃	茎部	(2.3)	—	—	—	—	(2.3)	0.4	0.78	
		—		196	鉄鏃	茎部	(2.2)	—	—	—	—	(2.2)	0.4	0.49	
		—		197	鉄鏃	茎部	(1.4)	—	—	—	—	1.4	0.2	0.30	
		—		198	鉄鏃	茎部	(1.4)	—	—	—	—	(1.4)	0.3	0.24	
	石室内下面床面直上	—		199	鉄鏃	頸部	(1.4)	—	—	—	—	(1.4)	0.3	0.21	
	石室内撹乱土	—		200	鉄鏃	茎部	(2.1)	—	—	—	—	(2.1)	0.3	1.10	
		—		201	鉄鏃	茎部	(3.3)	—	—	—	—	(3.3)	0.5	2.10	
		—		202	鉄鏃	茎部	(3.3)	—	—	—	—	(3.3)	0.7	1.15	
		—		203	鉄鏃	茎部	(2.1)	—	—	—	—	(2.1)	0.8	0.70	
	石室内下面床面	37		204	釘		(6.1)	(6.1)	0.4	—	—	—	—	3.60	
	石室内撹乱土			205	釘		(3.3)	(3.3)	0.4	—	—	—	—	2.15	時代・器種不明
				206	釘		(2.5)	(2.5)	0.3	—	—	—	—	1.03	
	石室内上面床面			207	釘		(4.7)	—	0.4	—	—	—	—	2.45	
	石室内撹乱土			208	不明鉄製品		(6.4)	—	—	—	—	—	—	3.57	
C2号墳	石室内羨道埋土	38	32	8	刀子？	刃部？	(5.8)	(5.8)	(1.0)	—	—	—	—	4.16	
	石室内埋土			9	刀子？	茎部？	(3.4)	—	—	—	—	(3.4)	(0.8)	1.44	
	石室内羨道埋土			10	鉄鏃	頸部	(2.0)	—	—	(2.0)	0.4	—	—	0.60	
C3号墳	石室内覆土		35	5	不明鉄製品		(2.0)	—	—	—	—	(2.0)	(0.9)	2.75	釘か？
				6	鉄鏃	茎部	(3.0)	—	—	—	—	(3.0)	(0.6)	1.74	
C4号墳	石室内床面	39	39	18	刀子	刃部	(7.6)	(7.6)	1.8	—	—	—	—	14.93	
C6号墳	石室内上面床面	40	46	9	刀子	刃部～茎部	(10.5)	(5.4)	(1.3)	—	—	(5.1)	(1.2)	9.23	
	石室内下面床面			10	鉄鏃	頸部～茎部	(12.5)	—	—	(10.7)	0.5	(1.8)	0.4	6.03	尖根
				11	鉄鏃	頸部～茎部	(11.0)	—	—	—	0.5	—	0.3	5.59	尖根
				12	鉄鏃	頸部～茎部	(8.1)	—	—	(6.6)	0.4	(1.5)	0.4	3.90	尖根
				13	鉄鏃	頸部	(6.4)	—	—	(6.4)	0.4	—	—	3.74	尖根
				14	鉄鏃	頸部	(4.7)	—	—	(4.7)	(0.5)	—	—	1.96	尖根
				15	鉄鏃	頸部～茎部	(5.5)	—	—	(5.0)	(0.4)	(0.5)	(0.4)	2.68	尖根
		—		16	鉄鏃	茎部	(4.2)	—	—	—	—	(4.2)	0.4	1.89	
		—		17	鉄鏃	頸部～茎部	(3.5)	—	—	(2.9)	0.5	(0.6)	0.4	1.18	
		—		18	鉄鏃	頸部	(4.1)	—	—	(4.1)	0.4	—	—	1.98	
		—		19	鉄鏃	茎部	(3.0)	—	—	—	—	(3.0)	0.5	1.22	
		—		20	鉄鏃	頸部	(3.3)	—	—	(3.3)	0.5	—	—	1.54	
		—		21	鉄鏃	茎部	(3.0)	—	—	—	—	(3.0)	0.5	0.89	
		—		22	鉄鏃	茎部	(2.0)	—	—	—	—	(2.0)	0.4	0.54	
C7号墳	石室内床面	41	49	7	直刀	刃部～茎部	(82.2)	(80.2)	3.1	—	—	(2.0)	1.8	371.0	
				8	刀装具	鍔	8.9	—	—	—	—	8.9	5.9	19.98	
				9	刀子	茎部	(3.4)	—	—	—	—	(3.4)	0.8	2.11	
	石室内覆土			10	鉄鏃か刀子	鏃身部～頸部	(3.8)	(1.8)	(1.1)	(2.0)	0.5	—	—	1.26	片刃箭か
C8号墳	石室内床面	41	52	8	刀子	刃部～茎部	(5.8)	(0.8)	(1.6)	—	—	(5.1)	1.0	7.24	
				9	鉄鏃	鏃身～頸部	(5.2)	(4.2)	2.6	(2.1)	0.7	—	—	7.14	平根・柳葉・腸抉
				10	鉄鏃	鏃身～頸部	(2.6)	(1.7)	(2.2)	(1.0)	0.8	—	—	2.61	平根・三角
				11	鉄鏃	鏃身～頸部	(8.5)	2.6	1.0	(5.9)	0.5	—	—	4.96	柳葉・片切刃造
				12	鉄鏃	頸部～茎部	(4.2)	—	—	(1.8)	(0.7)	(2.4)	0.4	2.03	尖根・三角？
C9号墳	石室内下面床面	42	57	29	刀子	刃部～茎部	(11.5)	(7.7)	(1.1)	—	—	(3.6)	(0.8)	5.95	
				30	刀子	刃部～茎部	(11.9)	(7.2)	1.3	—	—	(4.7)	1.0	14.98	
C11号墳	石室内埋土		61	8	刀子	鞘　茎部？	(2.6)	—	—	—	—	(2.6)	1.0	1.63	
C13号墳	床面直上	43	66	1	鉄鏃	鏃身～頸部	(3.5)	(3.5)	2.8	(0.3)	0.6	—	—	4.33	五角
C14号墳	石室内埋土		69	3	鉄鏃	鏃身～茎部	(10.4)	0.9	1.0	8.2	0.4	(1.4)	0.3	4.40	撫関三角
				4	鉄鏃	頸部～茎部	(6.3)	—	—	(4.5)	0.5	(1.8)	0.4	3.03	
C17号墳	石室内床面		77	2	刀子	全体	13.1	7.1	(1.2)	—	—	5.5	1.1	16.31	
		—		3	刀子片	茎部か	(2.5)	—	—	—	—	(2.5)	(0.8)	0.86	

（　）は残存値

表8　出土銭貨観察表

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	銭名	銭径(cm)	内径(cm)	孔幅(cm)	重量(g)	備考
1区北側東斜面焼土付近	表土	43	12	10	寛永通寶	2.4	2.0	0.7	2.03	新寛永
C古墳群三岩稲荷神社祠付近	表土		78	9	寛永通寶	2.4	1.9	0.6	3.22	鉄銭
				10	寛永通寶	2.3	1.8	0.6	1.94	新寛永
C8Tr.	表採			11	文久永寶	2.7	2.0	0.6	3.03	C3号墳周辺、「文」が楷書の「真文」
C2Tr.東拡張部	表土			12	熙寧元寶	2.5	2.0	0.7	2.47	C1号墳付近

第６節　人骨調査

１　はじめに

第二東名建設事業に伴い静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査した雲岩寺Ｃ古墳群で出土した人骨について、保存処理および鑑定業務を実施したので、その検査成績を報告するものである。当の人骨資料は合計７箱のコンテナーに分別され取り上げたときのままの状態で平成14年の５月上旬に鑑定者たちが所属する京都大学霊長類研究所に搬送された。それぞれの古墳で出土した人骨ごとに一定期間にわたり最大限必要な保存処理を施されたのちに、１個体分ずつの人骨に仕分けされ、残存部位の特定を行うとともに、性別、死亡年齢、生前の身長、死因、病歴などの生体での特徴につき肉眼解剖学的に精査された。また、AMS放射性炭素年代測定のために６点のサンプルが採取され、その測定検査が名古屋大学年代測定センターに依頼された。

２　保存処理

この人骨資料は、いずれの古墳で出土したものも非常に保存状態が悪い。たいていは小さな骨片となったものばかりであり、なかには歯しか残っていない。こんな状態の資料については、いっさいの化学的な保存処理は有効ではなく、できるだけ更なる破損を防ぐべく洗浄し、注記したのち、自然乾燥した状態でプラスチックの小箱に分けて物理的な瓦解を止めるように保存していくほかない。実際、奈良大学文学部文化財学科保存科学教室の西山要一教授の推奨により一部の資料につきセメダインＣ溶液による保存処理を試みてみたが、まったく効果ないことが判明したので、ほとんどの資料については、ただシンプルに手間ひまをかけて保存処理するだけにとどめた。

３　肉眼解剖学的検査成績

⑴　C7号墳

この古墳の人骨については、ただ歯が残存するだけで、いっさいの骨成分が消滅していた。下顎右歯列の第１大臼歯と第２大臼歯、それに左歯列の第３大臼歯が歯冠だけとなって残る。それぞれの歯の咬耗については、第１大臼歯では頬側の咬頭に象牙質が点状に露出し、第２大臼歯では歯冠全面のエナメル質に及ぶだけであり、第３大臼歯では咬耗が認められない。これらのことから、まだ第３大臼歯が萌出せず12歳頃に萌出する第２大臼歯が生えて数年かそこらか経た年齢で死亡した人物の遺骨と考えるのが妥当である。

おそらく10歳代の後半あたりから、せいぜいのところ壮年の前半あたりで死亡したのではなかろうか。このような保存状態であるから、当然のこと、性別は不明であり、身体特徴についても推定材料となるものはない。

⑵　C9号墳

この古墳の人骨も保存状態が極めて悪い。出土状況時の写真をみる限り、骨の形を留めるものもあるが、おそらくは取り上げたときや搬送時に傷めたのであろう、多くの骨は検査時には崩れており、小さな破片となり、それに加えて非常に脆弱な状態であった。また、比較的よく形を留めた骨も断片や破片でしか残っておらず、いささかでも完形に近い部分は皆無となっている。

頭蓋骨、下顎骨、肩甲骨、椎骨、四肢の長骨、足骨などが残っているのが確認できた。それとともに合計65個の永久歯と12個の乳歯が確認できた。

歯の形態を詳しく分析することにより、このC9号墳に納められた人骨の最小個体数は５体分となるこ

とが判明した。まず上顎左歯列の中切歯であるが、合計４個ほどが重複しており、そのうちの２個は咬耗が認められない子供の歯であり、あとの２個は象牙質が露出するまで咬耗した成人の歯である。さらに上顎右歯列の第２乳臼歯が３個ばかり重複することが確認できた。このことから、少なくとも３個体分の子供の遺骨があり、２個体分の成人の遺骨が存在することが明らかである。

また、歯以外にも、頭蓋骨の右錐体部分の断片が３個、下顎骨の断片が２個、右橈骨の骨体部分が２個、いずれも重複しており、それに右の大腿骨の骨体が２個と左大腿骨の骨体が３個あるので、これについても何体分かが混じることがわかる。錐体部は２個ともに内耳孔部分を含む断片であり、下顎骨は小臼歯から第３大臼歯までが釘植する左半分の断片と、乳臼歯が釘植する断片である。右橈骨と左大腿骨の骨体については、大きさとか筋付着部の特徴を異にする。橈骨は骨体が細くて小さいものと、大柄な男性なみに大きく長いものである。大腿骨の骨体は、一つは一人の子供のものの左側であり、あとの四つは成人の大きさをしており、これらについては粗線など筋付着部の発達が弱く華奢なものの左右と、骨体が太く粗線がよく発達したものの左右である。

この他に断片でしか残らないので、別個体に属するかどうか定かでない頭蓋骨の断片が多数ある。また、現代人なら男性なみの大きさの左脛骨の骨体が１個、そして現代人の女性なみに小さなのと、それよりもさらに小さい右脛骨の骨体が合わせて２個、骨間稜線の発達の様子が異なる右腓骨の骨体の断片が２個、成人の中足骨の骨体が２個分ある。

さて、この古墳に埋葬された人物の死亡年齢であるが、子供の遺骨３体分については歯以外に子供のものと識別できるのは、軸椎の破片１個と左大腿骨の骨体断片が１個だけである。しかしながら、それらがどの歯とマッチするかをつまびらかにすることはできない。残存する歯の歯種ごとに咬耗の状態を詳細に分析していくと、重複する上顎の右歯列の第２乳臼歯、さらにこれらと一緒に取り上げられた数個の歯の萌出の有無や歯冠の形成段階が推測できる。それらのことから判断すると、それぞれの死亡時の年齢は、うち１体は３歳から６歳、あとの２体分は約６歳前後であったことが判明した。

もちろんのこと、このような年齢の人骨については性別を決めることはできない。そして保存状態が非常に悪いため、生体の特徴について、いささかの情報も拾っていくことはできない。

次に２人分の成人骨についてであるが、それらに属するのは、象牙質にまで咬耗が及んだ一群の歯、下顎骨の断片、四肢の長骨と足骨の断片である。しかし、この成人２体分の死亡年齢を推定するには歯だけしか判断材料とならない。片方の人物については、上下顎ともに左歯列の第３大臼歯の咬耗が象牙質にまで咬耗が及んでいることから、すでに熟年の域には達した年齢で死亡した可能性が大である。そして、もう１体の人物については、左右の歯列ともに上顎の中切歯と下顎の犬歯で歯冠の象牙質が全面に露出するほど咬耗していること、小臼歯で象牙質が点状に覗くほどに咬耗していること、しかし第１大臼歯では咬耗がエナメル質でとどまることなどから判断すると、まだ壮年の段階にある年齢で死亡した可能性が高い。

この２人分の成人骨の性別については、熟年で死亡したほうの人物は、第２小臼歯から第３大臼歯までの歯が釘植したままの下顎体の形態特徴として、咬筋粗面がよく発達していること、オトガイ隆起が大きく突出することから男性であった可能性が高い。また、全体に長めで三角筋粗面が非常によく発達した左上腕骨や、大柄で各筋の付着部がゴツゴツした右橈骨や左右の大腿骨、骨体部が大きな左脛骨の断片などもこの人物のものだとすれば、男性であったことは間違いなかろう。また、そうすると、もう一人の壮年の個体に属する骨としては、小ぶりで骨体の細い右橈骨、華奢なおもむきの左右の大腿骨の骨体断片、同じく右脛骨の骨体断片が想定できることになり、もしそうだとすれば、こちらのほうは女性骨である可能性のほうが高い。したがって、成人の人骨については、一体分は男性骨、もう一体は女性骨ということになる。

識別番号	性 別	推定死亡年齢	残　　存　　部　　位	特記事項
C7号墳-1	不明	10代後半から壮年前半	永久歯3個	最小個体数1体
C9号墳-1	不明	約3－6歳	乳歯と永久歯	最小個体数5体
C9号墳-2	不明	約6歳前後	乳歯と永久歯	
C9号墳-3	不明	約6歳前後	乳歯と永久歯	
C9号墳-4	男性	熟年(40～60歳)	下顎骨、歯、左上腕骨骨体、橈骨骨体、左右大腿骨の骨体断片、左脛骨断片。	
C9号墳-5	女性？	壮年（20～40歳）	歯、右橈骨骨体、左右大腿骨の骨体断片、右脛骨骨体断片。	
C9号墳	識別不能		永久歯数点。頭蓋骨の断片。右腓骨骨体断片2つ。左中足骨骨体2つ。骨片多数。	
C11号墳-1	不明	不明	永久歯の断片1個	最小個体数1体
C14号墳-1	不明	成人	上腕骨骨体断片、大腿骨骨体断片、大腿骨か脛骨の骨体断片	最小個体数2体
C14号墳-2	不明	約6－10歳	乳歯と永久歯	

表9　人骨分析一覧

最後に、この古墳の人骨について出土時の各骨の位置関係を実測図で確認すると、いずれの骨も解剖学的位置に並んでいると考えられず、各個体の骨が古墳内の一面にばらばらに散らばって混在している。しかし、頭蓋骨の一部、大腿骨、脛骨などは、骨ごとにまとめて置かれていたようにみえる。いずれにせよ、白骨化したのちに撹乱されたか、あるいは二次埋葬、つまりは改葬か再葬された人骨である可能性が高いと判断できる。

⑶　C11号墳

上顎右歯列の大臼歯と思われるものの歯冠エナメル質の遠心部分の断片が残るのみである。性別、死亡年齢など、いずれの項目についても不明である。

⑷　C14号墳

保存状態の悪い四肢長骨の断片や破片と数個の歯が確認できるだけである。

左上腕骨、左右不明の大腿骨、左右不明の大腿骨もしくは脛骨、前腕骨などの骨体部分が残存するが、いずれの骨も断片や破片があるだけであり、また骨表面も崩れているなど、極めて保存状態が悪いために詳細に検査分析できるにはいたらない。

歯については、下顎左歯列の第2乳臼歯と上顎右歯列の第1大臼歯、下顎の右歯列の第1大臼歯、左歯列の犬歯と第2大臼歯が確認できる。乳臼歯の咬耗は一部に象牙質がみられるほど進行し、永久歯については、下顎の右第2大臼歯で点状に象牙質を露出するほどの咬耗があるが、その他の歯は、わずかにエナメル質部分を咬耗するか、まったく咬耗が認められない。つまり、「6歳臼歯」と呼ばれる第1大臼歯はすでに萌出するも、まだ乳歯を残し、そして「12歳臼歯」と呼ばれる第2大臼歯が萌出しない年齢で死亡した人物の歯と、かなり第2大臼歯の咬耗が進行した成人の歯が混在するのが明らかである。

上腕骨や大腿骨については、その大きさや骨の緻密質が厚いことなどから成人の骨であることは間違いない。つまり、歯を残した人物の骨ではないことは確かである。このように、この古墳には少なくとも2体分の遺骨が埋葬されていたことになる。したがって最小個体数は2体、おそらくは成人に達したあとの年齢で死亡した人物と子供の段階で死亡した人物の二人が埋葬されていたのであろう。もちろん、それ以外の人物も埋葬されていたが、その人物については、いっさいの遺骨が消失してしまった可能性も否定できない。

子供のほうについては、まだ乳臼歯が残っていること、第2大臼歯は萌出前と考えられるので、死亡時の年齢は6歳から10歳までの間であったろうと推定できる。一方、成人の遺骨については、下顎の右第2大臼歯に印された咬耗のほどからしか死亡年齢を推定するすべはなく、おおよそのところ、壮年から熟年あたりで死亡した人物のものであろう。

性別とか、骨格の特徴などは、骨の保存状態が悪いので、なにも推量できない。

第３章　高根山Ａ古墳群

第１節　高根山Ａ古墳群の調査

１　現地調査

高根山Ａ群の存在は周知の遺跡としてすでに公にされ、さらに道路工事予定地外ではあるが、北側の一部が、浜北市教育委員会により発掘調査されていた。このような経過を受け、今回の高根山Ａ群の確認調査は、道路工事予定地のどの地点に、どのような形で何基の古墳や別の遺構が分布しているかを調査することを目的とした。そのため等高線にそって工事対象区域全域にトレンチを入れた。以下、本調査を含め現地調査の経過についてふれることとする。

確認調査（期間：平成12年6月26日～平成12年10月5日　調査名：No.132地点確認調査）

平成12年6月26日から高根山Ａ群の確認調査は実施された。現地には古墳の主体部に使用されたと考えられる石材が散乱する地点や古墳の石材を取り去ったと思われる撹乱坑も認められた。確認トレンチは等高線にそって東から東より西へＡからＬの13ブロックにわけ、それぞれA1～L15と呼称した。実施にあたっては調査対象面積を25,057㎡とし、重機と人力を併用して調査延べ面積1,383㎡の確認調査を行った。その結果、丘陵頂部に近い地点は、以前あったレクリエーション施設のため削平を受けていたこと、緩やかな斜面は畑地のため耕作地とされていたこと、そのため猪除け土手が造られていたことなど、古墳を含むこの地点の地形が改変されてはいたものの、2ブロックにわたって古墳16基の存在が確認された。その他、溝状遺構（のちに古墳の周溝や前溝と判明）や炭窯、古墳群と古墳群間に性格不明の集石遺構の存在が明らかにされ、遺構の分布範囲も把握できた。

第１次調査（期間：平成13年10月1日～平成14年3月8日　調査名：No.132地点本調査）

第1次調査は調査対象地の西半分の4,500㎡を対象とした。調査の結果、6基の横穴式石室を主体部とする古墳と52基の土坑墓を検出し、調査を終了した。

古墳については、3号墳をのぞいて開墾や石材採取のため石室の残存状況は極めて悪く、大半が石室の用材を抜き取り、持ち去られていた。出土品については1号墳と2号墳の撹乱坑から10数点の須恵器が出土したが、遺物目当ての撹乱ではないためか極めて良好な残り方であった。

土坑墓については48号墓から10世紀後葉～11世紀前葉の灰釉陶器碗が副葬品として出土した。この土坑墓の年代の1点を示すと考えられる。

第２次調査（期間：平成14年4月4日～平成15年3月31日　調査名：No.132地点本調査）

第1次調査は調査対象地の西半分の6,880㎡を対象とした。調査の結果、29基の横穴式石室を主体部とする古墳と75基の土坑墓、1基の火葬墓を検出し、調査を終了した。

古墳については、前年度調査分と同様に開墾や石材採取のため石室の残存状況は極めて悪く、多くが石室の用材を抜き取り、持ち去られていた。前年度より調査した古墳が多いこともあって、横穴式石室の遺存の良い例もいくつか認められた。その中で規模の大きい17号墳については、高さ1.3mほど墳丘が遺存していた。このような墳丘が遺存した古墳は調査前にも盛り上がっていたため、見た目でも古墳の存在を確認できた。

その中で26号墳は12号墳の墳丘を再利用して構築された珍しい例であった。出土品については須恵器・土師器の土器類、直刀や鉄鏃の鉄製品、玉類などが出土したが、副葬状態を残すような良好な残り

写真13　確認調査

写真14　遺構検出作業

写真15　周溝調査

写真16　土坑墓精査

写真17　石室実測

写真18　空中測量

写真19　土器復原

写真20　遺構図トレース

左：高根山A～C群　　右：雲岩寺B・C群

第83図　高根山Ａ古墳群位置図

方ではなかった。

土坑墓からは副葬品は認められなかった。火葬墓は灰釉陶器の長頸壺と土師器が認められた。昨年度調査した土坑墓と同じ時期と考えられる。以上を持って３カ年に及ぶ高根山Ａ群の現地調査は終了した。

２　資料整理

高根山Ａ群の基礎整理作業は、現地調査と並行しながら実施した。平成23年度と24年度に入ると、本格的な資料整理と報告書刊行、保存処理を行ったが、これについては「第１章　総論」の中でふれ、１つ１つの作業が雲岩寺Ｃ群の資料整理とも重複する内容であるので、ここでは割愛する。

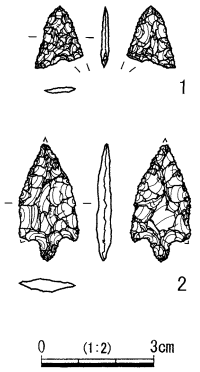
第２節　古墳群以前の調査

１　古墳群以前の遺物

丘陵の緩傾斜面１万㎡強の面積を発掘調査したため、高根山Ａ群からは古墳群が築造される以前の遺物が出土している。同じ北部丘陵の一角にあった大屋敷Ｃ古墳群の一角から、落とし穴５基と縄文時代の石鏃や弥生時代の磨製石鏃など少量ではあるが、発見されている（静岡埋文研 2004）。当該期、集落以外において生活の痕跡である遺構・遺物が発見されることは、広い面積を調査しなければあまり例のないことである。高根山Ａ群からは以下の遺物が発見されている。

石鏃・剥片　丁寧に加工された凹基式と有茎式の石鏃が出土した。いずれもシルト岩製で完成品であり、凹基式石鏃は破損・欠損している。縄文時代後・晩期と考えられる。ほかに長野県産の黒曜石のくさび形石器、黒曜石剥片、メノウの剥片、頁岩の剥片が出土した。黒曜石は長野県産が多い。剥片も縄文時代と推定される。これらは表土や撹乱層から出土し、遺構には伴っていなかった。また当該期の遺構は認められなかった。すると高根山Ａ群の範囲は、縄文時代には狩り場の一部、もしくはその途中の通過点と推定される。

石鏃をみると破損し欠損しているので、棄てたとみることができるかもしれない。少ないながら剥片があることから、修理・再加工を行っていたと考えることができる。このことから狩りや移動の際、石材を持ち歩き、必要に応じて使用した石器を修理・再加工も行っていたと思われる。



第84図　石鏃実測図

表10　石鏃観察表

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
A14号墳	石室覆土	114	84	1	石鏃	シルト岩	1.6	1.2	0.2	0.32	
A19号墳	撹乱			2	石鏃	シルト岩	3.0	1.5	0.4	1.88	

第３節　古墳群の調査

１　古墳群の概要

⑴　立　地

浜北区北麓古墳群は、天竜奥三河国定公園・森林公園を中心に、ほぼ東西の根堅・尾野、宮口の北部丘陵先端部に分布している。この丘陵の下位の一部は、東側を流れる天竜川によって河岸段丘となっている。高根山Ａ、雲岩寺Ｃ群付近では、南北に走る開析谷によって分断され、それぞれ独立した先端部を造り出している。この独立した先端部は、高根山古墳群のある地点では通称「高根山」と呼び、高根山Ａ群はその一角に立地する。

⑵　高根山古墳群の概観

高根山にはＡ、Ｂ、Ｃの３群の支群がある。Ａ群は高根山山頂（標高135m）北側緩斜面にあって、浅い谷地形を挟んで高根山山頂部とは切り離される位置にあたる。Ａ群は旧浜北市教育委員会調査分７基と今回、調査分35基の計42基が発掘調査されている。Ａ群の範囲をすべて発掘調査したのではないので総数は不明であるが、おおよそ45～50基と推定される。今回の調査分35基と旧浜北市教育委員会調査分７基の位置関係は、広い意味では同一丘陵に位置する古墳群であるが、調査区と調査区の間に未調査部分もあり、同じ小支群に当たるかは不明であり、それぞれ独立した古墳の名称を付けた。したがって本書の高根山Ａ群１号墳とは本事業調査分の名称であることをお断りしておく。

旧浜北市教育委員会調査分７基は、本事業調査分の北側丘陵頂部周辺とそれより下位の斜面から検出された。頂部は標高121.1mを測る。頂部周辺のKF10号墳は７基の中では古く、東西14m、南北11.4mを測り、旧浜北市教育委員会調査分では最も大きい円墳であった。副葬品には盗掘を受けていたものの、須恵器以外に直刀に付く鉄地銀張製責金具や装身具の丸玉が出土し（浜北教育委員会 1995）、小支群の主座的古墳と推定された。調査された古墳の概要については表11にまとめたが、本事業調査分と比較してもKF10号墳の墳丘は大きく、石室も基底石の抜き取り痕から擬似両袖式の複室構造と推定される。

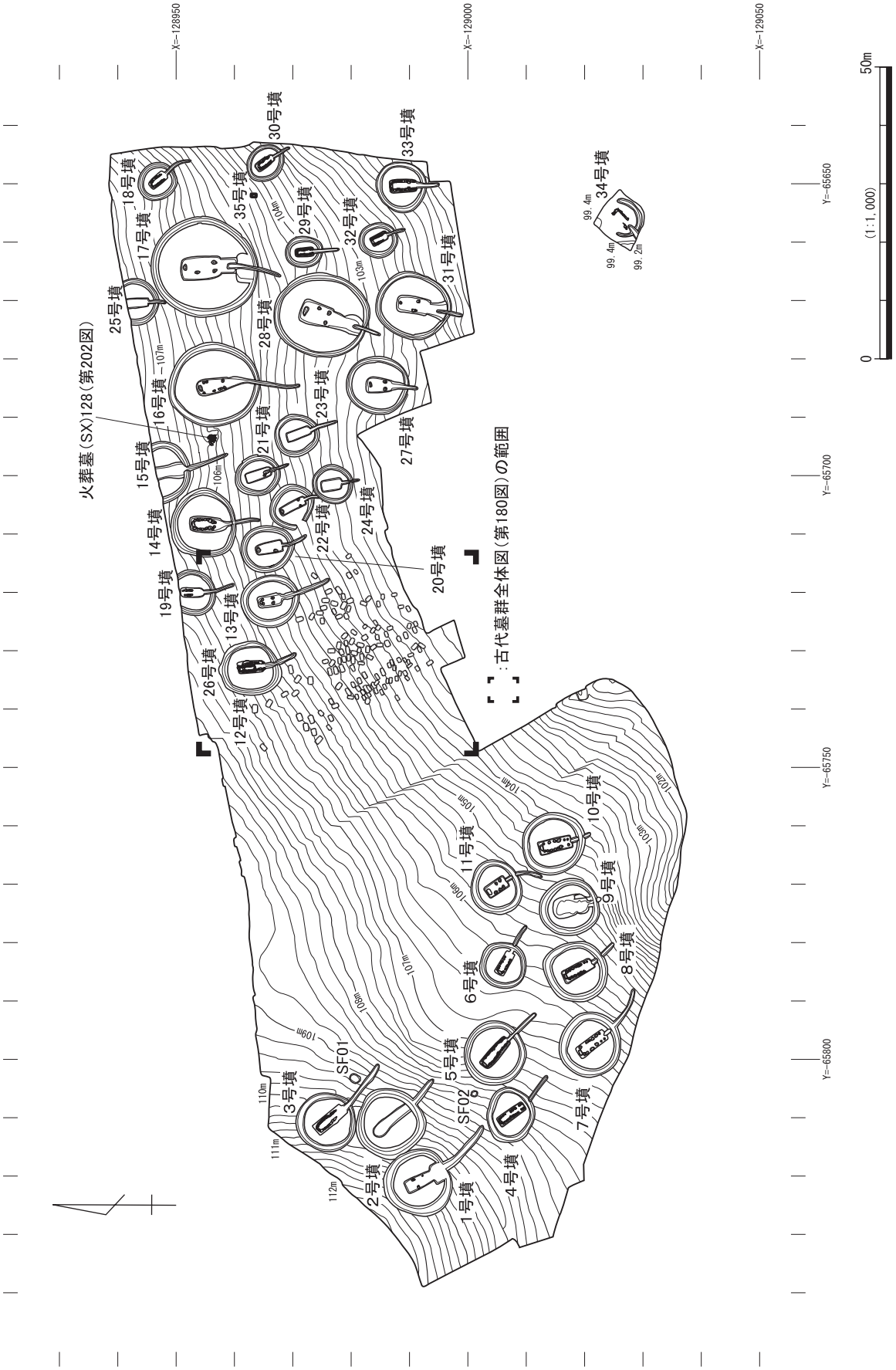
それ以外で墳丘規模のわかるKF13・14号墳は直径10m以下であるものの、KF13号墳は片袖式石室で石室全長6.8mと大きく、KF10号墳につぐクラスと推定される。

Ｂ群は高根山山頂を中心に10基前後で形成される比較的、残りの良い古墳群である。その中でも５号墳は径15m～13mの円墳で、主体部の両袖式石室は古式の形態である（浜北市 2004）。Ｃ群は高根山南西緩斜面に位置し、見かけでは20基前後が分布する。

調査成果によれば、いずれもＡ、Ｂ、Ｃの３群の支群の古墳は横穴式石室の円墳と推定され、発掘調査によって今後、増加すると考えられるので、高根山古墳群は総数100基前後で構成されると推定される。

古 墳	墳丘（東西×南北）m	主軸方位	石　室	玄　室	副　葬　品	築造時期	追葬時期
KF10	14×11.4	N11°w	擬似両袖	長方形	坏・高坏・坩・壺・玉類・刀装具・鏃	Ⅲ期末葉	Ⅳ期前半
KF12	／	N32°w	擬似両袖	奥窄り	短頸壺	Ⅳ期	
KF13	9.6×10	N10°w	片袖	長方形	坏・長頸壺・平瓶	Ⅲ期末葉	Ⅳ期前半
KF14	8.4×9	N4°w	不明	奥窄り	坏・平瓶	Ⅳ期前半	
KF15	／	N11°w	擬似両袖	奥窄り	長頸壺	不明	Ⅳ期後半
KF16	／	不明	不明	不明			
KF17	／	N3°w	擬似両袖	奥窄り	平瓶	Ⅳ期前半	

表11　浜北市調査古墳一覧



第85図　高根山Ａ古墳群全体図

２　調査された古墳の成果

⑴　高根山A1号墳

調査前の状況

本事業調査分の古墳群は、調査区中央を北西から南東に向かって走る浅い谷地形を挟んで、東西に2分される。A1号墳からA11号墳は西側のグループに属し、A12号墳からA35号墳は東側のグループに属する。両グループは東西幅50mを測る空白域を挟んで築造されている。A1号墳は調査区西側の標高112mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘など地形の盛り上がりを認識できず、見かけでは古墳として認められなかった。

墳丘・周溝

A1号墳は、西側のグループではA1号墳からA3号墳が並列する上位グループの西端に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。本来、墓壙や周溝を掘削した土によって、A1号墳埋葬施設の石室を覆う程度の墳丘が盛土されていたと考えられる。

古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに北側に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.7m、深さ0.25m、西側が幅2.0m、深さ0.22m、南側が幅1.2m、深さ0.28m、東側が幅1.5m、深さ0.4mを測る。墳丘は東西8.3m、南北8.7mを測る。墳丘南側で、標高110.65m墳丘北側で、標高111.9mを測り、現状での古墳の高さは1.25mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって基底石までほぼ完全に抜き取られていた。残存した石材は両側壁の1、2個であったが、床面の礫床については一部が、奥壁に近い部分で良好に残っていた。奥壁がもとあった部分には奥壁の一部、もしくは天井石の一部と思われる石材が、倒れていたが、床面より浮いていたところから石材の抜き取りの際、倒されたと考えられる。

残存した側壁の積み方は、小口積みと横口積みである。大きく撹乱を受けているため、石室の平面形は不明である。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高111.675m、下端で110.465mを測ることから、約1.2mを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓道は先端部が南東へ曲げられている。墓壙と墓道の境界は大きく撹乱を受け、築造当初の姿を失っている。

遺物の出土状態

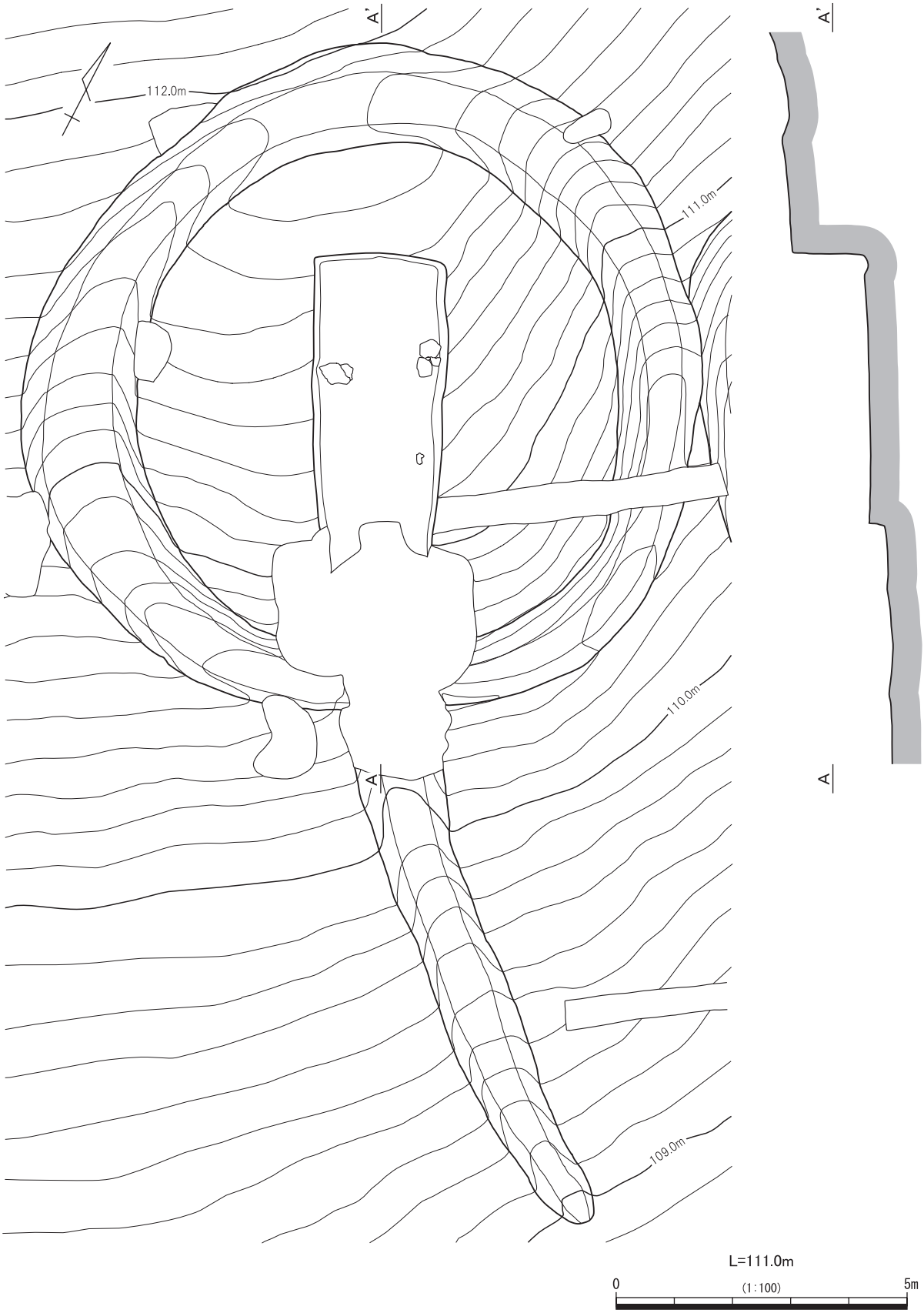
墓壙と墓道の境界の撹乱穴から、坏や高坏を中心とした須恵器や鉄製品が発見された。古墳を壊し、石材を抜き取る際、石室の前方にあった副葬品をかき出したもので、原位置を留めていないと推定される。破損も少ないものもあり、一括で置かれていたものをそのままかき出したのであろうか。

出土遺物

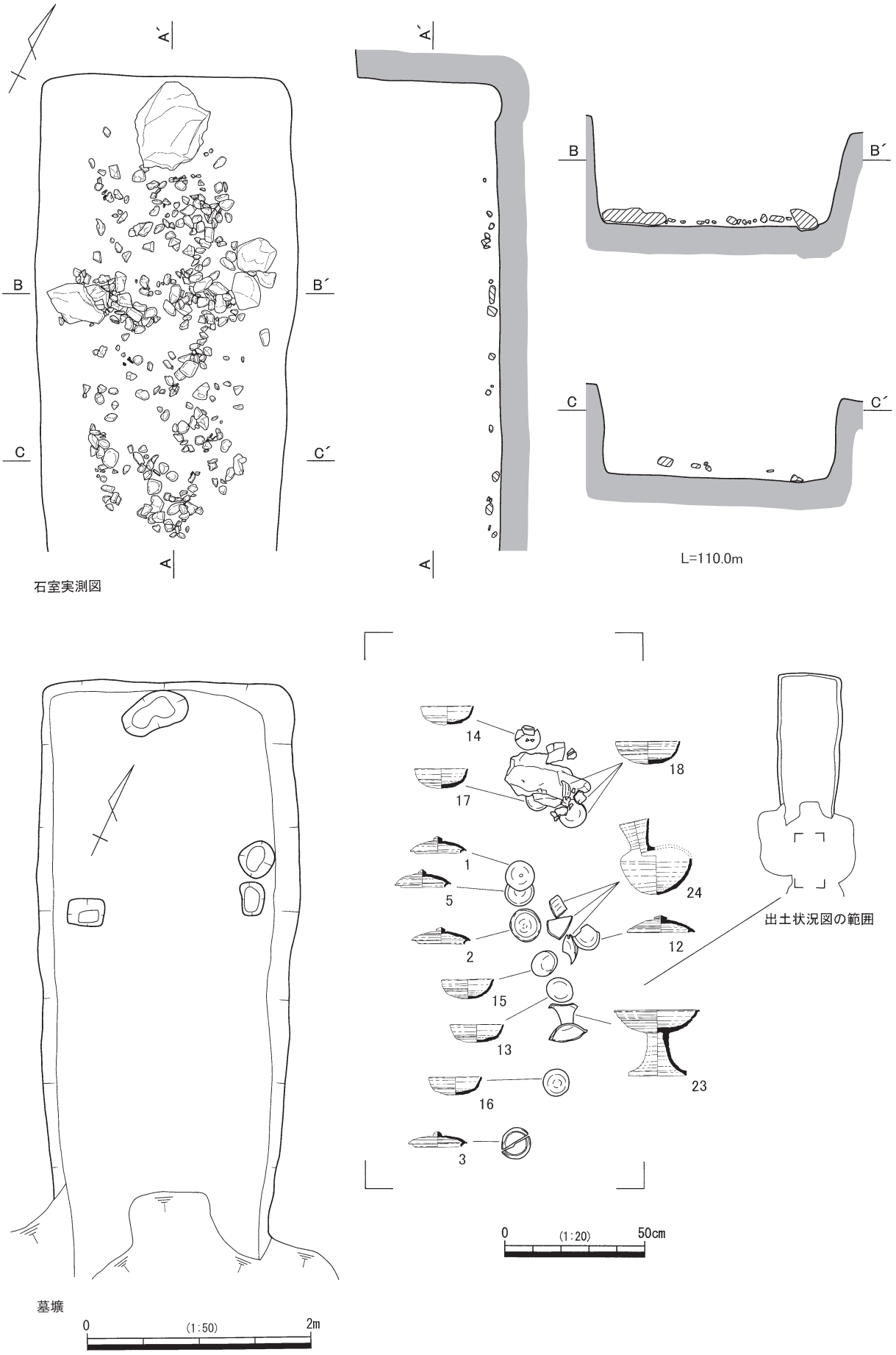
土器と鉄製品が出土した。

土器　須恵器と土師器が出土した。1～12、20～21は坏蓋、13～19、22は坏身、23は無蓋高坏、24は平瓶である。古墳時代の坏身と坏蓋は、7世紀のある時期に6世紀代の蓋と身が逆転し、新たに蓋の頂部に摘みをもち、かえりを持つ平底の身とのセットが生まれる。やがてつまみをもつ蓋に、かえりの失った平底・高台の身とのセットが生まれる。

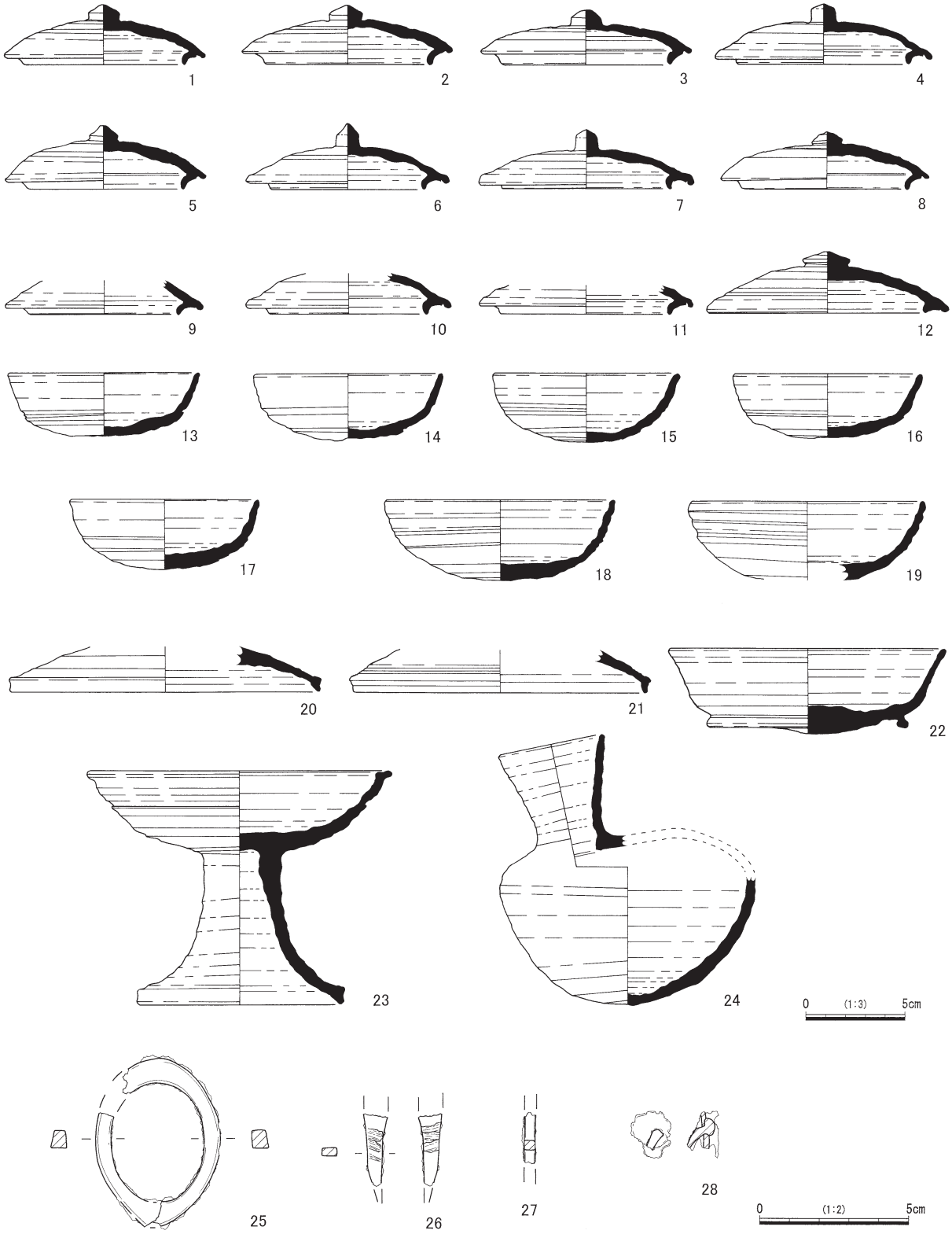
7世紀の須恵器を分類した奈良国立文化財研究所の分類では、蓋受けのたちあがりをもつ坏身と蓋のセットは坏H類とされ、蓋頂部につまみをもち平底の身のセットは坏G類とされる。さらにつまみをもち身受けのかえりが消失した坏蓋と、坏身の底部に高台を持つセットは坏B類とされるので、本書の中



第86図　A1号墳墳丘図



第87図　A1号墳実測図



第88図　A1号墳出土遺物実測図

でもそれに従うこととしたい。これによるとA1号墳出土の１から12の坏蓋、13から19の坏身は坏Ｇ類である。20から22のセットは坏Ｂ類に分類される。前者の中でも12の擬宝珠状つまみをもち、やや大ぶりの蓋とそれとセットとなる18・19がそれ以外の坏より後出するため、A1号墳出土の坏Ｇ類は２時期に分かれる。これを鈴木敏則氏の遠江須恵器編年（以下、遠江須恵器編年に略）に比定すると、古いタイプはⅣ期後半であり、新しいタイプはⅣ期末葉である。20から22の坏Ｂ類のセットはⅤ期前葉に比定できる。坏類は湖西窯製品が多い。23の高坏と24の平瓶はⅣ期後半から末葉に比定される湖西窯の製品である。24の平瓶は口縁部から体部上位に自然釉があざやかにかかっている。ほかに土師器の把手付鉢片や丹塗りの盤片が出土している。

このようにみるとA1号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅳ期後半、Ⅳ期末葉、Ⅴ期前葉の３時期にわたっていると判断され、須恵器編年からA1号墳の築造時期をⅣ期後半、さらに２回の追葬が行われ、その最後をⅤ期前葉と考えておきたい。

鉄製品　25は鉄製で倒卵形を呈する鍔の責金具である。大きさから直刀の刀装具であろう。26・27は鉄鏃の茎部である。鏃身を巻き固定している木皮が残っていた。28は薄い板を球形に丸め中央に細い釘を打ち付けた金具である。帰属時期は不明である。

写真21　抜根作業

写真22　古墳の検出

写真23　A1号墳遺物出土状況

写真24　A3号墳調査状況

⑵　高根山A2号墳

調査前の状況

A1号墳の東隣で近接している。A2号墳は調査区西側の標高111mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたものの、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識でき、大きな撹乱穴もあり立柱石も露出していたので、初期の段階から古墳として認定していた。

墳丘・周溝

A2号墳は、西側のグループではA1号墳からA3号墳が並列する上位グループの中央に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はわずかしか確認されなかった。

古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに北側に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.5m、深さ0.23m、西側が幅1.6m、深さ0.32m、南側が幅1.4m、深さ0.44m、東側が幅1.4m、深さ0.23mを測る。墳丘は東西8.7m、南北8.7mを測る。墳丘南側で、標高109.77m、墳丘北側で標高110.93mを測り、現状での古墳の高さは1.16mである。第1次墳丘を盛る際、旧表土に礫を並べた、いわゆる墳丘内列石が一部に認められた。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって基底石までほぼ完全に抜き取られていた。残存した石材は東側側壁の立柱石と羨道の一部の1、2個であった。いずれも基底石のみであった。床面の礫床については残っていなかった。東側壁の一部と思われる石材が倒れていたが、石材の抜き取りの際、倒され取り残されたと考えられる。

残存した側壁の積み方は、小口積みである。大きく撹乱を受けているため、石室の平面形は不明であるが、立柱石の存在から擬似両袖式石室と推定される。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高110.88m、下端で109.64mを測ることから、1.24mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓道は先端部が南東へ曲げられている。墓壙と墓道の境界は大きく撹乱を受け、築造当初の姿を失っている。

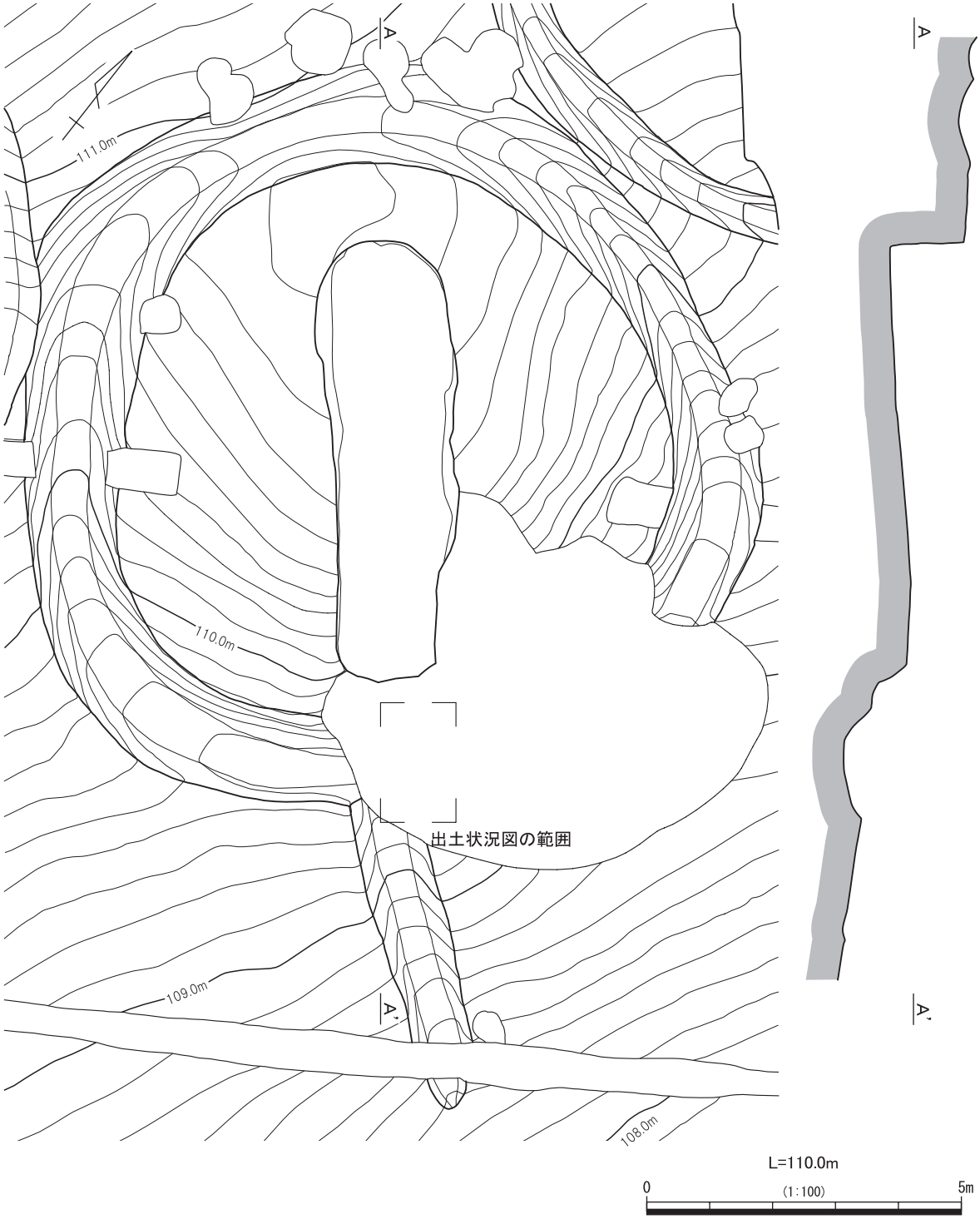
遺物の出土状態

墓壙と墓道の境界の撹乱穴から、坏や高坏・平瓶を中心とした須恵器が発見された。古墳を壊し、石材を抜き取る際、石室の前方にあった副葬品をかき出したもので、原位置を留めていないと推定される。破損が少ないものもあり、一括で置かれていたものをそのままかき出したのであろうか。

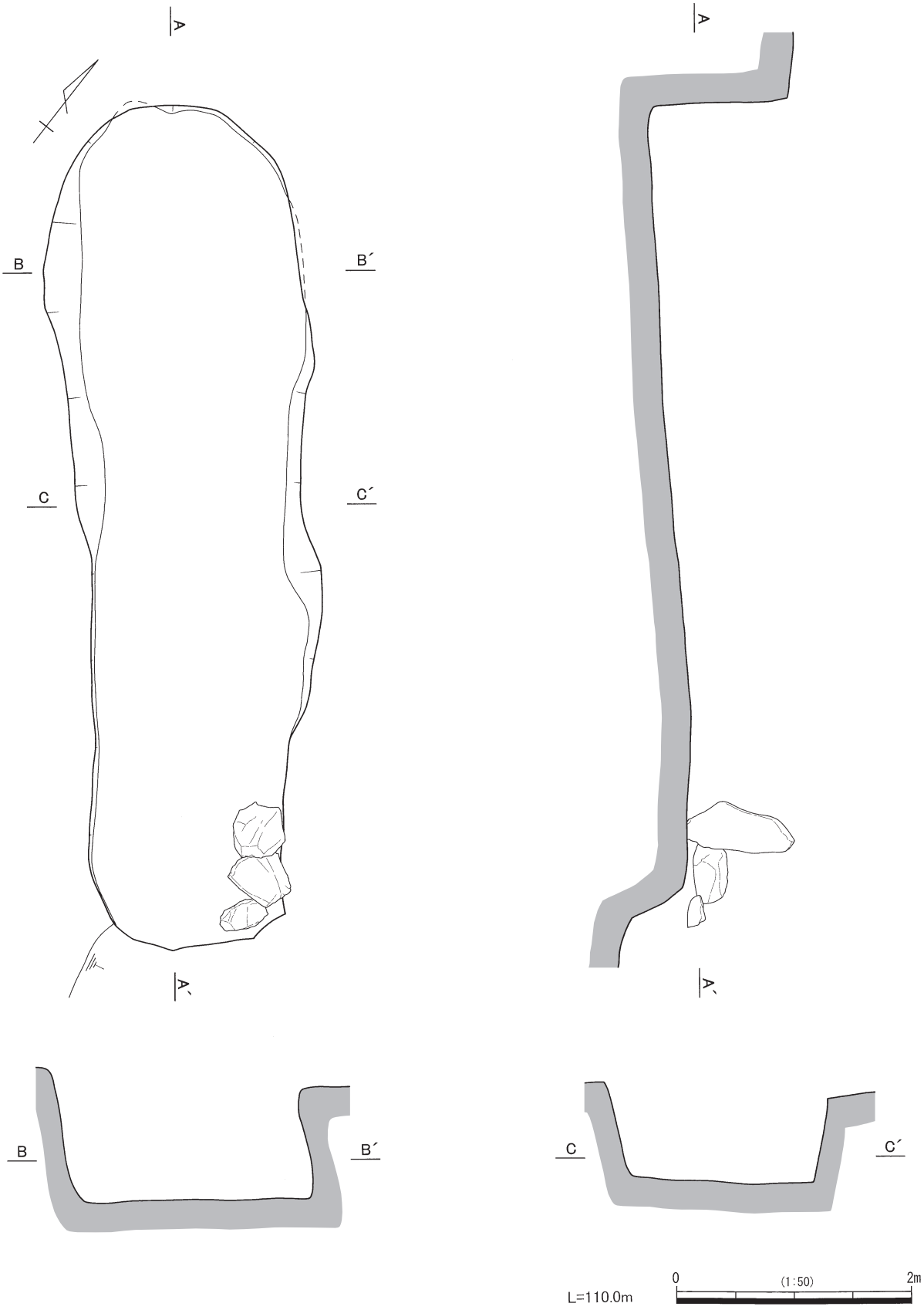
出土遺物

土器　いずれも須恵器で、1～6、12～14は坏身、7～11は坏蓋、15は無蓋高坏、16・17が平瓶、18は瓿である。坏身1～4が坏Ｈ類、5・6が坏Ｇ類、7～14は坏Ｂ類である。遠江須恵器編年に比定すると、坏Ｈ類は底部未調整でⅣ期前半から後半であり、5・6の坏Ｇ類は新しいタイプの平底坏身でⅣ期末葉である。坏Ｂ類の7から14のセットはⅤ期前葉に比定できる。坏類は湖西窯製品が多い。15の高坏と16・17の平瓶はⅣ期後半から末葉に比定される。18の瓿は同じⅣ期後半から末葉に比定される。

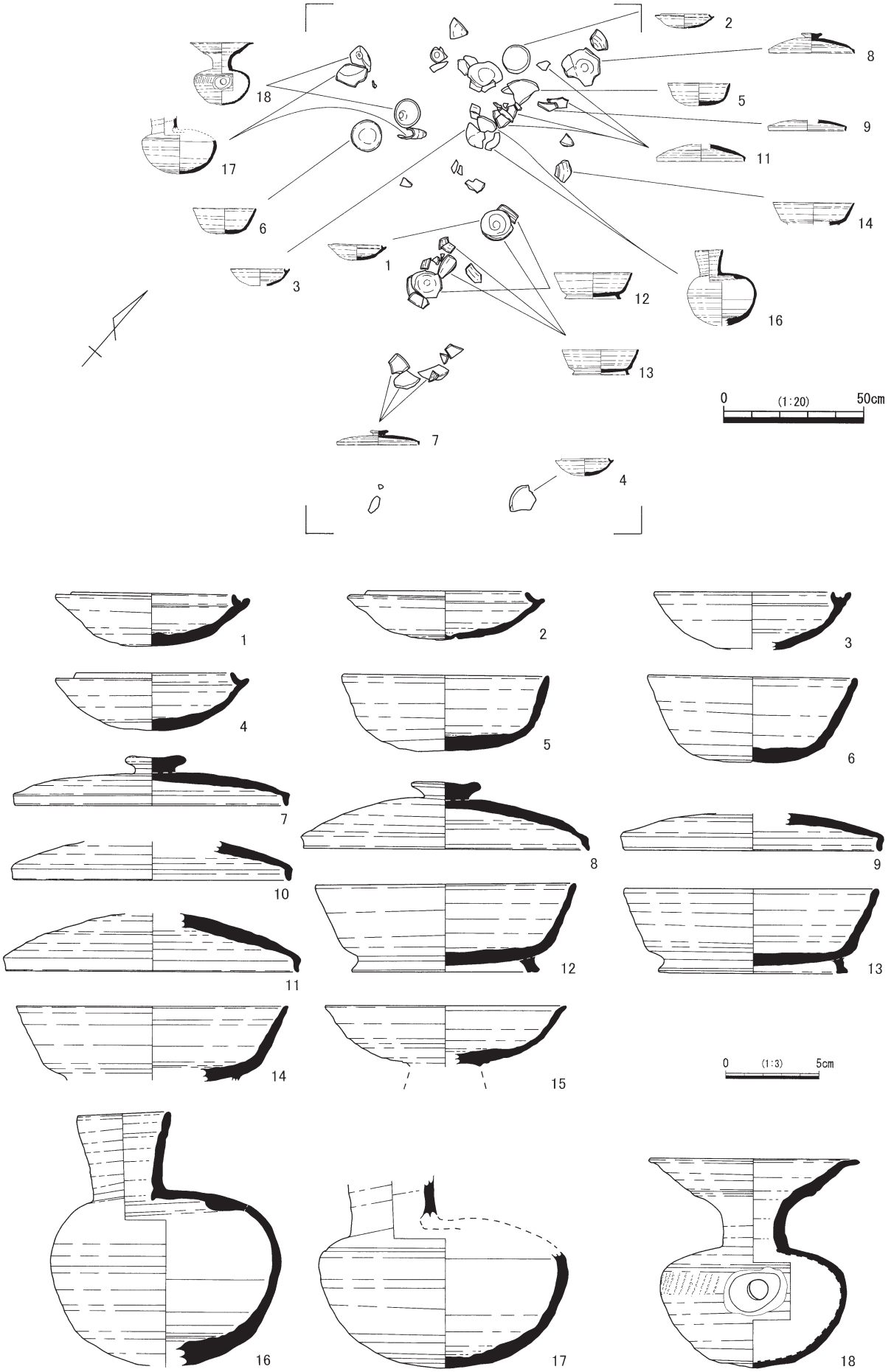
このようにみるとA2号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅳ期前半から後半、Ⅳ期末葉、Ⅴ期前葉の3ないし4時期にわたっていると判断され、須恵器編年からA2号墳の築造時期をⅣ期前半から後半、さらに2回の追葬が行われ、その最後をⅤ期前葉と考えておきたい。



第89図　A2号墳墳丘図



第90図　A2号墳墓壙実測図



第91図　A2号墳出土状況・遺物実測図

⑶　高根山A3号墳

調査前の状況

A2号墳の東隣で近接している。A3号墳は調査区西側の標高111mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

A3号墳は、西側のグループではA1号墳からA3号墳が並列する上位グループの東に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認されなかった。1から3号墳の近接したあり方や墓道の方向が一致する点から、各古墳が密接に関連する単位群と考えられる。

古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに北側に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.1m、深さ0.27m、西側が幅1.06m、深さ0.09m、南側が幅0.7m、深さ0.21m、東側が幅1.04m、深さ0.24mを測る。墳丘は東西8.2m、南北8.2mを測る。墳丘南側で、標高109.98m、墳丘北側で標高111.0mを測り、現状での古墳の高さは1.02mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けた単室系擬似両袖式石室で、閉塞石も残り保存状態は良好であった。

天井石　検出の際、羨道部に落下した状態の天井石が認められた。天井石は一部、羨道にも架設されていたと考えられる。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、1枚の鏡石を設置している。玄門石は据えるための穴を掘り、安定させるために根石を埋めた後、その上に据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近で幅を狭めた奥窄り形を呈している。根石の配列をみると、奥壁を据え玄門部を設置した後、奥壁から基底石を置き、同時に玄門から石室奥へも据える手順をとっているので、この段階で石室の平面形態はほぼできあがったものと考えられる。左側壁の基底石の中に、小口積みで2個の石を並べている箇所があるが、基底石設置の最後の調整と考えられる。床面の礫床は奥壁近くでは二重にしかれていた。副葬品が認められなかったため、埋葬面が2面であったのかは不明である。

羨道　玄門部へ直線的につながる形態で、玄門とほぼ等しい幅である。閉塞石も残っていた。左側壁の遺存状態は不良である。

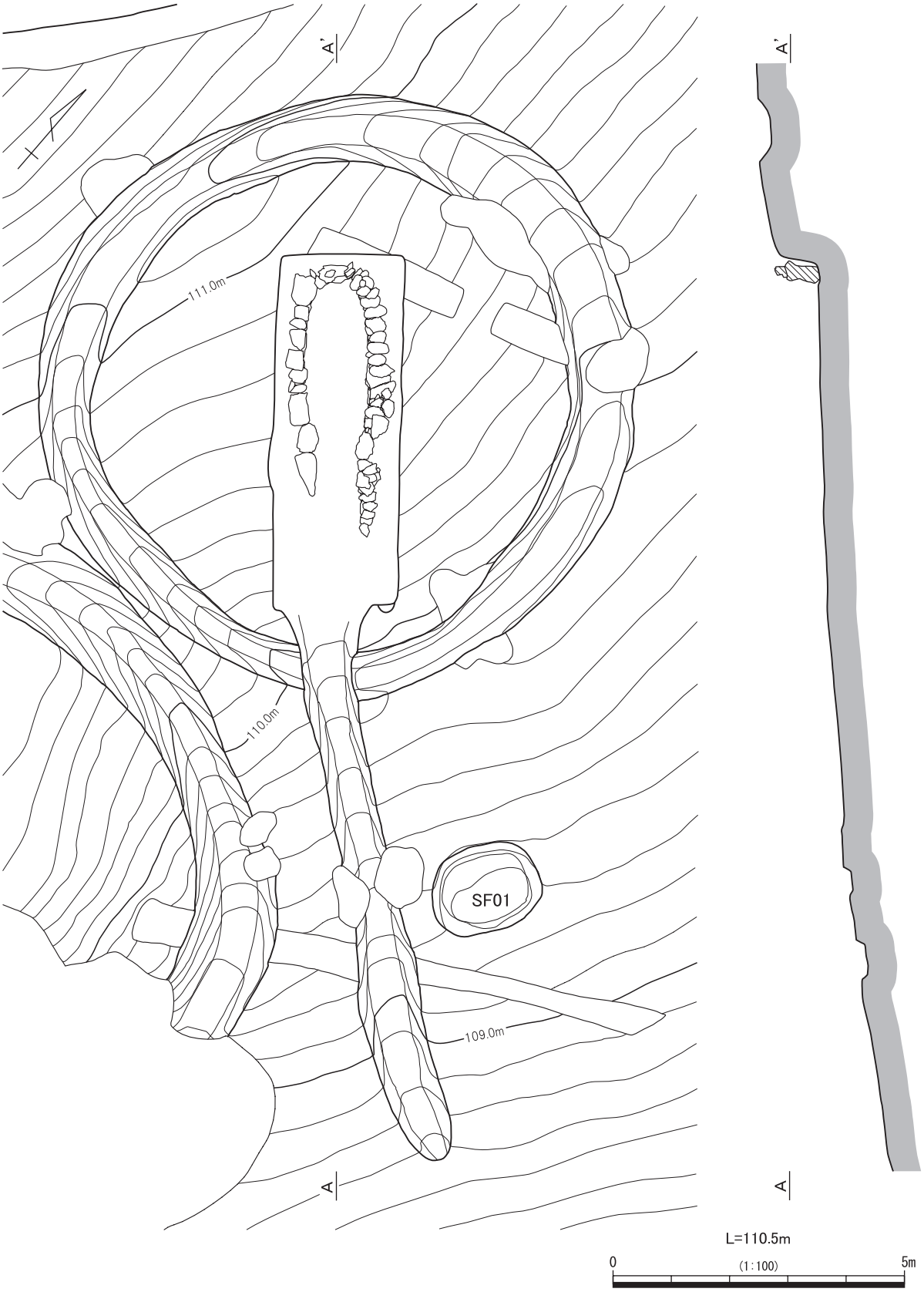
墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高110.98m、下端で110.045mを測ることから、0.935mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部、玄門石を据える穴を掘っていた。墓道は先端部が南東へ曲げられている。

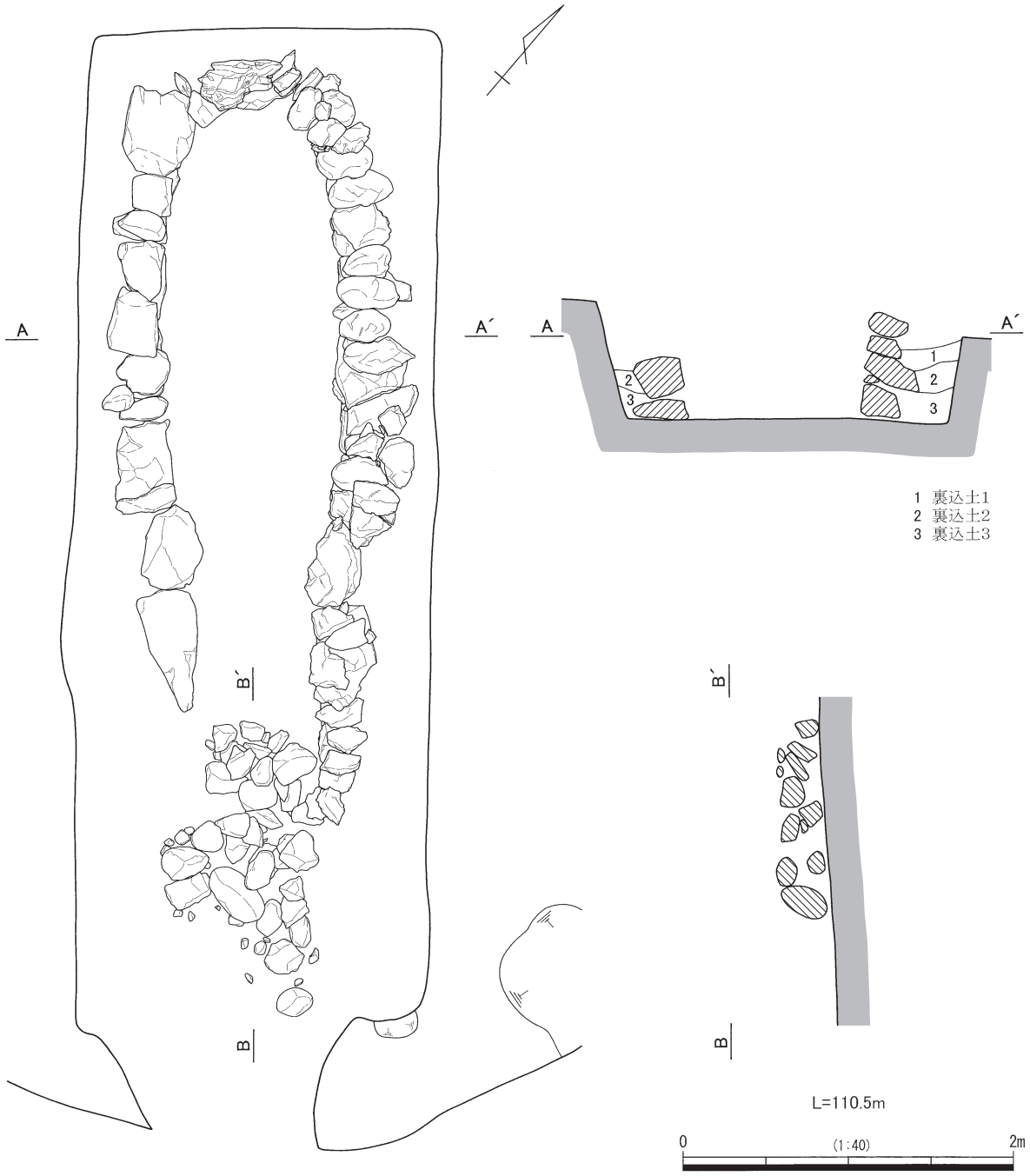
遺物の出土状態

墳丘撹乱から灰釉陶器碗片、周溝から時期不明の土師器小片が出土した以外、石室から副葬品が認められなかったため築造時期は不明であるが、近接する撹乱穴から瓶類片が出土しているので、この破片が築造時期あるいは追葬の時期を示す可能性が高い。玄室と床面の遺存状態は良好であったので、盗掘や破壊の痕跡は認められなかった。するとこの古墳の副葬品は、破壊の進んだ玄門付近に置かれていたのであろう。

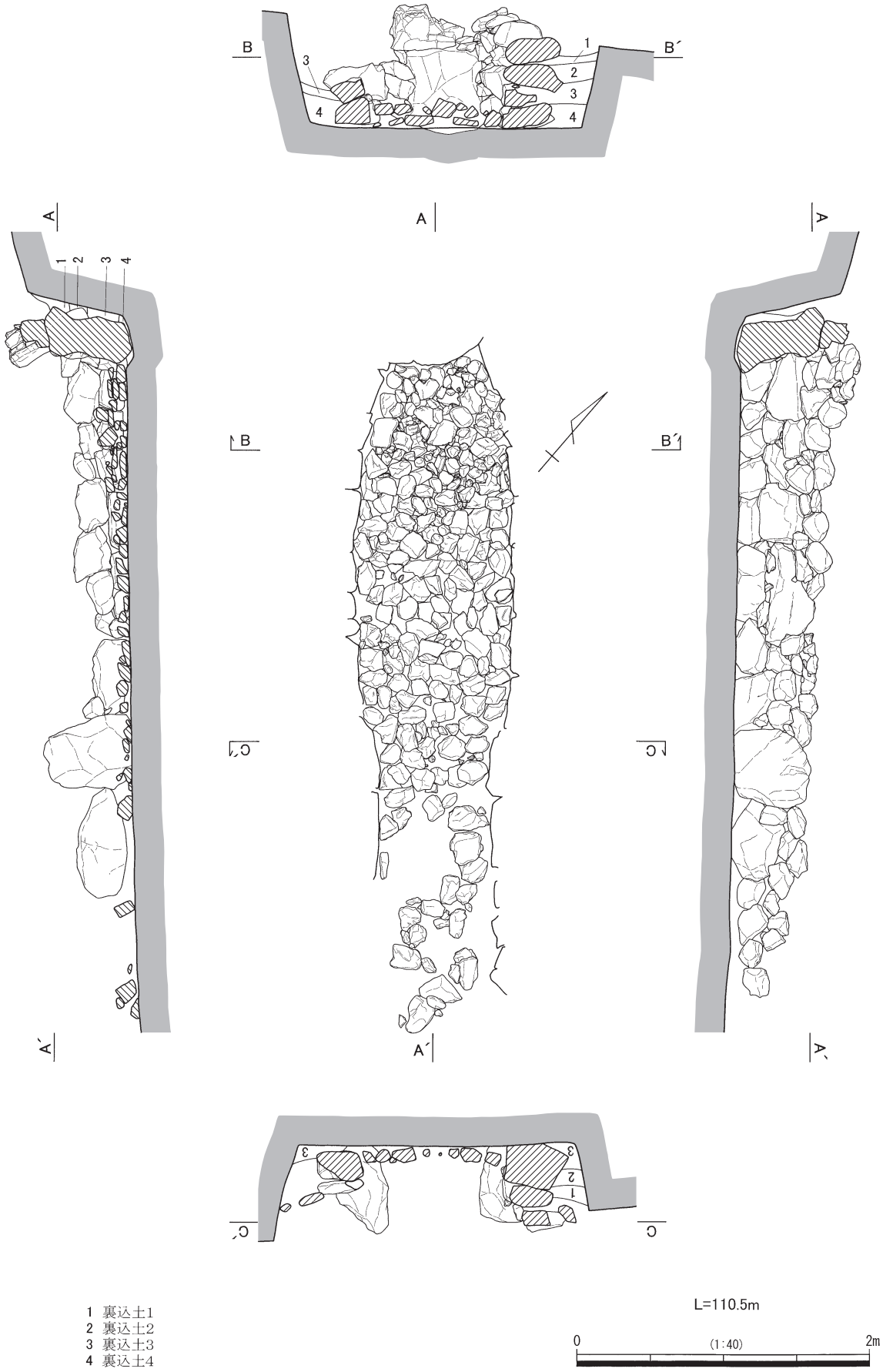
出土遺物　1は回転糸切り痕が残る底部をもつ灰釉陶器碗である。10世紀末から11世紀前葉と考えられる。この時期の土坑墓から離れての出土であるが、その理由は不明である。撹乱から出土した瓶類片は遠江須恵器編年Ⅳ期に比定される。A3号墳の築造時期あるいは追葬の時期は、この瓶類片からⅣ期に一点があると考えておきたい。



第92図　A3号墳墳丘図

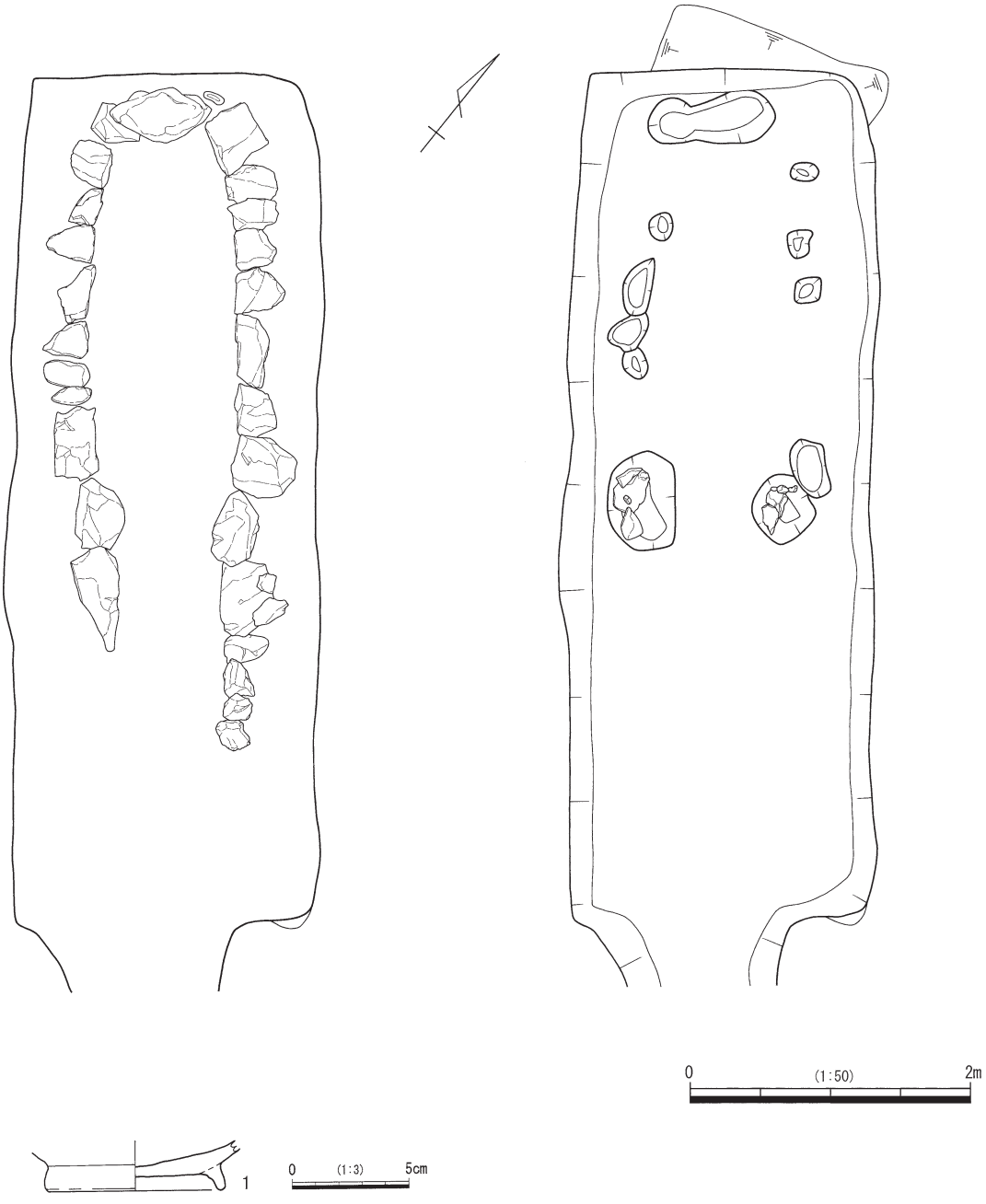


第93図　A3号墳横穴式石室検出状況図



1 裏込土1
2 裏込土2
3 裏込土3
4 裏込土4

第94図　A3号墳横穴式石室実測図



第95図　A3号墳基底石・墓壙実測図

⑷　高根山A4号墳

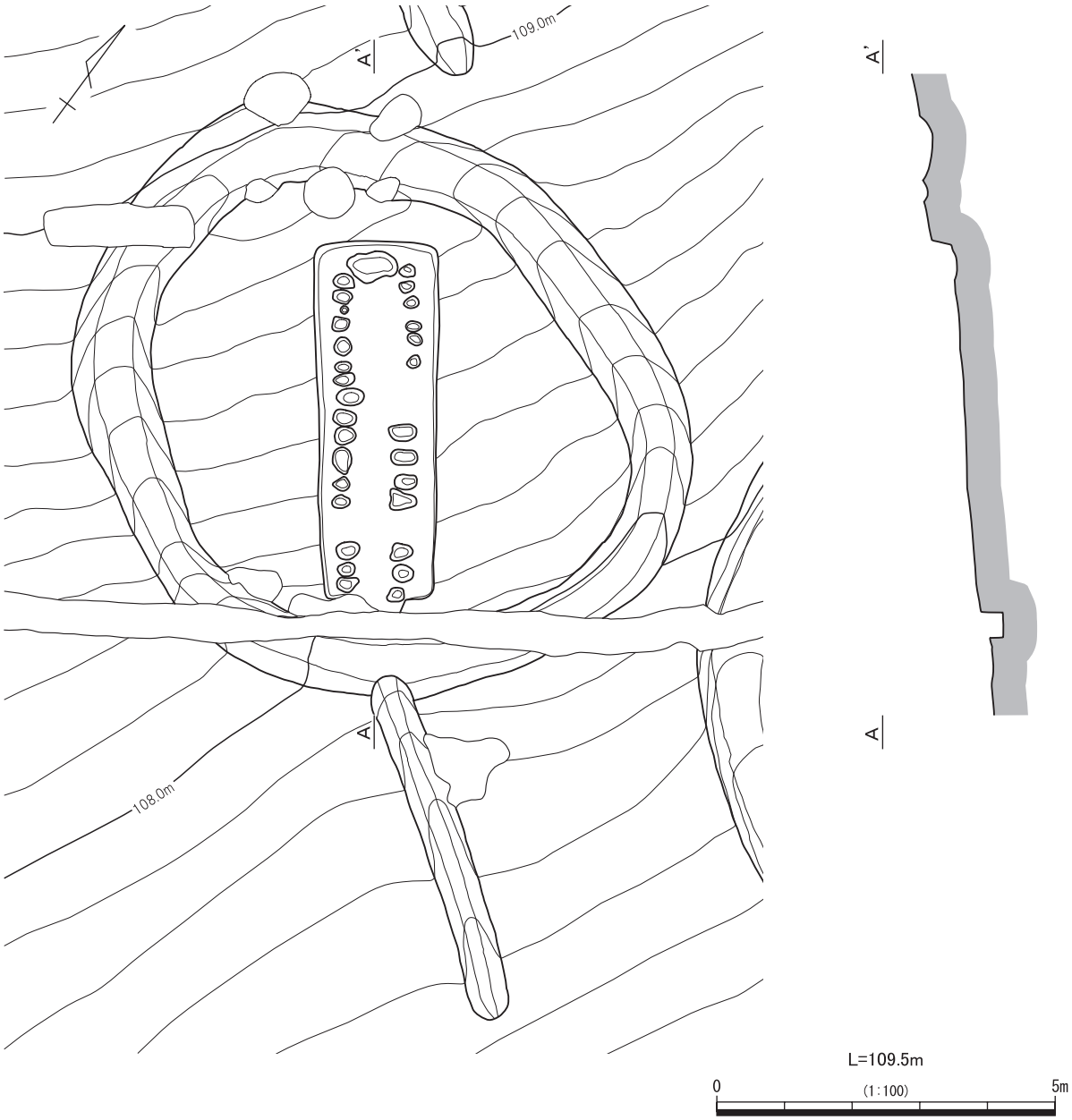
調査前の状況

A5号墳の西隣に近接している。A4号墳は調査区西側の標高109mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

A4号墳は、西側のグループではA4・A5・A6・A11号墳が並列する中位グループの西端に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。

古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出したのち、わずかに北側に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.1m、深さ0.14m、西側が幅1.2m、深さ0.1m、南側が幅0.98m、深さ0.1m、東側が幅1.1m、深さ0.12mを測る。墳丘は東西6.9m、南北6.3mを測る。墳丘南側で、標高108.05m、墳丘北側で標高108.97mを測り、現状での古墳の高さは0.92mである。



第96図　A4号墳墳丘図

埋葬施設

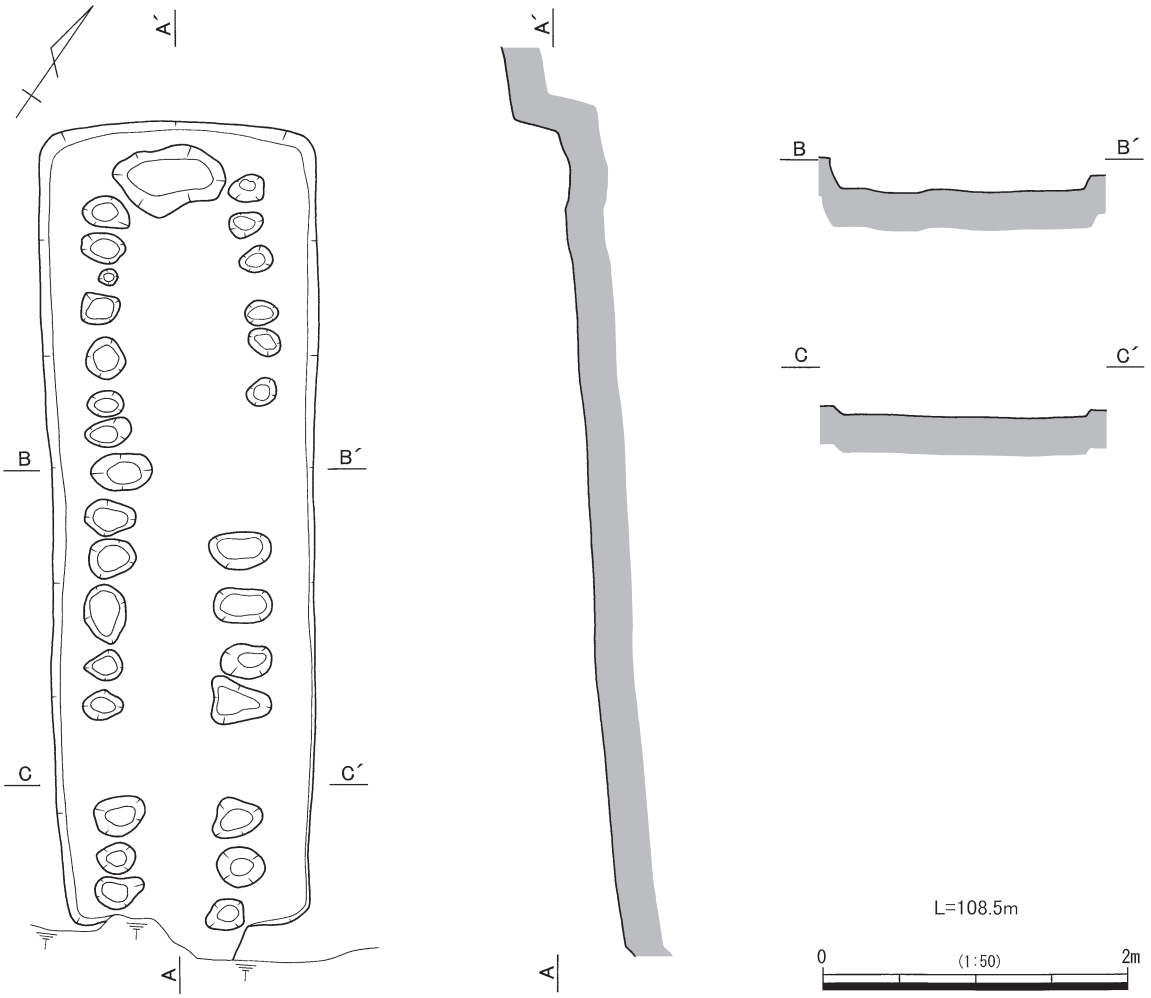
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はわずかに南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列から擬似両袖式石室と推定されるが明確ではない。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高108.75m、下端で108.48mを測ることから、0.27mほどを掘り下げていた。おそらく古墳全体は削平されたのであろう。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓道は先端部が南東へ曲げられている。墓壙と墓道の境界は耕作の地境溝のため大きく撹乱を受け、築造当初の姿を失っている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。



第97図　A4号墳墓壙実測図

⑸　高根山A5号墳

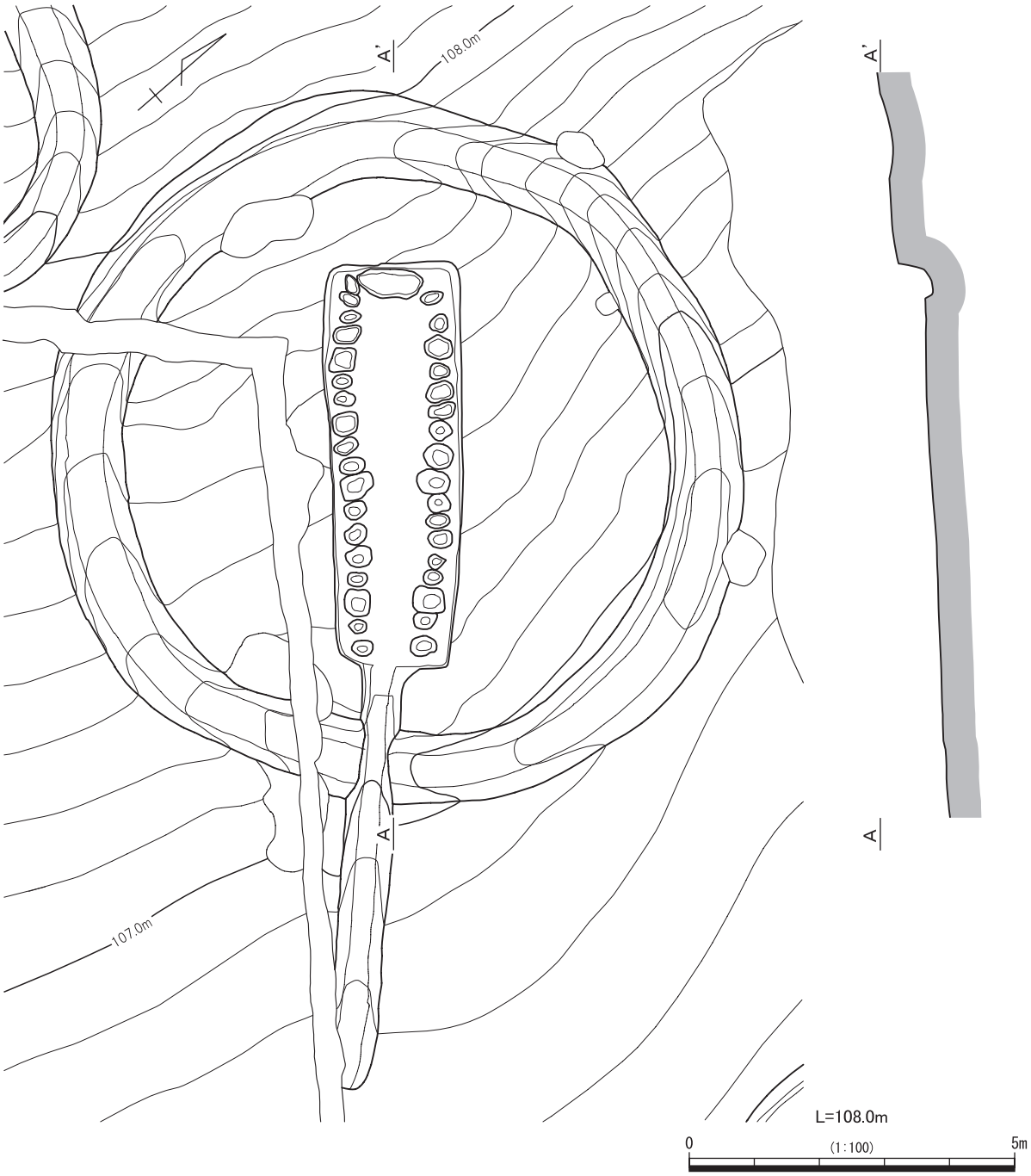
調査前の状況

A4号墳の東隣に位置している。A5号墳は調査区西側の標高108mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

A5号墳は、西側のグループではA4・A5・A6・A11号墳が並列する中位グループの、西から2番目に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。

古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出したのち、わずかに北側に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.3m、深さ0.13m、西側が幅1.1m、深さ0.07m、南側が幅1.0m、深さ0.1m、東側が幅1.1m、深さ0.17mを測る。墳丘は東西8.3m、南北8.4mを測る。墳丘



第98図　A5号墳墳丘図

南側で、標高107.18m、墳丘北側で標高107.89mを測り、現状での古墳の高さは0.63mである。

埋葬施設

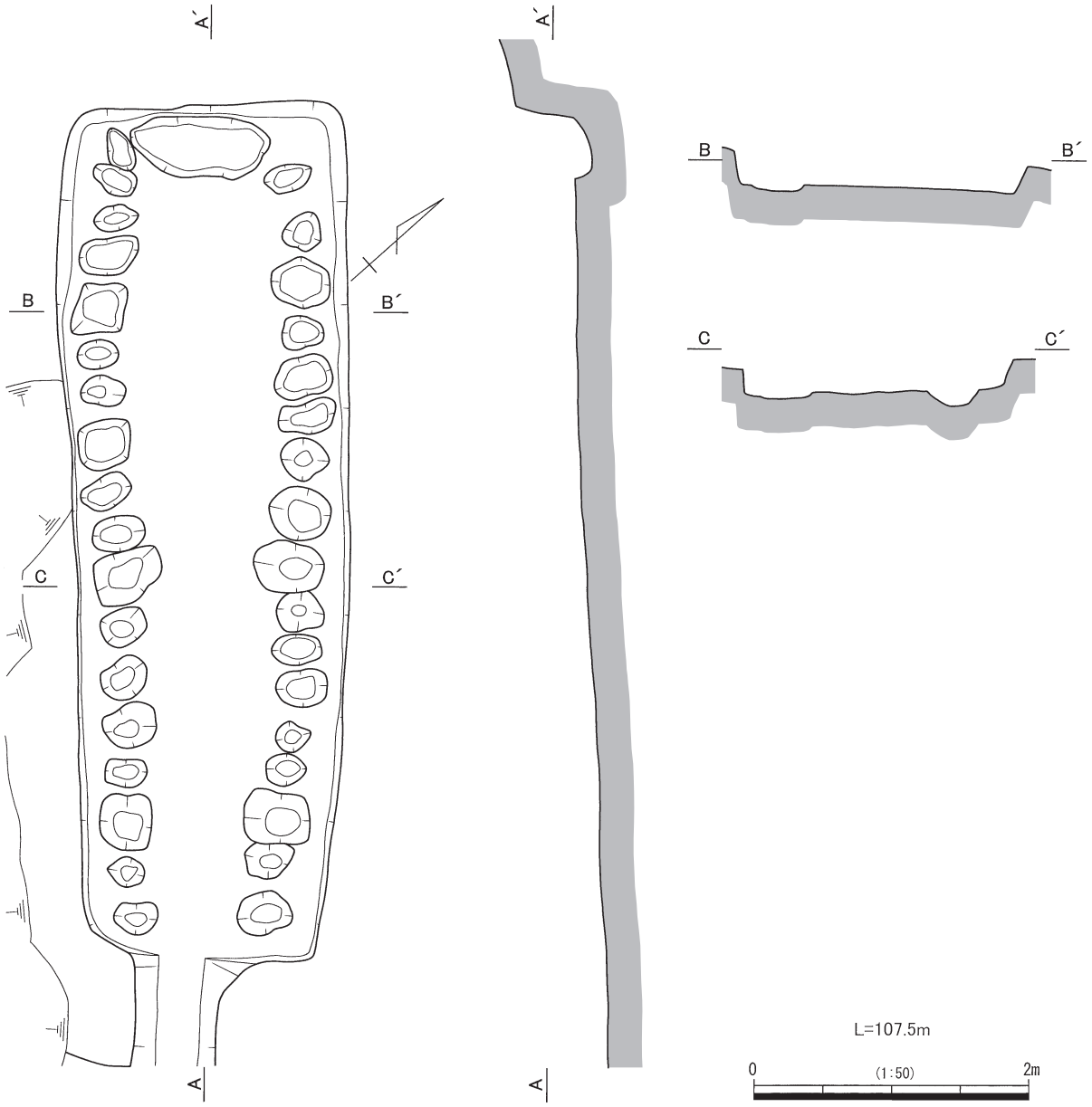
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はわずかに南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石室の平面形は抜き取り穴の配列から羨門区画系擬似両袖式石室と推定されるが、明確ではない。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高107.76m、下端で107.32mを測ることから、0.44mほどを掘り下げていた。おそらく古墳全体が削平されたので、低くなっているのであろう。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓道は先端部が南へ直線的に延びている。

出土遺物

周辺にある東北の撹乱穴から須恵器片がわずかに出土したが、この古墳に伴うかは不明瞭であった。よってこの古墳に伴う出土遺物は認められなかった。



第99図　A5号墳墓壙実測図

⑹　高根山A6号墳

調査前の状況

A5号墳の東隣に位置している。A6号墳は調査区西側で標高106.5mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

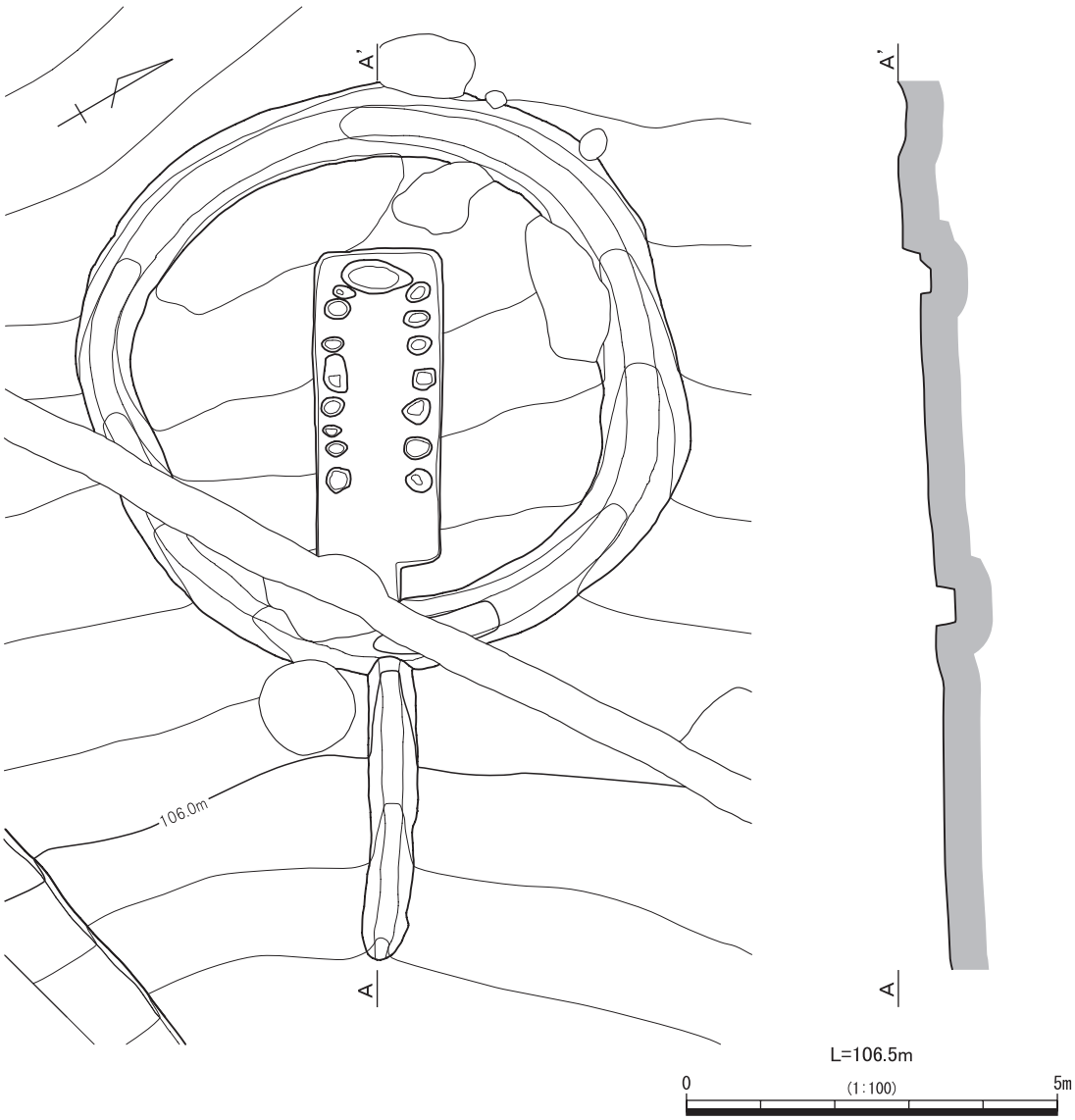
墳丘・周溝

A6号墳は、西側のグループではA4・A5・A6・A11号墳が並列する中位グループの、西から東へ3番目に位置する。A6・A11号墳は、ともにA4・A5号墳より下位の位置にある。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。

古墳を区画する周溝は、等高線が屈曲して南にせり出した部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.0m、深さ0.16m、西側が幅0.7m、深さ0.1m、南側が幅0.8m、深さ0.12m、東側が幅1.05m、深さ0.1mを測る。墳丘は東西6.2m、南北5.9mを測る。墳丘南側で、標高106.15m、墳丘北側で標高106.5mを測り、現状での古墳の高さは0.35mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は大きく南東



第100図　A6号墳墳丘図

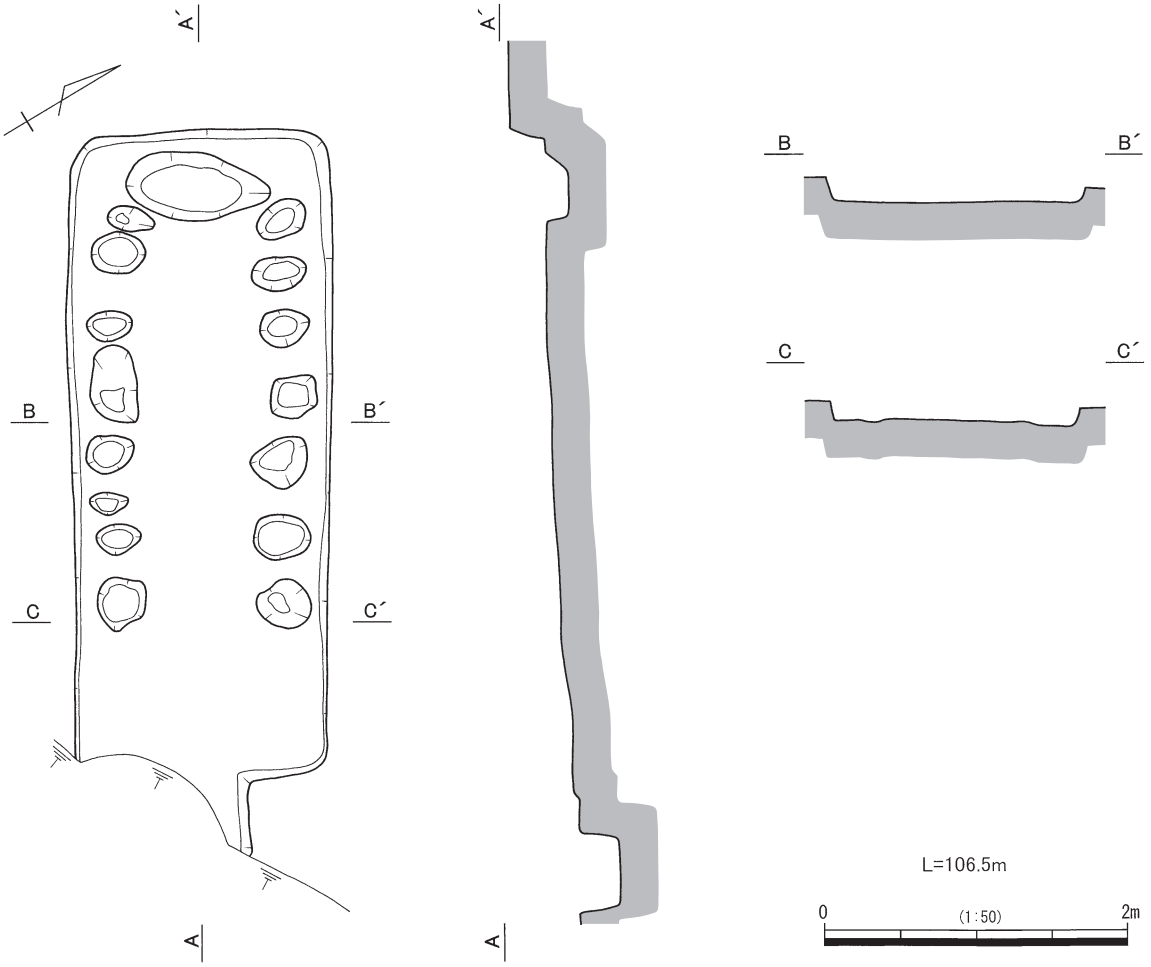
に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高106.43m、下端で106.18mを測ることから、0.25mほどを掘り下げていた。おそらく古墳全体が削平されたので、低くなったのであろう。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓道は先端部が南東へわずかに曲がって延びている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。



第101図　A6号墳墓壙実測図

⑺　高根山A7号墳

調査前の状況

A8号墳の西隣に位置している。A7号墳は調査区西側で標高107mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

A7号墳は、西側のグループでは、A7・A8・A9・A10号墳が並列する下位グループの西端に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。下位グループの南には浅い谷が南西に延びているため、緩傾斜面が変換する箇所である。その点では西側小支群の末端の古墳が、A7・A8・A9・A10号墳の下位グループといえよう。

古墳を区画する周溝は、等高線がわずかに南東に屈曲して北側に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.5m、深さ0.32m、西側が幅1.26m、深さ0.2m、南側が幅1.3m、深さ0.34m、東側が幅1.7m、深さ0.22mを測る。墳丘は東西7.9m、南北8.1mを測る。墳丘南側で標高106.49m、墳丘北側で標高107.18mを測り、現状での古墳の高さは0.69mである。

埋葬施設

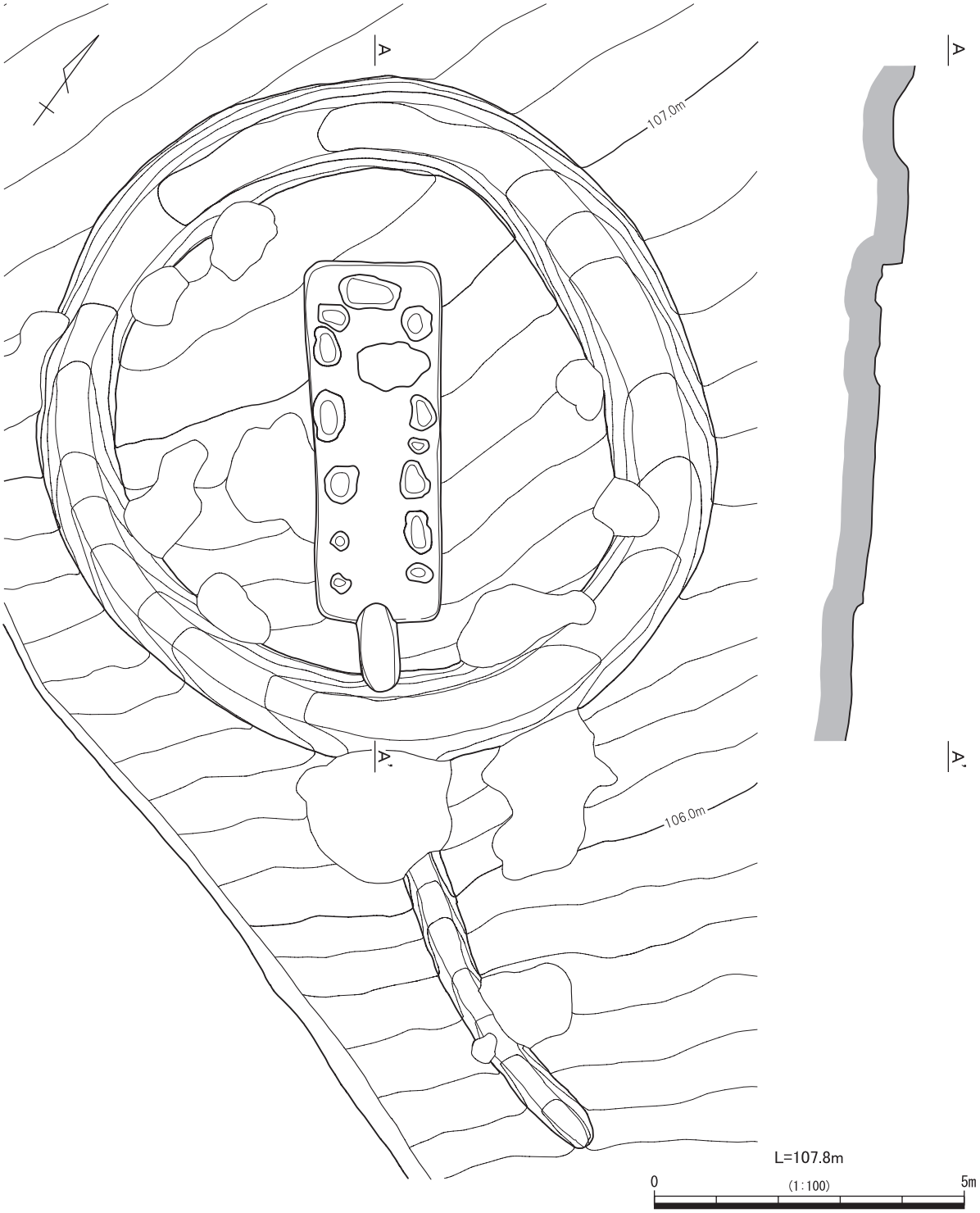
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は大きく南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

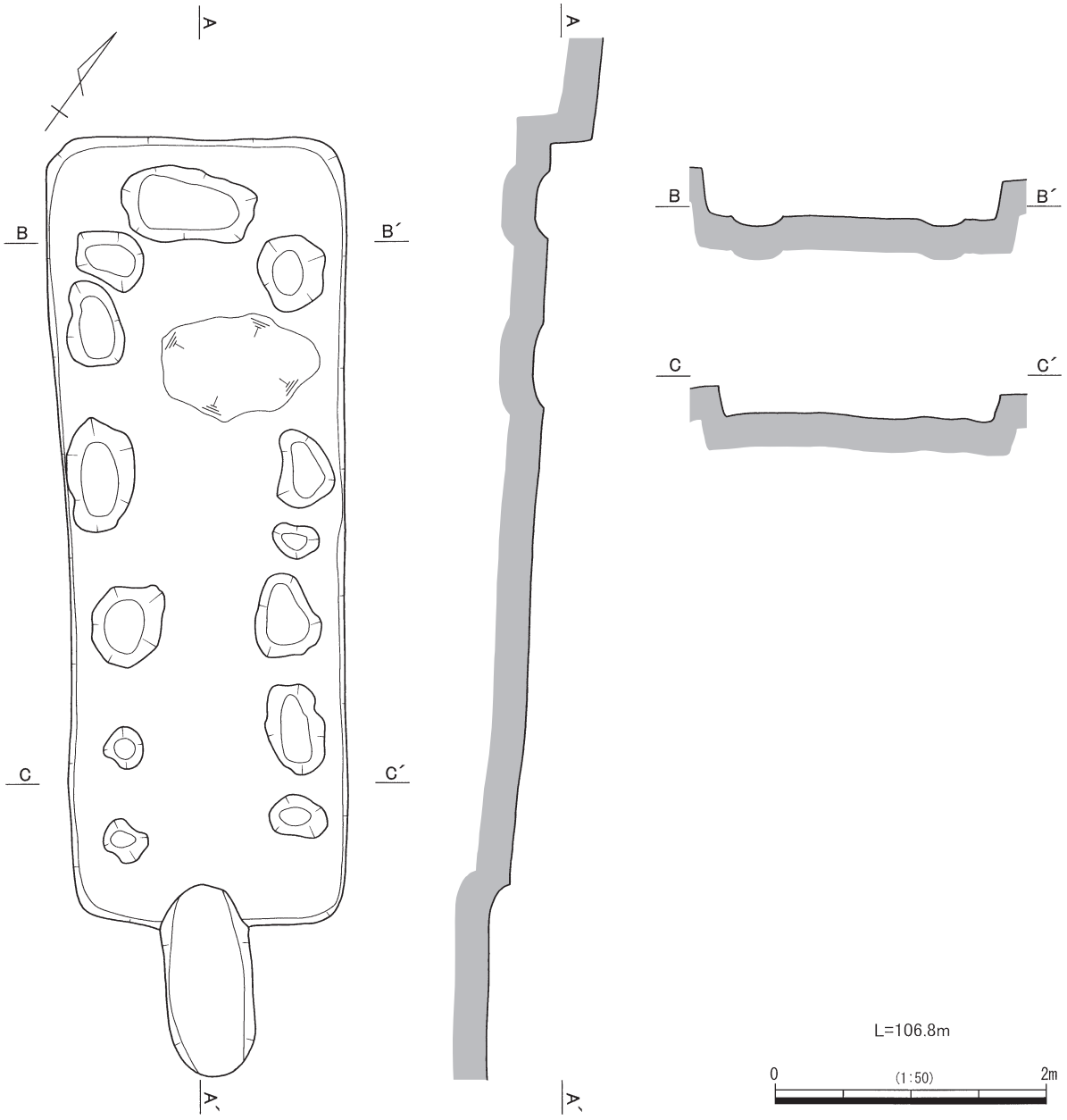
墓壙は奥壁上端で標高107.03m、下端で106.74mを測ることから、0.29mほどを掘り下げていた。おそらく古墳全体が削平されたので、低くなったのであろう。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓道は先端部が南東へ曲がって延びている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。



第102図　A7号墳墳丘図



第103図　A7号墳墓壙実測図

⑻　高根山A8号墳

調査前の状況

A7号墳の東隣に位置している。A8号墳は調査区西側で標高106.5mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

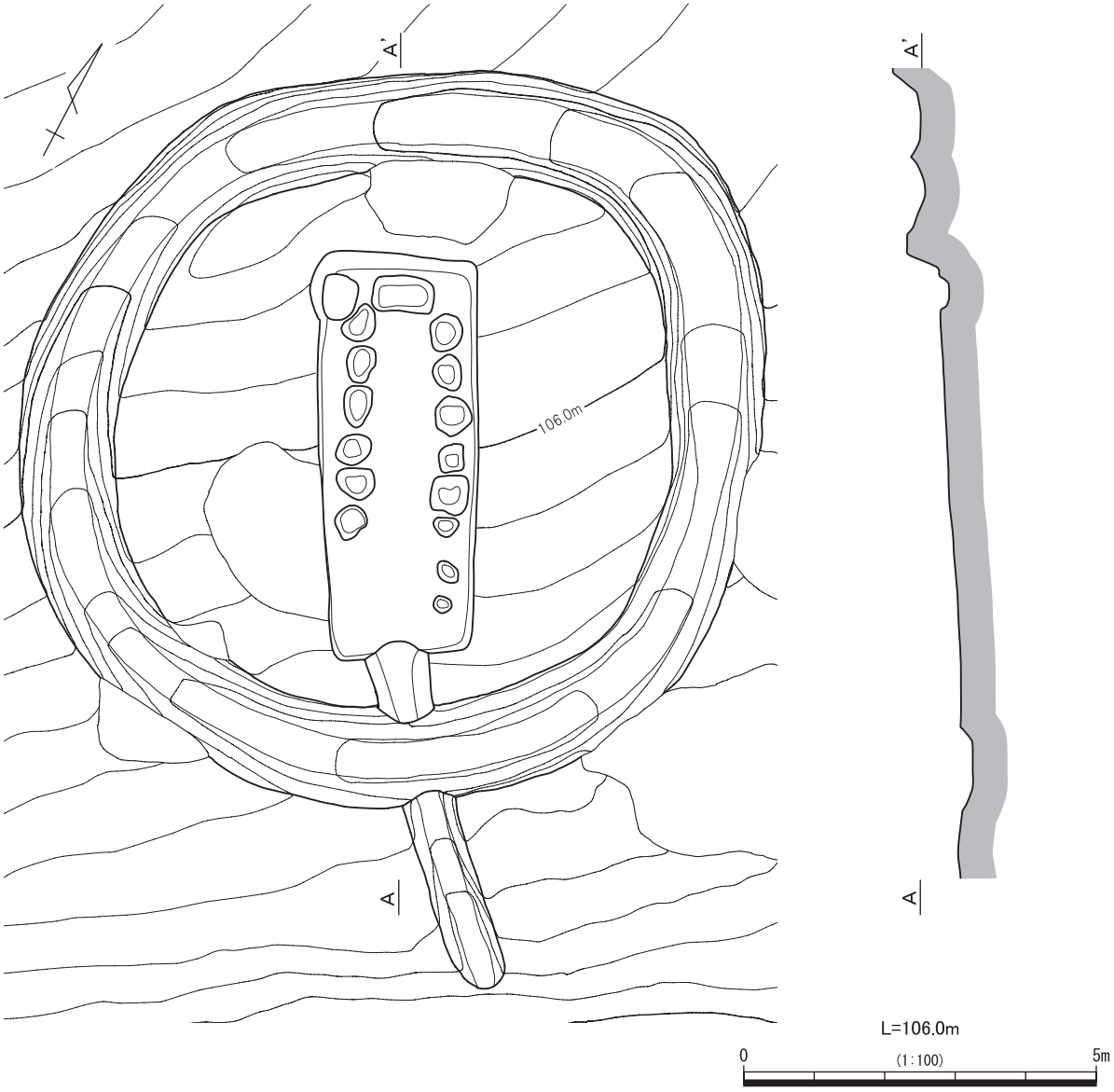
墳丘・周溝

A8号墳は、A7・A8・A9・A10号墳が並列する下位グループの、西から2番目に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。下位グループの南には浅い谷が南西に延びているため、A8号墳は緩傾斜面が変換する箇所にある。

古墳を区画する周溝は、等高線がわずかに屈曲して北西に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.5m、深さ0.36m、西側が幅1.36m、深さ0.28m、南側が幅1.38m、深さ0.34m、東側が幅1.36m、深さ0.31mを測る。墳丘は東西7.9m、南北7.7mを測る。墳丘南側で標高105.66m、墳丘北側で標高106.15mを測り、現状での古墳の高さは0.49mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は大きく南東



第104図　A8号墳墳丘図

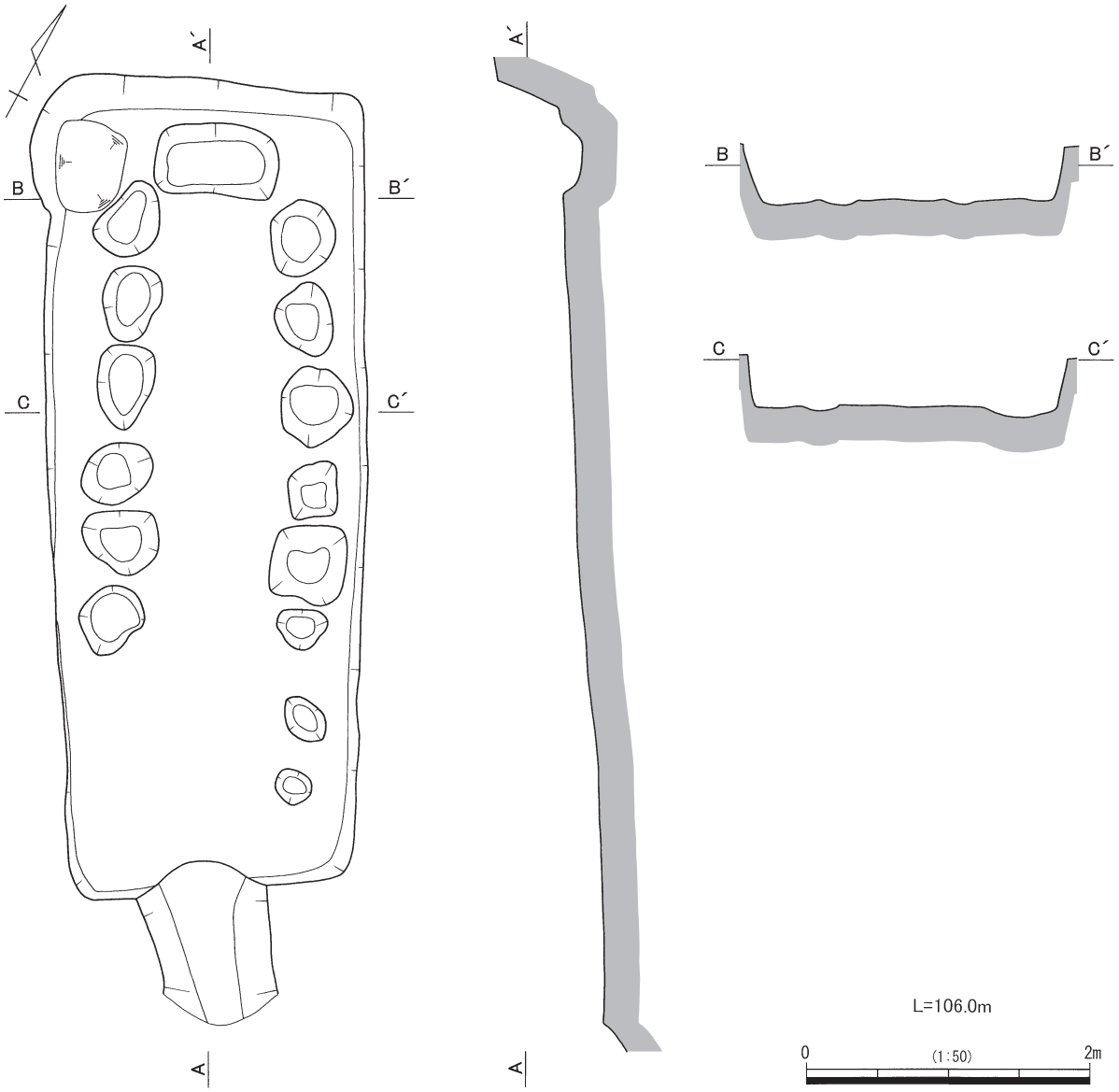
に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高106.21m、下端で105.77mを測ることから、0.44mほどを掘り下げていた。おそらく古墳全体が削平されたので、低くなったのであろう。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓道は先端部が南東へ曲がって延びている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。



第105図　A8号墳墓壙実測図

⑼　高根山A9号墳

調査前の状況

A8号墳の東隣に位置している。A9号墳は調査区西側で標高105.5mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

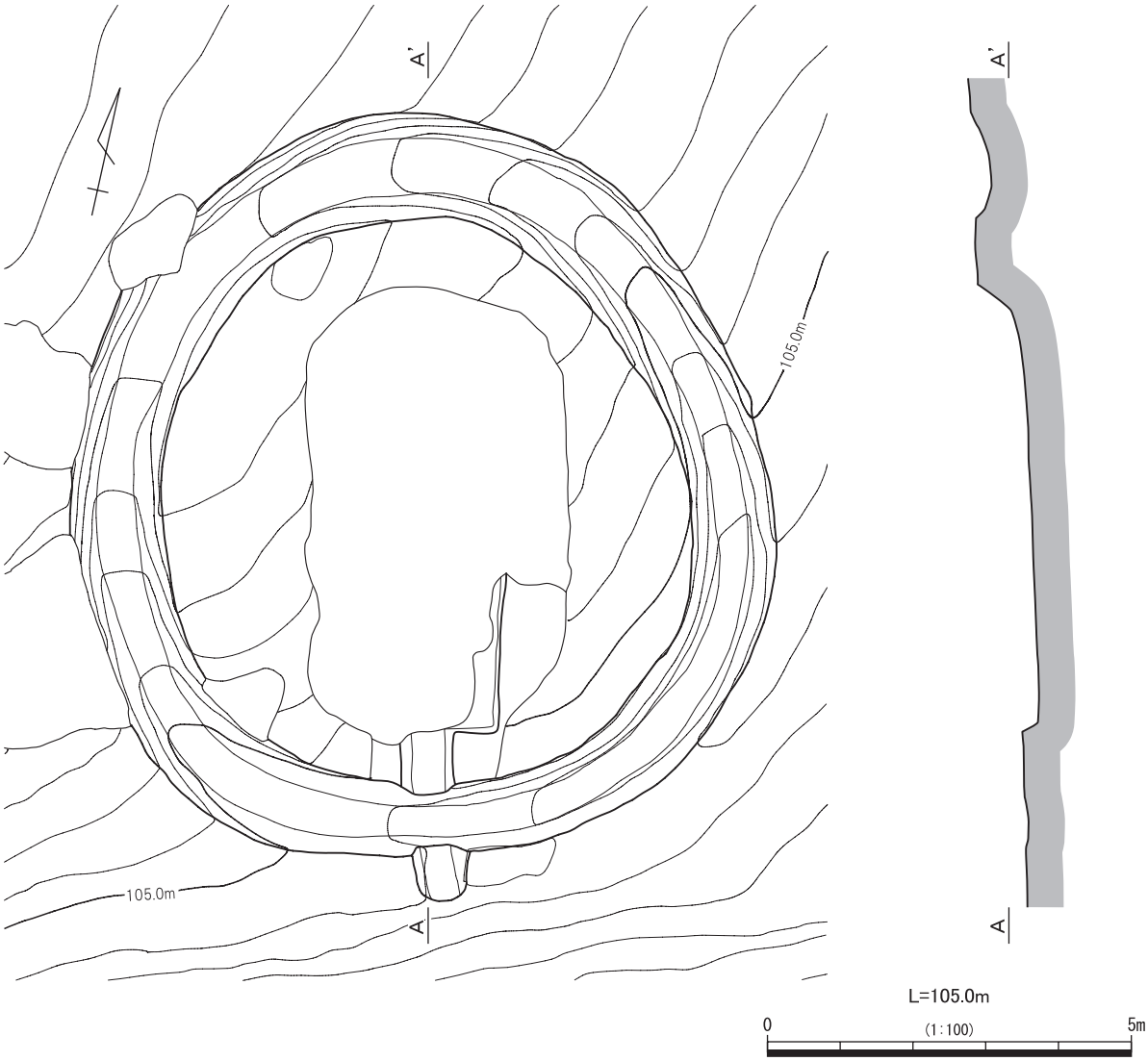
墳丘・周溝

A9号墳は、A7・A8・A9・A10号墳が並列する下位グループの、西から3番目に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。

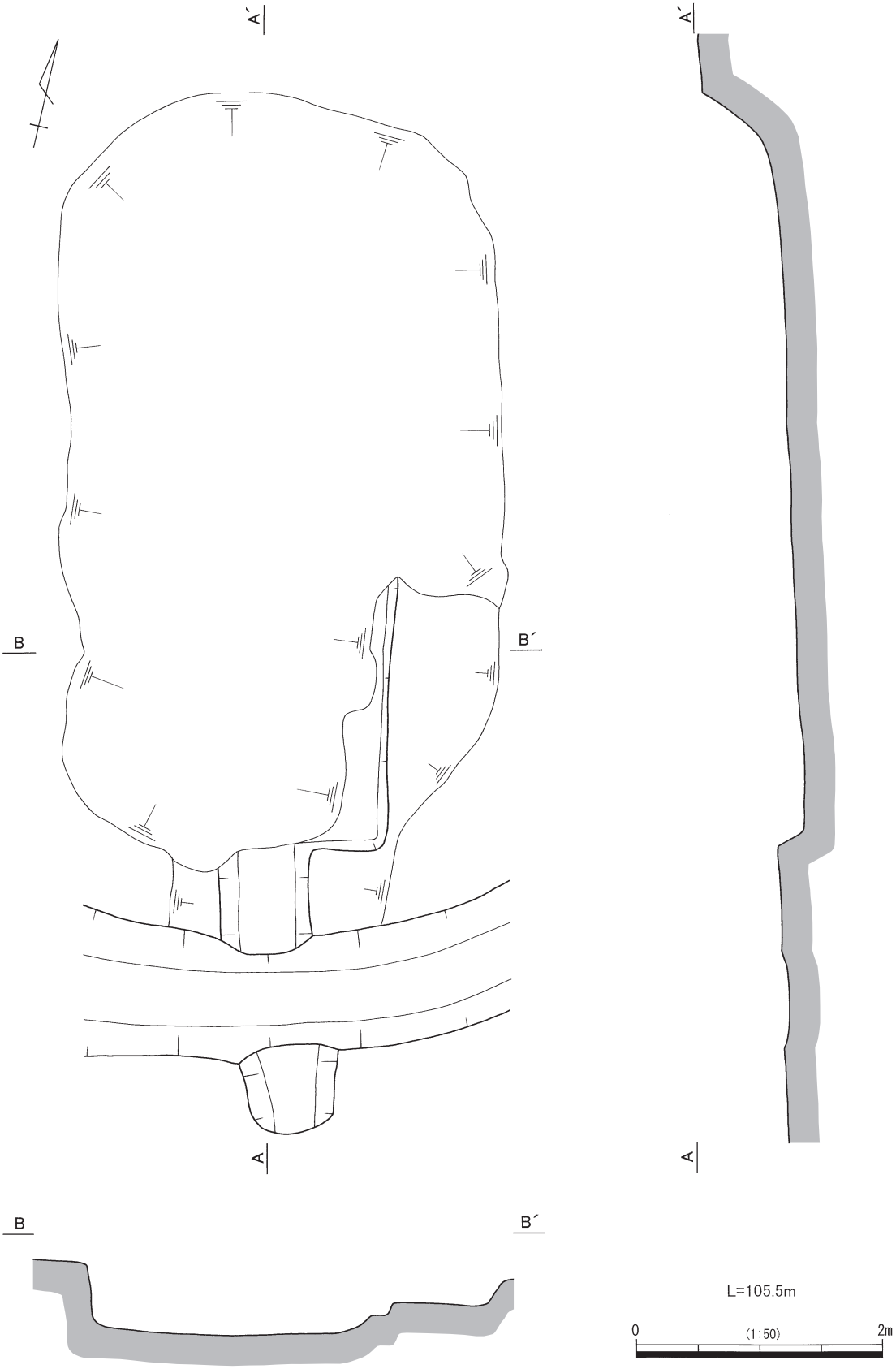
古墳を区画する周溝は、等高線がわずかに屈曲して南にせり出した部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.3m、深さ0.28m、西側が幅1.2m、深さ0.22m、南側が幅1.24m、深さ0.2m、東側が幅1.14m、深さ0.2mを測る。墳丘は東西7.3m、南北7.8mを測る。墳丘南側で標高104.90m、墳丘北側で標高105.48mを測り、現状での古墳の高さは0.58mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はわずかに東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石材は抜き取り穴を掘って抜き取っ



第106図　A9号墳墳丘図



第107図　A9号墳墓壙実測図

ている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高105.44m、下端で104.88mを測ることから、0.66mほどを掘り下げていた。おそらく古墳全体が削平されたので、低くなったのであろう。墓壙は大きく撹乱を受けているため、平面形は明確ではないが、長方形と考えられる。墓道は短く古墳の外へ続き、南東へ曲がって延びている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。

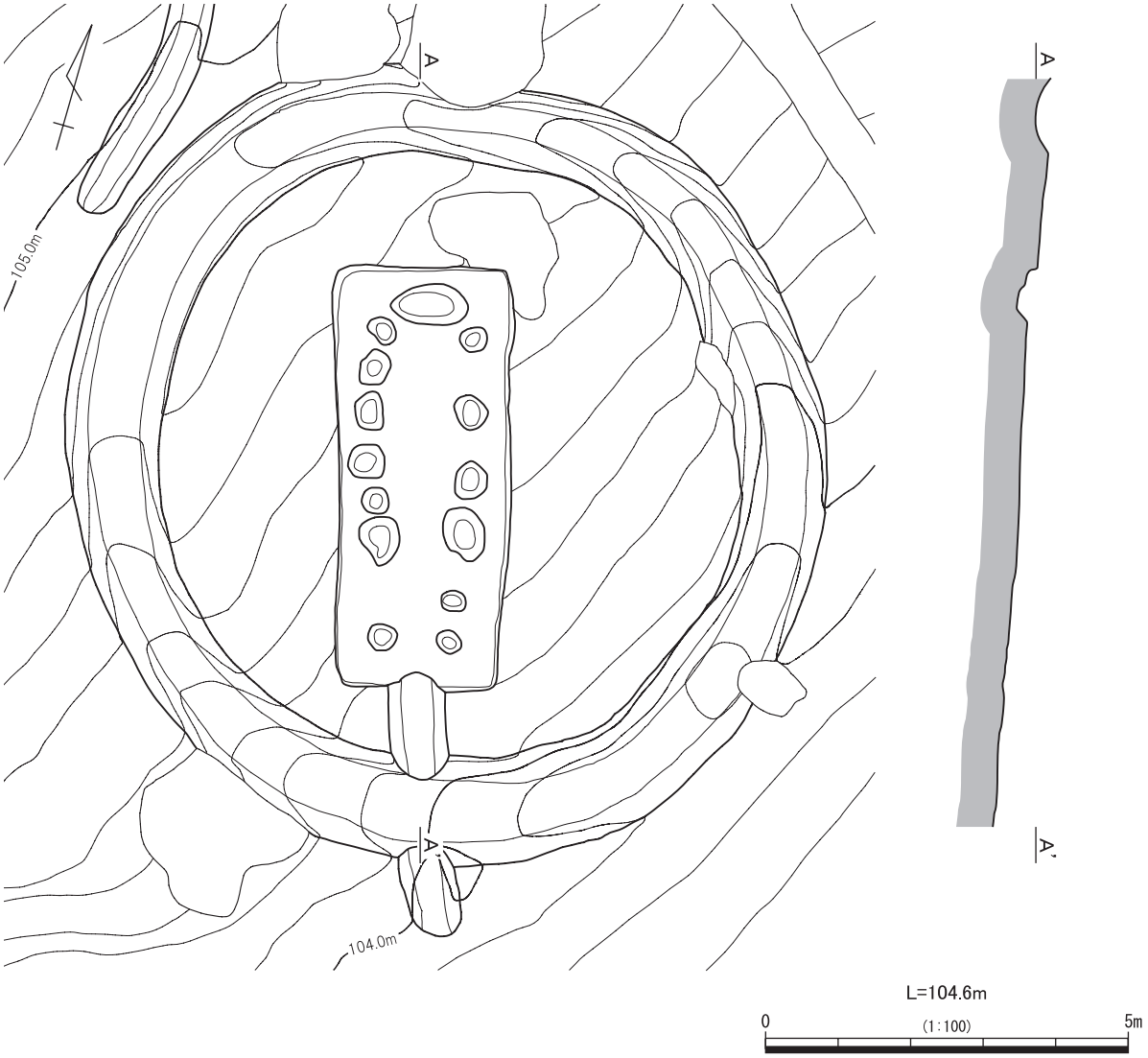
⑽　高根山A10号墳

調査前の状況

A9号墳の東隣に位置している。A10号墳は調査区西側の標高104.5mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

A10号墳は、A7・A8・A9・A10号墳が並列する下位グループの、東端に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。



第108図　A10号墳墳丘図

古墳を区画する周溝は、等高線がわずかに屈曲して南にせり出した部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.04m、深さ0.2m、西側が幅1.3m、深さ0.08m、南側が幅1.4m、深さ0.21m、東側が幅1.24m、深さ0.1mを測る。墳丘は東西7.8m、南北8.2mを測る。墳丘南側で標高104.11m、墳丘北側で標高104.76mを測り、現状での古墳の高さは0.65mである。

埋葬施設

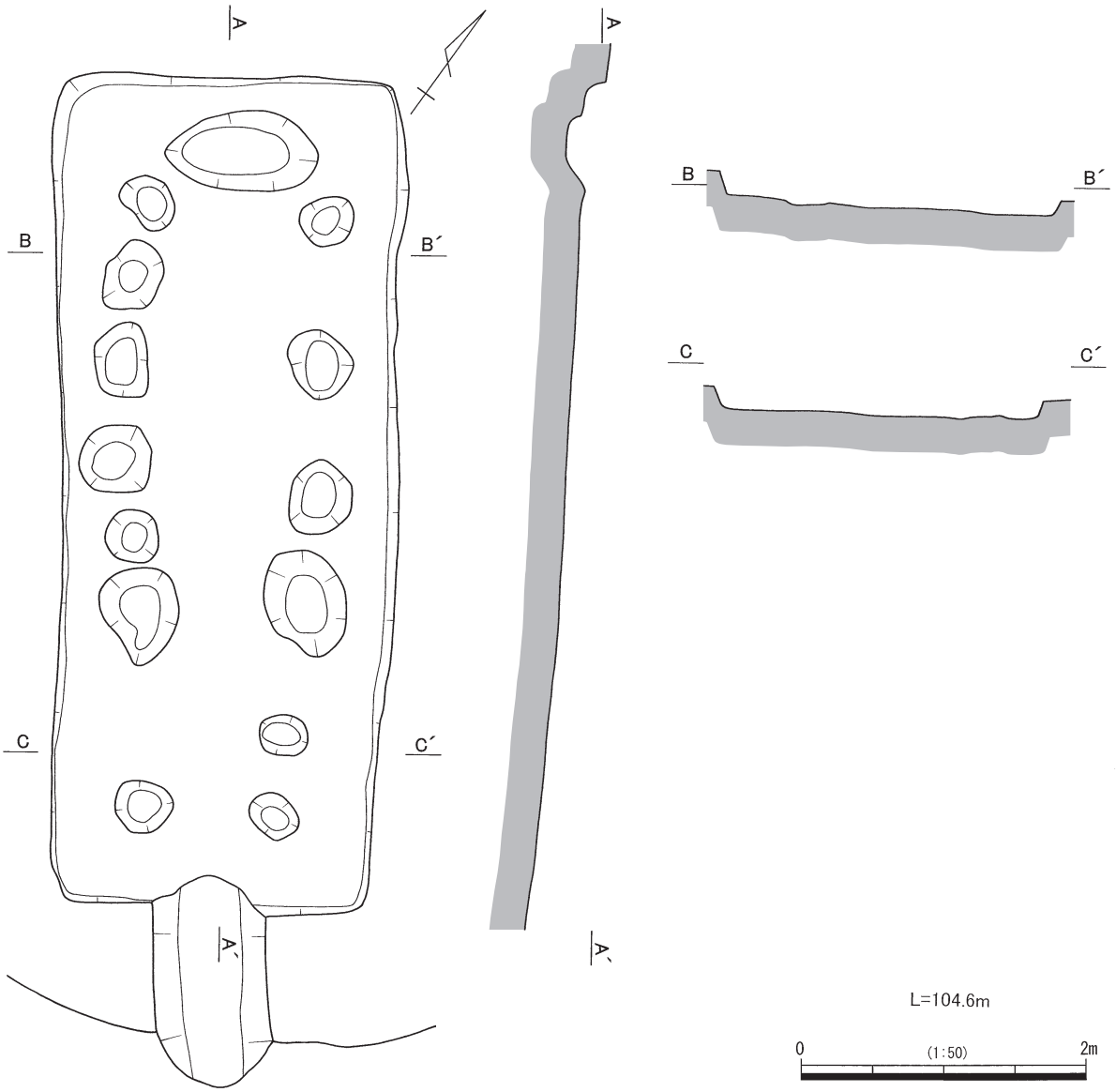
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はわずかに南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、礫床や基底石までほぼ完全に抜き取られていた。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高104.62m、下端で104.5mを測ることから、0.12mほどを掘り下げていた。おそらく古墳全体が削平されたので、低くなったのであろう。墓壙は長方形を呈している。墓道は短く、古墳の外へ続いている。墓道は先端部が南東へ曲がり延びている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。



第109図　A10号墳墓壙実測図

⑾　高根山A11号墳

調査前の状況

A6号墳の東隣に位置している。A11号墳は調査区西側の標高105.8mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

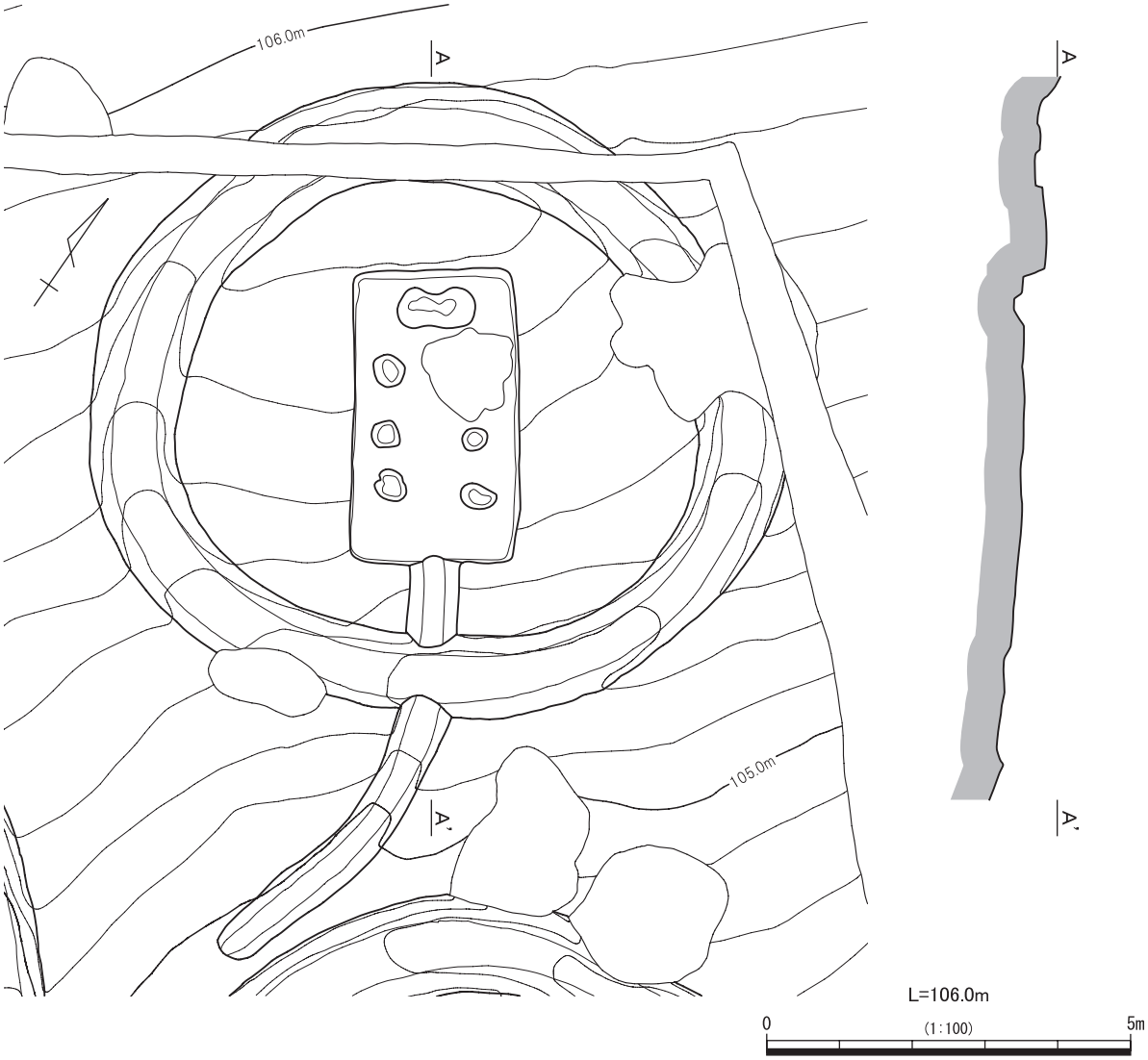
A11号墳は、A4・A5・A6・A11号墳が並列する中位グループの、東端に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は確認されなかった。

古墳を区画する周溝は、等高線がわずかに屈曲して南にせり出した部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.38m、深さ0.1m、西側が幅1.16m、深さ0.09m、南側が幅1.1m、深さ0.15m、東側が幅1.2m、深さ0.1mを測る。

墳丘は東西7.2m、南北6.2mを測る。墳丘南側で標高105.3m、墳丘北側で標高105.85mを測り、現状での古墳の高さは0.55mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はわずかに南



第110図　A11号墳墳丘図

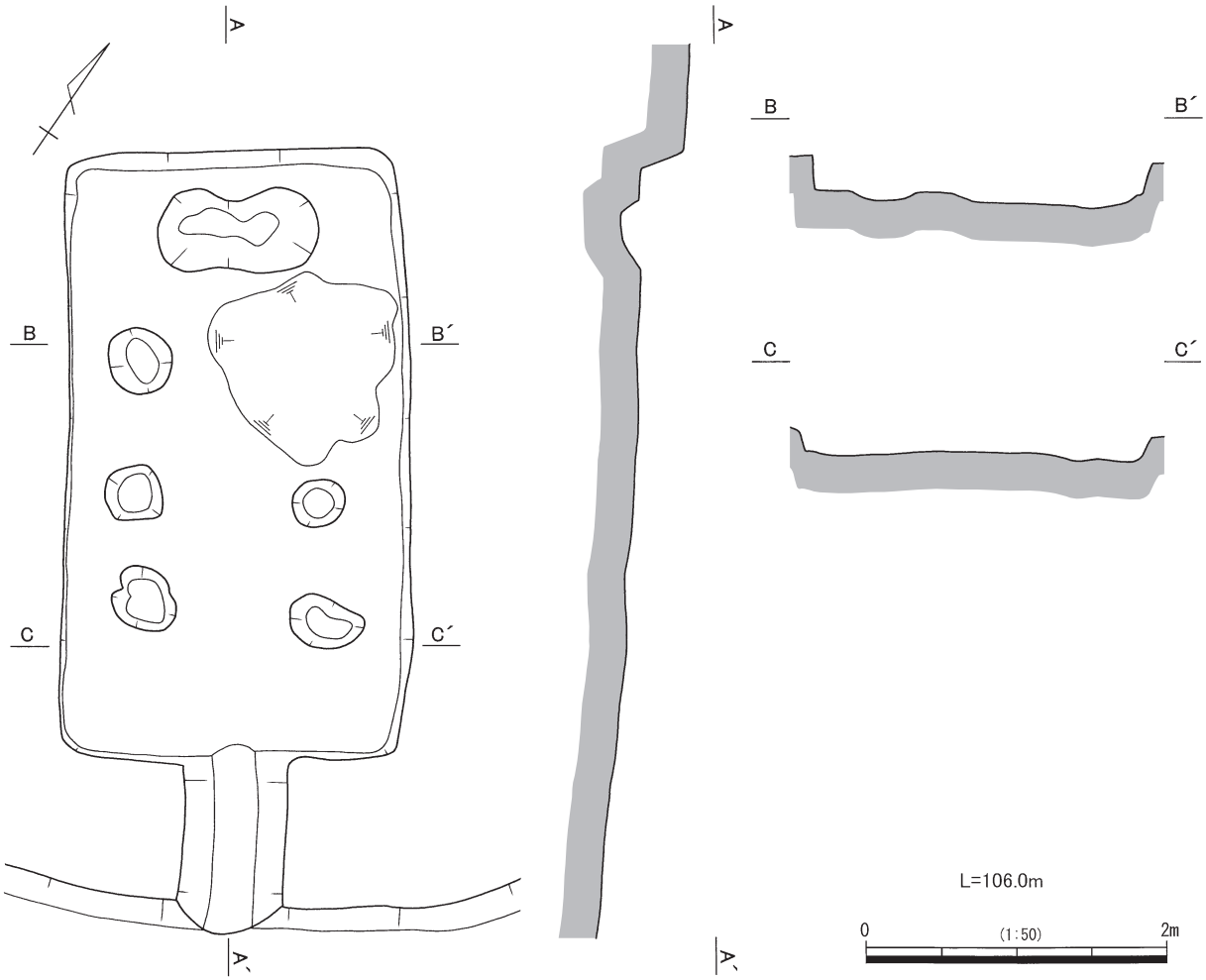
東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高105.81m、下端で105.5mを測ることから、0.31mほどを掘り下げていた。おそらく古墳全体が削平されたので、低くなったのであろう。墓壙は長方形を呈している。墓道は短く、古墳の外へ続いている。墓道は先端部が南西へ大きく屈曲し、9号墳と10号墳の間へ向かって延びている。11号墳の築造時には、すでにA9号墳とA10号墳が存在したためであろうか。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。



第111図　A11号墳墓壙実測図

⑿　高根山A12号墳

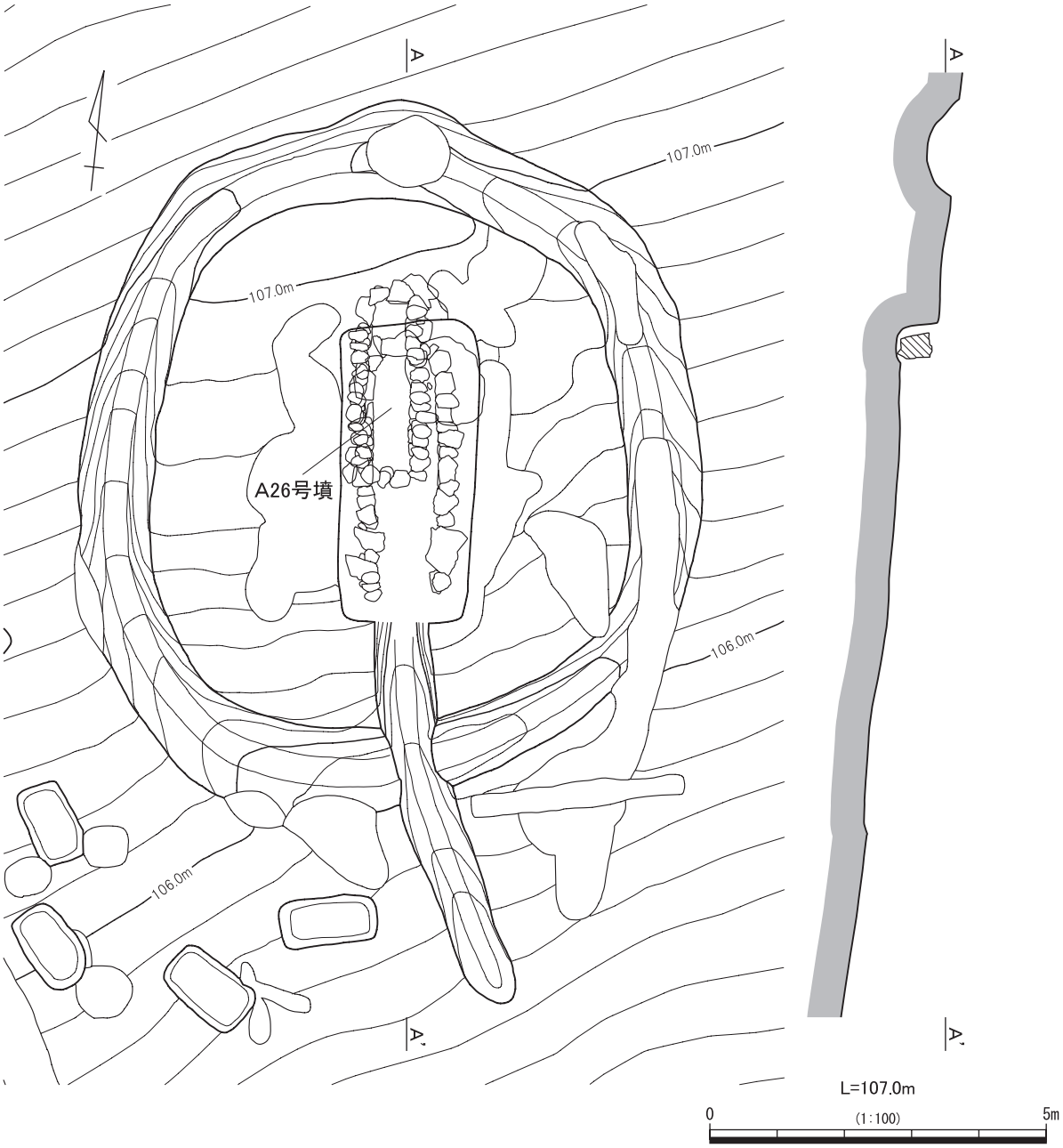
調査前の状況

A12号墳は東側小支群に属し、調査区中央部で標高107mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりは、認識できなかった。

墳丘・周溝

A12号墳は、西側小支群の東端に位置するA11号墳から50mほど東に位置し、その間は古墳が築造されていない空白地帯である。東側のグループではA13号墳の北西に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認されなかった。A12号はA13号・A19号墳と墓道方向が一致する点や近接したあり方から、各古墳が密接に関連することが推定される。

A12号墳は、同じ墳丘内に奥壁側に重複してA26号墳の石室が築造されていた。両者の石室は、主軸方位をわずかに違えるものの大略一致していることから、同じ墳丘内に意識的に石室を構築したものと



第112図　A12・A26号墳墳丘図

考えられ、両者の間には密接な関係をうかがい知ることができた。

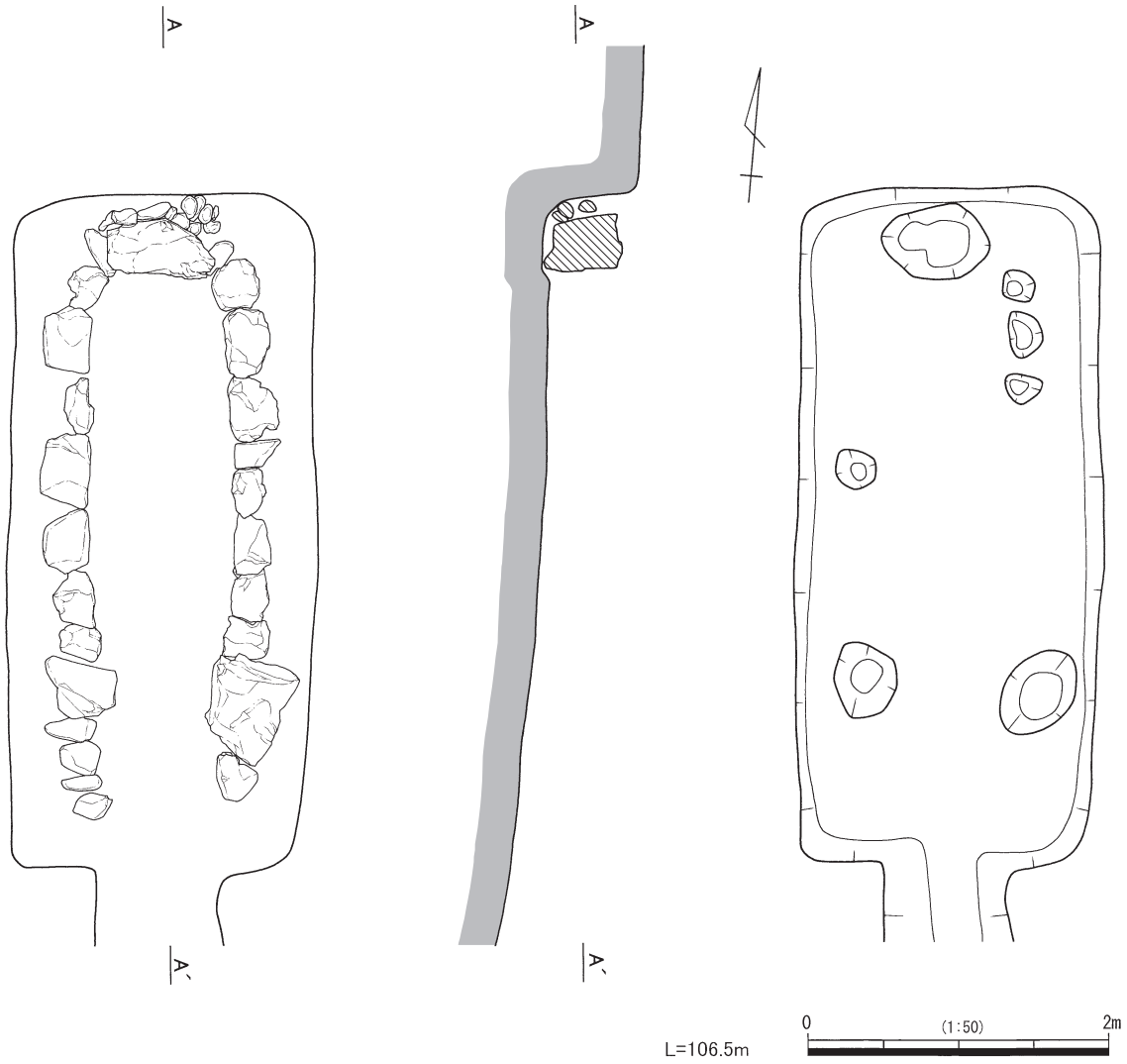
古墳を区画する周溝は等高線が緩やかに傾斜する箇所を掘削している。周溝の規模は、北側が幅1.1m、深さ0.21m、西側が幅1.06m、深さ0.23m、南側が幅1.06m、深さ0.23m、東側が幅1.1m、深さ0.13mを測る。墳丘は東西7.0m、南北7.9mを測る。墳丘南側で、標高106.08m、墳丘北側で標高107.09mを測り、現状での古墳の高さは1.01mである。

埋葬施設

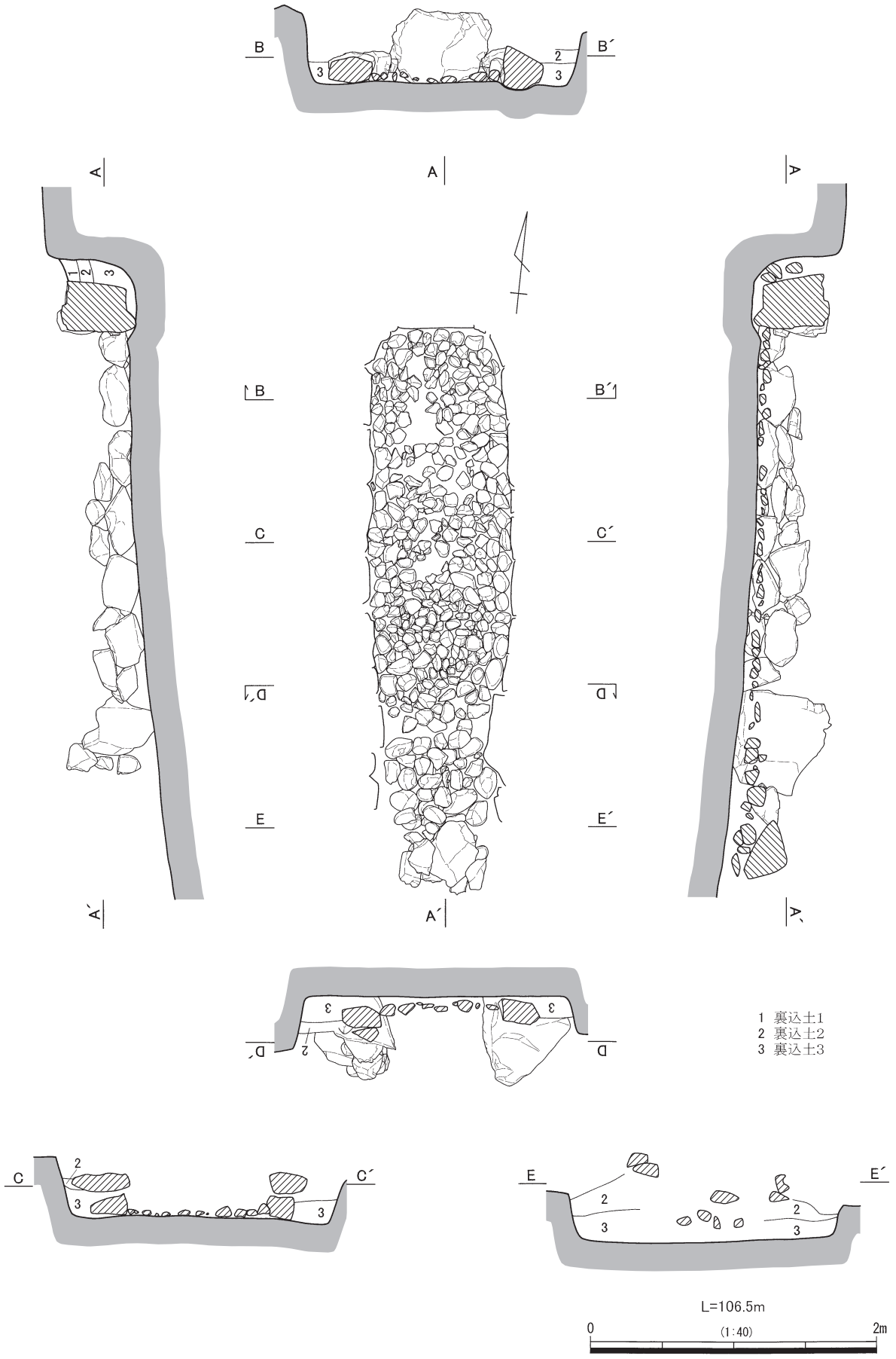
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向けた単室系無袖式石室で、閉塞石も残り保存状態は良好であった。

天井石　検出の際には天井石が認められず、一部がA26号墳の側壁に組み込まれていた。そのためA26号墳を築造する際に、すでに落下した状態の天井石を片付けたのちに、A26号墳の石室が造られA12号墳の天井石の一部を再利用したと考えられる。

玄室　奥壁は墓壙底面に据え付け穴を掘って根石を置き、その上に１枚の鏡石を設置している。玄門石は据えるための穴を掘り根石を置き、側壁の石より大きい石をその上に据え付けている。玄室の平面形



第113図　A12号墳基底石・墓壙実測図



第114図　A12号墳横穴式石室実測図

は、奥壁の直近で幅を狭めた奥窄り形を呈している。根石の配列と基底石の配置をみると、奥壁を据え玄門部を設置した後、奥壁から基底石を置き、同時に玄門から石室奥へも据える手順をとっているので、この段階で石室の平面形態はほぼできあがったものと考えられる。床面の礫床は長径25から7cmの礫がしかれていた。礫床は撹乱を受けていないものの、副葬品が認められなかったため、追葬の際、片付けられたのであろうか。

前庭　玄門部へ直線的につながる形態で、玄門とほぼ等しい幅である。閉塞石も残っていた。側壁の状態は1、2段が残っていた。閉塞石の上部に側壁に使用された角礫が認められ、追葬の際、側壁から落下していた石材を利用し積み直されたと判断される。

墓壙・墓道

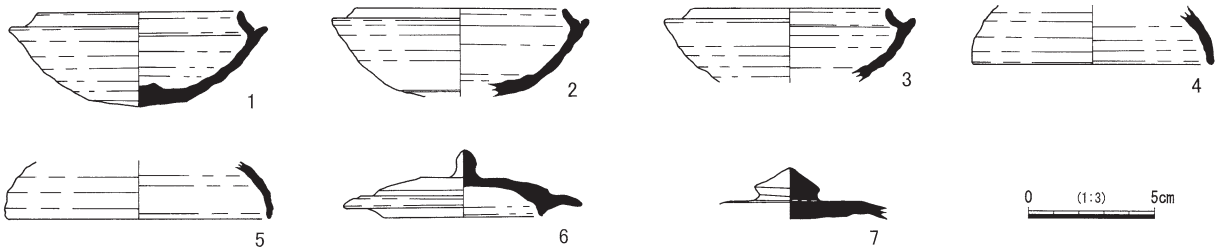
墓壙は奥壁上端で標高106.88m、下端で106.28mを測ることから、0.6mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部、玄門石を据える穴を掘っていた。墓道は先端部をわずかに南東へ曲げている。

遺物の出土状態

墓道から須恵器が、それ以外では周溝と撹乱部で、須恵器小片が出土した。玄室と床面の遺存状態が良好であったことからすれば、撹乱や盗掘の可能性はきわめて少ない。もともとこの古墳の副葬品は少なかったか、追葬の際、外側に片付けられたと判断される。

土器　いずれも須恵器で、1～3は坏身、4・5・7は坏蓋、6は壺類の蓋である。坏1～5は坏Ｈ類、7は坏Ｂ類である。遠江須恵器編年に比定すると、坏Ｈ類は底部未調整でⅣ期前半に比定され、坏Ｂ類の坏蓋はⅤ期前葉に比定できる。坏類は湖西窯製品が多い。

このようにみるとA12号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅳ期前半、Ⅴ期前葉の2時期にわたっていると判断され、須恵器編年からA12号墳の築造時期をⅣ期前半、さらにⅣ期後半に追葬が行われたと考えておきたい。Ⅴ期前葉の蓋はA26号墳が重複して築造されているので、A26号墳の築造時期を示している可能性が高い。



第115図　A12号墳出土遺物実測図

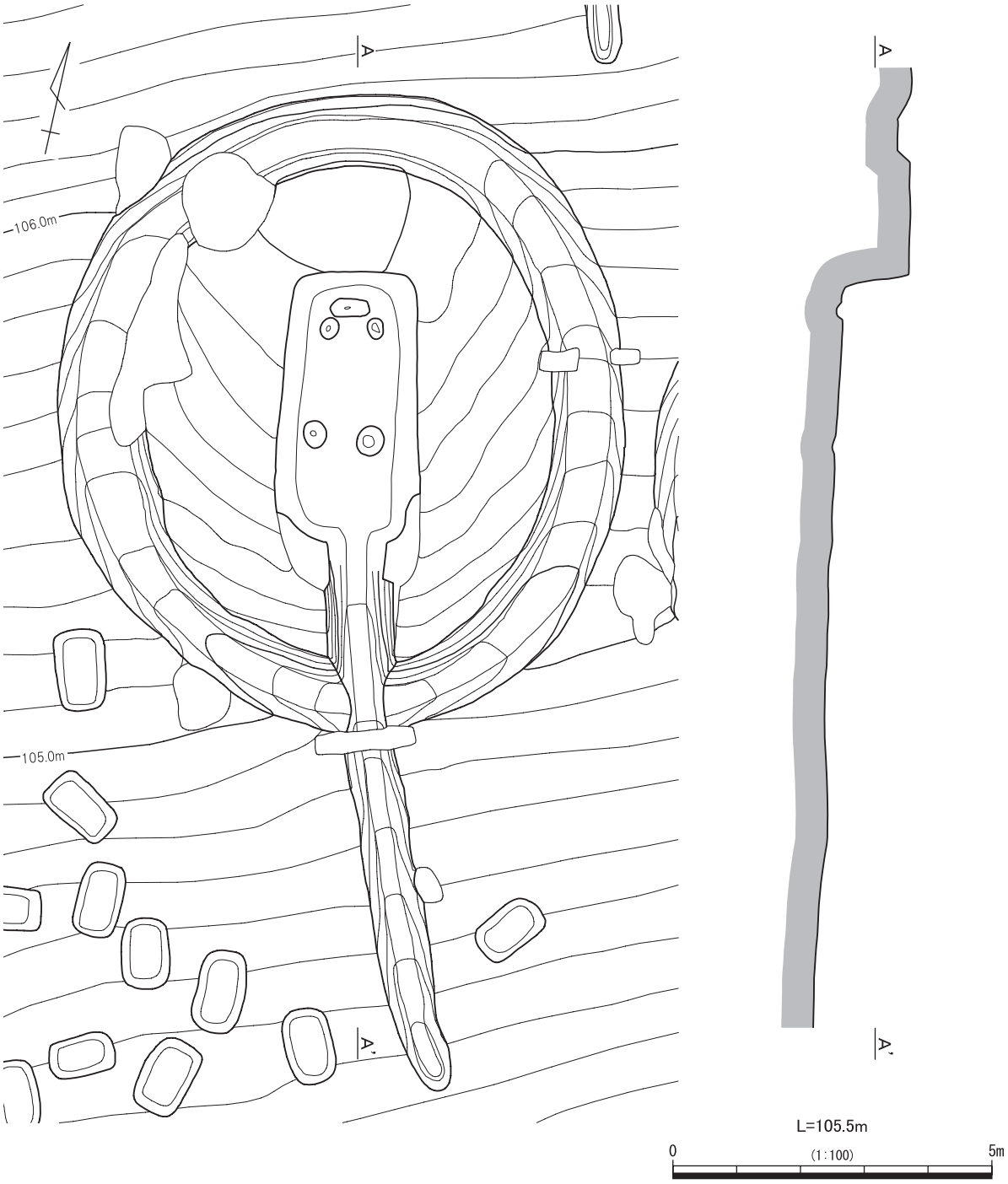
⑬　高根山A13号墳

調査前の状況

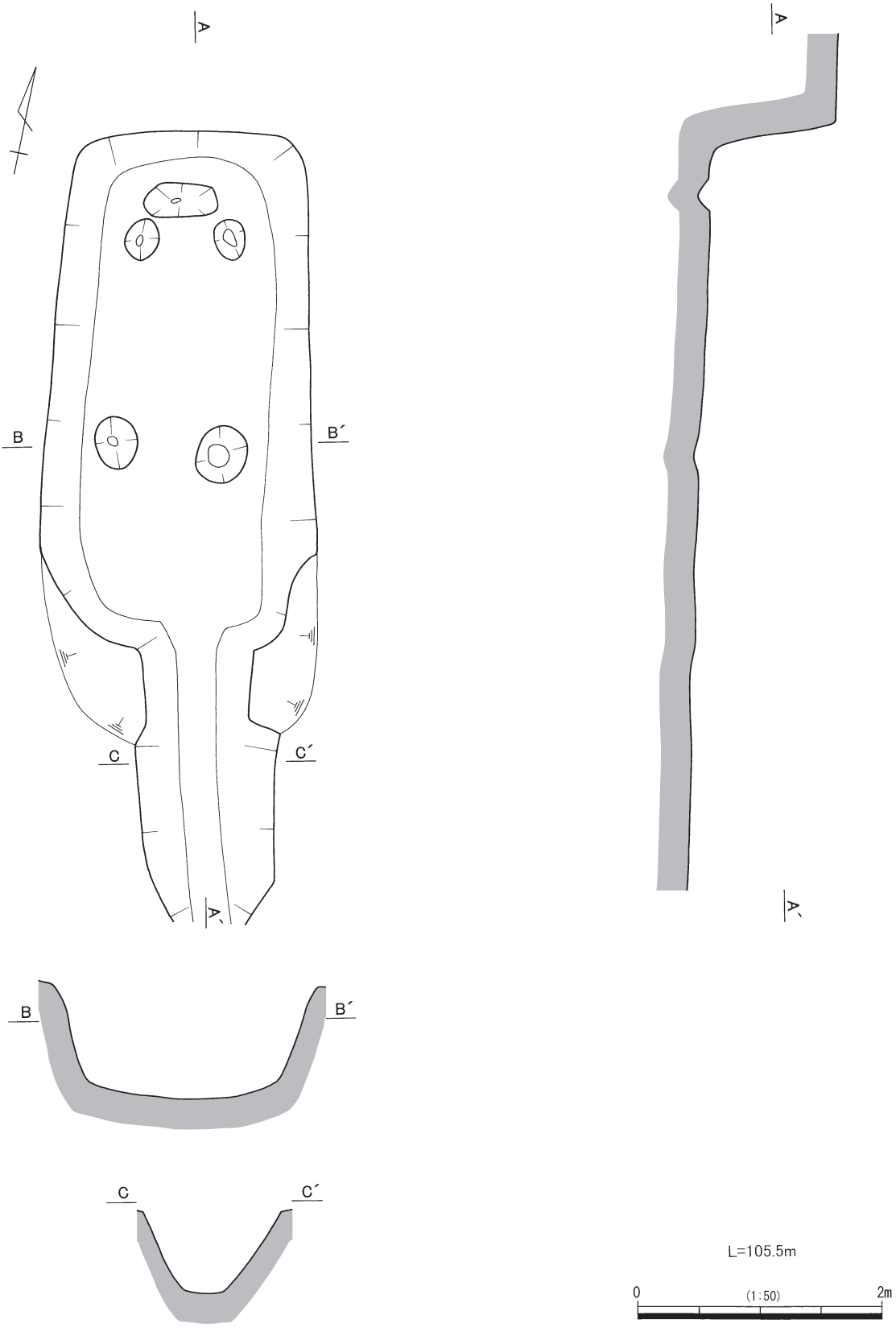
A12号墳の南東隣に位置している。A13号墳は東側小支群に属し、標高106mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりや大きな撹乱穴によって古墳の存在を想定できた。

墳丘・周溝

A13号墳は、A12・A13・A20・A21号墳が等高線に沿って並列する中位グループの、西から2番目に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は撹乱と後世の耕作によって、ほとんど確認されなかった。



第116図　A13号墳墳丘図



第117図　A13号墳墓壙実測図

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅1.12m、深さ0.25m、西側が幅1.44m、深さ0.25m、南側が幅1.0m、深さ0.37m、東側が幅1.06m、深さ0.1mを測る。墳丘は東西6.4m、南北7.6mを測る。墳丘南側で標高105.17m、墳丘北側で標高106.03mを測り、現状での古墳の高さは0.86mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はわずかに南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石材の抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高106.025m、下端で105.01mを測ることから、1.015mほどを掘り下げていた。撹乱を受けているものの、墓壙の下端から平面形は長方形を呈していたと推定される。墓道は古墳の外へ続き、先端部はほぼ直線に延びて、わずかに南東へ曲がっている。墓道の床面より浮いた状態で礫がまとまって認められたが、閉塞石ではない。後世の撹乱で、石材をかき出した際の残りであろう。

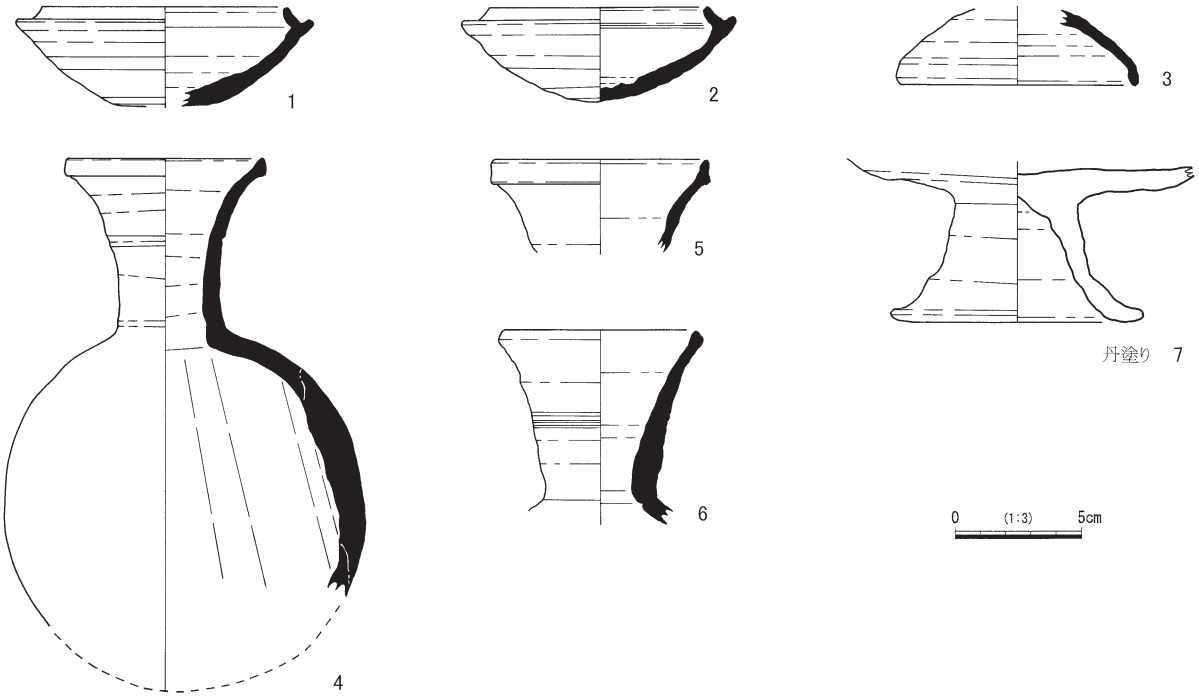
遺物の出土状態

周溝と撹乱部で、須恵器片が出土した。後世の撹乱の際、外側にかき出されたと判断される。

土器　須恵器と土師器の両者が出土した。1・2は坏身、3は坏蓋、4～6はフラスコ形瓶である。

土師器の7は丹塗りの脚付盤である。坏1から3は坏Ｈ類である。底部は未調整で遠江須恵器編年Ⅳ期前半に比定できる。フラスコ形瓶はⅣ期前半から後半に比定される。脚付盤はⅣ期後半から末葉の須恵器に伴うと考えられる。

このようにみるとA13号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅳ期前半、Ⅳ期後半から末葉の2ないし3時期にわたっていると判断され、須恵器編年からA13号墳の築造時期をⅣ期前半、さらにⅣ期後半から末葉に追葬が行われたと考えておきたい。



第118図　A13号墳出土遺物実測図

⒁　高根山A14号墳

調査前の状況

A14号墳はA19号墳の東隣でA15号墳の西南に位置している。調査区中央よりやや東側の標高107mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりは認められなかった。

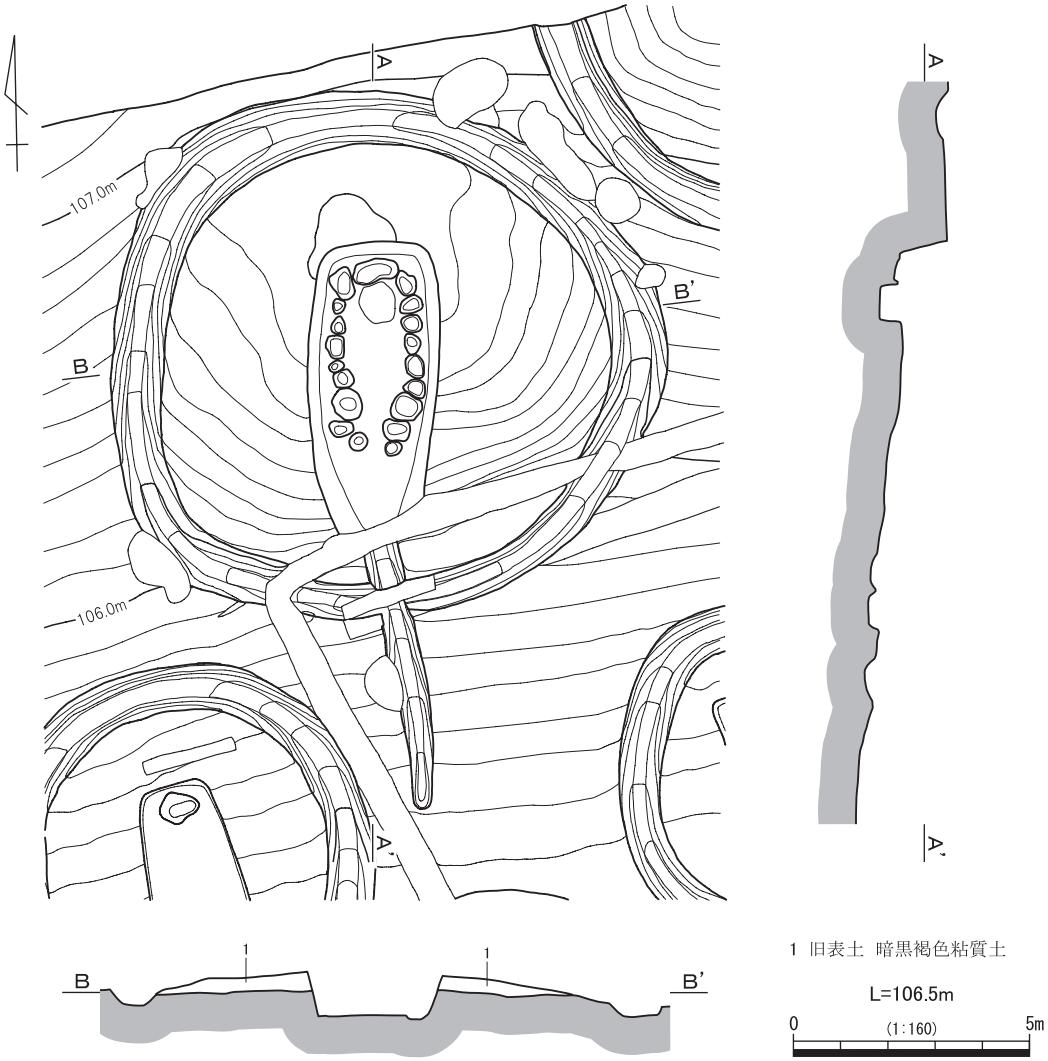
墳丘・周溝

A14号墳は、A19・A14・A15号墳が等高線に沿って並列する、上位グループの西から２番目に位置する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は撹乱と後世の耕作によって失われ表土と化しているが、20～30cmほどが部分的に確認された。

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅1.1m、深さ0.28m、西側が幅1.1m、深さ0.35m、南側が幅0.78m、深さ0.2m、東側が幅1.1m、深さ0.26mを測る。墳丘は東西9.5m、南北9.2mを測る。墳丘南側で標高105.78m、墳丘北側で標高106.96mを測り、現状での古墳の高さは1.18mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は南に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き



第119図　A14号墳墳丘図

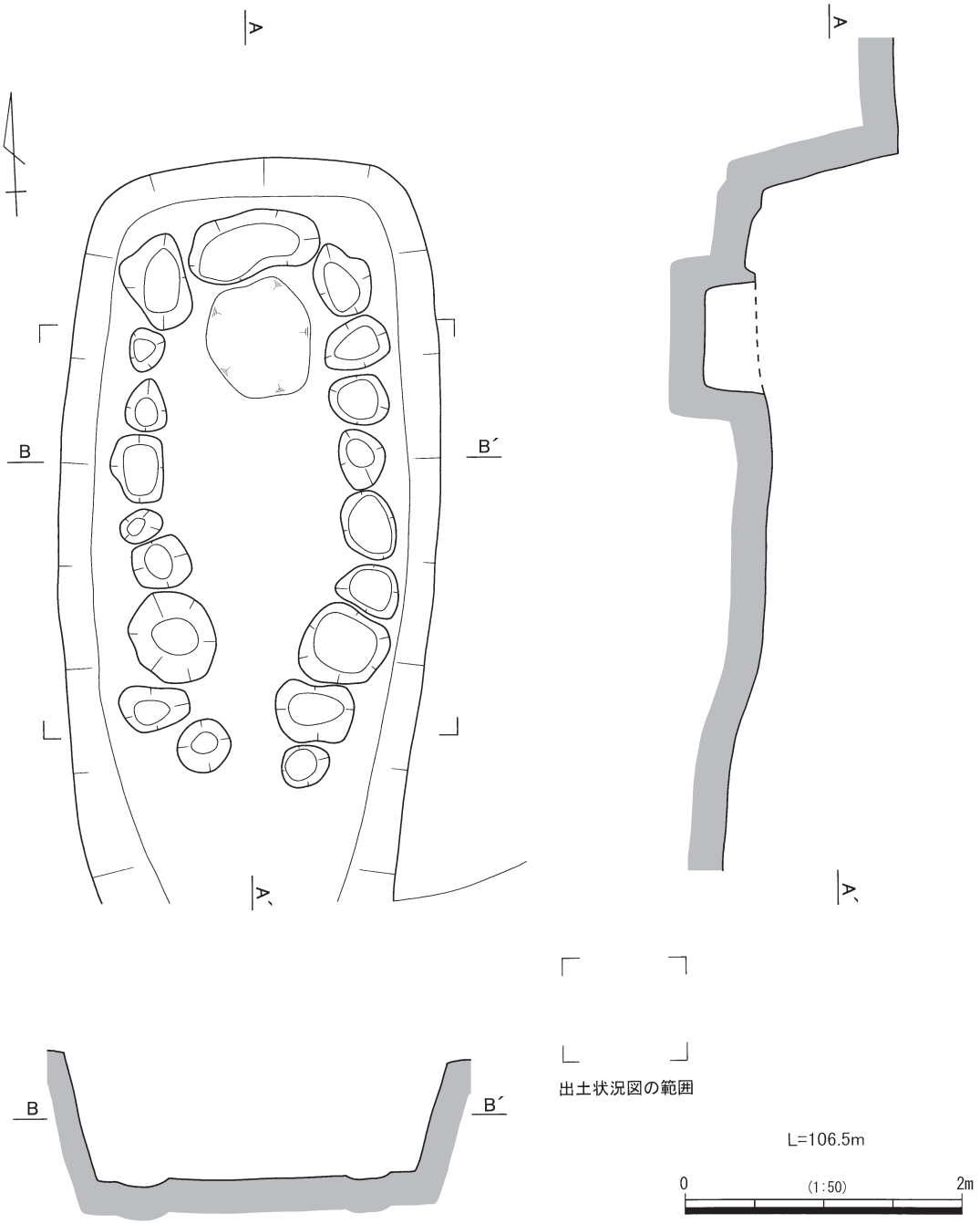
取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高107.0m、下端で106.0mを測ることから、1.0mほどを掘り下げていた。墓壙下部から墓道が大きく撹乱を受け原形を留めていない。墓道は古墳の外へ続き、20号墳と22号墳の中間地点に直線に延びて、わずかに南西へ曲がっている。閉塞石は残っていなかった。

遺物の出土状態

玄室内には礫床はなく、撹乱土から両頭の弓金具、鉄鏃4点を、さらにこの土をふるいにかけガラス小玉38個を検出した。墓壙底面からやや浮いた状態で、須恵器の高坏、平瓶、瓮、長頸壺片が出土した。



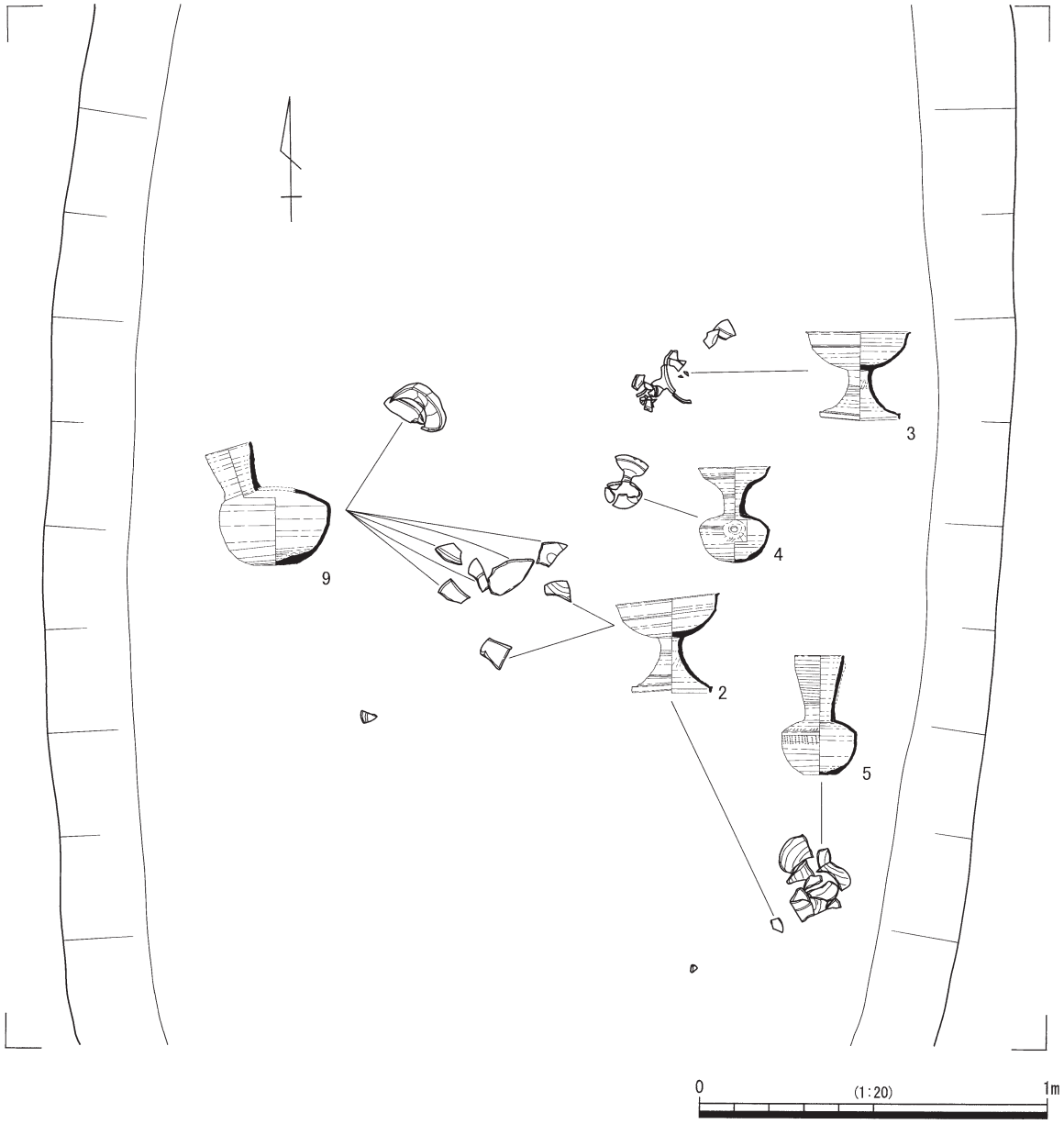
第120図　A14号墳墓壙実測図

後世、再利用するために石室の石材を外に運び出した際、残されたものと判断される。これらの須恵器は副葬時の原位置を留めてはいないが、大きく移動はしていないと考えられ、玄室内に置かれていたものと判断される。周溝の撹乱部分から須恵器甕片が出土した。もとは周溝に置かれたと判断される。撹乱からの出土であって、もともと破砕されていたかははっきりしない。

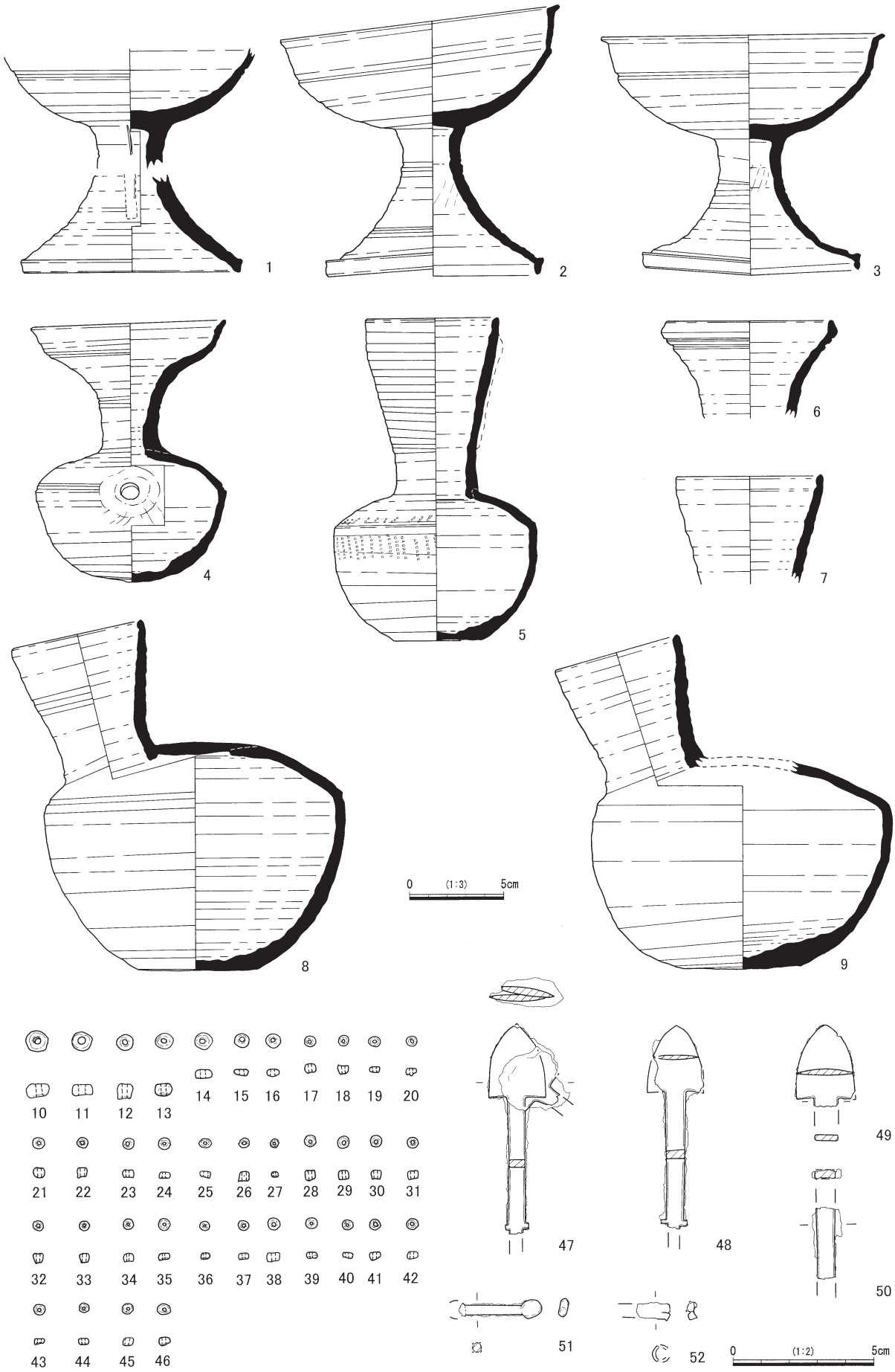
出土遺物

土器と玉類、鉄製品が出土した。

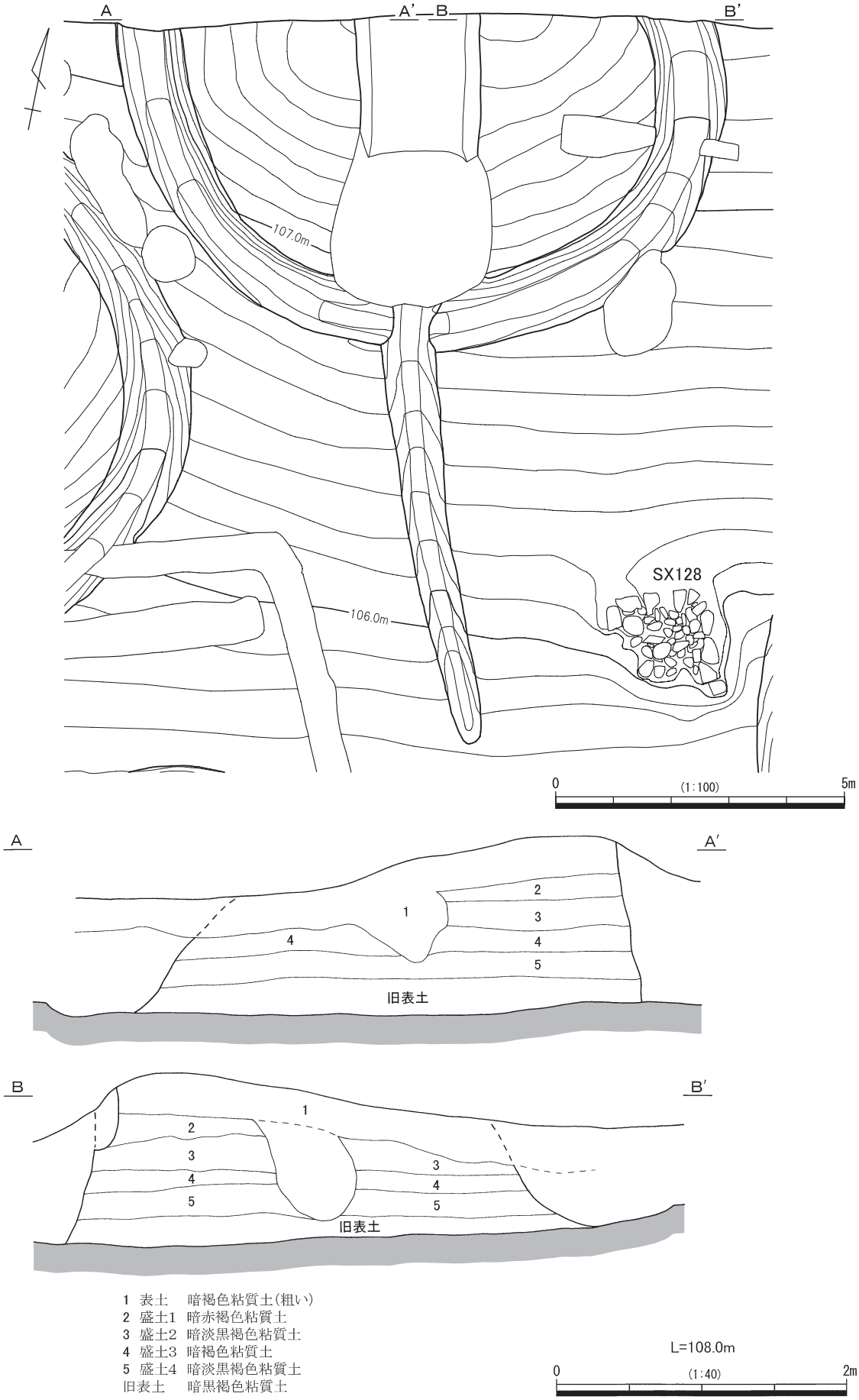
土器　いずれも須恵器で、1～3は高坏、4は瓶、5は長頸壺、6・7は壺類、8・9は平瓶である。高坏1は長脚2段透かしであるが、上部の透かしは長窓ではなく沈線のみと形骸化している。口縁部が欠損しているため有蓋か無蓋高坏か不明である。2・3は無蓋高坏で、坏部と脚部中位に沈線を巡らす。4の瓶は注口部が外側に付き出したタイプでる。5の長頸壺は、胴部中位に刺突による斜行紋を巡らす。6はフラスコ形瓶、7は長頸壺の一部と考えられる。8・9の平瓶は頸部が直立気味に付くタイプで、口縁部は



第121図　A14号墳遺物出土状況図



第122図　A14号墳出土遺物実測図



第123図　A15号墳墳丘図

そのまま収めている。遠江須恵器編年に比定すると、高坏類と瑳がⅢ期末葉に比定され、長頸壺、フラスコ形瓶、平瓶がⅣ期前半から後半に比定できる。

このようにみるとA14号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅲ期末葉、Ⅳ期前半から後半の２ないし３時期にわたっていると判断され、須恵器編年からA14号墳の築造時期をⅢ期末葉、さらにⅣ期前半から後半に追葬が行われたと考えておきたい。

玉類　出土した玉類10～46はすべてガラス小玉である。直径5mm以上の玉は紺色５個、水色１個があり、それ以下の大きさの玉は紺色21個、水色９個、黄色１個がある。ほかに紺色の破片が１個ある。

鉄製品　47～49は鉄鏃で、三角形式の鏃身である。束ねられていたらしく、鏃身が重なっている例もある。50は鉄鏃茎部である。51・52は両頭金具とも呼ばれる飾り弓の弓金具である。鉄芯とそれを巻く鉄板が残っていた。

⒂　高根山A15号墳

調査前の状況

A15号墳はA14号墳の北東隣に位置し、標高107mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりや大きな撹乱穴によって古墳の存在を想定できた。古墳の３分の１が調査区外である。

墳丘・周溝

A15号墳は、A19・A14・A15号墳が等高線に沿って並列する上位グループの東端に位置する。墳丘の盛土（暗褐色系粘質土）は、北側調査区境界の東西断面に旧表土から上に70㎝が残り、現表土30㎝がその上に認められた。それ以外は撹乱のため、墳丘内の盛土はよく残っていなかった。

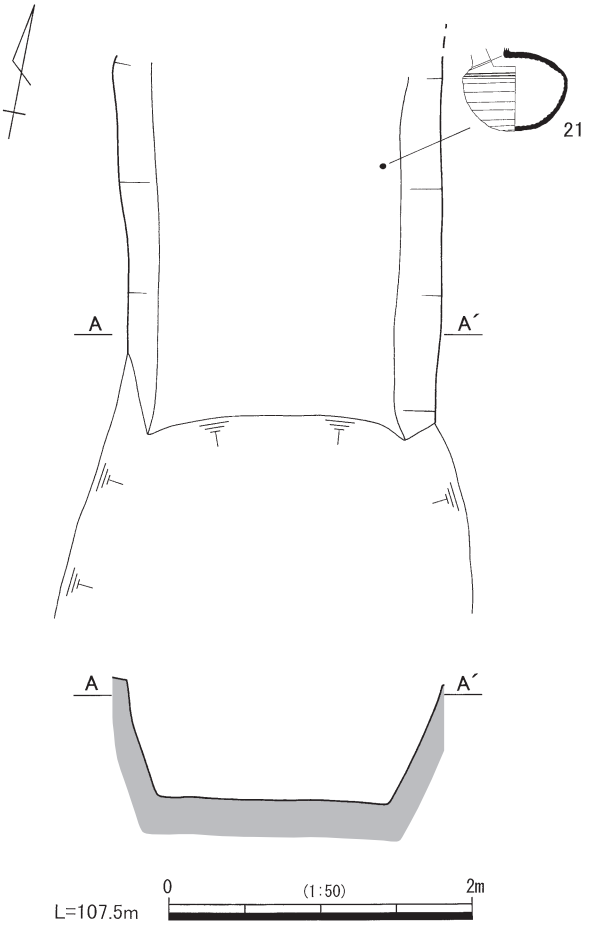
古墳を区画する周溝の規模は、西側が幅1.1m、深さ0.33m、南側が幅1.0m、深さ0.32m、東側が幅1.1m、0.2mを測る。墳丘は東西8.1mを測るが、南北は不明である。残りの良好な調査区境界での古墳の高さは約0.8mである。最も低い南側周溝底面から調査区外の墳頂部までの高さは、1.8～1.6m前後と推定される。

埋葬施設

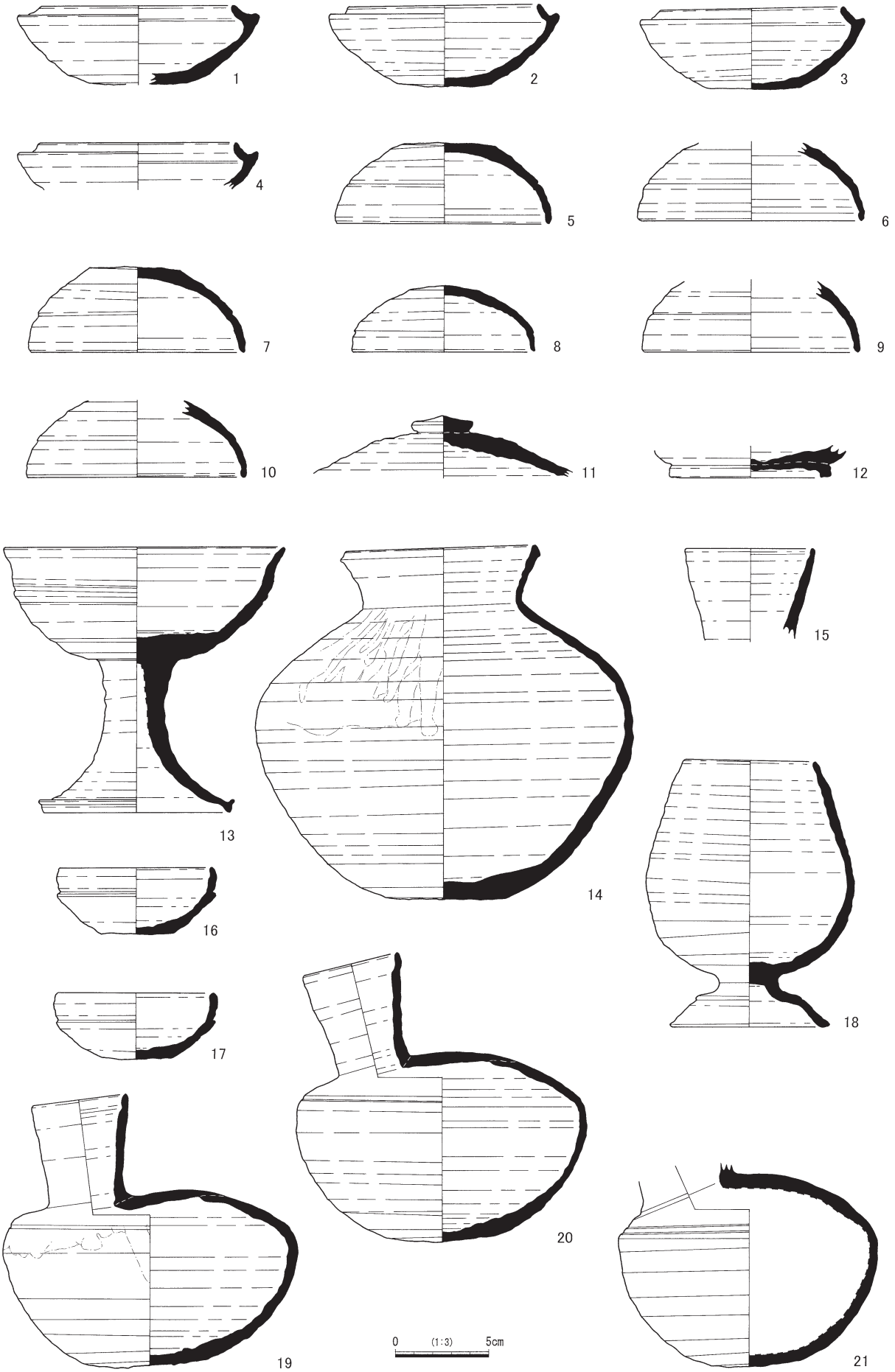
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はわずかに南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は調査区北隅上端で標高108.5m、下端で106.95mを測ることから、1.55mほどを掘り下げていた。撹乱を受けているものの、墓壙の下端から平面形は長方形を呈していたと推定される。墓道は古墳の外へ続き、先端部はほぼ直線



第124図　A15号墳墓壙実測図



第125図　A15号墳出土遺物実測図

に延びて、わずかに南東へ曲がっている。玄室下部と墓道の境界が大きく撹乱を受け、閉塞石は残っていなかった。

遺物の出土状態

周溝と撹乱部で、須恵器片が出土した。後世の撹乱の際、外側にかき出されたと判断される。

土器　いずれも須恵器で、1～4・12は坏身、5～11は坏蓋、13は無蓋高坏、14は広口壺、15は長頸壺、16・17は盌、18は脚付盌、19から21は平瓶である。坏1から10は坏Ｈ類、11・12は坏Ｂ類である。遠江須恵器編年に比定すると、8を除く坏Ｈ類は坏身底部とその外周をヘラケズリ調整し、坏蓋の天井部についてもヘラケズリ調整しているためⅢ期末葉に比定され、8はⅣ期前半と考えられる。11・12の坏Ｂ類はⅤ期前葉に比定できる。13の無蓋高坏と16・17の盌はⅢ期末葉に比定される。14の広口壺、15の長頸壺、18の脚付盌、19から21の平瓶はⅣ期前半から後半に比定される。

このようにみるとA15号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅲ期末葉、Ⅳ期前半から後半、Ⅴ期前葉の2から3時期にわたっていると判断され、須恵器編年からA15号墳の築造時期をⅢ期末葉、さらにⅣ期前半から後半、Ⅴ期前葉に追葬が行われたと考えておきたい。

⑯　高根山A16号墳

調査前の状況

A17号墳の西隣に位置している。A16号墳は東側小支群に属し、標高106mの等高線付近に築造されていた。A16号墳は等高線がわずかに南側にせり出している箇所に造られている。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりや大きな撹乱穴によって、すでに古墳として認識されていた。

墳丘・周溝

A16号墳は等高線に沿って並列するA17号墳とともに、明瞭な墳丘をもち東側グループの中では有力な古墳とみられていた。墳丘の盛土（暗褐色系粘質土で構成）は、墳丘中央部東西断面に旧表土から上に60cmが残っていた。墳丘の築造過程は、旧表土上に整地のために15cmほど盛土をし、さらに墓壙端部から半径1.6～1.7mの範囲に高さ60cmほどの第1次墳丘を盛土している。そののち第二次の墳丘を盛土し、完成している。

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅1.1m、深さ0.27m、西側が幅1.2m、深さ0.29m、南側が幅1.0m、深さ0.13m、東側が幅1.3m、深さ0.25mを測る。墳丘は東西11.8m、南北12.8mを測る。墳丘南側で標高105.61m、墳丘北側で標高106.78mを測り、現状での古墳の高さは1.17mである。

埋葬施設

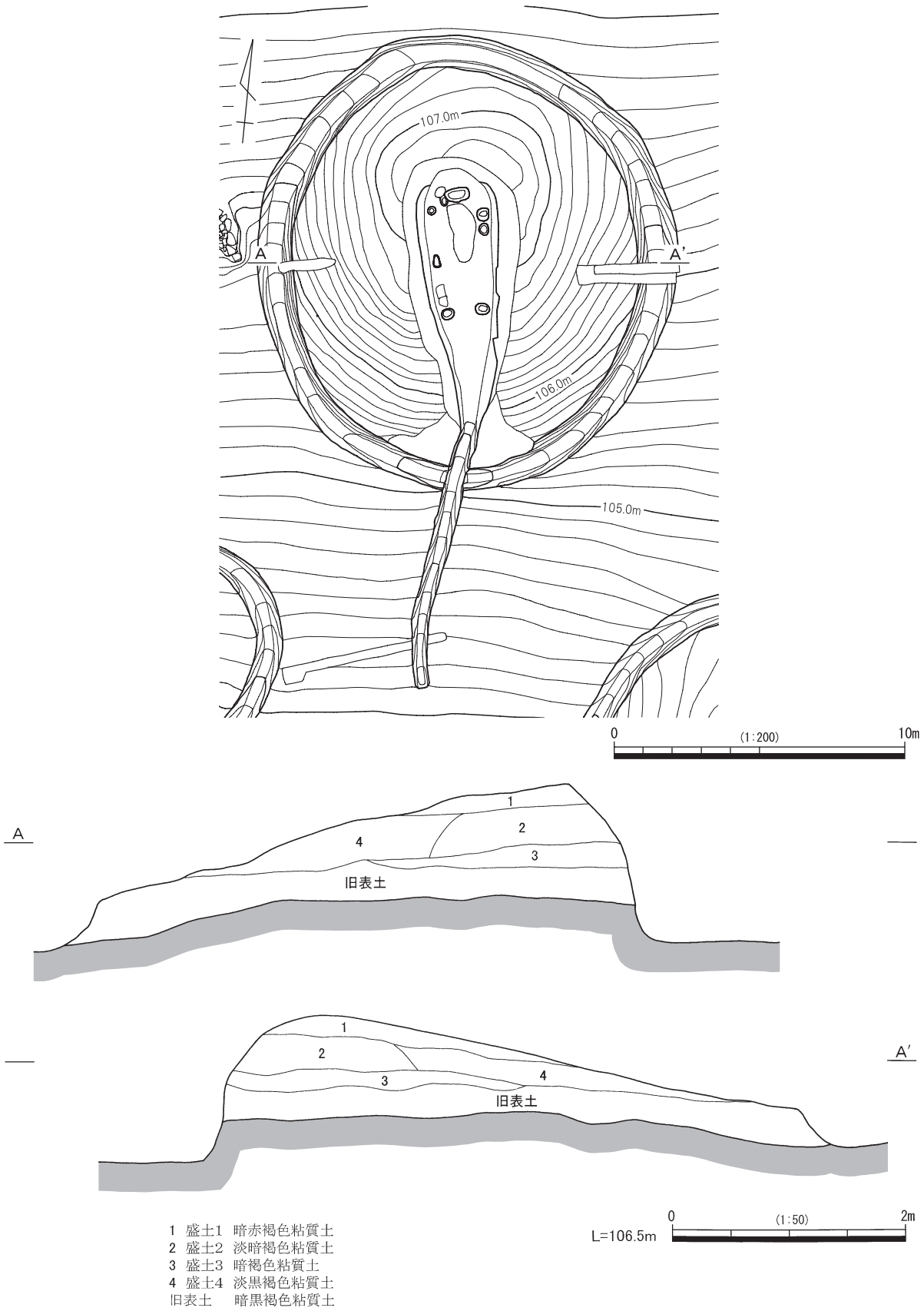
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はほぼ南に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほとんどか完全に抜き取られていたが、わずかに玄室西側壁に2箇所が残り、さらに床面の礫床については一部が南北1.8m、幅0.5mの範囲に残っていた。礫床の礫は15cm前後の丸い礫である。一部の基底石は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高107.2m、下端で105.65mを測ることから、1.55mほどを掘り下げていた。奥壁側についても墓壙を広げ墓壙底面を掘り下げて奥壁を取り外している。墓壙の平面形は全体に撹乱を受けて不明であるが、Ａ群の墓壙が長方形を呈する例が多いので、長方形と推定される。墓道は古墳の外へ続き、先端部はほぼ直線に延びて、わずかに南東へ曲がっている。閉塞石は残っていなかった。

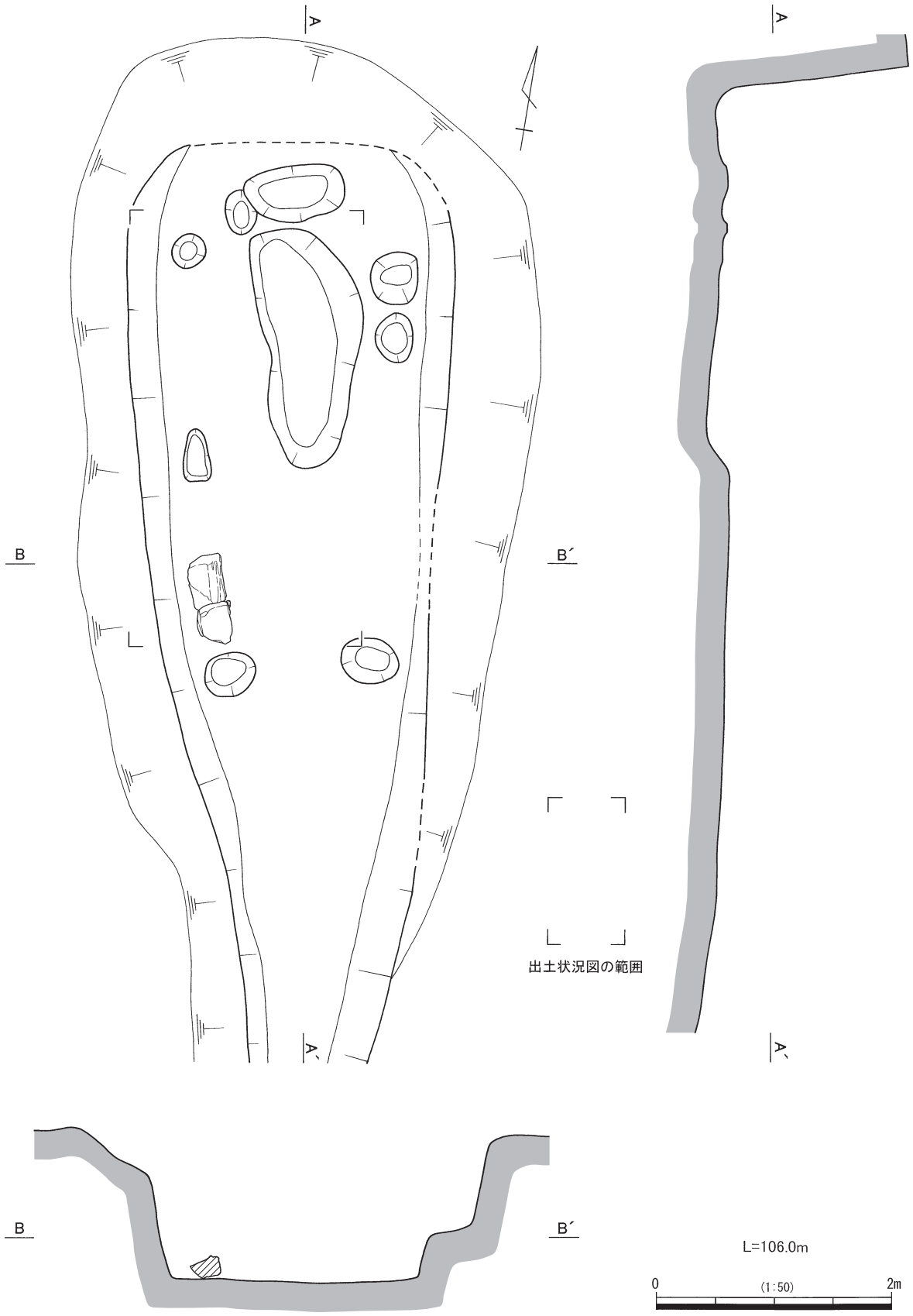
遺物の出土状態

玄室およびそれ以外の周溝と撹乱部で、玉類、鉄鏃、須恵器が出土した。後世の撹乱の際、外側にかき出されたと判断される。玄室内からは礫床が残り撹乱を受けていない箇所で直刀、須恵器坏が、玄室

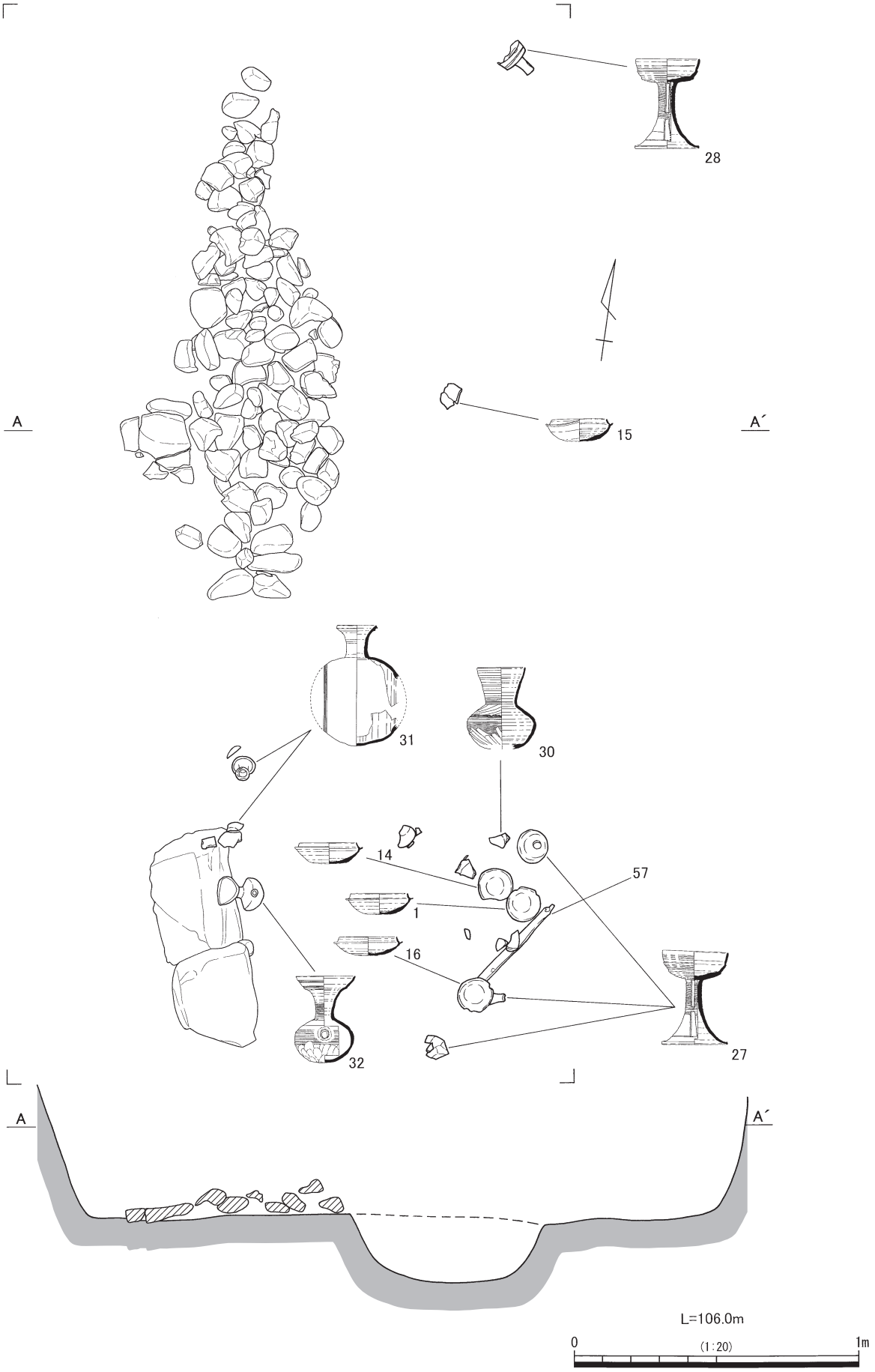


1　盛土1　暗赤褐色粘質土
2　盛土2　淡暗褐色粘質土
3　盛土3　暗褐色粘質土
4　盛土4　淡黒褐色粘質土
旧表土　　暗黒褐色粘質土

第126図　A16号墳墳丘図



第127図　A16号墳墓壙実測図



第128図　A16号墳遺物出土状況図

入口の両側壁付近から、耳環は奥壁に近い撹乱の及んだ部分から出土した。周溝とその付近から灰釉陶器の碗や小皿片が出土した。火葬墓SX128に関連するのであろうか。

出土遺物

土器と玉類、耳環、鉄製品が出土した。

土器　いずれも須恵器で、1～19は坏身、20～24は坏蓋、25は壺類の蓋、あるいは天地逆で盌の可能性が考えられる。26～29は高坏、30は長頸壺、31はフラスコ形瓶、32・33は甕、34は盌、35は平瓶、36から39の灰釉陶器の碗と小皿である。坏1から24は坏Ｈ類である。坏身をみると1・14・15・16のように底部未調整のものと7から9のように底部とその外周をヘラケズリ調整するタイプがある。遠江須恵器編年に比定すると、Ⅲ期末葉からⅣ期前半であろう。22～24は坏Ｈ類でも新しくⅣ期前半から後半に比定される。1・14・15・16のように底部未調整のものについてもⅣ期前半に比定できるのであろうか。14・15は森町にある森山窯の製品であり、18から20は尾張窯の製品である。東山50号窯の時期と推定される。

高坏26～28は長脚2段透かしで、いずれも2方向透かしである。遠江須恵器編年ではⅢ期後葉かⅢ期末葉、29の高坏は半球形を呈する坏部をもち、Ⅲ期末葉に比定される。30の長頸壺と31のフラスコ形瓶はカキ目調整を施している。Ⅲ期末葉の製品であろうか。32・33の甕は、32がⅢ期末葉に比定され、33はⅣ期前半から後半に比定される。34の盌はⅣ期前半に比定される。35の平瓶は森山窯の製品で、湖西窯を中心とした遠江須恵器編年のⅢ期末葉ないしⅣ期前半に併行する時期であろう。

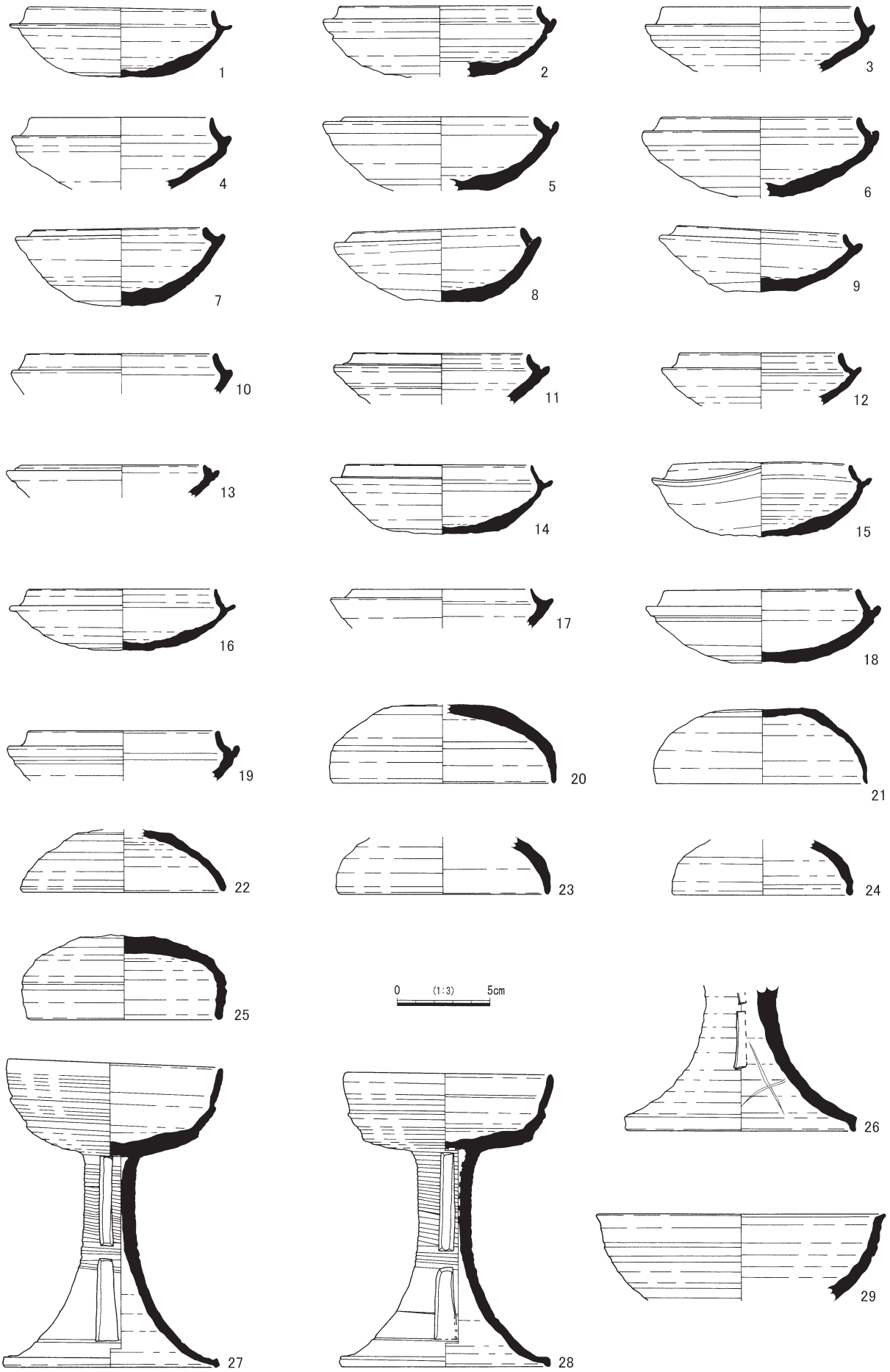
このようにみるとA16号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅲ期後葉ないし末葉からⅣ期前半、Ⅳ期後半の複数の時期にわたっていると判断され、須恵器編年からA16号墳の築造時期をⅢ期後葉かⅢ期末葉、さらにⅣ期前半から後半まで追葬が行われたと考えておきたい。

灰釉陶器の碗と小皿は浜北窯産で、10世紀後葉から11世紀前半の製品であろう。

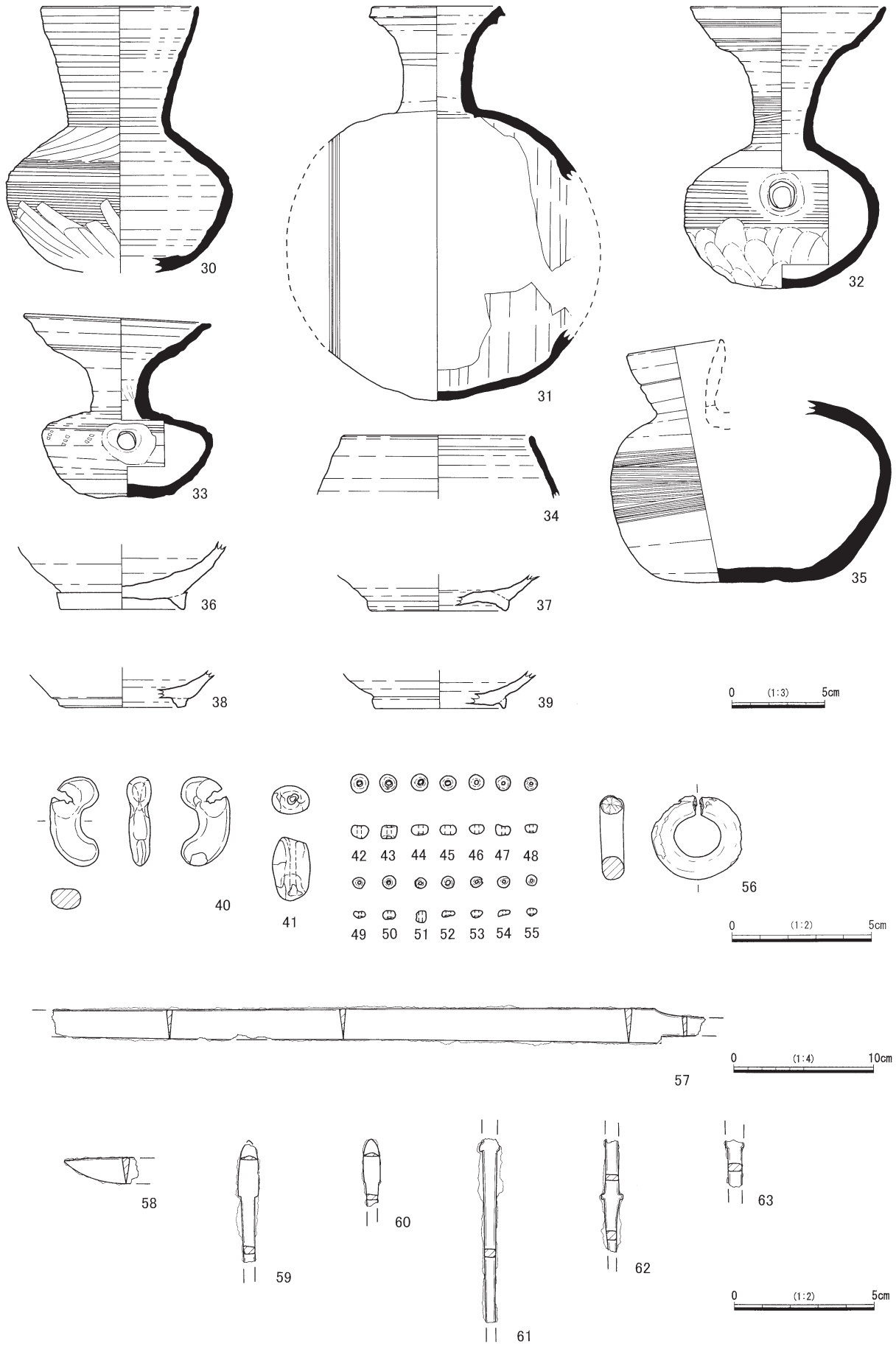
玉類　40の勾玉1個が出土した。石材は薄緑色を呈する珪質粘板岩で、両側から穴を穿孔している。41の埋木製のなつめ玉1個が出土した。ほかに出土したガラス小玉42～55のうち直径5mm以上の玉は紺色6個、それ以下の大きさの玉は紺色4個、水色4個が出土した。

耳環　56の耳環は銅地で銀張りである。鍍金は剥離しているのか確認できない。開口部の箔を観察すると箔を折り曲げた痕が認められる。

鉄製品　57は両関式の直刀で、茎部の一部と刃部先端が失われている。残っている茎部は茎元幅から真っ直ぐに伸びる形状で、関の形状は直角に、背は深く斜めに切れ込む。刀身の刃の断面は平造を呈する。58は刀子である。59・60は鉄鏃で長三角形の鏃身である。ほかに61～63の鉄鏃茎部があるが、茎関部が残るものの鏃身の形状は不明である。



第129図　A16号墳出土遺物実測図1



第130図　A16号墳出土遺物実測図2

⑰　高根山A17号墳

調査前の状況

A16号墳の東隣に位置している。A17号墳は東側小支群に属し、標高106mの等高線付近に築造されていた。A17号墳は等高線がわずかに南側にせり出している箇所に造られている。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりや大きな撹乱穴によって、古墳として認識されていた。

墳丘・周溝

A17号墳は等高線に沿って並列するA16号墳とともに、明瞭な墳丘をもち東側グループの中では有力な古墳とみられていた。墳丘の盛土（暗褐色系粘質土で構成）は、墳丘中央部東西断面に旧表土から上に110㎝が残っていた。墳丘の築造過程は、旧表土上に整地のために25cmほど盛土をし、さらに墓壙端部から半径1.6～2.0mの範囲に高さ100～40cmほどの第１次墳丘を盛土している。そののち第二次の墳丘を盛土し、完成している。

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅1.28m、深さ0.15m、西側が幅1.5m、深さ0.36m、南側が幅1.2m、深さ0.4m、東側が幅1.26m、深さ0.27mを測る。墳丘は東西14.8m、南北14.68mを測る。墳丘南側で標高105.38m、墳丘北側で標高106.84mを測り、現状での古墳の高さは1.46mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部はほぼ南に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほとんどが完全に抜き取られていたが、わずかに玄室西側壁に１箇所が残っていた。この基底石には沈下防止と据え付け面を安定させるために下に根石を敷き据えていた。床面の礫床については一部が南北0.7m、幅0.5mの範囲に残っていた。礫床の礫は7cm前後の小礫である。一部の基底石は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高106.2m、下端で105.5mを測ることから、0.7mほどを掘り下げていた。奥壁側についても墓壙を広げ墓壙底面を掘り下げて奥壁を取り外している。墓壙の平面形は全体に撹乱を受けて明確ではないが、下端からすれば長方形を呈する。墓道は古墳の外へ続き、先端部はほぼ直線に延びて、わずかに南西へ曲がっている。閉塞石は残っていなかった。

遺物の出土状態

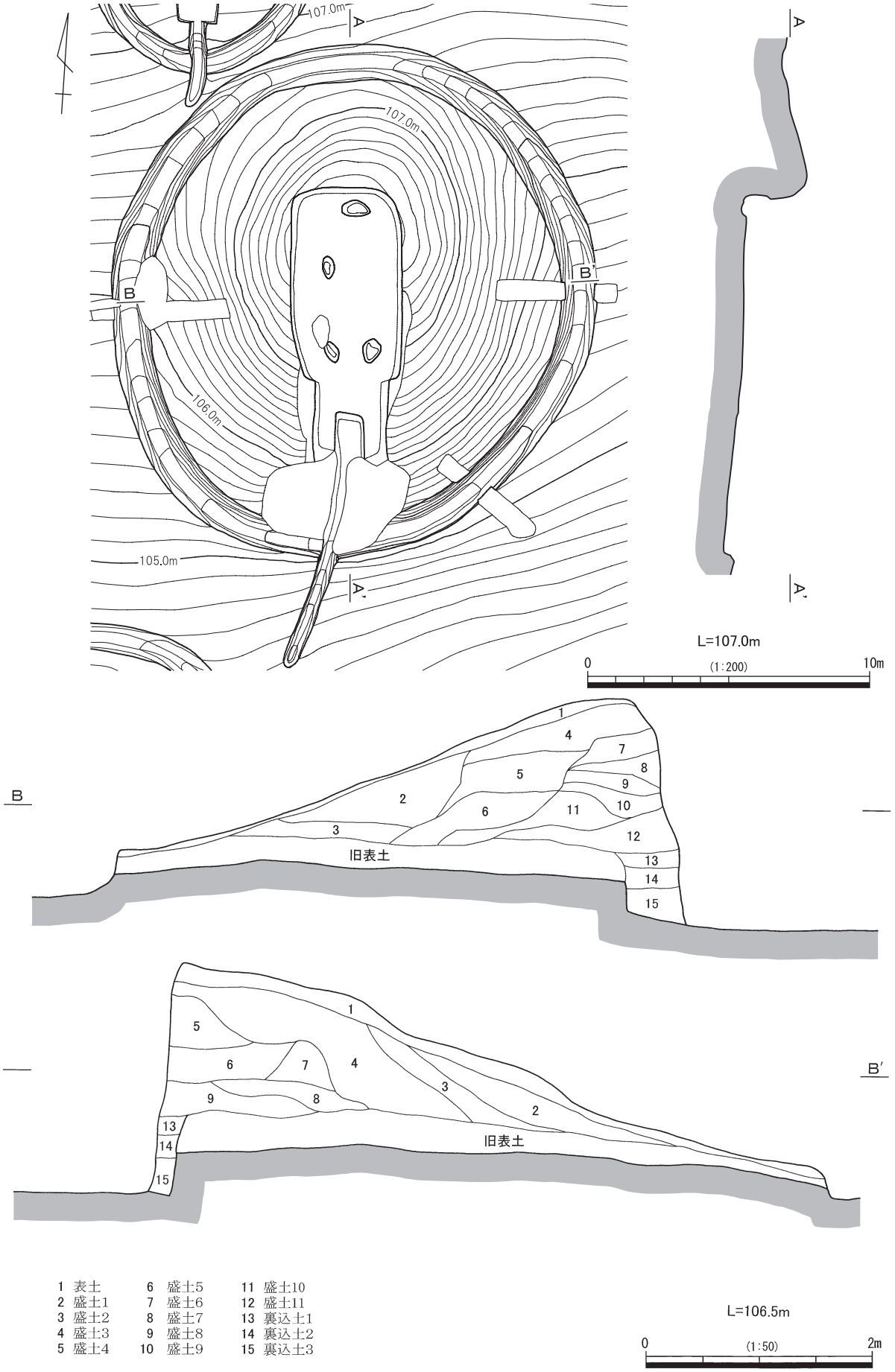
周溝の撹乱部分から大型の須恵器甕が出土した。復元したところ多くの破片が接合し、もとは周溝に置かれたと判断され、墓前祭祀に関係すると推定される。

玄室内や撹乱の及んだ部分から勾玉や切子玉、耳環など装身具と破損の著しい鉄鏃・刀子、直刀に付属する八窓の鍔が破片となって出土した。礫床もほとんど取り除かれているので、墓壙底面に移動しながらも残っていたと判断される。周溝や墓道に大きな撹乱穴があり、その排土の中からも玉類、鉄鏃、須恵器が出土した。後世の撹乱の際、副葬位置から離れ、外側にかき出されたと判断される。

出土遺物

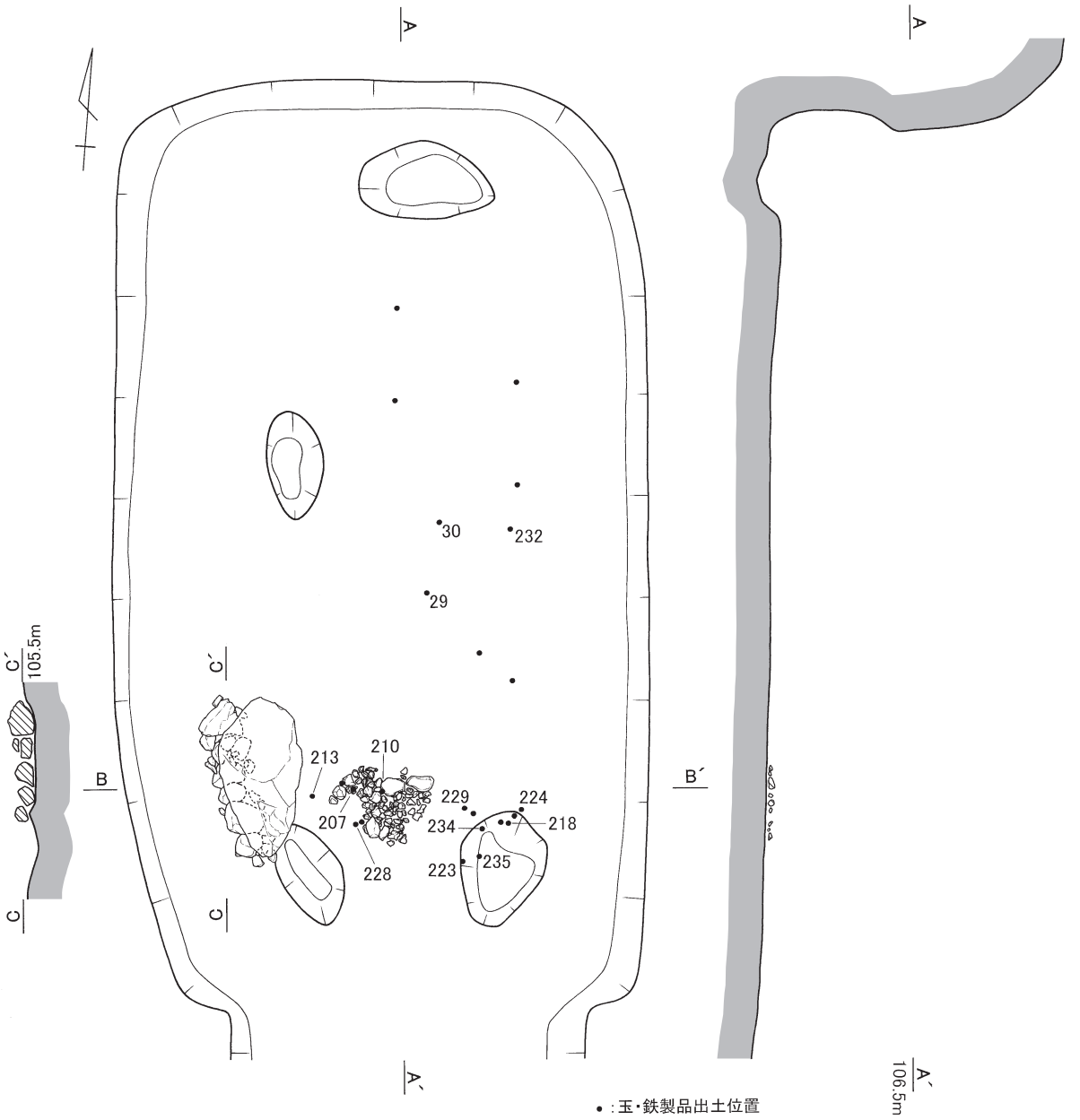
土器と玉類、耳環、鉄製品が出土した。

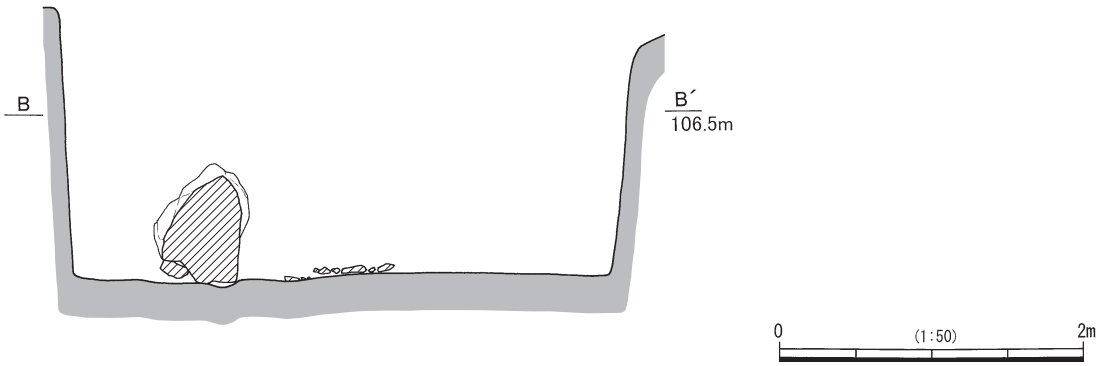
土器　いずれも須恵器で、１から７は坏身、８～13は坏蓋、14～16は高坏とその蓋、17～21は壺類とその蓋、22・23は盌、24～26は平瓶、27は甕である。坏１～３、８から12は坏Ｈ類である。坏身をみると１の坏身はⅢ期前葉でも新しいところ（MT85号窯期に併行）に相当させたい。高根山Ａ群では最も古い須恵器である。２と３のように底部未調整の坏身と８～11の坏蓋は遠江須恵器編年Ⅲ期末葉に比定できる。12は坏Ｈ類でも新しくⅣ期前半に比定できる。８・10は森町にある森山窯の製品である。４～７・13は坏Ｇ類でⅣ期後半であろう。高坏15はⅢ期前葉でも新しいところ（MT85号窯期に併行）またはⅢ期



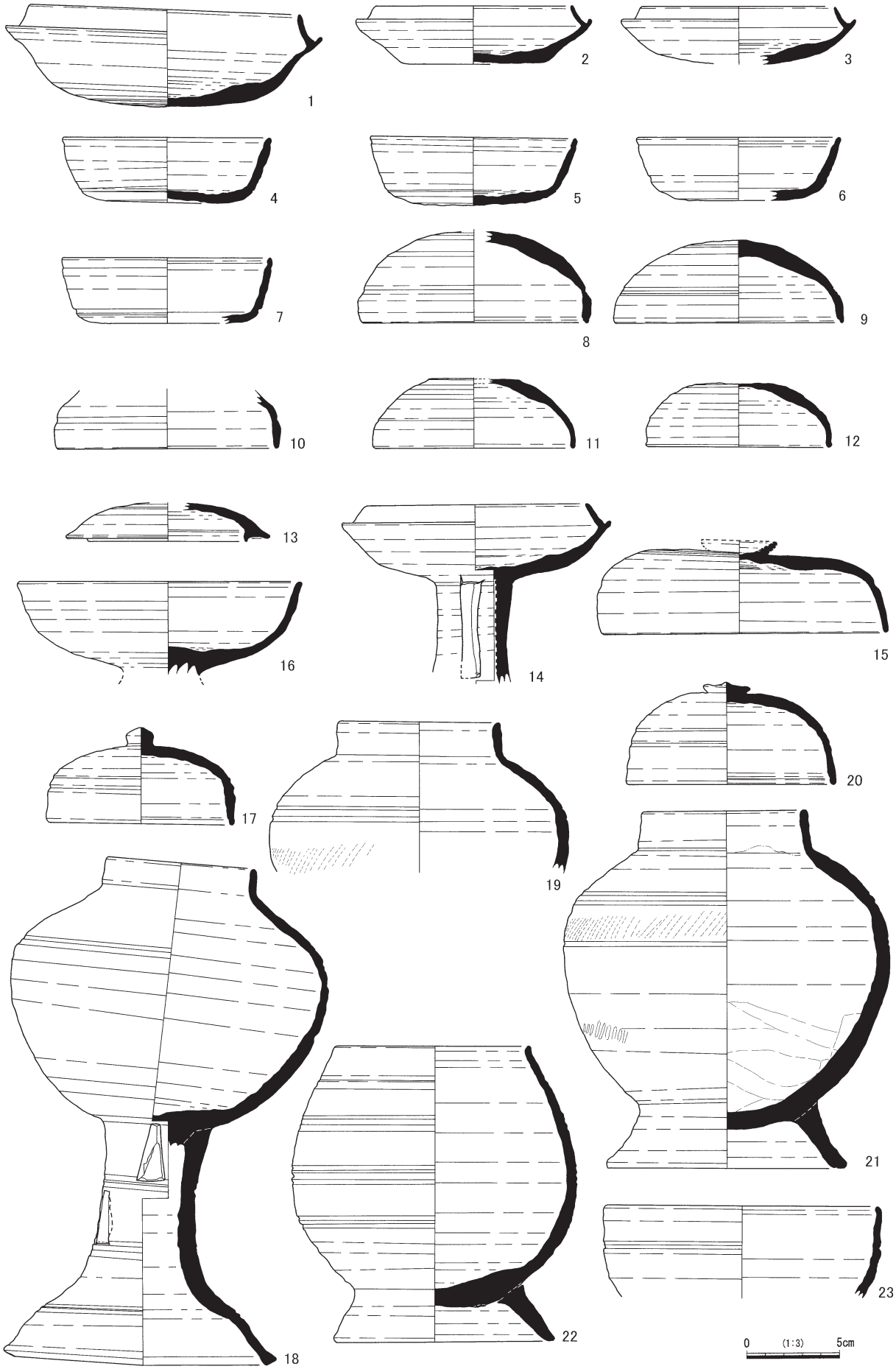
1	表土	6	盛土5	11	盛土10
2	盛土1	7	盛土6	12	盛土11
3	盛土2	8	盛土7	13	裏込土1
4	盛土3	9	盛土8	14	裏込土2
5	盛土4	10	盛土9	15	裏込土3

第131図　A17号墳墳丘図

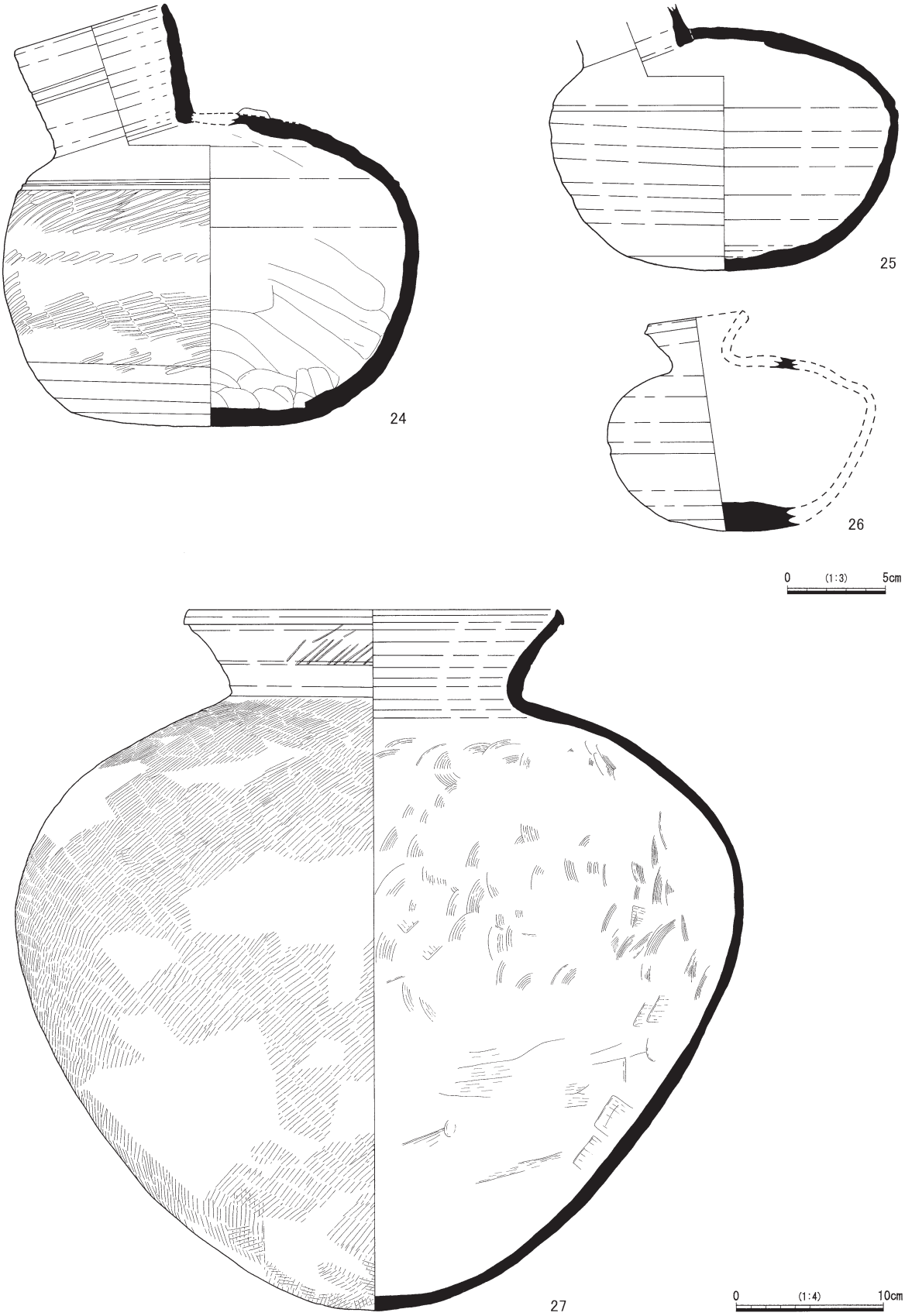




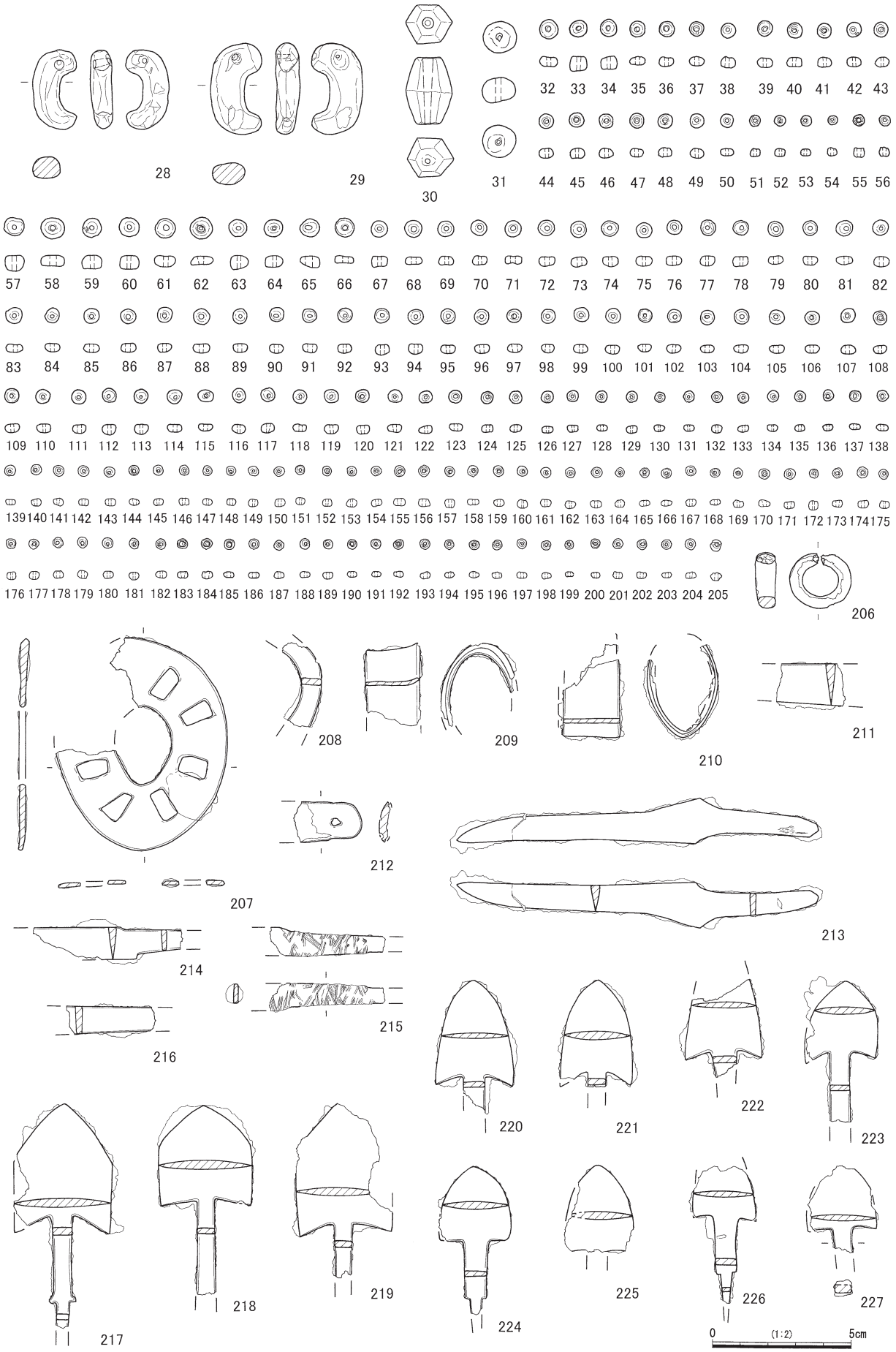
第132図　A17号墳墓壙実測図



第133図　A17号墳出土遺物実測図1



第134図　A17号墳出土遺物実測図2



第135図　A17号墳出土遺物実測図3

中葉に、14は長脚２段２方向透かしでⅢ期後葉から末葉に、16はⅣ期前半から後半に比定される。17～21の壺類とその蓋、22・23の盌はⅢ期末葉からⅣ期前半に併行すると考えられる。19～22は森山窯の製品である。24～26の平瓶のうち24は遠江須恵器編年ではⅢ期後葉に相当させたく、26はⅢ期末葉、25はⅣ期前半から後半に比定させたい。なお26の平瓶は遠江には少なく、焼造地は今後の検討課題である。27の甕はⅢ期末葉からⅣ期の製品であろうか。

このようにみるとA17号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅲ期前葉でも新しいところ（MT85号窯期に併行）からⅣ期後半まで複数の時期にわたっていると判断され、須恵器編年からA16号墳の築造時期をⅢ期前葉（新相）に、さらにⅢ期後葉ないし末葉からⅣ期後半まで追葬が行われたと考えておきたい。

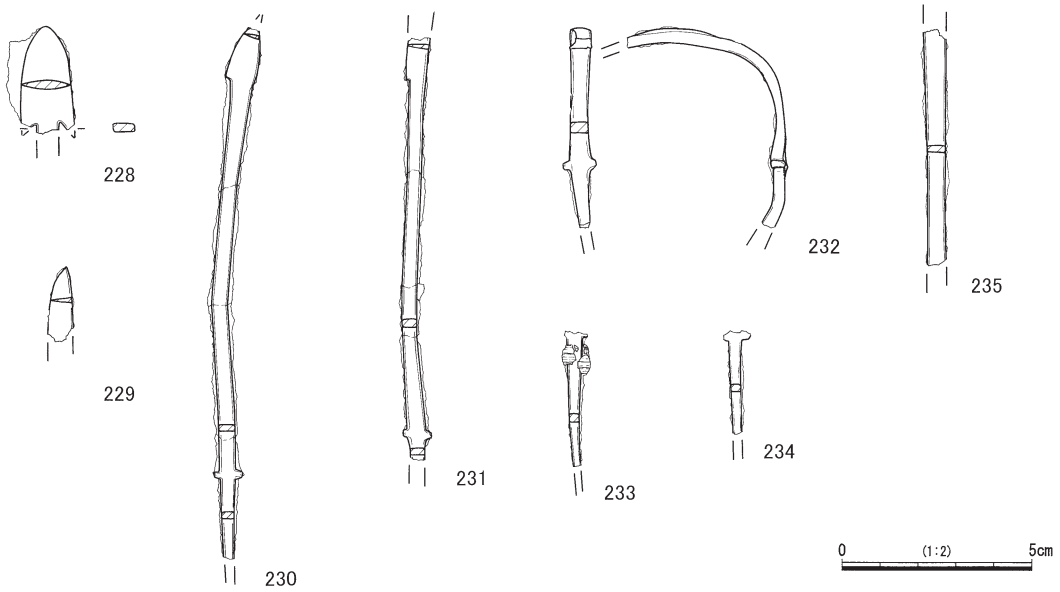
玉類　勾玉２個が出土した。石材はいずれもメノウであるが、28の赤色を呈するものと29の薄茶色を呈するものがある。２個とも片側から穴を穿孔している。水晶製の長さ2.44cmを測る30の切子玉１個、31の土製丸玉１個が出土した。ほかに出土したガラス玉32～205はすべて紺色を呈し、174個を数える。直径5mmから3mmが多い。

耳環　206の耳環は銅地で銀張りである。鍍金はほとんど剥離しているが、一部に残っていた。開口部の箔を観察すると箔を折り曲げた痕が認められる。

鉄製品　207は八窓の直刀の鍔である。209と210は直刀の鎹（ハバキ）である。このことからA17号墳には副葬品には直刀２振があったことが判明する。刀身は撹乱時に廃棄されたのか、周辺からも認められなかった。211は刃幅からすれば小直刀であろうか。

刀子212～216のうち、212は刀子の茎部で、有孔部は目釘穴であろう。213は両関の刀子で茎尻から刃部先端まで残っている。刃部は研ぎ減りが顕著で、関は斜めに深く切れ込む。茎部は茎部尻幅をわずかに狭め、栗尻を呈する。214は両関の刀子である。関は浅く切れ込む。茎部は茎部尻幅をわずかに狭め、栗尻を呈する。刃部先端は残っていない。215は茎部に木の皮を巻いている。

217～227は平根式鉄鏃で、鏃身の形態から三角形式と五角形式に分かれる。三角式鉄鏃は鏃身の大きさから大小に分かれ、小は茎部長が短い。五角形式についても鏃身の大きさから大小に分かれる。228～232は尖根式鉄鏃で、鏃身の形態から長三角形式（228）、片刃式（229～231）、他は断面の形状から鑿箭式の可能性がある。233～234は鉄鏃茎部である。235は頸部である。



第136図　A17号墳出土遺物実測図4

⒅　高根山A18号墳

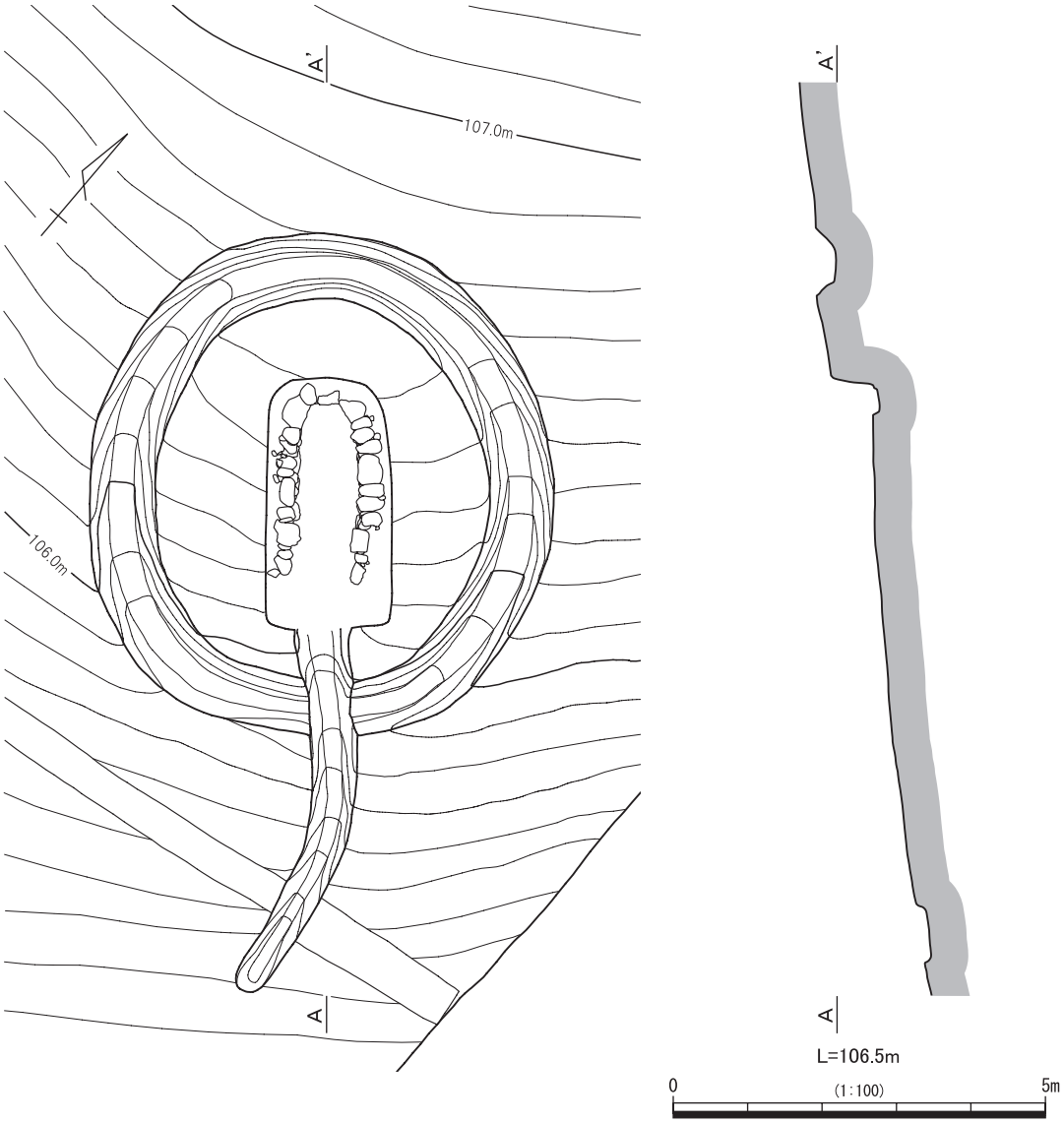
調査前の状況

A17号墳の東側4.5mに位置している。A18号墳は調査区東側の標高106.5mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

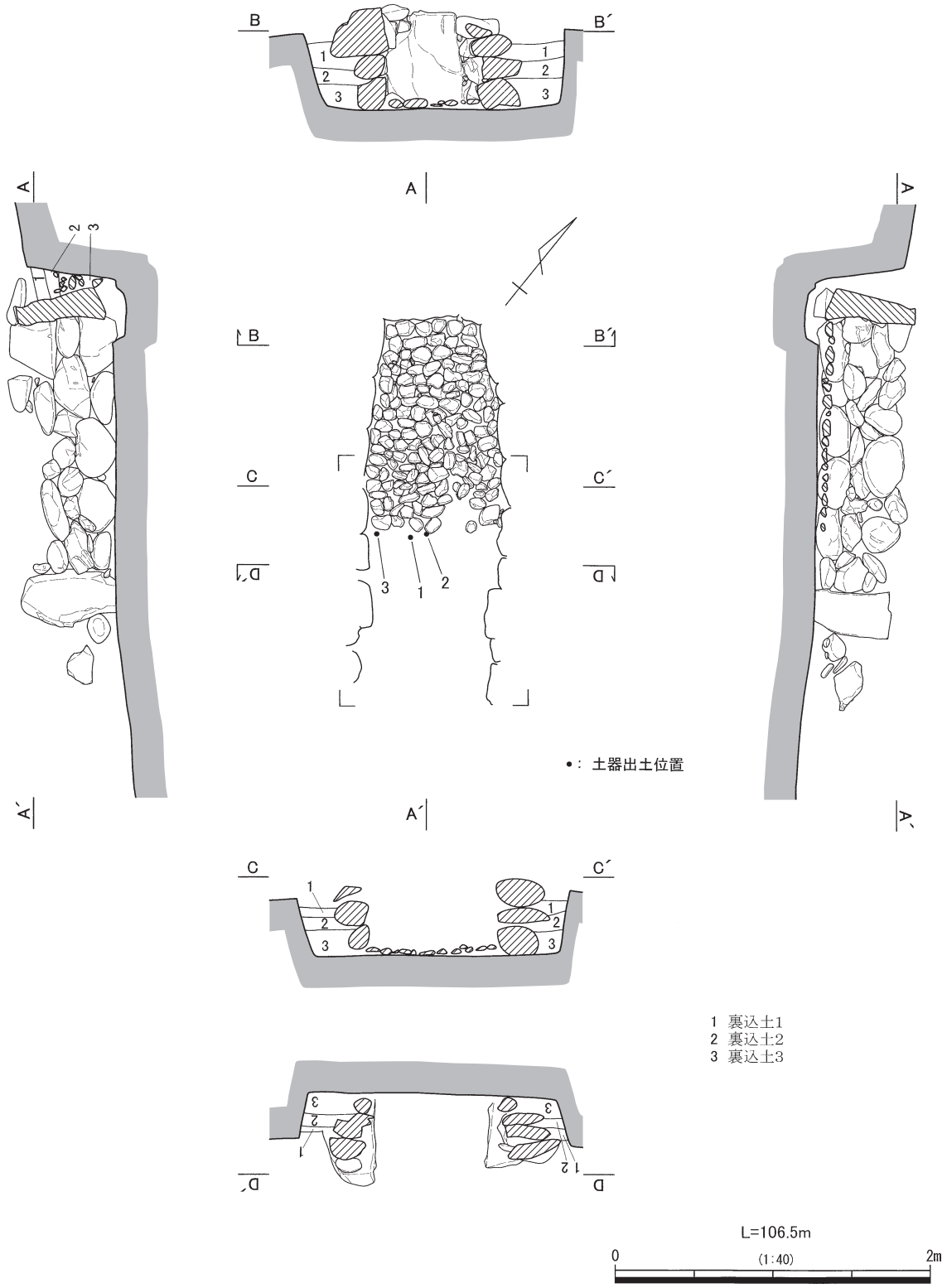
墳丘・周溝

A18号墳は、東側小支群では東北端に位置し、等高線が大きく北に向かって屈曲する箇所に築かれている。その点では南に下ったA30号墳に近い立地である。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認されなかった。A30号墳とともに、墓道の方向が大きく南東の谷に向かう点から、両者が密接に関連すると考えられる。

古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに西北に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅0.88m、深さ0.31m、西側が幅0.88m、深さ0.28m、南側が幅0.86m、深さ0.3m、東側が幅0.94m、深さ0.25mを測る。墳丘は東西4.4m、南北5.06mを測る。墳丘南側で、標高105.99m、墳丘北側で標高106.71mを測り、現状での古墳の高さは0.72mである。



第137図　A18号墳墳丘図



第138図　A18号墳横穴式石室実測図

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南東に向け立柱石をもつ単室系擬似両袖式石室で、閉塞石も残り保存状態は良好であった。

天井石　検出の際、玄室に落下した状態の天井石が認められた。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、１枚の鏡石を設置している。玄門の立柱石を据えるための穴を掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近で幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を据え玄門部を設置した後、奥壁から基底石を置き、同時に玄門から石室奥へも据える手順をとっているので、この段階で石室の平面形態はほぼできあがったものと考えられる。床面の礫床は玄室下部から玄門部近くでは敷かれていなかった。

羨道　玄門部へ直線的につながる形態で、玄門とほぼ等しい幅である。閉塞石のある箇所で、墓道に近い部分には側壁は認められなかった。残っていた閉塞石は、追葬の際、取り外されたのか上段までは認められない。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高106.545m、下端で105.975mを測ることから、0.57mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部、玄門石を据える穴を掘っていた。墓道は先端部が大きく南西へ曲げられている。

遺物の出土状態

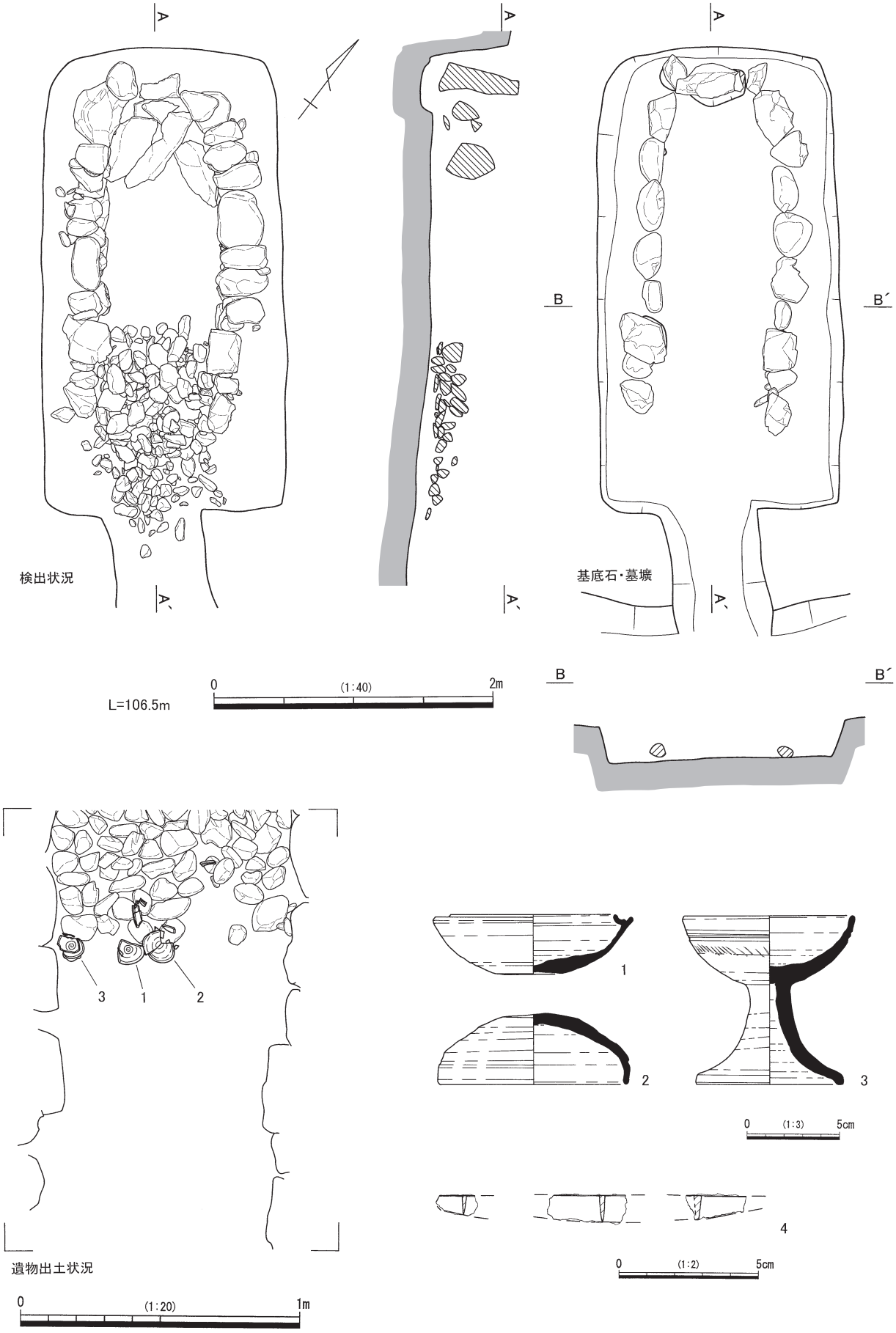
玄門と玄室の境界で小型高坏、坏身、坏蓋各１点が出土した。高坏は室外出土の破片と接合したことから、追葬の際に片付けられ、この位置に破片となった口縁部をまとめ、さらに脚裾部を上にして置いたと判断される。同時にこの高坏の接地面が、床面より下位の墓壙底面に密着していたことから、高坏が置かれた後、この部分の敷石は敷き直されたと判断された。ほかに石室撹乱土から刀子、鉄鏃片が出土した。

出土遺物

土器と鉄製品が出土した。

土器　いずれも須恵器で、１は坏身、２は坏蓋、３は高坏である。両者は坏Ｈ類でも新しく遠江須恵器編年Ⅳ期前半に比定できる。３の高坏はⅢ期末葉ないしⅣ期前半であろう。出土状態では坏類より高坏が古い時期であり、築造時期を示すと考えられる。それより新しい坏類は出土状態からも追葬時期を示すと考えられ、須恵器編年の新旧関係と一致する。この古墳の周辺からⅤ期前葉の坏蓋と身の破片が採集されているが、A18号墳との関係は不明である。

鉄製品　４は刀子片である。ほかに鉄鏃茎部細片が出土した。



第139図　A18号墳実測図・出土遺物実測図

⑲　高根山A19号墳

調査前の状況

A14号墳の西北に位置し近接している。A19号墳は調査区中央の標高107.2mの等高線付近に築造されていたが、調査前には雑木林に覆われていたものの、大きな撹乱穴があって古墳の存在が想定された。古墳の４分の１が調査区外である。

墳丘・周溝

A19号墳は、東側小支群では北西端に位置し、等高線が並行して走る箇所に築かれている。その点では東側にある15・25号墳に近い立地である。墳丘の盛土は斜面に築造されたためか、ほとんど確認されなかった。

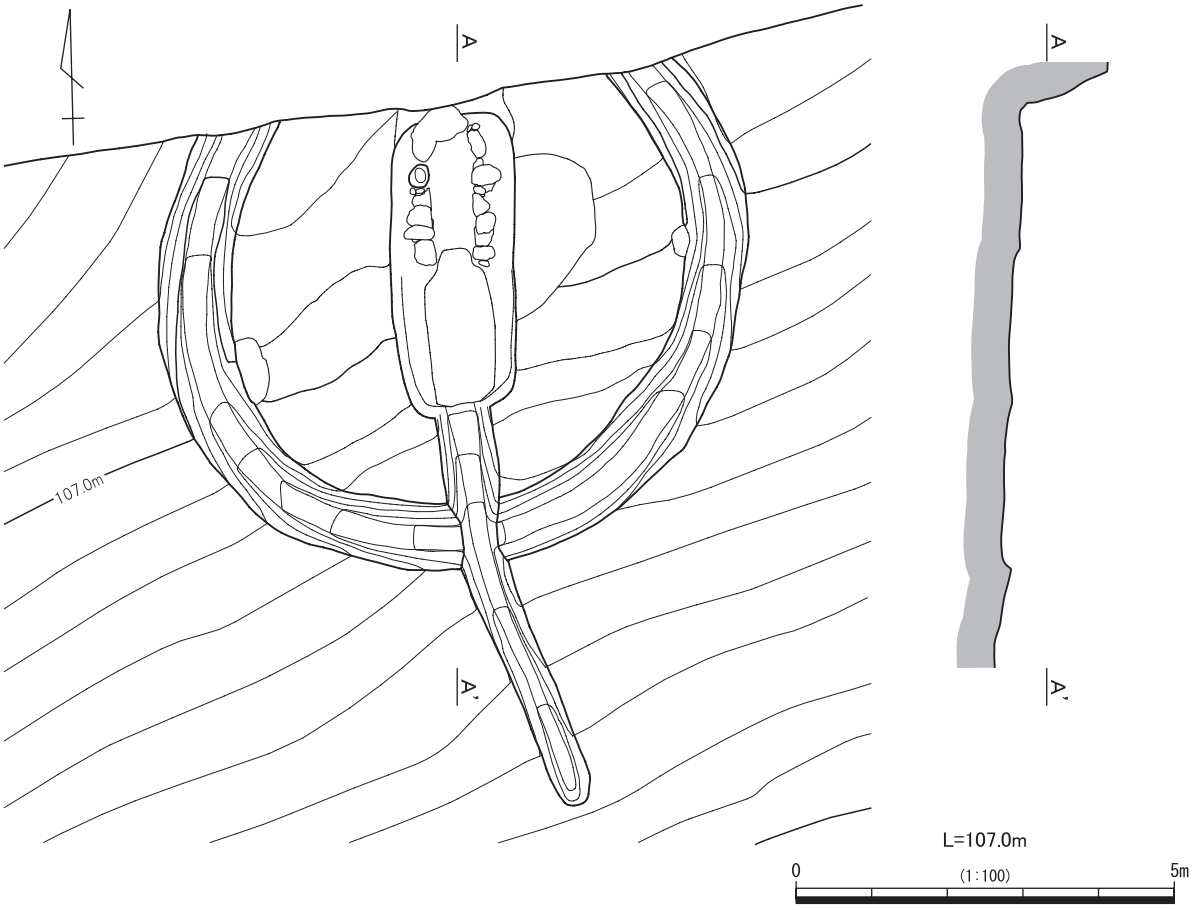
古墳を区画する周溝の規模は、西側が幅0.94m、深さ0.25m、南側が幅0.9m、深さ0.33m、東側が幅0.78m、深さ0.2mを測る。墳丘は東西6.1m、南北推定値6.5mを測る。墳丘南側で、標高106.66m、墳丘北側で標高107.14mを測り、現状での古墳の高さは0.44mである。

埋葬施設

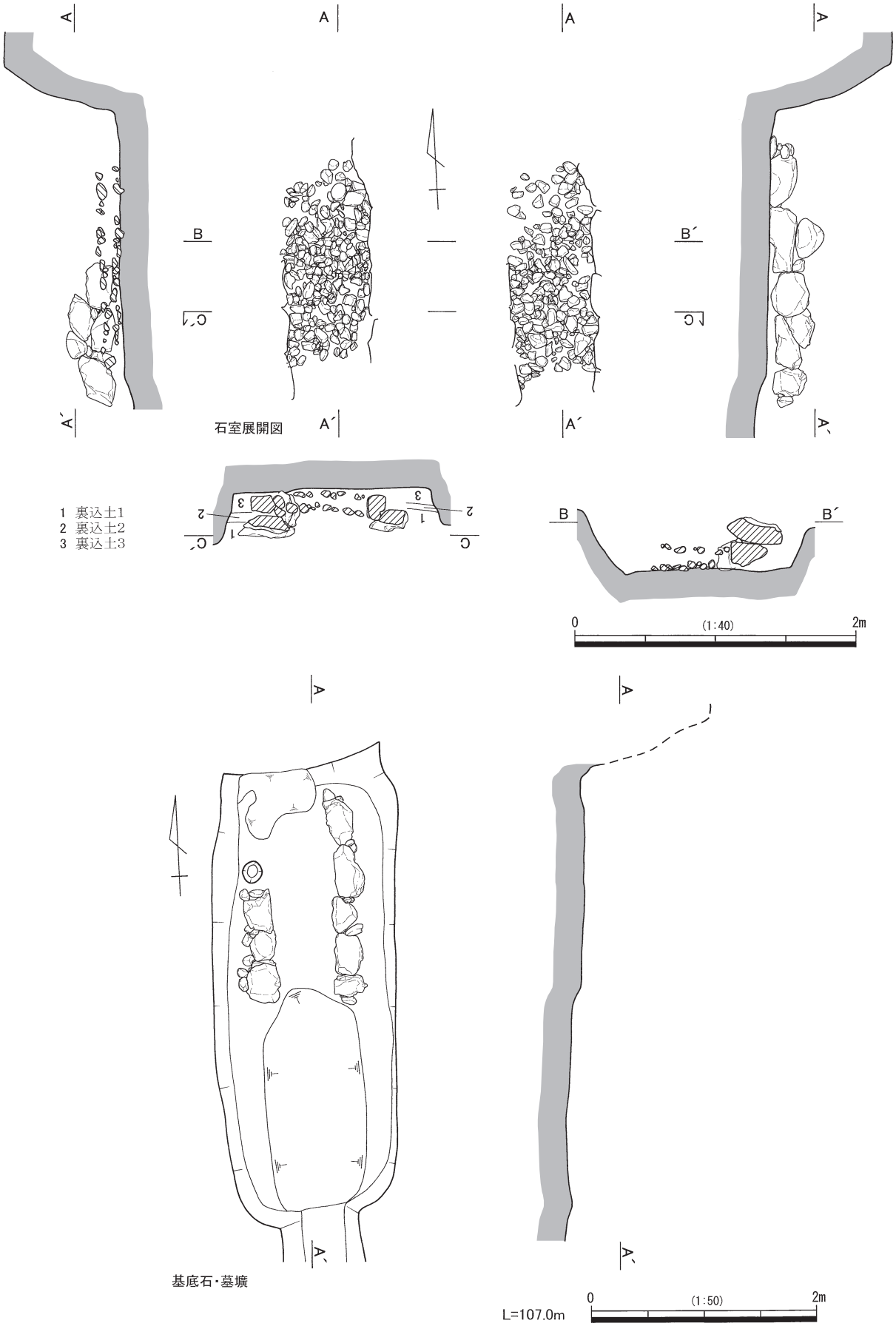
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南に向けているが、半分が消失しているため平面形は明確ではない。

天井石　検出の際、撹乱穴より落下した天井石が認められた。

玄室　奥壁は側壁の一部とともに抜き取られていた。玄室の平面形は、東側壁から奥壁の直近で幅を狭めた奥窄り形であることがわかる。根石の配列と積み方をみると、奥壁から基底石を置き、小口積みのところで最終調整する手順をとっていたと考えられる。床面の礫床は残存部ではすべて二重に敷かれていた。追葬の際、上に新しい床面をつくったと考えられる。



第140図　A19号墳墳丘図



第141図　A19号墳横穴式石室実測図

羨道　玄門部や閉塞石は残っていなかった。羨道の有無は不明である。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端が破壊を受けているので周りの数値に基づく推定標高で107.14mとなるが、下端で106.73mを測ることから、おおよそ0.4mほどを掘り下げていたと推定される。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓壙底面には側壁基底石のうち一個を据える穴を掘っていた。墓道は先端部が南東へ曲げられている。

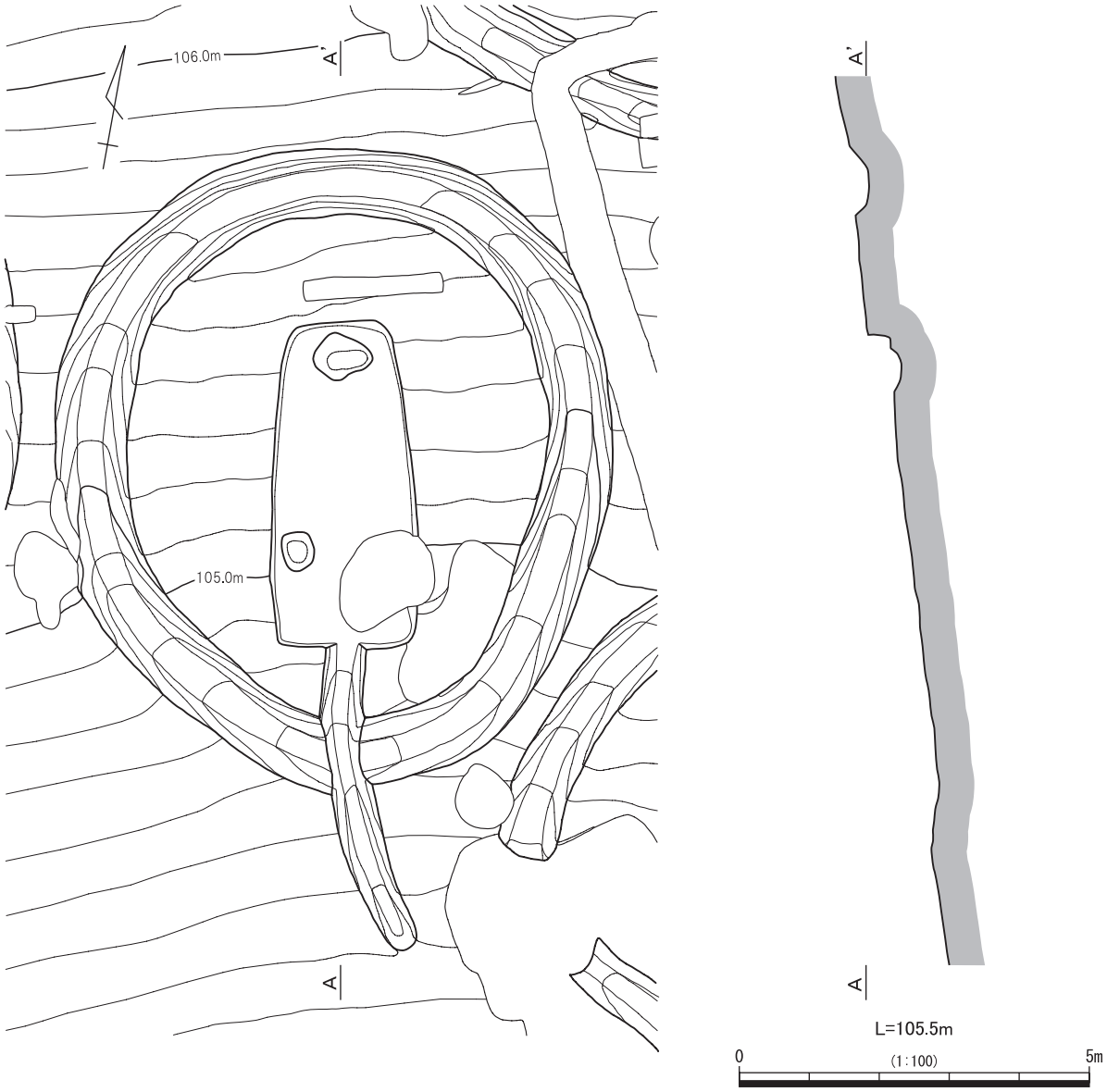
出土遺物

出土遺物は認められなかった。残された床面は撹乱を受けていないので、この部分には副葬品は置かれなかったと推定される。

⑳　高根山A20号墳

調査前の状況

A13号墳の南東隣に位置している。A20号墳は東側小支群に属し、標高105.6mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認められず、古墳の存在を想定できなかった。



第142図　A20号墳墳丘図

墳丘・周溝

A20号墳は、A12・A13・A20・A21号墳が等高線に沿って並列する、中位グループの西から３番目に位置する。墳丘の盛土は古墳が斜面に築造されたことと、撹乱と後世の耕作によって、ほとんど確認されなかった。

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅0.92m、深さ0.33m、西側が幅0.96m、深さ0.21m、南側が幅0.9m、深さ0.18m、東側が幅1.06m、深さ0.23mを測る。墳丘は東西6.0m、南北7.2mを測る。墳丘南側で標高104.7m、墳丘北側で標高105.68mを測り、現状での古墳の高さは0.98mである。

埋葬施設

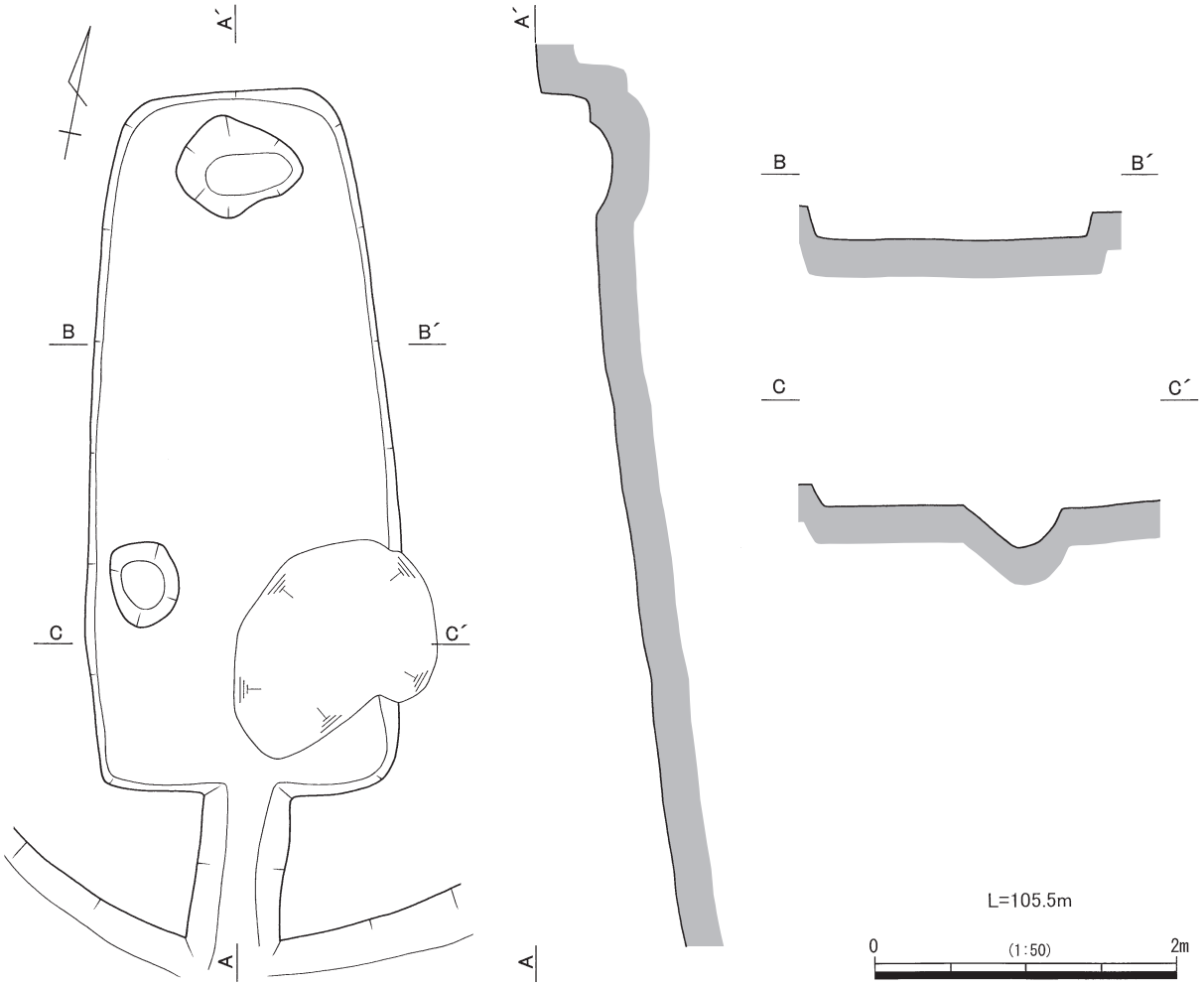
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は南東に向かっている。古墳の石室に使用された石材は、後世の抜き取りによって、礫床や基底石まで残っていなかった。一部、石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で105.465m、下端で105.155mを測ることから、0.31mほどを掘り下げていた。墓壙の平面形は長方形を呈している。墓道は古墳の外へ続き、先端部はわずかに南東へ曲がっている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。



第143図　A20号墳墓壙実測図

㉑　高根山A21号墳

調査前の状況

A22号墳の東北に位置している。A21号墳は東側小支群に属し、標高105.4mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認められず、古墳の存在を想定できなかった。

墳丘・周溝

A21号墳は、A12・A13・A20・A21号墳が等高線に沿って並列するグループの東端に位置する。墳丘の盛土は古墳が斜面に築造されたことと、撹乱によって、ほとんど確認されなかった。

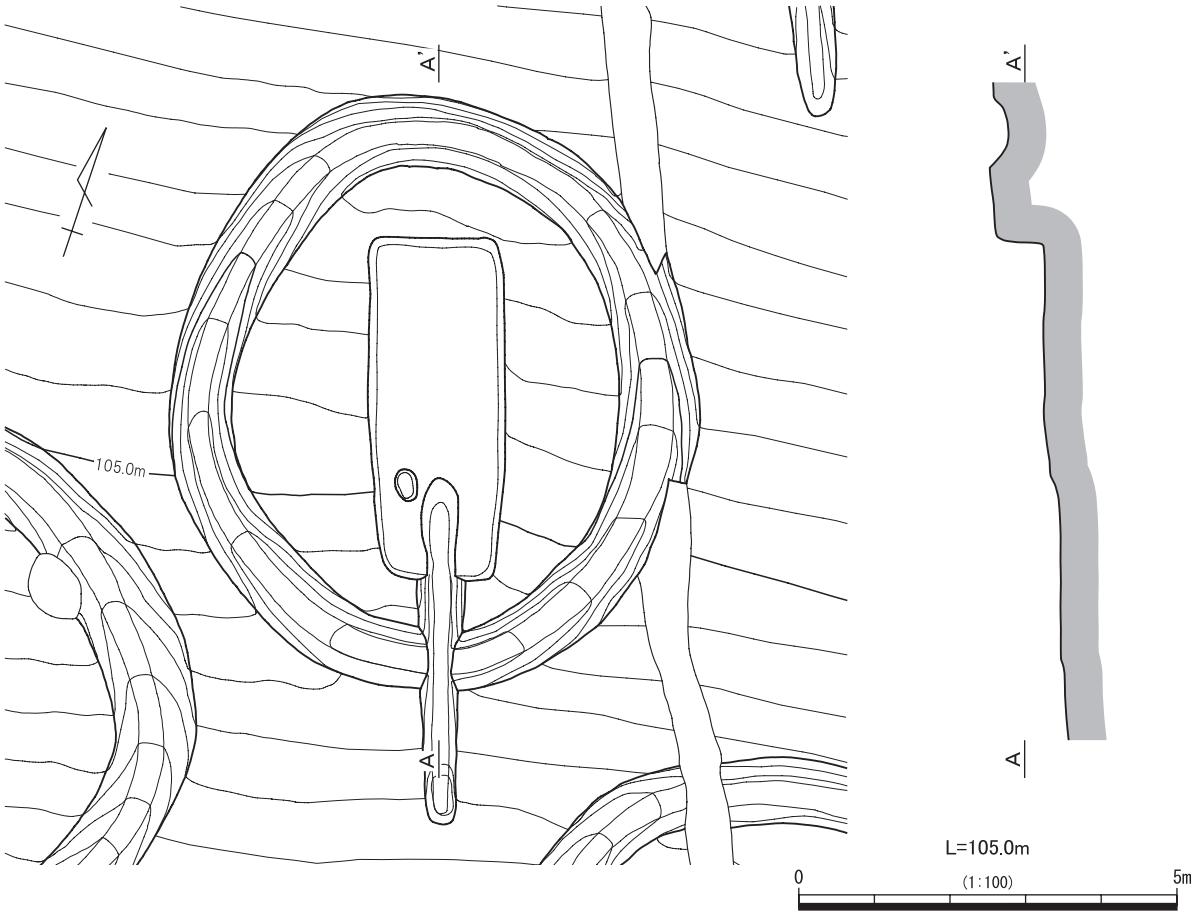
古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅0.9m、深さ0.35m、西側が幅0.9m、深さ0.25m、南側が幅0.8m、深さ0.24m、東側が幅0.92m、深さ0.29mを測る。墳丘は東西5.1m、南北6.2mを測る。墳丘南側で標高104.87m、墳丘北側で標高105.45mを測り、現状での古墳の高さは0.58mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は南東を向いている。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。一部、石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で105.385m、下端で104.765mを測ることから、0.62mほどを掘り下げていた。墓壙の平面形は長方形を呈している。墓道は古墳の外へ続く。墓壙と墓道の境界は撹乱を受けている。

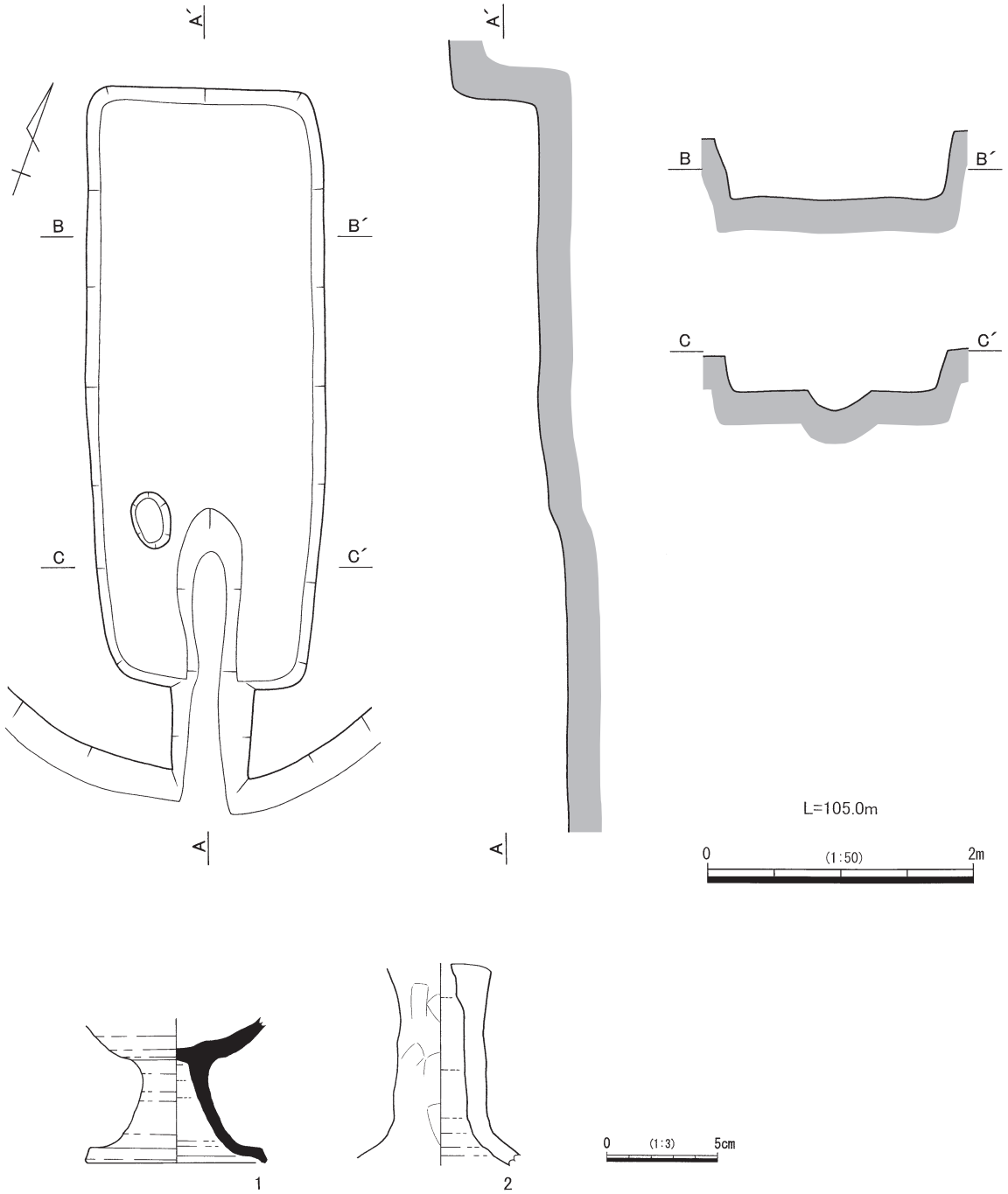


第144図　A21号墳墳丘図

遺物の出土状態

撹乱穴から須恵器・土師器片が出土した。後世の撹乱の際、外側にかき出された一部と判断される。

土器　須恵器と土師器が出土した。1は須恵器の高坏である。遠江須恵器編年Ⅲ期末葉ないしⅣ期前半に比定できる。2は土師器の長脚高坏の脚部で、破片のためと類例に乏しく明確な時期は不明である。A21号墳は出土遺物が少なく、明確な築造時期を知る判断材料に乏しいが、残された遺物から遠江須恵器編年Ⅲ期末葉ないしⅣ期前半と考えておきたい。



第145図　A21号墳墓壙・出土遺物実測図

㉒　高根山A22号墳

調査前の状況

A20号墳の南東に位置している。A22号墳は東側小支群に属し、標高104.8mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認められず、古墳の存在を想定できなかった。

墳丘・周溝

A22号墳はA23号墳と同様に、等高線に沿った緩斜面に築造されていた。墳丘の盛土は撹乱と後世の耕作によって、ほとんど確認されなかった。

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅0.8m、深さ0.17m、西側が幅0.8m、深さ0.11m、南側が幅0.96m、深さ0.19m、東側が幅1.2m、深さ0.27mを測る。墳丘は東西5.5m、南北6.2mを測る。墳丘南側で標高104.11m、墳丘北側で標高104.95mを測り、現状での古墳の高さは0.84mである。

埋葬施設

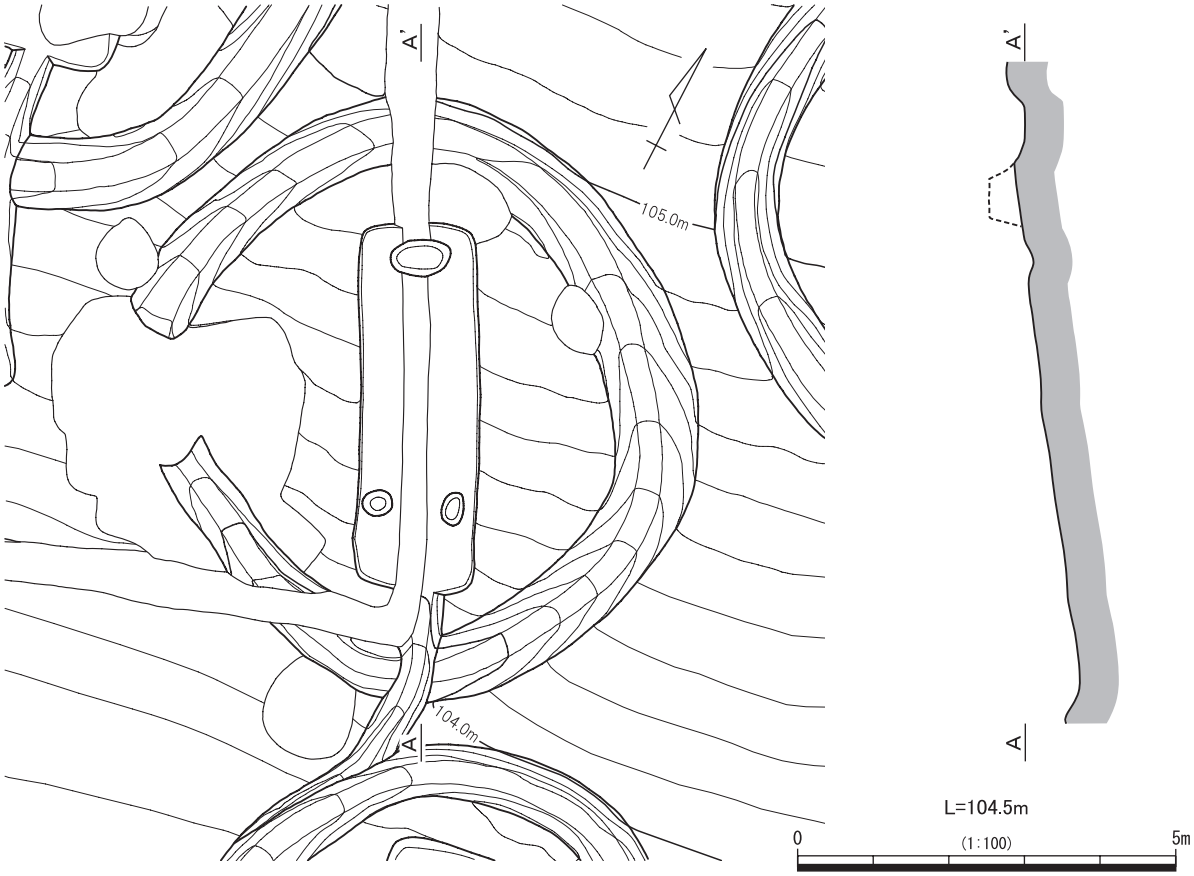
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は南西に曲がり、その部分には主軸にそって畑の地境溝が中心を貫くように掘られていた。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。一部、石材は抜き取り穴を掘って抜き取っている。石室の平面形は、抜き取り穴の配列からでは明確にできなかった。

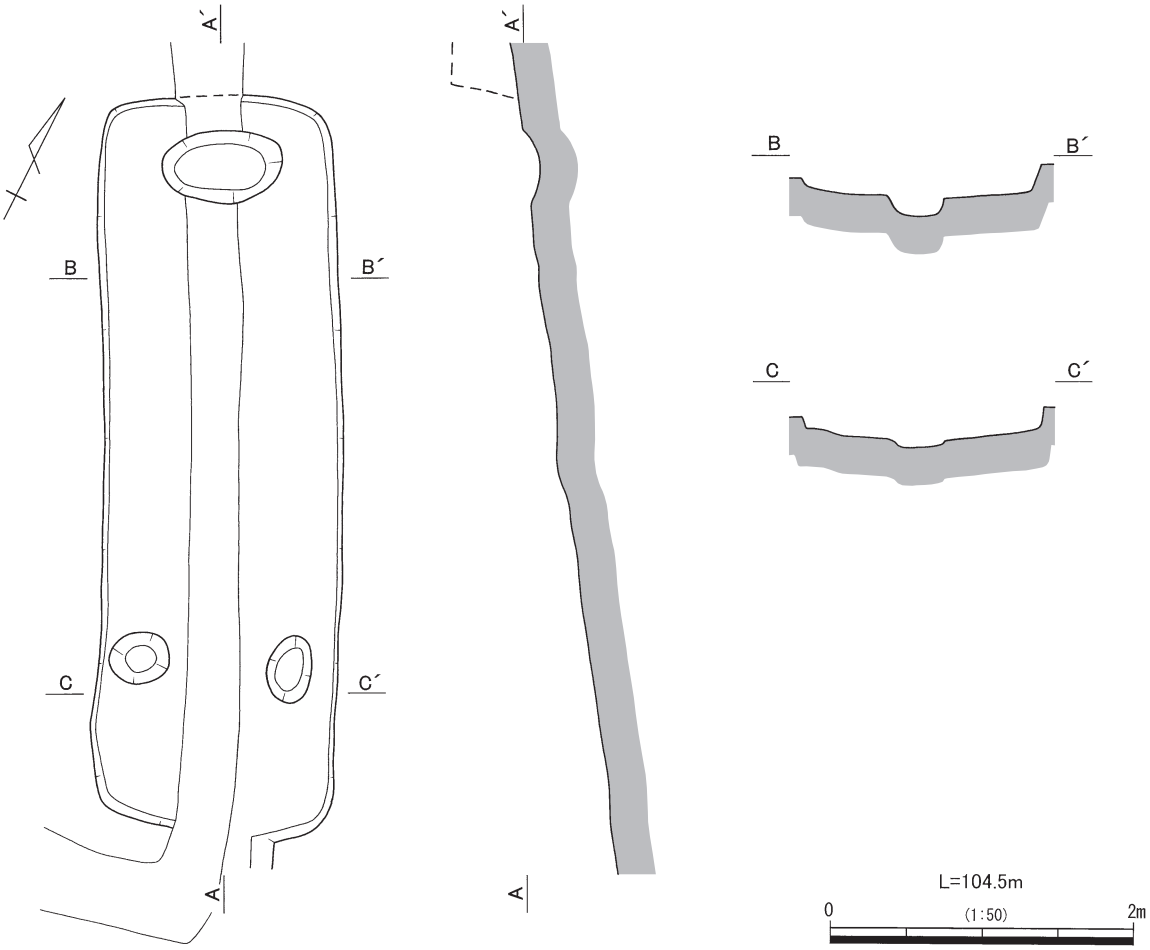
墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で104.84m、下端で104.5mを測ることから、0.34mほどを掘り下げていることになるが、墳丘全体が削平され、墓壙底面が撹乱によって下げられているため正確ではない。墓壙の平面形は長方形を呈している。墓道は南西に曲がり、A24号墳の周溝によって切られ消えている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。





第146図　A22号墳墳丘図・墓壙実測図

㉓　高根山A23号墳

調査前の状況

A22号墳の東に位置している。A23号墳は東側小支群に属し、標高104.5mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認めらなかったが、大きな撹乱穴が開いていたため古墳の存在を想定できた。

墳丘・周溝

A23号墳は、A22号墳と等高線に沿って並列する。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土は撹乱と後世の耕作によって、ほとんど確認されなかった。

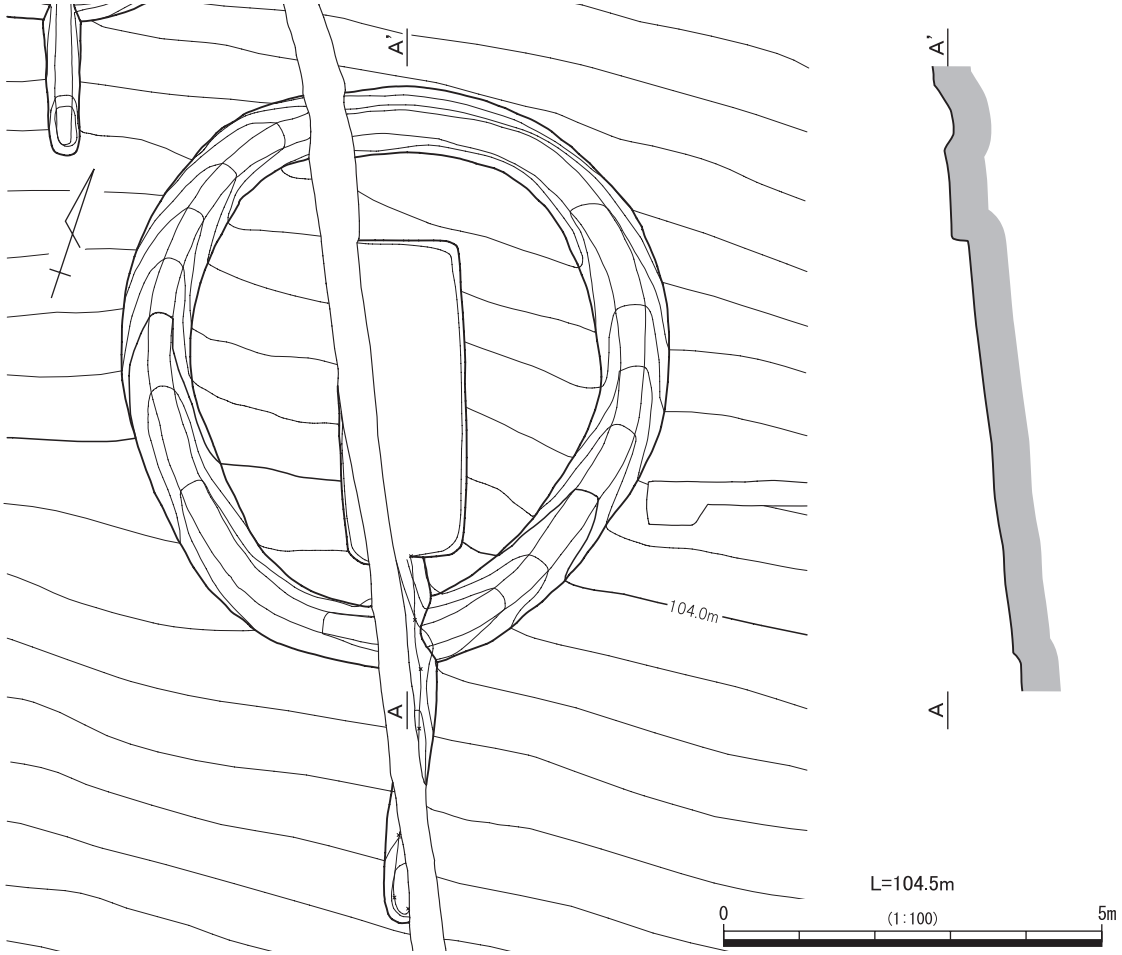
古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅0.9m、深さ0.25m、西側が幅0.9m、深さ0.26m、南側が幅0.8m、深さ0.24m、東側が幅0.98m、深さ0.29mを測る。墳丘は東西5.1m、南北6.1mを測る。墳丘南側で標高104.87m、墳丘北側で標高105.49mを測り、現状での古墳の高さは0.87mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は主軸に直行している。主軸にそって中心を貫くように畑の地境溝が掘られていた。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で104.44m、下端で104.23mを測ることから、0.21mほどを掘り下げていることにな



第147図　A23号墳墳丘図

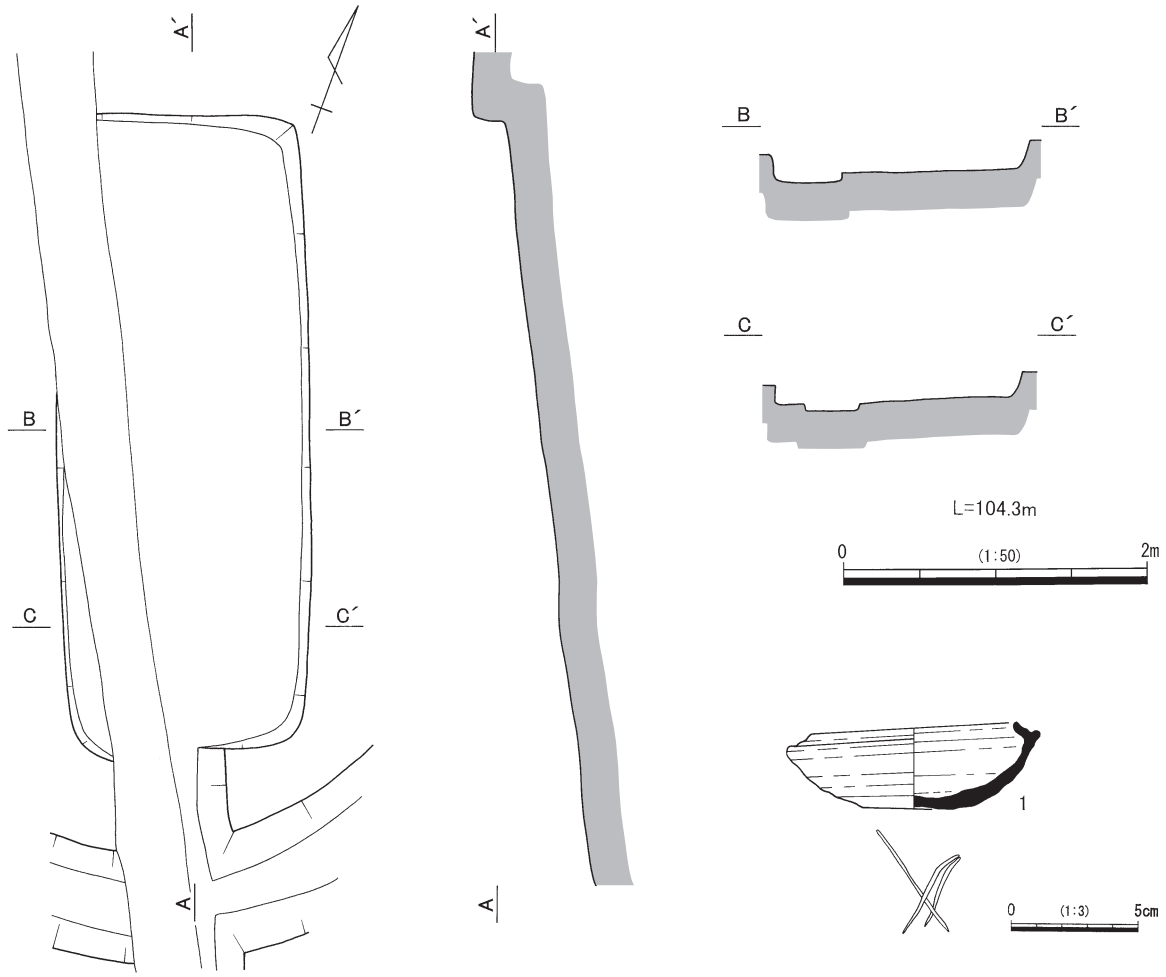
るが、古墳全体が削平を受けたため低くなったのであろう。墓壙の平面形は長方形を呈している。墓道は墓壙から直行して延びている。

遺物の出土状態

確認調査で墓道から坏身１点が検出された。

出土遺物

土器　１は須恵器の坏身、底部外周のみヘラケズリ調整を施し、ヘラ記号がある。この坏身は坏Ｈ類でも新しく遠江須恵器編年Ⅳ期前半に比定できる。築造時期か追葬時期に伴う遺物であろうが、どちらに伴うかは明確ではない。Ａ群中、同規模の古墳がⅣ期前半に築造年代を置く例が多いことから、この坏についても築造年代を示す可能性が高い。



第148図　A23号墳墓壙・出土遺物実測図

㉔　高根山A24号墳

調査前の状況

A22号墳の南東に位置し近接する。A24号墳は東側小支群に属し、標高103.8mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認められず古墳の存在を想定できなかった。

墳丘・周溝

A24号墳は、並列するA22・A23号墳より低い等高線に沿って築造されている。墳丘の盛土は撹乱と後世の耕作によって、ほとんど確認されなかった。

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅0.7m、深さ0.23m、西側が幅0.84m、深さ0.2m、南側が幅0.8m、深さ0.22m、東側が幅0.88m、深さ0.2mを測る。墳丘は東西5.1m、南北5.4mを測る。墳丘南側で標高103.33m、墳丘北側で標高103.93mを測り、現状での古墳の高さは0.6mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は主軸に直行している。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については一部が残っていたが、奥壁に近い1m×1.1mの範囲は荒らされていないと考えられる。この礫床面から遺物は認められなかった。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で103.77m、下端で103.3mを測ることから、0.47mほどを掘り下げていることになるが、この部分は撹乱を受けているため、それより上位であろう。墓壙は古墳全体が削平を受けたため低くなったのであろう。墓壙の平面形は長方形を呈している。墓道は墓壙から直行して周溝の外側まで延びている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。

㉕　高根山A25号墳

調査前の状況

A17号墳の北西に位置している。A25号墳は東側小支群に属し、標高107.6mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認めらなかったので、古墳の存在を想定できなかった。古墳の４分の１が調査区外である。

墳丘・周溝

A25号墳の墳丘盛土は斜面に築造されたため土砂の流失が考えられ、さらに撹乱によって、ほとんど確認されなかった。

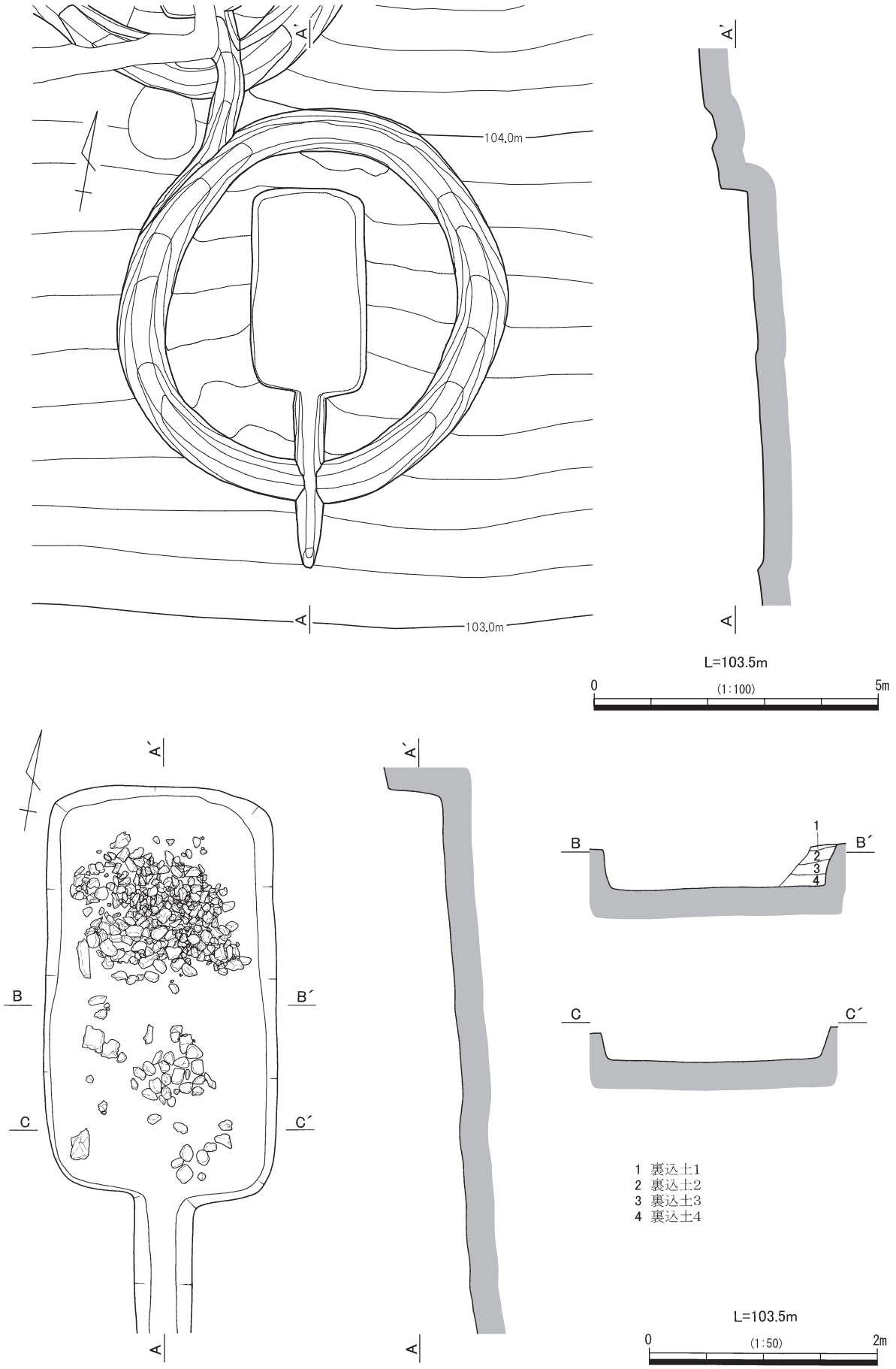
古墳を区画する周溝の規模は、西側が幅0.9m、深さ0.25m、南側が幅0.86m、深さ0.27m、東側が幅0.9m、深さ0.15mを測る。墳丘は東西6.1mを測る。墳丘南側で標高106.99m、墳丘北側で標高107.63mを測り、現状での古墳の高さは0.64mである。

埋葬施設

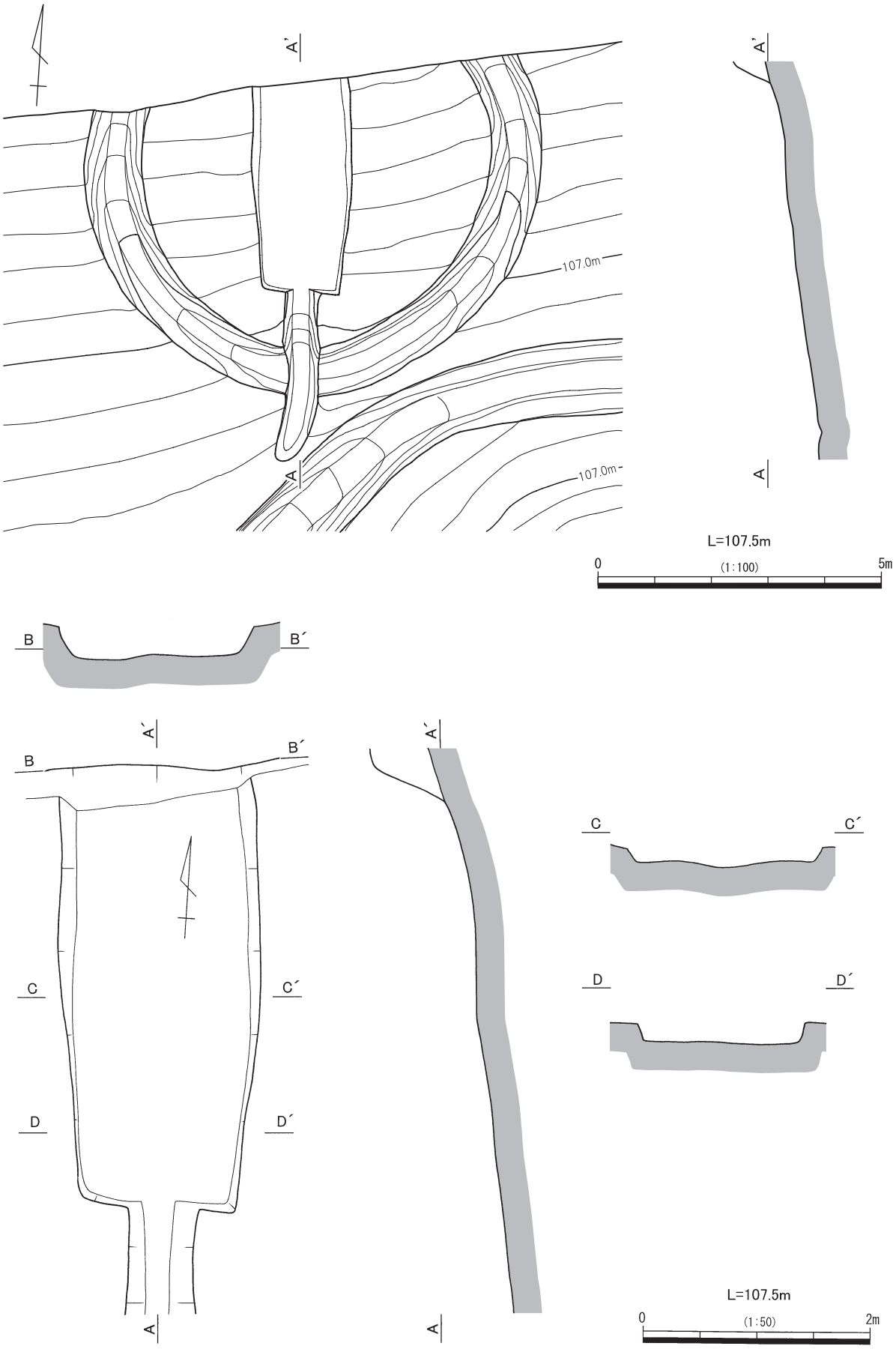
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は主軸に直行している。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。床面の礫床については残っていなかった。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は東西断面上端で107.7m、下端で107.42mを測ることから、0.28mほどを掘り下げていることになるが、古墳全体が削平を受けたため低くなったのであろう。墓壙の平面形は長方形を呈している。墓



第149図　A24号墳墳丘図・墓壙実測図



第150図　A25号墳墳丘図・墓壙実測図

道は墓壙から直行して延びA17号墳の周溝手前で、消えている。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。

㉖　高根山A26号墳

調査前の状況

A26号墳は東側小支群に属し、標高107mのA12号墳の頂部に築造されていた。調査前のA12号墳は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりは、認識できなかった。

墳丘・周溝

A26号墳は、A12号墳の石室の主軸方位をわずかに違えるものの、大略一致していることから、同じ墳丘内に意識的に石室を構築したものと考えられ、両者の間にある密接な関係を推定できた。

古墳を区画する墳丘も周溝はなく、石室を盛土で覆うだけであったと推定される。

埋葬施設

埋葬施設はA12号墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された竪穴系小石室であった。

石室　前壁幅0.5m、奥壁幅0.4mと奥壁側が狭くなる形態である。奥壁はやや大きな角礫を広口積みとし、前壁は円礫を小口積みと横積みと違いをみせている。側壁の基底石は円礫を前と奥より横積みにより積み、左右ともに小口積みの箇所で最終調整したと考えられる。その際、A12号墳の天井石も側壁の一部として使用している。両側壁の高さは、ほぼ40cm前後であった。

検出の際には架設した天井石は認められなかった。もともと天井石はなく、土で覆うだけであったのか、後世、再利用のため地表近くにあった天井石は外に運ばれたかのいずれかであろう。

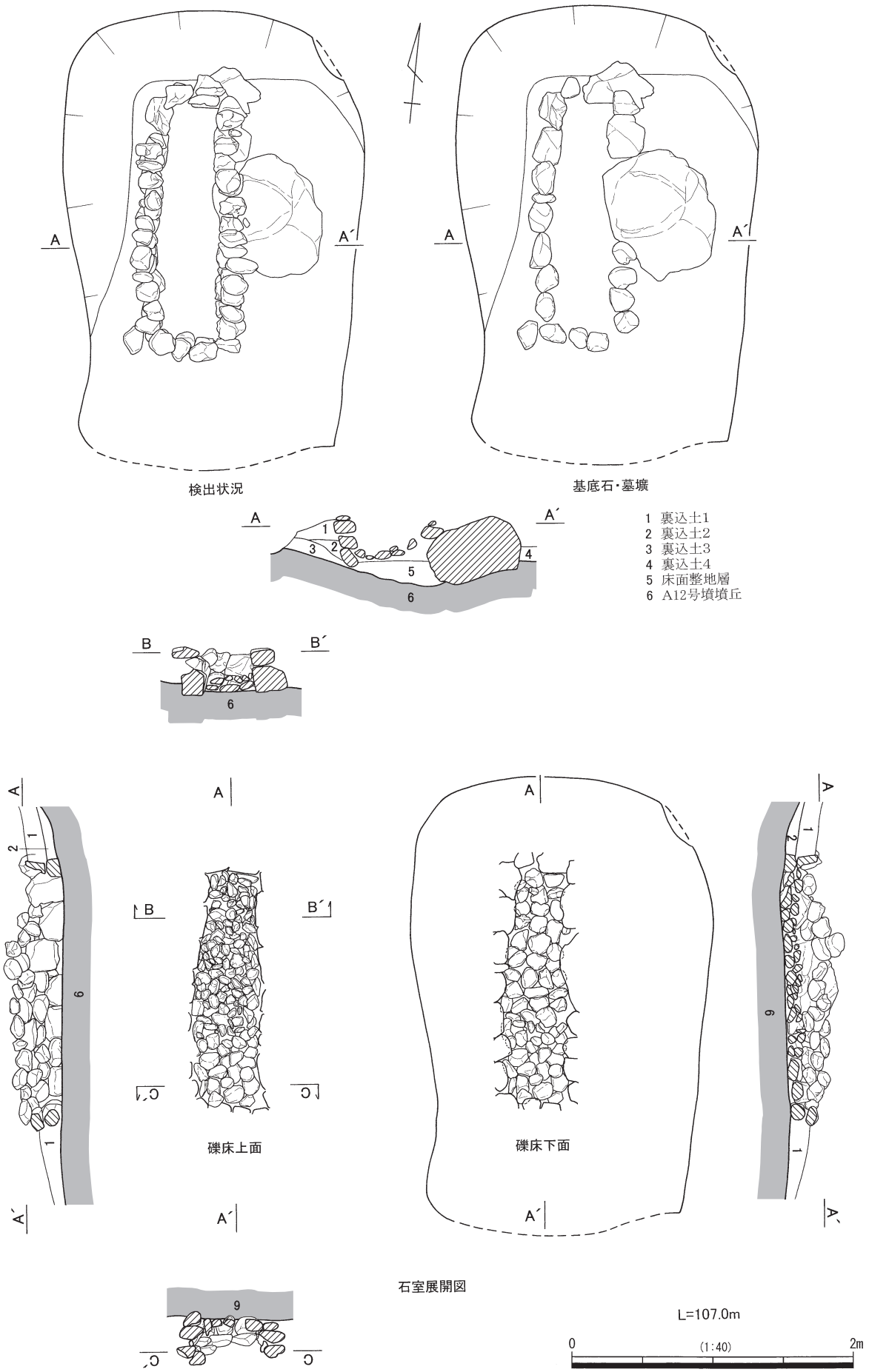
床面の礫床は長径15～7cmの礫がしかれていた。礫床は撹乱を受けていないものの、副葬品が認められなかった。床面の礫床は二重に敷かれていたが、礫は下面が大きく、上面が小さい傾向が認められた。調査時の所見では、この礫床の状況がはたして追葬の有無に関係するのかは不明瞭であった。

墓壙

墓壙は奥壁上端で標高107.0m、下端で106.78mを測ることから、0.22mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈するが、南側は明瞭ではなかった。墓道は認められなかった。

出土遺物

石室と床面の遺存状態が良好であったことからすれば、撹乱や盗掘の可能性はきわめて少ない。もともとこの古墳には副葬品は無かったか、あったとしても後世まで残るようなものではなかった可能性が高い。



第151図　A26号墳横穴式石室実測図

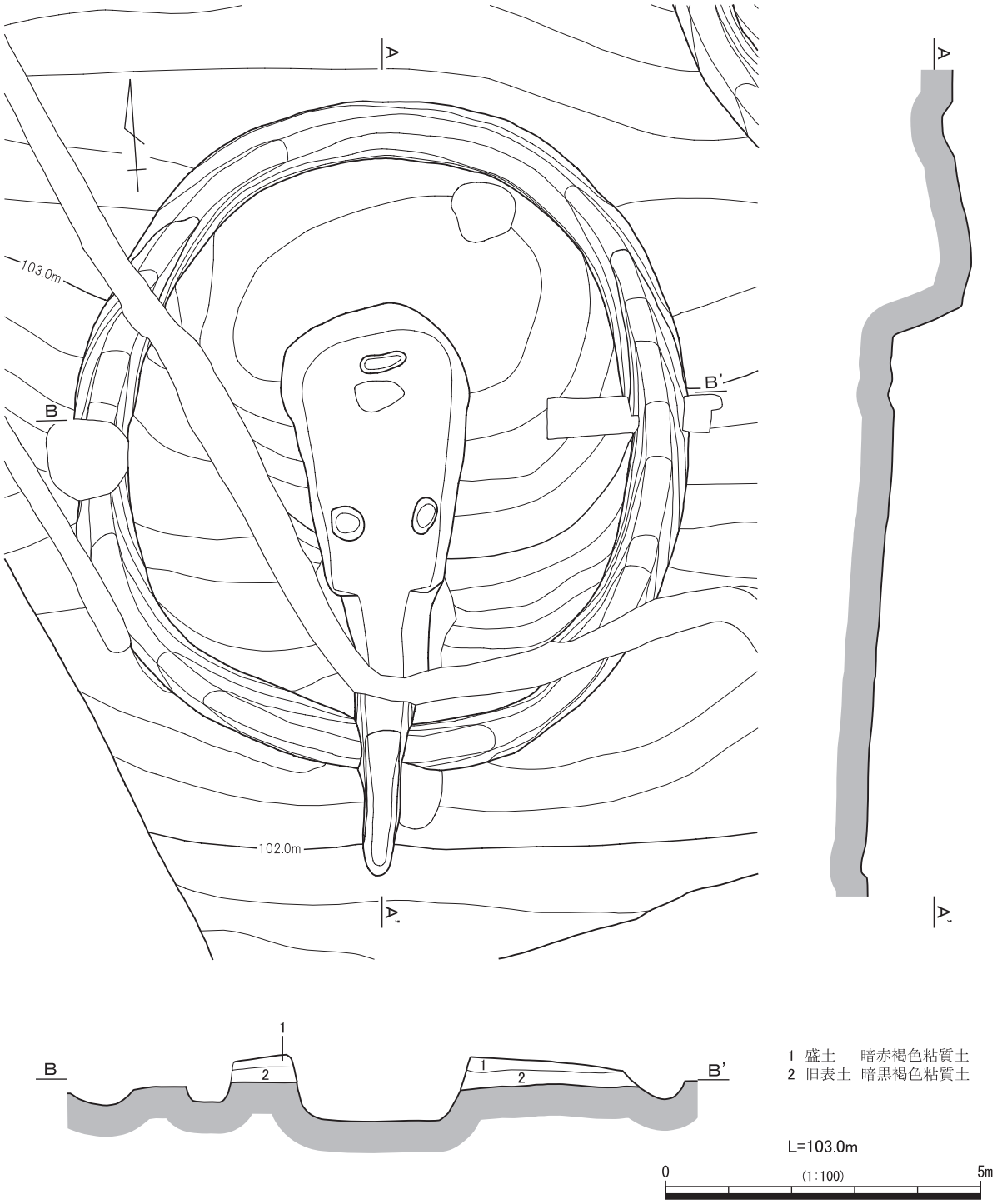
㉗　高根山A27号墳

調査前の状況

A28号墳の南西に位置し近接する。A27号墳は東側小支群に属し、標高103.0mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認められ、大きな撹乱穴もあり、古墳の存在を想定できた。

墳丘・周溝

A27号墳は、等高線が屈曲して北に入り込む部分を巧みに利用し築造されている。墳丘の盛土は撹乱と後世の耕作の影響はあるものの、墳丘中央で約0.5mの厚さが確認された。



第152図　A27号墳墳丘図

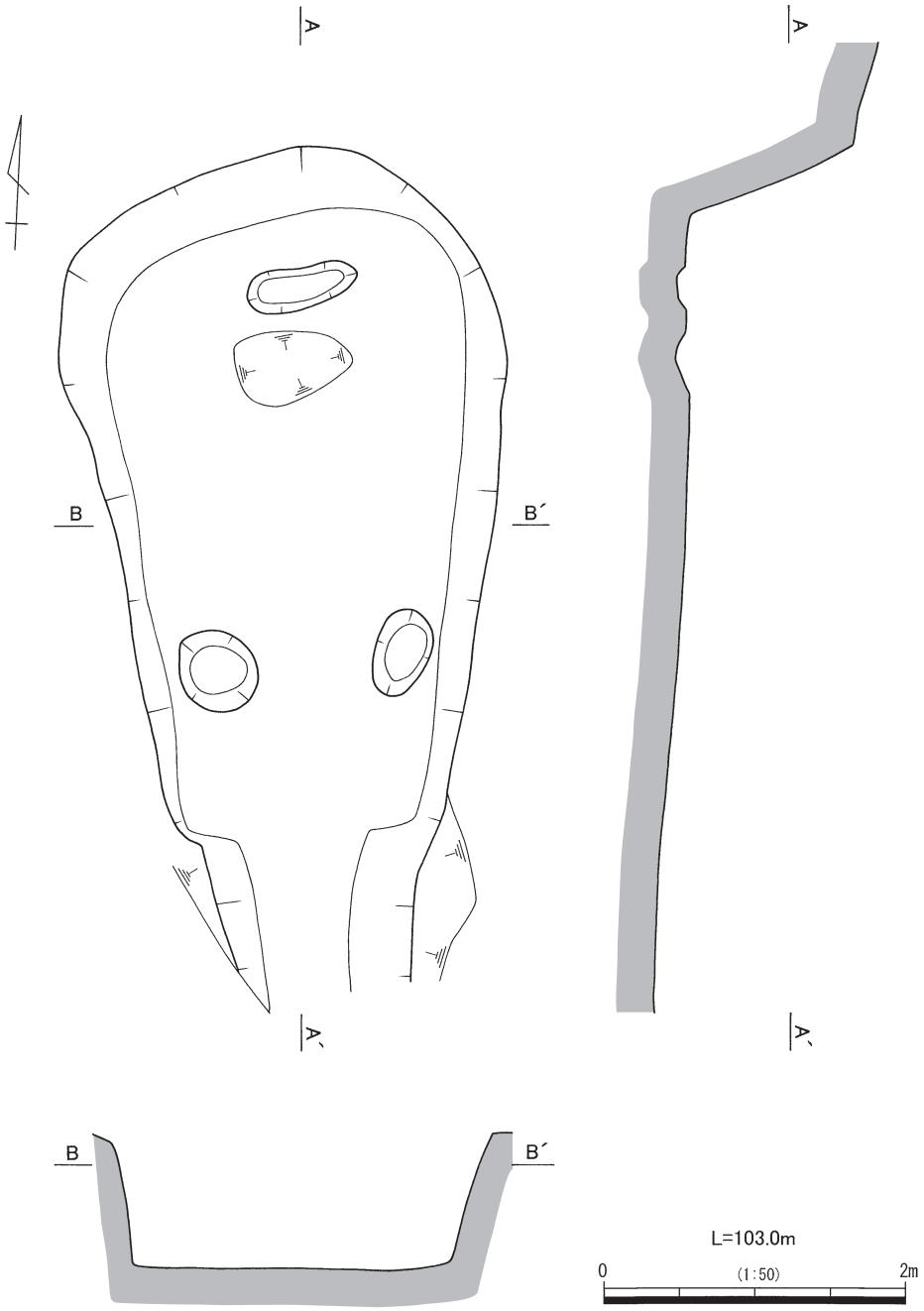
古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅0.9m、深さ0.14m、西側が幅0.92m、深さ0.2m、南側が幅0.8m、深さ0.13m、東側が幅1.02m、深さ0.23mを測る。墳丘は東西7.8m、南北8.8mを測る。墳丘南側で標高102.25m、墳丘北側で標高103.35mを測り、現状での古墳の高さは1.1mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は主軸に直行している。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は東西墳丘断面の旧表土上端で102.92m、墓壙底面で102.42mを測ることから、0.5mほどを掘り下げていることになるが、墓壙底面は撹乱を受けているため、それより上位であろう。墓壙についても



第153図　A27号墳墓壙実測図

大きく撹乱を受けているので、その平面形は明確ではないが、残存する平面形より長方形を呈していたものと推定される。墓道は墓壙から直行して周溝の外側まで延びている。

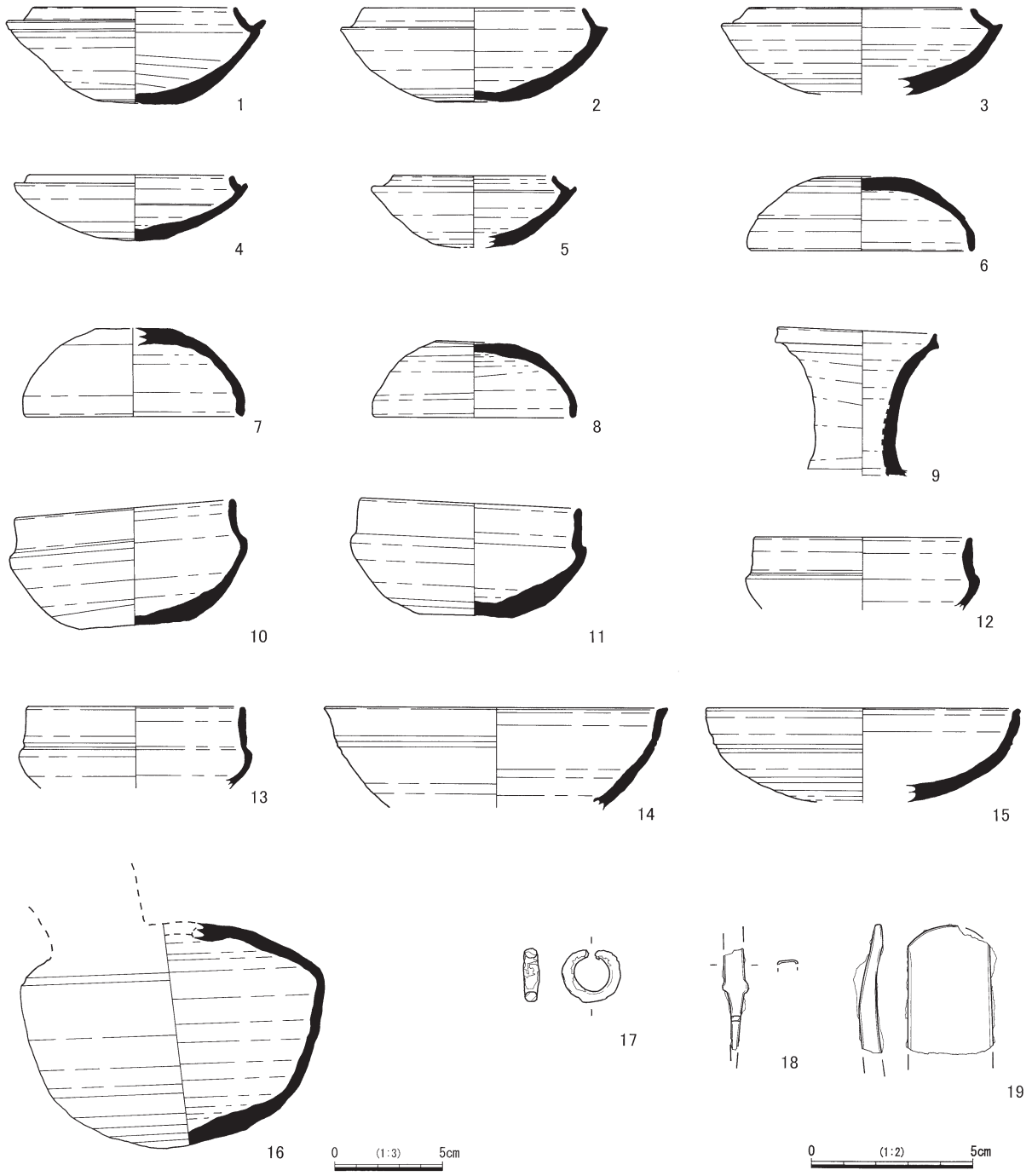
遺物の出土状態

周溝や墓道の撹乱土から須恵器類、耳環などの装身具、鉄鏃片が出土した。後世、石室を解体し石材を外に運び出す際、石室内の副葬品をかき出したと考えられる。石室は跡形もなく、本来の副葬状態を留めていた出土遺物は認められなかった。

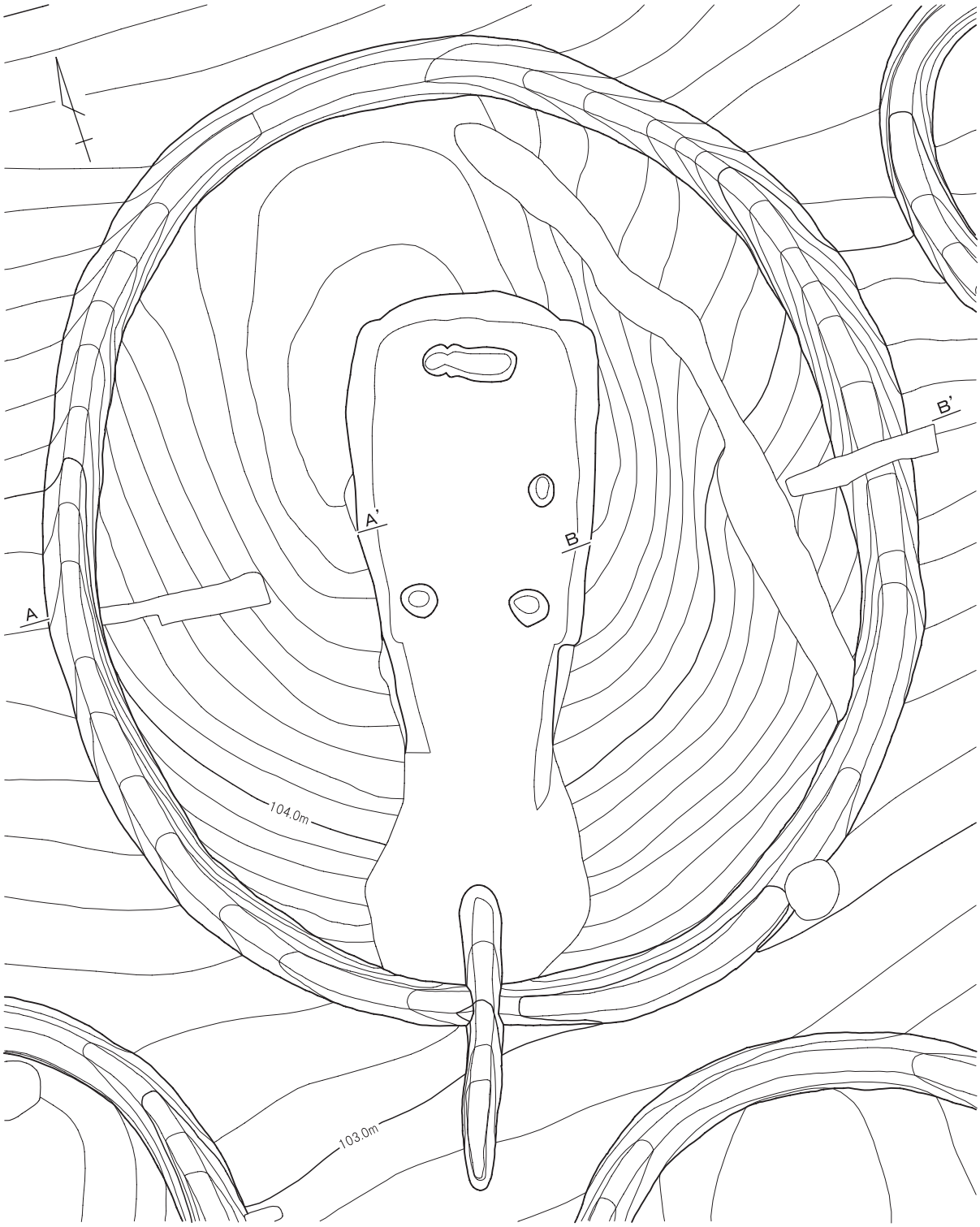
出土遺物

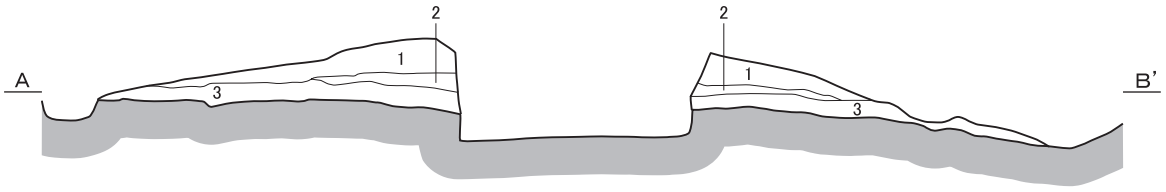
土器と耳環、鉄製品が出土した。

土器　いずれも須恵器で、1～5は坏身、6～8は坏蓋、9はフラスコ形瓶、10～13は盌、14と15は無蓋



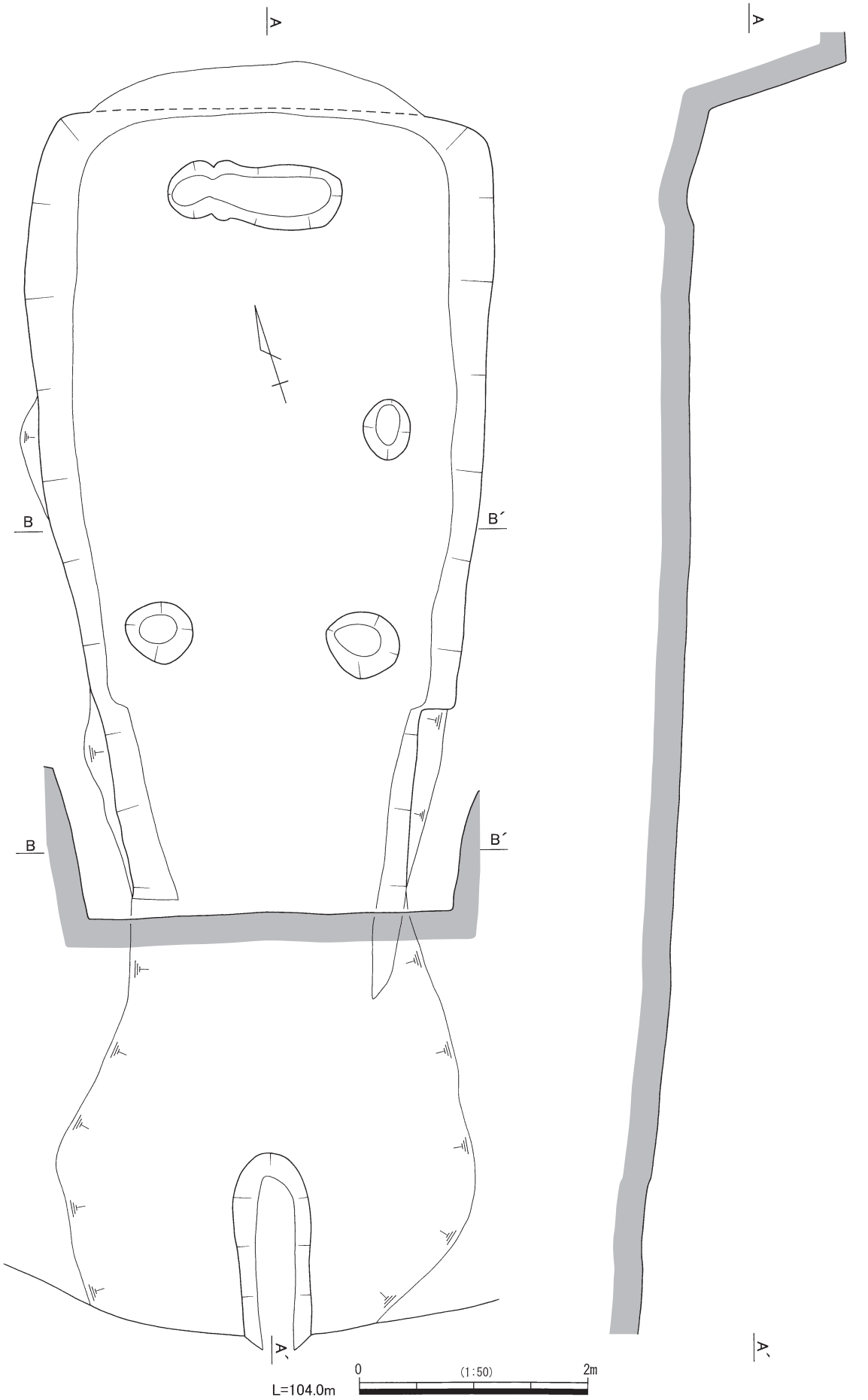
第154図　A27号墳出土遺物実測図





1 盛土1　暗黒褐色粘質土
2 盛土2　暗赤褐色粘質土
3 旧表土　暗淡黒褐色粘質土

第155図　A28号墳墳丘図



第156図　A28号墳墓壙実測図

高坏、16は平瓶である。坏1～8は坏Ｈ類である。坏身・坏蓋をみると、1～3の坏身と6・7の坏蓋は、遠江須恵器編年Ⅲ期末葉に比定できる。4・5の坏身と8の坏蓋は坏Ｈ類でも新しくⅣ期前半に比定できる。10から13はⅢ期末葉であろう。高坏14はⅢ期末葉、15はⅣ期前半に比定できる。平瓶16はⅢ期末葉からⅣ期前半に比定できる。

このようにみるとA27号墳出土の須恵器は、遠江須恵器編年Ⅲ期末葉とⅣ期前半にわたっていると考えられ、A27号墳の築造時期をⅢ期末葉に、さらにⅣ期前半に追葬が行われたと考えておきたい。

耳環　17の耳環は銅地で鍍金はほとんど剥離しているが、一部に残っていた。小型品である。

鉄製品　18は鉄鏃の茎部片である。ほかに19のくさびが出土しているが、近・現代の柄を固定する農具の爪であろう。

㉘　高根山A28号墳

調査前の状況

A31号墳の北に位置しA27号墳やA31号墳と近接する。3基の古墳は墓壙の主軸方位もほぼ一致し、共通する単位群の可能性が高い。A28号墳は東側小支群に属し、標高104.0mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認められ、大きな撹乱穴もあり、古墳の存在を想定できた。

墳丘・周溝

A28号墳は、等高線が南に屈曲し、わずかにせり出した部分を巧みに利用し築造されている。墳丘の盛土は撹乱と後世の耕作の影響はあるものの、墳丘中央で旧表土上に約0.6mの厚さが確認された。

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅1.0m、深さ0.16m、西側が幅0.9m、深さ0.22m、南側が幅1.0m、深さ0.28m、東側が幅1.26m、深さ0.2mを測る。墳丘は東西12.2m、南北14.4mを測る。墳丘南側で標高103.25m、墳丘北側で標高104.99mを測り、現状での古墳の高さは1.44mである。

埋葬施設

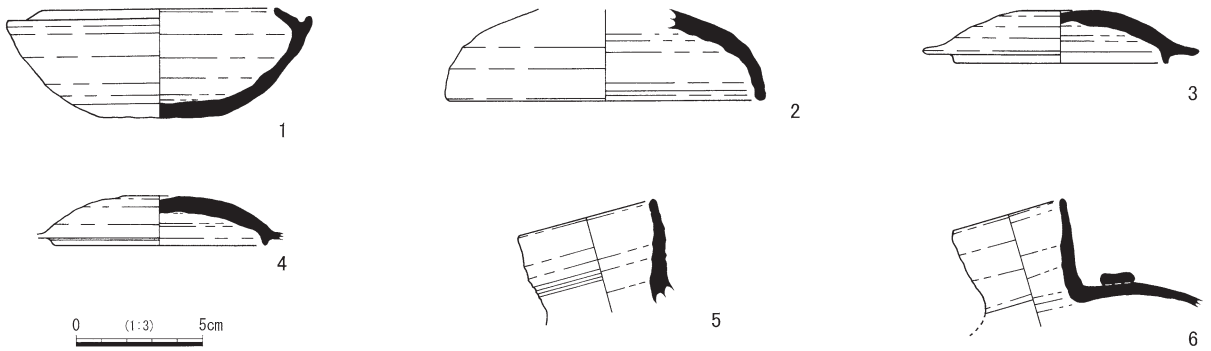
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は主軸に直行している。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていた。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

墓壙は東西墳丘断面の旧表土上端で103.97m、墓壙底面で103.45mを測ることから、0.52mほどを掘り下げていることになるが、墓壙底面は撹乱を受けているため、それより上位であろう。墓壙についても墓道に近い部分から墓道が大きく撹乱を受けているので、その平面形は不明確ではあるが、残存する平面形より長方形を呈していたものと推定される。墓道は墓壙から直行して周溝の外側まで延びている。

遺物の出土状態

周溝や墓道の撹乱土から須恵器類が少量、破片となって出土した。石室を解体し、石材を再利用のた



第157図　A28号墳出土遺物実測図

め外に運び出す際、副葬品をかき出したと考えられる。出土遺物は副葬状態を留めていなかった。

出土遺物

土器　いずれも須恵器で、1は坏身、2は坏蓋である。いずれも坏Ｈ類で、遠江須恵器編年Ⅲ期末葉に比定できる。3・4は壺類の蓋と考えられる。Ⅲ期末葉からⅣ期前半に比定しておきたい。5の平瓶はⅢ期後葉の平瓶の口縁部、6は胴部上位に円形の浮文を添付した平瓶である。遠江須恵器編年Ⅳ期以降にはないタイプであり、Ⅲ期末葉に比定しておく。ほかに、有蓋高坏と考えられる破片、カキ目調整が施された壺類片、Ⅳ期前半の脚付長頸壺と思われる破片が出土している。このようにみるとA28号墳出土の須恵器は遠江須恵器編年では、Ⅲ期後葉からⅣ期前半にわたっていると考えられ、A28号墳の築造時期をⅢ期後葉に、さらにⅢ期末葉、Ⅳ期前半に追葬が行われたと考えておきたい。

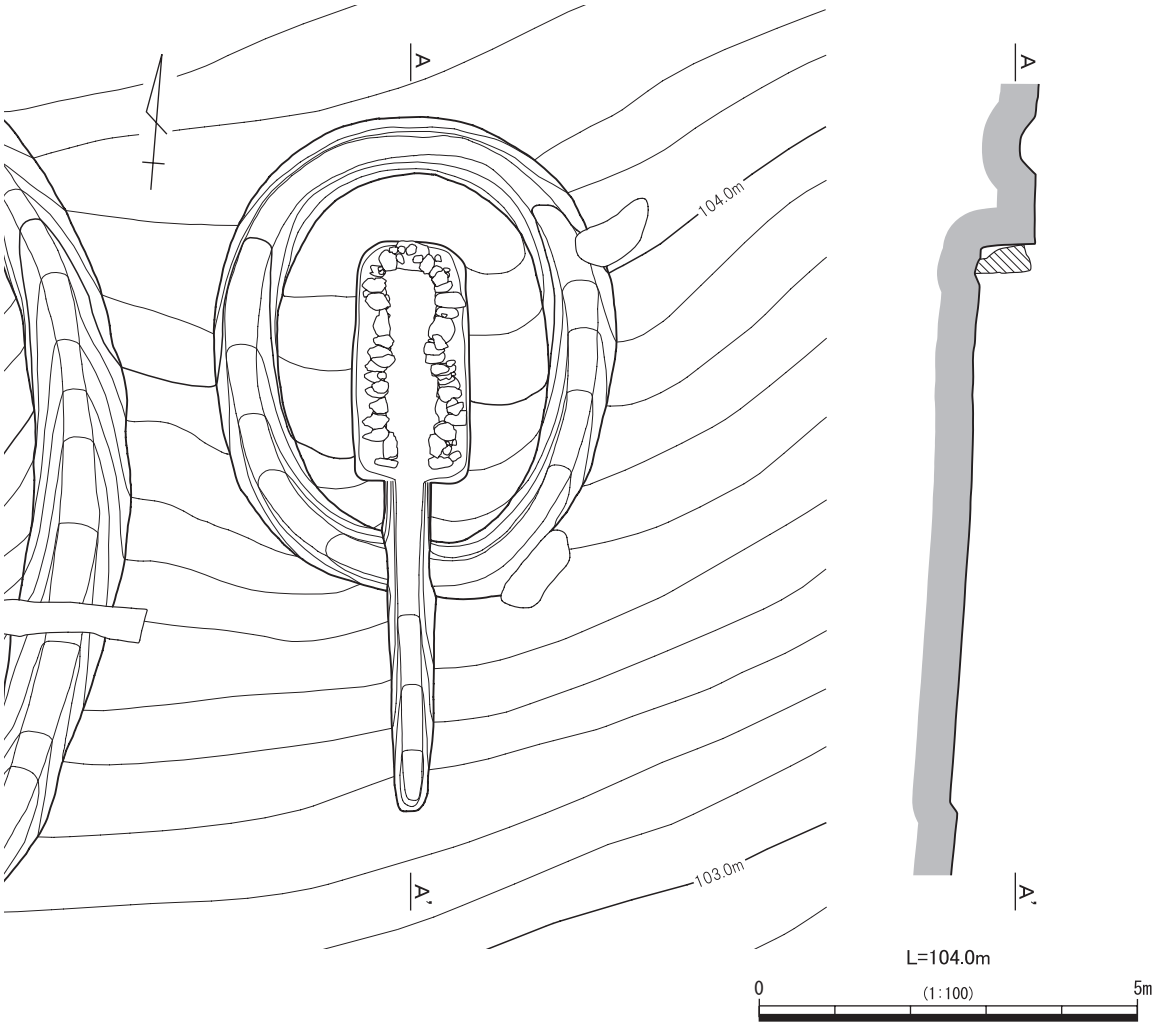
㉙　高根山A29号墳

調査前の状況

A28号墳の東に近接して位置している。A29号墳は調査区東側の標高104.0mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

A29号墳は東側小支群に属し、等高線がわずかに南に向かって屈曲する箇所に築かれている。その点



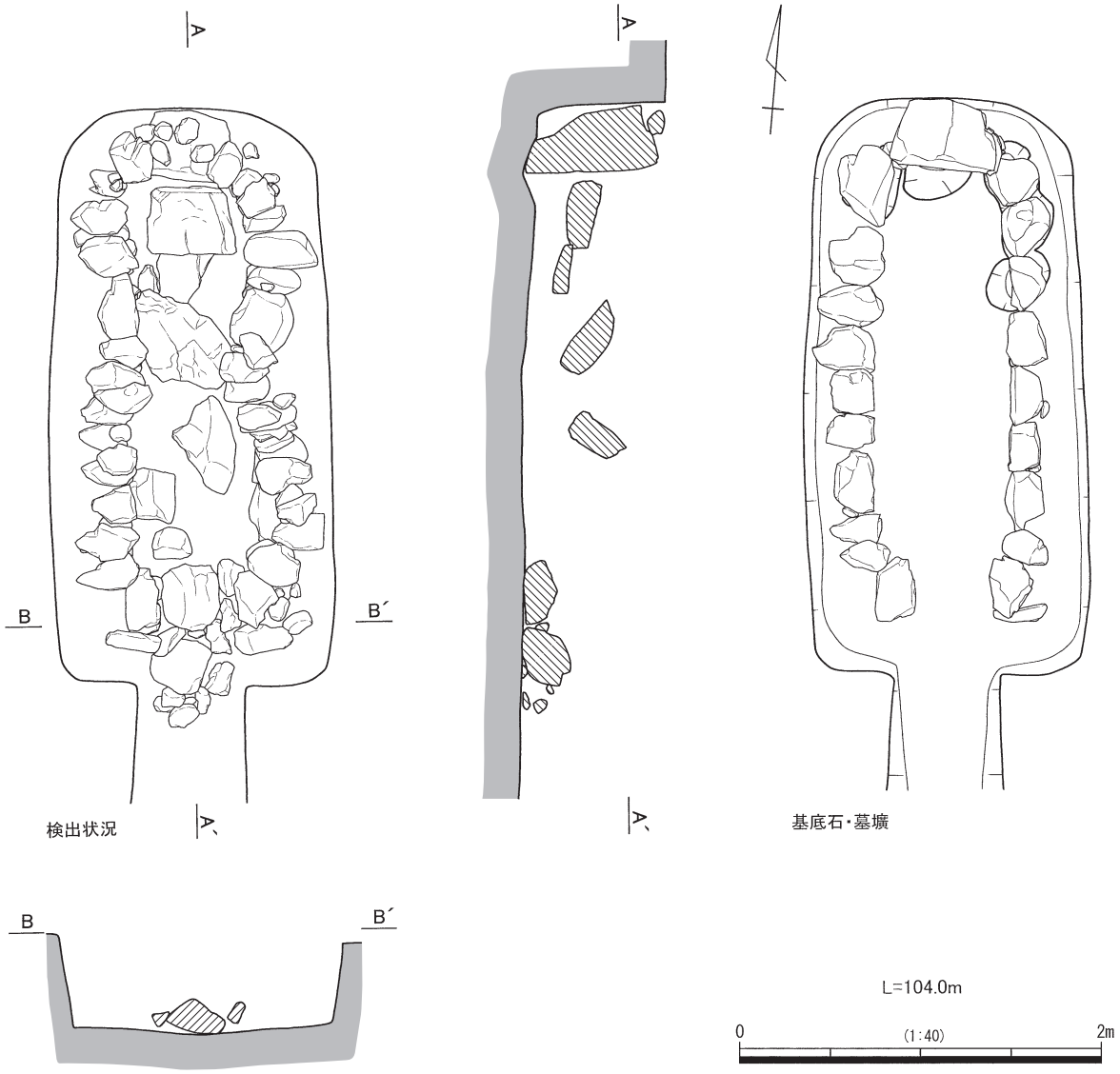
第158図　A29号墳墳丘図

では近接する28号墳に近い立地で、近接するあり方からも両者が密接に関連すると考えられる。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

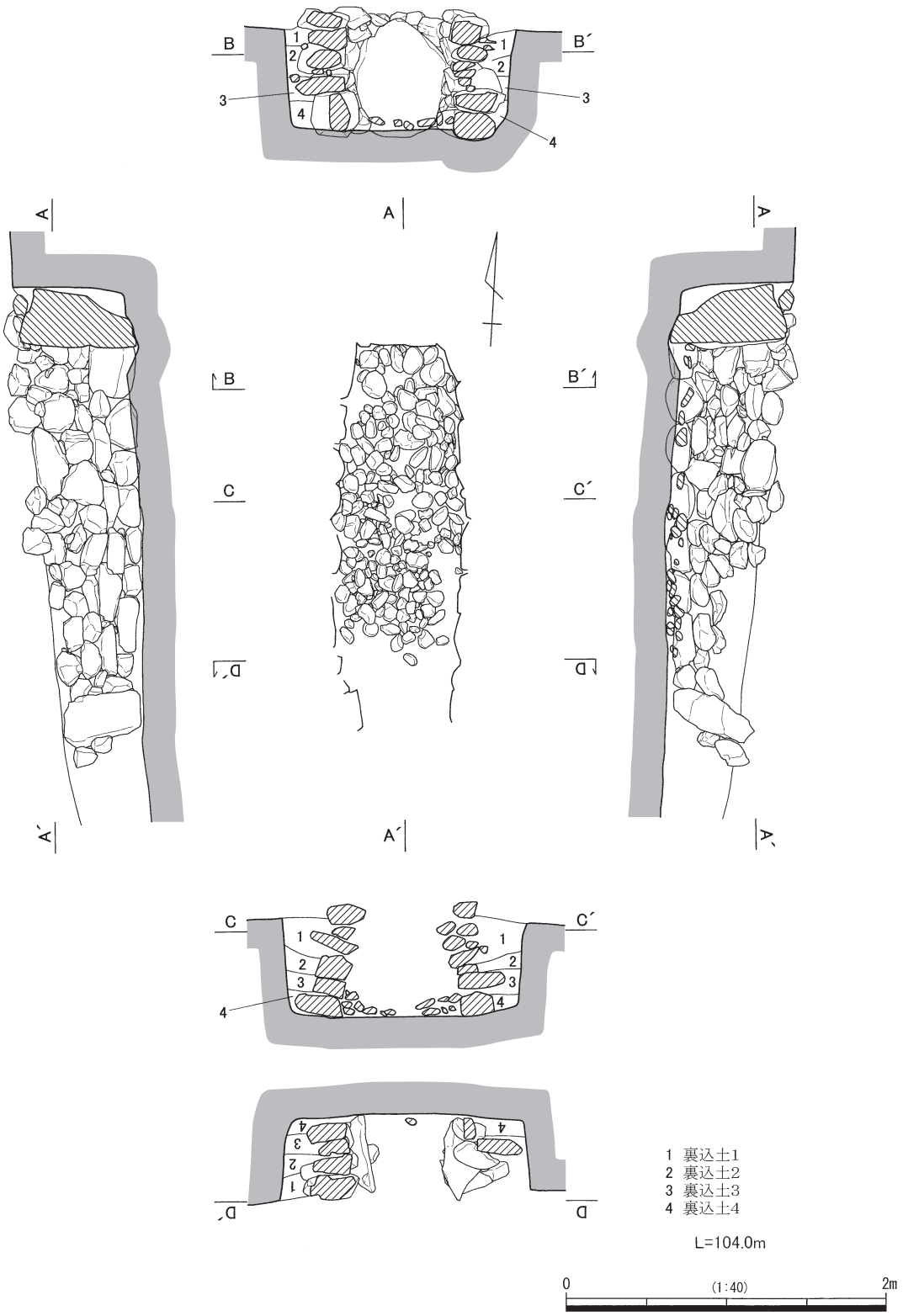
古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに西北に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅0.76m、深さ0.18m、西側が幅0.84m、深さ0.28m、南側が幅0.8m、深さ0.2m、東側が幅0.9m、深さ0.14mを測る。墳丘は東西3.6m、南北4.7mを測る。墳丘南側で、標高103.73m、墳丘北側で標高104.29mを測り、現状での古墳の高さは0.56mである。

埋葬施設

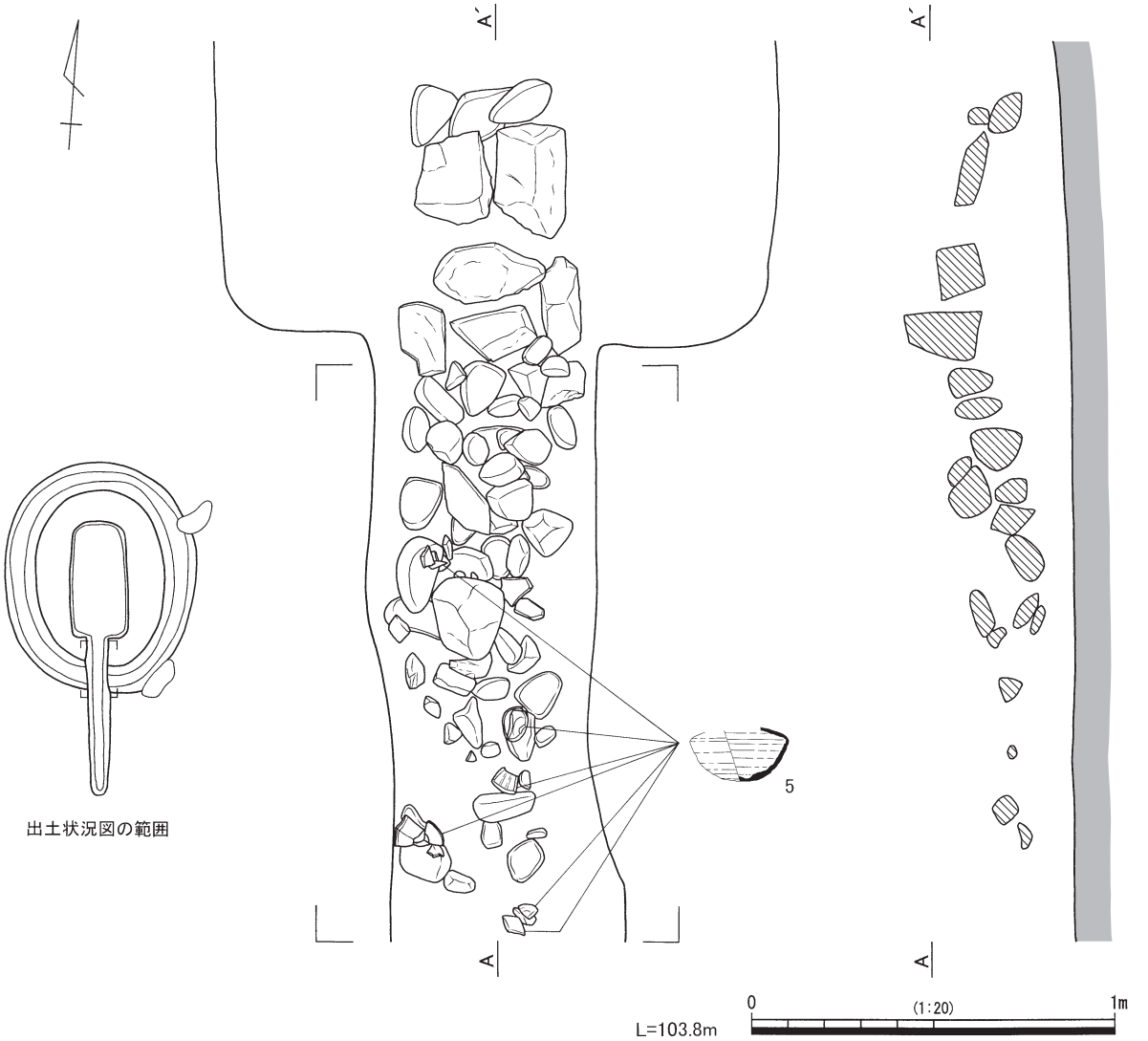
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は開口部を南に向けた開口部に立柱石をもつ無袖式石室で、閉塞石も残り保存状態は良好であった。

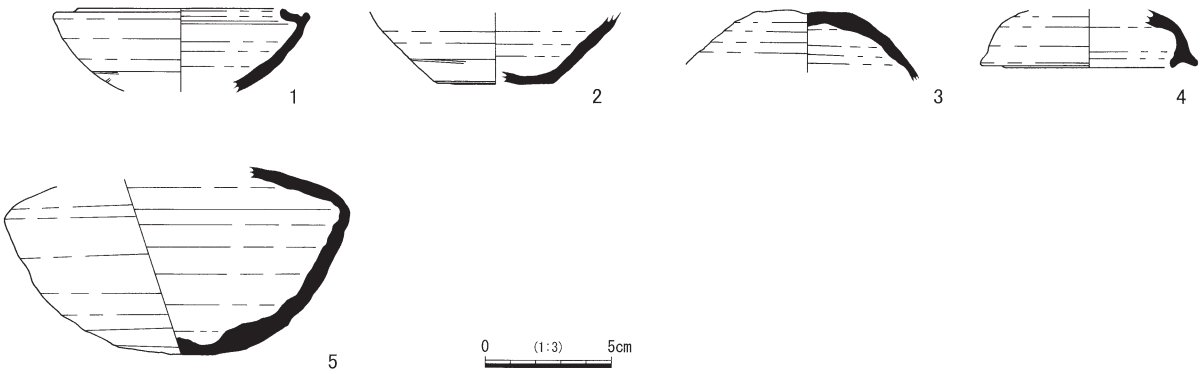


第159図　A29号墳横穴式石室実測図1



第160図　A29号墳横穴式石室実測図2





第161図　A29号墳遺物出土状況・遺物実測図

天井石　検出の際、玄室に落下した状態の天井石が認められた。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、１枚の鏡石を設置している。玄門の立柱石を据えるための穴を掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を据え玄門部を設置し長さと幅を決めた後、基底石を奥壁側から置き、左右の側壁とも玄門側へ据える手順をとっている。左右とも最終段階で、基底石を小口積みにして調整を図っていると考えられる。床面の礫床は奥壁から玄門部近くまで敷かれていた。

閉塞部　玄門部から墓道へつながる閉塞石のある箇所で、墓道床面から浮いた状態で、閉塞石が認められた。玄門部付近には比較的大形の長径20～30cmを使っていた。残っていた閉塞石は、追葬の際、取り外されたのか上段までは認められない。同時に、破片となった須恵器類も閉塞石とともに出土した。石室内の副葬品を追葬の際、かき出したと推定される。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高104.25m、下端で103.55mを測ることから、0.7mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。墓道は南へ直行して延びている。

遺物の出土状態

閉塞部で瓶類片、坏身、坏蓋片が出土した。追葬の際、片付けられたと判断される。

出土遺物

土器　いずれも須恵器で、１～３は坏類である。いずれも坏Ｈ類で、遠江須恵器編年Ⅳ期前半から後半に比定できる。４はＧ類の蓋と考えられ、Ⅳ期前半から後半に比定しておきたい。５の平瓶は口頸部を欠くが、胴部上位に屈曲部をつくる遠江須恵器編年Ⅳ期以降のタイプである。

このようにみるとA29号墳出土の須恵器は、遠江須恵器編年Ⅳ期前半から後半にわたっていると考えられ、A29号墳の築造時期をⅣ期前半に、さらにⅣ期後半に追葬が行われたと考えておきたい。

㉚　高根山A30号墳

調査前の状況

A30号墳は調査区最東端にして位置し、標高103.8mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

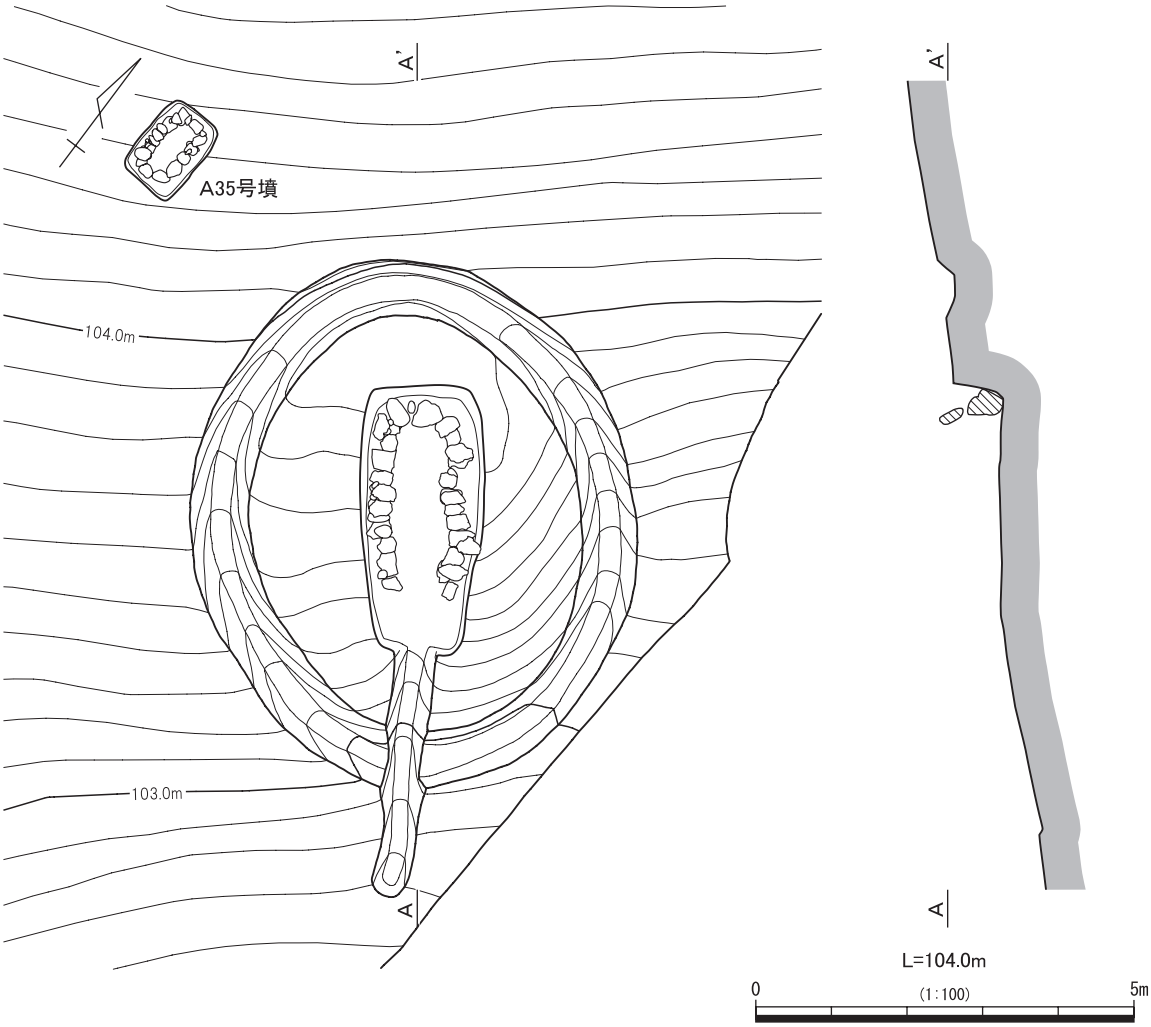
墳丘・周溝

A30号墳は東側小支群に属し、等高線が北側から南に向かって屈曲する箇所に築かれている。その点では近接するA18号墳に近い立地で、墓道の開口方向が、南東を向くあり方からも何らかの共通点があると考えられる。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

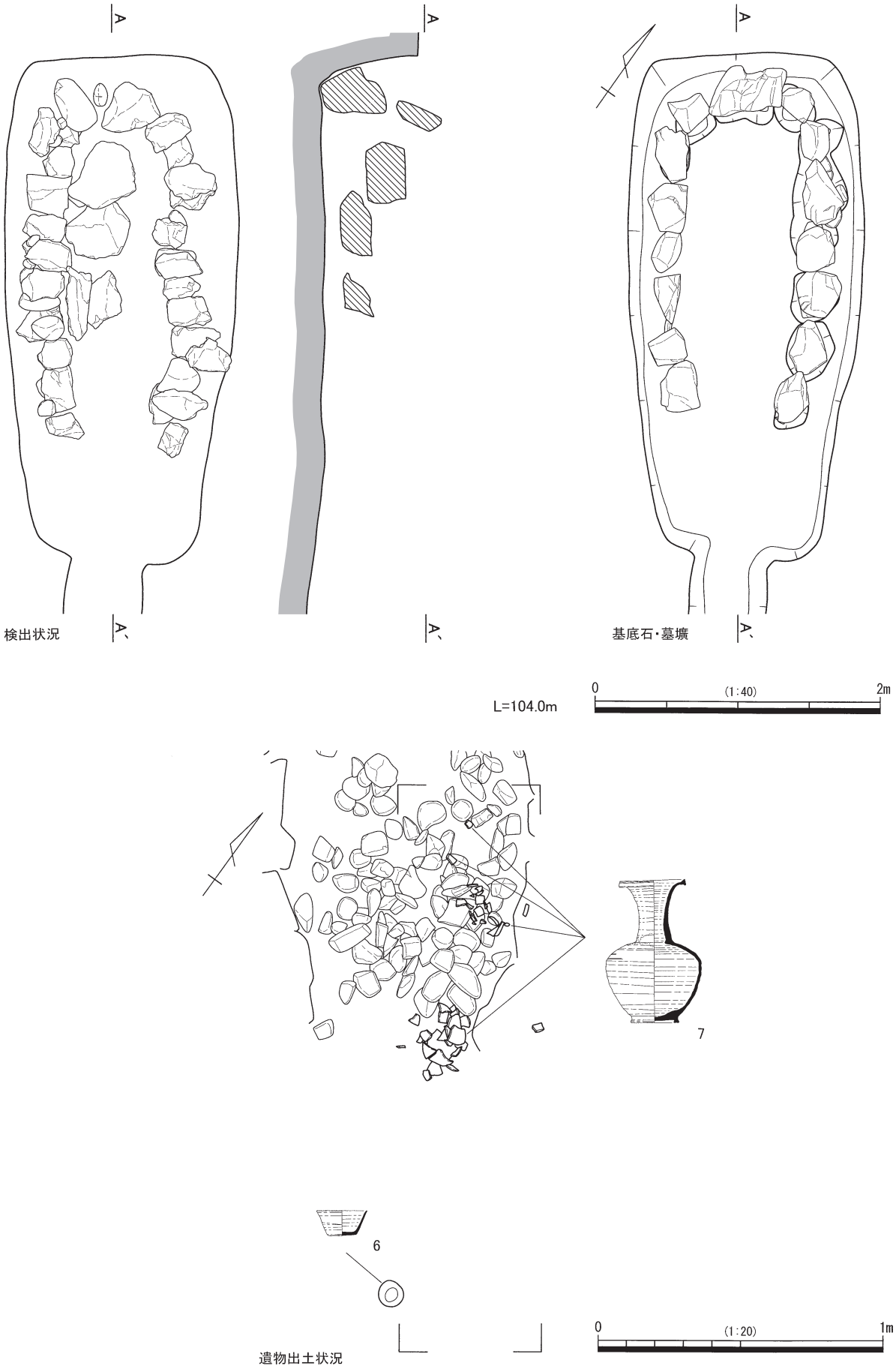
古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに西北に入り込む部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅0.7m、深さ0.12m、西側が幅0.76m、深さ0.18m、南側が幅0.68m、深さ0.2m、東側が幅0.7m、深さ0.11mを測る。墳丘は東西4.4m、南北5.4mを測る。墳丘南側で、標高102.98m、墳丘北側で標高103.99mを測り、現状での古墳の高さは1.01mである。

埋葬施設

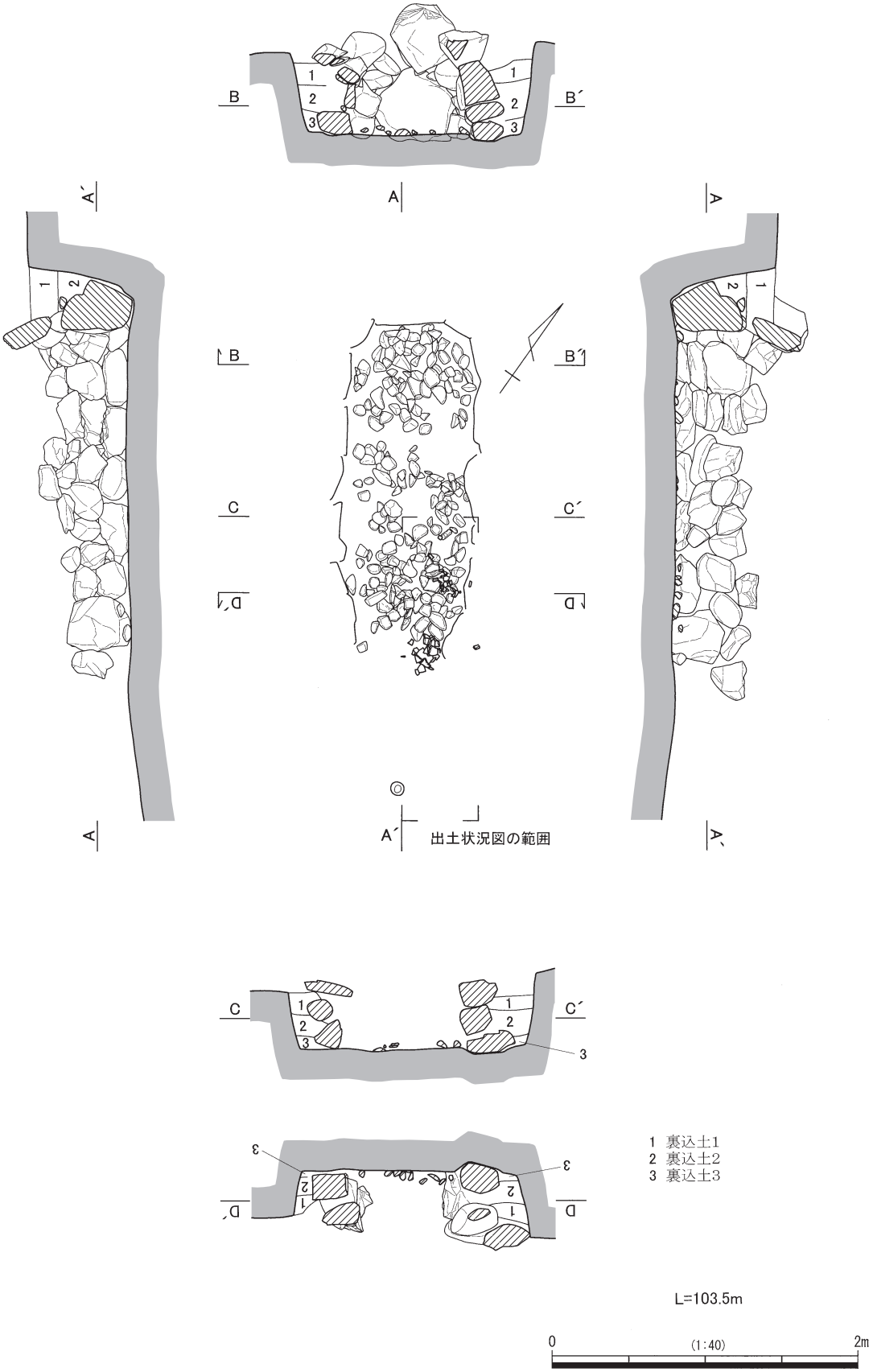
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は玄室下部から墓道にかけて側壁が認められず、閉塞石も認められない。このことからはたして玄室がどこまで残っているのか不明瞭であったが、側壁の終点が両壁とも縦積みであることから、これは立柱石と考えられる。すると石室の平面形は擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は一部を除いて良好であった。



第162図　A30号墳墳丘図・A35号墳位置図



第163図　A30号墳横穴式石室実測図1



第164図　A30号墳横穴式石室実測図2

天井石　検出の際、玄室に落下した状態の天井石が認められた。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、上下２枚の大石を設置し奥壁としている。玄門の立柱石を据えるための穴を掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を据え玄門部を設置し長さと幅を決めた後、左右の側壁とも基底石は奥壁側と玄門側を同時に据える手順をとっている。床面の礫床は玄室中央で抜かれた箇所があったが、それ以外は良好に残っていた。

閉塞部　玄門部から墓道へつながる箇所で、墓道床面から浮いた状態で、須恵器長頸壺が認められた。追葬の際の副葬品と考えられるが、この部分は追葬時には覆土が堆積していたのであろう。追葬の際、かき出されたのか閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高103.95m、下端で103.34mを測ることから、0.61mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据えるための穴を掘っていた。墓道は南東へ直行して延びている。

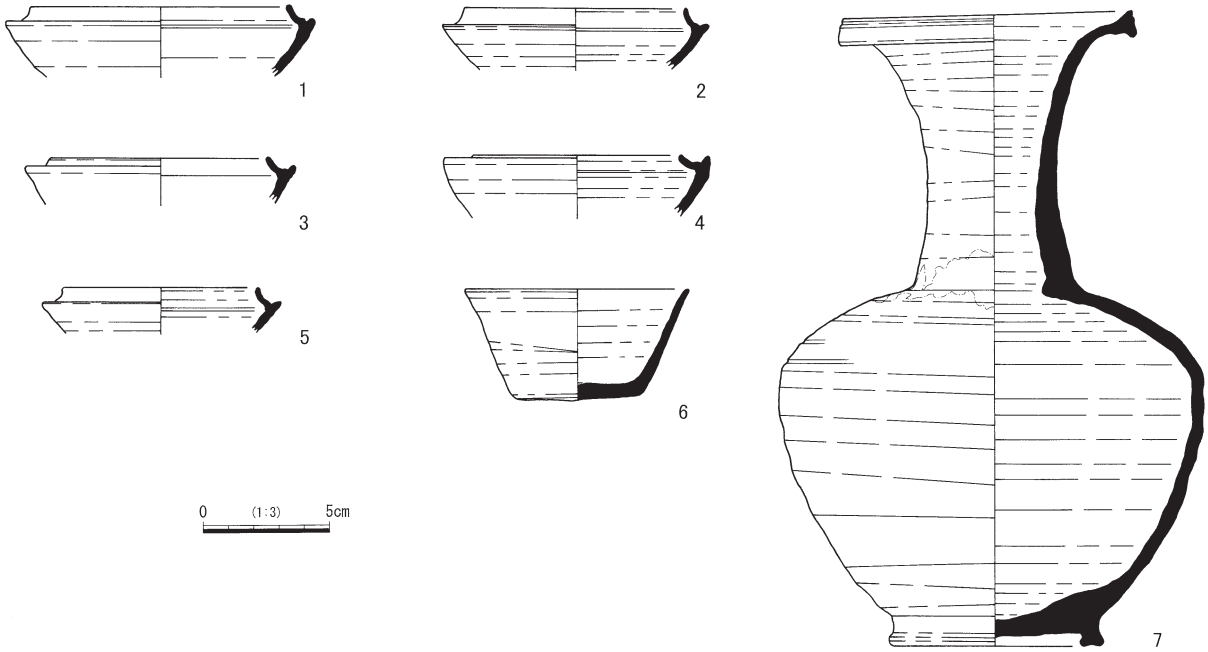
遺物の出土状態

玄室下部、玄門部付近に破片となった須恵器・坏類が出土した。追葬の際に石室内の副葬品を破損し、移動したのであろうか。ほかに長頸壺１点が玄室内から置かれた状態で出土し接合した結果、ほぼ完形となった。さらに墓道床面から完形の坏身１点が出土した。長頸壺１点と墓道床面の坏身は追葬の最後の段階で副葬されたと判断される。

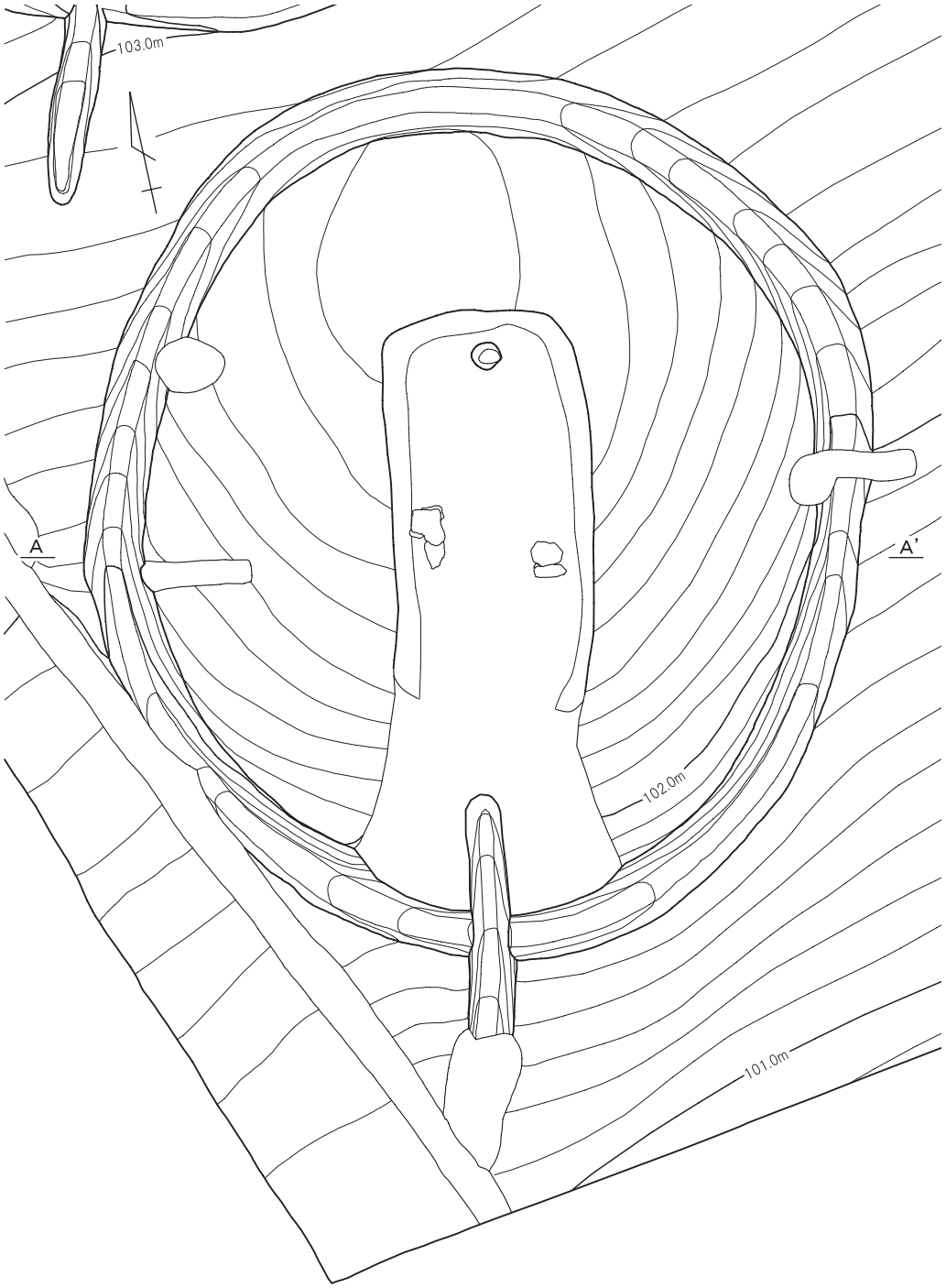
出土遺物

土器　いずれも須恵器で、１～５は坏Ｈ類の坏身である。遠江須恵器編年Ⅲ期末葉からⅣ期前半に比定できる。６は小形無高台の坏身で、遠江ではあまり見かけない形態を呈する。７の長頸壺は遠江須恵器編年Ⅴ期前葉の湖西窯の製品である。ほかに甕片が古墳の外側にある撹乱穴から出土した。

このようにみるとA30号墳出土の須恵器は、遠江須恵器編年Ⅲ期末葉とⅣ期前半、Ⅴ期前葉と３時期にわたっていると考えられる。これによりA30号墳の築造時期をⅢ期末葉に、さらにⅣ期前半とⅤ期前葉に追葬が行われたと考えておきたい。



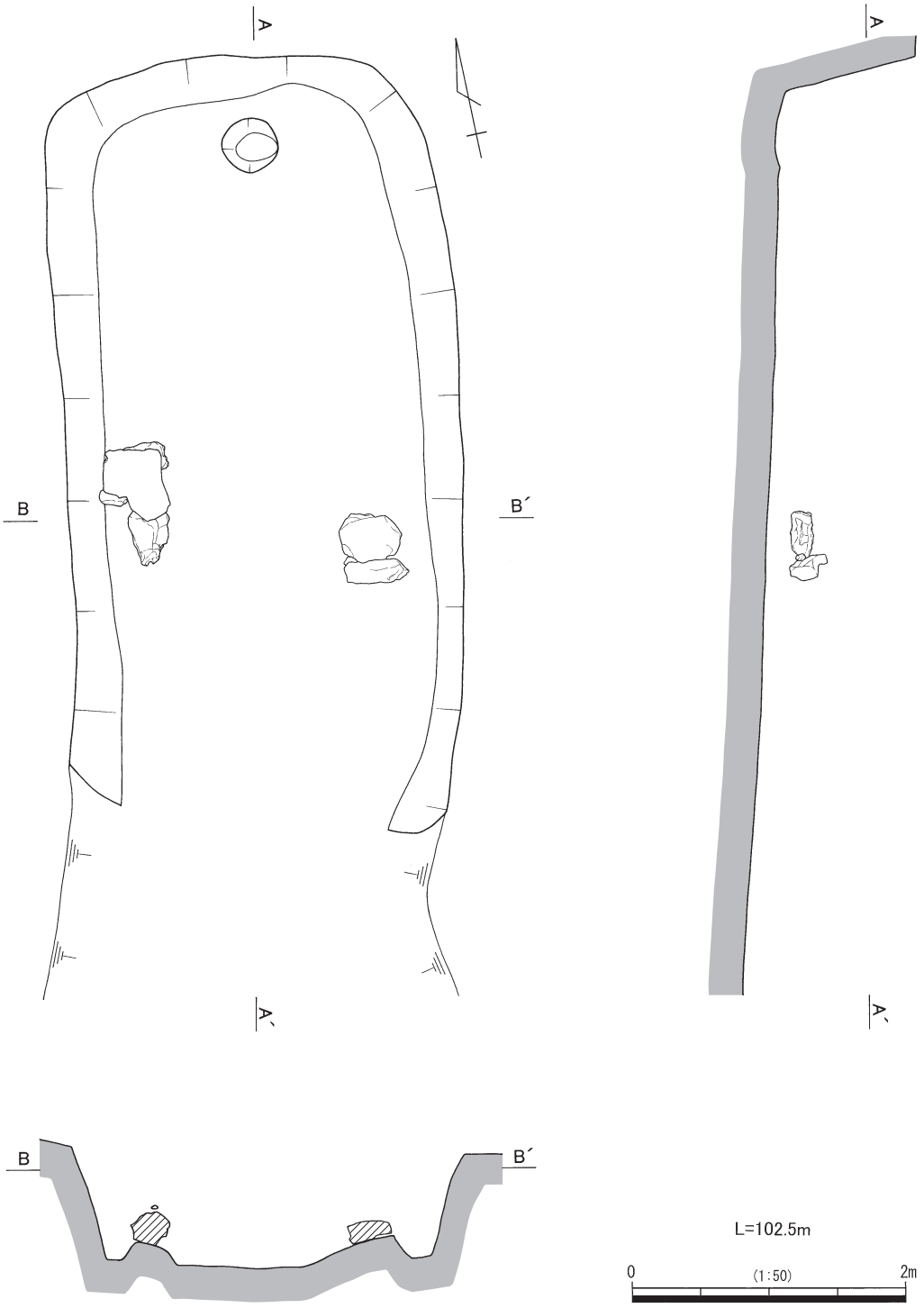
第165図　A30号墳出土遺物実測図



L=102.5m

1　盛土　　暗褐色粘質土
2　旧表土　暗黒褐色粘質土

第166図　A31号墳墳丘図



第167図　A31号墳墓壙実測図

㉛　高根山A31号墳

調査前の状況

A28号墳の南に位置しA27号墳やA28号墳と近接する。すでに指摘したように、3基の古墳は墓壙の主軸方位もほぼ一致し、共通する単位群の可能性が高い。A31号墳は東側小支群に属し、標高102.6mの等高線付近に築造されていた。調査前は雑木林に覆われていたが、墳丘を示す地形の盛り上がりは認められ、大きな撹乱穴もあり、古墳の存在を想定できた。

墳丘・周溝

A31号墳は、等高線が南に屈曲し、わずかにせり出した部分を巧みに利用し築造されている。墳丘の盛土は撹乱と後世の耕作の影響はあるものの、墳丘中央で旧表土上に約0.3mの厚さが確認された。

古墳を区画する周溝の規模は、北側が幅0.7m、深さ0.2m、西側が幅0.6m、深さ0.24m、南側が幅0.7m、深さ0.27m、東側が幅0.64m、深さ0.09mを測る。墳丘は東西9.6m、南北11.1mを測る。墳丘南側で標高101.51m、墳丘北側で標高102.93mを測り、現状での古墳の高さは1.42mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。開口部は主軸に直行している。古墳の石室に使用された石材は、著しい後世の抜き取りによって、基底石までほぼ完全に抜き取られていたが、一部の両側壁が残っていた。この基底石のレベルが、本来の墓壙底面と考えられる。石室の平面形は明確にできなかった。

墓壙・墓道

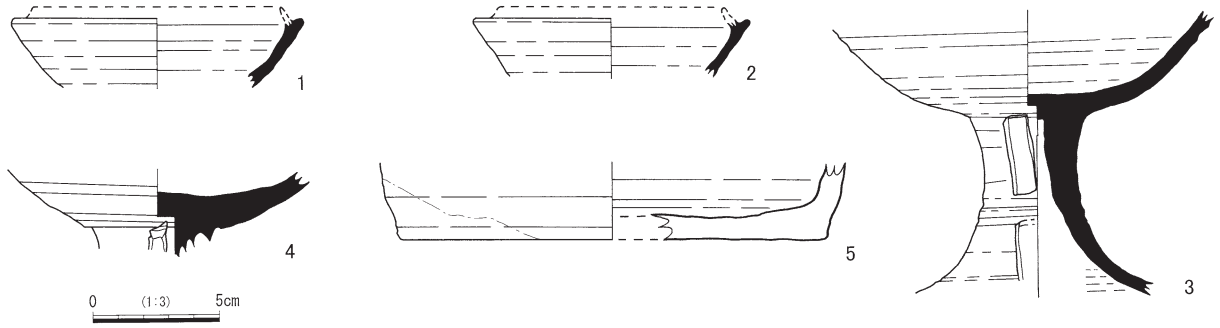
墓壙は残りの良い東西墳丘断面の旧表土上端で101.41m、墓壙底面で102.82mを測ることから、0.59mほどを掘り下げていることになるが、墓壙底面は撹乱を受け下がっているため、それより上位であろう。墓壙についても墓道に近い部分から墓道が大きく撹乱を受けているので、その平面形は不明確ではあるが、残存する平面形より長方形を呈していたものと推定される。墓道は墓壙からわずかに南西を向き、周溝の外側まで延びている。

遺物の出土状態

周溝の撹乱土とその周囲から須恵器類が少量、破片となって出土した。石室を解体し、石材を再利用のため外に運び出す際、石室内の副葬品をかき出したと考えられる。副葬状態を留めていた出土遺物は認められなかった。

出土遺物

土器　須恵器と灰釉陶器が出土した。1・2は坏H類の坏身である。遠江須恵器編年Ⅲ期末葉からⅣ期前半と推定される。3・4は長窓２段２方向透かしの高坏で、遠江須恵器編年Ⅲ期後葉から末葉に比定できる。5は灰釉陶器の壺・甕類底部である。地元浜北窯産で10世紀後半から11世紀前半と判断される。ほかに甕片が古墳の外側から出土した。



第168図　A31号墳出土遺物実測図

このようにみるとA31号墳出土の須恵器は、遠江須恵器編年Ⅲ期後葉、末葉からⅣ期前半と２ないし３時期にわたっていると考えられる。これによりA31号墳の築造時期をⅢ期後葉から末葉に、さらにⅢ期末葉からⅣ期前半に追葬が行われたと考えておきたい。

㉜　高根山A32号墳

調査前の状況

A32号墳は調査区東端からわずかに西に位置し、標高102.6mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

A32号墳は東側小支群に属し、等高線が北側から南に向かって斜行する箇所に築かれている。その点では近接するA33号墳に近い立地である。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに西南に流れる部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅0.9m、深さ0.23m、西側が幅0.9m、深さ0.27m、南側が幅0.8m、深さ0.21m、東側が幅0.84m、深さ0.16mを測る。墳丘は東西4.25m、南北4.8mを測る。墳丘南側で、標高102.4m、墳丘北側で標高102.87mを測り、現状での古墳の高さは0.47mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は玄門近くの西側壁から前庭にかけて側壁が認められないが、閉塞石の下段が残っていること、東側壁の終点が縦積みであることからこれが立柱石と考えられ、石室の平面形は擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は一部を除いて良好であった。

天井石　検出の際、一部に玄室に落下した状態の天井石が認められた。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、１枚の鏡石を設置し奥壁としている。右側は玄門の立柱石を据えるための穴を掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁の直近でわずかに幅を狭めた奥窄り形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を据え玄門部を設置し長さと幅を決めた後、左右の側壁とも基底石は奥壁側と玄門側を同時に据える手順をとっている。最後の調整はやや小ぶりの礫を小口積みにして調整をしている。床面の礫床は良好に残っていた。

前庭・閉塞部　閉塞石は玄室下部から前庭へつながる２箇所で、下段のみ残っていた。閉塞石は、追葬の際、玄室の内外をそれぞれに異なる時期に閉塞し区別したと考えられる。前庭の側壁は撹乱を受け東側のみ残っていた。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高102.83m、下端で102.33mを測ることから、0.5mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。墓道はわずかに曲がって南へ延びている。

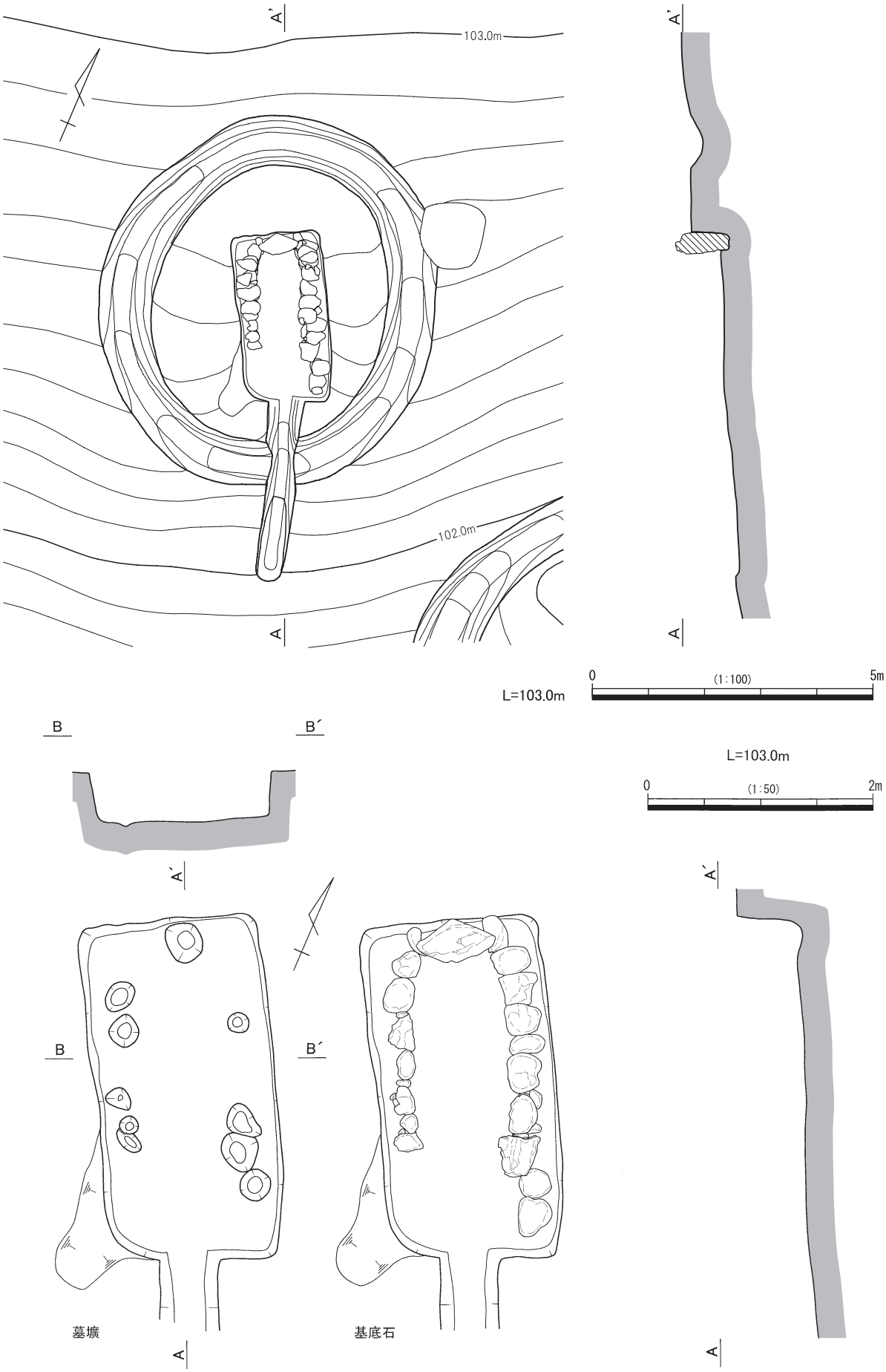
遺物の出土状態

石室からは須恵器など土器類は出土しなかった。室内の排土をふるいにかけたところ、装身具の丸玉、破片となった刀子１、両頭金具３が出土した。追葬時には覆土が堆積していたため、追葬の際、それ以前の副葬品はかき出されたのか、撹拌されたのであろう。いずれにせよ副葬時の位置を留めていなかった。

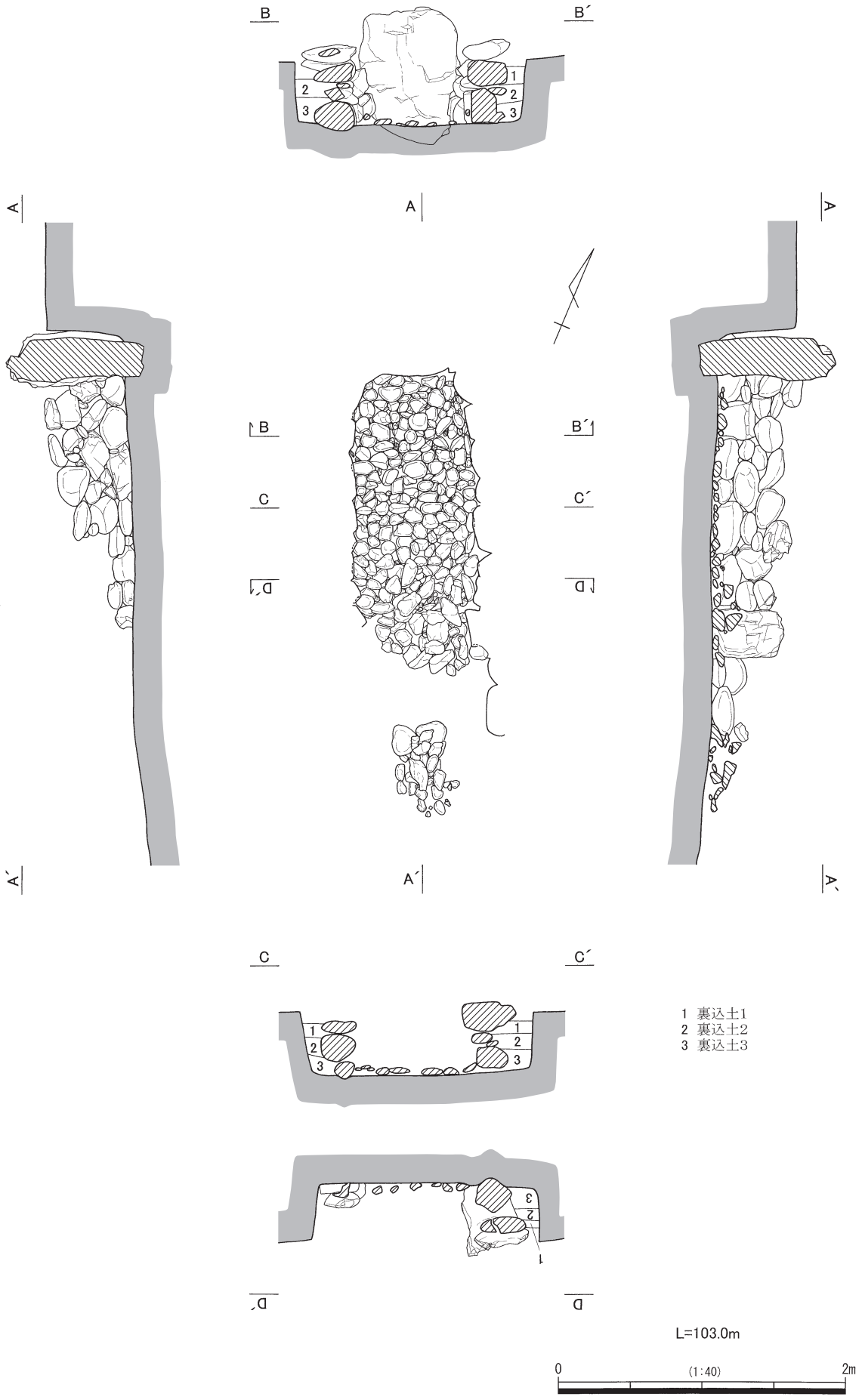
出土遺物

玉類、鉄製品が出土した。

玉類　直径1cm以上の蛇紋岩製丸玉１・２の２個が出土した。直径1.395cmを測る大きいものもある。直



第169図　A32号墳墳丘図・墓壙実測図

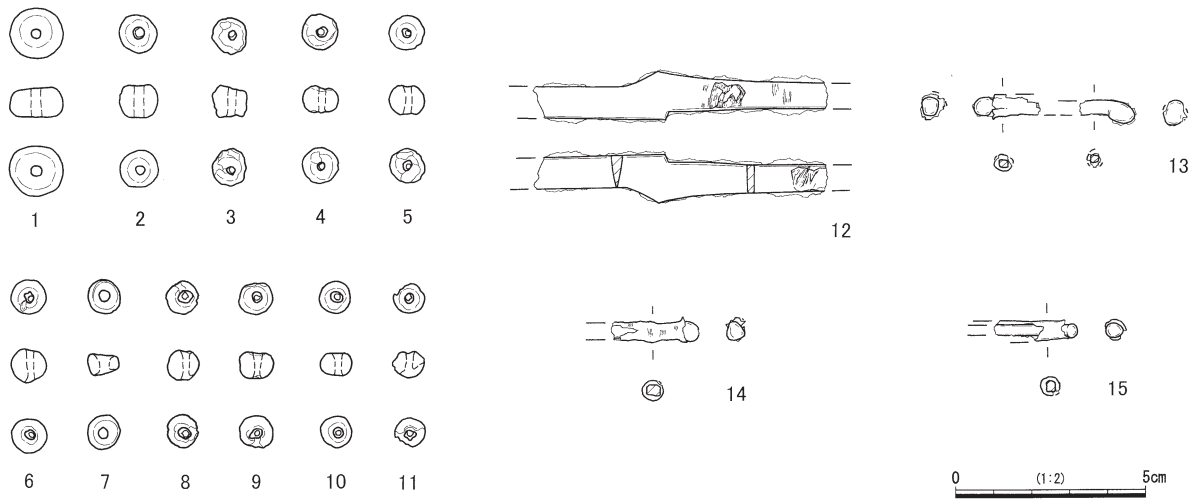


第170図　A32号墳横穴式石室実測図

径８～9mmを測る丸玉３～11は黒味を帯びた凝灰岩製である。破片もあわせ11個以上ある。

鉄製品　12は両関の刀子である。背は浅く、刃部は研ぎ減りが顕著で、斜めに深く切れ込む。13～15は両頭金具と呼ばれた飾り弓の金具である。

出土品に土器が認められないため築造時期や追葬の有無と時期は明確ではない。



第171図　A32号墳出土遺物実測図

㉝　高根山A33号墳

調査前の状況

A33号墳は調査区東端に位置し、標高101.8mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたもので、墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できなかった。

墳丘・周溝

A33号墳は東側小支群に属し、等高線が北側から南に向かって斜行する箇所に築かれている。その点では近接するA32号墳に近い立地である。斜面に築造されたためか、墳丘の盛土はほとんど確認できなかった。

古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに西南に流れる部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側が幅0.9m、深さ0.12m、西側が幅1.1m、深さ0.33m、南側が幅0.96m、深さ0.25m、東側が幅0.8m、深さ0.02mを測る。墳丘は東西6.8m、南北6.8mを測る。墳丘南側で、標高101.26m、墳丘北側で標高101.96mを測り、現状での古墳の高さは0.7mである。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室の平面形は立柱石によって区別された擬似両袖式石室と判断される。石室の保存状態は比較的良好であった。

天井石　検出の際、一部に玄室に落下した状態の天井石が認められた。落下状況から玄門部までは架設されていたと判断される。

玄室　奥壁は墓壙底面に奥壁を据えるための穴を掘って、１枚の鏡石を設置し奥壁としている。左右両側壁の基底石と玄門の立柱石は据えるための穴を掘り、据え付けている。玄室の平面形は、奥壁と玄室入口、玄室最大幅と一致する長方形を呈している。基底石の配列をみると、奥壁を据え玄門部を設置し長さと幅を決めた後、左右の側壁とも基底石は奥壁側と玄門側を同時に据える手順をとっている。最後の調整はやや小ぶりの礫を小口積みにして調整をしている。床面の礫床は良好に残っていた。

前庭・閉塞部　前庭の側壁は西側基底石が大きく、つぎの石を小口積みにし、左右対称になるように長さをそろえている。閉塞石は前庭の１箇所で、下段のみ残っていた。

墓壙・墓道

墓壙は奥壁上端で標高101.83m、下端で101.1mを測ることから、0.8mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、古墳の外へは墓道が続いている。墓壙底面には奥壁、側壁基底石の一部を据える穴を掘っていた。墓道はわずかに曲がって南へ延びている。

遺物の出土状態

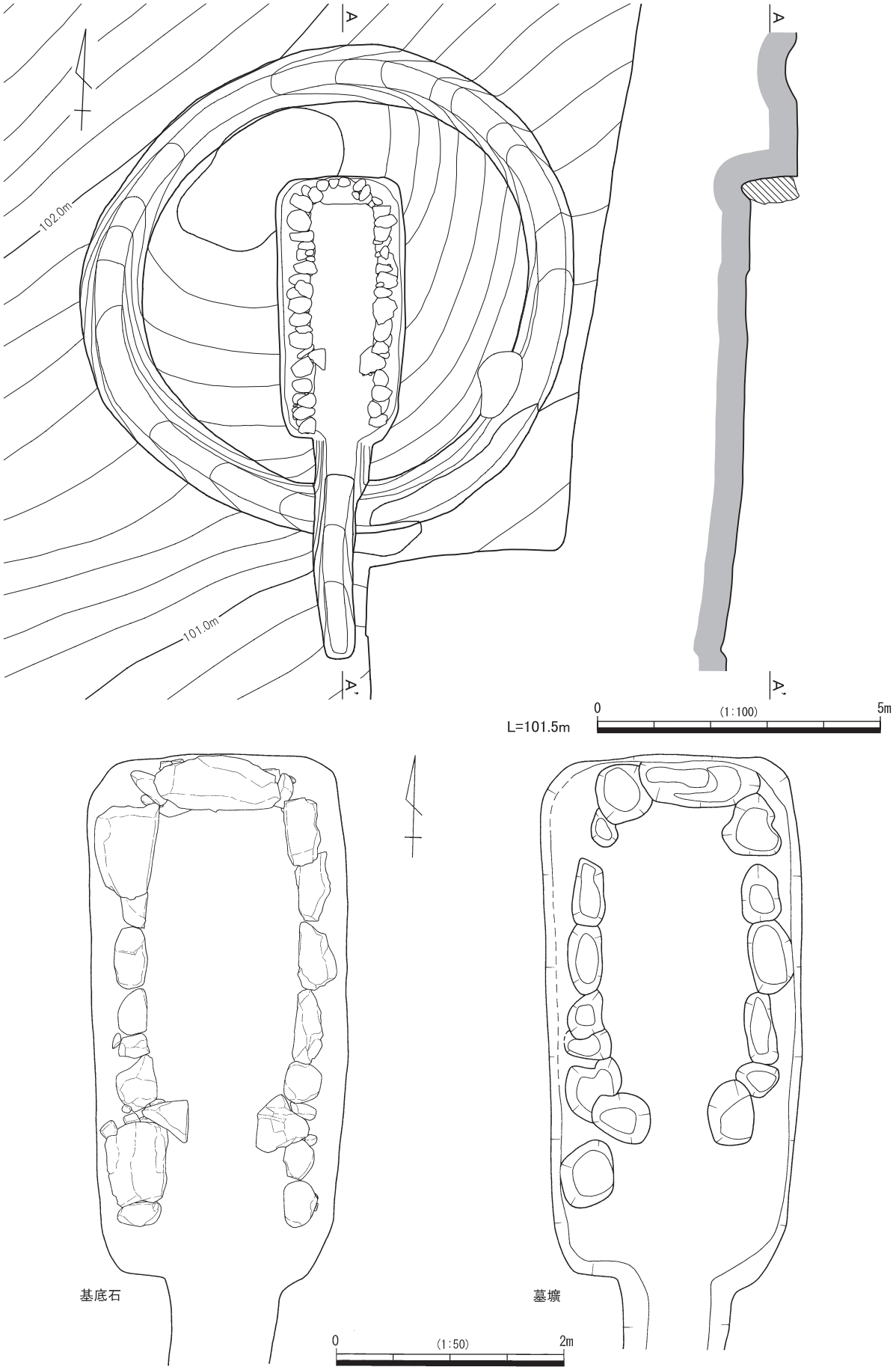
石室からは須恵器フラスコ形瓶、坏類など土器類が出土した。室内から鏃（ハバキ）の付く刀子1、礫床面をはがしたところ、鍔については追葬の際、礫床を敷き直したため、前の副葬品が床下に紛れ込んだと判断される。ほかに刀子刃部片１が出土した。追葬時には前の副葬品を片付けていたと判断される。

出土遺物

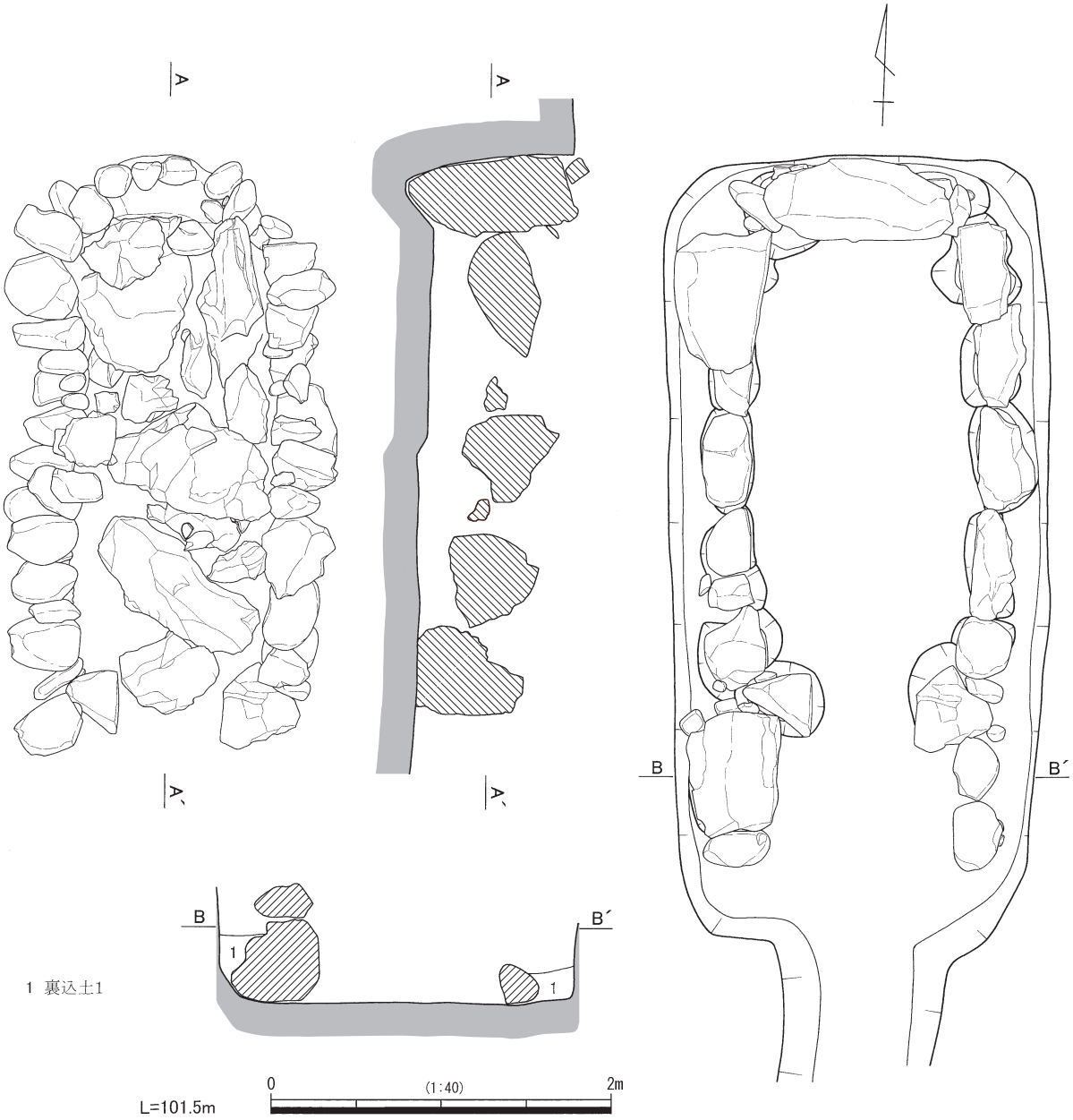
土器と鉄製品が出土した。

土器　坏1・2の坏蓋は乳頭状つまみを持つ坏Ｇ類で遠江須恵器編年Ⅳ期前半に比定できる。6・7は坏身もしくは盌で、坏1・2の坏蓋とセットとなろう。やはり遠江須恵器編年Ⅳ期前半に比定できる。3は無蓋高坏でⅣ期前半からⅣ期後半に比定できる。4のフラスコ形瓶はⅣ期前半からⅣ期後半に、5の長頸壺は胴部中位で鋭く屈曲するタイプで、Ⅴ期前葉に比定できる。ただし長頸壺は表土から出土した破片であり、埋葬時期を示す資料とはいえない。副葬状態をとどめていた坏類、高坏、フラスコ形瓶の時期が最終埋葬（追葬）の時期と判断される。

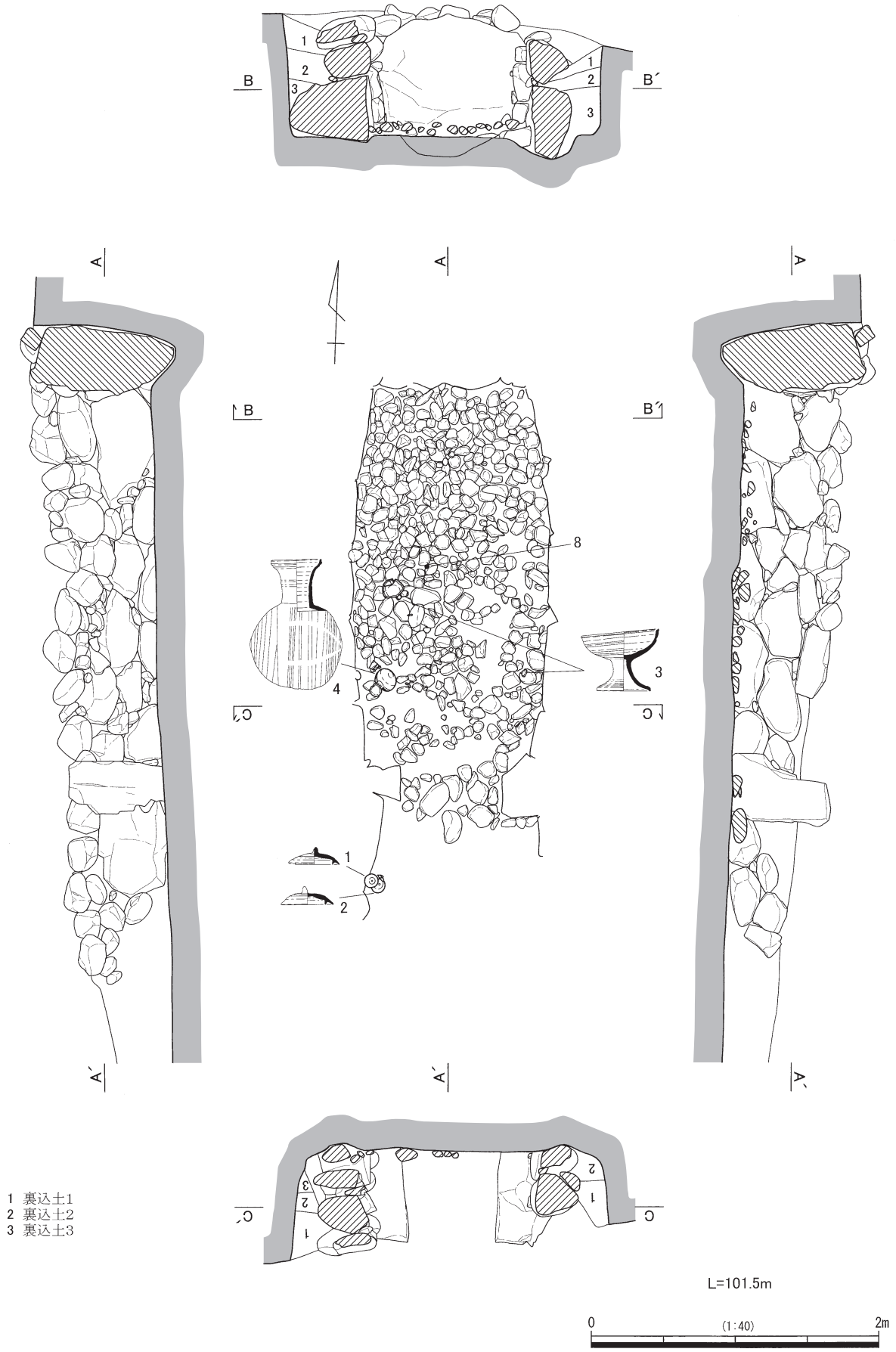
このようにみるとA33号墳出土の須恵器は、遠江須恵器編年Ⅳ期前半からⅣ期後半とにわたっている



第172図　A33号墳墳丘図・墓壙実測図1



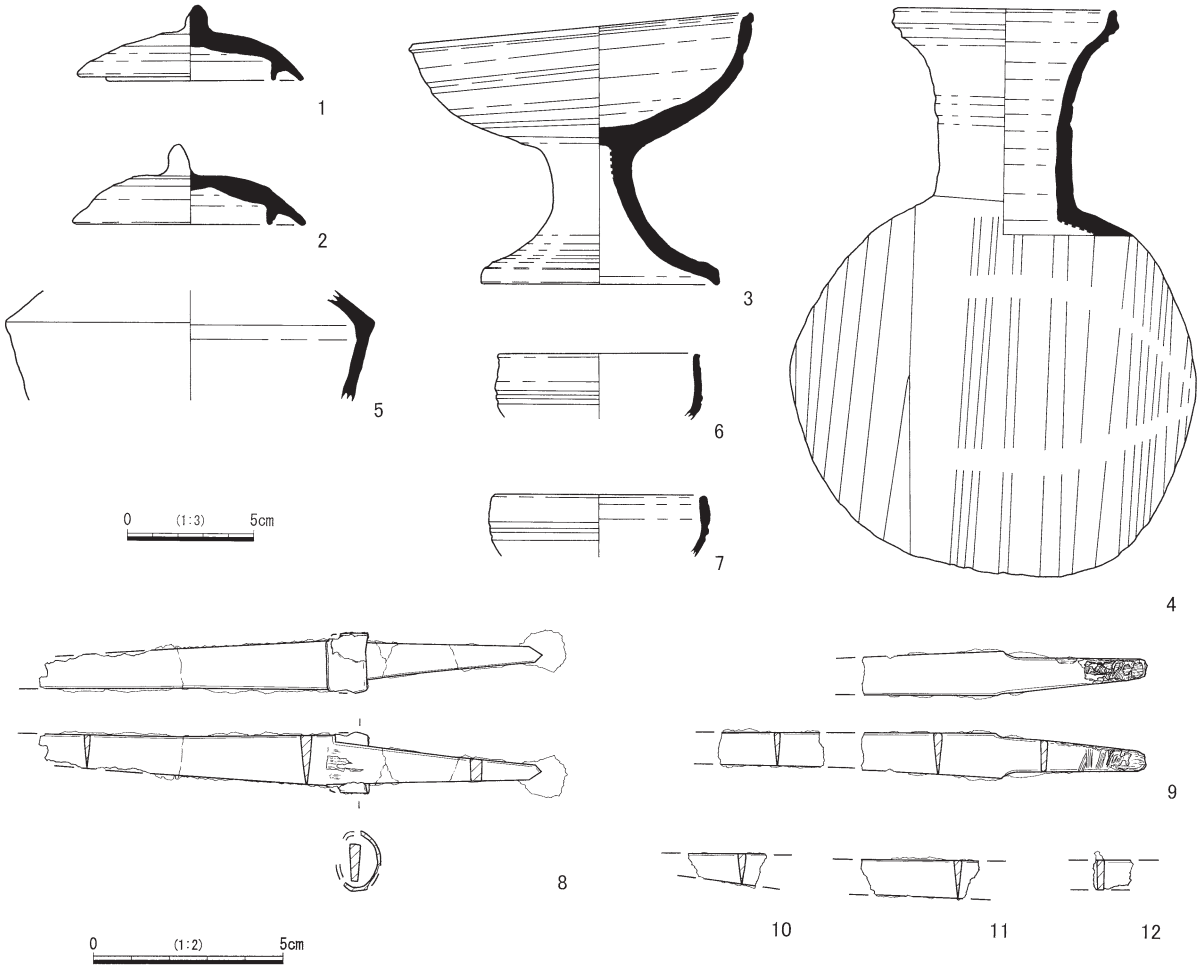
第173図　A33号墳天井石・墓壙実測図2



第174図　A33号墳横穴式石室実測図

と考えられ、A33号墳の築造時期をⅣ期前半以前に、さらにⅣ期前半から後半に追葬が行われたと考えておきたい。

鉄製品　８は刀子である。茎部は先細で、鎺（ハバキ）が残っている。関は片関で背に浅く切り込みを入れる。出土状態から追葬時の副葬品であろう。９～12は刀子の破片である。９は茎部に木の皮を巻いている。茎部から３口の刀子を確認できる。



第175図　A33号墳出土遺物実測図

㉞　高根山A34号墳

調査前の状況

A34号墳は調査区東端に位置し、標高99.5mの等高線付近に築造されていたが、調査前は雑木林に覆われていたもので、撹乱穴と墳丘を示す地形の盛り上がりを認識できた。

墳丘・周溝

A34号墳は東側小支群に属し、等高線が北側から南に向かって屈曲する箇所に築かれている。調査範囲ではもっとも海抜高が低く、他の古墳から隔絶した位置にある。A34号墳は斜面に築造された他の古墳と異なり、テラス状になった平坦な箇所に築造されていた。墳丘の盛土はほとんど確認できなかったが、撹乱を受けた表土が厚く堆積していたので、この土がもとの盛土と考えられる。

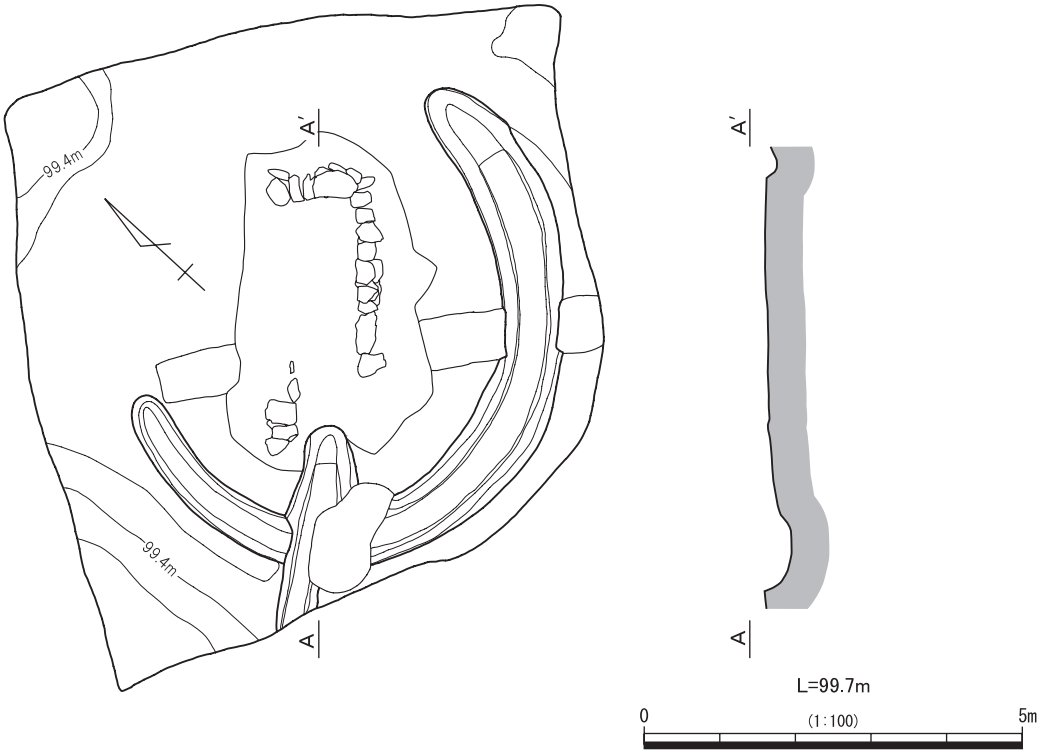
古墳を区画する周溝は等高線が屈曲して南にせり出し、さらに北西に流れる部分を巧みに利用し掘削している。周溝の規模は、北側と西側が消失し不明であるが、南側が幅0.8m、深さ0.18m、東側が幅0.8m、深さ0.13mを測る。墳丘は破壊されているため推定値ではあるが、東西5.0m、南北5.5mと考えられる。墳丘南側で、標高99.37m、墳丘北側で標高99.52mを測り、現状での古墳の高さは0.15mである。

埋葬施設

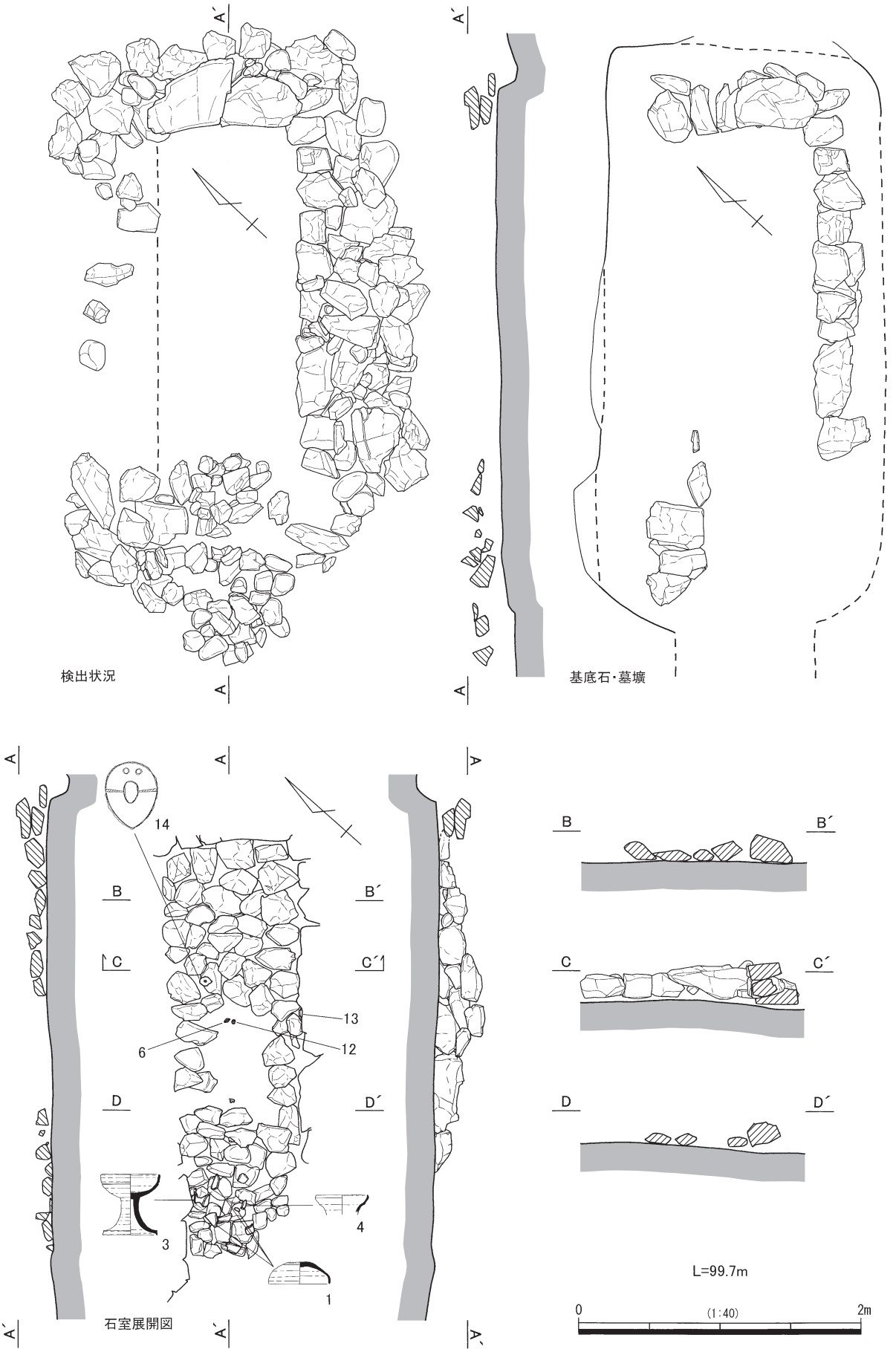
埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された横穴式石室であった。石室は西側壁の大半と前庭の側壁が消失しているため、その平面形は不明確であるが、残存部から無袖式石室あるいは擬似両袖式の可能性が高い。

天井石　検出の際、天井石が認められなかった。落下した様子もなく、転用のため外部に運び出されたと判断される。

玄室　石材の抜き取りが行われ、検出時には側壁の基底石と礫床が残っていたのみであった。奥壁はすでになく、数個の基底石が置かれていた。さらにこの基底石のうち3個の礫が小口積みであることから、



第176図　A34号墳墳丘図



第177図　A34号墳横穴式石室実測図

大型石を設置し奥壁とした可能性は低く、複数の礫を積み奥壁としたと推定される。東側壁の基底石と西前庭の基底石は横積みと小口積みによるが、他の古墳と比べ小口積みがやや多い。玄室の平面形は、奥壁と玄室入口、玄室最大幅の一致する長方形を呈している。残された基底石の配列をみると、奥壁を据え玄門部を設置し長さと幅を決めた後、側壁の基底石を奥壁側と玄門側を同時に据える手順をとったと推定される。床面の礫床は良好に残っていた。この礫は長径20～30cmの礫を敷いている点で、床石としては大きく他の古墳と異なる。

前庭・閉塞部　前庭の側壁は西側基底石を小口積みにしている。閉塞石は残っていなかった。

墓壙・墓道

墓壙はほとんど残っていなかった。平面形は残っている墓壙下端から長方形を呈していたと推定される。古墳の外へは墓道が続いている。石室主軸は大きく南西に向き、わずかに残った墓道は南西へ直行して延びている。

遺物の出土状態

石室西側壁からは須恵器高坏、坏類など土器類が破損し出土した。奥壁に近い部分でから切子玉、丸玉、小玉、耳環など装身具、直刀の鍔、鉄鏃７本以上、刀子１が出土した。撹乱を受けていないと考えられる区域でも装身具や鉄製品が離れて出土しているので、追葬時に移動したと判断される。

出土遺物

土器と玉類、耳環、鉄製品が出土した。

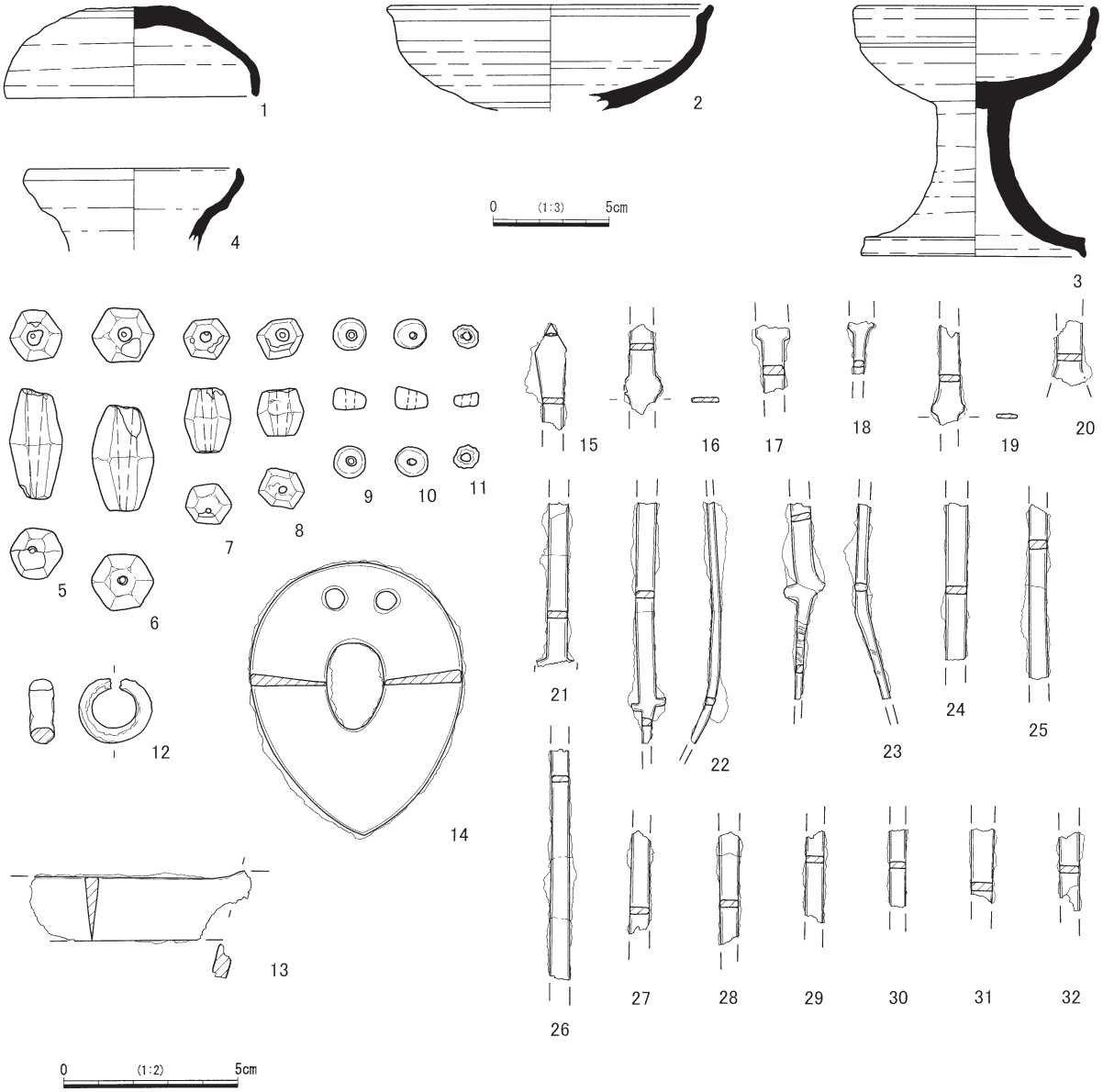
土器　坏１の坏蓋は坏Ｈ類の坏で、遠江須恵器編年Ⅲ期末葉からⅣ期前半と推定される。２は無蓋高坏で坏部下位が球形を呈し、口縁部が外反するタイプでⅢ期末葉に比定できる。３は坏部中位に沈線をめぐらした小形高坏で、Ⅲ期末葉からⅣ期前半に比定できる。４は瓶類でⅢ期末葉からⅣ期前半に比定できる。

ただしA34号墳は一部が大きく撹乱を受けているため、出土した須恵器がそのまま埋葬時期を示す資料とはいえない。３の高坏が副葬状態をとどめているとすれば、この時期が最終埋葬（追葬）の時期と判断される。石室内から出土した須恵器は、遠江須恵器編年Ⅲ期末葉からⅣ期前半にわたっていると考えられるが、追葬時に片づけ行為が行われているため、A34号墳の築造時期をⅢ期末葉もしくはそれ以前と考えておく。さらに残された副葬品と出土状況から、Ⅲ期末葉からⅣ期前半に追葬が行われたと考えておきたい。

玉類　水晶製切子玉４個が出土した。そのうち５・６の２個は長さ3cm以上を測り、他の７・８の２個は長さ1.8～1.3cm前後を測る。直径９～8mmを測る丸玉９・10は蛇紋岩と凝灰岩製で、11の小玉は経年変化によって漂白された鉛ガラス製である。それぞれ１個ずつ認められる。

耳環　12の耳環は銅地で銀張りである。その上の鍍金は剥離しているが内側の一部に残っていた。

鉄製品　13は直刀片である。14は二円窓の直刀の鍔である。二円窓の鍔は房総半島から東北南部に多く、本例は静岡県内では原分古墳に次いで２例目となり（大谷宏治 2008）、分布する範囲では西端となる。先の直刀に付属するかは判然としない。15～32は鉄鏃である。頸部片が多く、鏃身の形態のわかる例は鑿箭式である。曲げられている例がある。一部重なって出土しているので、副葬の際には束ねられていたと考えられる。



第178図　A34号墳出土遺物実測図

㉟　高根山A35号墳

調査前の状況

A35号墳は東側小支群に属し、標高104.4m付近に築造されていた。調査前のA35号墳は雑木林に覆われ、墳丘を示す地形の盛り上がりは、認識できなかった。

墳丘・周溝

A35号墳は石室の主軸方位を南北とし、A17・29号墳と大略一致していることから、両者の間にある密接な関係を推定できた。

古墳を区画する墳丘も周溝はなく、石室を盛土で覆うだけであったと推定される。

埋葬施設

埋葬施設は古墳中央部に墓壙を掘り、その中に構築された全長0.75mを測る竪穴系小石室であった。

石室　前壁幅0.23m、奥壁幅0.3mと奥壁側がわずかに広くなる形態である。奥壁と前壁はやや大きな隅丸長方形の礫を広口積みとし、側壁の基底石は横積み主体と違いをみせている。石室は奥壁と前壁の基底石を最初に設置し幅と長さを決めた後、側壁基底石を奥と前から設置し小口積みの箇所で最終調整したと考えられる。両側壁の高さは、ほぼ20cm前後であった。この石室規模では成人を伸展の形で埋葬することは不可能である。土中で骨と化した遺骨を改葬するか、あるいは小児を納めたと考えられる。

検出の際には円礫が石室上部から出土したが、石室幅を架設するだけのサイズの天井石は認められなかった。天井石の代わりに石室を土で埋め、上部を礫で覆ったのであろうか。

床面の礫床は長径15cmから20cmの礫がしかれていた。礫床は撹乱を受けていないものの、副葬品が認められなかった。

墓壙

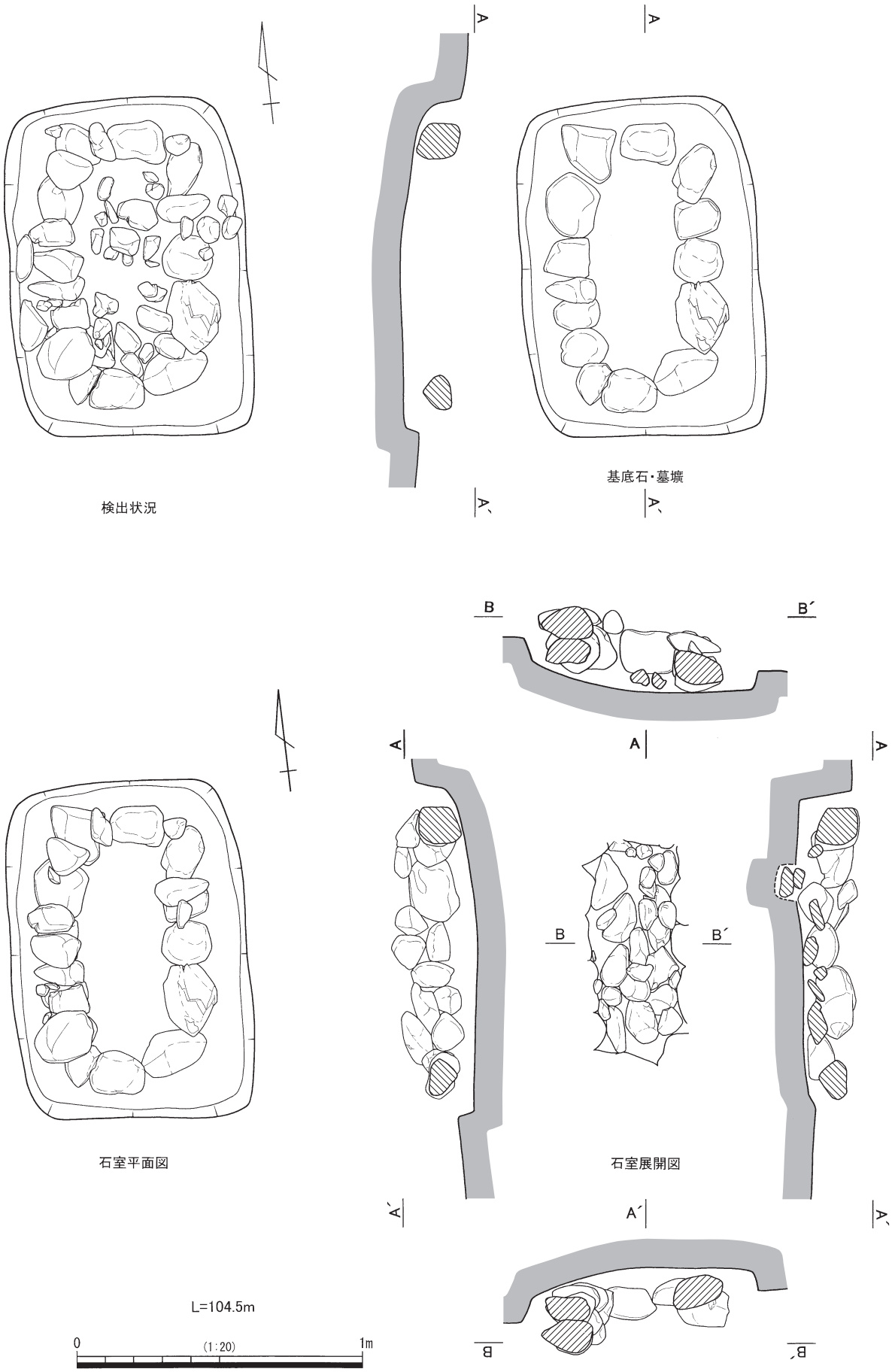
墓壙は奥壁上端で標高104.45m、下端で104.32mを測ることから、0.13mほどを掘り下げていた。平面形は長方形を呈し、墓道は認められなかった。

出土遺物

石室と床面の遺存状態が良好であったことからすれば、撹乱や盗掘の可能性はきわめて少ない。もともとこの古墳には副葬品は無かったか、あったとしても後世まで残るようなものではなかった可能性が高い。築造年代についても明確ではなかった。

引用・参考文献

浜北市教育委員会　1995『浜北市高根山古墳群』
浜北市　2004『浜北市史　資料編　原始・古代・中世』
大谷宏治　2008「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳　調査報告編』



第179図　A35号墳横穴式石室実測図

第４節　古代墓群の調査

調査区中央から127基を数える土坑墓群と高根山Ａ16号墳の東側から１基の火葬墓が検出された。土坑墓は一定の範囲に密集して掘削され、その時期は10世紀後葉から11世紀前葉に一点を置くと考えられる。土坑墓から離れ、単独で築造された火葬墓についても、その時期は10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。以下、時期不明の土坑とともにその概要を報告する。

１　土坑墓

⑴　土坑墓（SX）01～土坑墓（SX）127

調査区の中央、12号墳と13号墳の南側から集中して127基の土坑墓が発見された。高根山古墳群の墳丘とも重なっていないことから、意図して古墳が造られていない空間を利用したものと判断される。この土坑墓の分布は１号墓から52号墓の西のグループ、53号墓から100号墓の中央グループ、101号墓から127号墓の東のグループに分かれる。それ以外からは認められず、場所を選択し集中して掘削したと判断される。なおSX01～127は土坑墓と判断し、１～127号墓と記述した。

これらの土坑に共通する以下のような特徴が認められた。

- 集落跡から発見される土坑と異なり、日常生活から生じる破片となった土器片や石製品や金属道具片などの廃棄品が遺構の周囲や覆土から出土していないこと
- 当時、畑や田などの耕地と考えられない山林の緩やかな斜面に次々と掘削され、他の遺構とも同時存在しないこと
- 土坑から唯一完形の碗・皿が２点出土し副葬品と考えられること

このことから127基の土坑は土坑墓と判断した。

これら土坑墓の形状はほぼ共通して隅丸長方形を呈するが、その中を土坑上面に礫をならべているものとそうでないものに大別できる。前者は長径15～5cm大の土坑上部に並べているが、断面や覆土からすれば土坑中央に向かって礫が沈む傾向が認められた。それは土坑に埋葬された遺体の腐敗が進み、体の軟部組織が消失したことにより覆土に空間ができ、上部の覆土がそのまま沈んだため、同時に礫も沈んだものと考えられた。127基の覆土は暗褐色粘質土で、わずかに炭化粒子を含んでいた。土坑は自然堆積によって埋まったとは考えられず、しまりによって３層に分類できた土壌もあるが、変化は微細で、同一土壌で埋められたと考えられる。覆土に含まれていた炭化粒子の量からすれば、火葬に伴うものではなく、土地を利用するために除草の際に焼き払ったため、周辺の表土に炭化物が含まれ、その土を掘削し、埋めたためと考えられる。

礫の出土状況には以下の特徴が認められた。

- ８．23．24．25．27．30．36．47号墓のように土坑の全面に並べる
- １．３．９．17．21．22．31．33．39号墓のように土坑の片側に並べる
- その他散在的にならべる

散在的に並べたと見られた遺構は、礫を後世、開墾の際に抜き取られ、隙間になったものもあったと考えられる。すると１号墓から52号墓、85号墓、92号墓、93号墓、113号墓のように、これら自然石である礫を配列した土坑墓とそうでない53号墓から84号墓、86号墓から91号墓、94号墓から112号墓、114号墓から127号墓とは何らかの違いがあることが想定される。この違いを土坑墓の分布からみると、礫を上部に配置した土坑墓は西側のグループすべてと中央グループに２基、東側グループに１基が認められた。礫を伴う墓では重複する墓は７号墓と８号墓、23号墓と25号墓、24号墓と25号墓、27号墓と

第180図　古代墓全体図

48号墓、47号墓と48号墓など極めて少ない。つぎの埋葬の際、礫群が標識として機能していたことから重複が避けられたと考えられる。重複した墓は何らかのつながりがあり、あえて近接した位置に土坑を掘削したものと推定したい。

では礫の伴わない土坑墓はどうであろうか。各土坑墓と土坑墓の重複はほとんど認められない。

このことは、現在では痕跡をとどめないものの、地上標識として礫群よりはっきりしたものが存在したと考えることができる。その可能性としては、地表面より高い木製卒塔婆を建立していたとすれば、理解しやすいのではないだろうか。

つぎに土坑墓の規模と主軸方位から埋葬方法を推定したい。土坑墓の長径では最大1.4m、最小0.8m、短径では最大0.98m、最小0.45m、深さでは最大0.48m、最小0.13mを測る。深さは後世の開墾で削平されたと考えられるが、長径1.1m、短径0.6m大が平均的な規模である。この規模でどのような埋葬が行われたのであろうか。中世最大規模の墓地遺構で埋葬部位がよく残っていた鎌倉市由比ヶ浜南遺跡（斎木秀雄ほか 2001）によれば、高根山土坑墓の規模は、手足を折り曲げた屈葬もしくは折曲葬であれば、成人の埋葬が可能であり、それより小さい乳幼児、小児の埋葬も当然ながら可能である。おそらく1土坑に1体の直葬であったと判断される。

主軸方位をみると90°より西へ45°までの例が23例、46°から90°までが28例、90°より東へ45°までの例が11例、46°から90°までが65例である。つまり南北方向より、半数近くが、地形の稜線に沿った東西方向に振れる例である。ではどちらが古く、どちらが新しいのであろうか。わずか1例ではあるが、南北方向の24号墓が東西方向の25号墓を切って作られていたことから、新しいと判断された。ほかに7号墓と8号墓は近接しているものの、新旧関係はつかめなかった。

後世、北枕で浄土の方へ西向きに埋葬するというが、高根山土坑墓の場合、まだそこまで至っていない。

副葬品は消滅しやすい有機物の木椀なども想定されるが、48号墓を除いて認められなかった。土坑墓の年代は副葬品の灰釉陶器碗から10世紀代にその一点があるとしかわからないが、127基という数量から毎年2人が死亡したとしても、60年以上は存続したものと判断される。

⑵　出土遺物

48号墓から浜北窯（灰釉陶器窯）の碗と皿が副葬品として出土した。1は碗で、釉薬は掛けられていない。体部から口端部にむかってゆるやかに外反し、外側に踏ん張ったやや高い高台をもつ。

2は皿で、体部から口端部にむかって外反し、外側に踏ん張った高台をもつ。釉薬は掛けられていない。両者の時期はその特徴から大屋敷1号窯の時期と考えられる。実年代については安定した見解がないので、単に10世紀後葉から11世紀前葉としておく。

第202図3、4は採集資料であるが、土坑墓の年代を示すと考え掲げた。3は体部から口端部は外反する。4は直立気味の高台を持つ。いずれも無釉でその特徴から48号墓出土陶器と同じ時期の碗であると考えられる。23号墓からは上部を覆った礫から焼けた平瓦1片が出土している。

2　火葬墓

⑴　火葬墓（SX）128

16号墳の西に近接して発見された。SX1からSX127の土坑墓から直線距離にして35mほど離れている位置である。平面形については長いもので0.45m、短いもので0.15mの礫を長辺1.9m、短辺1.5mの長方形に並べて縁石としている。西側の辺と南側の辺は残っていない。一辺を決める縁石は大きいものを選択していることから、縁石を最初に並べ形を造ったのち、やや小ぶりの礫を中に充填したものと推定される。この小ぶりの礫をはずすと、炭の多い層が2層にわたって認められたが、下層では炭の入った

層で0.9～0.8mの範囲に整地され、その上部に直径0.25mの範囲で炭化物を含む層が重なっていた。直径0.25mの範囲から桶のような有機質の容器に火葬骨を納めたと推定される。炭の含まれた層にはロクロ土師器もしくはロクロカワラケの破片が出土した。この墓の築造と埋葬過程ついては、縁石で長方形の壇を築き、炭を含む層で整地し墓域を造る。そののち直径0.25mを測る火葬骨を納めた容器を置き、さらに礫で上面を覆ったものと推定される。時期についてはロクロ土師器もしくはロクロカワラケから平安末から鎌倉時代とするか、北隅はずれから出土した長頸壺から10世紀後葉から11世紀前葉とするかの２案が考えられる。近接する土坑墓からすると、この火葬墓も後者の年代と考えたい。土坑墓から離れていることや火葬されていることから、同じ地縁や血縁であっても、土坑墓の被葬者と隔絶した地位にあったと推定したい。

⑵　出土遺物

底部小破片で図化はできないが、ロクロ土師器もしくはロクロカワラケがある。５の長頸壺は自然釉が肩から胴部にかけて掛かり、高台を持つ。胎土から浜北窯の製品と考えられる。時期は土坑墓と同じ大屋敷１号窯と同じころに比定したい。

３　土　坑

SF01

３号墳墳丘南側から延びた墓道に近接する東側から発見された。長径1.82m、短径1.47m、深さ0.14mを測る。覆土は２層に分かれるが、表土を形成するしまりのない土に近似していた。このことから近世以後の掘削であると判断された。遺物は認められなかった。

SF02

４号墳と５号墳の北側から発見された。長径1.09m、短径1.01m、深さ0.08mを測る。覆土は２層に分かれるが、表土を形成するしまりのない土に近似していた。このことから近世以後の掘削であると判断された。SF01とともにいつ頃の遺構で、何のために使用されたのかは不明であったが、覆土からすれば、戦争中の開墾や戦後の食糧増産の時期に何らかの意図で掘削された可能性が高い。

採集遺物の中に第203図１の短頸坩や新寛永通宝２枚がある。この銭貨は江戸時代後期にこの周辺を訪れた際の落し物と思われる。１は西小支群から採集遺物である。

４　まとめ

高根山Ａ群の一角で、10世紀後葉から11世紀前葉に年代の一点を置く土坑墓群と火葬墓が発見されたが、この時期の蔵骨器の発見はあるものの、土坑墓群や火葬墓の発見はほとんど例を聞かない。ここでは例の少ないことについて、１・２、その意味を掘り下げてみたい。

古墳時代後期は爆発的に群集墳が築造され、多くの人々が手厚く死者を埋葬する時代であった。遠江地域の傾向をみると、７世紀末葉から８世紀初めに入ると古墳築造がほとんど停止し、８世紀前葉には古墳への埋葬が終了したことがうかがえる。つまり律令期に入ると、人々を埋葬する遺跡は火葬墓、もしくは火葬した骨を納めた蔵骨器埋納地など、極めて少数に限定される。言いかえれば厚葬から死者の見えない時代になった、といえよう。

もともと火葬とは仏教の葬送儀礼であり、火葬骨を納めた蔵骨器の背景には手厚い仏教儀礼とそれを執行できる布施と身分があった。つまり当該期にあっては少数例であることも首肯される。

磐田市一の谷墳墓群の例（磐田市教育委員会 1993）によると、遠江国府という都市では12世紀後半から中世的共同墓地が開始されることが判明した。しかしながら村々に六道銭とカワラケを副葬する土坑墓や火葬墓が認められ、庶民の葬送がみえるのは15世紀中葉から後葉であり、さらに墓へ石製塔婆を

建立し供養するのは16世紀に入ってからである。

高根山土坑墓群はほとんどが副葬品の認められない墓で、その密集度からみて共同墓地とみてよい。おそらくそれも庶民と呼ばれる村落の一般構成員の墓であったとみられる。

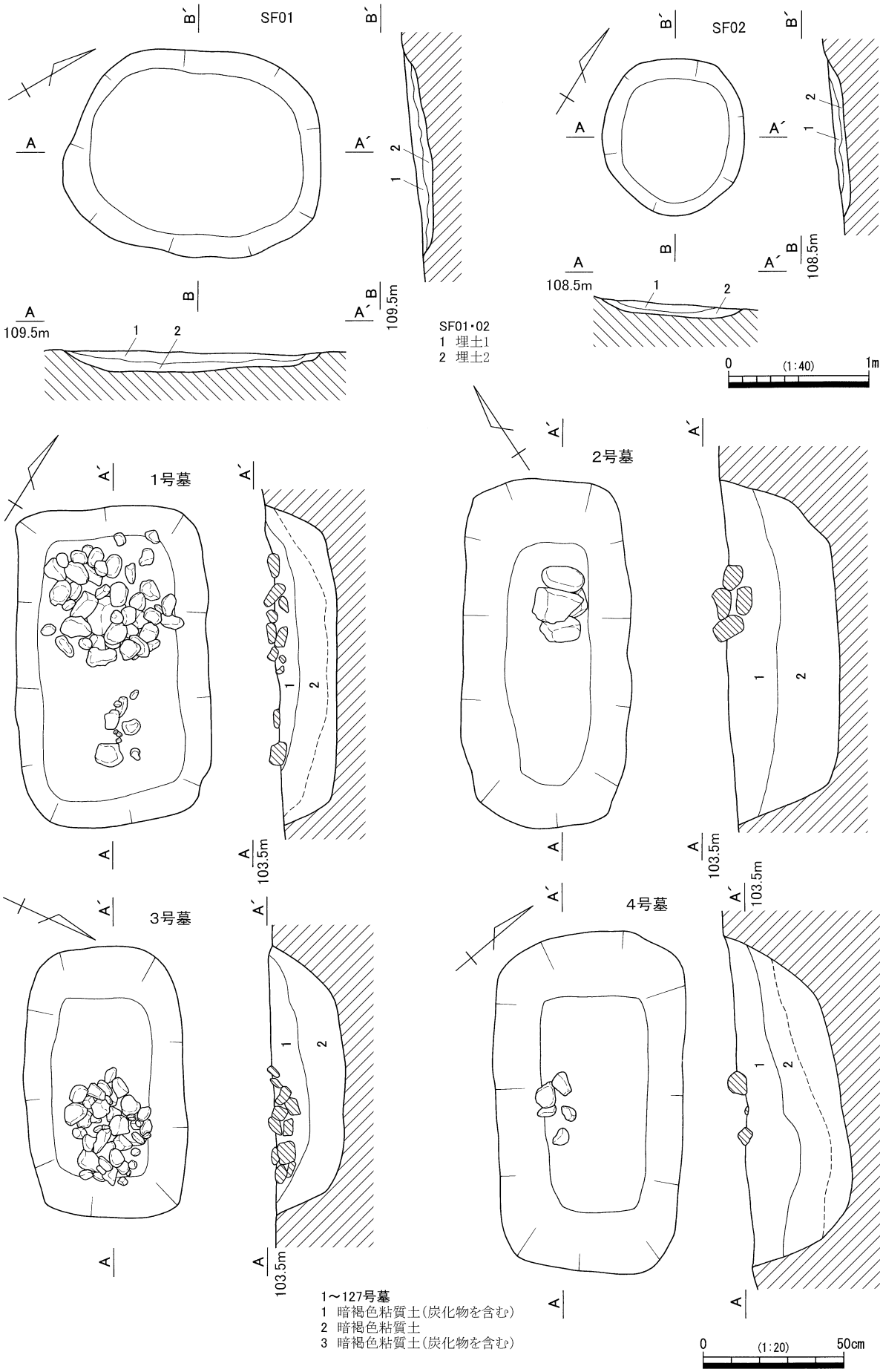
近年、古代から中世墓地が成立するまで、葬祭の有無は別として、庶民はある一定のエリアの地上に放置されたことや遺棄されていたことがあったとする、勝田至氏や前嶋敏氏の見解がある（勝田至 2006）（前嶋敏 2007）。すると高根山土坑墓群はきわめて早い段階に成立した共同墓地といえよう。

今回、古墳群の発掘調査にともなって発見されたが、それまでこの時期の墓所が存在するとは予想すらしなかった場所である。墓地の立地する高根山は直近の平地から50mほど高い位置にあり、耕地にならない、当時は古墳という荒れ墓が累々と存在する山林であった。つまり生活域である集落から遠い存在ではあるが、このような場所が当時の人々にとって見上げると緑ひろがり、背景に空と雲がある天上に近い場所であったともいえよう。今後、高根山以外にも類例が増えることを予想し、広く死者が見えない時期の墓の発見を待ちたい。

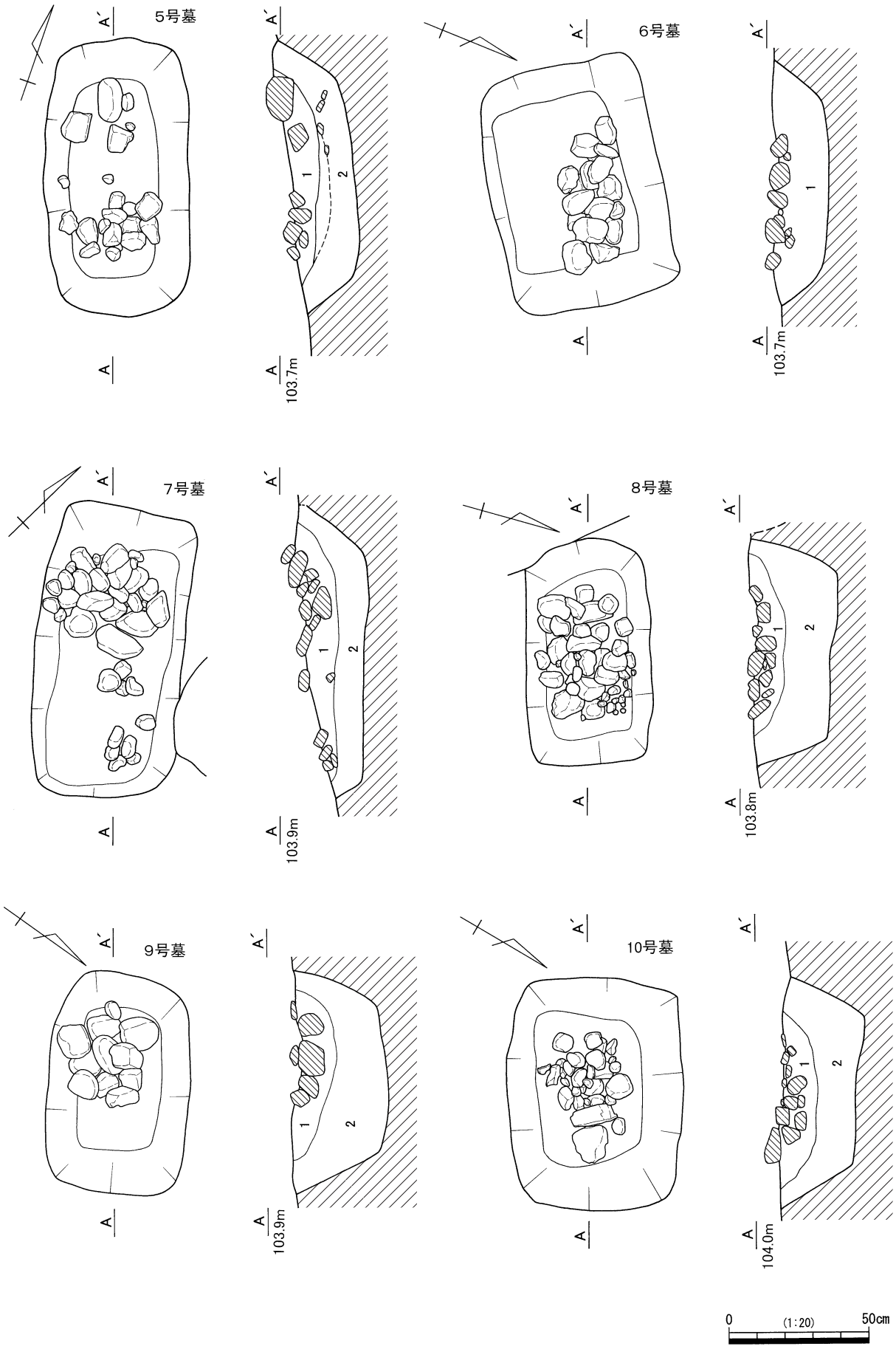
どのような葬送祭祀が行われたかは別として、死者を荼毘することや、土を掘削し死者を埋葬するという行為は、当然ながら何らかの葬送祭祀で行われたと推定される。ところで、これらの埋葬後、のちの遺物も認められず、継続的な使用も認められなかった。このような状況から追善供養の有無を認識するだけの材料には乏しいが、高根山の墓所は埋め墓として機能していたとみてよい。

引用・参考文献

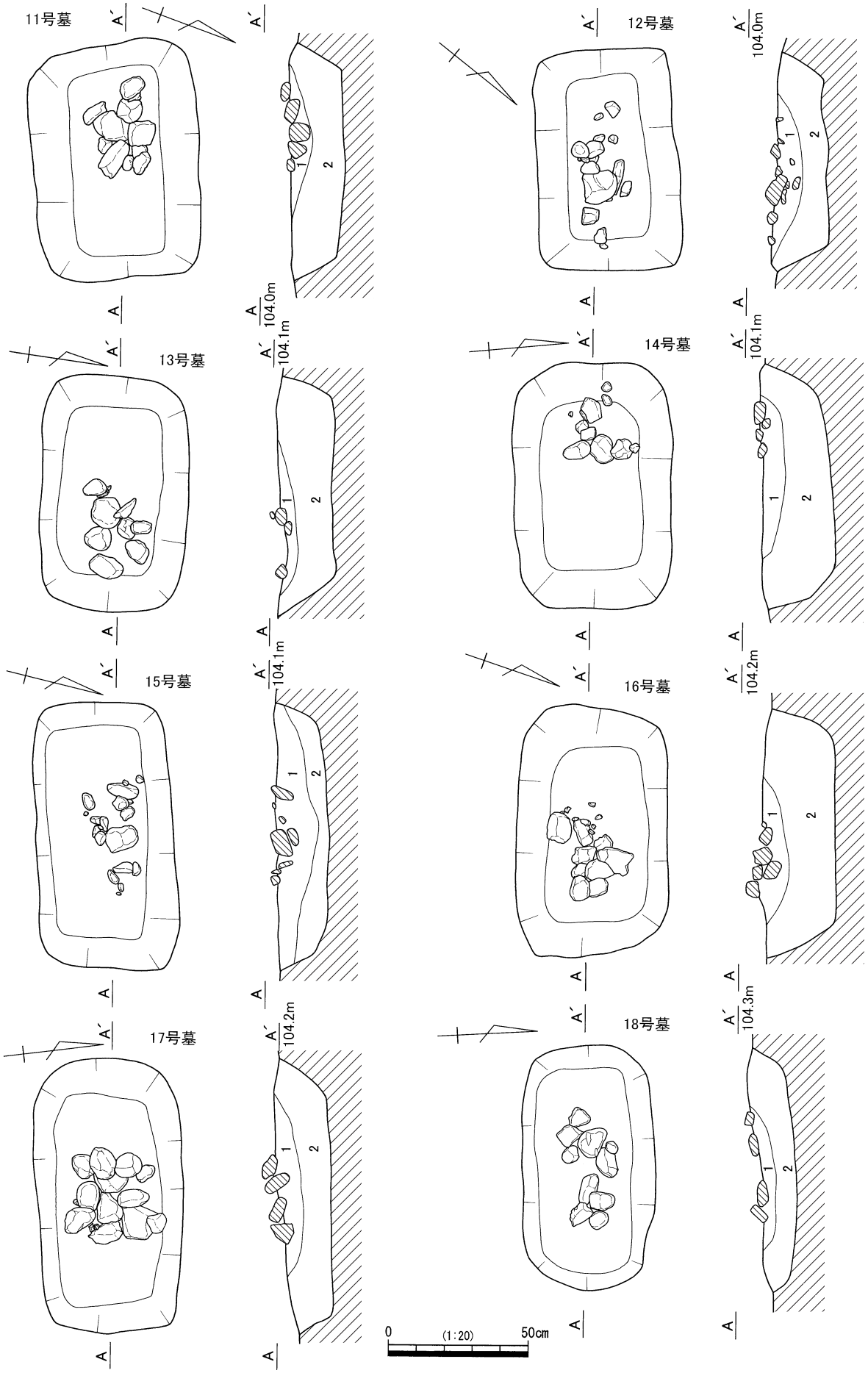
斎木秀雄ほか　2001『由比ヶ浜南遺跡』
磐田市教育委員会　1993『一の谷中世墳墓群遺跡』
勝田至　2006『日本中世の墓と葬送』
前嶋敏　2007「文献史料から見た「遺棄葬」」『墓と葬送の中世』



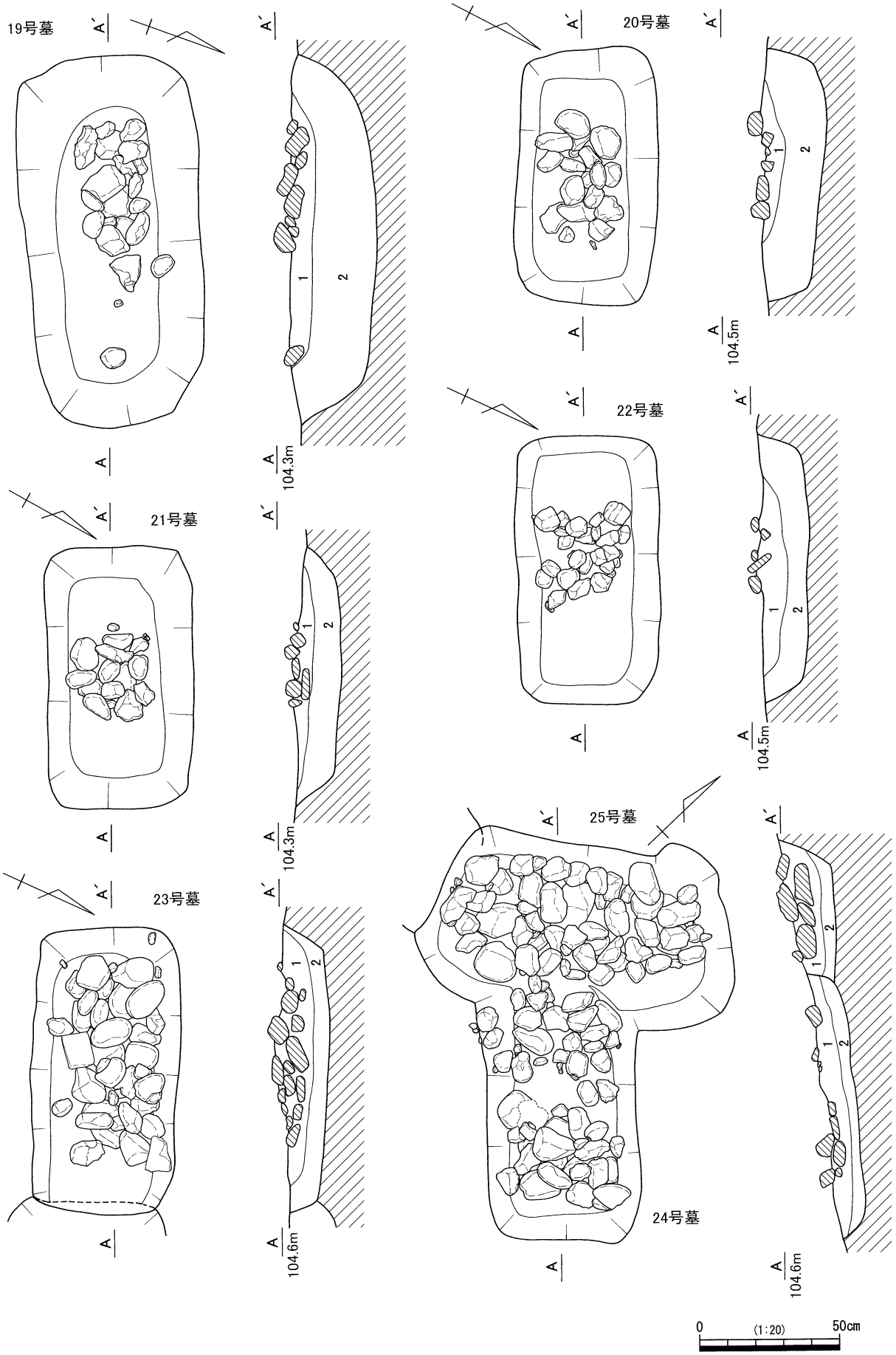
第181図　土坑・土坑墓平・断面図1



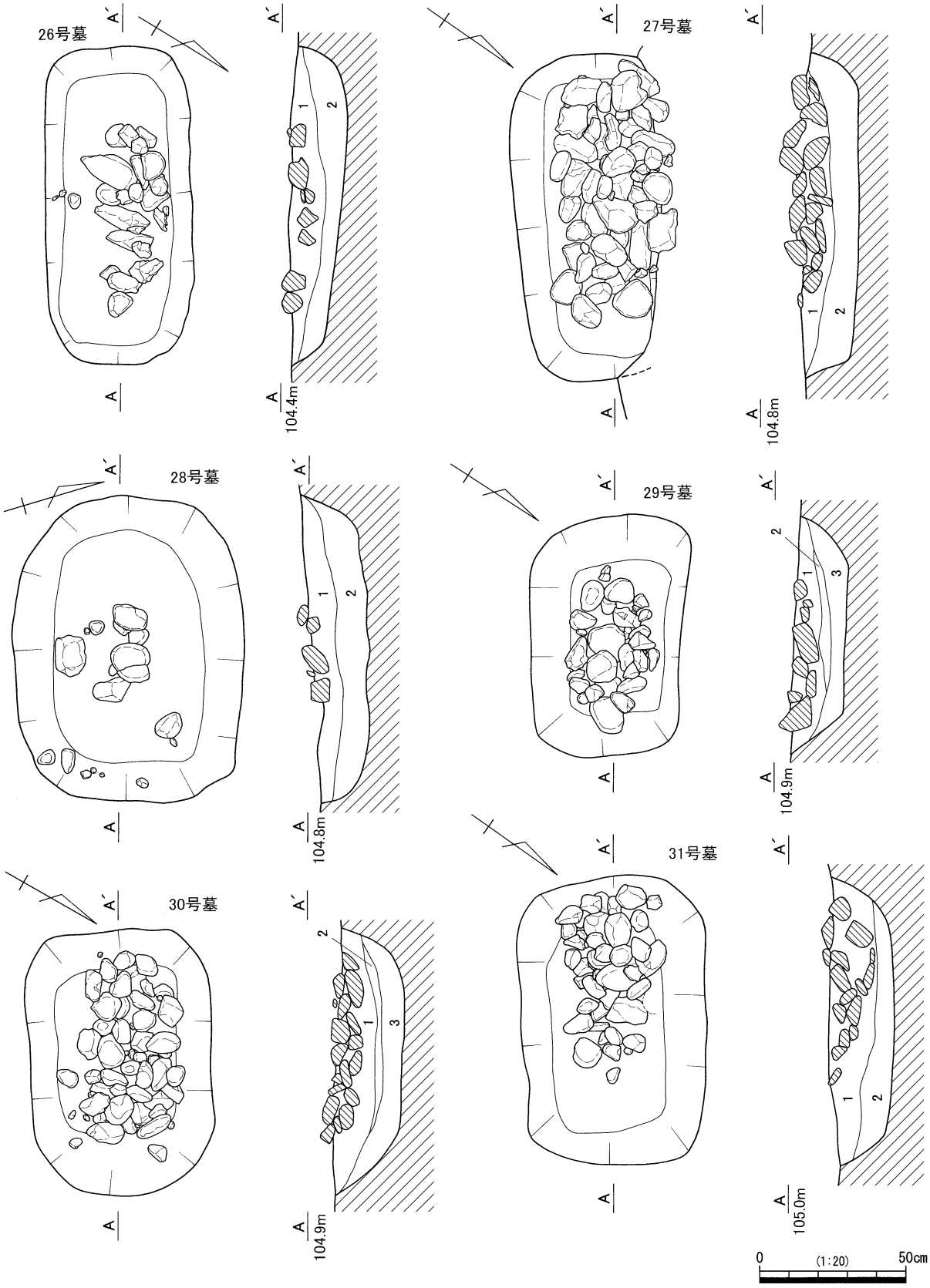
第182図　土坑墓平・断面図2



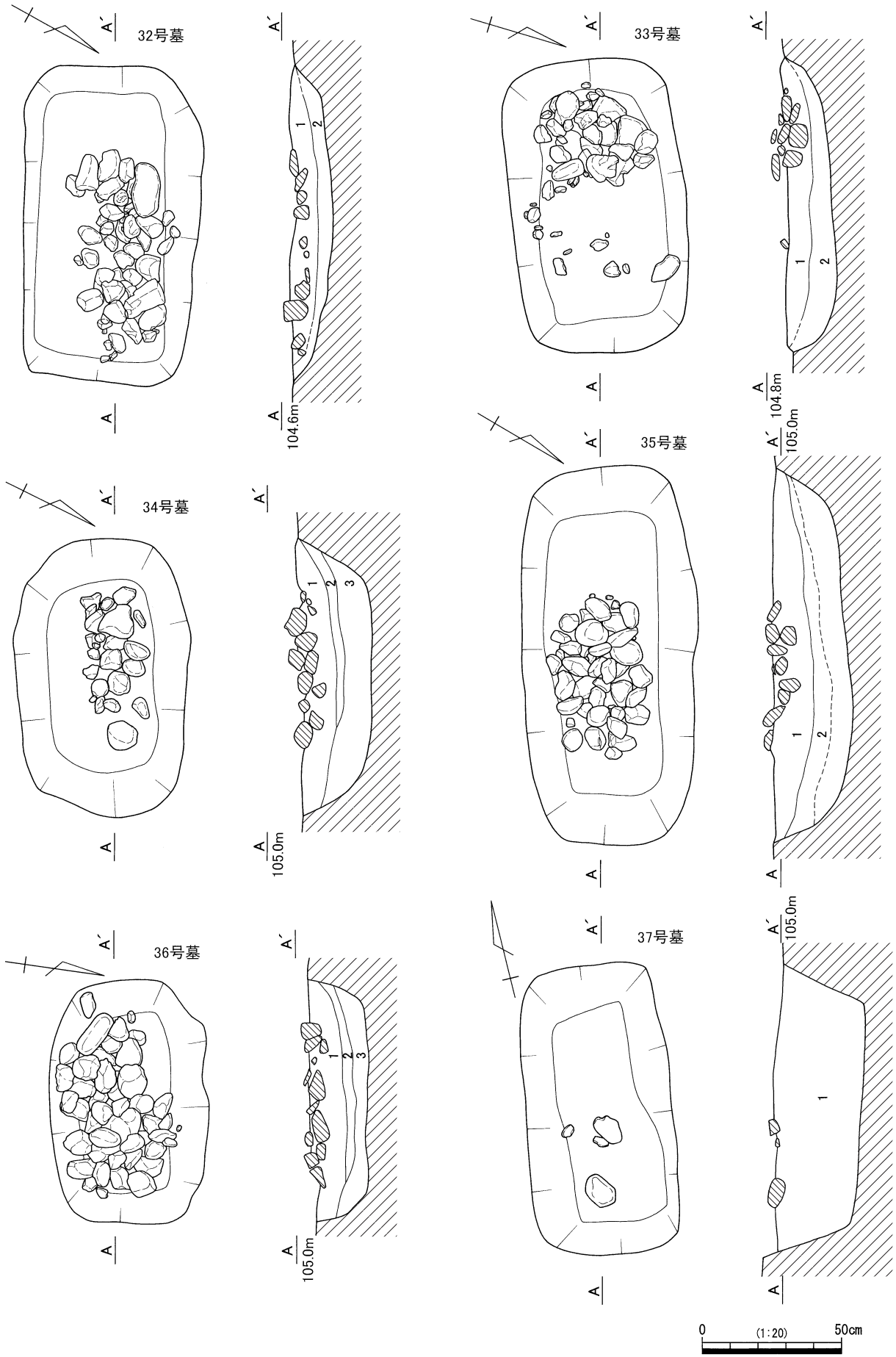
第183図　土坑墓平・断面図3



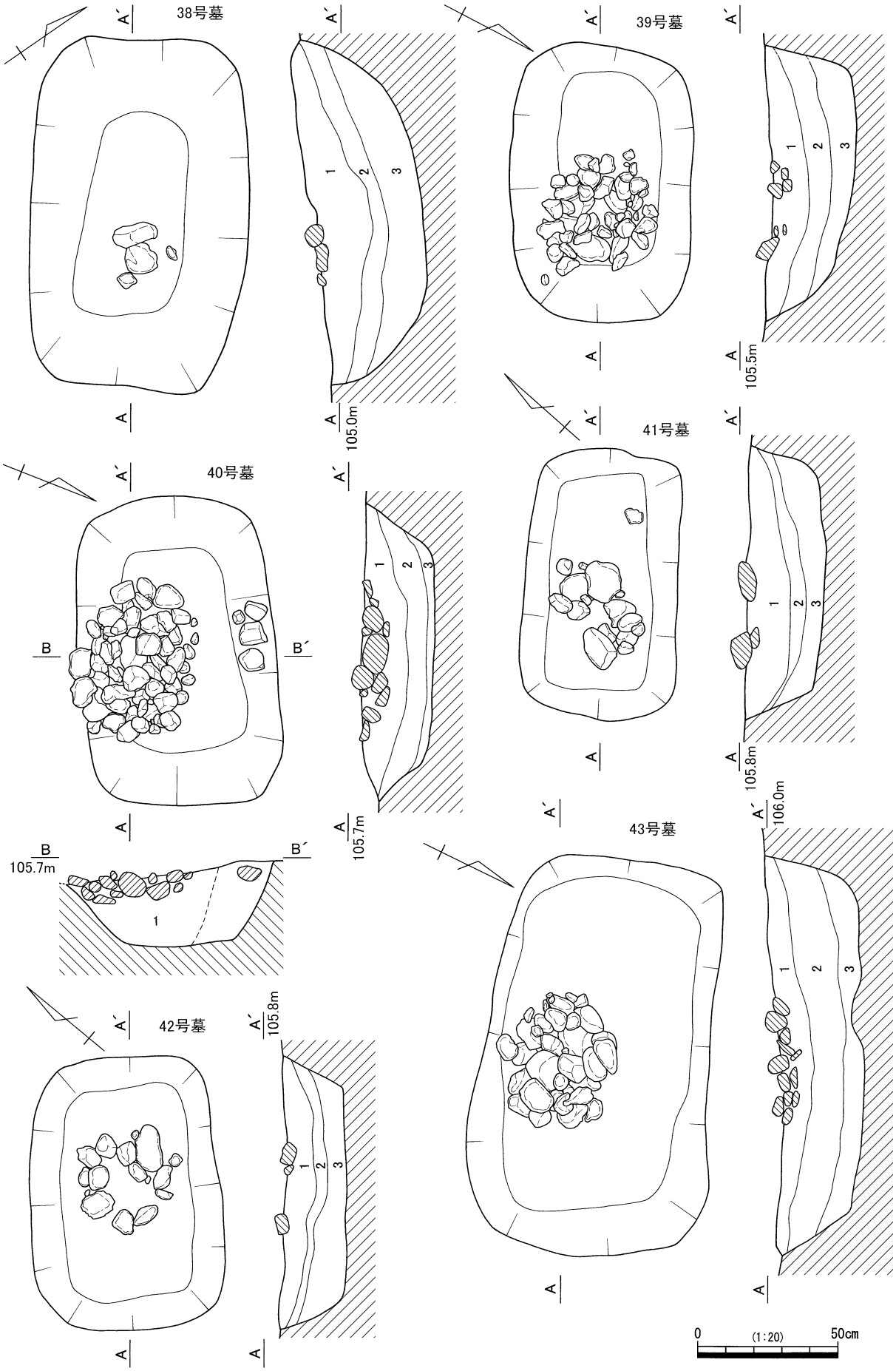
第184図　土坑墓平・断面図4



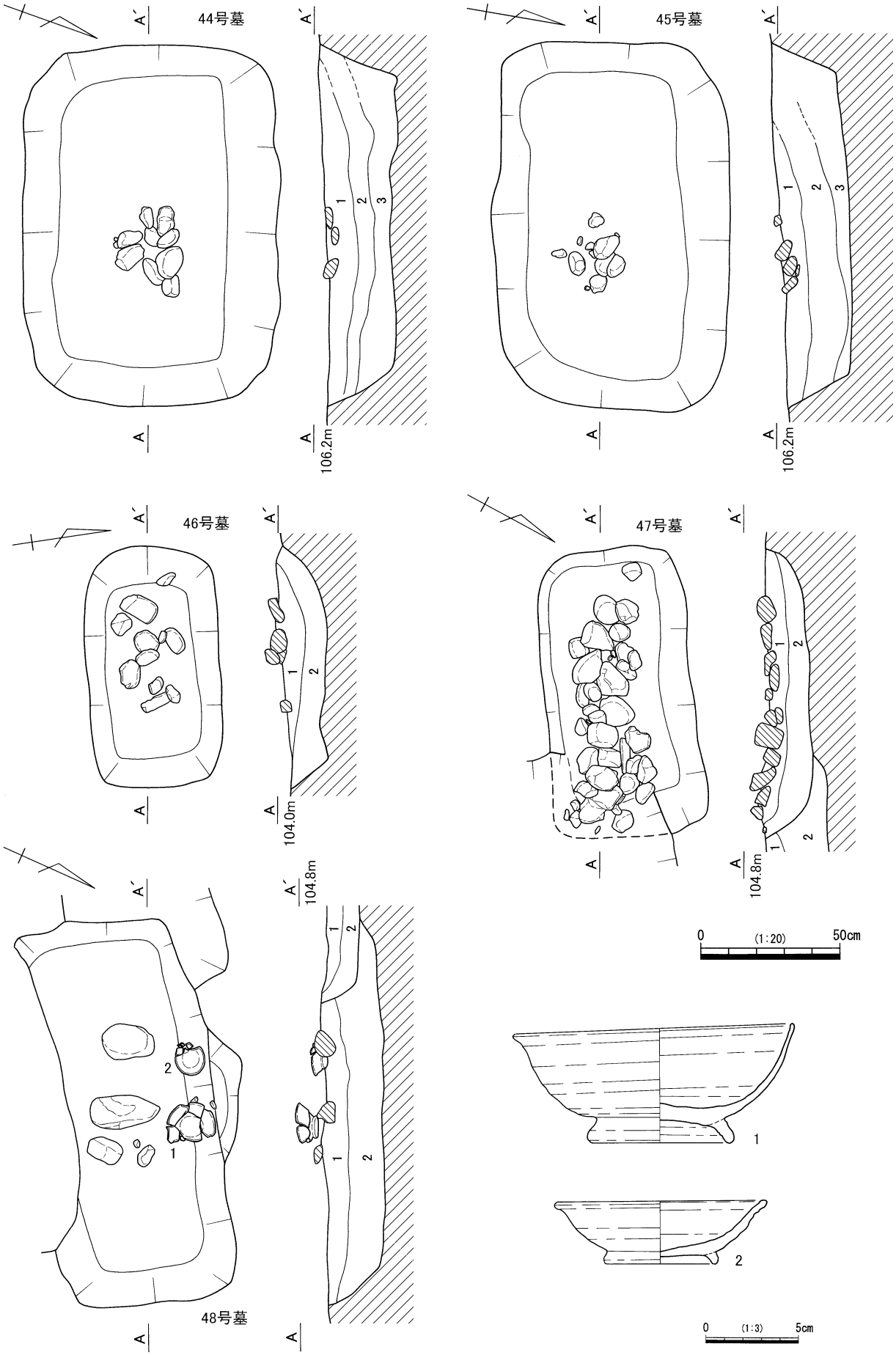
第185図　土坑墓平・断面図5



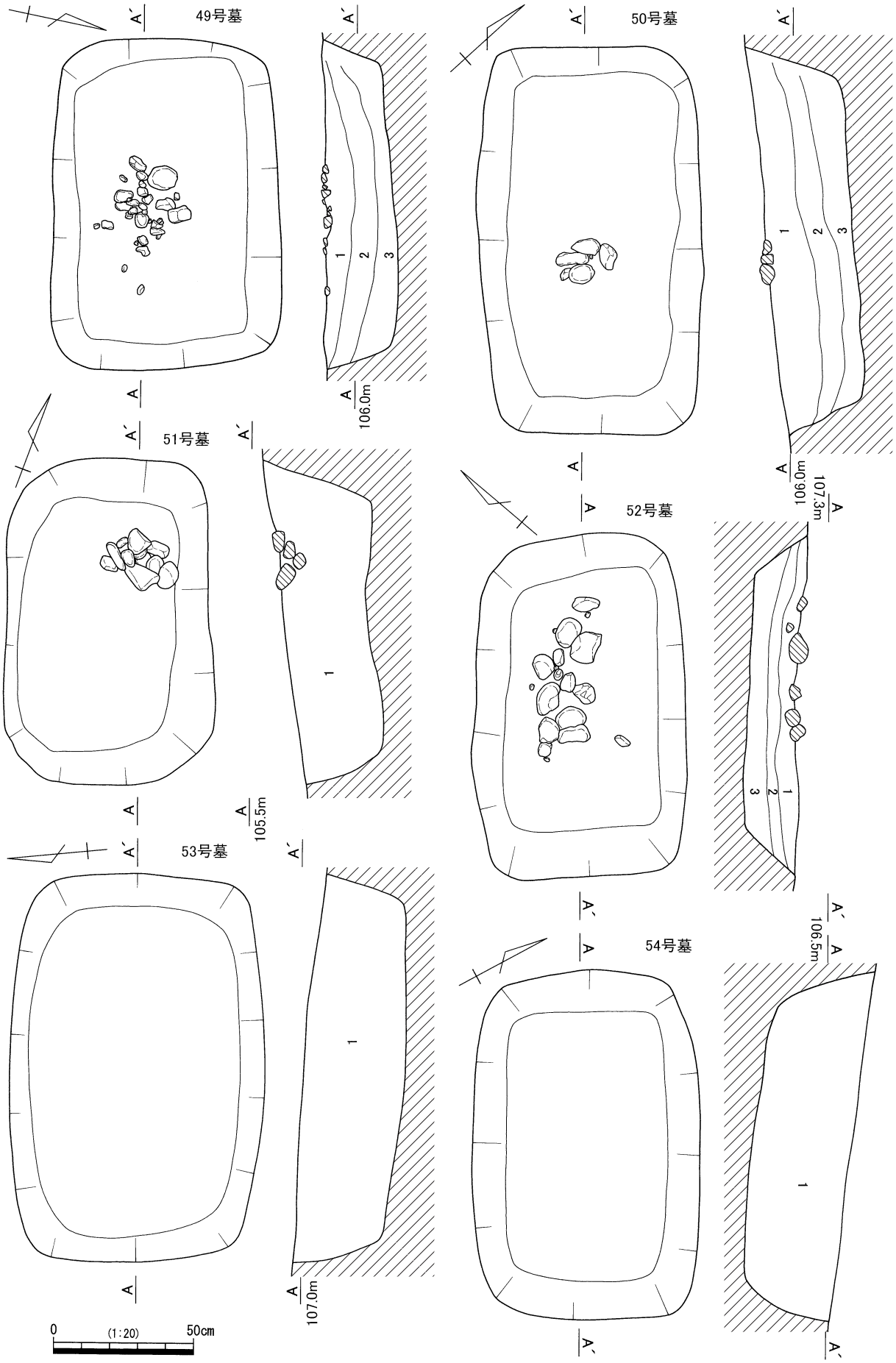
第186図　土坑墓平・断面図6



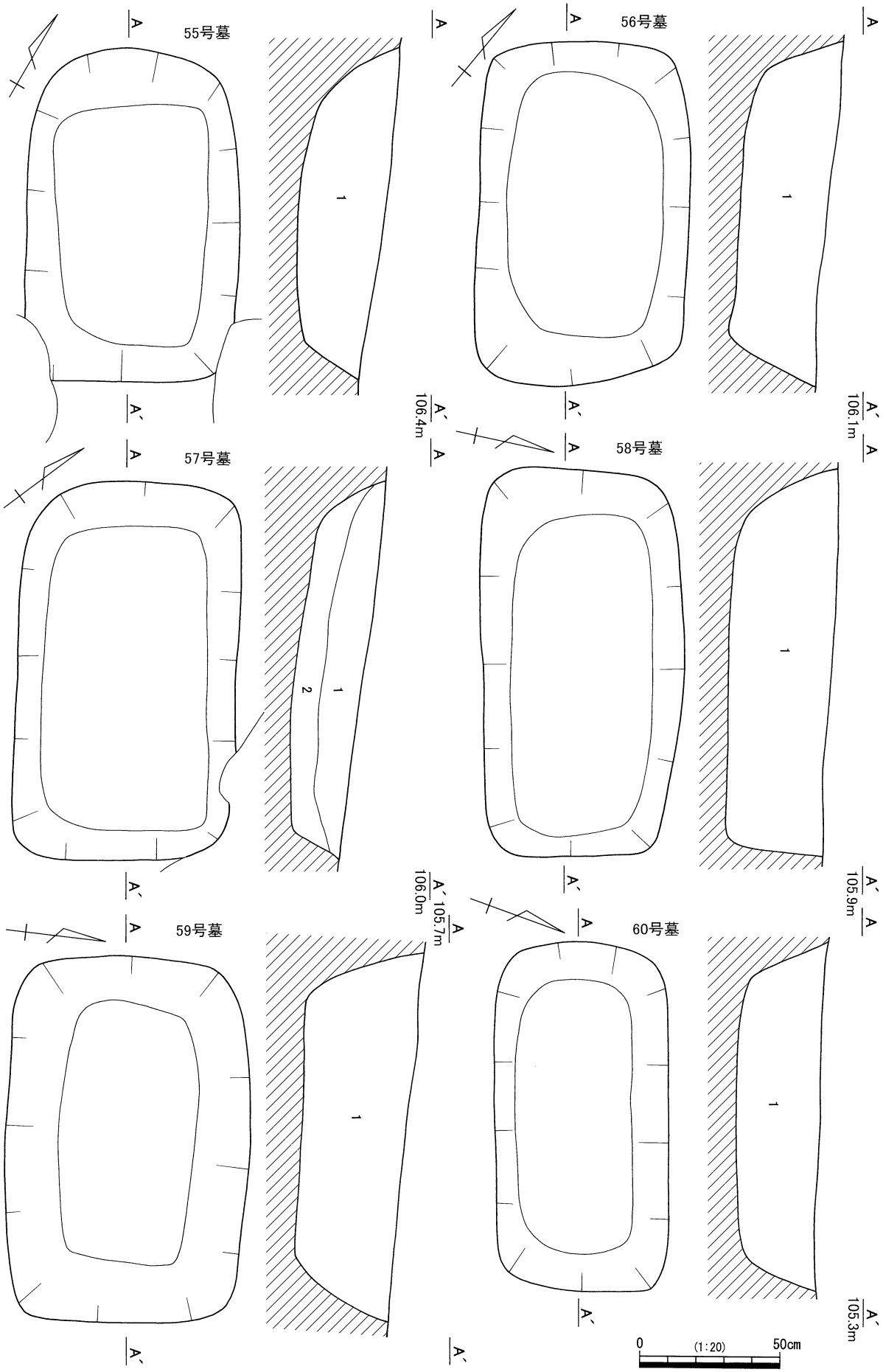
第187図　土坑墓平・断面図7



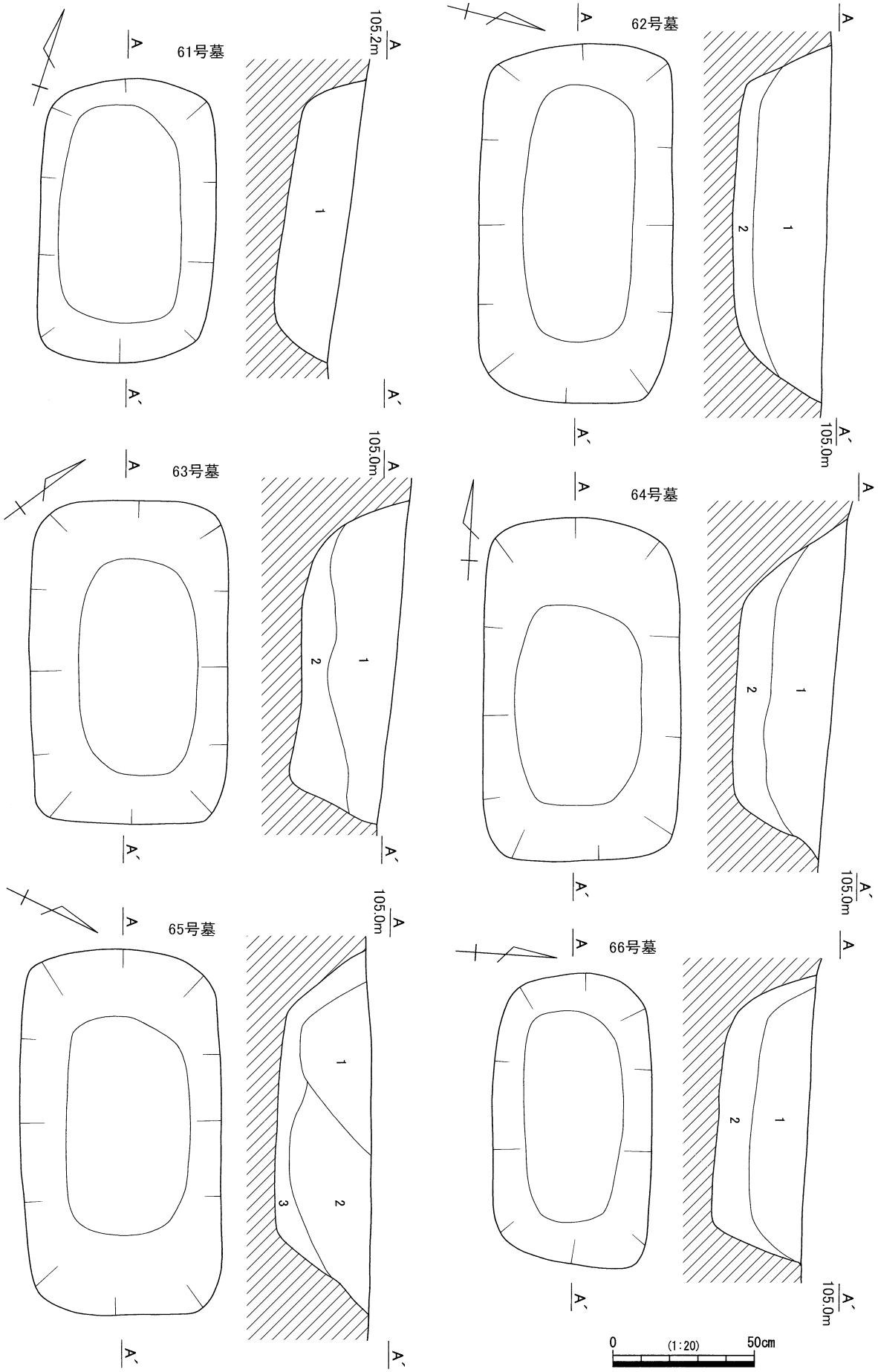
第188図　土坑墓平・断面図8



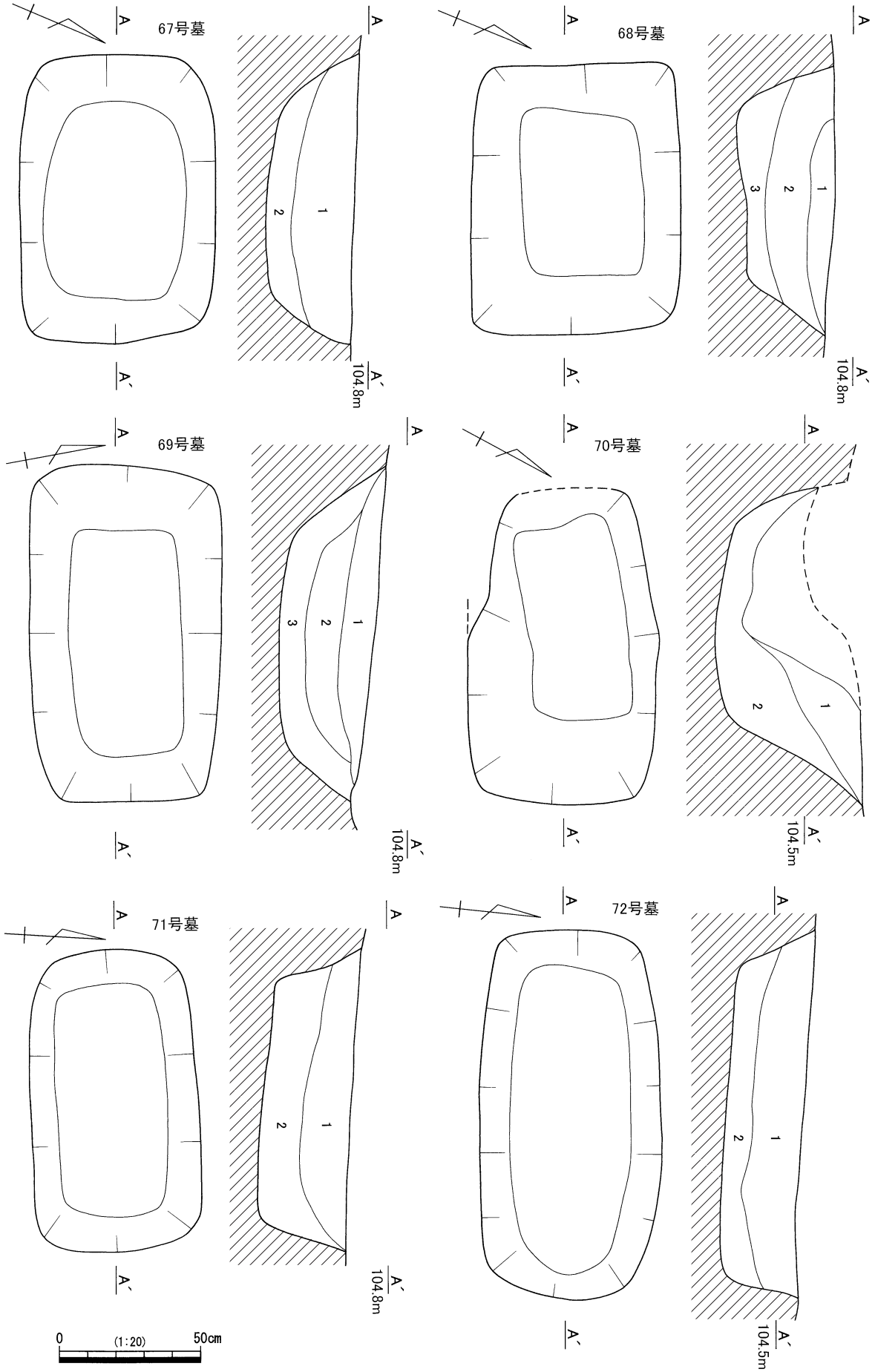
第189図　土坑墓平・断面図9



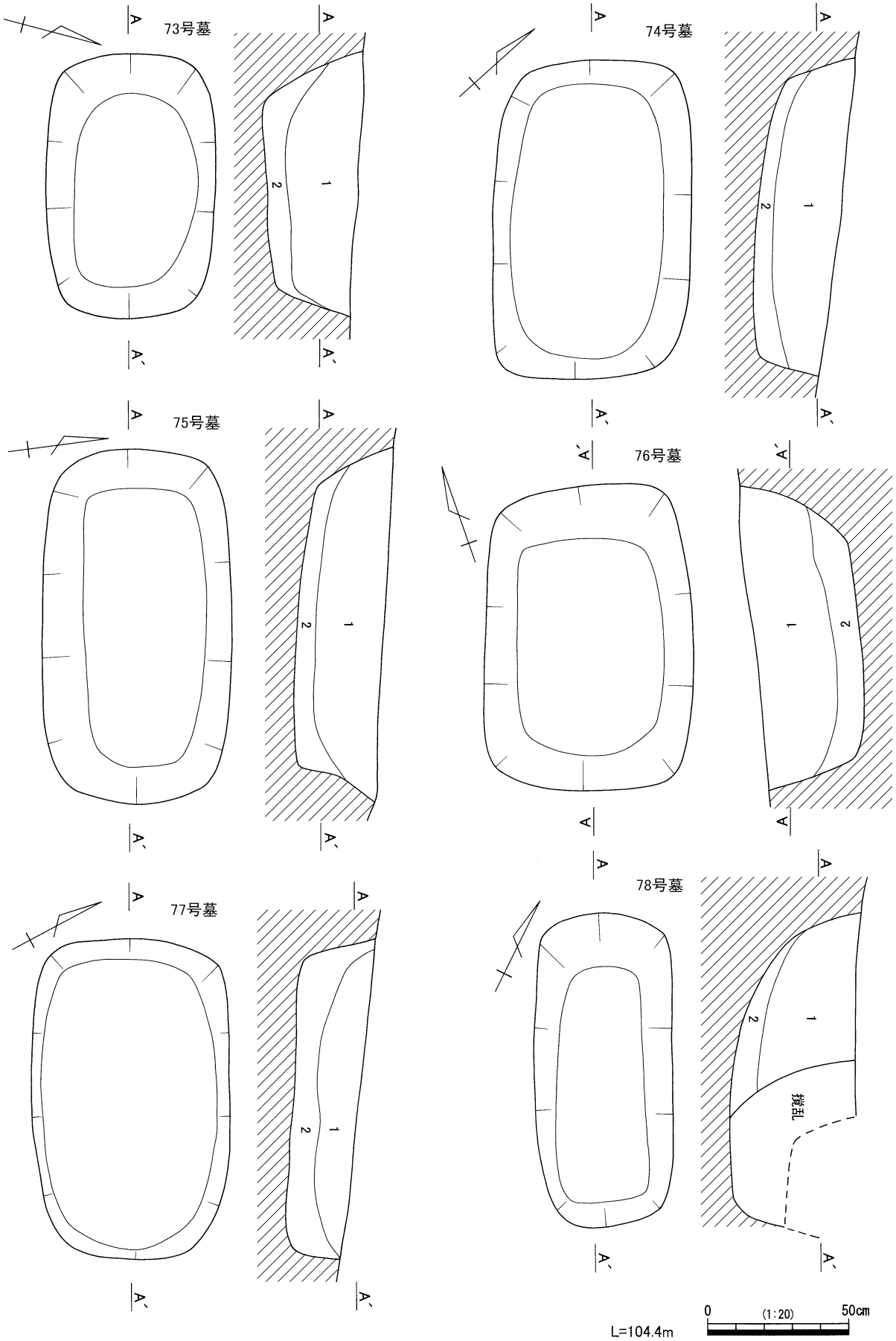
第190図　土坑墓平・断面図10



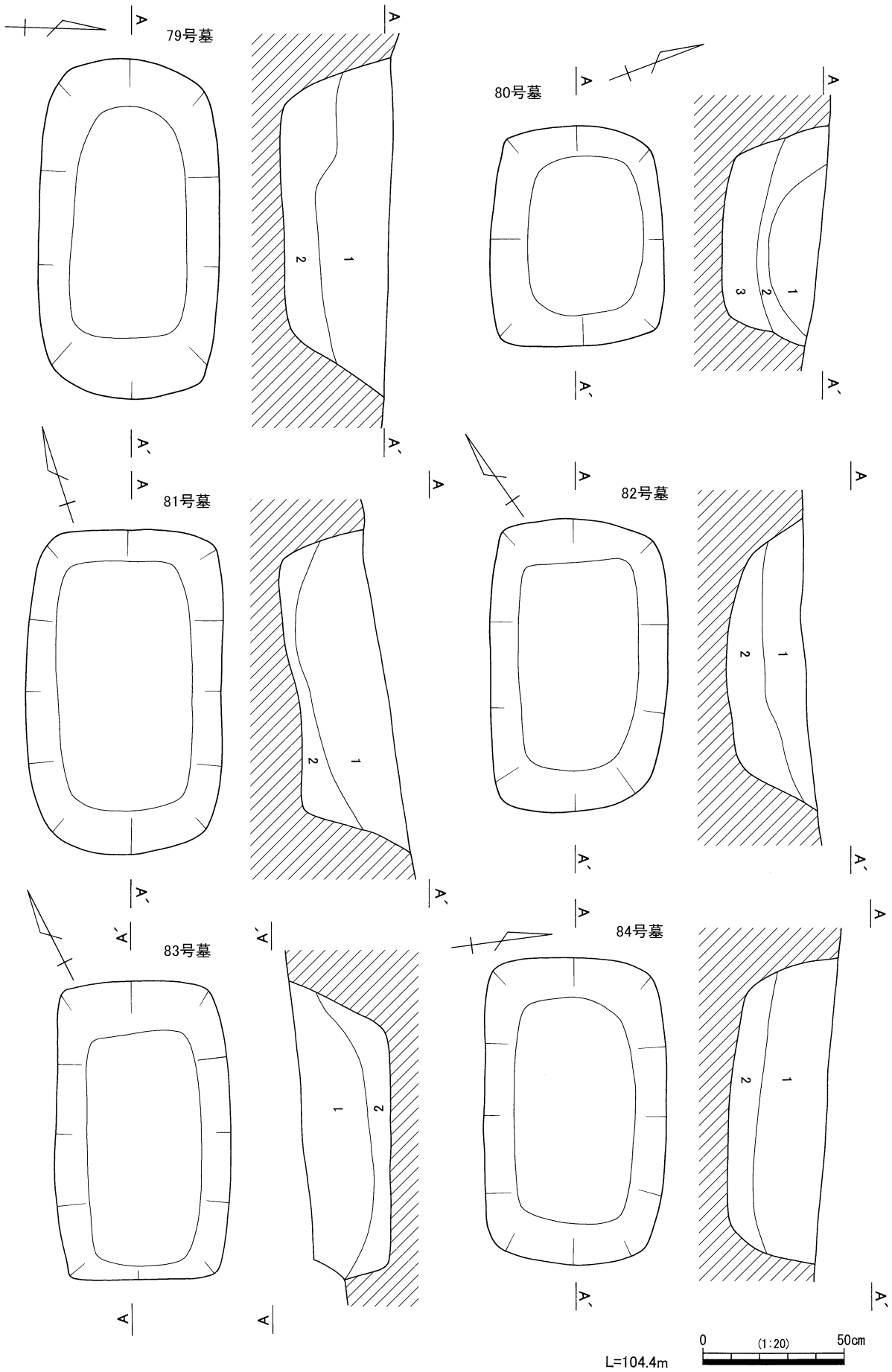
第191図　土坑墓平・断面図11



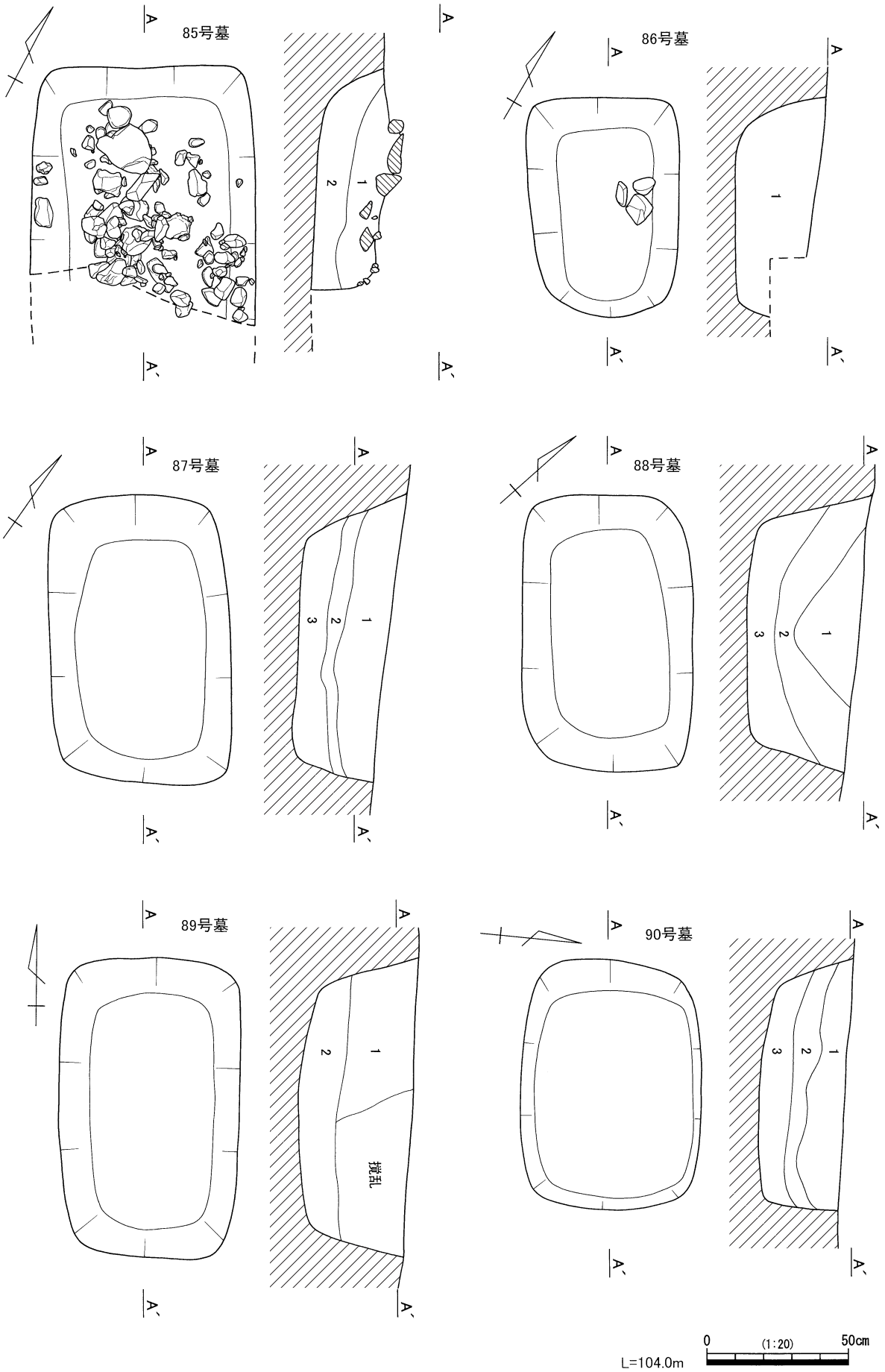
第192図　土坑墓平・断面図12



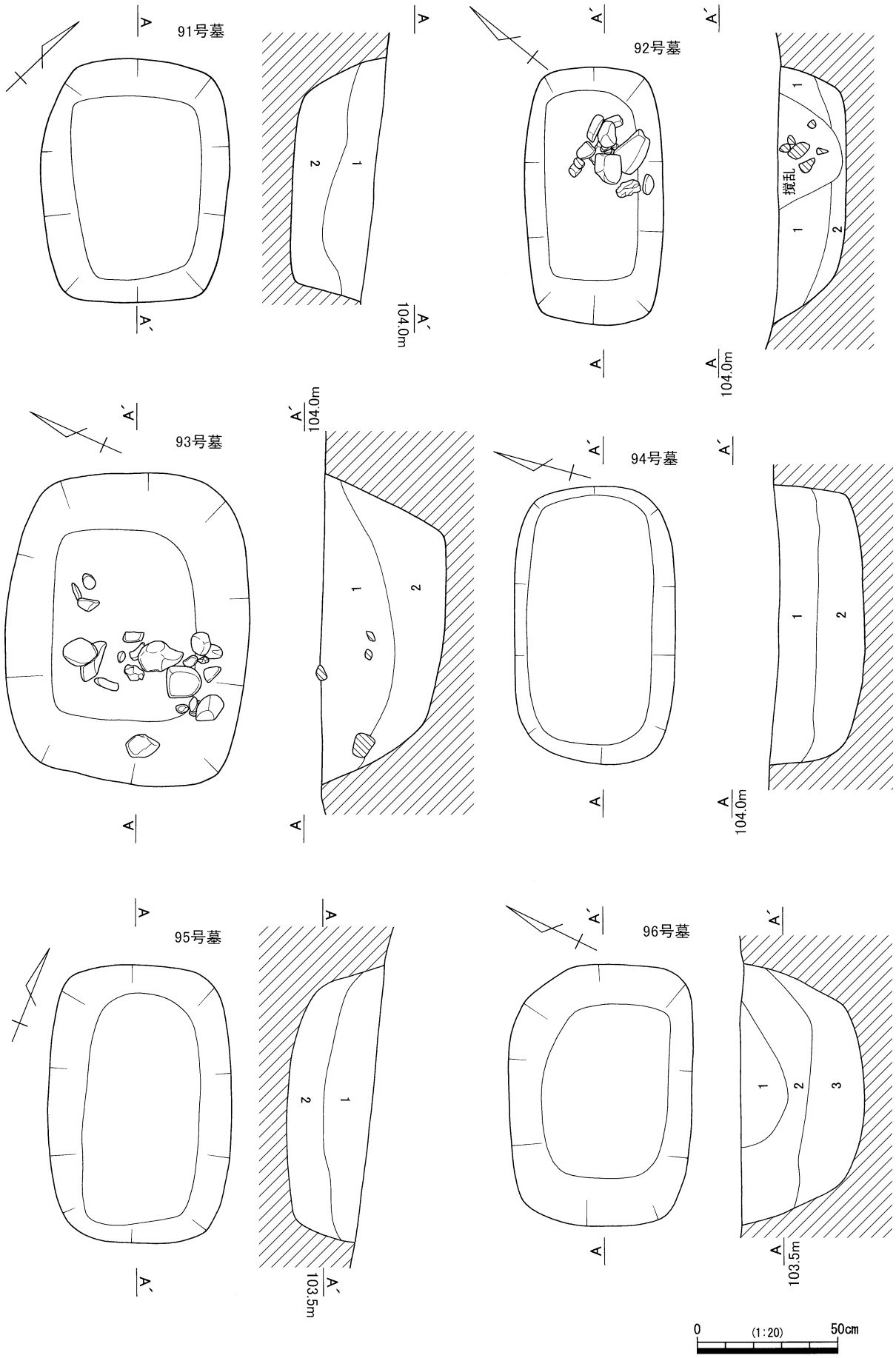
第193図　土坑墓平・断面図13



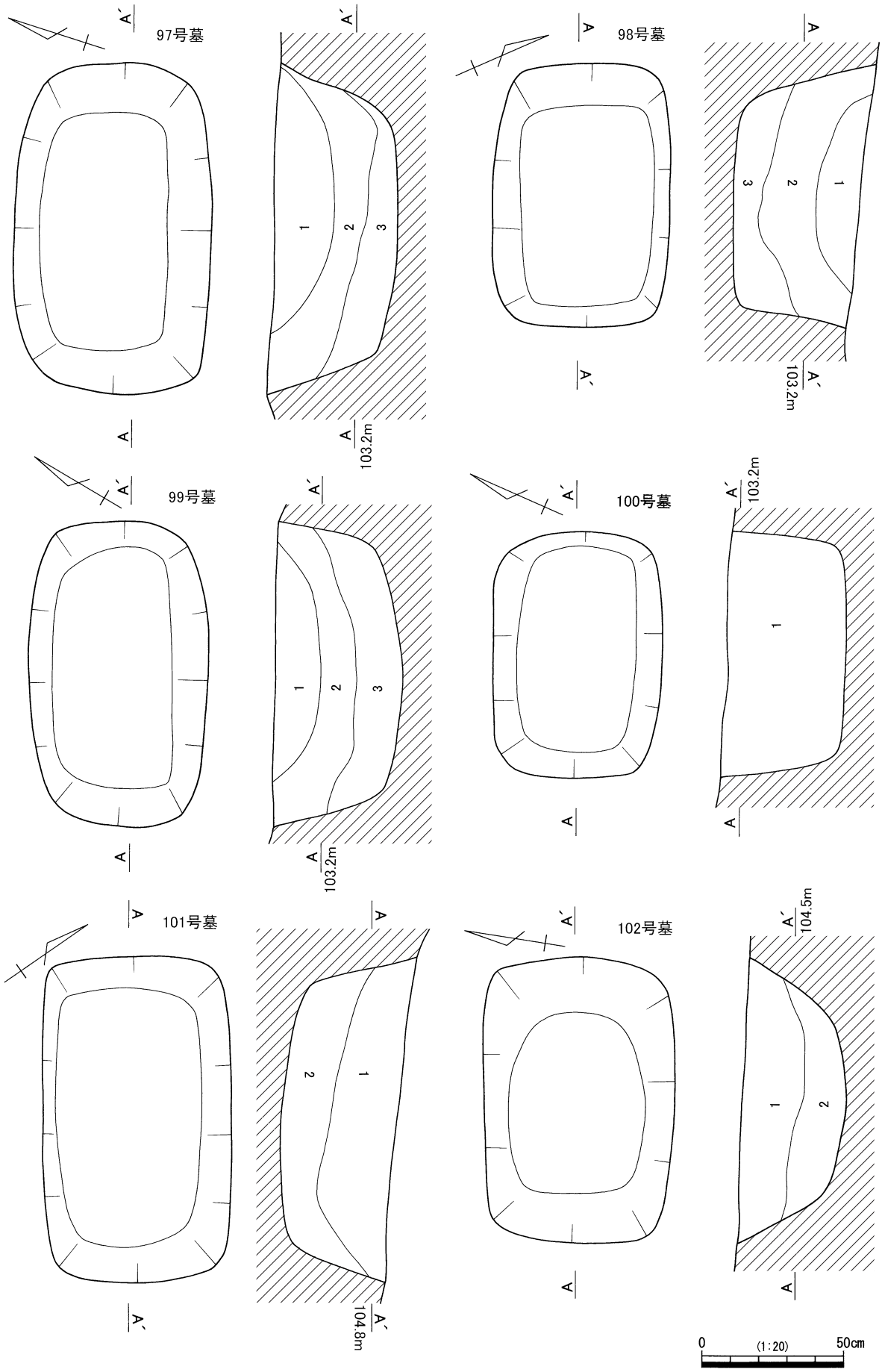
第194図　土坑墓平・断面図14



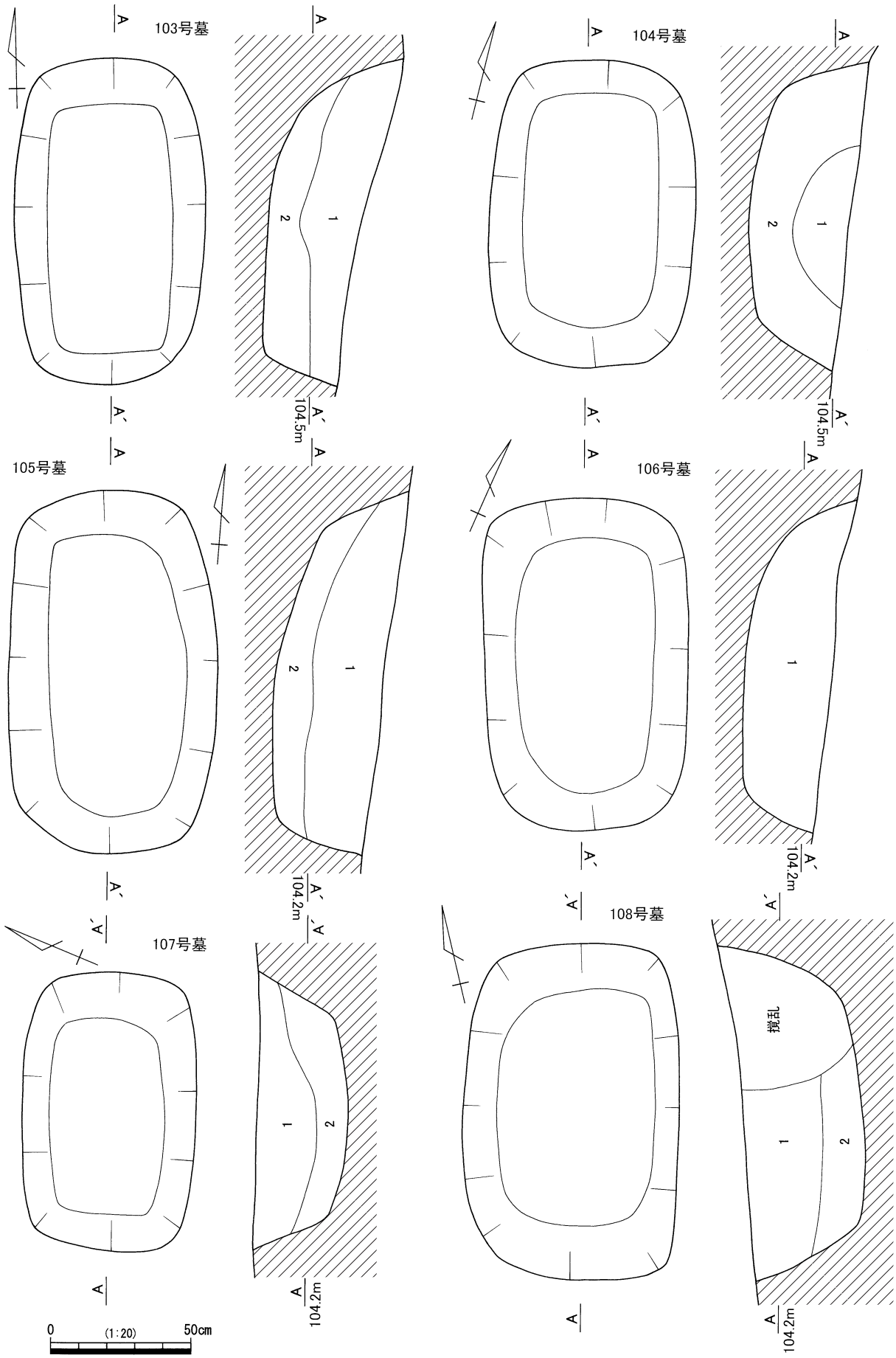
第195図　土坑墓平・断面図15



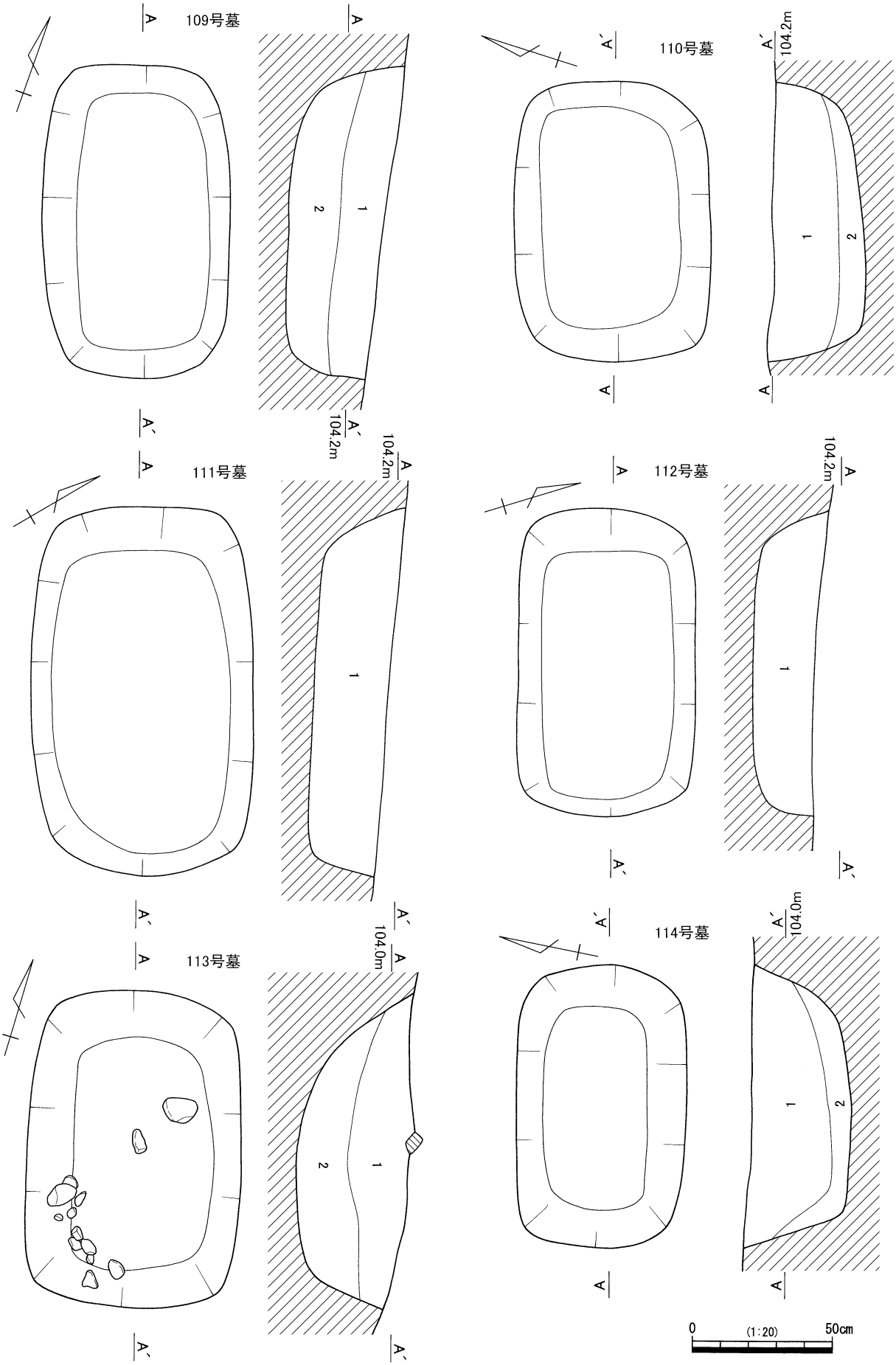
第196図　土坑墓平・断面図16



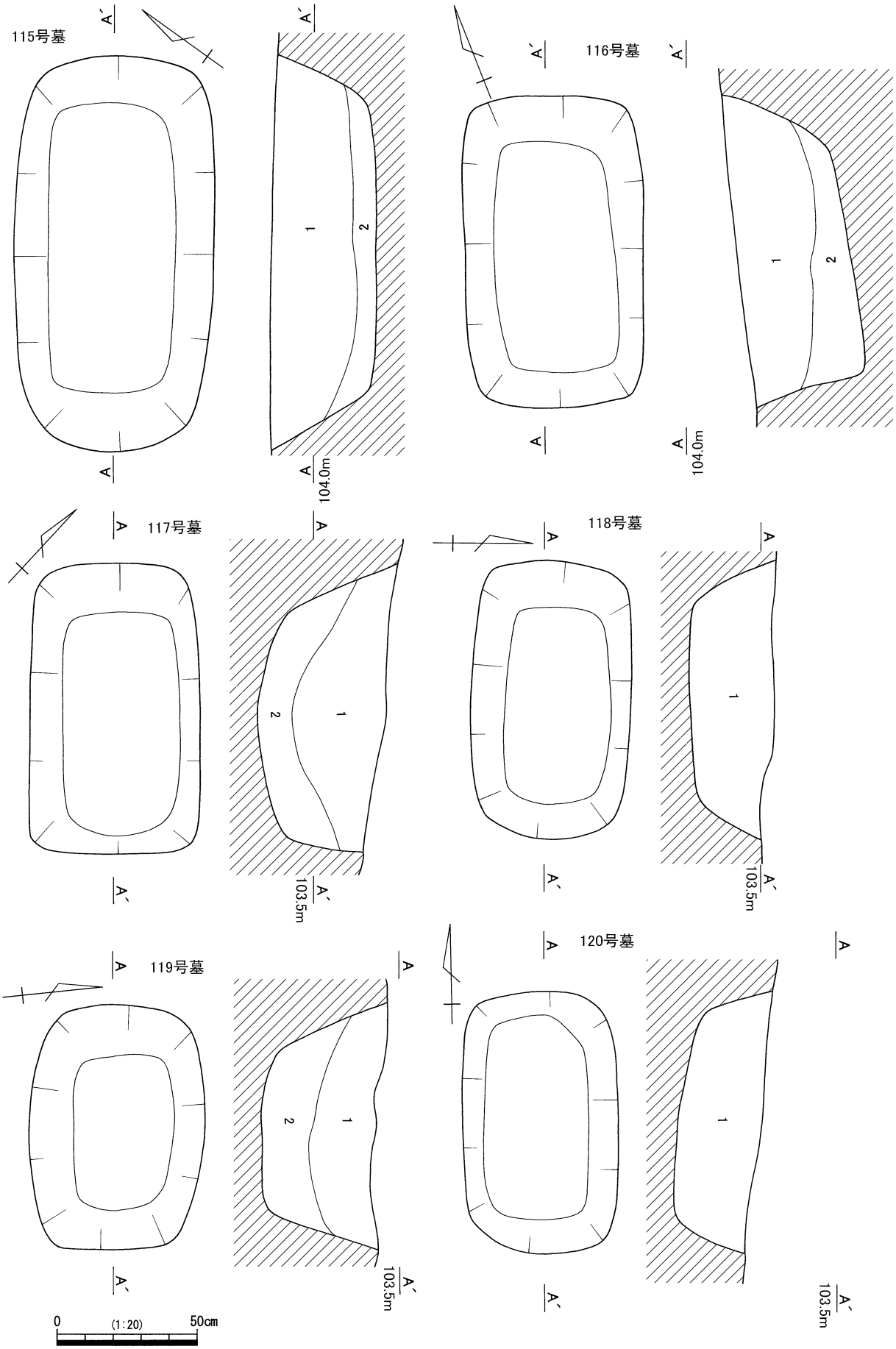
第197図　土坑墓平・断面図17



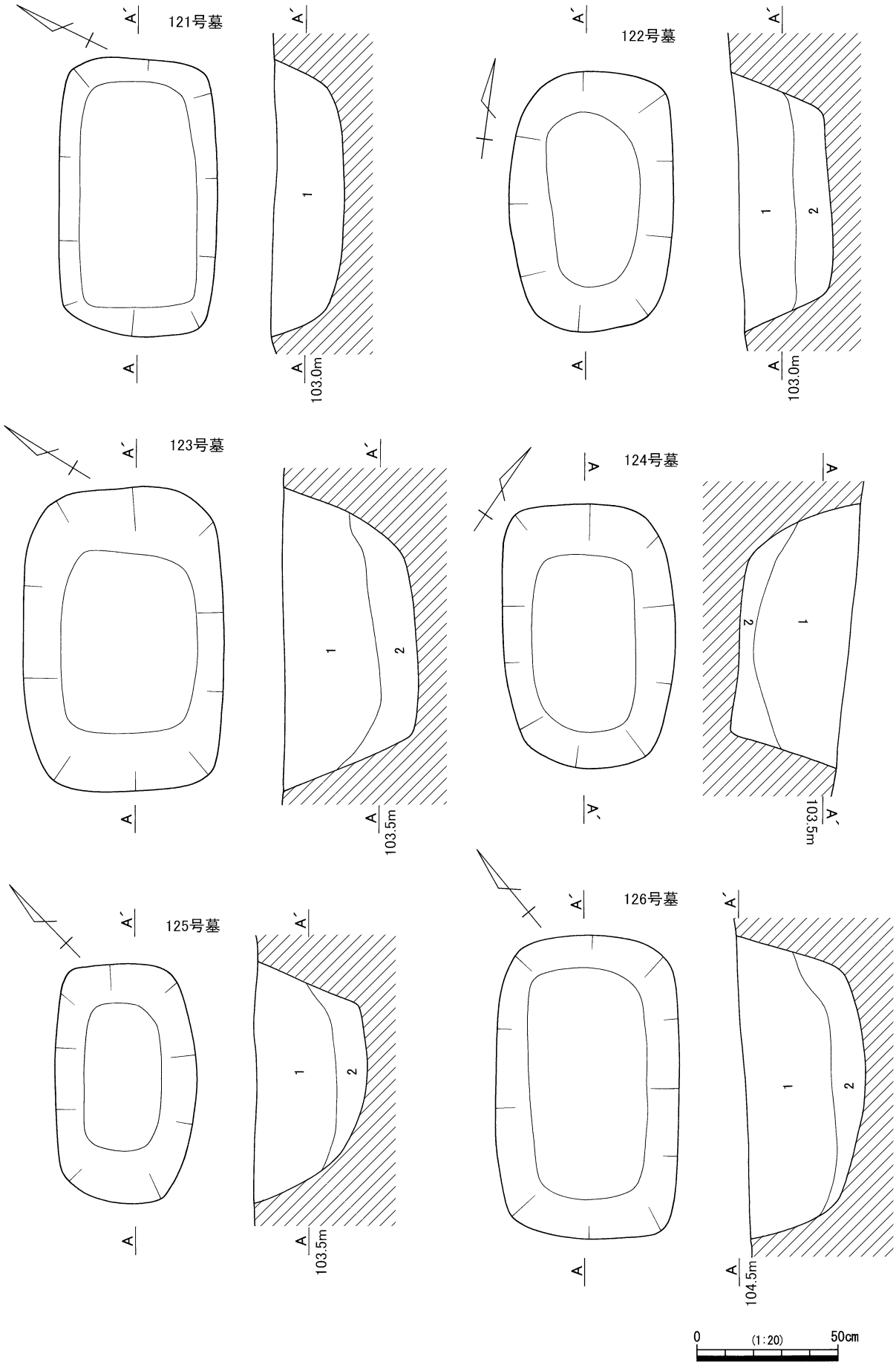
第198図　土坑墓平・断面図18



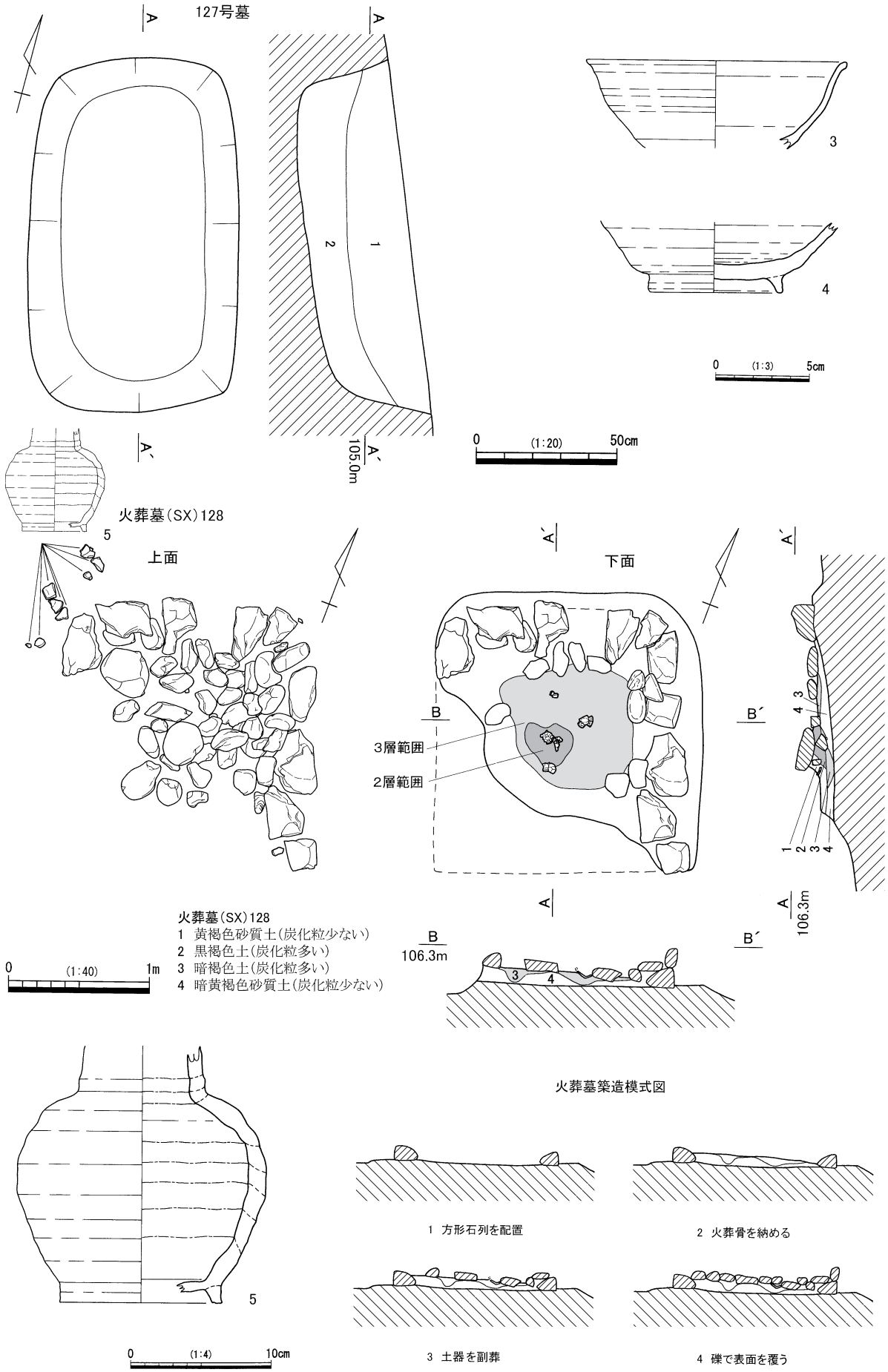
第199図　土坑墓平・断面図19



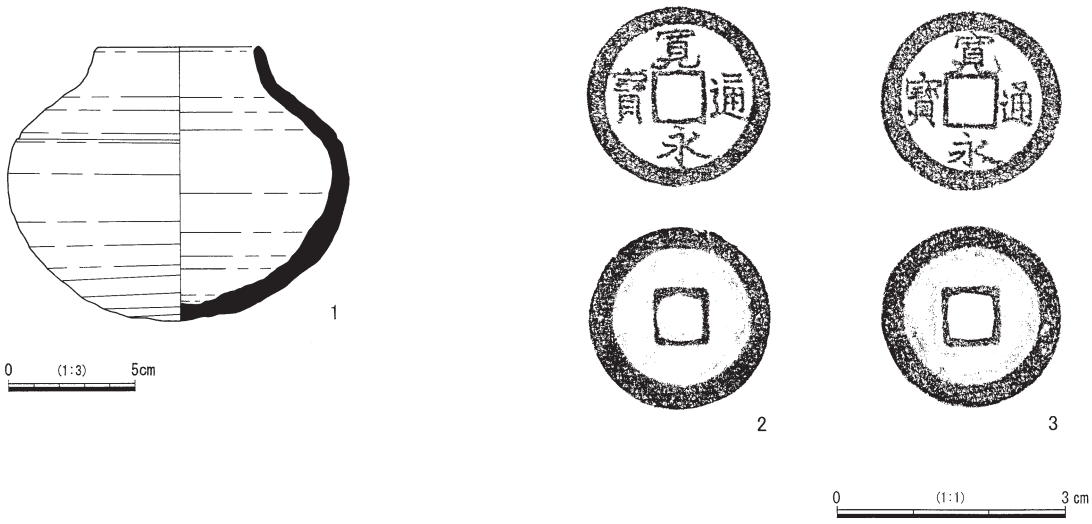
第200図　土坑墓平・断面図20



第201図　土坑墓平・断面図21



第202図　土坑墓、火葬墓平・断面図



第203図　古墳群出土遺物実測・拓影図

番号	長径	短径	深さ	方位
1	1.14	0.68	0.23	N36W
2	1.24	0.58	0.41	N37E
3	0.98	0.57	0.28	N66E
4	1.21	0.67	0.35	N48W
5	0.98	0.54	0.26	N19W
6	0.87	0.63	0.21	N61E
7	1.03	0.54	0.25	N46W
8	0.81	0.45	0.29	N64E
9	0.8	0.51	0.33	N44E
10	0.84	0.63	0.28	N48E
11	0.86	0.6	0.21	N63E
12	0.8	0.51	0.19	N54E
13	0.85	0.53	0.2	N79E
14	0.89	0.56	0.26	N86W
15	0.96	0.48	0.19	N78E
16	0.91	0.54	0.26	N73E
17	1	0.53	0.22	N84W
18	0.89	0.48	0.15	N88W
19	1.34	0.63	0.32	N72E
20	0.92	0.52	0.22	N62E
21	0.93	0.53	0.18	N62E
22	0.97	0.51	0.21	N66E
23	1.03	0.53	0.2	N66E
24	0.95	0.54	0.13	N48W
25	1.13	0.65	0.18	N58E
26	1.09	0.51	0.19	N61E
27	1.11	0.55	0.21	N58E
28	1.06	0.81	0.19	N73W
29	0.82	0.52	0.19	N53E
30	0.91	0.63	0.25	N59E
31	1	0.63	0.23	N56E
32	1.14	0.64	0.13	N61E
33	1.06	0.64	0.17	N77E
34	1.01	0.62	0.27	N64E
35	1.36	0.63	0.29	N58E

番号	長径	短径	深さ	方位
36	0.89	0.59	0.23	N82E
37	1.05	0.54	0.33	N73E
38	1.24	0.79	0.42	N55W
39	1.02	0.64	0.32	N59E
40	1.11	0.7	0.26	N66E
41	0.96	0.55	0.29	N49E
42	0.98	0.7	0.24	N52E
43	1.42	0.81	0.32	N63E
44	1.31	0.92	0.23	N69E
45	1.32	0.86	0.25	N81E
46	0.87	0.48	0.16	N86W
47	1.03	0.52	0.18	N61E
48	1.4	0.64	0.21	N66E
49	1.19	0.81	0.23	N66E
50	1.39	0.81	0.31	N47W
51	1.18	0.73	0.3	N20W
52	1.24	0.75	0.18	N53E
53	1.4	0.92	0.36	N84W
54	1.26	0.83	0.36	N62W
55	1.2	0.77	0.32	N30W
56	1.23	0.76	0.33	N40W
57	1.36	0.78	0.25	N55W
58	1.38	0.72	0.38	N78E
59	1.31	0.88	0.39	N86E
60	1.24	0.63	0.31	N71E
61	1.01	0.67	0.22	N18W
62	1.27	0.7	0.4	N75E
63	1.16	0.71	0.35	N55W
64	1.22	0.7	0.35	N2W
65	1.3	0.72	0.34	N63E
66	1.04	0.56	0.33	N86E
67	1.03	0.7	0.32	N56E
68	0.96	0.75	0.33	N66E
69	1.19	0.69	0.35	N81W
70	1.13	0.68	0.48	N57W

番号	長径	短径	深さ	方位
71	1.08	0.6	0.32	N87E
72	1.32	0.65	0.28	N86E
73	0.95	0.61	0.32	N76E
74	1.14	0.71	0.3	N47W
75	1.26	0.67	0.3	N85W
76	1.09	0.73	0.39	N73W
77	1.13	0.72	0.23	N62W
78	1.12	0.49	0.47	N28W
79	1.21	0.65	0.39	N88E
80	0.79	0.62	0.35	N69W
81	1.14	0.7	0.32	N17E
82	1.04	0.63	0.29	N35E
83	1.05	0.61	0.32	N26E
84	1.08	0.64	0.35	N82W
85	0.9	0.8	0.27	N29W
86	0.78	0.53	0.3	N30W
87	1.03	0.64	0.33	N35W
88	0.99	0.6	0.4	N40W
89	1.06	0.63	0.4	N3W
90	0.88	0.65	0.3	N84E
91	0.87	0.68	0.29	N50w
92	0.91	0.49	0.24	N56E
93	1.11	0.87	0.44	N66E
94	0.98	0.57	0.3	N75E
95	0.99	0.65	0.31	N21W
96	0.93	0.66	0.44	N26W
97	1.17	0.7	0.44	N71E
98	0.93	0.62	0.45	N67W
99	1.08	0.64	0.45	N61E
100	0.87	0.6	0.42	N66E
101	1.16	0.66	0.41	N54W
102	1.01	0.67	0.36	N82E
103	1.16	0.69	0.35	N4E
104	1.11	0.73	0.36	N13W
105	1.3	0.75	0.37	N4W

番号	長径	短径	深さ	方位
106	1.19	0.73	0.31	N15w
107	1	0.63	0.32	N67E
108	1.2	0.78	0.43	N13E
109	1.12	0.67	0.36	N18W
110	1	0.7	0.33	N71E
111	1.33	0.8	0.28	N62W
112	1.1	0.63	0.23	N75W
113	1.13	0.78	0.4	N16W
114	1.02	0.61	0.35	N80E
115	1.42	0.72	0.38	N54E
116	1.12	0.65	0.39	N26E
117	1.04	0.61	0.46	N47W
118	0.99	0.58	0.31	N88E
119	0.88	0.63	0.42	N83W
120	0.95	0.56	0.29	N2E
121	0.98	0.56	0.25	N66E
122	0.92	0.59	0.33	N3W
123	1.07	0.72	0.47	N57E
124	0.93	0.61	0.4	N33W
125	0.86	0.51	0.39	N44E
126	1.08	0.66	0.43	N41E
127	1.26	0.75	0.37	N15W

単位 m

表12　土坑墓一覧

第５節　高根山Ａ古墳群の評価

高根山Ａ群と高根山Ｂ群、Ｃ群との間には、大宝寺裏から金比羅神社の西を通る谷が入り、それを境に稜線が分かれ、海抜135mと120.5mを測る丘陵頂部に続く。この地形の中、Ａ群は頂部高121.1mの丘陵とその斜面にあり、Ｂ群、Ｃ群は頂部高135mの丘陵とその斜面に分布するのである。

すでに述べたように今回、発掘調査を実施した35基の古墳は、浅い谷地形を挟んで古墳の築造されない空白域があり、それを境に東側、西側２つの小支群（以下、東小支群、西小支群とする）に２分される。Ａ群は浜北市調査分の７基の分布域とも空白域を置くことから、さらに１ないし２の小支群が加わり、全体で３から４グループ以上の小支群に分かれていると考えられる。浜北区北麓古墳群は一見、隙間なく古墳が累々と築造されたようにみえるが、この中を丘陵別に支群があり、さらにその支群の内部も谷地形や何らかの築造しない空白域を挟んで小支群に区分される。つまりＡ群の各古墳や小支群は何らかの原理によって、限定された区域に造られたものといえよう。つぎに高根山Ａ群の東小支群、西小支群の各群の特徴をいくつかの点からみることとしたい。

１　墳丘と埋葬施設

今回、発掘調査を実施した35基の古墳については、13表に築造時期と追葬時期を掲げた。そのうち後世の撹乱によって16基が年代の指標となる副葬品に欠き、築造年代が不明であった。その中でA32号墳は石室の構造からおおむね遠江須恵器編年Ⅳ期前半から後半まで、さらに副葬品に玉類を含む古墳のうち最新の築造年代を示すA34号墳の例がⅣ期前半である、ことの２点からA32号墳の築造年代はⅣ期前半と推定したい。以下、他の年代不明の古墳について数項目にわたって検討したい。

⑴　墳丘の規模

墳丘の規模を比較すると、東小支群は長径11m以上15m以下のA16号墳、A17号墳、A28号墳がある。この３基は同時に遠江須恵器編年Ⅲ期後葉までと古い。さらに東小支群は長径5mから7m前後の小型の古墳も12基を数え、そのうち6.5m以下は10基と多いが、築造時期はⅢ期末からⅣ期前半である。したがって古い古墳は大きく新しい古墳は小型の傾向はあるものの、すべて小型ということではないらしい。

西小支群は長径6.2mから8.7mとほとんど同一規模で、6.5m以下の古墳は認められない。出土遺物の検討による築造時期は、遠江須恵器編年Ⅳ期前半からⅣ期後半である。ただし築造時期が判明した古墳は少ない。この欠を補うためすでに述べた墓壙の検討によって知りえた築造時期は、ほとんどがⅣ期前半からⅣ期後半と推定され、11号墳が少し後出すると考えられる。すると西小支群は、東小支群より遅れた時期の数十年間に同じような規模の古墳が、一定の墓域の中につぎつぎと築造された小支群といえよう。

⑵　竪穴系小石室の年代

高根山Ａ古墳群のうち、静文研が発掘調査を実施した35基の古墳は、周溝で区画された円墳で主体部を横穴式石室とする古墳が33基（石室が遺存せず墓壙からの推定分も含む）と竪穴系小石室A26号墳とA35号墳２基で構成されていた。後者の竪穴系小石室は、盗掘の痕跡はないが、遺存する副葬品もなく築造年代が不明瞭である。

さらに構造上、石室上部から遺体を葬るため一基の石室に一体の遺体を葬る単次葬（註１）用で、追葬は不可能である。またA35号墳は墳丘や周溝もなく、地表下に墓壙を掘削し石室を構築していた。さらに礫を多数組み合わせ、取り外し可能な閉塞石ではなく前壁を造っている。したがって墓道も認められず、その点も特徴の一つである。

またA26号墳はやや性格を異にし、A12号墳の墳丘頂部にほぼ主軸を重ねて石室を構築し、墳丘も周溝も認められなかった。しかしながらA12号墳の墳丘と周溝をそのまま利用しているので、見かけ上は他の円墳となんら異ならないのである。つまり両者の共通点は１基の石室に一体の遺体を葬る単次葬である点で、この点は他の33基と大きく異なる点である。

さらにA26号墳ついてはA12号墳の天井石や上部の側壁をはずし、一部を側壁とその控え積に利用していること、A12号墳の床面をほとんど痛めていないことから、偶然この位置に古墳を築造したとは考え難い。したがってA12号墳への追葬としてあらたな石室を構築したとも考えたが、A12号墳は石室の残りがよく、他の古墳の追葬と同様に閉塞石をはずし、石室内へ遺体を納めることが不可能な状態ではない。

さらにA12号墳の石室主軸とほぼ一致させているなど、遠江ではほとんど例のないことではあるが、一人の埋葬のために追葬ではなく先祖の古墳を改造し、あらたなA26号墳を築造したと考えておきたい。よってA26号墳の築造年代は、A12号墳の追葬以後である遠江須恵器編年Ⅳ期前半以降のこととなり、A12号墳墳丘から出土した遠江須恵器編年Ⅴ期前葉の坏蓋の年代である可能性が高い。

墳丘や周溝・墓道をもたないA35号墳の築造年代について考えてみたい。高根山Ａ古墳群（浜北市調査分）、静文研調査の大屋敷Ａ・Ｃ古墳群・雲岩寺Ｃ古墳群に同じ単次葬の石室はあるものの、構造の点で類例は認められず、天竜川東岸社山３号墳に類例（豊岡村教委 1983）があるのみである。この古墳も副葬品は鉄鏃と刀子各１と築造年代の指標にはならない。ではどのように年代を考えられるのであろうか。

静文研調査の高根山Ａ古墳群では、横穴式石室33基のうち古墳の新規築造は、遠江須恵器編年Ⅳ期後半で終了しているので、それと異なるA35号墳の築造はそれ以後と推定され、同じ単次葬のA26号墳の築造年代である遠江須恵器編年Ⅴ期前葉やその直前の遠江須恵器編年Ⅳ期末葉と推定したい。それにしても東支群の中で他の古墳は造墓を停止し追葬を行っていることから、新たに特定個人のためにA26号墳とA35号墳を築造する意味は、決して小さくないであろう。

⑶　墓壙の検討

西小支群のA4号墳からA11号墳の８基は副葬品も出土せず、石室も残っていなかったため石室の型式から年代を探ることも不可能であった。したがってこれらの古墳は築造時期の指標に欠くため、以下の墓壙の検討という作業によって年代を考えてみたい。

大きく墓壙まで破壊されているA2・A9号墳を除くと、西小支群の墓壙は長さ１とすると、幅0.45以下と長細い形態を呈している例が多い。典型例ではA3号墳の長さ6m、幅2.21mを測り、長さ１に対し幅0.37である。それに比べ西小支群のうちA11号墳１基のみが、長さ3.97m、幅2.32mを測り、長さ１に対し幅0.58で前者より長さが短く、幅が広い。西小支群の墳丘規模はほとんど同一規模で、墓壙の大きさと墳丘規模は比例することはなかったことが読み取れる。したがって長細い形態の墓壙が主流であり、長さが短く、幅広の墓壙が少数派であるものの両方のタイプが認められることとなろう。ではその前後関係はいかに考えられるのであろうか。

11号墳の墓道はA10号墳の周溝を避け、西側に大きく屈曲してA9号墳とA10号墳の周溝の間に掘削されている。おそらくその先は西小支群に共通する幹道（註２）につながっていたと推定される。するとA11号墳築造以前には、すでにA9号墳とA10号墳は存在しそれを避けたため屈曲したこととなり、両者の新旧関係をたどることができる。

A3号墳は長細い形態の墓壙で、遠江須恵器編年Ⅳ期の須恵器が出土した。東小支群の長細い形態の墓壙はA12号墳、A23号墳、A29号墳のように、遠江須恵器編年Ⅳ期前半の年代が考えられる。さらに大屋敷Ａ群ではこのタイプの墓壙を持つ古墳は（静文研 2008）、遠江須恵器編年Ⅲ期中葉からみられるも

のの、中心はⅣ期前半から後半の年代を示し、幅広の墓壙はⅣ期後半の年代を示しているが、不明瞭な例ではⅣ期前半の古墳も認められる。このことから両者の墓壙は年代の重なりがあり、長細い形態が先行するもののⅣ期前半から後半が両者の年代と推定される。

なお大屋敷Ａ群・Ｃ群では長細い形態の墓壙には複室構造や袖部の形態が擬似両袖式、羨道を有さない無袖式の石室がみられた。西小支群の古墳は長さから擬似両袖式か玄門区画系の石室構造ではないかと推定される。

⑷　古墳の主軸方位

東小支群の各古墳の主軸方位はかなりまちまちである。開口部と墓道を南東方向にとるA14号墳、A19号墳からA25号墳、A27・A28号墳、34号墳と、開口部と墓道を南西方向にとるA12号墳・A13号墳、A15号墳からA18号墳、A26号墳、A29からA33号墳、35号墳があるが、墓道の方向をみると谷もしくはそれにつながる低い部分を向いている。

西小支群の各古墳の主軸方位は、大略には南西向きである。つまり大宝寺裏から金毘羅神社西を通る谷の方向を向いているといえよう。この小支群は東西に広がらず、南北の緩斜面に3段に立地するため、限定されていたのであり、大略主軸方位が一致せざるをえなかったと考えられる。この点はのちに述べる墓道との係わりがあろう。

つまり古墳の主軸方位の取り方は、ほぼ奥壁を略北とし開口部を略南とするほか、古墳築造の選地に係わって、それぞれの古墳がいかに墓道（枝道・幹道など）とつながるかによって決定され、そのために主軸を東にふる、または西にふることが選択されたと推定したい。したがって主軸方位の取り方を各古墳の築造年代に、直接結びつけることはできなかった。

2　副葬品の検討

調査された35基の古墳の多くが撹乱を受けていたため、各古墳の副葬品は埋葬当時の状態をとどめているものは極めて少ない。しかしながら撹乱穴からその一部を残す古墳もあったため、どのような品々が副葬品であったのかが判明する場合もあった。ここでは後期古墳に多く副葬される土器、鉄鏃・刀など鉄製品、玉類と耳環など装身具類が、各古墳からどのような在り方をしていたかを述べ、その傾向から何が読み取れるかを検討してみたい。

⑴　土器類

ほとんどが須恵器で、ごく少数の土師器が認められた。須恵器は盛る器・液体を入れる容器が中心で、坏類・高坏・平瓶など瓶類が多い。少数派の土師器も脚付盤・高坏・坏・鉢などの盛る器である。

A16号墳は築造時期が須恵器編年Ⅲ期後から末葉と古いが、この段階では坏・高坏・瓶類を副葬していたので、東小支群、西小支群共通の副葬品の基本セットとみてよい。A17号墳の追葬段階の土器には蓋と脚を付けた壺類がある。大ぶりのこの容器は、床や地面に直接当たらないために脚を付け、さらに蓋をかぶせた点でより品質の高いタイプとなっている。この種の土器を供献することは他の古墳の副葬土器にはない特徴で、A17号墳の被葬者の地位を反映しているとみることができよう。

⑵　装身具

装身具類には耳環と玉類が認められたが、西小支群にはなく、東小支群の古墳にのみ副葬されていた。小支群を構成する古墳はいずれも大きな撹乱を受けていたため、西小支群には副葬されなかったとは言い難いが、調査は同じ条件でありさらには排土についてもふるいをかけ精査しているので、西小支群には副葬されなかったか、ごくわずかであったため散逸したといえよう。この点は東西小支群の違いと認めてよいと思われる。

A17号墳は東・西小支群中、規模が最も大きく、かつ最初に築造された古墳である。築造当初か追葬

古墳	小支群	単位群	墳丘(東西×南北)m	主軸方位	墓壙全長m	墓壙幅m	副葬品・土器	副葬品・装身具	副葬品・鉄製品	築造時期	追葬時期
A1	西	A単位群	8.3×8.7	N27°30′W	5m以上	2.35	坏・高坏・平瓶		責金具・刀子	Ⅳ期後半	Ⅳ期末・Ⅴ期前
A2	西	A単位群	8.7×8.7	N39°30′W	4m以上	2m以上	坏・高坏・平瓶・甕			Ⅳ期前半	Ⅳ期後・Ⅳ期末・Ⅴ期前
A3	西	A単位群	8.2×8.2	N40°W	6	2.21	瓶類			Ⅳ期前か後	
A4	西	B1単位群	6.9×6.3	N32°30′W	5.3	1.76					
A5	西	B1単位群	8.3×8.4	N46°W	6.2	2.03					
A6	西	B2単位群	6.2×5.9	N60°W	4.33	1.72					
A7	西	C単位群	7.9×8.1	N36°30′W	5.78	2.06					
A8	西	C単位群	7.9×7.7	N26°W	5.54	2.24					
A9	西	C単位群	7.3×7.8	N11°W	／	／					
A10	西	C単位群	7.8×8.2	N16°30′W	5.9	2.38					
A11	西	B2単位群	7.2×6.2	N34°30′W	3.97	2.32					
A12	東	F単位群	7×7.9	N7°15′W	4.5	2.03	坏・壺蓋			Ⅳ期前半	Ⅳ期後
A13	東	F単位群	6.4×7.6	N14°30′W	4.2m以上	2.12	坏・瓶類・盤			Ⅳ期前半	Ⅳ期後～末
A14	東	D単位群	9.5×9.2	N2°30′E	4.2m以上	2.78	高坏・平瓶・壺・甕	小玉	鏃・弓金具	Ⅲ期末葉	Ⅳ期前～後
A15	東	A単位群	8.1×／	N9°30′W	2.5m以上	2.08	坏・高坏・平瓶・壺			Ⅲ期末葉	Ⅳ期前・Ⅳ期後・Ⅴ期前
A16	東	A単位群	11.8×12.8	N9°W	3m以上	2m以上	坏・高坏・平瓶・壺他	勾玉・なつめ玉・小玉・耳環	刀・鏃・刀子	Ⅲ期後葉	Ⅲ期末・Ⅳ期前・Ⅳ期後
A17	東	A単位群	14.8×14.68	N2°30′W	6.8	3.9m以上	坏・高坏・平瓶・壺	勾玉・切子玉・丸玉・小玉・耳環	刀・鏃・刀子・刀装具	Ⅲ期前葉	Ⅲ期後・末・Ⅳ期前・後
A18	東	B単位群	4.4×5.06	N39°30′W	3.4	1.74	坏・高坏		鏃・刀子	Ⅲ期末葉	Ⅳ期前
A19	東	D単位群	6.1×6.5以上	N2°30′E	4m以上	1.68					
A20	東	G単位群	6×7.2	N7°E	4.58	2.06					
A21	東	H単位群	5.1×6.2	N16°E	4.5	1.82	高坏			Ⅲ期末かⅣ期前	
A22	東	G単位群	5.5×6.2	N27°E	4.83	1.59					
A23	東	H単位群	5.1×6.1	N22°E	4.18	1.69	坏			Ⅳ期前半	
A24	東	G単位群	5.1×5.4	N11°30′E	3.69	2.03					
A25	東	A単位群	6.1×5以上	N2°15′W	3.95m以上	1.75					
A26	東	F単位群	／	N5°30′W	3.2m以上	2.07				Ⅴ期前葉?	
A27	東	A単位群	7.8×8.8	N4°E	4.5m以上	2.5	坏・高坏・平瓶・瓶類	耳環	鏃	Ⅲ期末葉	Ⅳ期前
A28	東	A単位群	12.2×14.4	N20°E	5m以上	3m以上	坏・高坏・平瓶・壺			Ⅲ期後葉	Ⅲ期末・Ⅳ期前
A29	東	E単位群	3.6×4.7	N4°30′W	3.17	1.55	坏・平瓶			Ⅳ期前半	Ⅳ期後
A30	東	B単位群	4.4×5.4	N38°W	3.58	1.63	坏・壺・甕			Ⅲ期末葉	Ⅳ期前・Ⅴ期前
A31	東	A単位群	9.6×11.1	N12°W	5m以上	2.9	坏・高坏			Ⅲ期後葉か末	Ⅳ期前
A32	東	E単位群	4.25×4.8	N22°W	2.92	1.58		丸玉	弓金具・刀子	Ⅳ期前半?	
A33	東	E単位群	6.8×6.8	N3°W	4.74	2.25	坏・高坏・瓶類		刀子	Ⅳ期前半	Ⅳ期後・Ⅴ期前
A34	東	C単位群	5×5.5m以上	N40°30′E	3.2m以上	1.9m以上	坏・高坏・瓶類	切子玉・丸玉・耳環	刀・鏃・刀装具	Ⅲ期末葉	Ⅳ期前
A35	東	B単位群	／	N5°30′W	1.19	0.82				Ⅴ期前葉?	

表13　A1～A35号墳総括表

時か不明であるもの、耳環とメノウ製勾玉、切子玉、丸玉、小玉が副葬されていた。紺色のガラス小玉は174個と最も多く、他の古墳の副葬例と際立った違いをみせている。A17号墳に次ぐ規模のA16号墳には、築造当初か追葬時か不明であるものの、耳環と勾玉、埋木製なつめ玉、ガラス小玉が副葬されていた。勾玉は珪質粘板岩とA17号墳のメノウと比較し、材質のグレイドは低い。ガラス小玉は紺色と水色で２色である。勾玉の副葬が認められた古墳はA17号墳とA16号墳の２基である。

以下、築造当初か追葬時か不明である装身具ではあるが、A14号墳はガラス小玉38個が残っていた。この小玉は紺色・水色・黄色と多彩である。黄色はわずか１点ではあるが、今回、調査した古墳の中では唯一であり入手困難な小玉といえよう。A32号墳は蛇紋岩製と凝灰岩の丸玉が認められた。ガラス小玉・耳環がない組み合わせである。A34号墳は耳環と水晶製切子玉・蛇紋岩製と凝灰岩製丸玉さらに鉛ガラス製の小玉の組み合わせである。調査した古墳の中では鉛ガラス製小玉は唯一の存在で、多くはアルカリ石灰ガラス製である。高根山Ａ支群の中では切子玉４個の出土はなく、違いをみせている。切子玉は大小の違いがあり、複数の被葬者の組み合わせである可能性があるが、不明である。A27号墳は耳環のみが出土した。これらの古墳の規模はA32・A34号墳を除くと上位から中位の古墳である。

耳環・玉類を副葬する古墳は須恵器編年Ⅲ期末葉までに築造された古墳が多く、耳環のみが出土したA27号墳がⅢ期末葉、A32号墳は石室構造から須恵器編年Ⅳ期と考えられる。このことから東小支群では、装身具の副葬は古く築造された古墳の特徴の一つといえよう。なお相対的に新しく築造された西支群に装身具を副葬した古墳がみられない。このことは古墳に装身具を副葬する行為が衰退する時期にあたっていたこともあり、さらに西小支群に中・小規模の古墳が多いことから、このクラスの古墳には装身具の副葬が行われなかったとも考えることができよう。すると高根山Ａ群のうち、西小支群と東小支群では、装身具の副葬は限定された人々になされた行為、と考えられる。

⑶　鉄製品

主に鉄製品のうち直刀・鉄鏃・飾り弓の金具など武器類の副葬について、ふれることとする。

直刀とそれ以外の鍔・責金具など刀装具の存在により直刀の副葬が推定される古墳は、西小支群ではA1号墳、東小支群ではA16号墳、A17号墳、A34号墳がある。このうち東小支群A16号墳とA17号墳は須恵器編年Ⅲ期後葉まで、A34号墳はⅢ期末葉と古い時期に築造された古墳に認められるが、A1号墳のように須恵器編年Ⅳ期後半に築造された古墳にも認められる。

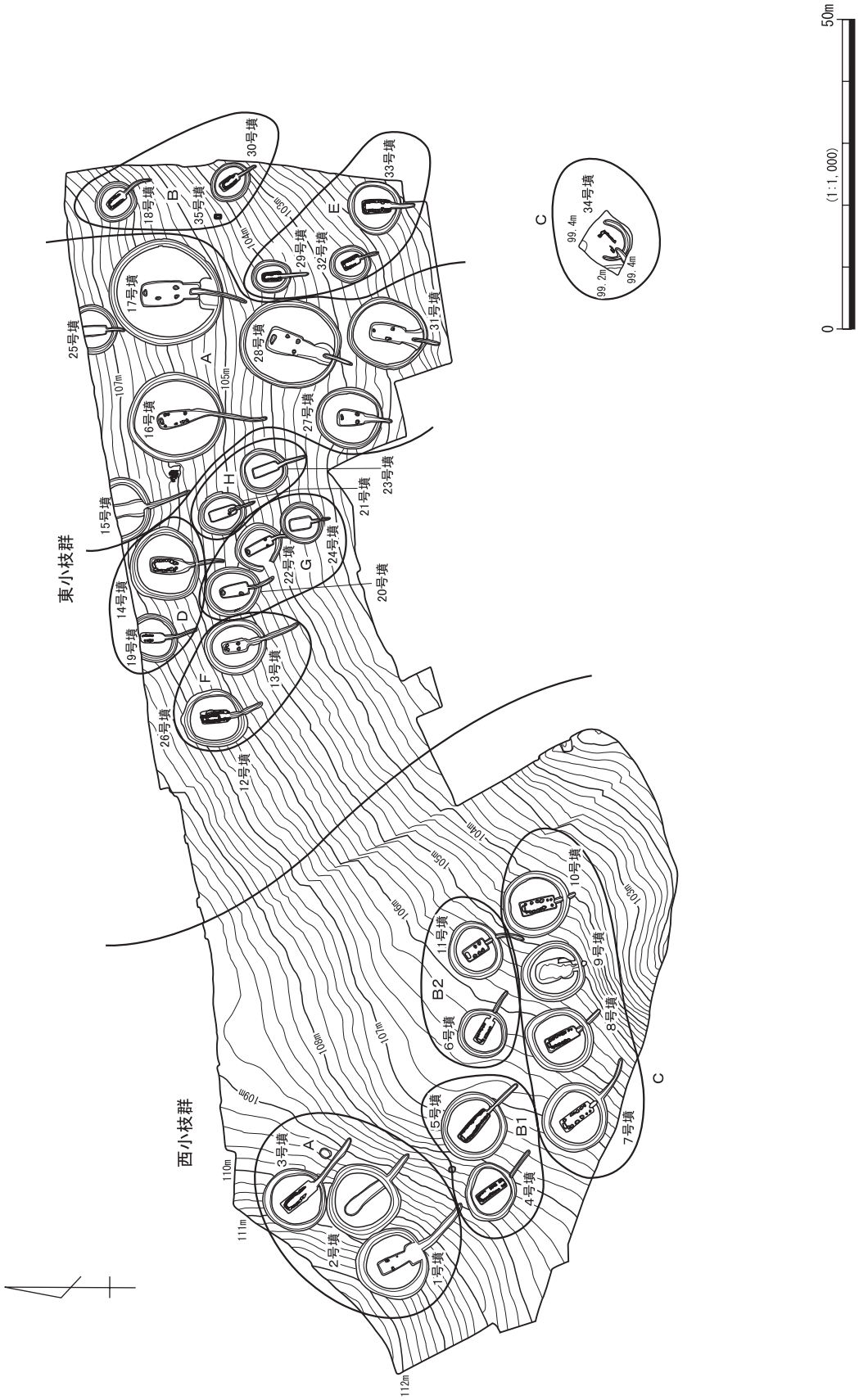
鉄鏃や弓金具の存在から弓矢の副葬が認められた古墳は、西小支群ではA1号墳、東小支群ではA14号墳、A16号墳、A17号墳、A18号墳、A27号墳、A32号墳、A34号墳がある。A17号墳については鉄鏃が三角形式、五角形式、片刃式、鑿箭式と複数の型式が含まれ、量も他の古墳より多く、違いをみせている。なお鉄鏃や飾り弓の副葬例は直刀の副葬と重複する例もあるが、それより少し多くの古墳に認められる。したがって直刀の副葬は弓矢の副葬よりも、より限定された人々になされた行為と考えられる。

⑷　副葬品の組み合わせ

土器―特に須恵器―はA32号墳を例外とし、副葬品が残されていた古墳にほぼ共通してみられた。この点は先に指摘したように、坏類、高坏、平瓶など瓶類をセットとするものであるが、単次葬のA26号墳、A35号墳以外、複数回の追葬が行われているので、一回の土器副葬はそれほど多量ではない。

ただしA17号墳は追葬時に品質の高い壺類を副葬している。このA17号墳は東・西小支群では墳丘規模が最大であり、装身具のうち多数のガラス小玉や勾玉を含み、さらに直刀と多種の鉄鏃を組み合わせて副葬している。この点からも東・西小支群の中で、最も古く築造された有力な古墳といえよう。

A28号墳に続く３番目の規模でかつ２番目に古く築造されたA16号墳は、複数回の追葬がなされているので、一回の埋葬に副葬されたかは、不明であるものの、土器以外の勾玉や小玉・耳環など装身具類と直刀・鉄鏃の鉄製品をセットとして副葬している。この古墳の副葬品も東・西小支群の中で２番目の質・



第204図　A1～A35号墳の群構成

量に位置づけできる。

墳丘規模の大きいA28号墳とA31号墳では大きく撹乱を受け、土器以外の副葬は認められなかった。もともと装身具類と鉄製武器の副葬の有無については不明である。大規模な撹乱はA16号墳・A17号墳は同様に見られたことからすれば、副葬品の遺存状態は同じ条件である。よってA28号墳とA31号墳については、装身具類と鉄製武器の副葬があったとしても、ごくわずかであったため散逸したといえよう。その点ではA16号墳・A17号墳の被葬者とは異なる地位にあった、とみることができる。

A14号墳の墳丘規模は長径10mをやや欠ける規模であった。土器以外、直刀は含まれず、黄色を含む3色のガラス小玉と飾り弓・鉄鏃の組み合わせの副葬品を持っていた。A27号墳の墳丘規模は長径9mをやや欠ける規模であった。土器以外、直刀は含まれず、耳環と鉄鏃の組み合わせの副葬品を持っていた。

築造時期は須恵器編年Ⅲ期末葉であった。A32号墳の墳丘規模は長径5mをやや欠ける小型の古墳であった。土器、直刀は含まれず、蛇紋岩の丸玉と飾り弓の組み合わせの副葬品を持っていた。

築造時期は石室の形態から須恵器編年Ⅳ期と推定された。両古墳が直刀を欠き、弓矢と装身具を含む組み合わせである。

A34号墳の墳丘規模は長径6.5mと中規模の古墳であった。土器以外、直刀と鉄鏃の武器類、水晶製切子玉、蛇紋岩と凝灰岩製の丸玉・耳環の装身具の組み合わせである。築造時期は須恵器編年Ⅲ期末葉であった。

以上、東・西小支群を構成する古墳は、A17号墳が古墳群成立の端緒となる中心の古墳であることが、副葬品とその組み合わせによっても指摘できる。その後に築造された古墳についても、副葬品の有無と組み合わせによっていくつかに分類できる。墳丘規模の大小と重ねることによって、持てるものと持たざる者の差、あるいは被葬者の村落内での役割の違い、あるいは階層の違いを反映している、と考えることができよう。

3　西小支群と東小支群

墳丘と埋葬施設さらに副葬品をいくつかの視点で検討した。この検討を受けつぎに2つの小支群は、それぞれの古墳がどのように推移をたどり構成されているかをみることとしたい。

⑴　西小支群の群構成

西小支群は等高線にそって上位、中位、下位の3列に分かれる。したがって3列のグループをつぎのように呼称し、本文をすすめたい。

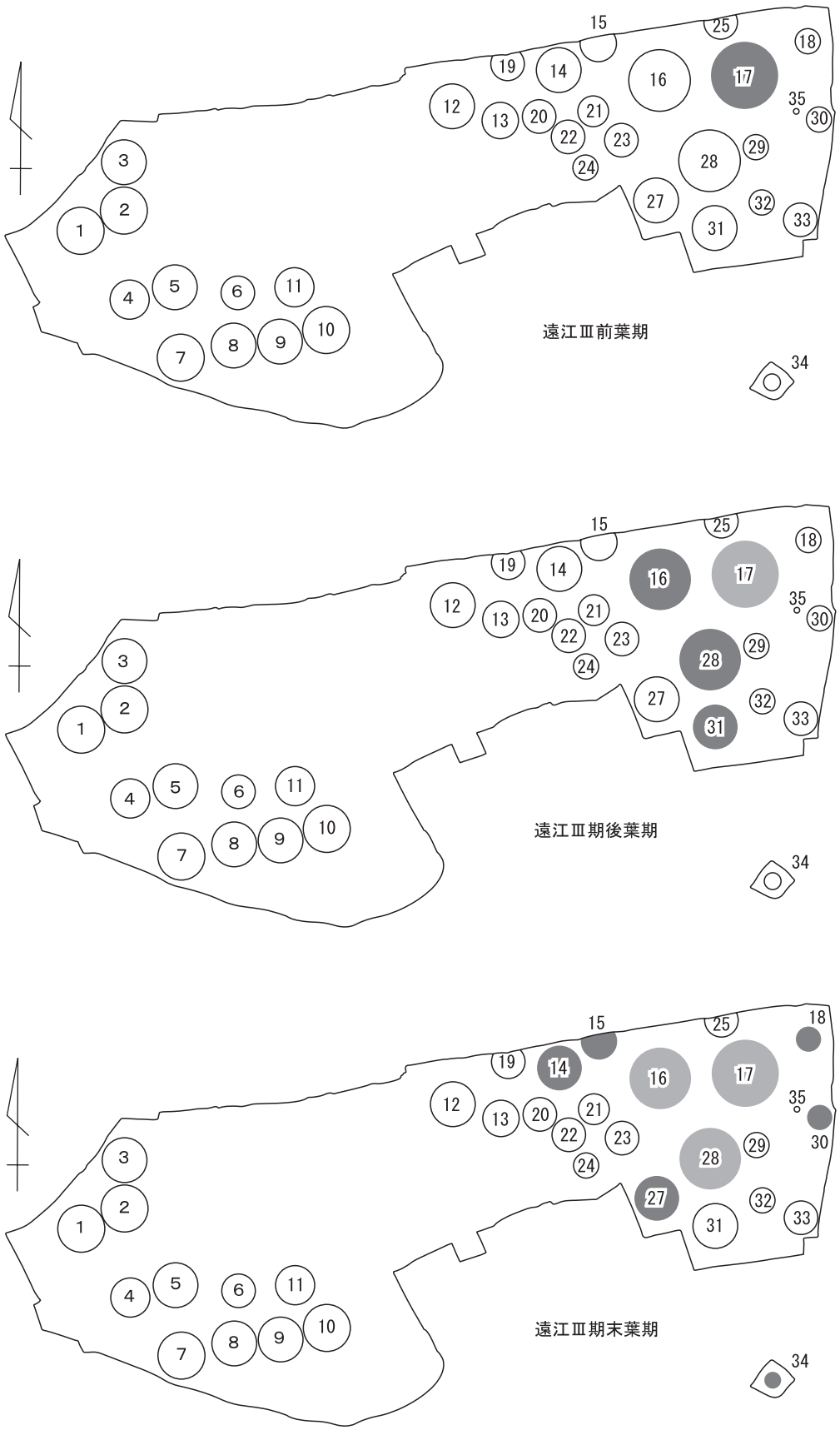
上位グループA1号墳・A2・A3号墳で構成され、西支群Ａ単位群（Ａ単位群に略す）と呼称する。

中位グループはA4・A5・A6・A11号墳で構成され、西支群Ｂ単位群（Ｂ単位群に略す）と呼称するが、この中はそれぞれの位置関係と空白域から2分し、A4・A5号墳のグループをB1単位群、A6・A11号墳のグループをB2単位群と呼ぶ。

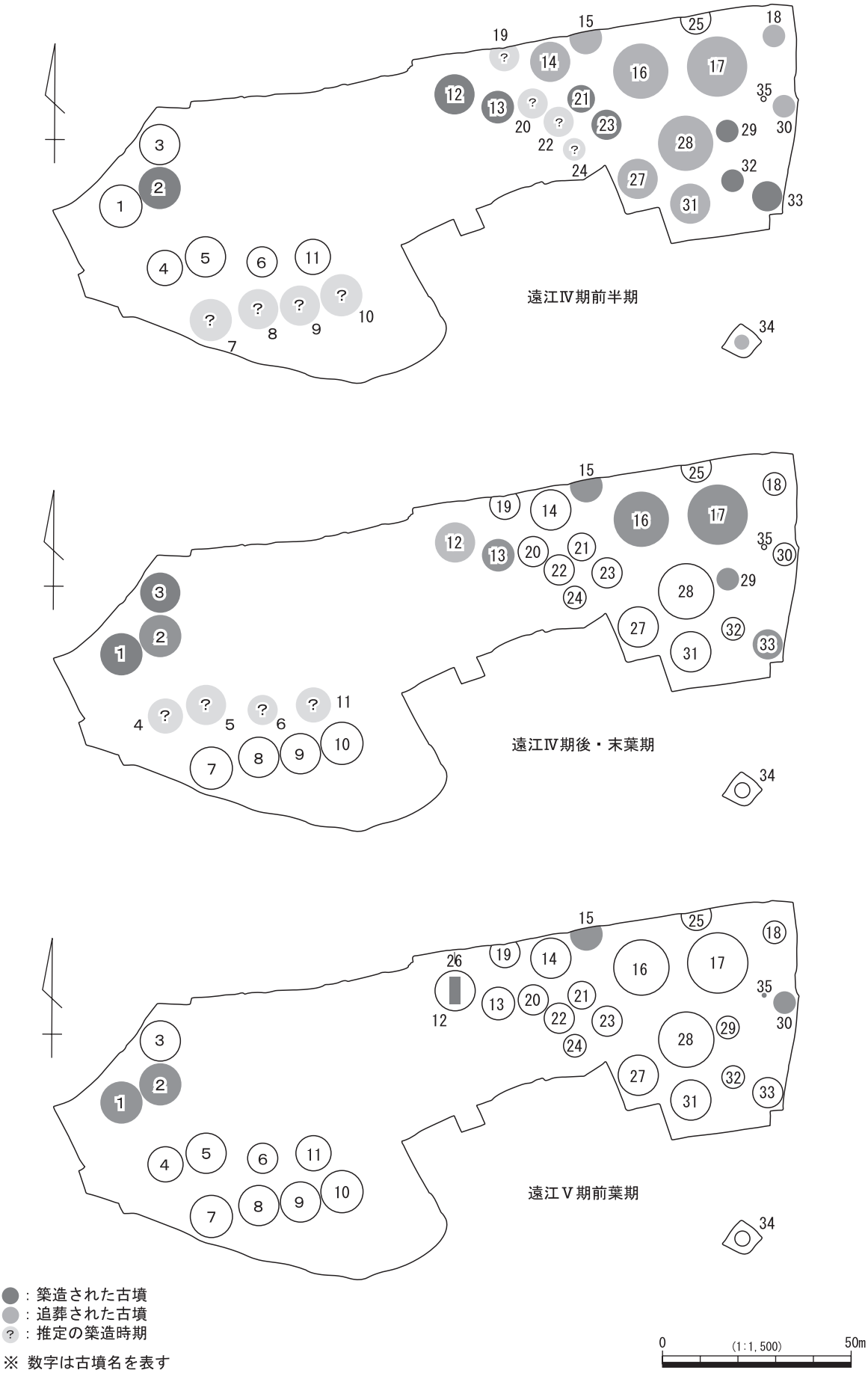
下位グループはA7・A8・A9・A10号墳で構成され、西支群Ｃ単位群（Ｃ単位群に略す）と呼称する。

Ａ単位群については、いずれもほとんど同じ規模の墳丘で、A1号墳とA2号墳にはⅤ期前葉まで複数回の追葬が認められた。A3号墳は出土遺物が極めて少なく、追葬の有無はわかっていない。この単位群の築造過程は、出土須恵器の年代と周溝の切り合いからA2号墳が最初に築造され、続いてA1号墳とA3号墳が造られたことが判明している。ただしA1号墳とA3号墳の新旧関係はわかっていない。いずれも周溝が接するか切り合っていたことから、3基の関係は極めて密接であったと推定される。

B1・B2・Ｃ単位群を構成するA4号墳からA11号墳については、墓壙の検討によって須恵器編年のⅣ期に相当する時期に築造されたとしたが、採集遺物の短頸坩（第203図1）から遠江須恵器編年Ⅲ期末葉までさかのぼる可能性があるものの、古墳に伴う出土遺物は認められず、さらなる細かい年代や追葬



第205図　古墳群の変遷(1)



第206図　古墳群の変遷(2)

の有無やその時期については不明であった。

またB1単位群とB2単位群の墓道の方向は、Ｃ単位群のA10号墳とA9号墳の間を向いている。この隙間は、B1単位群とB2単位群のつなぐ枝道の空間と推定される。

すでに述べたように11号墳の墓道はA10号墳の周溝を避け、西側に大きく屈曲してA9号墳とA10号墳の周溝の間に掘削されている。するとA11号墳築造以前には、すでにA9号墳とA10号墳は存在しそれを避けたため屈曲したこととなり、両者の新旧関係はA9号墳とA10号墳が古く、A11号墳が新しいことになろう。するとB1単位群とB2単位群のつなぐ枝道は、Ｃ単位群のA9号墳とA10号墳より新しいとすることもできよう。ただしB1単位群のA4号墳・A5号墳とＣ単位群のA7号墳・A8号墳との新旧関係は不明であるが、単位群の墓道や推定される枝道からすれば、B1単位群のA4号墳・A5号墳が新しいと推定される。ただし墓壙の検討によってB1単位群とB2単位群、Ｃ単位群の成立は、採集遺物の短頸坩から遠江須恵器編年Ⅲ期末葉までさかのぼる可能性はあるものの、ほとんどが須恵器編年のⅣ期に相当する時期に築造されたと推定される。したがって各古墳の築造は、須恵器編年Ⅳ期前半か後半のいずれかで、ほとんど近接した時期に行われたと思われる。暦年代では須恵器編年Ⅳ期前半は７世紀中頃から後半、須恵器編年Ⅳ期後半は７世紀後半であり、追葬の行われた須恵器編年Ⅴ期前葉は７世紀末葉から８世紀初頭である。

⑵　東小支群の群構成

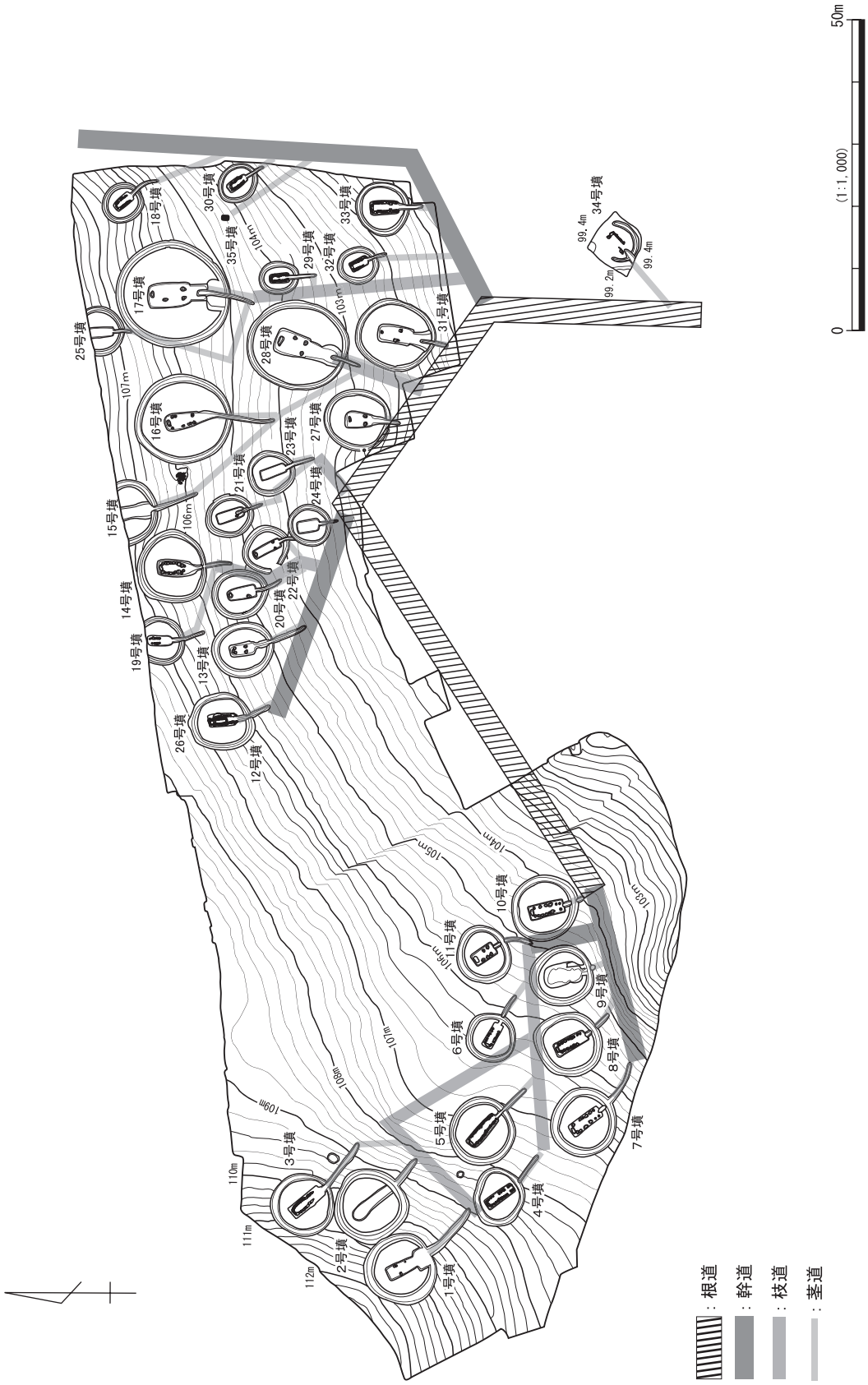
東小支群は西小支群と異なり、須恵器編年Ⅲ期前葉からⅤ期前葉に築造されている。そのため築造年代や追葬時期を検討することによって、ある特定時期における古墳の併存や追葬の同時性を知ることができる。以下、須恵器編年を指標としながら、小支群の推移と群構成を探ってみたい。

Ⅲ期前葉（MT85窯式併行期）　A17号墳は古墳群成立の端緒となる中心の古墳で、旧浜北市教育委員会調査分の７基をふくめ最大規模である。さらにA17号墳はこの高根山Ａ古墳群の端緒となった存在であることから、高根山Ｂ・Ｃ古墳群と異なるこの南向きの緩斜面を最初に選んだことになる。その後、しばらく古墳の築造はなく、いわば独立し単独で存在したことから、きわめて限定された被葬者が埋葬された古墳といえよう。A17号墳の築造時期である須恵器編Ⅲ期前葉（MT85窯式併行期）は、暦年代では６世紀中頃から後半に比定できる。

Ⅲ期後葉（TK209窯式併行期）　時期区分の指標とした須恵器編Ⅲ期後葉は、暦年代では６世紀末から７世紀初頭に比定できる。

この時期にはA16号墳はA17号墳の西隣りに、A28号墳はA17号墳の墓道（茎道）前面にあたる南に築造された。したがってA17号墳の追葬時には、A28号墳を避け遺体を室内に運ばざるを得ないので、古墳へたどりつく幹道の変更を行ったことが想定される。A16号墳についても墓道（茎道）の方向は、A28号墳とA27号墳の周溝の間を通過している。するとA16号墳とA17号墳は、A28号墳の築造を容認する関係にあったことと推定される。なおA31号墳はこの時期に築造され、A16号墳・A17号墳A28号墳・A31号墳が同時に存在したことが確認されている。当初築造されたA17号墳からみると、A16号墳は同じ等高線にそった位置に、それ以外は徐々に下がった位置に築造され、墓域の拡大は南北の縦方向に行っている。これらの古墳を東小支群Ａ単位群と呼称する。

Ⅲ期末葉（TK217窯式併行期 飛鳥Ⅰ期）　時期区分の指標とした須恵器編Ⅲ期末葉は、暦年代では７世紀前半から中頃に比定できる。この時期にはA14号墳・A15号墳・A18号墳・A27号墳・A30号墳・A34号墳が新たに築造された。A18号墳とA30号墳は墓道（茎道）の方向が、東小支群では他の古墳と異なり、主軸方位が大きく南東にふれ別の谷の方向を向いている。小支群の墓域の拡大と伴って古墳へたどりつく幹道が新しく開設されたためと推定される。このA18号墳とA30号墳を東小支群Ｂ単位群と呼称する。



第207図　A1～A35号墳墓道復元図

A34号墳は東小支群の中でも丘陵先端部により近く離れて築造されているので、地形上、東小支群の中では異なる位置にある。さらに金比羅神社建立にともなって消滅した古墳の存在を想定できるので、本来、別の小支群かもしれないが、とりあえず、東小支群Ｃ単位群と呼称し、取り扱うこととする。

A15号墳はA14号墳に近接して造られているため、同じ単位群に属するとも考えたが、A14号墳の墓道（茎道）の方向と異なり、さらに墓道（茎道）の延長がA16号墳とA23号墳の間を向いているので、A16号墳との関係を重視し、東小支群Ａ単位群に含めておこう。するとA14号墳は別の単位群と考えられるので、東小支群Ｄ単位群と呼称する。東小支群は新たな古墳築造に伴って、居住の場から墓への根道とそれから各古墳に至る幹道を延長し、墓域を東西に広げたとみることができる。

A27号墳はA31号墳に隣接して造られ、主軸方位もほぼ一致していることから、親縁関係を想定できるので、東小支群Ａ単位群に含めておく。A25号墳についても築造時期が不明ながら、墓道（茎道）の方向がA17号墳の周溝に繋がっていることから、密接な関係を想定できる。やはり東小支群Ａ単位群に含めておこう。

Ⅳ期前半（TK217窯式併行期 飛鳥Ⅱ期） 時期区分の指標とした須恵器編年Ⅳ期前半は、暦年代では7世紀中頃から後半の早い頃に比定できる。この時期にはA12号墳・A13号墳・A23号墳・A29号墳・A32号墳・A33号墳が新たに築造された。A29号墳・A32号墳・A33号墳は東小支群Ｅ単位群としておく。

A12号墳・A13号墳は東小支群の西端に墓域を広げ、枝道の延長によって築造されたと推定され、主軸方位から別の東小支群Ｆ単位群としておく。A20号墳・A22号墳・A24号墳の築造時期は、不明ながら墳丘の規模・墓壙の検討からⅣ期のうちと考えられる。なお3基は墓道（茎道）の方向から枝道を共有していたことが推定され、東小支群Ｇ単位群としておく。A21号墳はⅢ期末葉ないしⅣ期前半の築造と考えられるが、墳丘の規模からⅣ期前半に築造された可能性が高い。A21号墳・A23号墳は墓道（茎道）の方向がＤ・Ｇ単位群と異なることから、独立した単位群としＨ単位群としておく。

この時期に入ると新たな古墳の築造は、すでに築造されていた単位群の隙間である狭い範囲や西側への墓域拡張によってなされているが、狭い範囲に密集しているので、占地について限定されたと考えられる。同じ時期には西小支群が成立するが、全く新しい小支群の墓域を開いて枝分かれしている。小支群のまとまりをこえた原理が生まれたとみることができる。東小支群の築造過程は当初は高い場所からより南の村落に近い位置に築造されたが、やがて東西に墓域を広げ、さらにその隙間を縫うように狭い範囲に築造されていった。

Ⅳ期後半（TK46窯式併行期 飛鳥Ⅲ期） 時期区分の指標とした須恵器編年Ⅳ期後半は、暦年代では7世紀後半から末葉に比定できる。この時期にはA1号墳が新たに築造されたが、それ以外の古墳ではすでにあった古墳への追葬が行われた。

Ⅳ期末葉（TK48窯式併行期 飛鳥Ⅳ期） 時期区分の指標とした須恵器編年Ⅳ期末葉は、暦年代では7世紀後半から末葉に比定できる。この時期についても、須恵器編年Ⅳ期後半と同様にすでにあった古墳への追葬が行われ、残された副葬品からは新たな古墳の築造を積極的に認めることはできなかった。この時期には古墳の築造は急速に停止した様相を迎える。

Ⅴ期前葉（MT21窯式併行期） 暦年代では7世紀末葉から8世紀初頭に比定できる。いくつかの古墳へ追葬が認められるが、その数は3基と少ない。この古墳群が終末をむかえたと判断されよう。

さらにこの時期には単次葬の古墳である2基の古墳が築造された。追葬可能の従来の石室構造と異なり、一人の被葬者を対象とした点で、大きな違いがある。副葬品も認められず、それ以前の古墳には小規模な古墳であっても須恵器を中心とした遺物が少ないながら、副葬されていたことからすれば、この点でも大いに異なる。なおこの時期に築造されたA26号墳は東小支群Ｆ単位群に、A35号墳は東小支群Ｂ単位群に含めておこう。

４　古墳群の推移と終焉

高根山Ａ群の端緒となったA17号墳は、墳丘規模や副葬品からも最も有力な古墳であった。この古墳を契機として東小支群Ａ単位群が成立したが、この単位群の古墳は墳丘規模がその後に築造された古墳よりも大きく、A16号墳は副葬品とその組み合わせからもA17号墳につぐ位置にあった。A28号墳の築造を契機に幹道が変更され、A28号墳・A31号墳の西側にA27号墳が築造された。あるいはこの３基が枝分かれしたのかもしれない。須恵器編年Ⅲ期末葉期になると、東小支群Ｂ・Ｃ・Ｄ単位群が成立するが、墳丘規模はA14号墳を除いて中規模から小規模となる。この時期に副葬品も直刀と弓矢・装身具のすべても持つ古墳はA34号墳のみである。須恵器編年Ⅳ期前半期には、東小支群ではＥ・Ｆ・Ｈ単位群とともにおそらく単位群も成立し、さらに西小支群も成立することから、築造された古墳は最も多い時期である。いずれも古墳の規模は小規模でそれほど差がない。この時期以降、副葬品についても、土器がほとんどで装身具の副葬はなく、A1号墳からは直刀の刀装具と鉄鏃が出土しているが、これらは少数派である。つまり各古墳が規模・副葬品においても同じような質となっている。つまりその被葬者は等質的な階層の人々であり、この人々が古墳築造の拡大を推進したといえよう。

ところが古墳の築造は須恵器編年Ⅳ期末葉に入ると、急速に停止した様相を迎え、Ⅴ期前葉である７世紀末葉から８世紀初頭には、一人の被葬者のための単次葬の古墳が築造されるが、その数はわずかに2基であり、ほかはすでにあった古墳への追葬である。これが高根山Ａ群東・西小支群は終焉の状況である。

註

1 本節で使用する単次葬と墓道の概念は、水野正好氏による（水野正好 1974）。

2 水野正好氏（水野正好 1974）は広義の墓道を「集落から古墳群へたどりつく根道、根道から岐れて古墳群の内を貫く幹道、幹道から岐れていくつかの古墳を連繋する枝道、枝道から岐れ横穴式石室墳の羨道に至る茎道」に細分した。本報告書では石室の羨道から外部へ繋がる墓道（茎道）について墓道と記述しているが、必要に応じて墓道（茎道）とも併記した。

引用・参考文献

水野正好　1974「雲雀山東屋根中古墳群の群構造とその性格」『古代研究 4』

豊岡村教育委員会　1983「社山古墳群」『押越・社山古墳群調査報告書』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『大屋敷A古墳群』

表14　出土土器観察表

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	器種	残存部位	残存率	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備考
A1号墳	石室内撹乱	105	88	1	須恵器	坏蓋	完形	100	3.1	10.2	8.1	—	灰	外面に自然釉
				2	須恵器	坏蓋	完形	100	3.0	10.6	8.3	—	灰	外面に自然釉
		—		3	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	50	2.8	10.6	8.4	—	灰	外面に自然釉
		—		4	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	15	3.1	(11.0)	(8.6)	—	灰	外面に自然釉
		105		5	須恵器	坏蓋	完形	100	3.2	10.1	7.8	—	灰	
		—		6	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	30	3.4	(10.3)	(7.8)	—	灰	外面全面に自然釉
		—		7	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	25	3.0	(10.8)	(8.4)	—	灰	外面に自然釉
		105		8	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	98	2.9	10.5	8.3	—	灰	外面全面に自然釉
		—		9	須恵器	坏蓋	口縁	40	—	(10.0)	(7.5)	—	灰	外面全面に自然釉
		—		10	須恵器	坏蓋	口縁	25	—	(10.4)	(7.8)	—	灰	外面に自然釉
		—		11	須恵器	坏蓋	口縁	8	—	(10.8)	(8.6)	—	灰	
		—		12	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	95	3.2	(12.2)	(10.9)	—	灰	
		105		13	須恵器	坏身	完形	100	3.2	9.7	9.5	—	灰	底部外面に火だすき痕
				14	須恵器	坏身	完形	100	3.4	9.6	9.4	—	灰	底部外面に火だすき痕
				15	須恵器	坏身	完形	100	3.5	9.5	9.3	—	灰	底部外面に火だすき痕
				16	須恵器	坏身	ほぼ完形	98	3.3	9.6	9.3	—	灰	底部外面に火だすき痕
				17	須恵器	坏身	完形	100	3.5	9.6	9.4	—	灰	胴部～底部に火だすき痕
		—		18	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	4.1	11.6	11.4	—	灰	
		—		19	須恵器	坏身	口縁～底部	75	4.0	12.0	11.7	—	灰白	
		—		20	須恵器	坏蓋	口縁	30	—	(15.8)	(15.4)	—	灰	
		—		21	須恵器	坏蓋	口縁	15	—	(15.2)	(14.7)	—	灰	
		—		22	須恵器	坏身	口縁～底部	70	4.3	(14.0)	(13.9)	(9.9)	灰	
		—		23	須恵器	無蓋高坏	口縁～脚部	75	11.9	(15.4)	(15.0)	(10.2)	灰	外面全面に自然釉
		—		24	須恵器	平瓶	口縁～底部	70	13.7	(12.8)	5.3	—	にぶい黄橙	
A2号墳	撹乱	106	91	1	須恵器	坏身	完形	100	2.9	10.5	8.7	—	灰白	
		—		2	須恵器	坏身	完形	100	2.7	10.6	8.6	—	灰	
		—		3	須恵器	坏身	口縁～底部	40	—	(10.6)	(8.8)	—	灰	
		—		4	須恵器	坏身	口縁～底部	60	3.1	(10.4)	(8.7)	—	灰白	
		106		5	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	4.1	11.3	11.0	—	浅黄	内面に自然釉
				6	須恵器	坏身	完形	100	4.7	11.3	11.1	—	浅黄	内面に自然釉
				7	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	90	2.7	14.8	14.6	—	灰白	
				8	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	97	3.7	15.4	15.3	—	灰白	内面中央に自然釉
	石室内撹乱	—		9	須恵器	坏蓋	体部～口縁	25	—	(14.2)	(13.7)	—	灰	
	撹乱	—		10	須恵器	坏蓋	口縁	25	—	(15.1)	(14.8)	—	灰白	
	石室内撹乱	—		11	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	70	—	(16.0)	(15.7)	—	灰白	
	撹乱	106		12	須恵器	坏身	口縁～底部	95	4.8	14.0	13.8	9.9	灰白	
				13	須恵器	坏身	口縁～底部	85	4.6	13.7	13.5	10.1	灰白	
		—		14	須恵器	坏身	口縁～底部	20	—	(14.6)	(14.4)	—	灰白	
	石室内撹乱	—		15	須恵器	無蓋高坏	口縁～底部	30	—	(13.0)	(12.9)	—	灰	
	撹乱	—		16	須恵器	平瓶	口縁～底部	60	—	(12.3)	4.85	—	灰白	外面に自然釉
	石室内撹乱	106		17	須恵器	平瓶	頸部～底部	60	—	13.3	—	—	灰	
				18	須恵器	瓶	完形	100	11.3	10.1	11.1	—	灰白	
A3号墳	墳丘撹乱	—	95	1	灰釉陶器	碗	底部	100	—	—	—	7.3	灰白	廻転糸切り痕あり
A12号墳	撹乱	107	115	1	須恵器	坏身	完形	100	3.8	10.3	8.0	—	灰	ヘラ記号「×」
				2	須恵器	坏身	口縁～底部	60	—	(10.2)	(8.3)	—	灰	
		—		3	須恵器	坏身	口縁	20	—	(9.9)	(7.7)	—	灰	
		—		4	須恵器	坏蓋	口縁	60	—	(9.6)	(9.5)	—	灰	
		—		5	須恵器	坏蓋	口縁	25	—	(10.6)	(10.2)	—	灰白	
	墓道	107		6	須恵器	壺類蓋	完形	100	2.7	9.5	6.2	—	淡黄色	
	撹乱	—		7	須恵器	坏蓋	つまみ部	90	—	—	—	—	灰白	
A13号墳	周溝	—	118	1	須恵器	坏身	口縁～底部	35	—	(11.8)	(9.8)	—	灰	
		107		2	須恵器	坏身	完形	100	3.8	10.9	8.6	—	灰	
		—		3	須恵器	坏蓋	口縁～胴部	10	—	(9.6)	(9.3)	—	灰	
	周溝付近	—		4	須恵器	フラスコ形瓶	口縁～体部	75	—	(14.3)	7.7	—	灰	
	石室内撹乱	—		5	須恵器	フラスコ形瓶	口縁	25	—	—	(8.3)	—	灰白	
	周溝	—		6	須恵器	フラスコ形瓶	口縁～頸部	25	—	—	(7.5)	—	明褐灰	内面に自然釉
	墓道上	—		7	土師器	脚付盤	底部～脚部	80	—	—	—	8.3	にぶい橙	丹塗り
A14号墳	石室内撹乱	—	122	1	須恵器	高坏	坏部～脚部	40	—	—	—	11.5	黄灰色	長脚二段透かし
		107		2	須恵器	無蓋高坏	坏部～脚部	60	14.5	15.0	14.8	11.3	灰白	
				3	須恵器	無蓋高坏	ほぼ完形	95	12.9	15.2	15.1	11.45	灰白	
				4	須恵器	瓶	ほぼ完形	98	13.9	10.2	10.2	—	灰黄	坏内面自然釉
				5	須恵器	長頸壺	ほぼ完形	95	17.2	10.9	(6.9)	4.8	明青灰	ヘラ記号「卅」か、底部内に自然釉
		—		6	須恵器	フラスコ形瓶	口縁	70	—	—	(8.7)	—	灰白	内外面とも自然釉
		—		7	須恵器	長頸壺	口縁	25	—	—	(7.5)	—	にぶい黄橙	内外面とも自然釉

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	器種	残存部位	残存率	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備考
A14号墳	石室内撹乱	108	122	8	須恵器	平瓶	ほぼ完形	98	18.8	16.1	7.0	6.2	灰白	ヘラ記号「一」
				9	須恵器	平瓶	口縁～底部	70	(17.9)	16.0	(6.7)	6.3	灰白	
A15号墳	周溝	—	125	1	須恵器	坏身	口縁～底部	80	4.2	13.0	10.4	—	灰白	
	撹乱	108		2	須恵器	坏身	完形	100	4.5	12.5	10.2	5.1	灰	
				3	須恵器	坏身	完形	100	4.5	12.1	9.8	5.0	灰	
	周溝	—		4	須恵器	坏身	口縁	25	—	(12.9)	(10.6)	—	灰白	
	撹乱	108		5	須恵器	坏蓋	完形	100	4.3	11.6	11.3	—	灰	
	周溝	—		6	須恵器	坏蓋	口縁～体部	20	—	(12.2)	(12.2)	—	青灰	
	撹乱	108		7	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	98	4.6	11.7	11.5	—	灰	
		—		8	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	95	3.6	9.9	9.7	—	灰	
	周溝	—		9	須恵器	坏蓋	口縁～体部	20	—	(11.7)	(11.6)	—	灰	
		—		10	須恵器	坏蓋	口縁～体部	25	—	(11.9)	(11.9)	—	灰白	
	撹乱	—		11	須恵器	坏蓋	つまみ部～体部	30	—	—	—	—	灰	
		—		12	須恵器	坏身	底部	50	—	—		8.5	灰	
		109		13	須恵器	無蓋高坏	口縁～脚部	60	14.3	15.15	15.1	(10.0)	灰	
				14	須恵器	広口壺	ほぼ完形	95	19.1	20.4	10.1	6.5	灰	内外共に自然釉
		—		15	須恵器	長頸壺	口縁～頸部	50	—	—	(6.8)	—	灰白	内外面に自然釉
		108		16	須恵器	盌	口縁～底部	60	4.6	(8.6)	(8.2)	—	灰	ヘラ記号「×」か？
				17	須恵器	盌	口縁～底部	80	3.6	8.8	8.4	—	灰	
		109		18	須恵器	脚付盌	ほぼ完形	98	14.4	11.2	7.1	8.2	灰	
				19	須恵器	平瓶	ほぼ完形	95	(14.8)	15.9	(5.0)	—	灰	内外共に自然釉
				20	須恵器	平瓶	ほぼ完形	98	(15.6)	15.6	(5.2)	—	灰	自然釉
		—		21	須恵器	平瓶	頸部～底部	95	—	13.9	—	—	灰褐	
A16号墳	撹乱	109	129	1	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	3.8	12.0	10.0	4.3	灰	
	周溝	—		2	須恵器	坏身	口縁～体部	15	—	(12.6)	(10.7)	—	灰	尾張系
		—		3	須恵器	坏身	口縁～体部	25	—	(12.4)	(10.5)	—	灰白	尾張系
	撹乱	—		4	須恵器	坏身	口縁～体部	25	—	(11.8)	(9.8)	—	灰	
		—		5	須恵器	坏身	口縁～底部	25	4.0	(12.8)	(10.3)	—	褐灰	
	周溝	—		6	須恵器	坏身	口縁～底部	25	4.3	(12.8)	(10.6)	—	灰	尾張系
	石室内撹乱	109		7	須恵器	坏身	ほぼ完形	100	4.3	11.4	9.1	—	灰白	ヘラ記号「一」
		110		8	須恵器	坏身	ほぼ完形	98	4.0	11.3	9.1	4.2	灰白	ヘラ記号「一」
				9	須恵器	坏身	完形	100	3.6	11.0	9.0	3.8	灰白	ヘラ記号「一」
	撹乱	—		10	須恵器	坏身	口縁	10	—	(12.0)	(10.2)	—	黄灰	
		—		11	須恵器	坏身	口縁	10	—	(11.6)	(9.4)	—	灰オリーブ	
		—		12	須恵器	坏身	口縁	25	—	(10.8)	(8.8)	—	にぶい黄橙	
		—		13	須恵器	坏身	口縁	15	—	(11.5)	(9.9)	—	灰	
		110		14	須恵器	坏身	ほぼ完形	95	3.8	12.0	10.0	—	灰	森山窯
		—		15	須恵器	坏身	口縁～底部	50	4.0	(11.8)	(9.6)	—	灰	森山窯
		110		16	須恵器	坏身	ほぼ完形	98	3.3	12.2	10.1	6.5	灰	
		—		17	須恵器	坏身	口縁	60	—	(12.0)	(9.6)	—	灰	
	周溝北西	—		18	須恵器	坏身	口縁～底部	50	4.0	(12.6)	(10.4)	—	灰	尾張窯
	周溝	—		19	須恵器	坏身	口縁	20	—	(12.5)	(10.2)	—	灰	尾張窯
	周溝西	—		20	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	50	4.2	(12.2)	(11.9)	—	灰白	尾張窯
	撹乱	—		21	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	50	4.2	11.6	11.4	—	青灰	森山窯
	周溝	—		22	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	50	—	(11.2)	(10.9)	—	灰	
	撹乱	—		23	須恵器	坏蓋	口縁	25	—	(11.6)	(11.2)	—	灰	
		—		24	須恵器	坏蓋	口縁	15	—	(9.8)	(9.6)	—	灰	
	周溝	—		25	須恵器	壺類の蓋か盌か	天井部～口縁	30	4.6	(11.1)	(10.2)	—	灰白	
	周溝外西	—		26	須恵器	高坏	脚部	50	—	—	—	(12.2)	灰白	透かし二段二方向、ヘラ記号「×」
	撹乱	110		27	須恵器	高坏	口縁～底部	95	16.7	11.6	11.4	11.4	灰	透かし二段二方向
	石室内撹乱	110		28	須恵器	高坏	口縁～底部	95	16.0	11.3	11.1	11.2	灰	透かし二段二方向
	周溝	—		29	須恵器	高坏	口縁～体部	30	—	(15.7)	(15.5)	—	灰白	
	石室内撹乱	110	130	30	須恵器	長頸壺	口縁～底部	60	14.4	12.2	8.4	—	黄灰	
		—		31	須恵器	フラスコ形瓶	口縁～底部	50	(21.3)	—	6.8	—	オリーブ灰	
		110		32	須恵器	瓶	口縁～底部	95	15.3	10.4	10.5	—	灰	
	墓道	111		33	須恵器	瓶	ほぼ完形	95	10.0	9.2	10.0	3.0	灰白	ヘラ記号「廾」
	周溝	—		34	須恵器	盌	口縁	15	—	—	(10.0)	—	灰黄	
		—		35	須恵器	平瓶	頸部～底部	30	(13.1)	(15.0)	(5.0)	—	灰	森山窯
		—		36	灰釉陶器	碗	胴部～底部	60	—	—	—	6.6	にぶい橙	浜北窯
	周溝外東	—		37	灰釉陶器	小皿	底部	17	—	—	—	(7.1)	にぶい橙	
		—		38	灰釉陶器	小皿	底部	20	—	—	—	(6.0)	にぶい橙	
	周溝	—		39	灰釉陶器	小皿	底部	15	—	—	—	(6.9)	浅黄橙	
A17号墳	石室	111	133	1	須恵器	坏身	口縁～底部	90	5.3	(17.1)	(14.4)	—	灰白	
	周溝	—		2	須恵器	坏身	口縁～底部	50	3.2	(12.8)	(10.5)	(8.0)	灰白	
	撹乱	—		3	須恵器	坏身	口縁～底部	30	—	(12.6)	(10.4)	—	灰白	

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	器種	残存部位	残存率	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備考
A17号墳	周溝	111	133	4	須恵器	坏身	完形	100	3.6	11.3	11.1	7.8	灰黄	
	周溝付近			5	須恵器	坏身	完形	100	3.8	11.2	10.9	5.7	灰黄	スノコ圧痕
	攪乱	—		6	須恵器	坏身	口縁～底部	20	—	(11.0)	(10.8)	(4.5)	灰	
		—		7	須恵器	坏身	口縁～底部	25	—	(11.4)	(11.1)	(6.3)	灰白	
	周溝	111		8	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	95	(4.9)	(12.6)	(12.0)	—	灰	森山窯
		—		9	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	35	4.5	(12.4)	(12.1)	—	灰	
		—		10	須恵器	坏蓋	口縁	25	—	(12.2)	(11.8)	—	灰	森山窯
	攪乱	—		11	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	35	3.8	(10.9)	(10.6)	(5.0)	灰白	
	石室内攪乱	111		12	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	40	3.5	10.0	9.7	—	灰白	
	攪乱	—		13	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	20	2.1	(11.0)	(8.5)	—	灰白	
	周溝	—		14	須恵器	高坏	口縁～脚部	75	—	(14.4)	(11.8)	—	灰	透かし二段二方向
	石室	111		15	須恵器	高坏蓋	天井部～口縁	70	(5.0)	15.5	15.3	—	灰白	
		—		16	須恵器	高坏	坏部	35	—	(15.4)	(15.2)	—	灰	
		112		17	須恵器	壺類蓋	ほぼ完形	98	5.3	10.2	(9.9)	—	灰	
				18	須恵器	脚付短頸壺	口縁～底部	70	27.5	17.2	7.9	13.6	灰	透かし二段二方向
		—		19	須恵器	短頸壺	口縁～体部	60	—	16.2	8.3	—	にぶい赤褐	森山窯
		112		20	須恵器	壺類蓋	天井部～口縁	75	5.6	11.3	11.0	—	にぶい赤褐	森山窯
	攪乱			21	須恵器	脚付短頸壺	ほぼ完形	90	19.4	17.5	8.5	12.7	にぶい赤褐	森山窯
	周溝内攪乱	—		22	須恵器	盌	口縁～台部	40	(16.0)	15.3	(10.2)	11.5	灰	森山窯
		—		23	須恵器	盌	口縁～体部	15	—	(15.0)	(14.4)		灰	
	石室	112	134	24	須恵器	平瓶	口縁～底部	95	21.8	21.3	7.9	13.0	暗灰黄	
	周溝内攪乱	—		25	須恵器	平瓶	頸部～底部	80	—	17.7	—	—	灰白	ヘラ記号「×」か？
	周溝	—		26	須恵器	平瓶	口縁～底部	40	(11.3)	(13.5)	(5.0)	—	暗灰	
	周溝内攪乱	111		27	須恵器	甕	口縁～底部	60	48.1	49.6	(25.3)	—	灰白	
A18号墳	石室	113	139	1	須恵器	坏身	ほぼ完形	99	3.3	10.8	8.9	3.6	灰	
				2	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	98	3.9	10.3	10.0	—	灰	
				3	須恵器	高坏	口縁～脚部	95	9.2	9.4	9.1	8.0	灰	
A21号墳	攪乱	—	145	1	須恵器	高坏	体部～脚部	60	—	—	—	8.0	灰白	
		—		2	土師器	長脚高坏	脚部	90	—	—	—	—	にぶい橙	
A23号墳	墓道	113	148	1	須恵器	坏身	完形	100	3.5	10.1	8.0	2.6	灰	ヘラ記号「廾」
A27号墳	攪乱	—	154	1	須恵器	坏身	ほぼ完形	97	4.5	12.1	9.3	3.7	灰	ヘラ記号「×」
	墓道	—		2	須恵器	坏身	口縁～底部	25	4.4	(12.5)	(10.2)	3.7	灰	
	攪乱	—		3	須恵器	坏身	口縁～底部	20	—	(13.1)	(10.4)	—	オリーブ灰	
	周溝	—		4	須恵器	坏身	口縁～底部	60	3.1	(10.8)	(9.4)	—	灰白	
		—		5	須恵器	坏身	口縁～底部	50	3.4	(9.5)	(7.4)	—	緑灰	
		—		6	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	20	3.5	(10.5)	(10.2)	—	灰白	
	墓道	—		7	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	70	4.1	(10.3)	(10.0)	—	明褐灰	
	周溝	—		8	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	25	3.5	9.5	(9.2)	—	オリーブ灰	
	攪乱	—		9	須恵器	フラスコ形瓶	口縁～頸部	80	—	—	(7.3)	—	淡黄	
	墓道	—		10	須恵器	盌	口縁～底部	25	5.5	(11.1)	(10.2)	5.1	灰白	
	周溝	—		11	須恵器	盌	口縁～底部	50	5.2	(11.0)	(10.1)	(4.4)	灰白	
		—		12	須恵器	盌	口縁～体部	25	—	(10.9)	(10.0)	—	灰白	
		—		13	須恵器	盌	口縁～体部	35	—	(10.9)	(10.0)	—	灰白	
	攪乱	—		14	須恵器	無蓋高坏	口縁～体部	30	—	(16.1)	(16.0)	—	灰黄	
	墓道付近	—		15	須恵器	無蓋高坏	口縁～底部	25	—	(14.6)	(14.4)	—	灰白	
	周溝	—		16	須恵器	平瓶	肩部～底部	25	—	(14.2)	—	—	にぶい黄橙	肩に自然釉
A28号墳	攪乱	—	157	1	須恵器	坏身	口縁～底部	20	4.4	(12.1)	(9.2)	—	灰	
		—		2	須恵器	坏蓋	体部～口縁	20	—	(12.7)	(12.2)	—	灰	
		—		3	須恵器	壺類の蓋	天井部～口縁	25	2.1	(11.0)	(8.4)	—	浅黄	
		—		4	須恵器	壺類の蓋	天井部～口縁	50	2.0	—	(8.4)	—	浅黄	
		—		5	須恵器	平瓶	口頸部	30	—	—	(7.3)	—	灰	
		—		6	須恵器	平瓶	口縁～肩部	30	—	—	4.4	—	灰黄	
A29号墳	攪乱	—	161	1	須恵器	坏身	口縁～体部	30	—	(10.2)	(8.0)	—	灰	
	閉塞部	—		2	須恵器	坏身	体部～底部	30	—	—	—	(4.6)	灰白	
		—		3	須恵器	坏蓋	天井部～体部	70	—	—	—	—	灰	ヘラ記号「≤」
		—		4	須恵器	坏蓋	体部～口縁	20	—	(8.7)	(6.6)	—	灰黄	
		—		5	須恵器	平瓶	肩部～底部	70	—	13.7	—	—	灰オリーブ	肩部に自然釉
A30号墳	石室	—	165	1	須恵器	坏身	口縁	15	—	(12.3)	(10.3)	—	灰	
		—		2	須恵器	坏身	口縁	10	—	(10.5)	(8.8)	—	青灰	
		—		3	須恵器	坏身	口縁	15	—	(10.7)	(8.6)	—	灰	
		—		4	須恵器	坏身	口縁	15	—	(10.6)	(8.3)	—	灰	
		—		5	須恵器	坏身	口縁	25	—	(9.5)	(7.8)	—	青灰	
	墓道	113		6	須恵器	小形無高台坏身	完形	100	4.4	8.9	8.8	4.8	灰白	
	石室			7	須恵器	長頸壺	完形	92	25.1	16.8	11.3	8.3	灰白	湖西窯
A31号墳	周溝内攪乱	—	168	1	須恵器	坏身	受け部～体部	10	—	(11.6)	—	—	オリーブ灰	

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	器種	残存部位	残存率	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備考
A31号墳	周溝内撹乱	—	168	2	須恵器	坏身	受け部～体部	15	—	(11.0)	—	—	オリーブ灰	
		—		3	須恵器	高坏	坏部～脚部	40	—	—	—	—	灰	自然釉、透かし二段二方向
		—		4	須恵器	高坏	坏底部	95	—	—	—	—	灰黄	自然釉、透かし二段二方向
	周溝	—		5	灰釉陶器	壺甕類	底部	25	—	—	—	(16.8)	にぶい黄橙	内面自然釉、浜北窯
A33号墳	石室	113	175	1	須恵器	坏蓋	完形	100	3.0	9.0	6.6	—	灰白	
				2	須恵器	坏蓋	完形	100	3.2	9.3	6.2	—	灰白	
		—		3	須恵器	無蓋高坏	口縁～脚部	95	10.9	13.7	13.5	9.4	灰白	
		114		4	須恵器	フラスコ形瓶	ほぼ完形	99	22.6	16.2	8.6	—	灰	
	撹乱	—		5	須恵器	長頸壺	肩部	25	—	(14.7)	—	—	灰	
	石室	—		6	須恵器	坏身又は盌	口縁	10	—	(8.2)	(7.9)	—	灰	
		—		7	須恵器	坏身又は盌	口縁	25	—	(8.8)	(8.4)	—	灰白	
A34号墳	石室	114	178	1	須恵器	坏蓋	天井部～口縁	70	4.0	11.1	10.8	—	明褐灰	
		—		2	須恵器	無蓋高坏	坏部	25	—	(14.1)	(13.8)	—	灰白	
		114		3	須恵器	小形高坏	口縁～脚部	70	10.8	10.6	(10.3)	9.6	灰白	
		—		4	須恵器	瓶類	口縁	25	—	—	(9.0)	—	灰白	
土坑墓SX48		114	188	1	灰釉陶器	碗	ほぼ完形	98	6.6	15.3	15.1	7.5	灰黄	浜北窯
				2	灰釉陶器	皿	ほぼ完形	98	3.5	11.6	11.2	5.9	灰黄	浜北窯
表採		—	202	3	灰釉陶器	碗	口縁～体部	12	—	(14.0)	(13.9)	—	灰白	
		—		4	灰釉陶器	碗	体部～底部	60	—	—	—	7.0	灰白	
火葬墓SX128		114		5	灰釉陶器	長頸壺	頸部～底部	60	—	(17.7)	—	(11.5)	灰オリーブ	自然釉、浜北窯
表採		—	203	1	須恵器	短頸坩	口縁～底部	30	10.9	(13.5)	(6.4)	—	灰白	

(　)は復原値

表15　出土装身具観察表

出土玉類

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	材質	直径(mm)	全長・高さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	穿孔	備考
A14号墳	石室覆土	巻頭8	122	10	小玉	ガラス	7.9	5.2	3.0	0.37	紺		
				11	小玉	ガラス	7.2	4.3	2.8	0.25	紺		
				12	小玉	ガラス	5.7	5.7	2.7	0.20	水色		
	覆土			13	小玉	ガラス	6.0	4.5	2.2	0.18	紺		
				14	小玉	ガラス	5.9	3.2	1.9	0.16	紺		
				15	小玉	ガラス	5.1	2.5	2.1	0.07	紺		
				16	小玉	ガラス	4.8	2.5	2.0	0.06	紺		
	撹乱			17	小玉	ガラス	4.1	3.3	1.6	0.06	紺		
				18	小玉	ガラス	3.9	3.4	1.7	0.05	紺		
	覆土			19	小玉	ガラス	3.6	2.4	1.6	0.04	紺		
	撹乱			20	小玉	ガラス	3.8	3.1	1.7	0.04	紺		
	覆土			21	小玉	ガラス	4.0	3.1	1.6	0.05	紺		
				22	小玉	ガラス	3.9	3.0	1.9	0.05	紺		
				23	小玉	ガラス	3.9	2.9	1.8	0.04	紺		
				24	小玉	ガラス	4.1	2.6	1.3	0.06	紺		
				25	小玉	ガラス	3.8	2.5	1.4	0.04	紺		
				26	小玉	ガラス	3.6	3.9	1.6	0.05	紺		
				27	小玉	ガラス	2.6	1.6	1.0	測定不可	紺		
	石室覆土			28	小玉	ガラス	4.0	3.8	1.4	0.08	水色		
				29	小玉	ガラス	3.8	3.6	1.2	0.06	紺		
				30	小玉	ガラス	4.1	3.4	1.6	0.05	紺		
				31	小玉	ガラス	3.6	3.4	1.5	0.04	紺		
				32	小玉	ガラス	3.8	3.4	1.8	0.05	紺		
				33	小玉	ガラス	3.6	3.2	1.4	0.04	紺		
				34	小玉	ガラス	3.9	2.9	1.2	0.04	紺		
				35	小玉	ガラス	4.1	2.3	1.4	0.06	紺		
				36	小玉	ガラス	3.5	2.0	1.0	0.03	紺		
				37	小玉	ガラス	3.7	2.2	1.3	0.04	紺		
				38	小玉	ガラス	4.4	3.6	1.8	0.09	水色		
				39	小玉	ガラス	4.1	2.3	1.2	0.04	水色		
				40	小玉	ガラス	3.8	2.2	0.9	0.04	水色		
				41	小玉	ガラス	3.8	2.9	1.7	0.04	水色		
				42	小玉	ガラス	4.3	2.4	1.6	0.04	水色		
				43	小玉	ガラス	4.0	2.3	1.3	0.04	水色		
				44	小玉	ガラス	3.6	2.3	1.3	0.03	水色		
	覆土			45	小玉	ガラス	3.4	2.9	1.4	0.04	水色		
	石室覆土			46	小玉	ガラス	4.5	3.1	1.7	0.05	黄		

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	材質	直径(mm)	全長・高さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	穿孔	備考
A16号墳	覆土	巻頭8	130	40	勾玉	珪質粘板岩	—	32.0	2.7(欠損)	4.85	薄緑色	両面	
				41	なつめ玉	埋木	13.5	23.0	4.5	1.94	黒褐色	片面	
				42	小玉	ガラス	6.3	4.8	1.4	0.25	紺		
				43	小玉	ガラス	6.2	4.8	1.7	0.26	紺		
				44	小玉	ガラス	6.3	4.0	1.9	0.20	紺		
				45	小玉	ガラス	5.9	3.7	2.0	0.15	紺		
				46	小玉	ガラス	5.4	3.6	1.4	0.13	紺		
				47	小玉	ガラス	5.2	4.0	1.3	0.14	紺		
				48	小玉	ガラス	4.9	3.2	1.4	0.10	紺		
				49	小玉	ガラス	4.4	2.8	1.3	0.06	紺		
				50	小玉	ガラス	4.6	2.9	1.4	0.08	紺		
				51	小玉	ガラス	3.8	4.2	1.5	0.07	水色		
				52	小玉	ガラス	4.4	2.0	2.1	0.04	水色		
				53	小玉	ガラス	4.0	2.9	1.7	0.05	水色		
				54	小玉	ガラス	4.5	2.3	1.5	0.05	水色		
				55	小玉	ガラス	3.7	2.2	1.2	0.04	紺		
A17号墳	撹乱	巻頭8	135	28	勾玉	メノウ	—	28.5	3.4	4.38	赤(赤褐色)	片面	
	石室床面撹乱			29	勾玉	メノウ	—	32.5	3.2	6.35	薄茶色	片面	
	石室床面			30	切子玉	水晶	17	24.4	4.4	7.94	透明白	片面	
	撹乱			31	丸玉	土製	11.5	9.5	2.3	1.04	灰黄	片面	
	石室			32	小玉	ガラス	7.2	3.7	1.9	0.26	紺		
				33	小玉	ガラス	6.7	5.4	1.8	0.31	紺		
				34	小玉	ガラス	6.3	4.7	2.2	0.25	紺		
				35	小玉	ガラス	5.9	2.9	1.9	0.13	紺		
				36	小玉	ガラス	5.7	3.3	2.0	0.14	紺		
				37	小玉	ガラス	5.6	3.2	1.4	0.13	紺		
				38	小玉	ガラス	5.5	3.9	1.5	0.14	紺		
				39	小玉	ガラス	5.5	3.4	1.7	0.14	紺		
				40	小玉	ガラス	5.5	3.5	1.3	0.14	紺		
				41	小玉	ガラス	5.5	3.6	1.4	0.14	紺		
				42	小玉	ガラス	5.5	3.5	1.4	0.15	紺		
				43	小玉	ガラス	5.6	3.6	1.2	0.14	紺		
				44	小玉	ガラス	5.5	3.6	1.3	0.14	紺		
				45	小玉	ガラス	5.5	3.6	1.6	0.15	紺		
				46	小玉	ガラス	5.3	3.4	1.7	0.12	紺		
				47	小玉	ガラス	5.3	3.1	1.7	0.12	紺		
				48	小玉	ガラス	5.4	3.4	1.7	0.13	紺		
				49	小玉	ガラス	5.3	3.3	1.6	0.11	紺		
				50	小玉	ガラス	5.0	2.9	1.4	0.09	紺		
				51	小玉	ガラス	3.8	2.6	2.1	0.05	紺		
				52	小玉	ガラス	4.0	2.9	1.1	0.05	紺		
				53	小玉	ガラス	3.8	2.6	1.1	0.04	紺		
				54	小玉	ガラス	3.5	2.6	1.1	0.04	紺		
				55	小玉	ガラス	4.0	3.1	1.6	0.06	紺		
				56	小玉	ガラス	3.8	3.0	1.6	0.05	紺		
	撹乱			57	小玉	ガラス	7.3	5.9	1.8	0.39	紺		
				58	小玉	ガラス	8.3	4.0	2.3	0.39	紺		
				59	小玉	ガラス	7.0	5.0	1.7	0.34	紺		
				60	小玉	ガラス	7.3	5.0	1.6	0.35	紺		
				61	小玉	ガラス	7.5	4.1	2.5	0.27	紺		
				62	小玉	ガラス	8.1	3.0	2.7	0.25	紺		
				63	小玉	ガラス	6.7	5.0	1.5	0.32	紺		
				64	小玉	ガラス	6.4	4.0	1.3	0.23	紺		
				65	小玉	ガラス	7.1	4.6	2.5	0.27	紺		
				66	小玉	ガラス	6.7	2.6	2.3	0.16	紺		
				67	小玉	ガラス	5.9	4.1	1.7	0.21	紺		
				68	小玉	ガラス	6.4	2.6	2.4	0.14	紺		
				69	小玉	ガラス	5.9	3.3	2.2	0.15	紺		
				70	小玉	ガラス	5.7	3.7	1.6	0.15	紺		
				71	小玉	ガラス	5.9	3.0	2.4	0.13	紺		
				72	小玉	ガラス	5.9	3.3	2.3	0.14	紺		
				73	小玉	ガラス	6.0	3.6	1.9	0.16	紺		
				74	小玉	ガラス	5.8	3.6	1.8	0.16	紺		
				75	小玉	ガラス	5.7	3.5	1.4	0.15	紺		
				76	小玉	ガラス	5.6	3.6	1.5	0.15	紺		
				77	小玉	ガラス	5.8	3.6	1.4	0.15	紺		

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	材質	直径(mm)	全長・高さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	穿孔	備考
A17号墳	撹乱	巻頭8	135	78	小玉	ガラス	5.7	3.8	1.5	0.15	紺		
				79	小玉	ガラス	5.9	3.2	2.2	0.13	紺		
				80	小玉	ガラス	5.6	3.5	1.8	0.14	紺		
				81	小玉	ガラス	6.0	3.2	2.0	0.13	紺		
				82	小玉	ガラス	5.5	3.6	1.3	0.14	紺		
				83	小玉	ガラス	5.7	3.2	1.4	0.15	紺		
				84	小玉	ガラス	5.5	3.6	1.2	0.15	紺		
				85	小玉	ガラス	5.6	3.3	1.4	0.14	紺		
				86	小玉	ガラス	5.6	3.3	1.4	0.14	紺		
				87	小玉	ガラス	5.7	3.3	1.5	0.13	紺		
				88	小玉	ガラス	5.6	3.2	1.6	0.14	紺		
				89	小玉	ガラス	5.5	3.1	1.5	0.13	紺		
				90	小玉	ガラス	5.4	3.1	1.8	0.11	紺		
				91	小玉	ガラス	5.3	3.6	1.6	0.12	紺		
				92	小玉	ガラス	5.4	3.3	1.1	0.13	紺		
				93	小玉	ガラス	5.3	4.0	1.6	0.15	紺		
				94	小玉	ガラス	5.3	3.9	1.0	0.15	紺		
				95	小玉	ガラス	5.5	3.4	1.3	0.13	紺		
				96	小玉	ガラス	5.4	3.4	1.1	0.12	紺		
				97	小玉	ガラス	5.3	3.2	2.0	0.10	紺		
				98	小玉	ガラス	5.2	3.2	1.4	0.11	紺		
				99	小玉	ガラス	5.4	3.1	1.5	0.11	紺		
				100	小玉	ガラス	5.4	3.4	1.1	0.13	紺		
				101	小玉	ガラス	5.3	2.9	0.9	0.10	紺		
				102	小玉	ガラス	5.2	3.2	1.6	0.11	紺		
				103	小玉	ガラス	5.2	2.8	1.8	0.10	紺		
				104	小玉	ガラス	5.4	3.2	1.4	0.12	紺		
				105	小玉	ガラス	5.5	3.4	1.6	0.13	紺		
				106	小玉	ガラス	5.2	3.1	1.1	0.11	紺		
				107	小玉	ガラス	5.3	3.3	1.5	0.11	紺		
				108	小玉	ガラス	5.2	3.1	1.0	0.09	紺		
				109	小玉	ガラス	5.5	3.3	1.6	0.12	紺		
				110	小玉	ガラス	5.3	3.4	1.4	0.13	紺		
				111	小玉	ガラス	5.3	3.2	1.3	0.11	紺		
				112	小玉	ガラス	5.0	4.1	1.2	0.15	紺		
				113	小玉	ガラス	5.3	3.8	0.9	0.14	紺		
				114	小玉	ガラス	5.5	3.0	1.4	0.10	紺		
				115	小玉	ガラス	5.4	3.2	1.5	0.10	紺		
				116	小玉	ガラス	5.1	3.4	1.0	0.12	紺		
				117	小玉	ガラス	5.0	3.5	1.1	0.14	紺		
				118	小玉	ガラス	5.2	3.1	1.4	0.09	紺		
				119	小玉	ガラス	5.0	3.5	1.3	0.12	紺		
				120	小玉	ガラス	5.1	3.4	1.3	0.11	紺		
				121	小玉	ガラス	5.1	3.2	1.2	0.11	紺		
				122	小玉	ガラス	5.0	2.8	1.4	0.08	紺		
				123	小玉	ガラス	5.0	2.9	1.4	0.09	紺		
				124	小玉	ガラス	4.5	2.9	1.4	0.08	紺		
				125	小玉	ガラス	4.5	2.9	1.4	0.07	紺		
				126	小玉	ガラス	4.3	2.9	1.3	0.07	紺		
				127	小玉	ガラス	4.1	2.8	1.4	0.07	紺		
				128	小玉	ガラス	4.2	2.6	1.1	0.05	紺		
				129	小玉	ガラス	4.2	3.2	0.8	0.07	紺		
				130	小玉	ガラス	4.1	2.5	1.1	0.05	紺		
				131	小玉	ガラス	4.0	2.9	1.4	0.06	紺		
				132	小玉	ガラス	4.0	2.7	1.0	0.06	紺		
				133	小玉	ガラス	4.0	2.7	1.2	0.06	紺		
				134	小玉	ガラス	4.0	2.7	0.9	0.06	紺		
				135	小玉	ガラス	3.8	2.6	1.1	0.05	紺		
				136	小玉	ガラス	4.0	2.3	1.2	0.05	紺		
				137	小玉	ガラス	4.0	2.1	1.5	0.04	紺		
				138	小玉	ガラス	4.0	2.5	1.6	0.04	紺		
				139	小玉	ガラス	4.0	2.2	1.3	0.04	紺		
				140	小玉	ガラス	4.0	2.7	1.5	0.05	紺		
				141	小玉	ガラス	4.2	2.3	1.2	0.04	紺		
				142	小玉	ガラス	4.0	2.6	1.4	0.05	紺		
				143	小玉	ガラス	3.8	2.9	1.0	0.06	紺		

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	材質	直径(mm)	全長・高さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	穿孔	備考
A17号墳	攪乱	巻頭8	135	144	小玉	ガラス	3.9	2.6	2.2	0.05	紺		
				145	小玉	ガラス	3.8	2.7	1.4	0.05	紺		
				146	小玉	ガラス	3.8	2.7	1.7	0.04	紺		
				147	小玉	ガラス	3.8	2.6	1.1	0.04	紺		
				148	小玉	ガラス	3.8	2.6	1.7	0.04	紺		
				149	小玉	ガラス	3.8	3.0	1.1	0.05	紺		
				150	小玉	ガラス	3.8	2.9	1.4	0.05	紺		
				151	小玉	ガラス	3.6	2.7	1.2	0.04	紺		
				152	小玉	ガラス	3.6	2.9	1.3	0.05	紺		
				153	小玉	ガラス	3.6	2.9	1.1	0.05	紺		
				154	小玉	ガラス	3.6	2.8	1.1	0.04	紺		
				155	小玉	ガラス	4.1	2.6	1.5	0.06	紺		
				156	小玉	ガラス	4.1	2.7	1.6	0.06	紺		
				157	小玉	ガラス	3.8	3.1	1.9	0.05	紺		
				158	小玉	ガラス	4.0	2.2	2.0	0.04	紺		
				159	小玉	ガラス	4.0	2.5	1.2	0.05	紺		
				160	小玉	ガラス	3.7	2.9	1.4	0.05	紺		
				161	小玉	ガラス	3.9	2.5	1.5	0.05	紺		
				162	小玉	ガラス	3.8	2.8	1.1	0.05	紺		
				163	小玉	ガラス	3.8	2.9	1.5	0.05	紺		
				164	小玉	ガラス	3.5	2.7	1.2	0.04	紺		
				165	小玉	ガラス	3.8	2.2	1.7	0.04	紺		
				166	小玉	ガラス	3.9	2.0	1.2	0.03	紺		
				167	小玉	ガラス	3.6	2.5	1.3	0.04	紺		
				168	小玉	ガラス	3.6	2.0	1.3	0.03	紺		
				169	小玉	ガラス	3.8	2.5	1.5	0.04	紺		
				170	小玉	ガラス	3.9	2.2	2.2	0.04	紺		
				171	小玉	ガラス	4.0	2.5	2.2	0.05	紺		
				172	小玉	ガラス	3.5	3.1	1.5	0.05	紺		
				173	小玉	ガラス	3.7	2.4	1.7	0.04	紺		
				174	小玉	ガラス	3.9	2.7	1.3	0.05	紺		
				175	小玉	ガラス	3.6	2.8	1.2	0.05	紺		
				176	小玉	ガラス	3.5	1.7	1.2	0.05	紺		
				177	小玉	ガラス	3.8	3.0	0.9	0.05	紺		
				178	小玉	ガラス	3.7	2.4	1.5	0.04	紺		
				179	小玉	ガラス	3.7	2.7	1.1	0.05	紺		
				180	小玉	ガラス	3.8	2.6	1.1	0.05	紺		
				181	小玉	ガラス	3.7	2.8	1.0	0.04	紺		
				182	小玉	ガラス	3.9	2.4	1.4	0.04	紺		
				183	小玉	ガラス	3.9	2.4	2.0	0.04	紺		
				184	小玉	ガラス	3.6	2.3	2.3	0.04	紺		
				185	小玉	ガラス	3.9	2.1	2.3	0.03	紺		
				186	小玉	ガラス	3.9	2.4	1.7	0.04	紺		
				187	小玉	ガラス	3.8	2.5	1.3	0.04	紺		
				188	小玉	ガラス	3.9	2.4	1.0	0.04	紺		
				189	小玉	ガラス	3.6	2.4	1.1	0.04	紺		
				190	小玉	ガラス	3.8	2.2	1.4	0.04	紺		
				191	小玉	ガラス	3.6	1.9	1.9	0.03	紺		
				192	小玉	ガラス	3.8	2.0	1.7	0.03	紺		
				193	小玉	ガラス	3.8	2.2	1.5	0.04	紺		
				194	小玉	ガラス	3.8	2.3	1.1	0.04	紺		
				195	小玉	ガラス	3.6	2.2	1.5	0.04	紺		
				196	小玉	ガラス	3.6	2.6	1.3	0.03	紺		
				197	小玉	ガラス	3.7	2.4	1.2	0.04	紺		
				198	小玉	ガラス	3.4	2.2	1.2	0.03	紺		
				199	小玉	ガラス	3.2	1.9	1.4	0.02	紺		
				200	小玉	ガラス	3.5	2.3	1.3	0.03	紺		
				201	小玉	ガラス	3.8	2.6	1.4	0.04	紺		
				202	小玉	ガラス	3.7	2.4	1.2	0.04	紺		
				203	小玉	ガラス	3.8	2.0	1.3	0.03	紺		
				204	小玉	ガラス	4.2	2.4	1.4	0.05	紺		
				205	小玉	ガラス	4.2	2.9	1.3	0.05	紺		
A32号墳	覆土	113	171	1	丸玉	蛇紋岩	13.95	8.2	3.3	1.68	明黄褐	片面	
				2	丸玉	蛇紋岩	10.0	9.9	2.7	1.08	黄褐	片面	
				3	丸玉	凝灰岩	9.0	8.2	1.9	0.69	黒味	片面	
				4	丸玉	凝灰岩	9.1	6.8	2.3	0.57	黒味	片面	

出土位置		図版番号	挿図番号	報告書番号	種類	材質	直径(mm)	全長・高さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	穿孔	備考
A32号墳	覆土	113	171	5	丸玉	凝灰岩	9.5	7.6	1.8	0.65	黒味	両面	
				6	丸玉	凝灰岩	9.3	8.7	2.0	0.68	黒味	片面	
				7	丸玉	凝灰岩	9.4	6.0	3.0	0.46	黒味	両面	
				8	丸玉	凝灰岩	8.4	7.8	2.4	0.51	黒味	両面	
				9	丸玉	凝灰岩	9.0	7.9	2.9	0.51	黒味	両面	
				10	丸玉	凝灰岩	9.5	6.2	2.4	0.43	黒味	両面	
				11	丸玉	凝灰岩	8.3(欠損)	7.1(欠損)	1.9	0.30	黒味	欠損	
A34号墳	石室床面覆土	巻頭8	178	5	切子玉	水晶	15	32	5.0	7.48	透明白	片面	
	玄室床面			6	切子玉	水晶	18	30.6	4.6	11.16	透明白	片面	
				7	切子玉	水晶	13.2	18.5	3.5	3.89	透明白	片面	
				8	切子玉	水晶	13.3	14	4.2	2.66	透明白	片面	
	石室床面覆土			9	丸玉	蛇紋岩	9.3	6.6	2.7	0.62	淡緑	片面	
				10	丸玉	凝灰岩	9.3	6.2	2.4	0.61	薄緑	片面	
	石室床面	—		11	小玉	鉛ガラス	7.4(欠損)	3.5(欠損)	3.4(欠損)	0.21	白		

(　)は残存値

出土耳環

出土位置		図版番号	挿図番号	遺物番号	材質	平面		断面			重量(g)	備考
						長軸(cm)	短軸(cm)	形態	長軸(cm)	短軸(cm)		
A16号墳	石室攪乱	巻頭8	130	56	銅地銀張り	3.2	3.0	楕円形	0.85	0.8	26.5	
A17号墳	南東表土	巻頭8	135	206	銅地銀張り	2.2	2.0	楕円形	0.6	0.4	6.59	
A27号墳	攪乱土	—	154	17	銅地銀張り	1.8	1.6	楕円形	0.4	0.3	2.35	
A34号墳	玄室床面	巻頭8	178	12	銅地銀張り	2.1	1.85	楕円形	0.7	0.45	5.45	

表16　出土鉄製品観察表

出土位置		図版番号	挿図番号	遺物番号	種類	材質	全長(cm)	鏃身・刃部・釘身		頸部		茎・頭部・刀装具		重量(g)	備考
								長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)		
A1号墳	石室内攪乱	105	88	25	刀装具	鉄	(5.7)	—	—	—	—	(5.7)	4.2	10.5	責金具
				26	鉄鏃	鉄	(2.4)	—	—	—	—	(2.4)	0.75	1.24	茎部
				27	鉄鏃	鉄	(1.7)	—	—	(1.7)	0.35	—	—	0.53	茎部
				28	用途不明	鉄	1.6？	—	—	—	—	—	—	0.92	
A14号墳	石室内攪乱	108	122	47	鉄鏃	鉄	(7.4)	(2.6)	2.0	4.7	0.75	(0.15)	0.5	8.06	三角
				48	鉄鏃	鉄	(7.2)	(2.45)	(1.8)	4.8	0.8	(0.1)	0.4	4.54	三角
				49	鉄鏃	鉄	(2.9)	2.65	(2.1)	(0.3)	0.85	—	—	3.95	三角
				50	鉄鏃	鉄	(2.55)	—	—	(2.55)	0.7	—	—	1.31	茎部
				51	両頭金具	鉄	(2.95)	—	—	—	—	—	—	0.92	軸部
				52	両頭金具	鉄	(1.2)	—	—	—	—	—	—	0.24	筒部
A16号墳	石室床面最下層	111	130	57	直刀	鉄	(46.95)	(43.75)	2.55	—	—	(3.2)	1.4	185.00	
	攪乱			58	刀子	鉄	(2.65)	(2.65)	(0.9)	—	—	—	—	1.22	
				59	鉄鏃	鉄	(4.25)	(1.9)	0.75	(2.4)	0.5	—	—	2.03	長三角
				60	鉄鏃	鉄	(2.4)	1.55	0.6	(0.85)	0.5	—	—	0.85	長三角
				61	鉄鏃	鉄	(6.6)	—	—	(0.45)	(0.5)	(6.15)	0.55	3.92	頸部～茎切片
				62	鉄鏃	鉄	(4.1)	—	—	(2.2)	0.45	(1.9)	0.35	1.86	頸部～茎切片
				63	鉄鏃	鉄	(1.7)	—	—	(0.3)	—	(1.4)	0.5	0.62	茎部片
A17号墳	石室内攪乱	112	135	207	刀装具	鉄	7.75	—	—	—	—	7.75	(6.2)	16.11	鍔、八窓
				208	刀装具	鉄	(3.1)	—	—	—	—	(3.1)	(1.45)	1.79	責金具？
				209	刀装具	鉄	2.1	—	—	—	—	2.1	(3.0)	6.45	鎹
				210	刀装具	鉄	(2.2)	—	—	—	—	(2.2)	(3.4)	6.72	鎹
				211	小直刀か	鉄	(2.5)	(2.5)	(1.5)	—	—	—	—	2.74	
				212	刀子	鉄	(2.5)	—	—	—	—	(2.5)	(1.5)	1.74	茎片
				213	刀子	鉄	13.1	8.8	1.7	—	—	4.3	0.9	12.18	
				214	刀子	鉄	(5.4)	(3.75)	(1.1)	—	—	(1.65)	0.9	4.52	
		—		215	刀子	鉄	(4.2)	—	—	—	—	(4.2)	(1.0)	4.05	茎部
		—		216	刀子	鉄	(3.2)	—	—	—	—	(3.2)	(1.0)	2.74	茎部
		112		217	鉄鏃	鉄	(8.15)	4.7	(3.55)	3.1	0.85	(0.95)	0.5	14.15	
				218	鉄鏃	鉄	(6.9)	3.7	3.4	(3.5)	(0.75)	—	—	8.99	
				219	鉄鏃	鉄	(6.3)	4.85	(3.45)	(1.95)	0.7	—	—	10.27	
				220	鉄鏃	鉄	(4.8)	3.9	2.8	(1.3)	0.8	—	—	6.12	
				221	鉄鏃	鉄	(3.9)	3.8	(2.65)	(0.55)	0.65	—	—	6.07	
				222	鉄鏃	鉄	(3.6)	(2.9)	(2.8)	(1.0)	0.95	—	—	4.81	
				223	鉄鏃	鉄	(5.15)	(2.9)	(2.6)	(2.55)	0.75	—	—	6.85	
				224	鉄鏃	鉄	(5.4)	2.7	(2.6)	2.1	0.95	(0.6)	0.45	4.75	
				225	鉄鏃	鉄	(3.1)	(3.1)	(2.5)	—	—	—	—	4.37	

出土位置		図版番号	挿図番号	遺物番号	種類	材質	全長(cm)	鏃身・刃部・釘身		頸部		茎・頭部・刀装具		重量(g)	備考
								長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)		
A17号墳	石室内撹乱	112	135	226	鉄鏃	鉄	(5.0)	(2.0)	(2.3)	2.1	1.0	(1.15)	0.45	4.18	
				227	鉄鏃	鉄	(3.15)	(2.3)	(2.45)	(0.9)	0.75	—	—	4.59	
			136	228	鉄鏃	鉄	(2.8)	(2.7)	(1.4)	(0.3)	0.6	—	—	3.19	
		—		229	鉄鏃	鉄	(2.0)	(2.0)	(0.7)	—	—	—	—	0.46	
		112		230	鉄鏃	鉄	(14.0)	(1.5)	0.85	10.05	0.6	(2.1)	0.45	6.11	
				231	鉄鏃	鉄	(11.15)	(1.15)	(0.6)	9.45	0.55	0.55	0.45	4.82	
		—		232	鉄鏃	鉄	(8.45)	—	—	(6.8)	0.55	(1.7)	0.5	4.11	
		112		233	鉄鏃	鉄	(3.6)	—	—	(0.2)	—	(3.4)	(0.5)	1.11	茎片
				234	鉄鏃	鉄	(2.75)	—	—	(0.25)	—	(2.5)	0.35	0.72	茎片
		—		235	鉄鏃	鉄	(6.3)	—	—	(6.3)	0.6	—	—	3.75	頸部片
A18号墳	石室内撹乱	—	139	4	刀子	鉄	(6.6)	(4.4)	(1.8)	—	—	(2.2)	(0.9)	2.96	刃部
A27号墳	羨道	—	154	18	鉄鏃	鉄	(3.15)	—	—	(1.4)	0.6	(1.8)	0.45	0.72	茎部片
	羨道撹乱	—		19	用途不明	鉄	(4.0)	—	—	—	—	(4.0)	2.6	25.53	楔？
A32号墳	撹乱	113	171	12	刀子	鉄	(7.75)	(3.55)	1.3	—	—	(4.2)	0.9	8.05	
				13	両頭金具	鉄	(3.35)	—	—	—	—	—	—	1.23	
				14	両頭金具	鉄	(2.3)	—	—	—	—	—	—	0.98	
				15	両頭金具	鉄	(2.2)	—	—	—	—	—	—	0.79	
A33号墳	石室内床面	114	175	8	刀子	鉄	(13.25)	(7.85)	1.4	—	—	5.4	1.1	10.77	
	石室内撹乱			9	刀子	鉄	(10.3)	(6.5)	(2.1)	—	—	(3.8)	(0.85)	5.54	刃部～茎部
				10	刀子	鉄	(2.1)	(2.1)	(0.85)	—	—	—	—	0.67	
	石室内			11	刀子	鉄	(3.15)	(3.15)	(1.0)	—	—	—	—	1.55	
		—		12	刀子	鉄	(1.05)	—	—	—	—	(1.05)	(0.8)	0.36	茎片？
A34号墳	玄室床面	114	178	13	直刀片	鉄	(6.4)	(6.4)	(2.0)	—	—	—	—	12.08	
	玄室中央床面			14	刀装具	鉄	7.8	—	—	—	—	7.8	6.1	66.19	鍔、二円窓
	石室内撹乱			15	鉄鏃	鉄	(3.1)	2.15？	(0.95)	(0.95)	0.6？	—	—	1.53	鏃身～頸部？、鑿箭式
	羨道内床面	—		16	鉄鏃	鉄	(2.6)	—	—	(2.05)	0.8	(0.55)	0.75	1.37	頸部～茎片
	石室内撹乱	—		17	鉄鏃	鉄	(1.95)	—	—	(0.4)	—	(1.55)	0.65	1.53	茎片
	羨道内床面	114		18	鉄鏃	鉄	(1.5)	—	—	(0.2)	—	(1.3)	0.35	0.60	茎片
		—		19	鉄鏃	鉄	(2.85)	—	—	(2.55)	0.8	(0.3)	0.65	1.35	頸部～茎片
	石室内撹乱	—		20	鉄鏃	鉄	(1.9)	—	—	(1.9)	0.75	—	—	0.89	頸部片
		114		21	鉄鏃	鉄	(4.7)	—	—	(4.7)	0.6	—	—	2.54	頸部片
	墓道内覆土			22	鉄鏃	鉄	(7.2)	—	—	(6.0)	0.55	(1.2)	0.35	4.27	頸部～茎片
	石室内撹乱			23	鉄鏃	鉄	(5.5)	—	—	(2.5)	0.6	(3.25)	0.45	3.25	頸部～茎片
				24	鉄鏃	鉄	(4.5)	—	—	(4.5)	0.6	—	—	2.69	頸部片
				25	鉄鏃	鉄	(5.05)	—	—	(5.05)	0.55	—	—	2.74	頸部片
	羨道付近床面	—		26	鉄鏃	鉄	(6.65)	—	—	(6.65)	(0.6)	—	—	3.18	頸部片
	石室内撹乱	—		27	鉄鏃	鉄	(3.0)	—	—	(3.0)	0.6	—	—	1.11	頸部片
		114		28	鉄鏃	鉄	(3.3)	—	—	(3.3)	0.6	—	—	1.32	頸部片
		—		29	鉄鏃	鉄	(2.65)	—	—	(2.65)	0.5	—	—	1.00	頸部片
		—		30	鉄鏃	鉄	(2.2)	—	—	(2.2)	0.45	—	—	1.00	頸部片？
		—		31	鉄鏃	鉄	(2.2)	—	—	(2.2)	0.65	—	—	1.02	頸部片？
		—		32	鉄鏃	鉄	(2.3)	—	—	(2.3)	0.6	—	—	0.92	頸部片？

（　）は残存値

表17　出土銭貨観察表

出土位置		図版番号	挿図番号	遺物番号	銭名	銭径(cm)	内径(cm)	孔幅(cm)	重量(g)	備考
西小支群　C単位群	表採	114	203	2	寛永通宝	2.4	1.9	0.7	2.81	新寛永
M7Tr.西端	表採	—		3	寛永通宝	2.4	1.9	0.6	2.76	新寛永

報　告　書　抄　録

ふりがな	うがんじしーこふんぐん・たかねやまえーこふんぐん
書名	雲岩寺Ｃ古墳群・高根山Ａ古墳群
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第28集
編著者名	足立順司　片山一道　大藪由美子
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20　　TEL 054－262－4261㈹
発行年月日	2013年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町	遺跡番号					
うがんじしーこふんぐん 雲岩寺C古墳群	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 はまきたくねがた 浜北区根堅			34°50′08″	137°47′15″	20000201 ～ 20010731	7281	記録保存（第二東名高速道路建設に伴う発掘調査）
たかねやまえーこふんぐん 高根山Ａ古墳群	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 はまきたくおの 浜北区尾野			34°50′06″	136°27′36″	20011001 ～ 20030331	11080	

所収遺跡名	種　別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雲岩寺C古墳群	古墳	古墳時代後期	横穴式石室17基	須恵器、土師器、轡、玉類、直刀、鉄鏃	後期群集墳
高根山A古墳群	古墳、古代墓	古墳時代後期	横穴式石室35基、古代墓128基	須恵器、土師器、玉類、耳環、直刀、鉄鏃、灰釉陶器	後期群集墳、土坑墓、火葬墓

要　約

雲岩寺C古墳群・高根山A古墳群は、浜松市浜北区に所在する静岡県下を代表する古墳時代後期の群集墳の一つ。この地域の浜北区北部丘陵には横穴式石室を主体部とする数百基が密集し、大型群集墳を形成する。今回の調査によって両古墳群は、6世紀中・後葉に中心となる古墳が造られ、7世紀中葉～後葉に入り急速に拡大していたことが判明した。

古い時期に築造された古墳には明瞭な墳丘が認められ、石室の規模も大きいものがあった。副葬品は須恵器を主体にするものが一般的で、少数の古墳には玉類、耳環など装身具や直刀、鉄鏃など武器類が副葬され、群集墳の内部で、階層差を認めることができた。

高根山A古墳群からは10～11世紀の土坑墓と火葬墓が群集して発見されたが、当該期の墓としては例がなく貴重である。